

東京大学構内遺跡調査研究年報 10

2013・2014 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 10

2013・2014 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は2013年4月1日から2015年3月31日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した、埋蔵文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動をまとめた東京大学構内遺跡調査研究年報と東京大学構内遺跡に関わる調査・研究成果である東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要を合冊したものである。
2. 上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについてその略報を第1・2部に掲載した。
3. 遺構の略号は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに1から通し番号を付与した。前に付した遺構番号の性格の略称は、個々の報告の凡例を参考にされたい。
4. 紀要編では次の方々から貴重な原稿を頂いた。記して感謝したい（順不同、敬称略）武田昭子（昭和女子大学名誉教授）、本多貴之（明治大学理工学部）、増田隆之介（明治大学理工学部在学）、宮腰哲雄（明治大学名誉教授）、四柳嘉章（石川県輪島漆芸美術館）、渡部マリカ。
5. 本年報の作成は室員があたり、堀内・清水・小林が編集を行った。
6. 本年報に添付したCD-ROMには、印刷本と同内容の電子版（PDF形式）を収録している。
7. 本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などを除いて無断転載を禁止する。
8. 発掘調査に伴う出土遺物等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、東京大学駒場Ⅱリサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）および東京大学工学系研究科柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）において管理、運用、保管を行っている。

目 次

例 言

目 次

年報編

東京大学構内遺跡の調査	1
東京大学構内遺跡調査一覧	2

第1部 2013年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）.....	17
-------------------------------	----

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期2次（HHWB12）	19
2. 本郷 134 工学部新3号館施設整備事業（下水他）	23

第2節 本郷構内の試掘調査

1. 本郷 135 農学部水田取設工事	29
2. 本郷 136 農学部正門舗装改修工事	33
3. 本郷 142 農学部東側外構	35
4. 本郷 147 国際科学イノベーション総括棟新営	38
5. 本郷 151 農学生命科学研究科閉鎖系温室	41

第II章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 整理事業概要	44
2. 外部委託	44

第2節 調査・研究成果の公開・活用

1. 広報活動	45
2. 資料の提供・貸出	46

第3節 室員研究・活動報告

附 東京大学埋蔵文化財調査室要項	53
東京大学埋蔵文化財調査室規則	53
東京大学埋蔵文化財調査室組織表	54

第2部 2014年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）.....	57
-------------------------------	----

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期3次（HHWB12）	59
2. 本郷 125 医学部附属病院クリニカルリサーチセンター A 棟1期（HCRA12）	82
3. 本郷 143 講堂改修工事	90
4. 本郷 146・168 アカデミックcommons（HAC13）	98

5. 本郷 148 国際科学イノベーション総括棟新営 (HIN14)	110
6. 本郷 169 文系総合研究棟	124
第2節 本郷構内の試掘調査	
1. 本郷 153 理学部1号館とりこわし工事・理学部1号館(Ⅲ期)新営	132
2. 本郷 160 文系総合研究棟	134
3. 本郷 162 工学部4号館改修その他工事	136
第3節 東京大学本郷構内の遺跡のグリッド設定と調査区の補正	138
第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用	
第1節 調査資料の整理	
1. 整理事業概要	141
2. 外部委託	141
第2節 調査・研究成果の公開・活用	
1. 広報活動	142
2. 教育・普及	143
3. 資料の提供・貸出	144
第3節 室員研究・活動報告	
附 東京大学埋蔵文化財調査室要項	149
東京大学埋蔵文化財調査室規則	149
東京大学埋蔵文化財調査室組織表	150

紀要編

東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 10

栽培遺構からみた大名屋敷における植物栽培の諸様相	追川吉生	153
大名屋敷の屋敷境－屋敷境としての堀を中心に－	追川吉生	175
医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点出土 葦辺磯舟漁師蒔絵印籠の科学分析	四柳嘉章・成瀬晃司	205
医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 遺構出土漆製品の実証的研究	武田昭子・渡部マリカ...	219
東京大学本郷構内の遺跡より出土した緑色系漆椀の科学分析	本多貴之・増田隆之介・宮腰哲雄...	257
江戸遺跡から出土した緑色系漆椀の基礎研究	清水 香	273

年 報 編

2013・2014 年度

東京大学構内遺跡の調査

東京大学は、農学生命科学研究科附属演習林を併せると全国 15 都道府県におよび、327,203,682㎡を所有（一部借入）している。このうち本郷（東京都文京区）、駒場（東京都目黒区）、柏（千葉県柏市）の 3 地区を拠点キャンパスと位置付けている。本郷地区は本郷、弥生、浅野の 3 キャンパス全体で 559,176㎡、駒場地区は I（教養学部）、II（リサーチキャンパス）全体で 352,213㎡、柏地区は 320,452㎡を所有している。また、その他周知の遺跡として登録され、現在までに試掘を含め調査を実施した所有地に、研究関連施設では理学系研究科附属植物園本園、農学生命科学研究科附属小石川樹木園、総合研究博物館小石川分館が所在する白山地区（東京都文京区、160,787㎡）、医科学研究所が所在する白金地区（東京都港区、68,906㎡）、理学系研究科附属臨海実験所（神奈川県三浦市、68,737㎡）、福利厚生関連施設では追分国際学生宿舎（東京都文京区）、白金学寮（東京都港区、2,453㎡）、三鷹国際学生宿舎（東京都三鷹市、32,380㎡）、検見川総合運動場（千葉県千葉市、273,027㎡）がある。

本郷地区は旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末集落・後晩期包蔵地）、弥生時代（後期集落）、古墳時代（前～後期集落）、平安時代（集落）、江戸時代（大名屋敷・武家地・町屋・寺社地）、近代にわたる大規模複合遺跡群で、「文京区No. 47 本郷台遺跡群」として登録されている。またその一部（浅野地区内）は、「文京区No. 28 弥生町遺跡群」と登録され、1975 年に文学部考古学研究室、理学部人類学教室が合同調査を行った「向ヶ丘貝塚」（No. 28-C 地点）は、1976 年に国史跡に指定されている。

駒場地区のうち駒場 II キャンパスは、近年の再開発に伴い構内の試掘調査を実施しているが、遺跡は確認されていない。駒場 I キャンパスは、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代（早期末集落）、平安時代、近世（農村）の遺跡が確認され、キャンパス全域が「目黒区No. 1 東京大学駒場構内遺跡」として登録されている。

柏地区（現状所有範囲）は開発前に千葉県教育委員会による試掘調査が行われたが、遺跡は確認されていない。

白山地区は、すでに明治初頭、エドワード・S・モースによって貝塚の存在が紹介されており、「小石川植物園内貝塚」として周知されてきた。また 1918 年には東京府の旧跡として指定された歴史を持つ。現在では構内全域が縄文時代（前～晩期集落・貝塚）、江戸時代（大名屋敷・幕府御用地・武家地）の複合遺跡「文京区No. 81 小石川御薬園跡」、その一部が「文京区No. 21 小石川植物園内貝塚・原町遺跡」として登録されている。2012 年 9 月 19 日には「小石川植物園（御薬園跡及び養生所跡）」として、161,588.4㎡が国の史跡名勝に指定された。

医科学研究所は、旧石器時代（ブロック）江戸時代（大名屋敷）の遺跡が確認され「港区No. 135 遺跡」として登録されている。

理学系研究科附属臨海実験所は、中世城館跡（新井城跡）が確認され「新井城跡」として登録されている。

追分国際学生宿舎は、江戸時代（武家地）の遺跡が確認され、「文京区No. 64 駒込追分町遺跡」として登録されている。三鷹国際学生宿舎は、旧石器時代（ブロック・礫群）、縄文時代、江戸時代（農村）の遺跡が確認され「三鷹市No. 24 長嶋遺跡」として登録されている。

検見川総合運動場は、旧石器時代（ブロック）、縄文時代（前期集落）、古墳時代、平安時代（集落）の複合遺跡で「玄蕃所遺跡」として登録されている。

東京大学構内遺跡調査一覧

本郷地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	1	1983	-	山上会館(U)	事前	1984.3.7~1986.7.17	1500	西田・ 谷・ 大貫	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	HHB	法学部4号館(法)・文学部3号館(文)	事前	1984.4.1~1985.3.31	2500	大塚	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	3	1985	HGS	御殿下記念館(G)	事前	1985.7.29~1987.6.30	6000	寺島・ 大貫・ 倉林	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
本郷	4	1984	HHC	医学部附属病院中央診療棟(病中)・設備管理棟(エネセン)・給水設備棟(給水)・共同溝(共同溝)	事前	1984.10.1~1987.3.31	7700	藤本・ 小川	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』
本郷	5	1984	HS7	理学部7号館(理D)	事前	1985.2.1~10.8	750	羽生	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点』
本郷	6	1986	-	文京区湯島4丁目~弥生2丁目地先間配水管布設替工事	立会	1986.5.12~7.20	-	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	7	1987	-	新タンデム棟(タンデム)	試掘	1988.2.15~17	28	成瀬・ 武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	8	1987	-	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15~16	-	武藤	近世
本郷	9	1989	VMC	農学部家畜病院	事前	1990.1.31~3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	10	1990	HG	医学部附属病院外来診療棟	事前	1990.6.27~1991.2.21	5500	成瀬・ 堀内・ 武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』
本郷	11	1991	-	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12~13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	FAL	農学部図書館	事前	1993.3.9~3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1992	FA792	農学部7号館A棟I期	事前	1992.10.6~11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	14	1992	K14	工学部14号館(工14)	事前	1992.11.26~ 1993.2.23	1785	成瀬・ 堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点』
本郷	15	1992	YS	薬学部新館	事前	1992.10.21~12.18	1300	堀内・ 寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	16	1993	FA793	農学部7号館A棟II期	事前	1993.11.3~26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	17	1993	FE1	工学部1号館	事前	1993.12.6~1994.2.10	616	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
本郷	18	1993	SK	教育学部総合研究棟	事前	1993.11.18~12.28	1007	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・TML地点』
本郷	19	1993	HN	医学部附属病院看護師宿舎	事前	1993.8.4~1994.1.17	746	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	20	1993	TUM	総合研究博物館新館	事前	1994.2.14~4.8	600	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 総合研究博物館新館地点』
本郷	21	1993	MRI	医学部附属病院MRI-CT棟	事前	1994.1.18~3.12	400	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	22	1994	HF	山上会館龍岡門別館	事前	1994.8.17~10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	23	1994	HW	医学部附属病院入院棟A (医学部附属病院病棟)	事前	1994.4.21~11.16、 1995.1.31~1996.6.6	6096	成瀬・ 原・ 鯨島・ 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収

東京大学構内遺跡の調査

地区	番号	年度	略称	調査名 (旧略称)	調査種別	調査期間	面積 m ²	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	24	1994	HIKN	医学部教育研究棟 (医研)	事前	1994.11.17～ 1995.4.28、1997. 3.10～4.25、 1998.11.2～12.25、 2002.9.3～12.25	2415	堀内・ 鮫島・ 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	25	1994	HND	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場	事前	1995.1.30～3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	26	1994	-	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	-	成瀬・ 鮫島	近世
本郷	27	1994	-	理学部1号館	立会	1994.10.3～18	-	寺島	遺構・遺物なし
本郷	28	1995	FPS	薬学部資料館	事前	1995.7.24～9.1	600	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	29	1995	ACC	情報基盤センター変電室1	事前	1995.7.18～31	78	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	30	1995	AFC	工学部風工学実験室支障ケーブル地点	事前	1995.8.22～9.22	63	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	33	1996	EQL	地震研テレメタリング地震観測施設	事前	1996.4.15～5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	39	1994	-	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	-	成瀬	近世
本郷	40	1995	AFL	工学部風工学実験室	事前	1996.1.22～3.7	252	鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	41	1996	IML	インテリジェント・モデリング・ラボラ トリー	事前	1996.4.15～6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
本郷	42	1996	-	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	-	成瀬	近世
本郷	43	1996	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.12～5.18	20	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	44	1996	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.5.27～6.27	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	45	1996	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.3～6.20	184	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	46	1994	-	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	-	成瀬	近世
本郷	47	1996	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	事前	1996.6.24～6.28	5	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	48	1996	HN II	医学部附属病院看護師宿舎II期	事前	1996.11.5～1997.1.31	525	原・大 成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	49	1997	-	外灯整備工事1	立会	1997.4.13～30	-	原	近世
本郷	50	1997	-	外灯整備工事2	立会	1997.4.13～30	-	原	近世
本郷	51	1997	-	外灯整備工事3	立会	1997.4.13～30	-	原	近世
本郷	52	1997	-	農学部 (21世紀館) 木質ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	53	1998	AFIV	工学部風環境シミュレーション風洞実験 室	事前	1999.1.7～25	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	54	1999	HES99	総合研究棟 (文・経・教・社研)	事前	1999.5.24～11.2	1000	堀内・ 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	55	1999	HHC29 9	医学部附属病院第2中央診療棟 (2中)	事前	1999.10.12～2000. 2.25、2001.7.23～ 2002.12.19	4017	成瀬・ 原・ 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	56	1999	-	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	57	1999	-	環境安全センター	立会	2000.1.17	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	YM	医学部附属病院受変電設備棟II期	事前	2000.2.5～3.31	300	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 医学部附属病院受変電設備棟地点』
本郷	59	2000	KK	工学部基幹整備共同溝地点	事前	2000.7.3～7.12、 10.11～10.14、2001. 2.21～2.28	900	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	60	2000	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	事前	2000.9.21～11.14	200	成瀬・ 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	61	2001	TS	工学部武田先端知ビル	事前	2001.6.4～8.7、 2001.11.28～12.28	740	原	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 浅野地区I』
本郷	62	2001	NSK01	農学部生命科学総合研究棟	事前	2001.9.21～10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収

年 報 編

地区	番号	年度	略称	調査名 (旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	63	2001	-	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5~6	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2001	-	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	-	成瀬	近世
本郷	65	2002	LS03	法学系総合研究棟	事前	2003.2.17~4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2002	YGS01	薬学系総合研究棟1期	事前	2002.8.1~2003.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2004	YGS04	薬学系総合研究棟2期	事前	2004.7.26~8.4、 2004.11.17~2005.2.4	540	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	67	2002	-	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9~17	32	堀内	縄文・弥生・古墳・近世・近代
本郷	68	2002	INC	インキュベーション施設	事前	2003.3.6~6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	69	2002	-	地震研仮設建物	立会	2002.5.14~16	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2002	-	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	71	2004	HEQ04	地震研究所総合研究棟	事前	2004.8.30~2005.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	72	2004	SC1	理学部1号館前	事前	2004.11.29~12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	73	2004	-	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期 (旧名：疾患生命研究センター)	試掘	2004.11.29~12.1	24	成瀬	古墳・近世
本郷	74	2008	HHN308	医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期	事前	2008.4.1~8.1	550	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	75	2005	KOS05	工学系総合研究棟立坑	事前	2005.9.13~14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	HVP06	ベンチャープラザ	事前	2006.3.6~5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	77	2005	-	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5	大成	近世
本郷	78	2006	HJF06	情報学環・福武ホール	事前	2006.6.5~12.8、 2007.2.5~23	1766	大成・成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	79	2006	-	農学部コイトロン温室	立会	2007.1.16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	80	2006	-	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	81	2007	HEA07	経済学研究科学術交流棟	事前	2008.3.17~7.11、 9.11~24、2009.2.2 ~10	451	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	82	2007	HKM07	懐徳門	事前	2007.6.20~7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、10所収
本郷	83	2007	-	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22~25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	84	1984	NK84	農学部共同溝	事前	1984.7.9~23	50	今村啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	85	2007	-	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	86	2008	-	雨水管改修工事	立会	2009.2.2~16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	87	2008	HTG08	東京都下水道工事	事前	2008.12.7~12.25、 2009.11.27~12.8	39	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、8所収
本郷	88-1	2008	-	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2008.11.19、11.20	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	88-2	2009	-	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2009.5.11~13、15、 23、31、6.18、8.27	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	89	2008	-	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2008.11.25~12.17	193	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
本郷	90	2009	-	薬学部研究実験棟	試掘	2009.4.16	10	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	91	2009	HHP09	医学部附属病院立体駐車場 (HHP09)	事前	2009.12.13~ 2010.2.25	3034	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	92	2009	HGG09	学生支援センター (HGG09)	事前	2009.7.21~7.30	440	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

東京大学構内遺跡の調査

地区	番号	年度	略称	調査名(旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	93	2009	H7I09	伊藤国際学術研究センター	事前	2009.7.30～ 2010.2.12、5.17～ 5.31、2011.7.21～26	1710	成瀬・ 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	94	2009	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2010.1.25～3.31、 2010.7.28～8.11	1731	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	95	2009	-	農学生命科学研究科フードサイエンス棟	立会	2009.10.22、11.2	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	96	2009	-	工学部新3号館建替時待避用仮設建物	試掘	2009.12.14～12.17	64	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97-1	2009	HKS09	基幹整備(流域⑧排水)A区	事前	2010.3.3～3.19	26	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	97-2	2010	HKS09	基幹整備(流域⑧排水)B区	事前	2010.11.29～12.6	42	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	98	2010	-	原子動力実験棟	試掘	2010.4.9	16	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	99	2010	HLS10	法学部3号館増築工事	事前	2010.7.20～8.23、 2011.1.18～26、5.16 ～7.26	734	追川・ 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8、9所収
本郷	100	2010	HK310	工学部新3号館	事前	2011.1.4～10.11	4595	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	101	2010	HMH10	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	事前	2010.12.9～2011.1.26	30	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	102	2010	-	本郷通り困障改修立会	立会	2010.12.2、12.13	-	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	103	2011	HKK11	春日門横教育研究棟	事前	2011.12.1～2012.7.20	949	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8、9所収
本郷	104	2010	-	防犯用ネットワークカメラ貸借工事	立会	2010.7.30～8.11	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	105	2010	-	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2010.8.31～9.11	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	106	2010	-	薬学ゲート前舗装改修工事	立会	2011.2.7、9、15～ 16、18、21～22	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
本郷	107	2011	-	総合図書館前クスノキ移植	立会	2011.6.09～15	-	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	108	2011	-	旧原子力センター別館改修	立会	2011.6.22	16	堀内	遺構・遺物なし
本郷	109	2011	-	仮設キュービクル設置工事	立会	2011.9.1	18	大成	遺構・遺物なし
本郷	110	2011	-	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅱ期	試掘	2011.11.29～12.02	6	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	111	2011	-	総合図書館西側道路構造調査	立会	2011.10.18	4	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	112	2011	-	クリニカルリサーチセンターB棟	試掘	2011.11.29～12.02	25	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	113	2011	HHWB 12	医学部附属病院入院棟Ⅱ期	事前	2012.3.1～11.30、 2013.8.19～10.3、 2014.2.5～2015.2.19	4391	成瀬・ 香取・ 小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	114	2010	-	下水本管改修	立会	2010.6.17、21	-	原	遺構・遺物なし
本郷	115	2012	HTP12	図書館前クスノキ移植に伴う事前調査	事前	2012.5.07～6.18	60	追川	試掘なし・近世
本郷	116	2011	-	旧原子力研究総合センター別館電気設備工事	立会	2011.9.20、10.25	-	原	遺構・遺物なし
本郷	117	2011	-	農学部3号館西側舗装改修工事	試掘	2011.12.14～ 2012.1.13	14	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9所収
本郷	118	2011	-	ガス管改修工事	試掘	2011.9.5～9.19	18	原	遺構・遺物なし
本郷	119	2011	HNS09	分生研・農学部総合研究棟	事前	2011.7.26～27	7	原	遺物のみ
本郷	120	2011	-	分生研・農学部総合研究棟基幹整備工事	試掘	2011.9.10～17、 11.20～21	9	原	遺構・遺物なし
本郷	121	2012	-	農学部1号館北側舗装改修工事	立会	2012.7.10～14	2	原	近代
本郷	122	2012	-	理学部2号館北側舗装改修工事	立会	2012.7.14	1	原	遺構・遺物なし
本郷	123	2012	-	春日門扉やりかえ	立会	2012.9.4、10	5	大成	遺構・遺物なし
本郷	124	2012	-	農学生命科学研究科閉鎖系温室 新営工事	立会	2012.9.26～27	31	原	遺構・遺物なし
本郷	125	2012	HCRA1 2	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期	事前	2012.12.17～ 2014.9.12	3341	追川・ 小川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	126	2012	-	原子力別館北側雨水配管改修その他	立会	2012.12.17～20	21	原	遺構・遺物なし
本郷	127	2012	-	工学部4号館屋外排水管改修工事	試掘	2012.2.20	10	原	遺構・遺物なし
本郷	128	2012	-	農学部1号館北側他舗装改修工事	立会	2013.1.21、2.1、 20、3.7、11、12、 14、15、18、19	2750	原	遺構・遺物なし

年 報 編

地区	番号	年度	略称	調査名 (旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	129	2012	-	理学部2号館舗装改修工事	立会	2012.12.25、26、 2013.1.21、2.1、3	1000	原	遺構・遺物なし
本郷	130	2012	-	工学部3号館施設整備 (ガス)	事前	2012.11.5、13	-	成瀬・堀内	遺構・遺物なし
本郷	131	2012	-	医学部モニュメント	立会	2013.3.25	11	追川	近代
本郷	132	2013	-	タンデム加速器研究棟北側溝改修	立会	2013.4.8	16	原	遺構・遺物なし
本郷	133	2013	-	工学部9号館西側舗装改修	立会	2013.4.10	23	原	遺構・遺物なし
本郷	134	2012	-	工学部3号館施設整備 (下水2)	事前	2013.3.18、27、 4.1、8-10、22、 23、30、5.1、9、 10、13、14、21- 23、6.15、17、18、 24-26、28、7.1- 3、5	490	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	135	2013	-	農学部水田取設工事	試掘	2013.6.4、5、7、8、 10	101	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	136	2013	-	農学部正門舗装改修工事	試掘	2013.6.17	3	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	137	2013	-	浅野民間地工事に伴う調査	試掘	2013.7.18	44	原	遺構・遺物なし
本郷	138	2013	-	工学部3号館施設整備 (雨水)	立会	2013.7.22、26、31	41	堀内	近世遺構面確認
本郷	139	2013	-	保育園前歩道植栽	立会	2013.8.4	42	堀内	遺構・遺物なし
本郷	140	2013	-	春日門総合研究棟に伴う外構工事	立会	2013.7.29、31、 8.1、5、2014.1.29、 2.4	107	大成	近世遺構面確認
本郷	141	2013	-	工学部3号館施設整備 (下水2)	立会	2013.8.24	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	142	2013	-	農学部東側外構	試掘	2013.9.10	7	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	143	2013	-	講堂改修工事	事前	2013.9.26、10.21- 25、11.5、11、 12.12、13、16、 2014.11.11、13- 15、18、19、27、 28、12.5、9、11、 13、15、17	539	原・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	144	2013	-	看護職員等宿舍5号棟擁壁	試掘	2013.9.2、3	-	香取	近世・近代整地層
本郷	145	2013	-	医学部中央総合館前誘導ブロック設置	立会	2013.9.27	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	146	2013	HAC13	アカデミックコモンズ	事前	2013.9.10-2014.3.31	1200	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	147	2013	-	国際科学イノベーション総括棟新営	試掘	2013.7.23-26	48	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	148	2013	HIN14	国際科学イノベーション総括棟新営	事前	2014.1.14-7.23、 2014.8.18-8.21	1480	大成・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	149	2013	-	(弥生) テニスコート夜間照明設置工事	立会	2013.12.20	4	大成	遺構・遺物なし、時期不明硬化面
本郷	150	2013	-	農学部正門舗装改修工事	立会	2014.1.29、2.3、16 -18	510	原	遺構・遺物なし
本郷	151	2013	-	農学生命科学研究科閉鎖系温室	試掘	2014.1.29	18	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	152	2013	-	地震研究所北側囲障改修工事	試掘	2014.2.13、17、21	40	原	遺構・遺物なし
本郷	153	2014	-	理学部1号館とりこわし工事・理学部1号館 (Ⅲ期) 新営	試掘	2014.5.16、19	21	原・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	154	2013	-	保育園前漏水	立会	2014.1.10、1.14	1	堀内	遺構・遺物なし
本郷	155	2013	-	懐徳門舗装	立会	2014.1.29、2.5、2.10	277	堀内	遺構・遺物なし
本郷	156	2013	-	博物館AMSラボ電気改修	立会	2014.2.6	2	堀内	遺構・遺物なし
本郷	157	2013	-	第2本部棟外構	立会	2014.2.22-23	4	堀内	遺構・遺物なし
本郷	158	2013	-	街灯整備	立会	2014.3.11-14	46	堀内	遺構・遺物なし
本郷	159	2014	-	弓道場脇フェンス	立会	2014.4.7	5	堀内	遺構・遺物なし

東京大学構内遺跡の調査

地区	番号	年度	略称	調査名 (旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	160	2014	-	文系総合研究棟	試掘	2014.4.9~11	27	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	161	2014	-	懐徳館庭園給水引き込み工事	立会	2014.4.22	-	原・清水	遺構・遺物なし
本郷	162	2014	-	工学部4号館改修その他工事	試掘	2014.6.23、27、7.3、4、10、8.12	47	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	163	2014	-	法文2号館給水管改修	立会	2014.6.4	8	堀内	遺構・遺物なし
本郷	164	2014	-	イノベーション棟現場事務所	立会	2014.6.5	-	追川	遺構・遺物なし
本郷	165	2014	-	弓道場テント基礎移設	立会	2014.7.3	1	清水	遺構・遺物なし
本郷	166	2014	-	農学部門衛所漏水対応	立会	2014.7.15	-	原	遺構・遺物なし
本郷	167	2014	-	安田講堂花壇漏水対応	立会	2014.7.30	1	小川	遺構・遺物なし
本郷	168	2014	-	アカデミックcommons 2次調査	事前	2014.8.13~10.31、11.25、12.10、12	475	堀内・清水	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	169	2014	-	文系総合研究棟	事前	2014.10.14~11.5	180	堀内・香取	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	170	2014	-	七徳堂改修外構工事	立会	2014.11.21、2015.1.13、14	130	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	171	2014	-	図書館横仮設建物建設に伴う舗装石除去	立会	2014.9.4	930	堀内	遺構・遺物なし
本郷	172	2014	-	第二食堂前カーゲート付近舗装改修	立会	2014.11.21	78	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	173	2014	-	医学部附属病院第二中央診療棟前車道バリカー設置工事	立会	2014.12.19	1	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	174	2014	-	本郷キャンパスバリアフリー関係整備工事	立会	2014.12.22、2015.1.20、21	169	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	175	2014	-	図書館仮設キュービクル設置	立会	2014.11.26	8	清水	遺構・遺物なし
本郷	176	2014	-	ネットワーク監視カメラ設置	立会	2014.12.2	5	清水	遺構なし、近世磁器1点
本郷	177	2014	-	工学部1号館前広場シタレザクラ移植	試掘	2015.1.6、7	5	香取	近世遺構・遺物
本郷	178	2014	-	農学部6号館改修工事	事前	2015.1.7、4.27、28	34	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収
本郷	179	2014	-	安田講堂前広場の整備	試掘	2015.1.6、7、2.18	405	香取	近現代
本郷	180	2014	-	生物環境ガラス温室	立会	2015.1.15	9	原	遺構・遺物なし
本郷	181	2014	-	農学部グランド門扉改修	立会	2015.1.21、2015.2.3	3	香取	近世
本郷	182	2014	HCRG15	医学部附属病院CRC棟ほか外構設置(HCRG)	事前	2015.3.16~2015.9.25	162	追川	近世
本郷	183	2014	-	地震研究所北側開障改修工事	立会	2015.2.6	153	原	遺構・遺物なし
本郷	184	2014	-	上野英三郎博士とハチ公(仮)台座	立会	2015.2.16	3	原	遺構・遺物なし
本郷	185	2014	-	バス通り誘導ブロック整備その他工事	立会	2015.2.20、23、24	25	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	186	2014	-	薬学本館埋設配管工事	立会	2015.2.23、24	14	小川	遺構・遺物なし
本郷	187	2014	-	工学部船舶運動性能試験水槽埋設配管工事	立会	2015.3.16	5	清水	遺構・遺物なし

駒場Ⅰ地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒Ⅰ	1	1991	-	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	2	1993	FGE	教養学部情報教育棟	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ	3	1993	-	数理科学研究科棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒Ⅰ	4	1994	-	数理科学研究科棟擁壁工事	立会	1995.1.20～27	-	武藤	近代
駒Ⅰ	5	1994	-	数理科学研究科棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会	1995.1.24～4.12	-	武藤	縄文・平安
駒Ⅰ	6	1995	-	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	7	1995	-	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	8	1995	-	数理科学研究科棟ガス・水道管理設工事	立会	1995.5.17～18、6.27～28	-	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	9	1996	数理	数理科学研究科Ⅱ期棟	事前	1996.12.12～1997.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
駒Ⅰ	10	1997	-	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	11	1999	-	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	12	2000	KL	駒場図書館	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
駒Ⅰ	13	2001	-	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒Ⅰ	14	2001	-	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53	大成	遺物・遺構なし
駒Ⅰ	15	2005	KCP	コミュニケーションプラザ	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒Ⅰ	16	2003	KGK	国際学術交流棟	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒Ⅰ	17	2005	-	教養学部5号館他改修工事	立会	2005.8.10、17、19	300	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	18	2006	-	教養学部8号館エレベーター敷設工事	立会	2006.10.20	-	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	19	2006	-	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	20	2007	-	初年次活動センター新築工事	立会	2007.12.20	85	追川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	21	2009	-	基幹整備(排水)工事	立会	2010.1.14、21、28	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ	22	2009	-	理想の教育棟	試掘	2010.2.1～5	220	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
駒Ⅰ	23	2011	-	巻薬練習場	立会	2012.1.23	12	成瀬	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	24	2012	-	屋外トイレ新営工事	立会	2012.7.23～25	42	堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	25	2012	-	理想の教育棟Ⅱ期棟	試掘	2012.7.30～8.3	49	堀内	遺構なし・近代遺物あり
駒Ⅰ	26	2012	-	コミュニケーションプラザ横共同溝埋設工事	試掘	2012.9.24～27	34	小川	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	27	2012	-	倉庫新営工事	立会	2013.2.28	40	香取・堀内	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	28	2014	-	教養学部並木通り根上り対策工事	立会	2014.9.4、8、10	64	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅰ	29	2014	-	電話交換機設備更新工事	立会	2014.11.29	7	堀内	遺物・遺構なし
駒Ⅰ	30	2014	-	教養学部並木通り舗装改修工事	立会	2015.2.3、12、23、3.10	77	大成	遺物・遺構なし

駒場Ⅱ地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒Ⅱ	1	1996	-	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	2	1996	-	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	3	1996	-	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	4	1998	-	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	5	1998	-	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒Ⅱ	6	1998	-	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	7	2002	-	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒Ⅱ	8	2003	-	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし
駒Ⅱ	9	2008	-	保育施設	立会	2008.7.9～14	-	大成	遺構・遺物なし

東京大学構内遺跡の調査

白山地区調査一覧

地区	番号	年度	略称	調査名(旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白山	1	1991	-	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期〔原町遺跡〕	試掘	1991.7.24~25	5	武藤 穂文	
白山	2	1992	KO	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期〔原町遺跡〕	事前	1992.5.25~6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
白山	3	2000	KI	総合研究博物館小石川分館増築	事前	2000.11.27~12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
白山	4	2002	-	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室	試掘	2002.9.2	21	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	4	2002	KNK	農学生命科学研究科附属小石川樹木園・根圏観察室	事前	2002.9.24~10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	5	2007	BGY07	理学系研究科附属植物園・医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物	試掘	2007.9.3~4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
白山	6	2010	KBG10	理学系研究科附属植物園本園・下水・電源ケーブル埋設・埋設溝地点	事前	2010.9.6~15	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収
白山	7	2010	-	理学系研究科附属植物園本園・旧小石川養生所井戸欄改修	立会	2011.1.17	-	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収

その他地区調査一覧

地区	番号	行政区	年度	略称	調査名(旧略称)	調査種別	調査期間	面積 ㎡	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
他	1	三浦市	1988	-	理学部附属臨海実験所新研究棟〔新井城〕	試掘	1988.7.4~8.2	80	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	2	文京区	1991	-	追分学寮	試掘	1991.8.23~24	16	成瀬	近世
他	3	豊島区	1991	-	豊島学寮	試掘	1991.8.26~30	29	武藤	遺構・遺物なし
他	4	三鷹市	1991	-	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕	試掘	1991.9.15~30	350	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	5	三鷹市	1991	-	井の頭学寮	試掘	1991.9.30~10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
他	6	港区	1991	-	白金学寮	試掘	1991.11.25~26	10	武藤	近世
他	7	三鷹市	1992	三广1	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕Ⅰ期	事前	1992.6.29~9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	8	港区	1992	-	医科学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
他	9	三浦市	1992	MMBS	理学部附属臨海実験所新研究棟〔新井城〕	事前	1992.7.20~9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	10	三浦市	1993	-	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20~23	-	武藤	中世
他	11	三浦市	1993	-	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7~8	-	武藤	中世
他	12	三鷹市	1993	三广2	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕Ⅱ期	事前	1993.5.28~11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	13	三鷹市	1994	三广3	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕Ⅱ期	事前	1994.5.13~8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8 長嶋遺跡』
他	14	千葉市	1994	-	検見川運動場体育セミナーハウス〔玄藩所遺跡〕	試掘	1994.7.11~18	930	堀内・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収

年 報 編

他	15	千葉市	1994	GMB	検見川運動場体育セミナーハウス [玄藩所遺跡]	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
他	16	港区	1994	-	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
他	17	港区	1995	-	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
他	18	柏市	1996	-	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
他	19	港区	2000	SBS00	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27～2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
他	20	文京区	2007	-	追分国際学生宿舎	試掘	2007.8.27～31	84	原・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
他	21	文京区	2007	-	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3～2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収



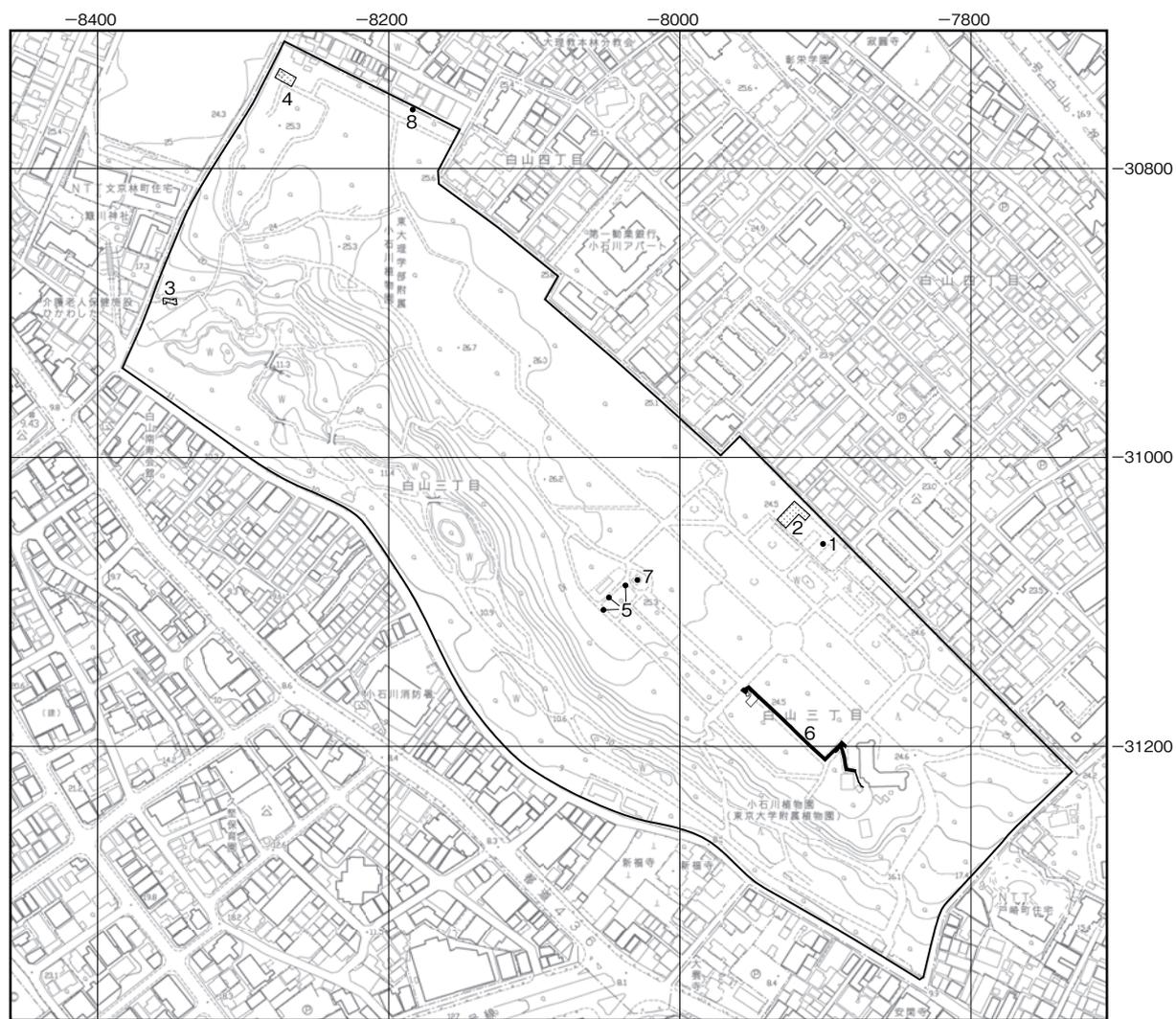
本郷地区調査地点

世界測地系



世界測地系

駒場I地区調査地点



白山地区調査地点

世界測地系

第 1 部 2013 年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2013年度は、本郷地区において、以下の通りの調査を実施した。

本郷地区では、事前調査が前年度から継続中の本郷125クリニカルリサーチセンターA棟I期、本郷113医学部附属病院入院棟II期を含めて6件、試掘調査が9件、立会調査が14件を行った。このうち、次年度にまたがって継続している調査は、事前調査の本郷125クリニカルリサーチセンターA棟I期、本郷113医学部附属病院入院棟II期2次、本郷148国際科学イノベーション総括棟新営である。

事前調査を行った本郷113医学部附属病院入院棟II期は、縄文時代（陥穴1基）、古墳時代（住居跡2軒）、江戸時代（富山藩邸）、本郷134工学部3号館施設整備は、江戸時代（加賀藩本郷邸、水戸藩駒込邸）、本郷143講堂改修工事は、江戸時代（加賀藩本郷邸）、近代（東京帝国大学）の遺構・遺物が出土している。

〈事前調査〉

- ・継続（2012年12月17日）～継続 本郷125クリニカルリサーチセンターA棟I期（担当：追川・小川）
- ・2013年8月19日～10月3日 本郷113医学部附属病院入院棟II期2次（担当：成瀬・香取）
- ・2013年3月18、27日、4月1、8～10、22、23、30日、5月1、9、10、13、14、21～23日、6月15、17、18、24～26、28日、7月1～3、5日 本郷134工学部3号館施設整備（下水他）（担当：堀内）
- ・2013年9月10日～2014年3月31日 本郷146アカデミックcommons（担当：堀内）
- ・2013年9月26日、10月21～25日、11月5、11日、12月12、13、16日）～継続 本郷143講堂改修工事（担当：原・清水）
- ・2014年1月14日～継続 本郷148国際科学イノベーション総括棟新営（担当：大成・香取）
- ・2014年2月5日～継続 本郷113医学部附属病院入院棟II期3次（担当：成瀬、小川）

〈試掘調査〉

- ・2013年6月4日、5日、7日、8日、10日 本郷135農学部水田取設工事（担当：原）
- ・2013年6月17日 本郷136農学部正門舗装改修工事（担当：原）
- ・2013年7月18日 本郷137浅野民間地工事に伴う調査（担当：原）
- ・2013年9月10日 本郷142農学部東側外構（担当：原）
- ・2013年9月2日、3日 本郷144看護職員等宿舎5号棟擁壁（担当：香取）
- ・2013年7月23日～26日 本郷147国際科学イノベーション総括棟新営（担当：追川）
- ・2014年1月29日 本郷151農学生命科学研究科閉鎖系温室（担当：原）
- ・2014年2月13日、17日、21日 本郷152地震研究所北側囲障改修工事（担当：原）

〈立会調査〉

- ・2013年4月8日 本郷132タンDEM加速器研究棟北側側溝改修（担当：原）

- ・2013年4月10日 本郷133 工学部9号館西側舗装改修（担当：原）
- ・2013年7月22日、26日、31日 本郷138 工学部3号館施設設備（雨水）（担当：堀内）
- ・2013年8月4日 本郷139 保育園前歩道植栽（担当：堀内）
- ・2013年7月29日、31日、8月1日、5日、2014年1月29日、2月4日 本郷140 春日門総合研究棟に伴う外構工事（担当：大成）
- ・2013年8月24日 本郷141 工学部3号館施設整備（下水2）（担当：堀内）
- ・2013年9月27日 本郷145 医学部中央総合館前誘導ブロック設置（担当：成瀬）
- ・2013年12月20日 本郷149（弥生）テニスコート夜間照明設置工事（担当：大成）
- ・2014年1月29日、2月3日、16日～18日 本郷150 農学部正門舗装改修工事（担当：原）
- ・2014年1月10日、1月14日 本郷154 保育園前漏水（担当：堀内）
- ・2014年1月29日、2月5日、2月10日 本郷155 懐徳門舗装（担当：堀内）
- ・2014年2月6日 本郷156 博物館AMSラボ電気改修（担当：堀内）
- ・2014年2月22日～23日 本郷157 第2本部棟外構（担当：堀内）
- ・2014年3月11日～14日 本郷158 街灯整備（担当：堀内）

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期2次 (HHWB12)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1

調査期間 平成25年8月19日～10月3日

調査面積 825㎡

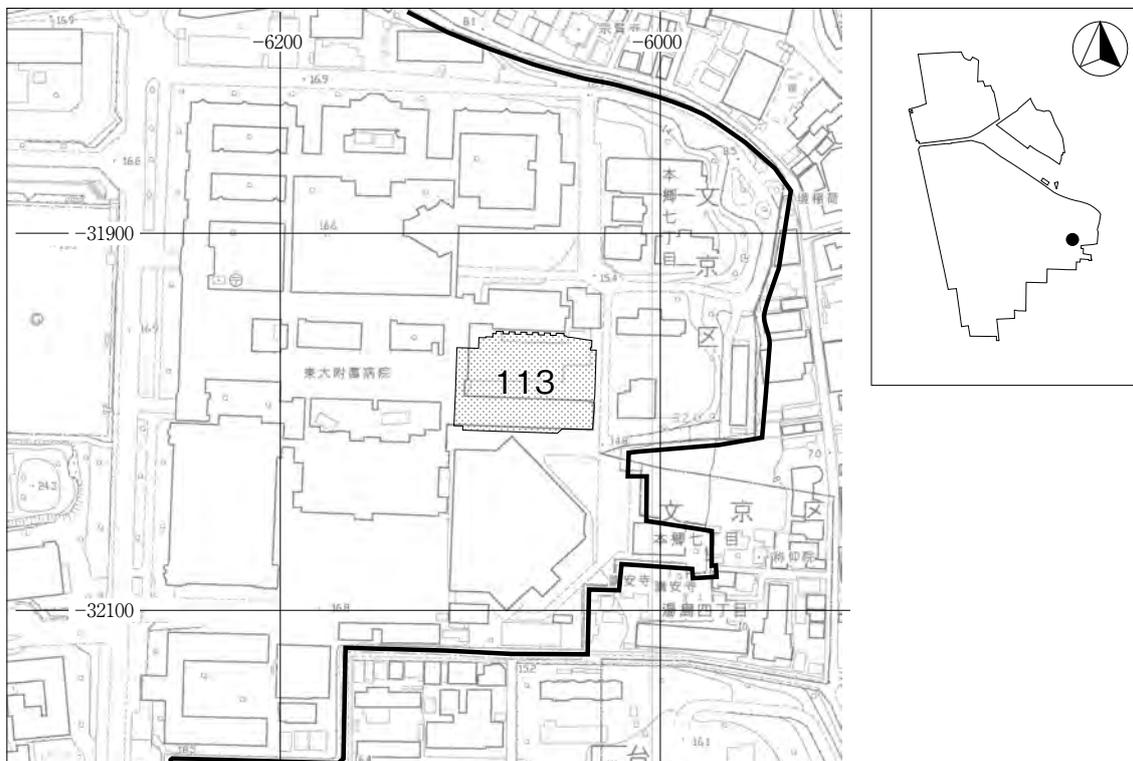
調査担当 成瀬 晃司 香取 祐一

1. 調査の経緯と経過

入院棟Ⅱ期新営に関する設計が進み、昨年実施した調査区の南北部分の工事範囲がほぼ確定したことと、中央棟機械室の解体が終了したC区北側部分を対象に追加調査を実施することになった。昨年の区割りを引き継ぎ、南側調査区をD区、北側調査区をE区、機械室解体範囲をC2区として調査を実施した(4図)。

2. 調査の方法と概要

調査区は5mメッシュのグリッドを設定した。グリッド軸は医学部附属病院立体駐車場地点(本郷91)での設定軸を基準としたことから、本地点内のグリッド番号は中途からの値となっている(4図)。但し、立体駐車場地点が日本測地系を基準として設定されたのに対し、本地点は、東日本大震災後の



1図 調査地点の位置

パラメータを乗じた世界測地系の値を基準としたため、立体駐車場地点グリッド座標値とは X 軸で + 0.255m、Y 軸で + 0.627m のずれが生じている。

本地点の調査では、江戸時代、古墳時代、縄文時代の遺構、遺物が確認された。江戸時代では富山藩上屋敷に関する地下室、井戸、土坑など 19 基を検出し、陶磁器、土器などの遺物がコンテナ 99 箱出土した。古墳時代では前期の竪穴住居 2 軒を検出し、土器がコンテナ 2 箱出土した。縄文時代はいわゆる Tピットと称される陥穴 1 基を検出した。今回の調査で検出された遺構の大半は、旧深部診療棟-入院棟 B 間にあたる E 区に位置する。以下、調査区に従い概要を記載する。

(1) C2 区

土坑 1 基、地下室 1 基、井戸 2 基が検出された (4、5 図)。SK423 は平面長方形を呈する土坑で覆土は焼土で埋め戻されている。坑底直上では桶杵状の痕跡が検出された。壁面は全体的に白色化していることから、水溜めとして使用されたと推定される。坑底は TP 層に達し、標高は 8.5m を測る。焼土層中からは大量の被災瓦とともに、白磁のうがい茶碗が一定量出土している。また遺物の年代観より元禄 16 (1703) 年の火災と考えられる。SU426 は張り出し部を有する地下室である。遺構廃絶後の埋め戻し過程で、瓦が多量に廃棄されている。また天井崩落後の凹地に堆積した土砂には煉瓦片が含まれており、明治以降に天井が崩落したことが確認される。井戸は 2 基検出された。ともに直径 150 ~ 160cm を測る大形の井戸である。遺物はほとんどなく詳細な年代は不明である。

(2) D 区

土坑 1 基が検出された (4 図)。SK434 は不定形土坑で中央病棟基礎下で検出された。坑底は凹凸が著しく採土坑と考えられる。

(3) E 区

縄文時代

陥穴 1 基が検出された。SKJ64 はいわゆる Tピットである (2 図)。上部は削平されている。遺物は出土していない。

古墳時代

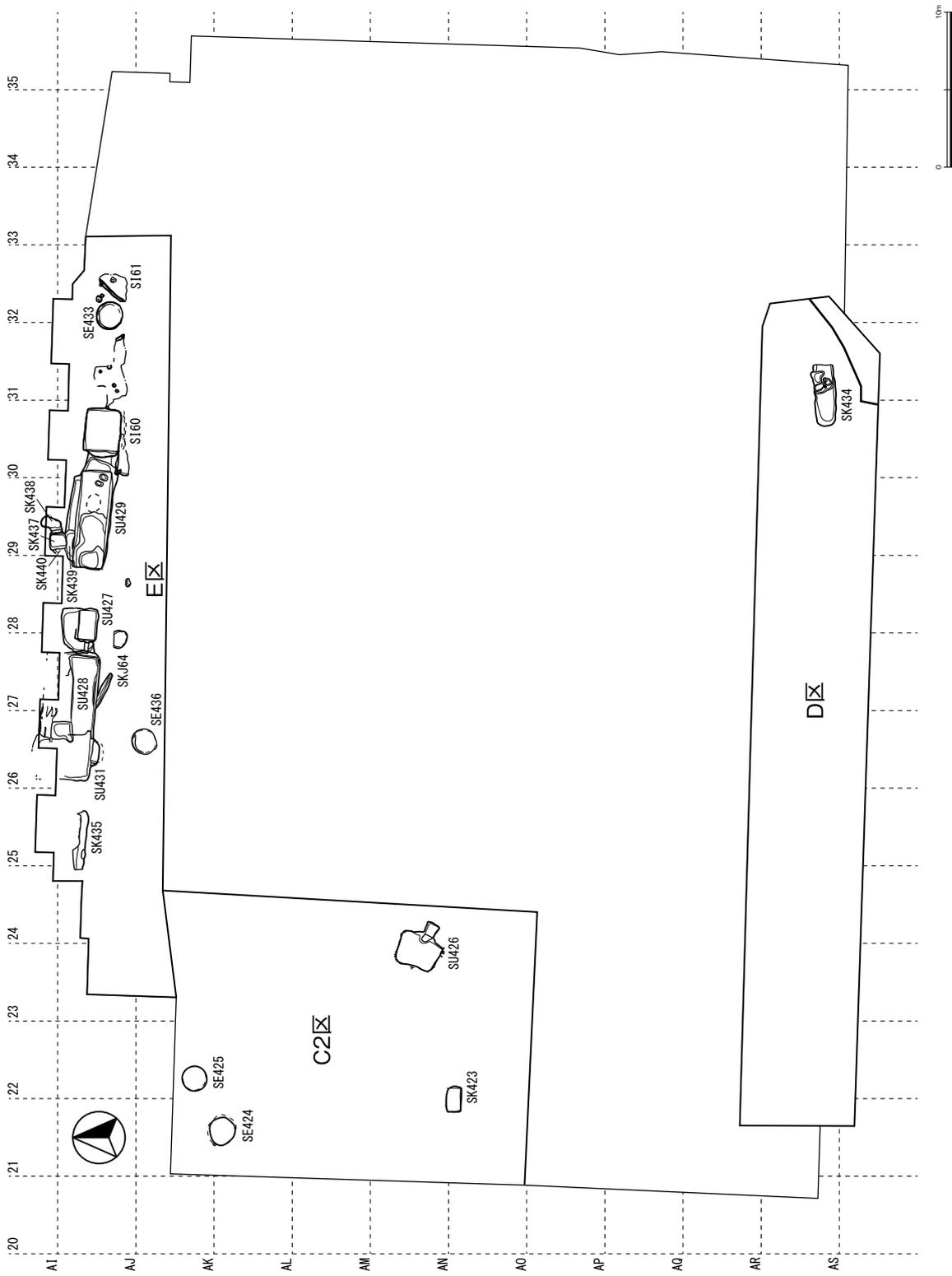
竪穴住居 2 軒が検出された。SI60 は 1 辺約 8 m を測る大形の住居である (3 図)。大半に攪乱を受け、遺存状況は悪い。江戸期の遺構 SU429 壁際で炉が検出された。SI61 とともに遺構主軸は真北から約 45° の傾きを持つ。



2 図 SKJ64



3 図 SI60



4 図 遺構配置図

江戸時代

井戸2基、地下室4基、土坑5基などを検出した(4、6図)。SU427は長方形の開口部を有する地下室で室部は北から西に広がる。但しオーバーハング部全域にわたって工具痕が認められ、製作途中で廃絶された可能性もある。SU428は長辺850cm、短辺350cmを測る大形の地下室である。坑底は砂礫層に達し、標高約9mを測る。坑底直上ほぼ全域に天井部の崩落と考えられる巨大ロームブロックの堆積が認められる。またロームブロック直上は平坦に再調整され、崩落後に再利用された可能性もある。SU429はSU428と類似する地下室である。西側の長方形部は長辺640cm、短辺215cmを測る。坑底は西壁に向かってテラス状に下がっており、最深部で標高8.5mを測る。東側の平坦部は約9.5mで、その差1mに達する。西側凹地部はローム層で埋め戻され、東側レベルで整地されたと考えられる。また東側方形部との間隔は約120cmを測り、別遺構の可能性もある。但し同一覆土が両方向に堆積しており、埋没過程で掘り返された可能性もある。北壁テラス部も重複の可能性もある。さらにその北にはSK437、SK438、SK439、SK440などが重複して存在するが、SK437、SK438、SK439の坑底標高は10.2～10.3mと深く、非常に狭い空間内で当時の地表面よりおそらく2m以上の深さを持つ遺構が構築されていたといえる。特にSK437、SK438、SU429出土遺物には共通点が多く、同時に埋め戻されたと考えられる。これらの大形地下室は、出土遺物の年代観から18世紀第2四半期に廃絶されたと考えられる。またSK435を含め、主軸方位が共通し、さらに南壁がほぼ同一線上に揃って分布していることから、これらの遺構の南端がかなり強く規制される藩邸内土地区画が存在したことが推定される。

3. 調査の課題と展望

古墳時代の竪穴住居に関して、遺存状況が比較的良好なE区の状態から、その分布域は29ライン以東と考えられる。昨年の調査でも遺存状況は決して良好とはいえないが、やはり29ライン以東で確認されている。本地点北西方向に位置するCRC-A棟地点でも住居の分布はやはり東域に限られていることから、古墳時代前期集落の拡がりがある程度把握できる結果が得られた。

江戸時代富山藩邸に関しては、遺構分布状況から18世紀前半の土地利用状況の一端を窺い知ることができ、今後、隣接する立体駐車場地点や先述したCRC-A棟地点などの成果との比較検討から、文献、絵図情報が確認されていない19世紀以前の富山藩邸の様相復元を担う資料のひとつとして評価される。



5図 C2区全景



6図 E区全景

2. 本郷134 工学部新3号館施設整備事業（下水他）

所在地 東京都文京区本郷7-3-1（文京区No.47本郷台遺跡群内）

調査期間 2013年3月18、27、4月1、8～10、22、23、30、5月1、9、10、13、14、21～23、
6月15、17、18、24～26、28、7月1～3、5日

調査面積 490㎡

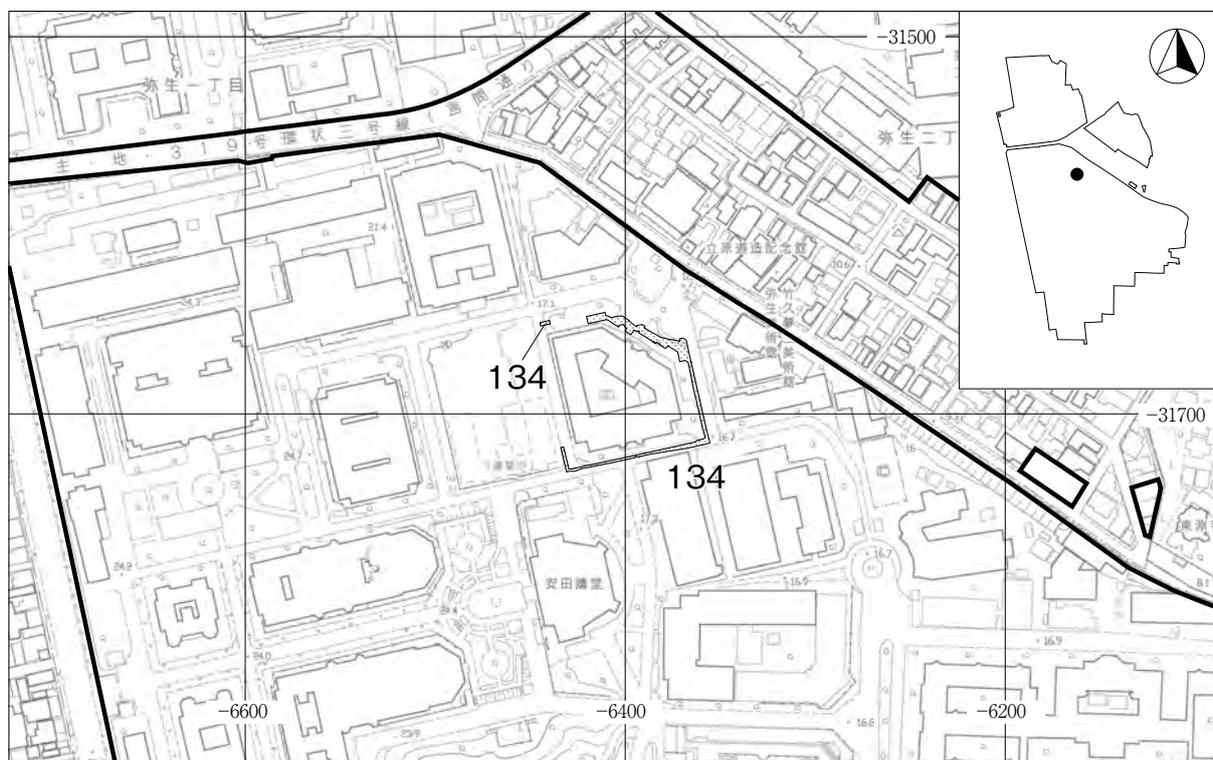
調査担当 堀内 秀樹

1. 調査の経緯と経過

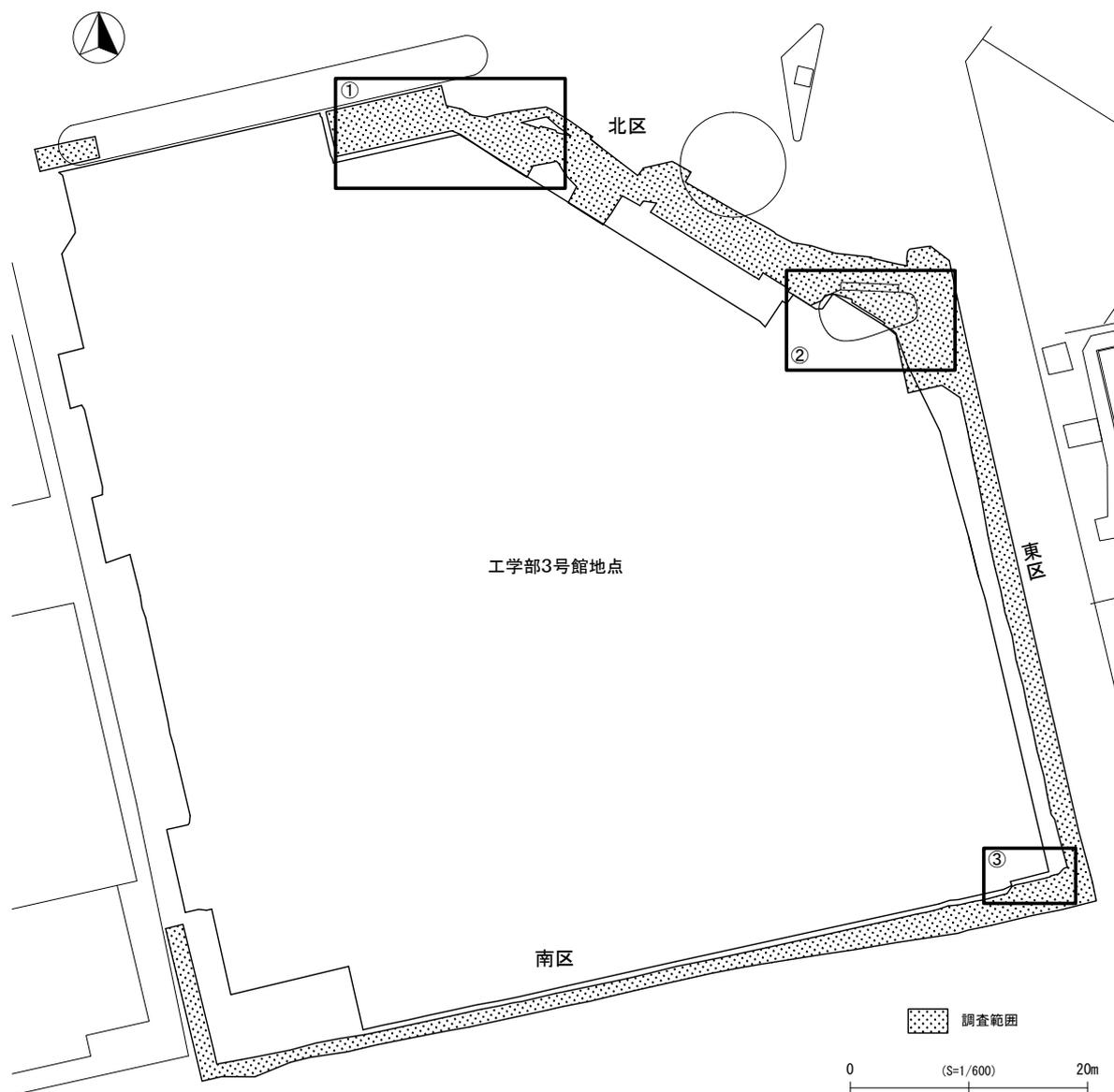
東京大学は、文京区本郷3丁目に所在する本郷キャンパス工学部新3号館新営に伴う施設整備事業の一環として、その外周に排水管の整備を予定している（1図）。整備予定地点は、文京区No.47「本郷台遺跡群」として周知の遺跡として登録されており、工事を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要がある。試掘・事前調査は、埋蔵文化財調査室により2013年3月18、27、4月1、8～10、22、23、30、5月1、9、10、13、14、21～23、6月15、17、18、24～26、28、7月1～3、5日に合計490㎡について行い、同室員堀内秀樹が担当した。

調査区は、工学部3号館周囲西南から東南角までを「南区」、東南角から東北側隅切り部までを「東区」、隅切りから北側を「北区」と命名した。

当該地周辺の旧地形は、現在の三四郎池から流下する谷が、工学部3号館南辺ほぼ中央から北東隅切り部分にかけて縦断し、その東、西側は谷へと向かう傾斜地となっている。また、この主谷から分岐する支谷が隅切り部から西へ延び、本調査地北区はその谷の南斜面地に相当する。調査区全体として南から北へ向かって傾斜を有している地勢である。



1図 調査地点位置図



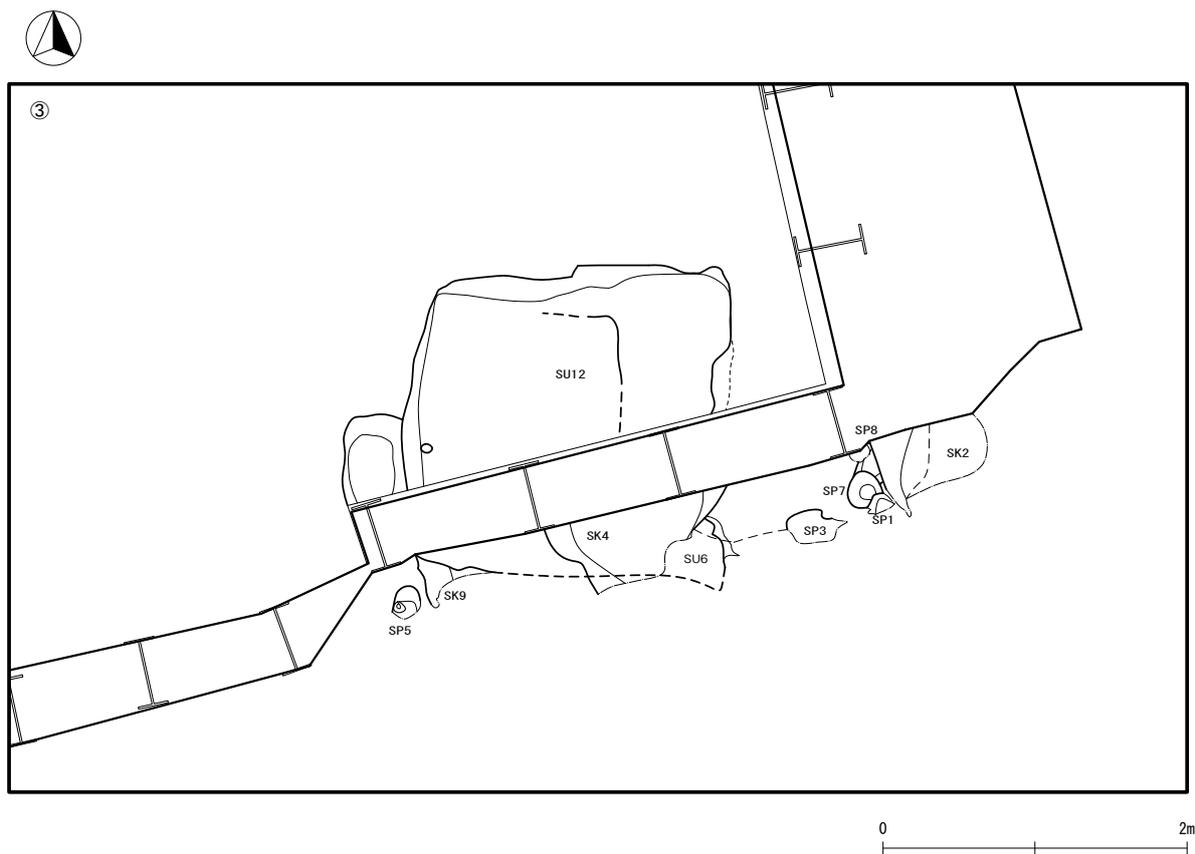
2 図 調査区位置図

2. 調査の概要

試掘調査は、基本的に排水管理設工の掘削によって壊される部分を対象に埋蔵文化財の有無、遺存状況の確認を行った。事前調査は、埋蔵文化財の確認時、直ちにその調査を行うように進めた。調査は、施工に合わせて南区を3月18日～4月23日、東区を4月22日～23日、北区を4月30日～7月5日にかけて行った。以下、各区に分けて概要に触れていく。

(1) 南区

南区は、工学部3号館西南から東南角までの間で、東南角を除き、遺物は散見されたものの江戸時代以前に遡る遺構は確認できなかった。掘削深度は、南西トレンチ端～南西隅でGL-70cm、南区中央から東側でGL-120cmである。東南隅付近では、江戸期の遺構が、地下室がSU2、SU6(8図)の2基、土坑がSK4(7図)の1基、ピットが6基確認された(2図拡大図③、3図)。



3図 南区遺構配置図（部分）

このうち、SU6は位置、規模、出土遺物の年代から、2011年に調査を行った工学部3号館地点のSU12と同じ遺構であろうと推定された。確認された遺構は、切り合い関係、出土遺物から19世紀に比定されると考えられる。

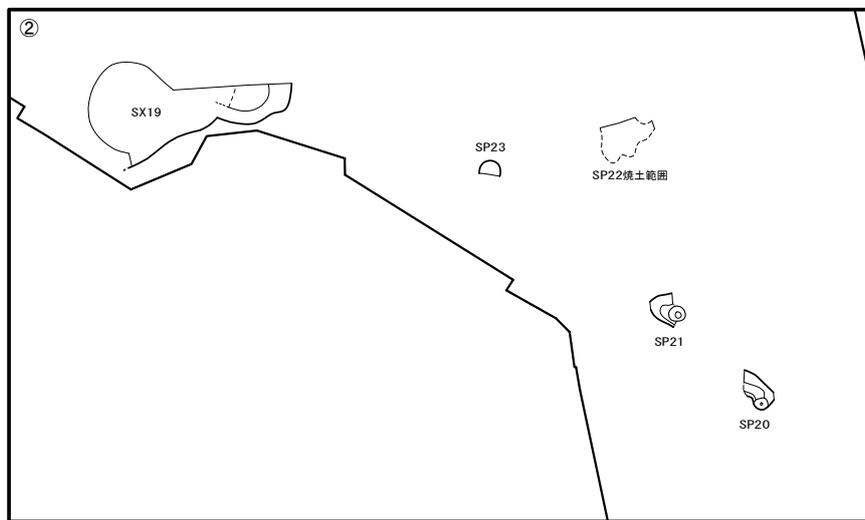
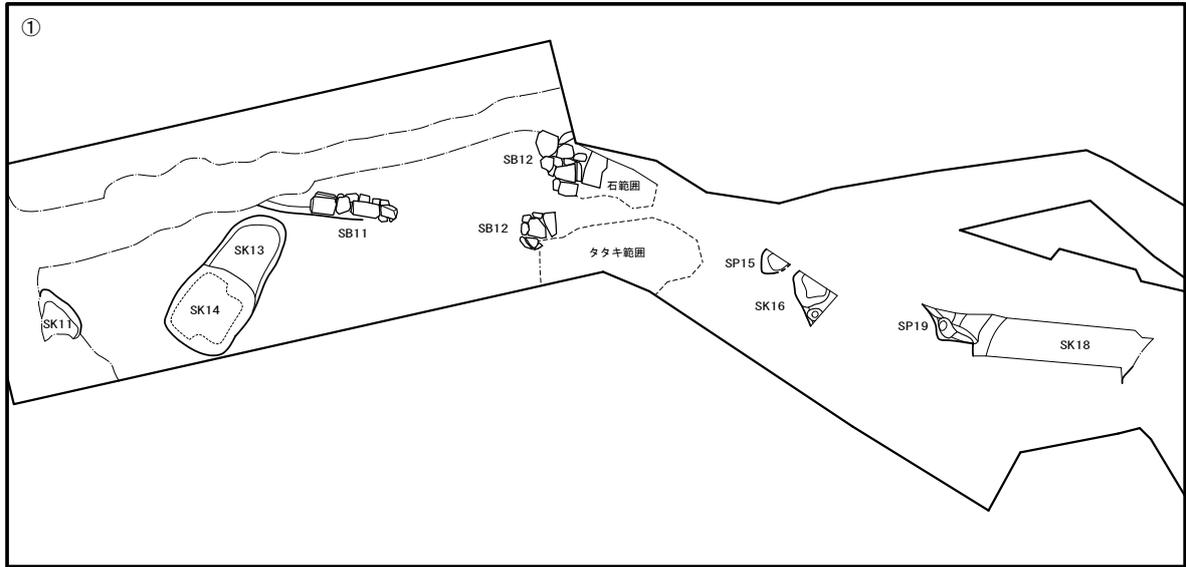
(2) 東区

東区は、ほぼ既設の共同溝の上に埋設が計画されていた。掘削深度は、柵埋設位置が深くGL-200cmの他は、埋設管の傾斜によってひな壇状に柵南側で100cm、柵北側で120cmであった。東区で、江戸期以降の埋蔵文化財は確認されなかった。

(3) 北区

当初、埋設管幅での調査を予定していたが、施工時の地中障害物などによる設計変更に伴って、最終的には図示したような調査域となった。掘削深度は、浅い埋設管はGL-100cm、柵は最大でGL-220cmであった。旧工学部3号館によって建物に近い部分は、総じて大きく攪乱を受けており、江戸～近代初期と推定される遺構、遺物は北区中央付近、4図に示した区域から多く確認された。また、北区の北側には東西に延びる小谷が存在し、江戸期に谷を埋める地業の痕跡なども確認された（12図）。

北区で確認された遺構は、瓦敷を伴う生活面（13図）、焼土面、地下室SU18（11図）の1基、土坑SK11、SK13（遺物出土10図）、SK14の3基、石組溝SB12の1基、焼土溜り（SP22、14図）、ピット6基である。このうち明確に近代以降の遺構であることが確認されているものはSB12石組遺構のみで、他の遺構は出土遺物などから江戸期のものと推定される。



4 図 北区遺構配置図（部分）

3. まとめ

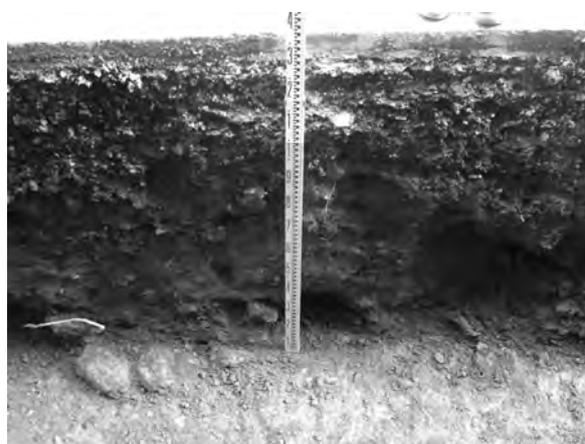
今回の調査では、その多くが近代以降に削平され、遺跡の遺存状態は概して不良であった。

本調査区の中央、工学部3号館地点では三四郎池から流下する小河川と開析された谷が確認されており、自然地形を利用して藩邸が区画されていた。本調査地点では、南区、東区が加賀藩前田 家上屋敷（本郷邸）、北区が水戸藩徳川家中屋敷（駒込邸）に該当するが、特に北区では前述の調査では遺構の密度が薄かった。本調査では狭い範囲であったにもかかわらず一定量の硬化面や地下室 などを含む生活遺構が確認できたことは中屋敷における土地利用に関する成果であった。

今後、工学部3号館の調査成果と合わせて、本調査地点の土地利用の変遷について歴史的な復元を行っていきたい。



5 図 南区端（南西端から北へ）



6 図 南区中央付近土層堆積



7 図 SK4 完掘



8 図 SU6 完掘



9 図 東区 (南東端から北へ)



10 図 北区 SK13 出土かわらけ



11 図 SU18 地下室完掘



12 図 南区中央付近谷の埋立



13 図 瓦敷のある硬化面



14 図 SP22 焼土溜り

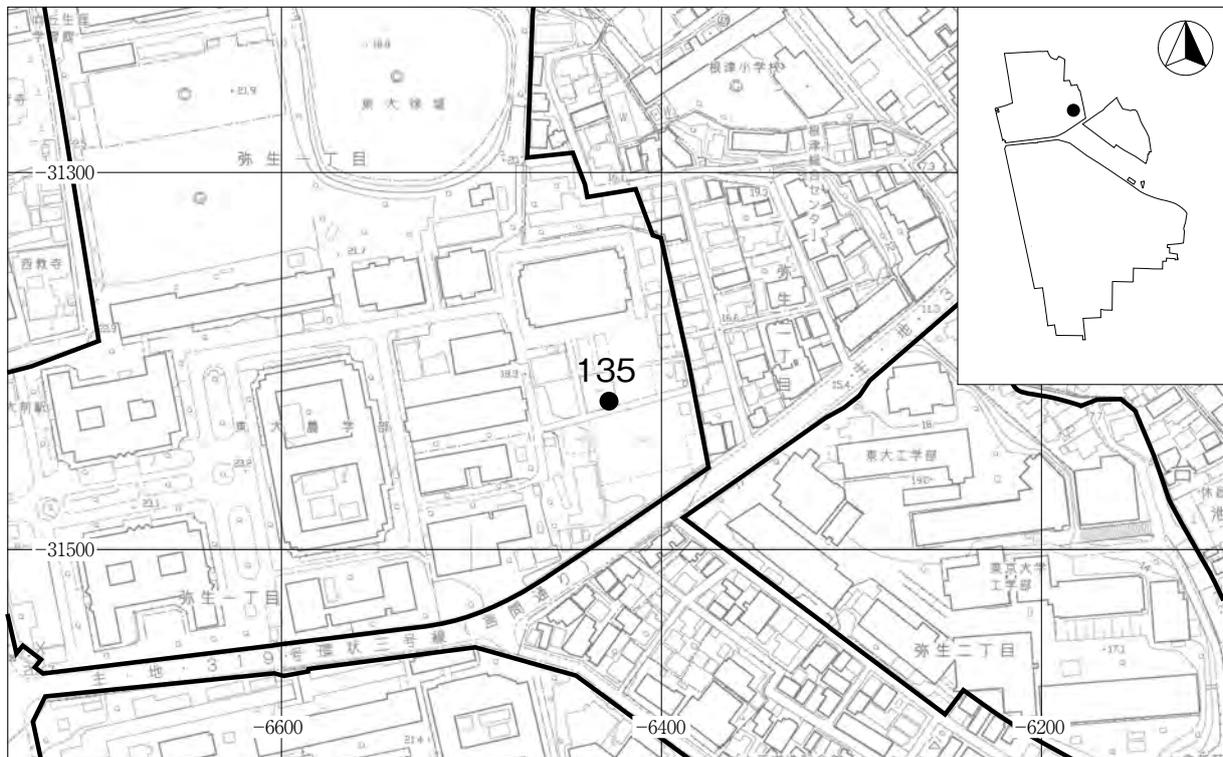
第2節 本郷構内の試掘調査

1. 本郷 135 農学部水田取設工事

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 弥生町遺跡群(文京区 No.28)・本郷台遺跡群(文京区 No.47)内
調査期間 2013年6月4、5、7、8、10日
調査面積 101m²
調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学は東京大学弥生地区圃場で工事を計画しており埋蔵文化財調査室に対して遺跡存否の照会があった。農学部圃場では、隣接する生命科学総合研究棟A・B棟の遺跡調査で弥生時代の方形周溝墓と江戸時代の遺構、明治時代の射的場埋め立てのための道路、堀田家関連遺構、農学部の実験施設を確認しており、今回の建設予定地でも遺跡の検出が予想された。調査は2013年6月4・5日に配管工事部分、6月7・8・10日に水田取設工事部分の調査を行った。調査は原の指導のもとで大成エンジニアリングが行った(1図)。



1図 調査地点の位置

2. 調査結果

試掘に先行して行った配管部分の調査では遺構を確認することはできなかった。検出した6基の遺構は隣接する生命科学総合研究棟B棟で確認した生活面(明治時代～農学部)の遺構で平面図作成、写真撮影など最小限の調査を行った。調査後、下層の江戸時代と弥生時代の確認を行ったが遺跡を確認することはできなかった(2・3図)。

生命科学総合研究棟B棟(今後、A面、F面は細分の予定)

A面：明治時代～現在

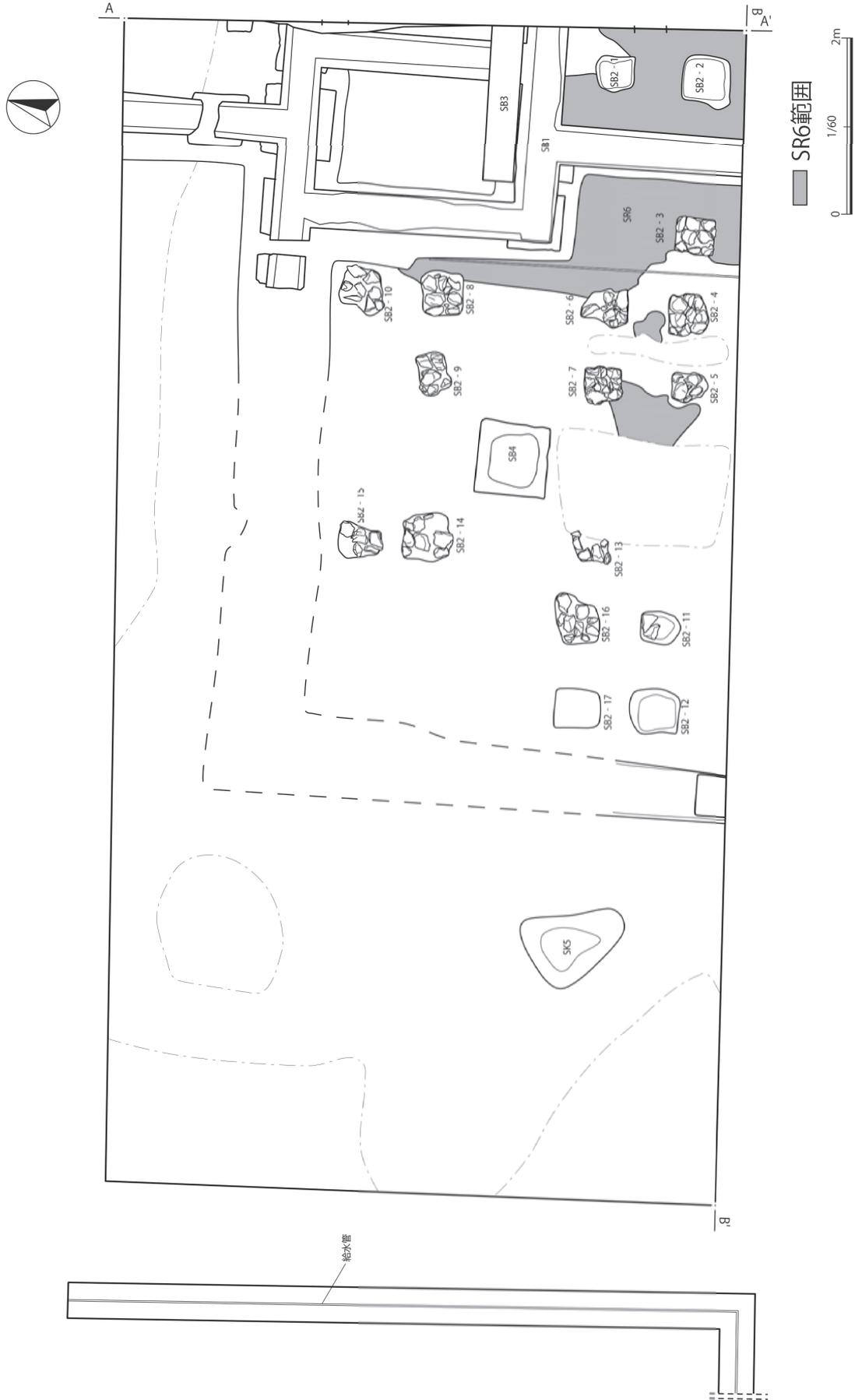
B・C面：明治時代 ～明治21(1887)年頃

D面：水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以降

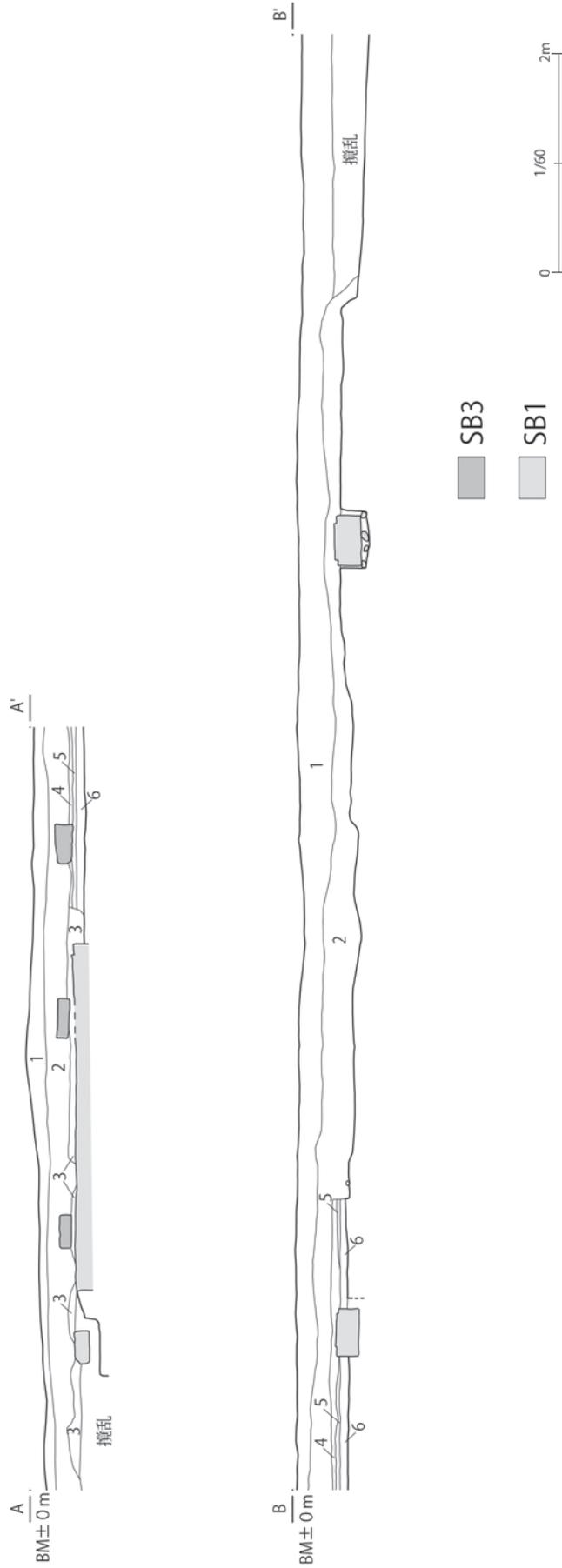
E面：水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以前

F面：江戸時代以前

検出した6基の遺構の生活面は、A面：堀田正倫邸、農学部圃場関連施設とB面：射的場移転後の造成に伴うものである。青木家文書に堀田正倫邸の図面が保存されているが、図面と遺構の関連は現在のところ不明である。圃場の外壁は堀田邸の外壁をそのまま使用しており、裏門の門柱が現在も残っている。



2 図 試掘地点位置図



調査区東壁・南壁土層説明(A-A'・B-B')

- 1 暗褐色土。小礫中量、ロームブロック、ローム粒少量含む。締り、粘性ともに普通。
- 2 暗褐色土。ローム粒、ロームブロック、小礫少量含む。締り、粘性ともに普通。
- 3 暗褐色土。ロームブロック、小礫中量含む。締り、粘性ともに普通。
- 4 暗褐色土。炭化物、小礫少量含む。締り、粘性ともに普通。
- 5 褐色土。灰、炭化物多量含む。締り、粘性ともにやや弱い。
- 6 黄褐色土。ローム粒主体層。黒褐色粘質土をマフィ状に少量堆積する。締り強く、粘性普通。

3 図 調査区東壁・南壁土層断面図 (S=1/60)

2. 本郷 136 農学部正門舗装改修工事

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 弥生町遺跡群（文京区 No.28）・本郷台遺跡群（No.47）内

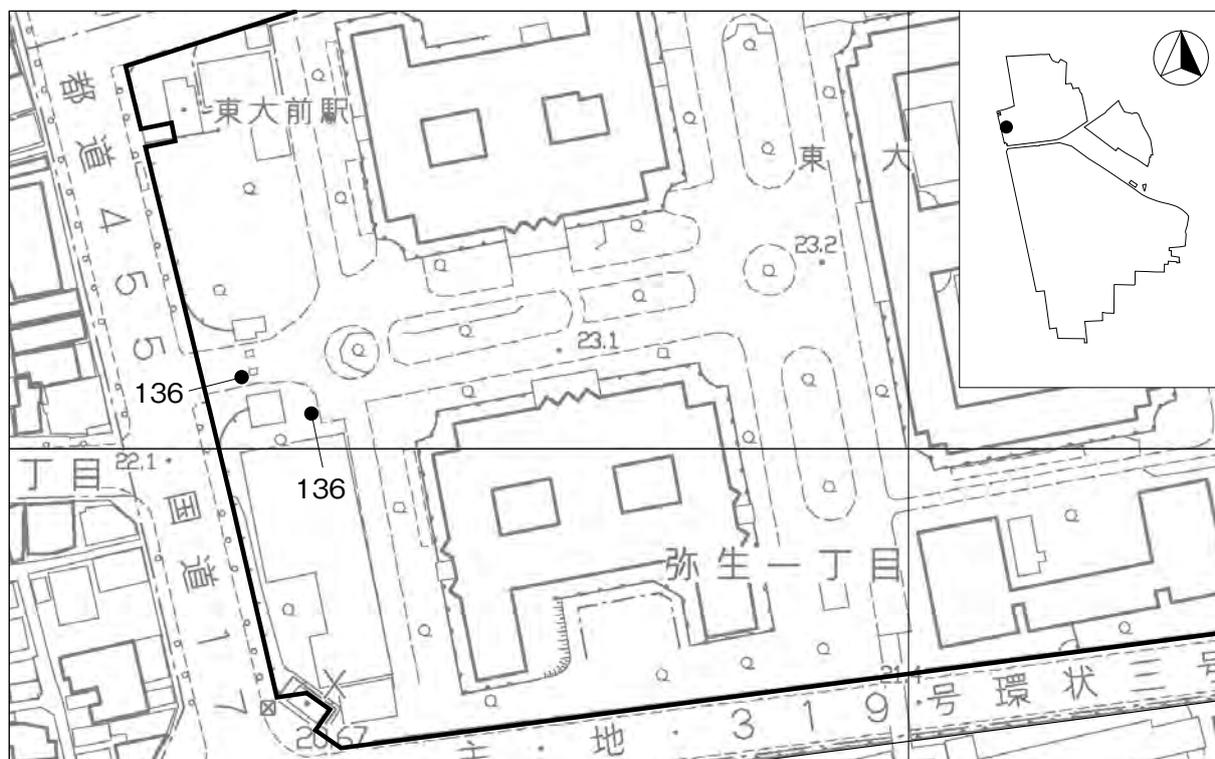
調査期間 2013年6月17日

調査面積 3㎡

調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と概要

東京大学は東京大学弥生地区で農学部正門舗装改修工事を予定した。弥生地区ではこれまで道路工事等の調査で水戸藩駒込邸に関連する遺構、第一高等学校に関する基礎を検出しており。今回の工事予定地を調査した2008年度の弥生地区屋外ガス管改修工事（本89）では、第一高等学校道路の舗装のためのレンガ敷き、江戸時代以前の埋没谷を検出した。本工事予定地でも遺跡の検出が予想された。調査は工事のための試掘調査地点2か所に関しておこなった（1図）。



1図 調査地点位置図

2. 調査結果

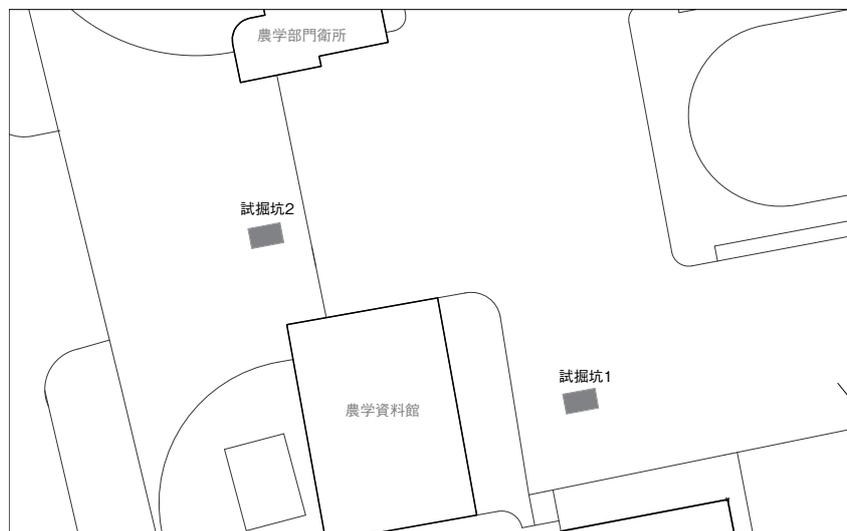
試掘坑1 0.6 m掘削（3図～5図）

北壁はアスファルト—碎石—瓦礫（レンガ基礎）—盛土の順で堆積していた。南壁はアスファルト—碎石—盛土—炭化物層—盛土の順で堆積していた。炭化物層の層厚は約5 mm関東大震災、戦災に伴うもののどちらかと考えられる。

試掘坑2 0.6 m掘削 (6 図)

敷石—コンクリート—盛土の順で堆積していた。

試掘調査の結果、第一高等学校時代の盛土を確認した。工事予定地にある 2008 年の弥生地区野外ガス管改修工事地点では遺跡を確認していることから、本工事の際も遺跡の確認が必要である。



2 図 試掘坑配置図



3 図 試掘坑1 北壁



4 図 試掘坑1 南壁



5 図 試掘坑1 遠景



6 図 試掘坑2 西壁

3. 本郷 142 農学部東側外構

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 弥生町遺跡群(文京区 No.28)・本郷台遺跡群(文京区 No.47)内

調査期間 2013年9月10日

調査面積 7m²

調査担当 原 祐一

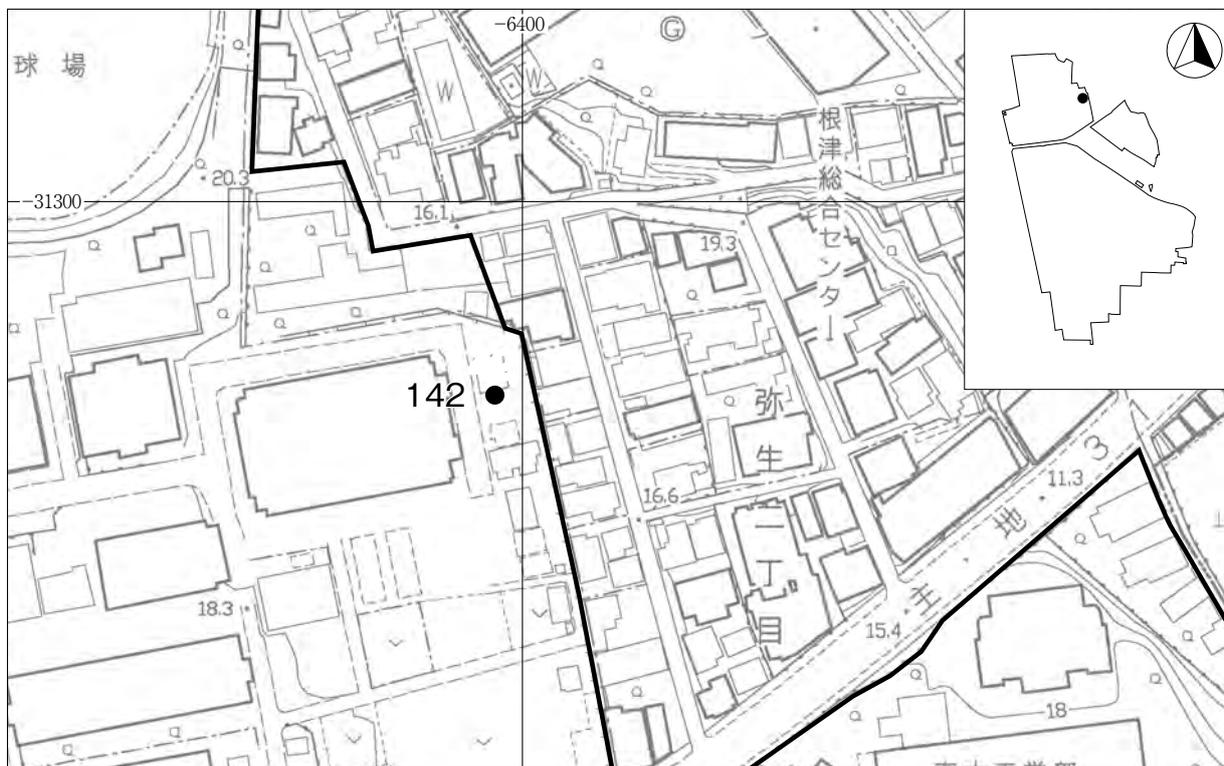
1. 調査の経緯と経過

東京大学農学部は東京大学弥生地区圃場の東側外構で椿植栽を計画しており、文京区教育委員会へ照会を行った。調査地点は弥生町遺跡群(文京区 No.28・本郷台遺跡群(文京区 No.47)内の範囲内にあたり、隣接する弥生地区生命科学総合研究棟A棟では方形周溝墓を検出していることから、文京区教育委員会から当地点で試掘調査実施の指導があった。農学部と埋蔵文化財調査室は調査方法について協議を行い、2013年9月10日に試掘調査を行った(1・2図)。

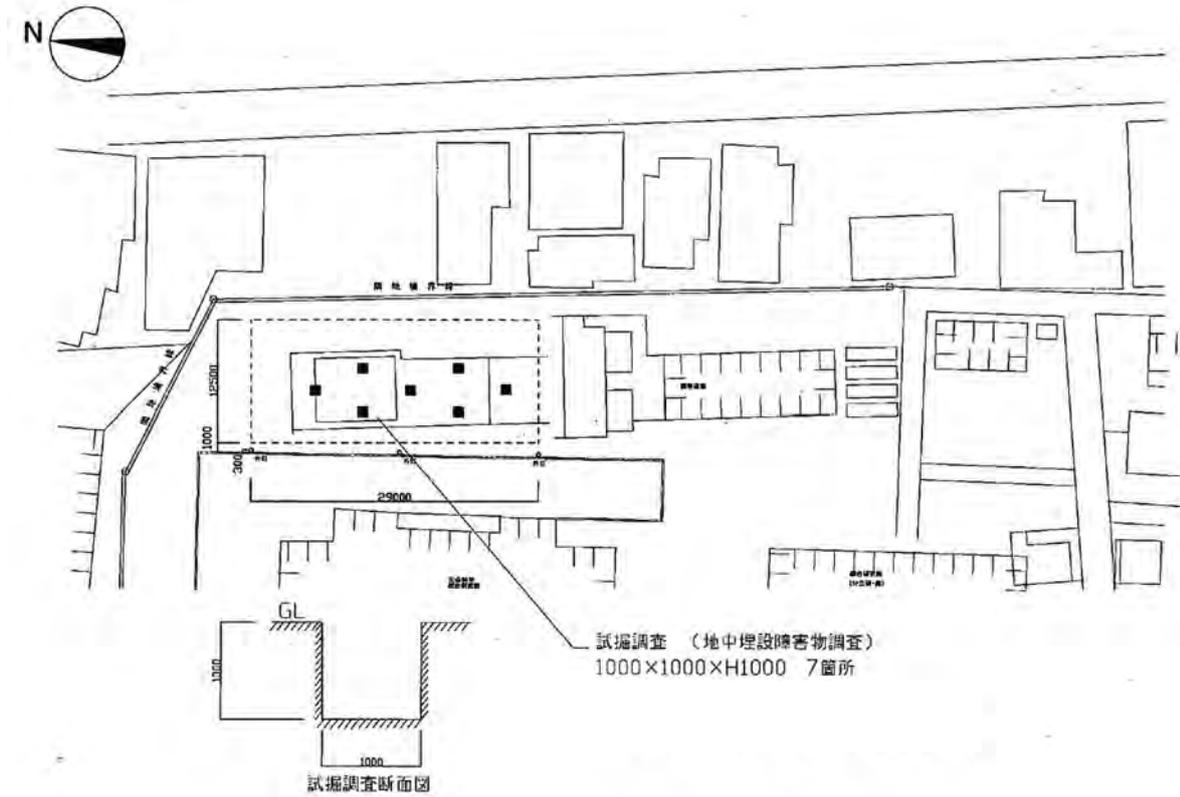
2. 調査結果

植栽予定地の堆積状況を確認するために農学部側が設定した7ヶ所の試掘坑を遺跡調査の試掘坑とした(3～8図)。各試掘坑は1m×1m×1mである。調査の結果、各試掘坑の堆積状況は同じで、上層から現在の圃場耕作土、堀田正倫邸上層の盛土、堀田正倫邸の生活面上層に薄く盛られている灰、炭化物を含む盛土、堀田正倫邸の生活面下層の盛土を確認した。今回の掘削深度では、明治時代の射的場の埋め立て工事に伴う土運搬のための道路面、江戸時代の包含層まで達していなかった。

調査の結果、射的場の造成に関する遺構、江戸時代の遺構、弥生時代の遺構を確認することができ



1図 調査地点の位置



2 図 トレンチ設定位置

なかった。周辺の遺跡検出状況から調査地点には遺跡の存在が予想されるが、今回の掘削予定深度では遺跡までは達せず、下層の遺跡は保存されるため事前調査の必要はないと判断した。



3 図 トレンチ 1



4 図 トレンチ 2



5図 トレンチ3



6図 トレンチ4



7図 トレンチ4



8図 トレンチ5

4. 本郷 147 国際科学イノベーション総括棟新営

所在地 東京都文京区本郷 7-3-1 (文京区No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2013年7月23～26日

調査面積 48㎡

調査担当 追川 吉生

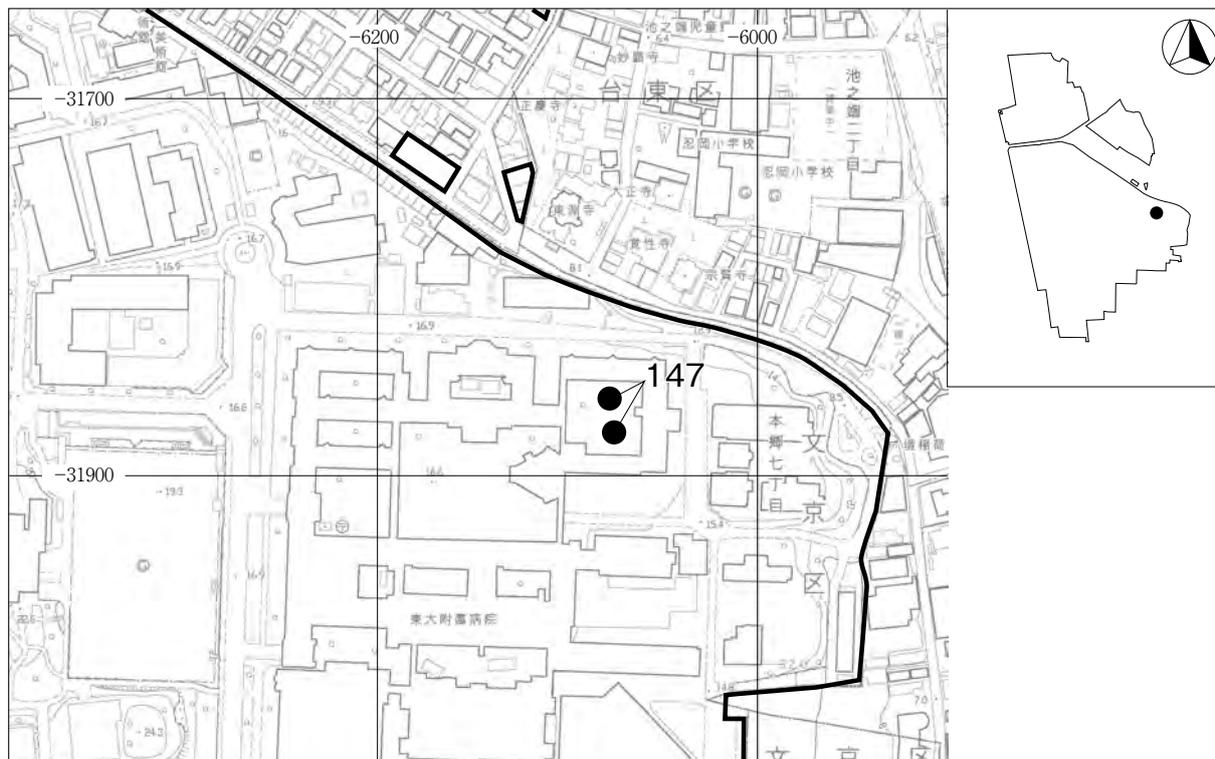
1. 調査の経過と概要

東京大学は国際科学イノベーション総括棟の建設を、医学部附属病院内に計画した(1図)。建設予定地は東研究棟の中庭部分であり、東側の دونالد・マクドナルド・ハウス地点では立川ロームⅩ層から石器群が出土しており、また西側に隣接するクリニカル・リサーチ・センター地点では、旧石器時代～江戸時代の遺跡が良好に遺存している。当予定地にも旧石器時代から近世までの遺跡が重層的に残っている可能性が高い。一方で調査区が中庭部分に限定されるという条件では、東研究棟に伴う基礎や配管などの攪乱によって、著しく遺跡が破壊されていることも考えられる。そこで埋蔵文化財調査室では事前調査を実施するのに先だって、上記の日程で試掘調査を行った。

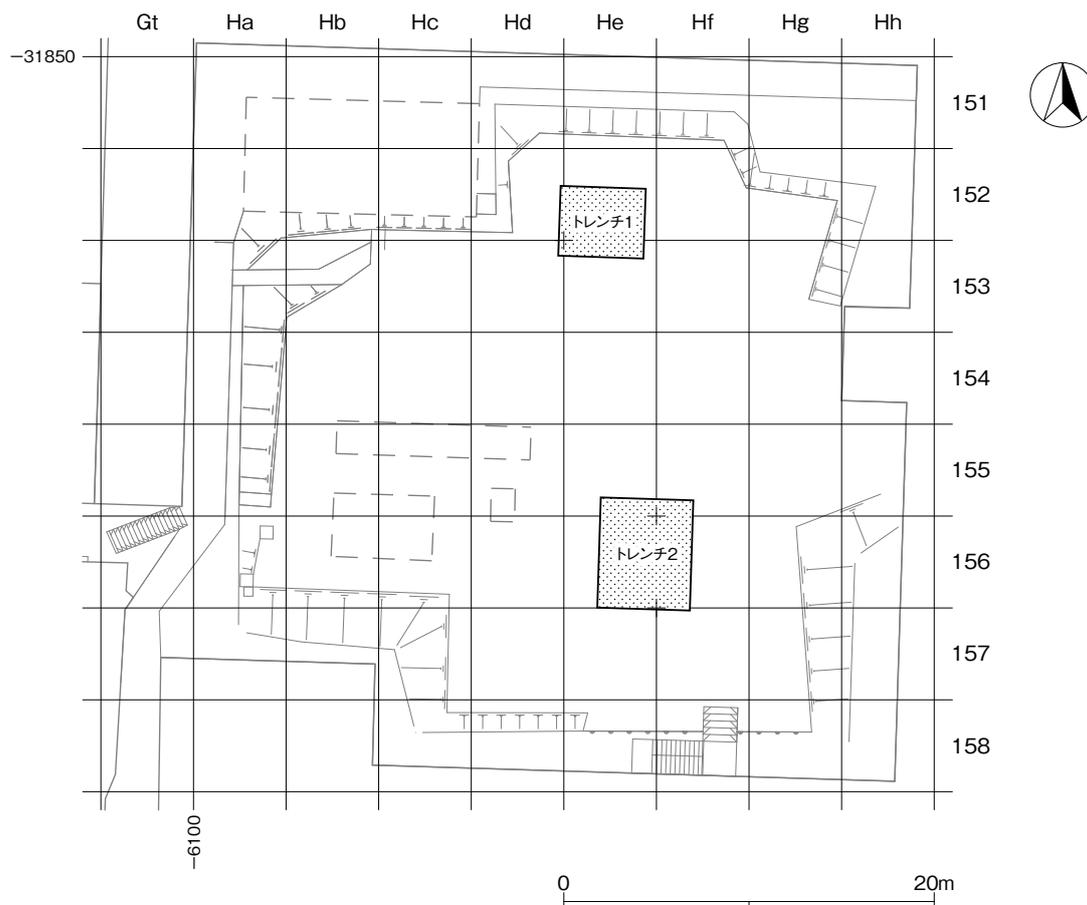
調査は2つのトレンチを設定した上で、生活面の数と地山までの掘削深度を把握することを目的に進めた。トレンチは調査予定地内で実施した汚染土壌のボーリング調査の結果を勘案して、建設予定地北側(トレンチ1)と中央付近(トレンチ2)に設定した(2図)。

トレンチ1

南北4.0m、東西4.6m。GL-0.7mまでは近代以降の攪乱が著しいが、それより下には近世の生活面が良好に認められる。立川ロームⅢ層を標高14.3m(GL-1.0m)で、同Ⅳ層を標高13.9m(GL-1.3m)



1 図 調査地点位置図



2図 トレンチ配置

を確認した。

トレンチ1では攪乱層とローム層を含めて18層の堆積が認められた。そのうち近世の生活面の可能性が高い堆積層は5枚あった。特に17層には、地下室や土坑のプランがいくつか切り合った状況がみてとることができ、遺構密度の高さがうかがえた。

トレンチ2

南北6.0m、東西5.0m。GL-0.9mまでは近代以降の攪乱が著しい。江戸時代の生活面は攪乱直下から認められ、あわせて4つの生活面を把握した。東側は深い遺構の一部にあたっている。GL-2.5mまで掘削を試みたが、遺構の底部は確認できなかった。本トレンチでは地山は検出していない。

2. 調査の結果

本地点に隣接するクリニカル・リサーチ・センター地点2区では、立川ロームⅢ層を標高14.49m、Ⅳ層を標高14.23mで検出しており、両地点間の自然地形はほぼ平坦であることが確認できた。この平坦なテラスはドナルド・マクドナルド・ハウス地点の西側まで続く。当該地点では東側でキャンパスの崖につらなる急激な落ち込みを確認している。両地点で出土した旧石器時代の遺物や、古墳時代の周溝は、崖南側のフラットな台地上に位置することになる。本試掘調査の所見はこれまでの発掘調査で得られた周辺の旧地形に関する状況と矛盾しないものである。

江戸時代の遺構についてはトレンチ1、トレンチともに5枚前後の生活面の可能性の高い土層を確認した。その全てが生活面をなすかについては本調査の結果を待たねばならないが、少なくとも本調

査地点においては、江戸時代の遺跡が良好に遺存していることを示す結果である。特にトレンチ2では、地山を確認し得ないほどの巨大な遺構が存在していることが明らかになった。

本調査に際しては、以上の状況を勘案した実施計画の策定が必要である。

5. 本郷 151 農学生命科学研究科閉鎖系温室

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 弥生町遺跡群(文京区 No.28)・本郷台遺跡群(文京区 No.47)内

調査期間 2014年1月29日

調査面積 18㎡

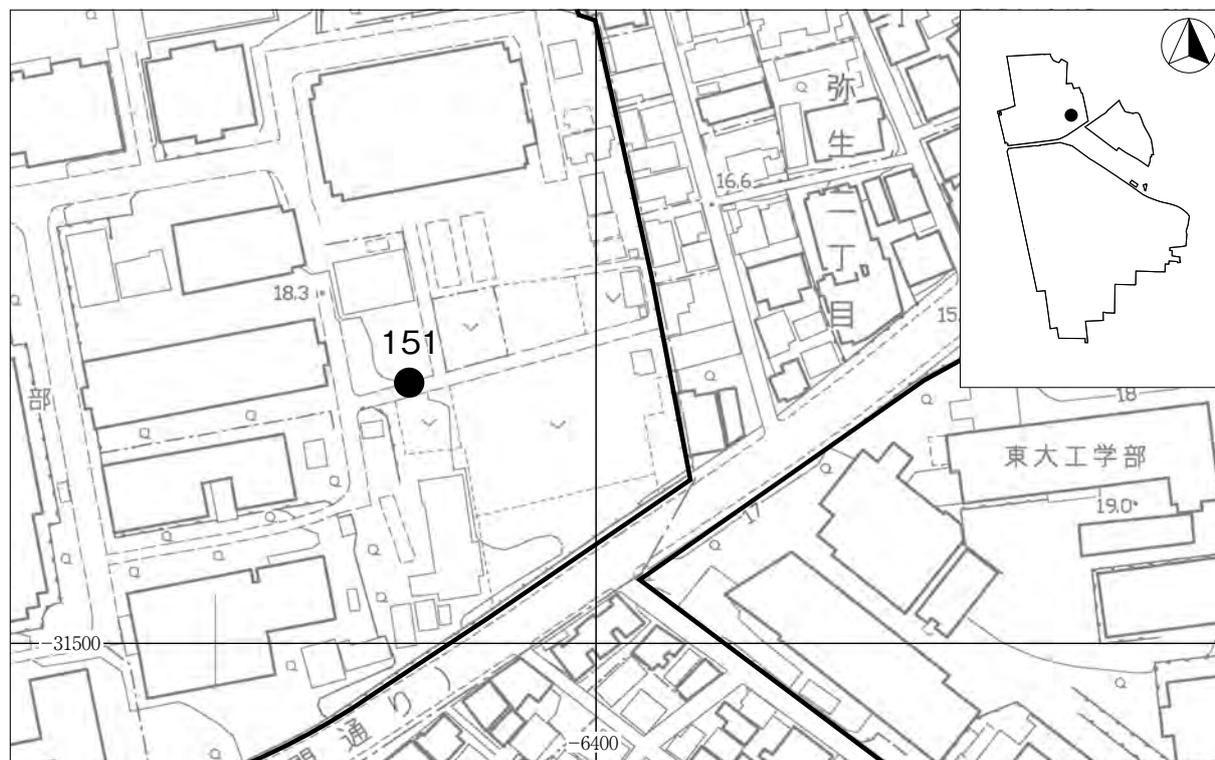
調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学農学生命科学研究科は弥生地区の圃場で閉鎖系温室建設を予定していた。建設予定地は弥生町遺跡群の範囲内で、明治時代に発見された弥生土器発見場所候補地も近く、言問通りを挟んだ浅野地区では集落跡の弥生二丁目遺跡が国指定史跡に指定されており、集落は圃場北側の住宅地まで広がっていたと推定されている。また、隣接する生命科学総合研究棟Bから弥生時代の方形周溝墓が検出していること、江戸時代の水戸藩邸に関連する遺跡が残っている事が予想されることから、文京区教育委員会から、届出のあった地点について遺跡の遺存状態・内容等を把握するための試掘調査を行うよう、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」の指導があった。施設部と農学部、埋蔵文化財調査室は工事予定地の調査方法について検討を行い、2014年1月29日に試掘調査を行うことになった(1図)。

2. 調査結果

調査は温室部分、排水部分の2ヶ所に分かれる。温室部分の掘削深度は0.3mから0.8m、排水部分は1.1m掘削を行った(2図)。



1図 調査地点位置図



2 図 トレンチ配置図

温室部分 (3・4 図)

西から 1.7m の範囲は農学部圃場の耕作土と考えられる黒褐色土が堆積する。建設予定地の東側は突き固められた砂利層が広がる。掘削深度は江戸時代の遺構検出面まで達していない。

排水部分 (5～8 図)

排水部分は 0.4 m で暗褐色の粘性の高いローム層を検出。上層は耕作土と考えられる黒褐色土が堆積。ローム層検出面でコンクリート基礎 4 基 (SB1～4) を検出した。基礎は南北に延びる。コンクリート基礎は除去しないで工事が行われ保存された。

SB1 幅 0.43m、厚さ 0.12m SB2 幅 0.67m、厚さ 0.3m

SB3 幅 0.67m、厚さ 0.25m SB4 幅 0.67m、厚さ 0.2m

本調査地点を含め、農学部圃場では本 62 農学部生命科学総合研究棟、本 94 分生研・農学部総合研究棟、本 124、本 135 等の調査を行っている。圃場の本 62、本 94 の調査では『向陵彌生町舊水戸邸繪圖面』（文政 9 (1826) 年墨書 個人蔵）に描かれている、「大名小路通り」と接続する生命科学総合研究棟から浅野地区工学部武田先端知ビル方向へ伸びる SR1 を検出。SR1 は切通しで、この道と接続する「大名小路通り」は SR1 との接続部分では切通しになっていると予想され、圃場の調査では検出が予想された。本 13 農学部校舎（7 号館）の報告で明治 16 年の等高線と以降の検出状況から「大名小路通り」は農学部 7 号館を通過していると推定していた。しかし、その後の調査で農学部 7 号館には「大名小路通り」は通っていない事が判明した。本 62、本 94、本 124・本 135・本 151 の試掘調査では「大名小路通り」の検出は無い。圃場南西側にある、本 12 農学部図書館でも「大名小路通り」は検出されていない。以上から、本 124 と本 135・本 151 の間、未調査部分に「大名小路通り」があると推定しているが、本 94 分生研・農学部総合研究棟追加では農学部生命科学総合研究棟と農学部 7 号館の間の道を調査した。ここでは「大名小路通り」を明確に示す遺構の検出はなかった。圃場部分は明治時代、射的場の埋め立ての際に削平されているため掘削深度等再検討する必要がある。「大名小路通り」推定線上にある農学 6 号館のボーリング調査のデータを含めて検討を行いたい。

排水部分で明治時代以降の堀田正倫邸の基礎 (SB1～SB4) を検出した。本 135 で検出した基礎と合わせて今後検討を行いたい。



3 図 温室部分全景



4 図 北壁堆積状況



5 図 SB1 南から



6 図 SB2・3 南から



7 図 SB4 南から



8 図 排水部分

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行にむけて以下のような整理作業を行った。

- ・本郷 15 薬学部新館遺構図版作成、出土遺物実測、デジタルトレース、事実記載、写真撮影
- ・本郷 19 医学部附属病院看護師宿舎出土遺物接合、デジタルトレース、遺物図版作成、写真撮影
- ・本郷 21 医学部附属病院 MRI-CT 棟出土遺物デジタルトレース、遺物図版作成、写真撮影
- ・本郷 23 医学部附属病院入院棟 A 出土遺物組成表、観察表、遺物図版作成、事実記載、写真撮影
- ・本郷 24 医学部教育研究棟遺構図版作成
- ・本郷 25 医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場出土遺物写真撮影
- ・本郷 28 薬学部資料館遺構図版作成、出土遺物接合、実測、デジタルトレース、図版作成、写真撮影
- ・本郷 54 総合研究棟（文・経・教・社研）出土遺物デジタルトレース、遺物図版、観察表作成、事実記載
- ・本郷 55 医学部附属病院第2中央診療棟出土遺物デジタルトレース、写真撮影
- ・本郷 60 医学部附属病院基幹整備外構施設等出土遺物接合、実測、デジタルトレース、観察表作成
- ・本郷 65 法学系総合研究棟出土遺物デジタルトレース、図版作成、事実記載、写真撮影
- ・本郷 68 インキュベーション施設出土遺物実測
- ・本郷 82 懐徳門遺構図版作成、出土遺物デジタルトレース、図版作成、事実記載、写真作成
- ・本郷 93 伊藤国際学術研究センター出土遺物復元
- ・その他、出土自然遺物（動物骨、魚骨、貝殻）の整理に関しては阿部常樹氏に依頼した。

2. 外部委託

(1) 基礎整理

- ・本郷 78 情報学環・福武ホール SK10 出土遺物の基礎整理（分類・接合・抽出）を株式会社 Acube に依頼し、完了した。
- ・本郷 134 工学部3号館施設整備（下水他）出土遺物注記
- ・本郷 71 地震研究所総合研究棟出土遺物接合
- ・本郷 146 アカデミックcommons出土遺物接合

(2) 自然科学分析

- ・本郷 23 医学部附属病院入院棟 A 石材、銭貨鑑定を依頼し、完了した。

第2節 調査・研究成果の公開・活用

1. 広報活動

(1) 遺跡見学会

2013年7月16日

浅野地区・弥生地区史跡見学「東大キャンパスの遺跡を訪ねる」(市川博物館友の会考古部会見学会：40名)

2013年10月13日

浅野地区他史跡見学「修復のお仕事展V ワークショップ 向ヶ岡弥生町、忍ヶ岡を巡る」(自由参加：20名)

2013年10月20日

浅野地区史他跡見学「修復のお仕事展V ワークショップ 向ヶ岡弥生町、忍ヶ岡を巡る」(自由参加：8名)

2013年11月22・23日

アカデミックコモンズ現場見学会(参加：1,122名)

2014年2月27日

国際科学イノベーション総括棟新営：金沢城調査研究所より3名来跡

2014年3月30日

浅野地区・弥生地区史跡見学と研究発表(近世考古学研究会：15名)

(2) ホームページ

・『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書11 東京大学本郷構内の遺跡 総合研究博物館新館地点』、『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書12 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院受変電設備棟地点』、オンライン版、発掘調査速報、遺跡見学会案内、調査室所蔵遺物学外展示などを掲載した。

2. 資料の提供・貸出

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料(資料 / 出土地点略称 / 遺構) ^{*1}
2013	東京国立博物館	貸出	平成館考古展示室常設展 資料展示	1. 色絵大皿片(伊万里・古九谷様式)/HW/包含層 2. 色絵亀甲文皿片(伊万里・古九谷様式)/HW/C2層 3. 染付吹墨鷲図皿片(伊万里)/HHC/L32-1 4. 色絵花卉文大皿片(伊万里・柿右衛門様式)/HGS/391号 5. 染付八宝文大皿片(景德鎮窯)/HGS/包含層 6. 白釉鉄絵人物草花文壺片(磁州窯)/HGS/包含層、U/包含層 7. 色絵福字鉄片(呉須赤絵)/HGS/包含層 8. 織部脚付平向付片(美濃)/HGS/46、532号 9. 織部筒向付片(美濃)/HGS/包含層 10. 染付脚付向付片(景德鎮窯)/HGS/包含層 11. 染付八角瓢形徳利片(景德鎮窯・祥瑞)/HGS/6785 12. 染付水注蓋片(景德鎮窯)/HGS/包含層 13. 色絵皿片(景德鎮窯)/HGS/496、185 14. 黄地緑彩鉢片(大明嘉靖年製)/HW/C2層 15. 色絵壺片/HW/C2層、包含層 HGS/6175 16. 色絵大皿片(呉須赤絵)/HGS/6785 17. 黒釉兔毫斑碗片(建窯)/HN/SK299 18. 染付小坏(五良大甫呉祥瑞造)(景德鎮窯)/HGS/包含層 19. 魚屋茶碗片/HN/SK299 20. 青磁袴腰形香炉片(龍泉窯)/HN/SK299 21. 青磁獅子紐香炉蓋片(龍泉窯)/HN/SK299 22. 青磁算木文瓶片(龍泉窯)/HN/SK299 23. イズニク陶器破片/HW/C2層、SD422 24. 塩釉水注片(ドイツ)/HN/SK299 25. デルフト陶器片/HGS/包含層 U/包含層
	国立歴史民俗博物館	貸出	総合展示「都市の時代」資料展示	1. 灰釉碗(呉器手)/HW/D面焼土 2. 灰釉鉄絵碗(京焼風)/HW/D面焼土 3. 青緑釉輪剥皿(内野山窯)/HW/D面焼土 4. 染付皿(草花文)/HW/D面焼土 5. 染付皿(菊文)/HW/D面焼土 6. 輪剥皿/HW/D面焼土 7. 三島手鉢/HW/D面焼土 8. 染付大皿(網干文)/HGS/618号 9. 染付大皿(海浜文)/HGS/678号 10. 染付瓶(草花文)/HGS/537号 11. 染付組皿(草花文)/HGS/537号 12. かわらけ/HHC/池 13. 木製品(折敷)/HHC/池 14. 木製品(はし)/HHC/池 15. 金泥かわらけ/HIKN/SK4516
	東京都江戸東京博物館	貸出	常設展示「武士の暮らし・町の暮らし」資料	1. 裸人形/HHC/U48-2 2. 童子/HHC/3号組石 3. 唐人/HHC/F33-3 4. 西行/HHC/F34-11 5. 座位の猿/HHC/Z35-5 6. 犬/HHC/V46-3 7. 雉/HHC/E22-1 8. 鯉/HHC/AL37-1 9. 瓢箪/HHC/AJ37-2 10. 植木鉢/HHC/AJ34-1 11. 銚子/HHC/AE35-3 12. 浅鉢/HHC/K30-1 13. 搦鉢/HHC/AD35-1

第1部 2013年度調査室事業概要

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料(資料/出土地点略称/遺構) *1
2013	東京都江戸東京博物館	貸出	常設展示「武士の暮らし・町の暮らし」資料貸出	14. 茶釜 /HHC/ 遺構外 15. 茶釜の蓋 /HHC/Y34-4 16. 城門 /HHC/2号組石 17. 城壁 /HGS/49 18. 向付 /HHB/E7-3号土坑 19. 片口 /HHC/F33-3 20～23. 急須 /HGS/7号 24～25. 土瓶 /HGS/7号 26～27. 皿(磁器) /HGS/1号 28. 皿(磁器) /HHC/X37-1 29. 皿(陶器) /HHC/H21-2 30. 行平 /HHC/AE36-3 31～32. 行平 /HHC/H21-1 33, 34. 酒杯 /HS7/14号・54号土坑、遺構外 35～37. 猪口 /HHC/H21-2 38, 39. 爛徳利 /HHC/AJ34-1, 7号 40～42. 貧乏徳利 /HS7/63号土坑、75号土坑 43. 箸 /HHC/池 44～49. 焼塩壺 /HS7/9号地下式土坑、遺構外、83号土坑、4号井戸、13号地下式土坑、1号土坑 50～51. 焼塩壺(蓋) /HS7/1号土坑、3号井戸、120号土坑 52. 風炉 /HS7/11-16号地下土坑 53～54. 火鉢 /HHC/H21-2, E21-1 55～58. 火箸 /HHC/G20-2, X36-5, G36-2, 2号組石 59. 五徳 /HGS/7号 60. 火鉢 /U/105号 61. 温石 /HGS/ 62. 煙管 /HGS/532 63. 灰落し /HHC/G26-1 64. 火入れ /HHC/2号組石、AJ35-1 66～67. 硯 /HGS/ 68. 水滴 /HHC/Y37-4 69～72. 小柄 /HGS/ 73～76. 切羽 /HGS/ 77. 刀子 /HGS/384 78～81. 砥石 /HS7/6号地下式土坑、7・8号地下式土坑、63号土坑、HGS/ 82. 碁石 /HGS/ 83～85. さいころ /HGS/, HHC/Y34-4 86. 箆 /HGS/678号 87～89. 植木鉢 /HHC/AJ35-1, AE35-3 90. ～91 下駄 /HHC/池 92. 銭貨 /HS7/19号地下式土坑
	出光美術館	貸出/掲載	企画展「古染と祥瑞－日本人が愛した<青>の茶陶－」資料展示、図録掲載(会期 2013年5月25日～6月30日)	1. 景德鎮色絵碗/HW/SU327 2. 景德鎮色絵変形皿/HW/SK2245ほか 3. 景德鎮色絵皿/HW/SK2245ほか 4. 景德鎮染付釉裏紅変形皿/HW/SK2457ほか
	江戸東京博物館	掲載	特別展「花開く江戸の園芸」図録掲載(会期 2013年7月30日～9月1日)	1. 植木鉢(白鏝) /HHC/AE35-3 2. 植木鉢(黒鏝) /HHC/AE35-3
	創樹社美術出版	掲載	小木一良『鍋島誕生－物証でみる制作窯と年代－』創樹社美術出版 2013年8月発行	1. 古九谷色絵小皿陶片 /HHC/L32-1 2. 縄陽刻竹葉形文向付陶片 /HHC/L32-1 3. 瑠璃陽刻文変形小皿陶片 /HHC/L32-1 4. 初期伊万里菊花文中皿陶片 /

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料(資料/出土地点略称/遺構) ^{*1}
2013	都市出版	掲載	谷口榮「近世都市江戸出現前後の地下利用」『東京人』10月号	1. 調査状況写真 /HW/SK3
	(有) 武蔵野文化財修復研究所	掲載	芸工展「修復のお仕事展Ⅴ」パネル展示 (会期 2013年10月13日～10月20日)	1. 剪定ばさみ一式 /OKS07/SK249
	(財) 小原流	掲載	平野恵「日本の園芸文化と温室の歴史」『小原流挿花』11月号	1. 地下室写真 /OKS07
	文京区役所	掲載	根津神社「はしまつり」パネル展示 (開催日 2013年10月14日)	1. 浅野地区見学会風景写真 2. 壺形土器 /TS/1号方形周溝墓 3. ガラス小玉 /TS/1号方形周溝墓
	平凡社	掲載	成瀬晃司「考古学からみた江戸の酒事情」『HUMAN』第5号	1. 本郷構内遺跡出土 徳利集合写真
	吉川弘文館	掲載	古泉弘編『事典 江戸の暮らしの考古学』 (2013年11月発行)	1. 白木折敷・箸・かわらけ /HHC 2. 肥前染付扇面文六寸皿 /HW 3. 唐物茶道具 /本郷構内遺跡 4. 能舞台写真 /本郷構内遺跡 5. 食物残滓 /本郷構内遺跡 6. 埋桶・埋柝式便槽写真 /本郷構内遺跡 7. 埋壺式便槽 /本郷構内遺跡 8. 包丁 /FE1 9. 獣骨集積写真 /本郷構内遺跡 10. 灯茺 /本郷構内遺跡 11. 乗燭 /本郷構内遺跡 12. 瓦灯 /本郷構内遺跡 13. 灯籠と乗燭 /本郷構内遺跡 14. 火切板 /HHC/池 15. 飯事道具 /K14 16. 麴室写真 /HJF06 17. 肥前色絵磁器人形 /本郷追分
	朝日新聞	掲載	朝日新聞朝刊石川版、朝日新聞デジタル (2013年11月28日付)	1. 調査風景写真 /HAC13 2. トイレ遺構・遺物写真 /HAC13
	文京ふるさと歴史館	掲載	『ぶんきょうの史跡めぐり』 (2014年3月発行)	1. 調査風景写真 /TS 2. 壺形土器 /TS/1号方形周溝墓 3. ガラス小玉 /TS/1号方形周溝墓 4. 地下室(氷室)写真 /HEA07/SU107
	木越 隆三	掲載	『城郭石垣と石切丁場の調査・研究』 (2014年3月発行)	1. 現存石垣と石組検出図 /本郷構内遺跡 2. 懐徳門周辺石垣写真 /本郷構内遺跡 3. 懐徳門地点藩邸境界石垣写真 / 4. 能舞台写真 /本郷構内遺跡 5. 食物残滓 /本郷構内遺跡 6. 埋桶・埋柝式便槽写真 /本郷構内遺跡 7. 埋壺式便槽 /本郷構内遺跡 8. 包丁 /FE1 9. 獣骨集積写真 /本郷構内遺跡 10. 灯茺 /本郷構内遺跡 11. 乗燭 /本郷構内遺跡 12. 瓦灯 /本郷構内遺跡 13. 灯籠と乗燭 /本郷構内遺跡 14. 火切板 /HHC/池 15. 飯事道具 /K14 16. 麴室写真 /HJF06 17. 肥前色絵磁器人形 /本郷追分
	小林 克	掲載	江戸東京博物館セミナー「近世考古学講座Ⅱ 飲み物と食」配付資料 (開催日 2014年3月19日)	1. 貧乏徳利集合写真 /FE1/SK1 2. 貝類写真 /HS7/SK2 3. フグの骨写真 /本郷構内遺跡 4. 木簡・折敷・箸・かわらけ写真 /HHC/池

第1部 2013年度調査室事業概要

*1 調査地点名

FE1：工学部1号館

HAC13：アカデミックコモンズ

HEA07：経済学研究科学術交流棟

HGS：御殿下記念館

HIKN：医学部教育研究棟

HHB：法学部4号館（法）・文学部3号館（文）

HHC：医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）

HIKN：医学部教育研究棟

HJF06：情報学環・福武ホール

HN：医学部附属病院看護師宿舎

HW：医学部附属病院入院棟A

HS7：理学部7号館

K14：工学部14号館

OKS07：追分国際宿舎

TS：工学部武田先端知

U：山上会館

第3節 室員研究・活動報告

堀内 秀樹

【科研費など外部競争資金】

- ・科学研究費 基盤研究 (C) 『都市江戸の貿易陶磁器需要と地域間貿易ネットワークに関する総合的研究』平成23年度～25年度

【著書・論文・研究ノート】

- ・堀内秀樹他『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集(1)』2013年9月28日、近世貿易陶磁器調査・研究グループ
- ・「基調報告」『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』pp.7-23、2013年9月28日
- ・「江戸遺跡出土の明末・清初の貿易陶磁器」『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』pp.161-172、2013年9月28日
- ・「『加賀藩前田家表御納戸御道具目録帳』に記された貿易陶磁器」『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』pp.215-224、2013年9月28日
- ・加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器－『加賀藩前田家表御納戸御道具目録帳』を中心として－『貿易陶磁研究』NO.33 pp.59-74、2013年9月28日、日本貿易陶磁研究会
- ・「第4章第1節 六所家敷地内 SE 2 出土陶磁器の様相」『六所家総合調査報告書 埋蔵文化財』pp.61-66、2014年3月31日、富士市教育委員会

【研究発表・講演・講座】

- ・2013年4月20日
「江戸の考古学」山梨県立考古博物館協力会講演
- ・2013年6月5日
「江戸城・大名藩邸出土の中国陶磁」出光美術館講演会
- ・2013年7月15日
「加賀藩上屋敷の発掘調査－工学部3号館地点－」江戸遺跡研究会第140回特別例会
- ・2013年7月4日
「江戸時代の武家儀礼と出土した器」明治大学博物館友の会
- ・2013年8月29日
「考古学資料からみる江戸の飲と食－行為と普及－」日本食生活文化財団セミナー
- ・2013年10月26日
「近世考古学の最前線－江戸の発掘状況－」日本大学史学会例会
- ・2013年11月18日
「江戸の漳州窯系陶磁器需要とその背景－出土事例の分析から－」中国漳州窯研究会・中国古窯調査研究会
- ・2013年11月30日
「出土資料からみた清朝陶磁器の国内需要」京都国立博物館土曜講座
- ・2014年1月19日
「出土遺物からみえる江戸の暮らし」神奈川県立歴史博物館特別講演

・2014年3月12日

「江戸遺跡研究の進展と豊島区の遺跡調査」「豊島区の遺跡と江戸遺跡研究のいま」平成25年度文化財講座

成瀬 晃司

【著書・論文・研究ノート】

・「考古学からみた江戸の酒事情」『HUMAN』vol.5、pp.48-55、2013年12月4日、平凡社

・「発掘された大名屋敷」pp.12-15、「大名屋敷の装置」pp.16-19、「門と格式」pp.20-22、「全貌が明らかになった御殿」pp.22-26、「拡張された御殿」pp.26-31、「宴と饗応に用いられた品々」pp.40-42、「船着場・船入場」pp.43-45、「大名と趣味」pp.46-48、「大名が自邸で作らせた御庭焼」pp.49-52、「下級武士たちの屋敷」pp.57-60、「国元からもたらされた品々」pp.61-62、「国元の味」pp.63-64、「建築資材としての土」pp.117-118、「厠」pp.119-120、「食器の組み合わせ」pp.168-171、古泉弘（編）『事典江戸の暮らしの考古学』2013年12月20日、吉川弘文館

・「加賀藩邸」『城郭石垣と石切丁場の調査・研究』pp.23-26、2014年3月、石川県金沢城調査研究所

小松 愛子

【著書・論文・研究ノート】

・「寛永寺貸付金をめぐる一考察」東京大学日本史学研究室紀要別冊『近世社会史論叢』2013年、pp.369-386

・「富山城下町遺跡主要部（西町南再開発地区）出土木簡について」『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書－西町南地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』、富山県教育委員会埋蔵文化財センター、2014年、pp.144-145、（鹿島昌也氏らと共著）

【研究発表・講演・講座】

・2013年5月26日

「加賀藩江戸藩邸で出土した富士山宝永火山灰の意義」日本考古学協会79回総会、（原祐一氏ほか共同発表）

・2013年7月21日

「旧加賀藩上屋敷に降灰した富士火山1707噴火（宝永噴火）火山灰の保存・活用と火山灰発見の意義」文化財保存修復学会35回大会、（原祐一氏ほか共同発表）

・2013年7月22日

書評 吉田伸之著『伝統都市 江戸』、都市史研究会例会

・2013年8月30日

「寺社奉行」早稲田大学オープンカレッジ・オムニバス講座『武士のお仕事』（江戸幕府編）

・2013年10月12日

「大多喜藩士・天野家について」第18回江戸と千葉研究会、千葉市郷土博物館

・2013年11月23日

‘Official Purveyors and Retailers who Handled the Demands of Daimyo Retainers in Edo’
Espaces, Statuts et Institutions: Perspectives Franco- Japonaises en Histoire Urbaine, Université Paris IV Sorbonne（「江戸の御用達町人・出入町人」日仏二国間交流－空間・身分・制度－日仏都市史のパーспекティヴ－）

・2014年3月14日

「賄方役人」早稲田大学オープンカレッジ・オムニバス講座『武士のお仕事』〈江戸幕府編〉

原 祐一

【受賞】

・2013年10月27日

平成25年度 日本造園学会関東支部大会 東京農業大学

「水戸藩駒込邸庭園の造園と借景に関する一考察」奨励賞受賞

【著書・論文・研究ノート】

・「立原杏所筆『向崗花甸図屏風』とワークショップの報告」『第22回 芸工展2012参加企画 修復のお仕事展Ⅳ～伝えるもの・想い～ 報告書Ⅳ』pp.13-17、あくさいず

・「富山藩江戸屋敷を巡る」『富山市の遺跡物語』富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報No.15、pp.44-53、富山市教育委員会埋蔵文化財センター

【研究発表・講座】

・2013年5月25日

「加賀藩江戸藩邸で出土した富士山宝永火山灰の意義 近世考古学と火山学の観点から」一般社団法人日本考古学協会第79回（2013年度）総会

・2013年7月6日

「旧加賀藩江戸藩邸で発見された富士火山1707年噴火（宝永噴火）の降下火山灰発見の意義」日本文化財科学会第30回大会（連名 原祐一、藤井敏嗣、小松愛子、堀内秀樹、宮地直道）

・2013年7月20日

「旧加賀藩上屋敷に降灰した富士火山1707年噴火（宝永噴火）火山灰の保存・活用と火山灰発見の意義」文化財保存修復学会第35回大会（連名 原祐一、堀内秀樹、小松愛子、藤井敏嗣）

「東京大学工学部武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓の保存 保存資料をどう活用するか」文化財保存修復学会第35回大会（連名 原祐一、石原道知、堀江武史）

・2014年3月30日

「不忍池を中心に配置された大名藩邸の造園法に関する一考察 水戸藩駒込邸を中心に」近世考古学研究会

追川 吉生

【研究発表・講演・講座】

・2014年3月8日

『遺跡から探る江戸の食生活』川崎市川崎市民ミュージアム博物館講座

・2014年3月17日

『紹介日本近世都市考古学最新成就 —以17世紀遺物組合を中心—』国立臺南藝術大學文博學院 藝史系

・2014年3月21日

『日本近世都市考古学最新成就 —以東京的江戸文化遺存を中心—』国立臺灣大學人類學系

附 東京大学埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年3月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第17条 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年7月11日制定）

東京大学埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

（設置）

第1条 キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- （1） 遺跡調査に対する総括的指導助言
- （2） 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- （3） 遺物等の保管及び管理
- （4） 遺跡調査の方法に関する調査研究
- （5） 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則 この規則は、平成22年4月1日から施行する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	大貫 静夫
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内 秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬 晃司
室員（人文社会系研究科特任助教）	小松 愛子
室員（キャンパス計画室助手）	原 祐一
室員（キャンパス計画室助手）	大成 可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川 吉生
教務補佐員	香取 祐一
教務補佐員	小川 祐司
事務補佐員	青山 正昭
事務補佐員	相川 美香子（2013年4月～）
事務補佐員	今井 雅子
事務補佐員	大貫 浩子
事務補佐員	小林 照子
事務補佐員	杉浦 あかね
事務補佐員	田中 美奈子
事務補佐員	渡邊 法彦

第 2 部 2014 年度調査室事業概要

第I章 埋蔵文化財調査の概要（事前・試掘・立会）

2014年度は、本郷地区、駒場地区において、以下の通りの調査を実施した。

本郷地区では、事前調査が前年度から継続中の本郷125クリニカルリサーチセンターA棟I期、本郷113医学部附属病院入院棟II期3次を含めて6件、試掘調査が5件、立会調査が21件を行った。このうち次年度にまたがって継続している調査は、事前調査の本郷182医学部附属病院CRC棟ほか外構設置である。

事前調査を行った本郷125クリニカルリサーチセンターA棟I期は、旧石器時代、縄文時代（配石遺構、陥穴など）、古墳時代（住居跡5棟など）、江戸時代（加賀藩本郷邸、富山藩邸）、本郷113医学部附属病院入院棟II期3次は、縄文時代、古墳時代（住居跡4軒）、中世（井戸跡1基）、江戸時代（加賀藩本郷邸、富山藩邸）、本郷146・168アカデミックcommonsは、旧石器時代、縄文時代（ピット・土坑5基）、江戸時代（加賀藩本郷邸、町屋）、近代（東京帝国大学）、本郷169文系総合研究棟は、縄文時代、江戸時代（加賀藩本郷邸）、本郷178農学部6号館改修工事は、江戸時代（水戸藩駒込邸）の遺構、遺物が出土している。

〈事前調査〉

- ・継続（2014年1月14日）～7月23日、8月18～21日 本郷148国際科学イノベーション総括棟新営
- ・継続（2012年12月17日）～2014年9月12日 本郷125クリニカルリサーチセンターA棟I期（担当：追川・小川）
- ・継続（2014年2月5日）～2015年2月19日 本郷113医学部附属病院入院棟II期3次（担当：成瀬・小川）
- ・2014年8月13日～10月31日、11月25日、12月10、12日 本郷168アカデミックcommons2次（担当：堀内・清水）
- ・2014年10月14日～11月5日 本郷169文系総合研究棟（担当：堀内・香取）
- ・2015年1月7～9日 本郷178農学部6号館改修工事（担当：原）
- ・2015年3月16日～継続 本郷182医学部附属病院CRC棟ほか外構設置（担当：追川）

〈試掘調査〉

- ・2014年4月9～11日 本郷160文系総合研究棟（担当：堀内）
- ・2014年5月16、19日 本郷153理学部1号館とりこわし工事・理学部1号館（Ⅲ期）新営（担当：原・清水）
- ・2014年6月23、27日、7月3、4、10日、8月12日 本郷162工学部4号館改修その他工事（担当：原）
- ・2015年1月6、7日 本郷177工学部1号館前広場シダレザクラ移植（担当：香取）
- ・2015年1月6、7日、2月18日 本郷179安田講堂前広場の整備（担当：香取）

〈立会調査〉

- ・2014年4月7日 本郷159弓道場脇フェンス（担当：堀内）
- ・2014年4月22日 本郷161懐徳館庭園給水引き込み工事（担当：原・清水）

- ・2014年6月4日 本郷163 法文2号館給水管改修（担当：堀内）
- ・2014年6月5日 本郷164 イノベーション棟現場事務所（担当：追川）
- ・2014年7月3日 本郷165 弓道場テント基礎移設（担当：清水）
- ・2014年7月15日 本郷166 農学部門衛所漏水対応（担当：原）
- ・2014年7月30日 本郷167 安田講堂花壇漏水対応（担当：小川）
- ・2014年11月21日、2015年1月13、14日 本郷170 七徳堂改修外構工事（担当：成瀬）
- ・2014年9月4日 本郷171 図書館横仮設建物建設に伴う舗装石除去（担当：堀内）
- ・2014年11月21日 本郷172 第二食堂前カーゲート付近舗装改修（担当：成瀬）
- ・2014年12月19日 本郷173 医学部附属病院第二中央診療棟前車道バリカー設置工事（担当：成瀬）
- ・2014年12月22日、2015年1月20、21日 本郷174 本郷キャンパスバリアフリー関係整備工事（担当：成瀬）
- ・2014年11月26日 本郷175 図書館仮設キュービクル設置（担当：清水）
- ・2014年12月2日 本郷176 ネットワーク監視カメラ設置（担当：清水）
- ・2015年1月15日 本郷180 生物環境ガラス温室（担当：原）
- ・2015年1月21日、2月3日 本郷181 農学部グランド門扉改修（担当：香取）
- ・2015年2月6日 本郷183 地震研究所北側囲障改修工事（担当：原）
- ・2015年2月16日 本郷184 上野英三郎博士とハチ公（仮）台座（担当：原）
- ・2015年2月20、23、24日 本郷185 バス通り誘導ブロック整備その他工事（担当：成瀬）
- ・2015年2月23、24日 本郷186 薬学本館埋設管工事（担当：小川）
- ・2015年3月16日 本郷187 工学部船舶運動性能試験水槽埋設配管工事（担当：清水）

駒場I地区では、3件の立会調査を行った。

〈立会調査〉

- ・2014年9月4、8、10日 駒場I 28 教養学部並木通り根上り対策工事（担当：大成）
- ・2014年11月29日 駒場I 29 電話交換機設備更新工事（担当：堀内）
- ・2015年2月3、12、23日、3月10日 駒場I 30 教養学部並木通り舗装改修工事（担当：大成）

第1節 本郷構内の事前調査

1. 本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期3次 (HHWB12)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1

調査期間 平成26年2月5日～平成27年2月19日

調査面積 780㎡

調査担当 成瀬 晃司 小川 祐司

1. 調査の経緯と経過

入院棟Ⅱ期新営に関する建設工事が契約され、躯体部の根切り範囲及び外構関連工事範囲など本件に関する全ての調査範囲が確定したことを受け、3次調査を実施することになった(1図)。今回は建築範囲東部、南部および北西部が対象となったが、昨年までの調査と異なり、既調査区における建築工事の工程に合わせ順次実施していくこととなり、北西側調査区をC3区、南側調査区をD2、3区、東側調査区をF1、F2N、F2S区と分割して実施した(2図)。

南側D2区は、躯体に掛かる既存下水配管を入院棟A側に盛替える工事に伴う調査で、新設配管部分を2月5日～4月15日にかけて、盛替え後の既存配管下部を5月2日～6月30日に、さらに地山レベルが下がるAS31・32グリッドでは、既存配管に接続する人孔の養生工事の完了を受け、11月12日～12月3日にかけて実施した。

南東部D3区は、山留め杭の打設、既存配管の養生など一連の工事の完了を受け、11月28日に調査を開始し、翌年の1月22日に終了した。

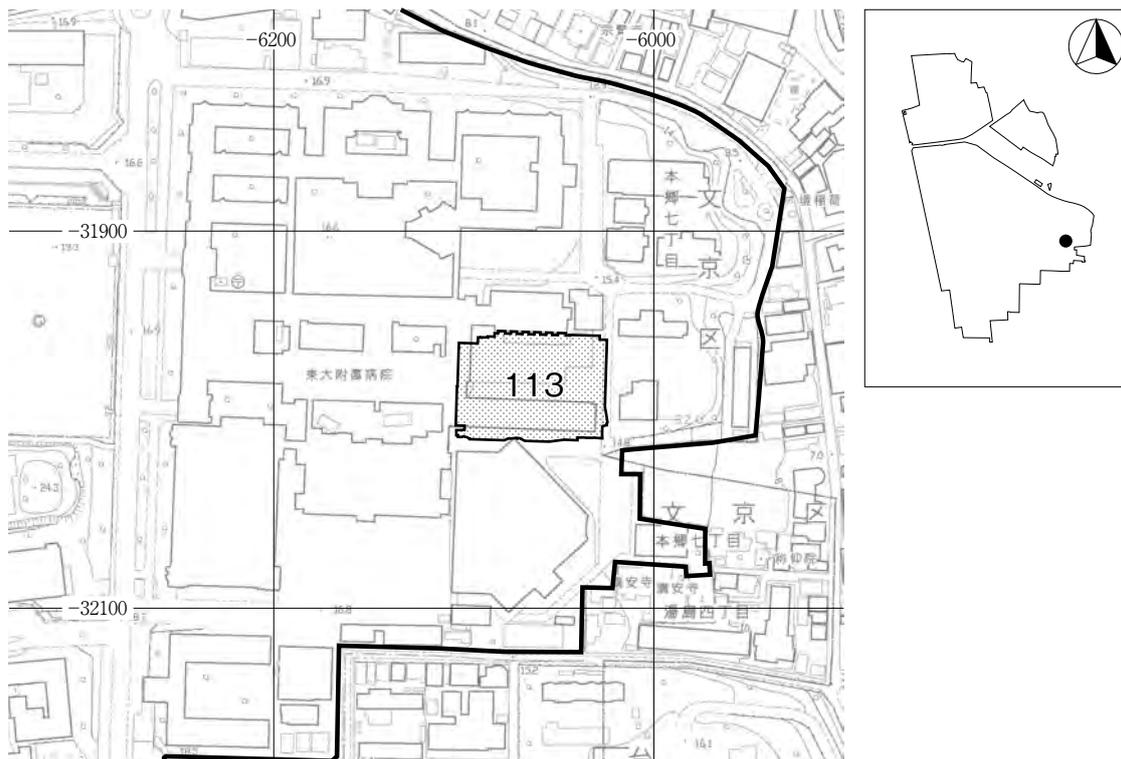
北西部C3区は既存建物の解体終了を受けて、7月2日～4日かけて調査を実施した。

東側F区では、地中杭の打設工事の進捗に伴い、車両導線のスロープが南側に付け替えられたことを受け、5月28日よりF1区とした北東部分の調査を開始し、8月7日に終了した。その後、調査が終了したF1区側へのスロープ付け替えを待ち、9月11日より南側F2区の調査を開始したが、AOライン南側では(F2S区)、人孔、共同溝など地中障害物の解体工事や、一昨年の調査で確認された埋没谷への対応による山留め杭打設と、それを補強する火打ち、腹起こしなどの養生関連工事が行われたことから、調査は度々中断し、翌年の2月19日に終了した。

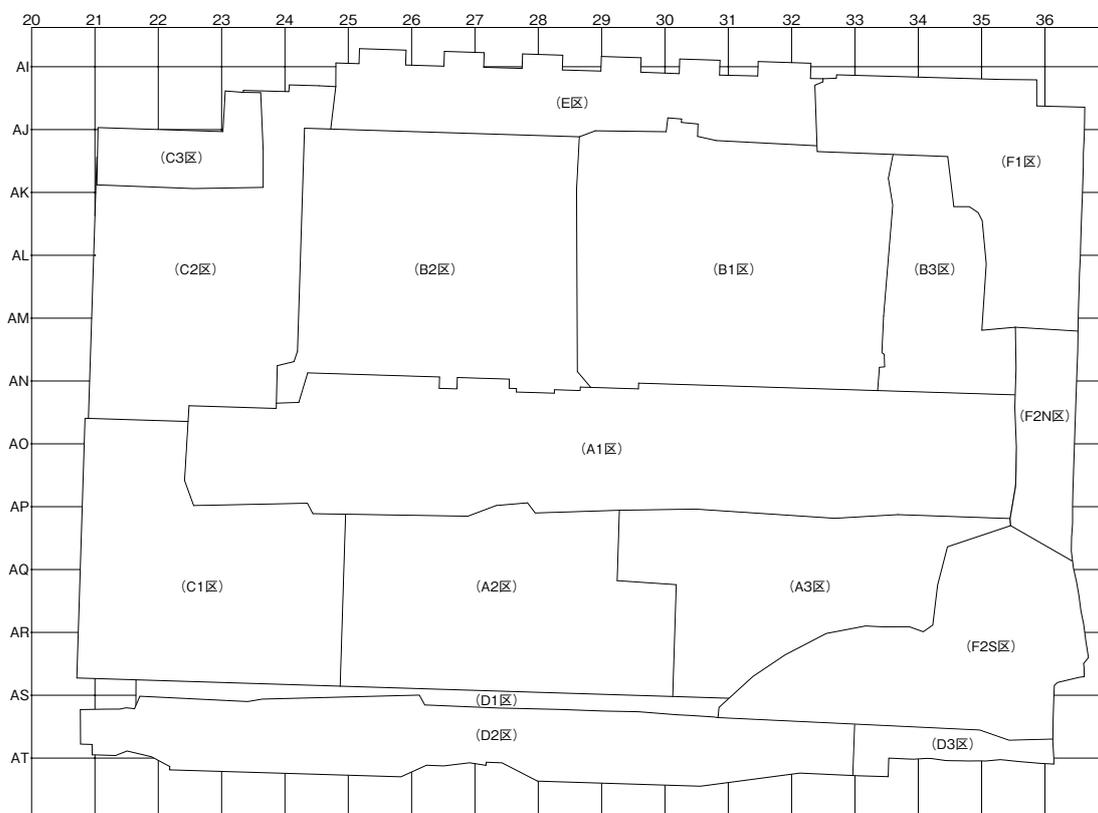
2. 調査の方法と概要

調査区には5mメッシュのグリッドを設定した。グリッドは1、2次調査を踏襲し、グリッド番号は医学部附属病院立体駐車場地点(本91)からの続き値となっている。ただし、立体駐車場地点の座標値は、2001年8月の構内地上点(文京区多角点測量点)を既知点とした結合多角測量成果を用いているが、2011年12月に実施したGPS測量で、構内地上点の座標値に誤りがあることが確認された。本地点の座標値は2011年12月の測量成果を基準にしたことから、立体駐車場地点グリッド座標値とはX軸で+0.255mm、Y軸で+0.627mmのずれが生じている。

今回の調査では、江戸時代の加賀藩下屋敷及び富山藩上屋敷に関する柵列、溝、地下室、石垣、井



1 図 調査地点の位置



2 図 調査区区分図 (1/600)

(1次調査：A・B・C1区 2次調査：C2・D1・E区 3次調査：C3・D2・D3・F区)

戸、礎石建物、植栽痕などと藩邸開発に関する盛土及び切土造成痕跡、中世の井戸、古墳時代の竪穴住居と遺物、縄文時代の遺物が確認された。以下、時代毎に概略する。

(1) 縄文時代

本地点南東域には、入院棟 A 地点で確認され、台東区茅町二丁目遺跡方向へ開く埋没谷北斜面が存在する。谷は本地点南東角付近で、入院棟 A 地点から続く東北東方向から、茅町二丁目遺跡へ続く東南東方向へと変換することが確認された(3図)。そのため35区では概ね南方向への傾斜が窺え、AQからATラインまでの15m間のローム面標高差は約5mを測り、最大約3mの沖積層が認められた。

旧地形上からは江戸以前に比定されるピットが十数基検出されているが、いずれも関連性は認められず、詳細な年代も不明である。谷地形内では、いわゆる淡色黒ボク土が明瞭に確認されるが、その直下の黒色土層より、流れ込みと考えられる条痕文土器小片が1点出土した。本地点北東方向台地上に位置する本91看護師宿舎地点(現1号棟)、本74Ⅲ期地点(現5号棟)では、縄文時代の屋外炉が検出されており、関連性を窺わせる資料と推定される。

(2) 古墳時代

AI32～AL36グリッドにかけて、古墳時代前～中期に比定される竪穴住居を4軒検出した(3図)。いずれも近世以降の攪乱を受け、遺存状況は良好ではない。1次調査で南東角付近を検出したSI19は、今回の調査にて北東角を含む東壁が検出され、東壁の長さが約780cmを測ることが確認された。その結果、1次調査で床面のみが検出されたSI18が、本住居址と同一遺構であることが判明した。また、AK35グリッドで北東角壁が検出されたSI74は、SI20に切られ南壁と床面の一部のみが検出されたSI21の壁溝延長上に位置し、同一遺構の可能性が高い。その場合、1辺長は、約460cmと推定される。

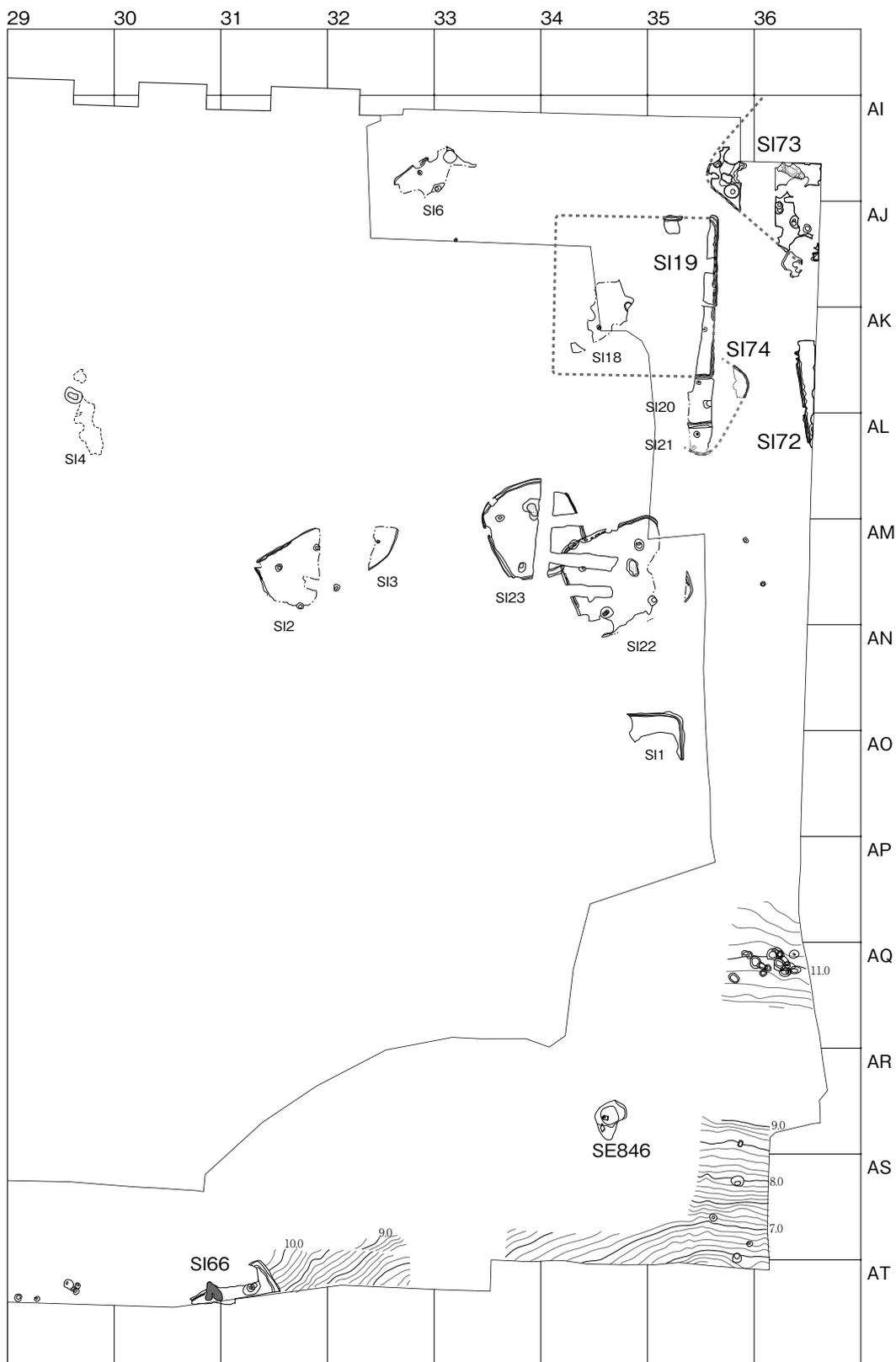
AT30・31グリッドに位置するSI66は、カマドを有する竪穴住居で、古墳時代後期に比定される。大半は調査区外に及び、北壁付近のみを調査した。カマドは近代以降の攪乱によって削平され、左袖が遺存していたにすぎないが、袖内には長胴瓦片が埋設されていた。床面直上には焼土が堆積しており、火災によって廃絶されたと推定される。

(3) 中世

AR34グリッドで井戸跡SE846が検出された(3図)。本グリッド周辺域は、図面上では一昨年に実施した1次調査範囲に含まれるが、旧中央病棟解体時の攪乱がかなりの深さまで及び、それに対応した法面の張り出しによって未調査となっていた区域である。遺構確認面のローム層はかなり削平された状態で、一部に砂礫層が露出している。本遺構は平面形不整形円形を呈し、確認面から約150cmで坑底が検出された。坑底付近の壁面は袋状の膨らみを呈する。坑底直上付近より板碑片が2点出土した。また板碑片は、AL36グリッドにおいてローム層上より検出したSK586、SK613からも出土している。ただし両遺構ともに江戸時代遺構の可能性がある。

(4) 江戸時代

江戸時代の遺構は、対象区域全域から検出されているが、本地点の旧地形が南東部の埋没谷に向けて傾斜していることに加え、各小区が攪乱によって分断されていることから、各小区間の造成土の対比は極めて困難な状況で、今後遺物の検討も加えて行っていく必要がある。よって本報告では、各小区単位でその様相を述べる。



3図 江戸以前の遺構とローム面等高線(1/300)

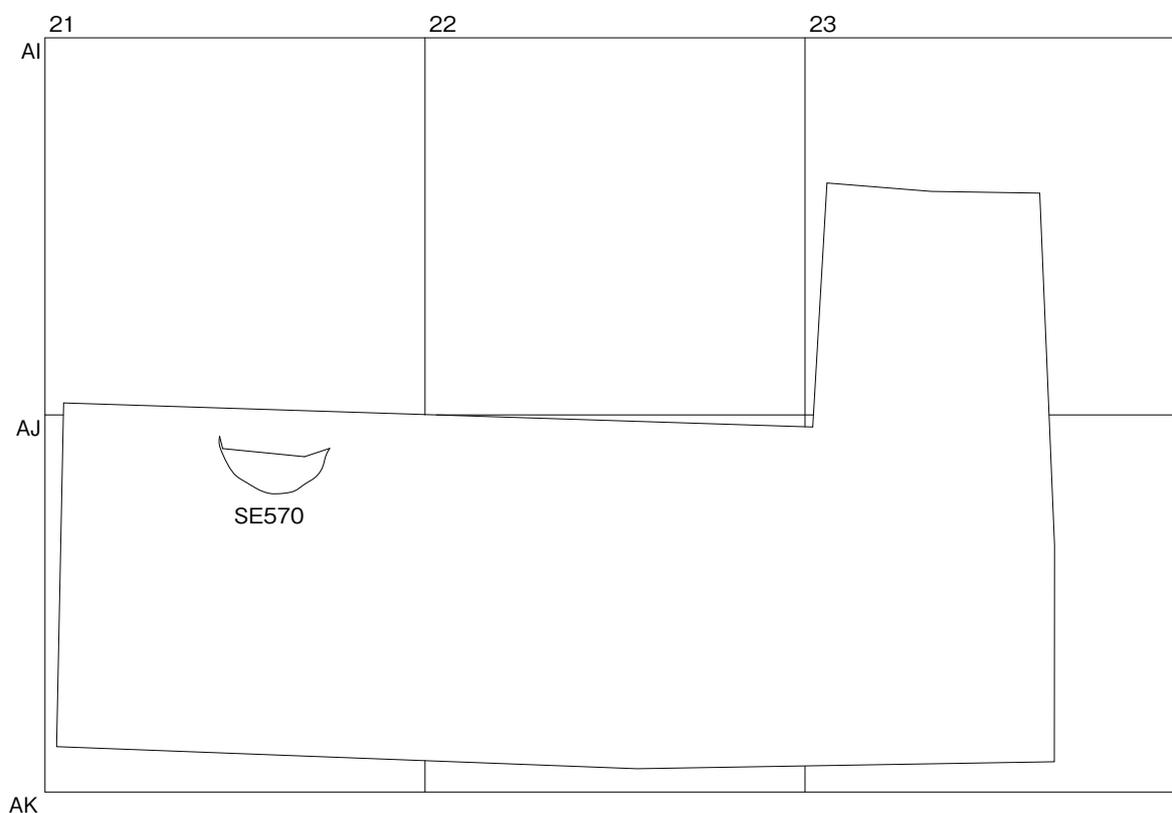
a) C3区

本小区は、昨年度に調査したC2区北側に隣接し、過去のC区同様、中央棟建設時の基礎工事によって、ローム層がかなり削平された状態での調査であった。そのため検出された遺構は井戸1基(SE570)にとどまる(4図)。

b) D2区

本小区は、下水配管盛替えに伴う調査区である。既存下水配管部分は、埋設時にローム層まで削平されており、後述する溝状遺構1基が辛うじて遺存していたにすぎない。盛替え位置に該当する既存下水配管掘方と入院棟A躯体間からは、道路状遺構SR444が検出された(6図)。本遺構は旧地形を一定斜度に削平した上に構築されており、路面は東へ緩やかに傾斜している。土層観察の結果、最大6枚の舗装面を確認した。造成土中にはほとんど遺物はなく、詳細な構築年代を知ることは難しいが、遺存範囲最西端での最上位路面レベルが、本4医学部附属病院中央診療棟地点で検出された12号組石と6号組石南北部分に挟まれ南北方向に伸びる道路(天和2年の火災を下限とする大聖寺藩邸・黒多門邸間に位置する)の北端路面レベルと近似していることから、それに接続し、概期の絵図に示された、黒多門邸・富山藩邸間を東西に伸びる道路に比定される遺構と考えられる(28図)。

道路下部からは、溝状遺構SD448、SD457、SD452、SD453、SD454が検出された(5図)。そのうちSD448、SD452、SD457は、SD454埋没後に構築された遺構である。SD454、SD453は、断面箱葉研形を呈する溝で、近隣調査区では、本10医学部附属病院外来診療棟地点SD45、入院棟A地点SD803などと同形態である。両遺構は同一軸線上にあり、坑底幅、深さなどの規模、覆土の堆積状況に共通点が認められ、同一時期に機能していたと考えられる。約140cmを測る両遺構間は、土橋状



4図 C3区の遺構(1/100)

の導線であった可能性がある。また主軸方位は全ての溝が、N - 85° - Eを示し、東西方向やや北向きであることから、大聖寺・富山両藩邸および黒多門邸が配置される以前、即ち寛永16(1639)年以前の本郷邸初期開発段階における地境施設と考えられる。本遺構の西側延長上には、中央診療棟地点7号溝が位置し、SD454と同一もしくは関連する可能性が考えられる(27図)。

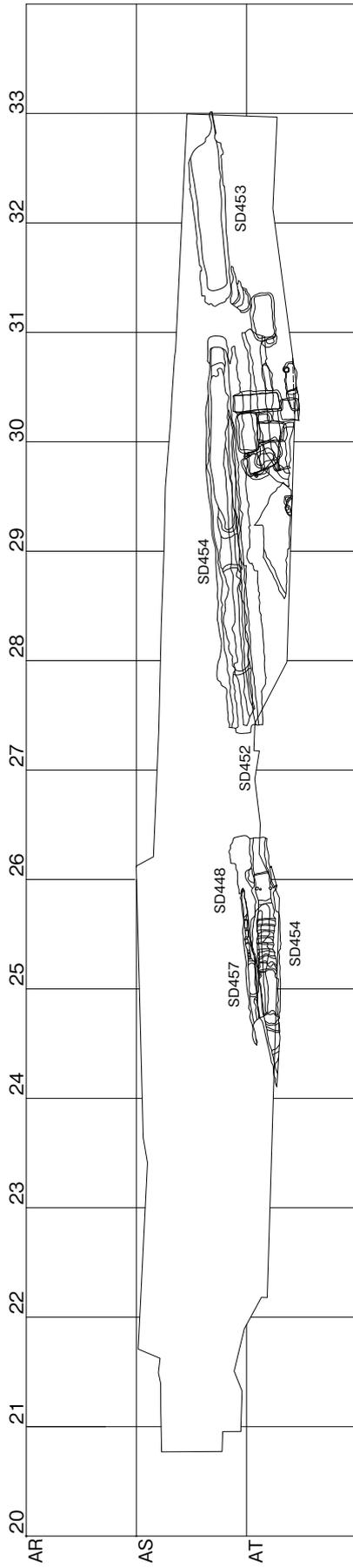
c) D3区

本小区は、D2区東側、盛替え下水配管接続人孔による攪乱の東側を指す。ほぼ下水配管掘方範囲と重なり、遺構調査は掘方坑底以下を対象とした。それより上部は南壁面の観察からの情報に限定され、それもH鋼打設のため断片的なものである。近世の遺構面としてはD3b面～D3e面までの4枚が確認された。以下、確認された遺構面とその概要について記す。

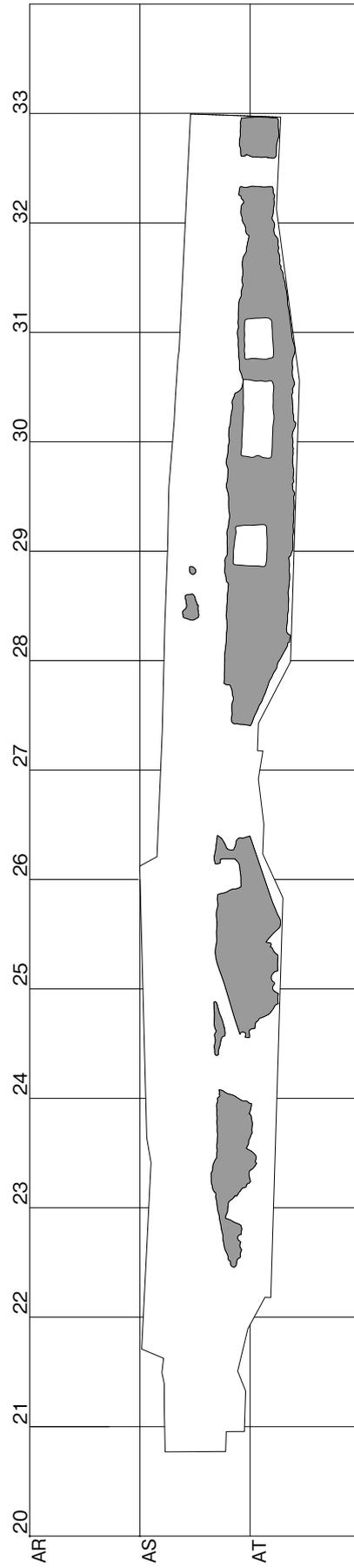
近世最下面としたD3e面では、溝、土坑などが検出された(7図)。SD912は、調査前に解体された中央病棟建設時の基礎工事攪乱によって北側が削平されていたが、断面形箱薬研形を呈する溝と考えられる。主軸方位は、E - 11° - Sを示し、東西方向からやや南傾している。この主軸方位は埋没谷の影響と考えられ、D2区で検出された、SD453、SD454と関連する地境関連施設と考えられる。溝の東側からは土坑が2基検出されているが(SK967、SK969)、いずれも調査区外に及び、溝状遺構の可能性も考えられる。

AT33グリッド北西部で、D2区から続くSR444が確認されたが、東側を大きく掘削した痕跡が認められた(8図)。SR444残存部の最上面レベルは10.65m、最下面レベル10.1mを測るが、この行為によって、その範囲内は約9.2mまで掘削され、SR444は完全に削平されていた。この削平部分における整地面がD3d面である(8図)。本遺構面からは、土坑、桶埋設遺構などが検出された。SK900(AS33グリッド)やSK902(AS34グリッド)の覆土及びAS34グリッド範囲内において焼土層が確認されたことから、本遺構面は火災によって廃絶されたと考えられる。火災年代については後述するが、火災以前のある段階でSR444の東端付近が大きく削平もしくは段切りされ、道以外の機能を有する区域へと変化したことが窺われる。火災後のD3d面上に石積遺構SG898が構築された。築石には間知石が使われている。石面は西を向き、築石間には破碎礫が裏込めされている。南壁内にも間知石が認められ、南北方向の石積みであったことが確認される。石積みの後方は版築状に盛り土され、表面は緩やかに南傾し、35ライン付近でD3d面と繋がる。この新遺構面をD3c面とした。さらにその上に築石を包むようにローム土が盛土され、D3d面からは約80cm嵩上げされる。その結果、SR444削平ライン(33ライン東約120cm)からSG898石面(34ライン東約280cm)間660cmにおいて、周囲より一段下がった生活面が造られた。この段階で、調査区東南角にSK966とした遺構が構築されるが、段切りの可能性もある。SK966埋没後に東側のみローム土による盛土整地が行われ、その直上に焼土層の堆積が認められる。この焼土層は、北側F2S区FS9面上の焼土層に比定され、FS9面焼土関連遺構出土遺物の所見から、元禄16(1703)年の火災層と考えられる。よってD3d面の焼土層はそれよりも古い火災、即ち天和2(1682)年の可能性が高い。よってSR444の東部は、天和2年以前に削平、石積み遺構構築などの土地改変が行われたと考えられる。

元禄16年の火災後にさらに盛土造成が行われるが、35ライン以東は継続して緩斜面となる。その嵩上げによる比高差を補強するためにSG845、SG891が構築された。南壁土層断面の状況から、地盤の嵩上げは数度行われたことが確認され、最終的にはほぼ平準化される。それに伴い石積も増築されていったと考えられる。この石積遺構が文政8(1825)年火災以降の様相を描いた富山藩邸絵図の表門東側の石垣に比定されると考えられる。



5図 D2区7・8面の遺構(1/300)



6図 D2区SR444(1/300)

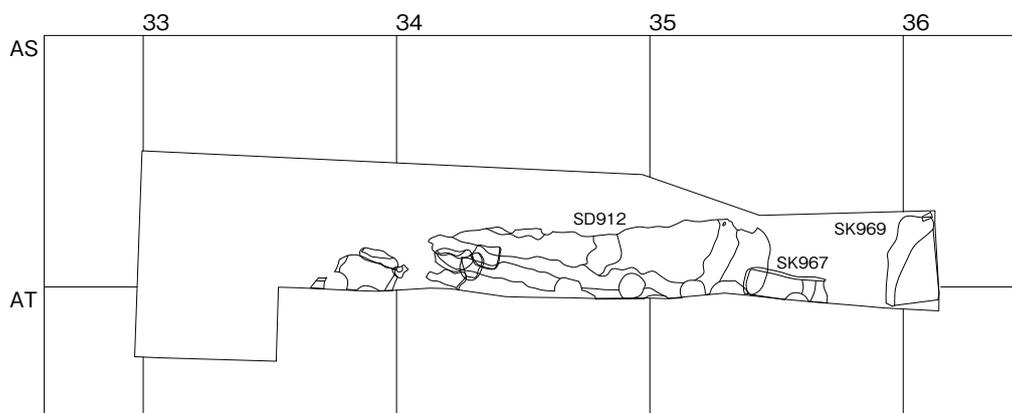
明治以降、周辺低地部の嵩上げに伴って石積は完全に埋没し、その後、築石再利用のためにSX782、SX783が掘削され、上部の築石は全て掘り出された。

d) F1・F2N区

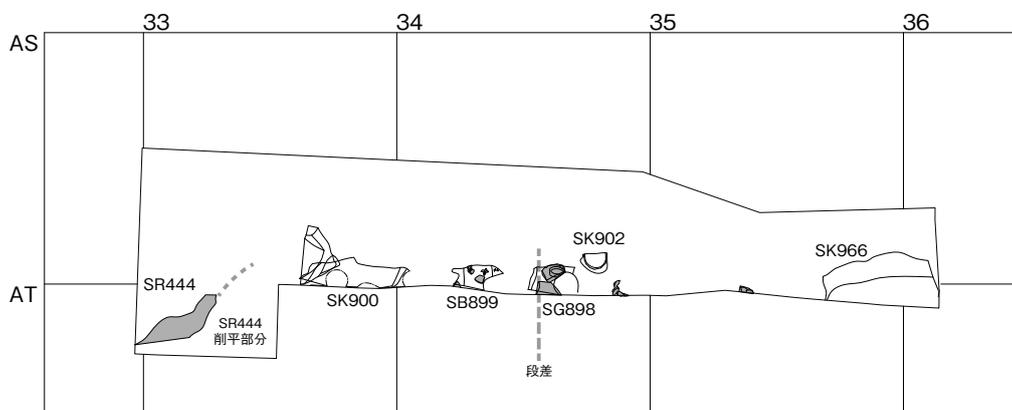
A1区、B3区、E区に隣接する調査小区である。AMライン南側は工程上の理由からF2区としたが、さらにAO～AP区は埋設人孔、共同溝の攪乱を受け、遺構が南北で断絶していること、APライン南側は埋没谷の影響を受け、土地利用状況が北側と大きく異なることから、北側をF2N区、南側をF2S区と細分した。

本小区は既存道路下に位置し、埋設管掘方による攪乱は多々認められたが、地中深く及ぶ攪乱は少なく、比較的良好な遺存状態を留めていた。基本層序はB3区にほぼ等しいが、B3区より遺存状況が良好であったことから、7枚の生活面を確認することができ、F1～F7面と名付けた。B3区遺構面とは、B1面＝F4面、B2面＝F6面、B3面＝F7面に対応する。以下、各遺構面の概要を記す。

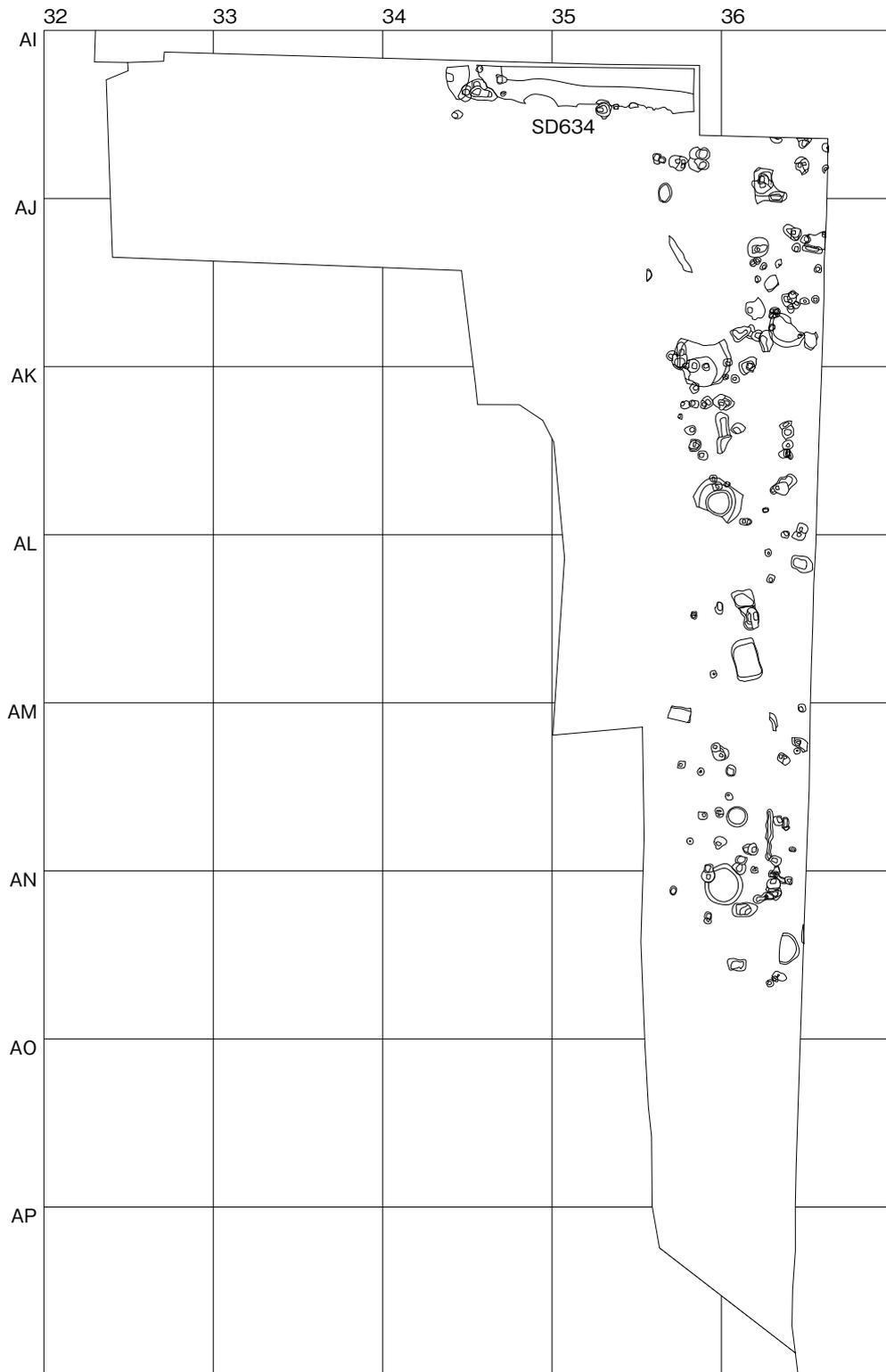
F7面は、自然堆積層上に形成された遺構面である(9図)。ほぼ全域にわたりピットが検出されたが、1次調査時に認められたような、柵列を構成する様相は認められなかった。またAI34・35グリッドから溝状遺構SD634が検出された。北壁および東端は調査区外に伸びる。断面形箱薬研形を呈し、溝底および覆土に流水痕跡が認められないことから地境溝と考えられる。主軸方位は、E-4°-Sを示し、東西方向からやや南へ振れる。これは、1次調査で検出されたSD7東西部分、SD266など



7図 D3区e面の遺構(1/150)



8図 D3区c・d面の遺構(1/150)



9図 F1・F2N区7面の遺構 (1/200)

の地境関連施設とほぼ並行し、D2区で検出された溝群同様、富山藩邸成立以前の遺構と考えられる(27図)。また、B3区・F1区の地境関連遺構群の主軸方位は、D2区溝群と真北方向からほぼ線対称の方位を示しており、調査区南東部の埋没谷軸線変化の影響を受けた結果と考えられる。

F6面からは、地下室、溝、植栽痕、ピットなどが検出された(10図)。SD542は、溝底にピットを有する溝で、1次調査で検出されたSD265と同一遺構と考えられる。主軸方位はN-4°-Eを示し、F7面で述べたように旧地形に規制された軸線と考えられる。SU537は1辺約160cmを測る方形の竪坑部とその東側に接続する室部で構成される地下室である。竪坑部西壁には3段のステップがローム層を削り出して作出されている。室部は南北両側に伸びているが、大半は調査区外に及び規模、形状の詳細は不明である。主軸方位はN-13°-Eを示し、地境関連遺構群よりさらに東傾している。植栽痕は、AI・AJ36グリッドなどで散見される程度である。

F4、F5面は植栽痕を中心とした遺構構成を呈し、かなりの密度で重複して検出された(11、12図)。F5面では、AN35・36グリッドにて、礎石を有するピットSP777、SP792、SP794が検出された(11図)。遺構間は約200cmを測り、主軸方位は、N-26°-Eを示す。植栽痕群の分布および本ピット群の東側には硬化面が確認されていることより、植栽痕群の南端に位置していると考えられ、四阿の可能性が考えられる。F4面では、浅い不整形ピット群が2ユニット確認された(12図)。一つはAI・AJ36グリッドに位置するSP516～522である。SP516とSP522が重複している以外は、ほぼ近接して分布している。これらのピットは覆土に砂が充填されている点で共通し、SP521からSP522にかけての東西方向列と、SP517からSP520にかけての南北方向列を認識することができる。もう一つはAM36グリッドに位置するSP756、SP757、SP766～768である。北端のSP766からS字状を描き配列している。覆土はロームブロック主体土で共通する。またピット列周囲には硬化面が拡がり、植栽痕との重複は認められない。このような遺構分布状況から、飛び石などの庭園施設と考えられる。

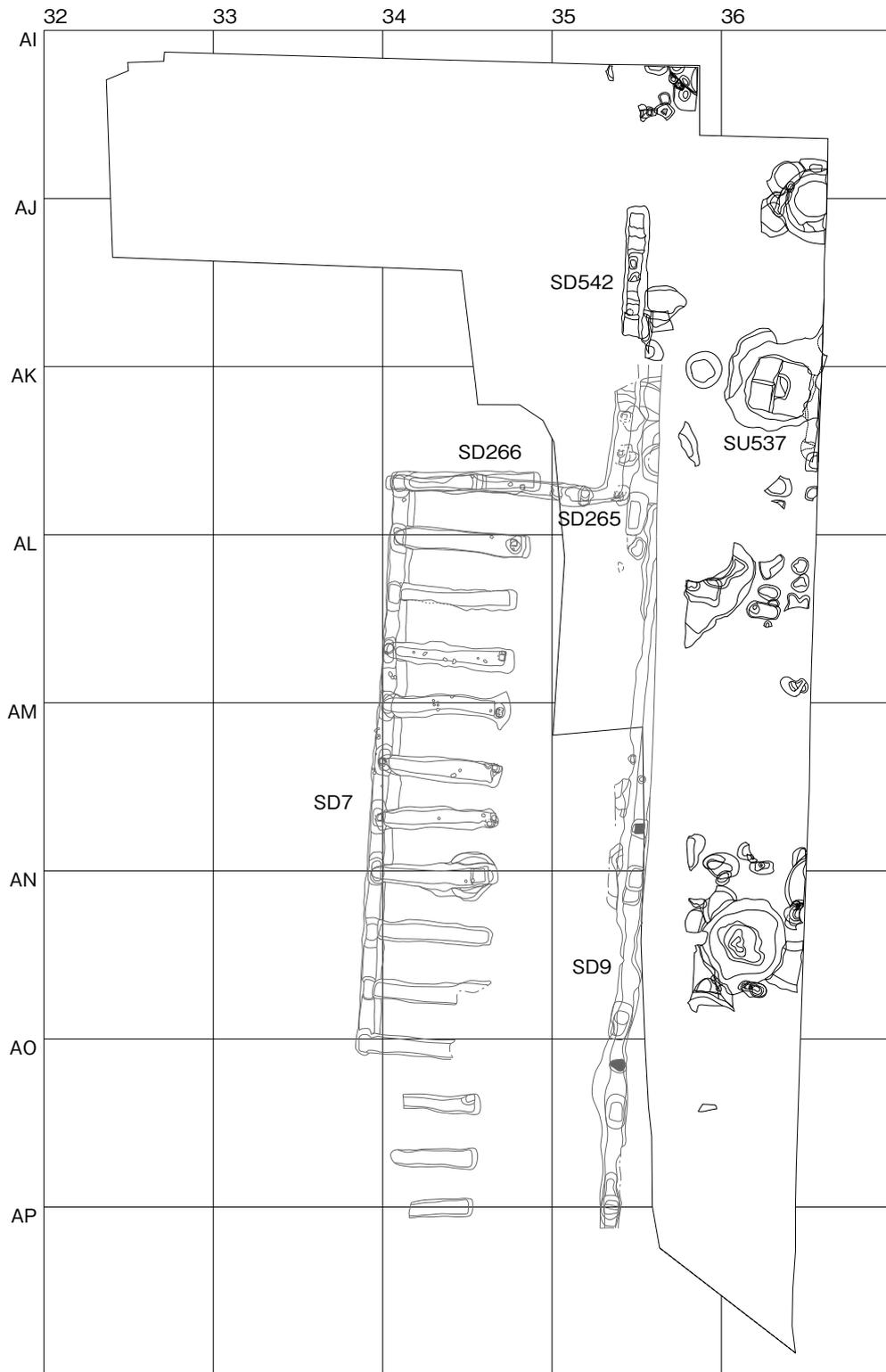
F4面上にはF3b層による新たな整地面が構成され、それを期にそれまで平坦であった本小区内は、AMライン南約3mより北側が、ロームブロック主体土で雛壇状に嵩上げされていた(13図)。

F3面段階では、雛壇状のレベル差が生じたAMライン南約3m以南にも盛土造成が行われ、再び一面が平準化された(13図)。埋設配管攪乱が多く、断片的な様相しか捉えることができなかった。AM36グリッドに位置するSB466は布掘掘方を有する礎石列である。礎石は共に根石を有し、礎石間は芯々で約80cmを測る。北側はF1区へ続くが、攪乱によって削平され、詳細は不明である。SB466の南側には柱痕を伴うピットSP739、SP743が位置する。柱痕間は芯々で127cmを測る。周囲は攪乱の影響が大きく、詳細は不明である。これらの遺構はいずれも南北方向へ伸びる点で共通する。またAK36グリッドでは、遺構確認面に比較的顕著な被熱痕が認められ、近接する建物の存在を窺わせる。散見される遺物の年代観、文献にみられる火災記録より、文政8(1825)年もしくは弘化3(1846)年の火災痕跡と考えられる。

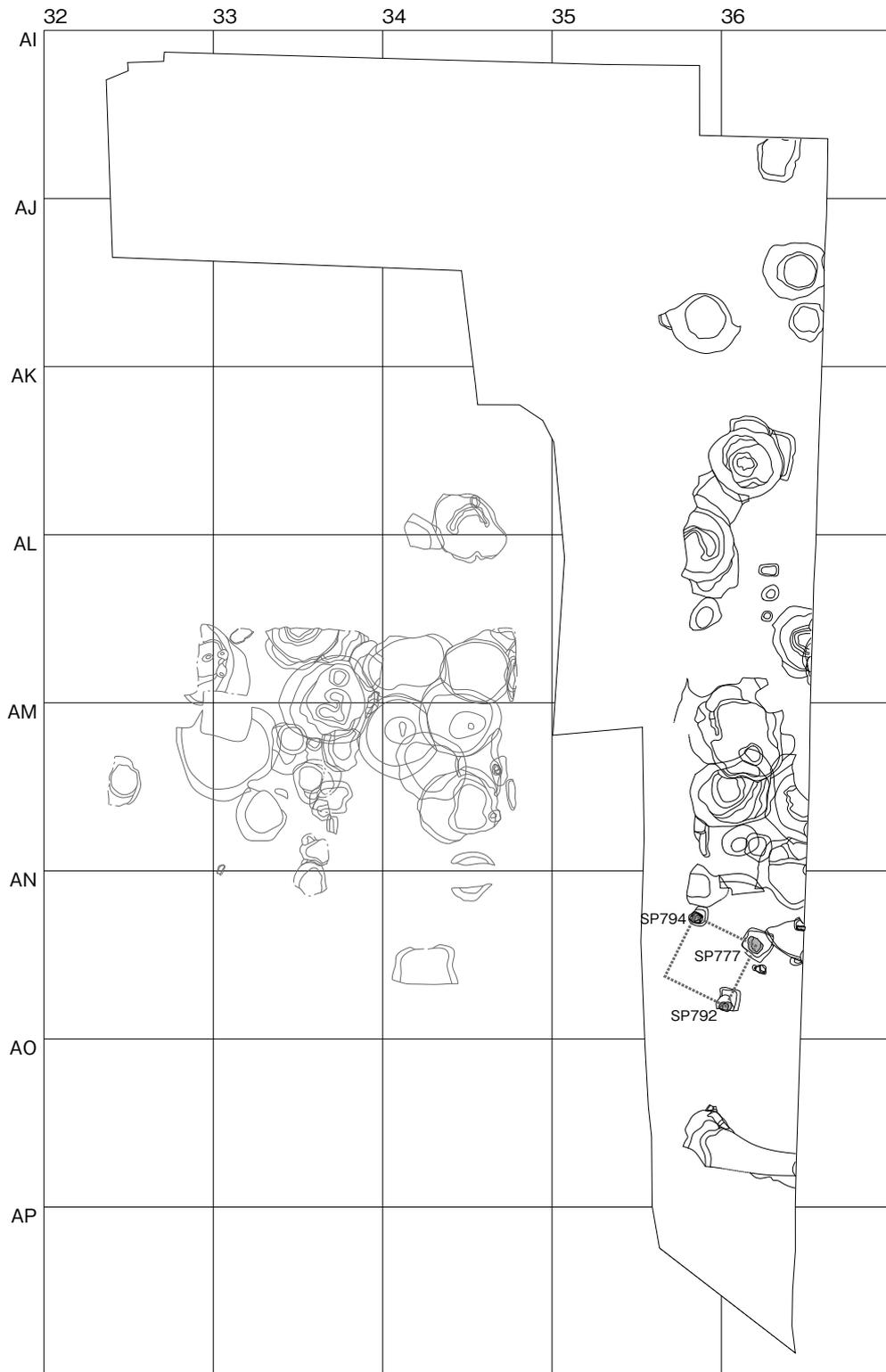
F1～F2面では、さらに攪乱の影響を受け、ピット、土坑などが散見される程度である。

e) F2S区

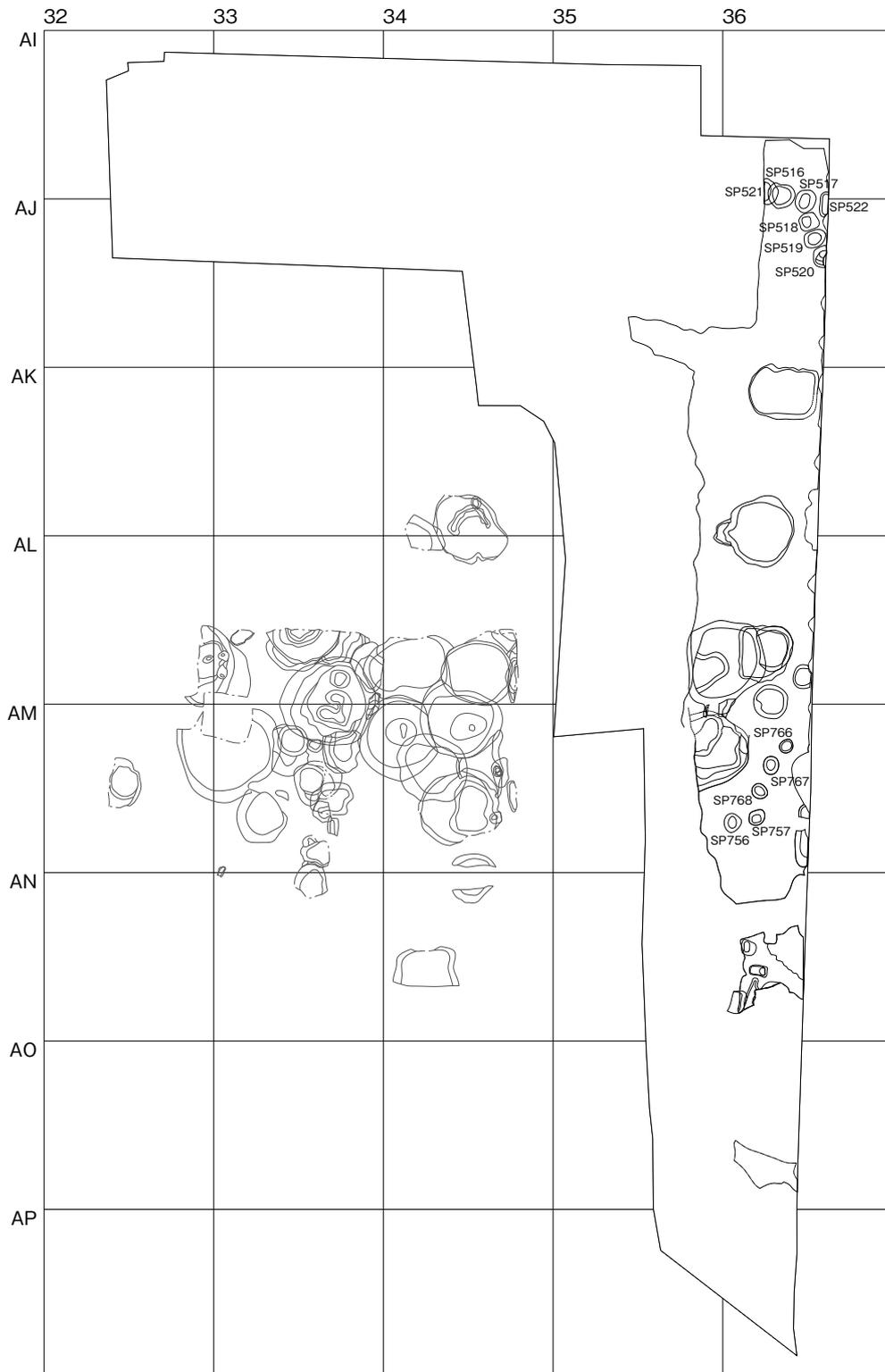
10面は、段切り下段となるARライン以南で検出された面で、江戸時代最下面である(14図)。9面で検出されたSD978の南北壁立ち上がりに沿うように各々東西方向のピット列が並ぶ(SK1001・SK1002・SK1003・SK1004、SK987・SK1007・SK1006・SK1005)。またSK991、SK992、SP996、SP1000、SP998は、各々南北方向に長軸を有す不整形楕円形のピット列で、主軸方位はN-10°-Eを示す。その東に位置するSK993も同様の主軸方位を示す。この方位角は、9面に帰属するSB964



10図 F1・F2N区6面の遺構 (1/200)



11図 F1・F2N区5面の遺構 (1/200)



12図 F1・F2N区4面の遺構 (1/200)



13図 F1・F2N区1～3面の遺構 (1/200)
(灰色表記は、1,2面の遺構)

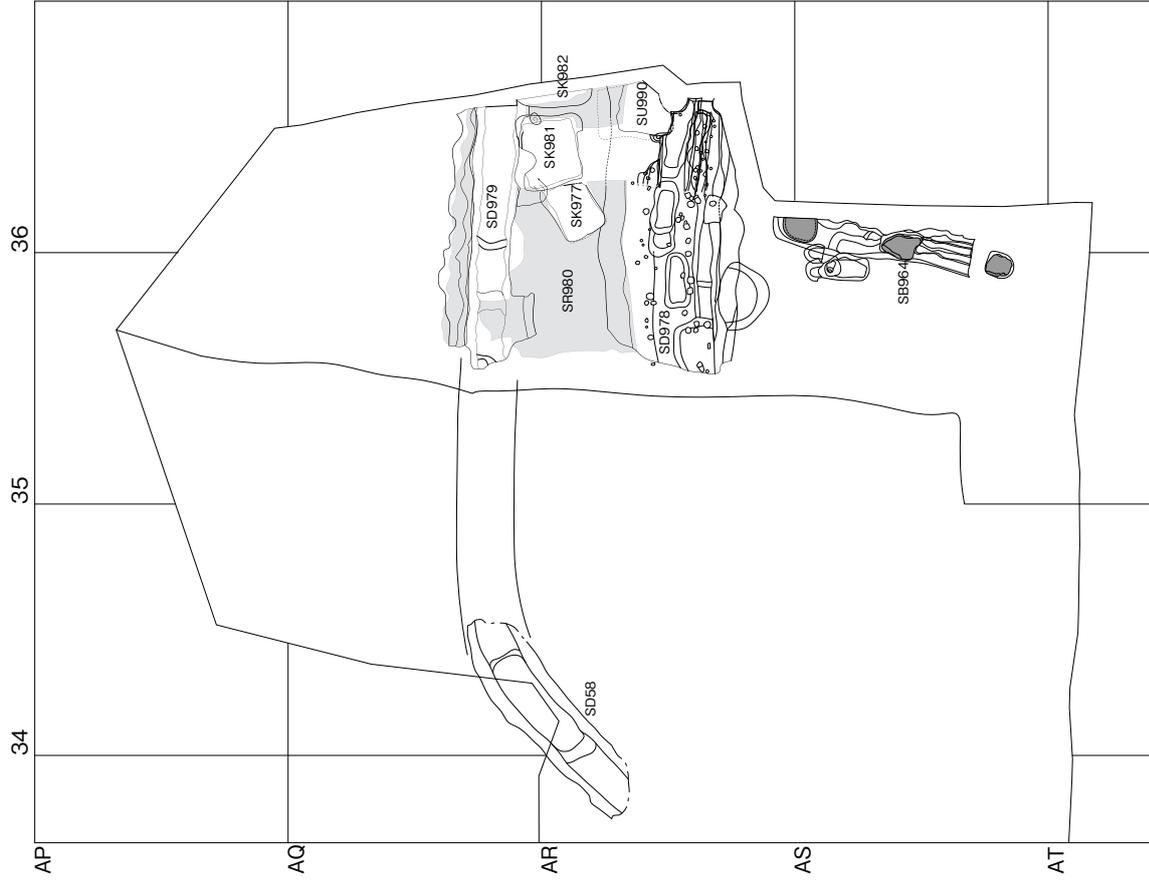
や6面に帰属するSG845とはほぼ同方位であることから本地点周辺の土地利用が連綿と同じ空間規制下にあったことを物語っている。

9面は、AR35グリッドを中心に焼土層が堆積する直下の面で、元禄16(1703)年頃までの生活面と考えられる(15図)。盛土は上位面でみられたようなスロープ状の傾斜ではなく、SR980を挟む2つの溝を利用して2箇所の段切りを行い平坦面を作出している。SR980は東西方向に伸びる道路状遺構である。上位と中位に道路面があり、上位面では北側にある埋没したSD979の上を覆い北へ拡幅されている。なおSR980の拡幅部砂利層直上に焼土層が堆積している。同様の堆積が1次調査で検出されたSD58にもみられることから、SD979はSR980の北側を併走しながらSD58に接続すると考えられる。SR980の南にあるSD978は覆土中に多くの焼土を含む溝で、最下層には水成堆積とみられる砂粒が認められる。3回程度の作り替えが認められ、a～cの枝番を付した。杭列跡や炭化した材が検出されていることから、本来は側板をもつ溝の可能性もある。SU990はフラスコ状の地下室である。確認面からの深さは約1.6mで、壁面・底面の調整は比較的丁寧である。確認標高がT.P.8.5mと低いとオーバーハング部付近から自然堆積の砂礫層となり、これを掘り込んで構築している。なおSK977・SK981・SK982・SU990は、いずれも元禄16(1703)年の火災を契機とした廃絶であるSR980・SD979・SD978よりも新しい遺構である。このため本面は火災後もある程度の間、使用されていたと考えられる。布掘を伴う礎石列SB964は、主軸方位はN-11°-Eを示し、上位面遺構のSG845・SG891とはほぼ同一であることから、本地域周辺の造成が元禄期頃には確立していたことを示している。

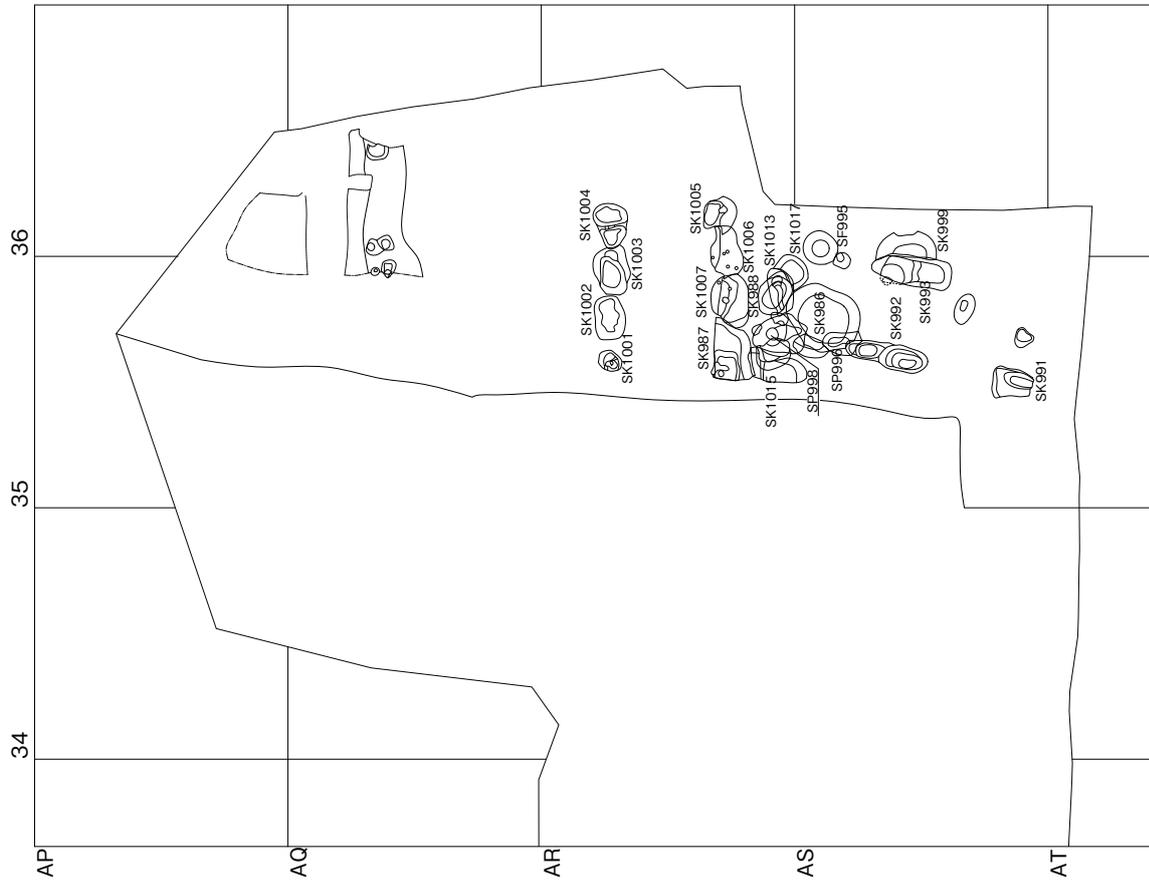
8面は、AS36グリッドを中心として、部分的に確認された焼土層下の面である(16図)。なおa～eまでの枝番を付しているが、面としてはいずれも部分的で盛土の一部の可能性も考えたい。比較的小規模な土坑・ピットを26基検出しているが、掘方などが不明瞭なものが多い。また山砂主体で埋め戻されたSX917・SP918・SP919などもみられる。

7面は、灰褐色の粘土質土層を主体として、上位は炭化物や焼土が散在する。部分的に硬化面もあり、a～c面に細分した(17図)。なお、7面から8面にかけてはAQグリッド南端では上位面よりもやや勾配が強い。ARグリッド付近から緩やかになり、ASライン以南はおおむね平坦となる。本面の使用時期は、宝永テフラの検出から宝永4(1707)年頃が想定される。SG845の構築面にあたる7面では、SG845東側下位と平行する石組遺構のSG891・SB934が検出された。調査区南端壁では、東側を正面として間知石と角石が詰まれている状態が部分的に確認されており、これらが石垣石本体の一部である可能性を考えたい(25図)。盛土が一段高くなるAQ35・36グリッド南端付近では、東西方向にSA939が展開し、この柵列の北側を沿うように、60～80cm径の大形石を用いたSB940a・bが並ぶ。なおSB940b埋没後に宝永4(1707)年とみられる火山灰が直上に堆積している。調査区中央部はSK945・946などの大形土坑が分布、平面形はいずれも不明瞭である。このほかAS35グリッド付近ではSP936・SP937など南北に並ぶピット列も確認している。

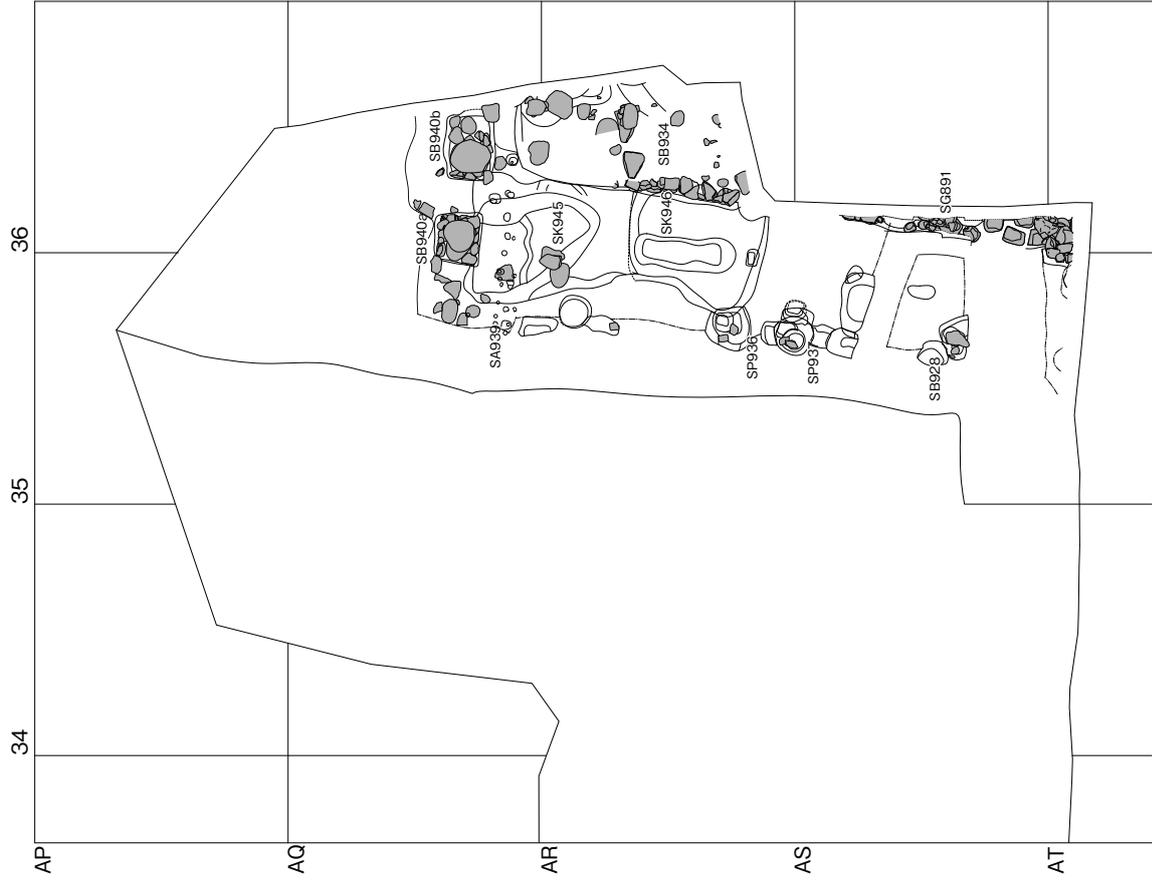
6面は、F2S区全体に広がる面で、a～bに細分した(18図)。a面はSG845の確認面(最上面)、b面はSB921坑底の硬化面とした。比較的平坦なAQグリッド北側は、盛土の傾向からF2N区5面ないし6面に相当する可能性があり、以南の6面と同一時期かは検討の余地がある。傾斜が始まるAQグリッド南端付近では、SD847とSB848が検出されている。SD847は東西方向に伸びる溝状遺構で、底面にごく浅い窪みが付帯する。南側へと緩やかに傾斜していくARライン以南では、石垣の裏込部と考えられる石組遺構であるSG845が検出された(24図)。石垣本体は本遺構の東側にあると思われるが、SX782・SX783によって抜き取られている。石垣裏込石は河原石を主体として間知石や石造物



15図 F2S区9面の遺構(1/150)



14図 F2S区10面の遺構(1/150)



17図 F2S区7面の遺構(1/150)



16図 F2S区8面の遺構(1/150)

の転用石が若干用いられており、石の間には土を挟む場所もある。おおむね3段に石が積まれ、構築面である7面上にはごく一部に長方形の切石を割ったものが据えられているが根太などはない。石組はごく緩い弧を描きながら、南側は調査区外へと伸びる。北側は盛土の傾斜が高くなっていくARライン付近で収束する。これらの特徴から、富山藩上屋敷絵図「江戸御上屋敷図」に描かれた表門東側にある石垣に相当すると思われる(26図)。SB921～925は、河原石や破碎礫を用いた礎石で、掘方はなく6面構築層中に据えられている。SG845・891と平行するように南北に並ぶため、関連する可能性もある。なお後述する4面のSB819は盛土を挟んで本遺構上に位置する。

5面は、4面で検出したSB818の坑底から広がる碎石の検出面で、AQ～AR35・36グリッドにかけて確認された(18図)。碎石範囲は下位のSG845とほぼ重なるため、これと関連する可能性がある。遺構はSB844のみが検出されたが、6面に帰属するSB848と関連する可能性が高い。なお5面以下の盛土は傾斜面が南へと広がり、SB844付近を境にASライン半ばまで緩やかに傾斜していく。

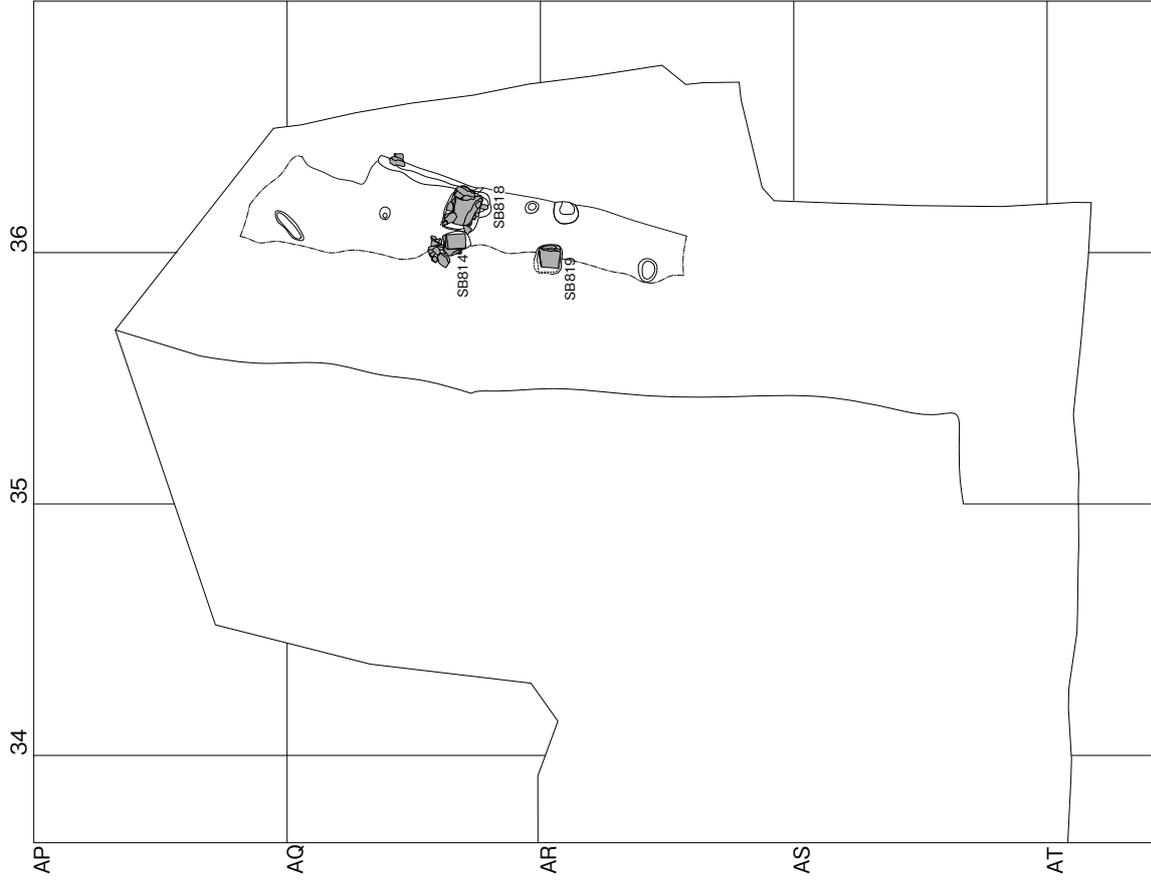
4面は、F2S区の北半分にあたるAQ～AR36グリッドにかけて確認された面で、a～cに細分した(19図)。4a面はSB814の上面を基準としている。盛土はAQラインから南へと緩やかに傾斜がみられ、ARグリッドでは平坦となる。下位面と比べて、平坦面は北側に広がっている。遺構は少なく、礎石以外は浅いピット状を呈する。4a面で確認したSB814は、一辺35cm、高さ80cm程度の四角柱状の白色石で、この下に盛土を挟みながら不連続に4c面まで丸石などが据えられている。なお7面ではSB940の直上にあることから、この位置が継続的に意識されていたことがうかがえる。SB819も7面ではSB925の直上にあり、SB814と直線上に約1.8m間隔で並ぶことから、関連する遺構と思われる。

1～3面は、AQ36グリッド付近に部分的に認められる近代初頭の確認面である(20図)。上位は削平されており、当時の生活面ではない。なお1面から5面までは、F2S区の南側は攪乱されているため、確認面は北側を中心とする。本面で確認されたSX782・SX783は南北に伸びる溝状遺構で、石垣(SG845・SG891)の抜き取り痕と考えられる(21、22図)。SX782は上位のロームブロック主体層以下、暗褐色土と黒褐色土が互層状に堆積し、遺物は少ない。一方、これより下位にあるSX783の土層は灰褐色土を呈し、幕末から近代初頭にかけての遺物を多量に含む。瓦や漆喰なども多く、瓦は北端に種別ごとに列状に並べられた状態で廃棄されている(23図)。SX782・SX783の土層堆積状態から、東隣する本97-1A区の北壁上位で確認された土層と同一の可能性が高く、本地点から東側にかけて広く展開していることが考えられる。このことから遺構の廃絶は、富山藩邸の表門周辺の空間利用が大幅に変化した時期であり、表御殿が山上会議所へと移築された明治26(1893)年頃が想定される。2面は、AQ36グリッド付近に部分的に認められる確認面で、面下げ中に検出した。遺構は少なく、小ピットが2基のみである。AQ36グリッド付近に広がる明瞭な硬化面を3面とした。遺構はSX811のみだが、盛土の一部を誤認した可能性がある。本面直上には、SX723と同様の棧瓦28枚が列状に並んで検出されているため、1面から3面は近接した時期の構築と思われる。

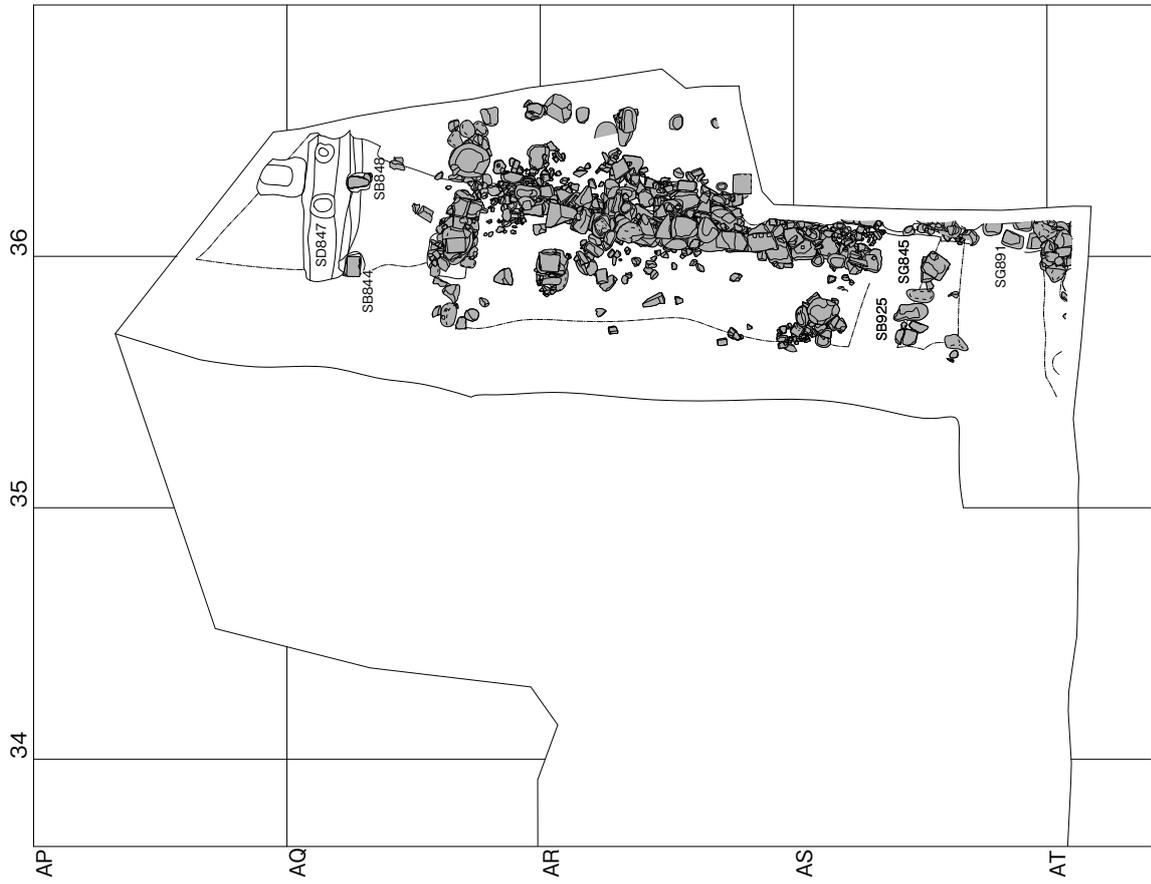
3. 調査の課題と展望

江戸時代以前では、新たに2軒の古墳時代竪穴住居が検出された。全体的に遺存状況は良好ではないが、調査区北東区に集落が展開する状況が追認された。

江戸時代の状況は、F1区においてB3区から続く植栽痕群の拡がりを確認し、それに伴う建築遺構、飛び石の抜き取り坑など富山藩邸庭園景観に関する資料を得られたことは一定の成果である。概期の御殿との位置関係、隣接調査区の本48医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期地点との対比から今後検討を



19図 F2S区4面の遺構(1/150)



18図 F2S区5、6面の遺構(1/150)



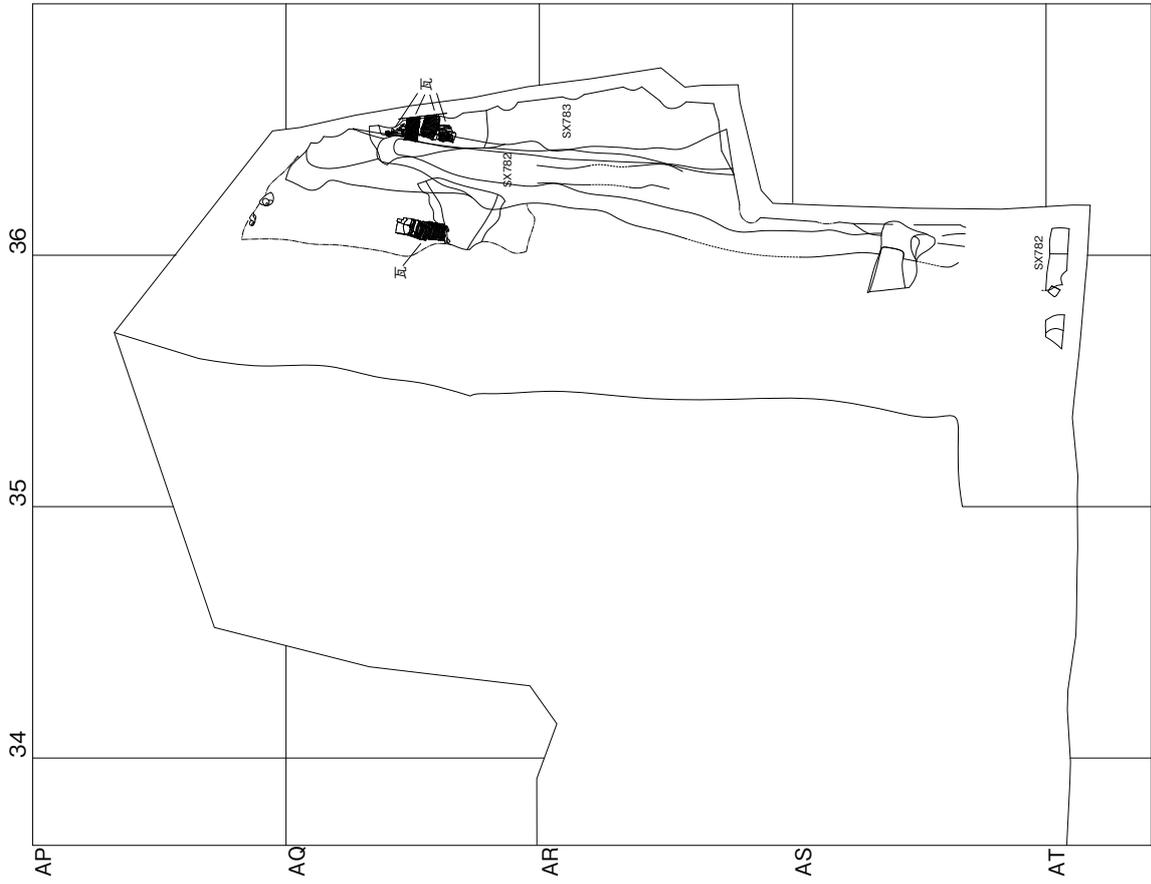
22図 SX783



21図 SX782



23図 SX783瓦出土状況



20図 F2S区1~3面の遺構(1/150)

加えたい。

F2S区AQライン以南から検出された石垣SG845、SG891は、近代以降に築石は抜き取られていたものの、裏込め石の分布範囲から石垣の北限を推定することができ(24図)、幕末の藩邸絵図に描かれた石垣と法面の状況を確認することができた(26図)。この法面は看護師宿舎Ⅱ期地点で検出された法面に続き、絵図と調査地点の対比をする上でも有効な資料と位置付けられる。

全体的な様相として、断片的ではあるが、江戸時代の造成と埋没谷を含む旧地形との関わりを窺い知ることができた。近隣調査区同様、初期開発段階では旧地形を残したまま区割りが行われ、寛永16(1639)年の富山藩邸成立など本郷邸の本格開発を契機に大規模造成が行われていったと考えられる。それも本55医学部附属病院第2中央診療棟地点における大聖寺藩邸開発に観られたように、雛壇状の平坦面を作出し、最終的に広範囲を平準化する行為が看取される。その一方、D3区で認められた低標高区域への盛土造成のほか、F2N区AMライン南約3m以北で認められたように、高標高区域への更なる嵩上げも認められ、藩邸開発の多様性を窺い知る様相も認められた。また埋没谷に向かう傾斜面造成は、攪乱によって分断されたF2N区、F2S区、D3区において全く異質な盛土および遺構面の状況が認められ、それぞれの対応が今後の大きな課題となる。

D2区で検出されたSD453、SD454、D3区で検出されたSD912、F1区で検出されたSD634、SD542の各溝状遺構は、いずれも主軸方位が東西南北から約5～10°振れる方向に伸びている点で共通している。これらの軸は南東側に位置する埋没谷の谷筋に平行もしくは直行しており、初期開発が自然地形に規制されていたことを窺わせている。またSD454の西方には、中央診療棟地点で検出された7号溝が位置する。形態的類似性から同一遺構と考えられ、埋没谷の南斜面を東西方向に伸びる入院棟A地点SD803とともに、谷筋の両側で邸内を南北に区画するかなり広範囲な区割りが行われていたことが明らかになった(27図)。

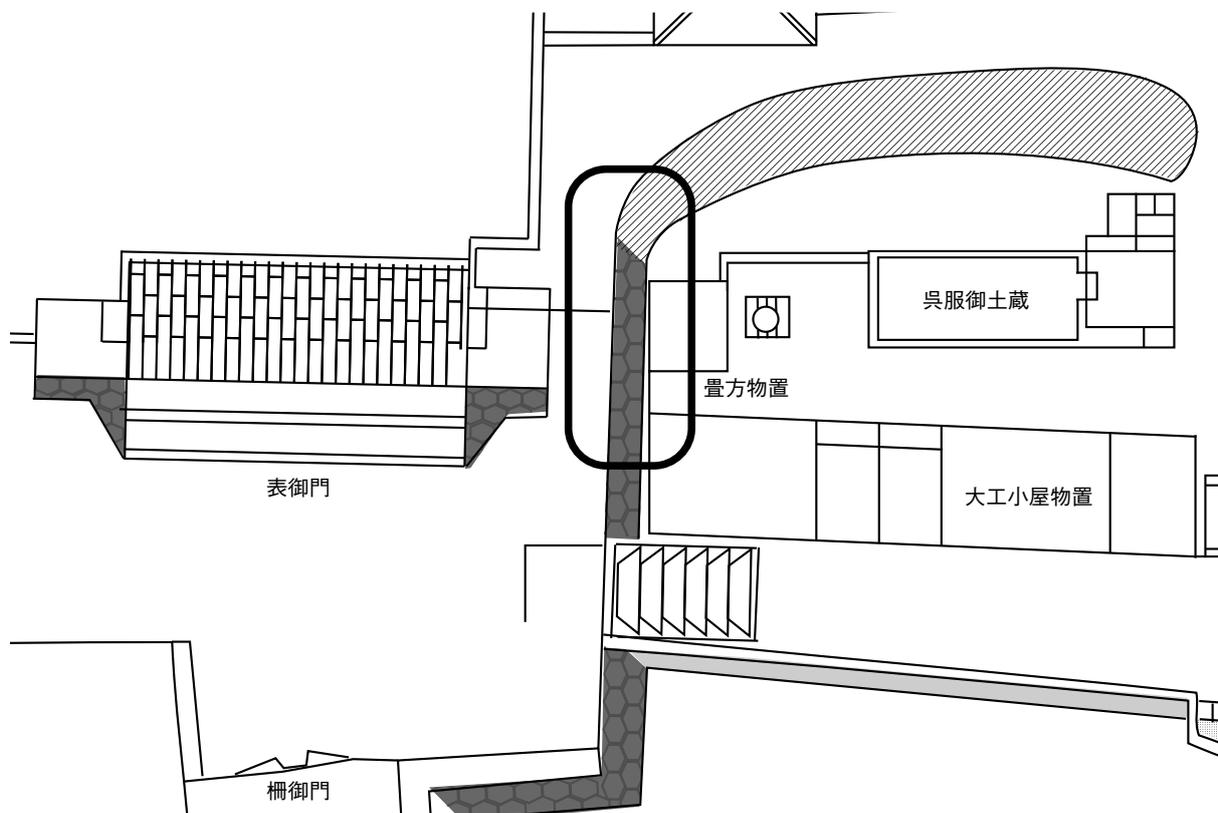
寛永16年の支藩成立によって調査区は富山藩邸エリアに含まれたと考えられる。D2区で検出された道路状遺構SR444は、今までの調査成果から入院棟A地点で検出された黒多門邸北側境界施設SD1103に北接し、中央診療棟地点で検出された2号組石延長線状の南側に位置する。即ち、藩邸南側の無縁坂に続く道路から北方へ伸びる第2中央診療棟地点SR1548の北端からT字状に接続する道路に比定される(28図)。これは天和2年以前の屋敷割りを描いた絵図と一致し、SR444が天和2年までの藩邸内区割道路であったことが判る。SR444の東端は、残念ながら以降の藩邸開発によって削平され、明らかにすることはできなかったが、黒多門邸北東角付近まで伸びていることから、富山藩邸もしくは黒多門邸に伴う門が周辺に存在していたと考えられる。



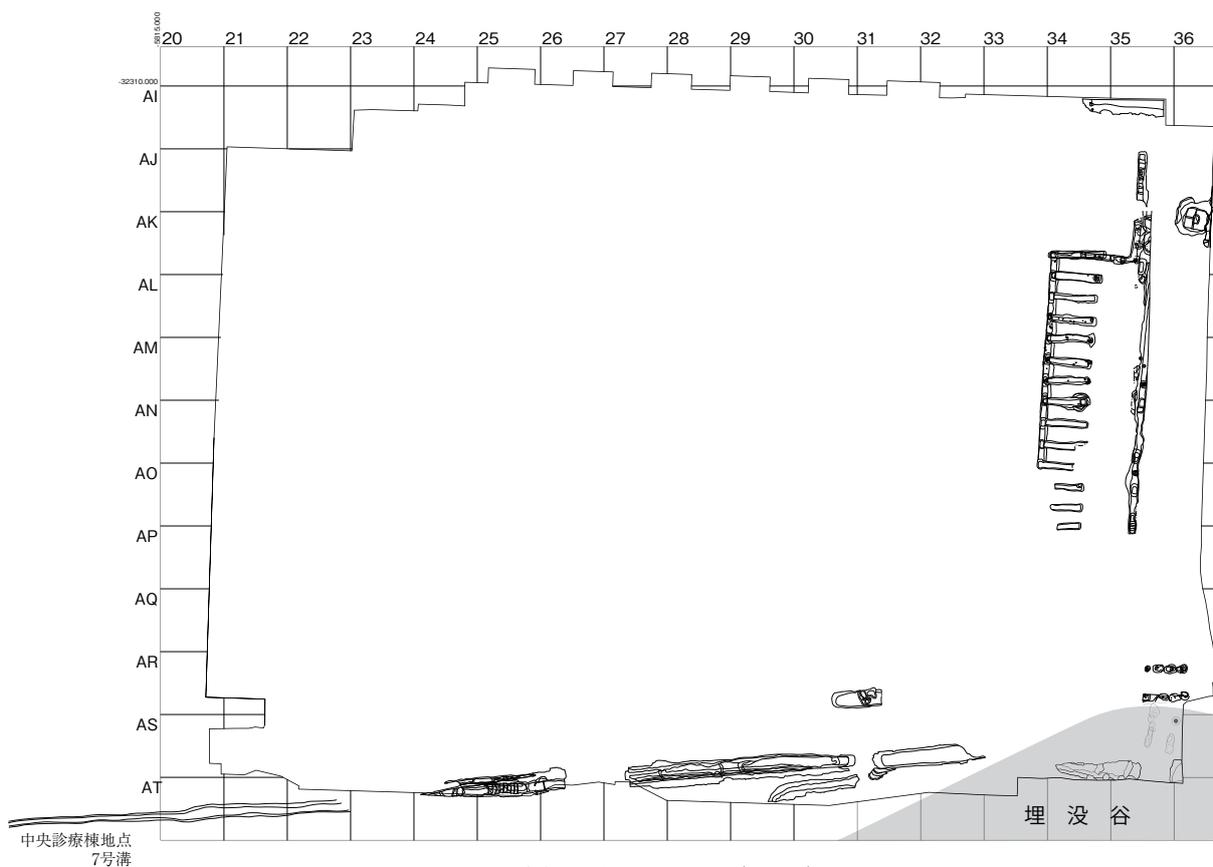
24図 SG845裏込め、背面石壘状石列検出状況
(北方で裏込めが切れる)



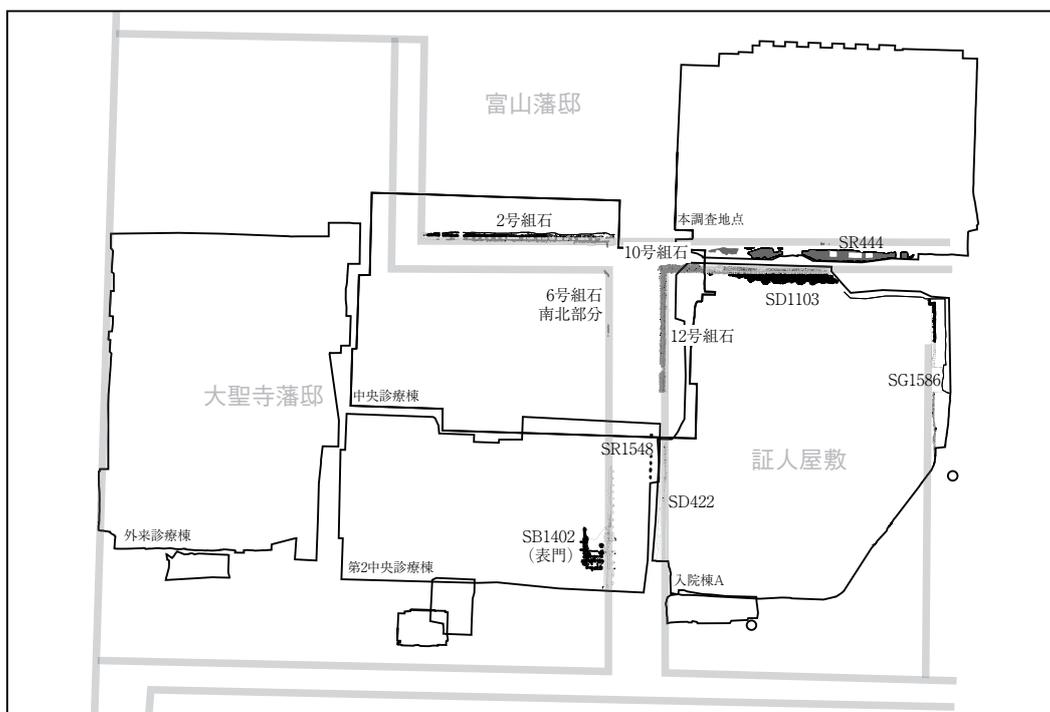
25図 SG891構築状況
(調査区南壁面。東向きに築石が残存している)



26図 調査区と富山藩上屋敷
「江戸御上屋敷図」より作成(部分)。隅丸長方形内が検出された石垣遺構に比定される。



27図 藩邸初期地境関連遺構 (1/600)



28図 天和2年以前の屋敷割りと関連遺構 (1/2000)

2. 本郷125 医学部附属病院クリニカルリサーチセンターA棟1期(HCRA12)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2012年12月17日～2014年9月12日

調査面積 3,341㎡

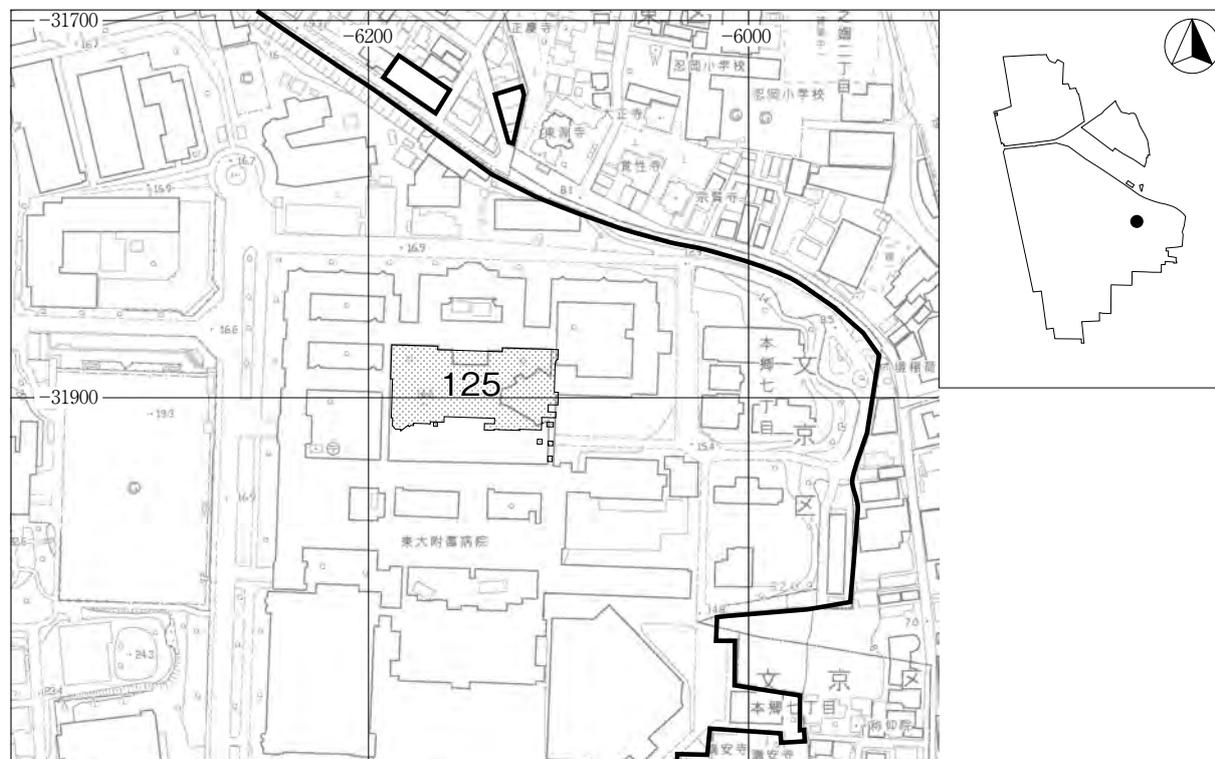
調査担当 追川 吉生 小川 祐司

1. 調査の経緯

東京大学医学部附属病院では、より高機能な医療ニーズに対応するための施設整備の一環として、クリニカルリサーチセンターの新営を計画した。本施設はA棟とB棟からなり、A棟は内科研究棟や臨床講堂の跡地周辺に、B棟は南研究棟跡地とその周辺に建設を予定している。2つの建物は病院構内の南北に離れているが、いずれも本郷台遺跡群の範囲内である。また附属病院では1984年に実施された中央診療棟建設に伴う発掘調査以降、病院の施設整備に伴う発掘調査が継続的に行われてきた。その結果、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が良好に遺存していることが明らかになっている。

クリニカルリサーチセンターについても、A棟・B棟の両予定地について遺跡が遺存していることが想定された。そこで2011年11月29日から12月2日にかけてA棟Ⅱ期工事とB棟工事範囲について試掘調査を実施した(なおA棟Ⅰ期工事予定地については2004年11月に総合研究棟・疾患生命工学センター地点として試掘調査を行っている)。

A棟Ⅱ期予定地での試掘調査では、既存建物や配管などの制約から遺跡の遺存状況を確認することはできなかった。しかし前述の総合研究棟・疾患生命工学センター地点における試掘調査で生活面



1 図 調査地点位置図

が複数面に及ぶことを確認したこと、2009年実施した立体駐車場地点の発掘調査結果から、A棟I期地点においても遺跡が良好に残っていることが予想された（B棟予定地の試掘調査では、江戸時代の地下室や土坑を確認した）。

この結果を受け、埋蔵文化財調査室ではA棟I期工事範囲を対象とした本調査を実施することとし、2012年12月17日から調査を開始した。調査面積は3,341㎡である（1図）。

2. 遺跡の概要

調査は立川ローム層Ⅲ層まで対象とし、それ以下については調査区内に設定したグリッドに沿っていくつかの部分と同Ⅲ層まで掘削し、必要に応じて掘削部分を拡張した。その結果、旧石器時代から古墳時代、および江戸時代の遺構と遺物を確認した。

（1）旧石器時代

旧石器時代の遺物はⅢ層、Ⅳ層から出土している。出土地点は調査区北西側のGf155、156グリッド、Gf158グリッドと、中央付近のGm160-162グリッドにかけての範囲に限定される。

（2）縄文時代

縄文時代では配石遺構やTピットを検出しているが、遺物は総じて少なく、土器はいずれも破片のみだった。

（3）古墳時代

古墳時代では5基の竪穴住居と、数基の周溝が確認されている。周溝の多くは近代以降の攪乱や江戸時代の遺構によって壊されている。遺物の検討はこれからであるが、周辺の調査地点と同様に五領式土器が目立つ。

（4）江戸時代

江戸時代の遺構は複数の生活面にまたがって検出した（2図）。特に調査区では2区と7区の遺存状況が良く、これを基準に近世1面から近世5面までの5つの生活面を認定している。しかし他の調査区では把握できた生活面はこれよりも少ない。

本地点では深度の深い地下室が多い点も目立った。2図の中で遺構が少ない範囲は、調査区の東西と南側に設置されていた共同溝の跡地にあたる（6区）。検出遺構は地下室の底部に限られていることから、大部分の遺構は共同溝によって壊され、本来の遺構密度は他と同程度だったことが推測される。

10図は平面図作成の際に光波測量で計測した測点を東西（A-A'）と南北（B-B'）の二方向に投影した図である。この図には共同溝の跡が投影されているが、測点はそれよりも約2.5m下（標高11.3m前後）まで分布している。本地点の地下室が地下深くまで達していたことがわかる。

3. 調査成果

江戸時代の本調査地点は、加賀藩と富山藩の二つの大名屋敷にまたがっている。富山藩は1639年（寛永16）に立藩した加賀藩の支藩で、同時に成立した大聖寺藩とともに加賀藩邸の東側に屋敷があっ

た。加賀藩邸と富山藩邸との地境となる可能性の高いピット列を検出した。ただしこのピット列は検出範囲が限られているため、屋敷境との関係はなお検討課題としたい。以下、調査成果は加賀藩邸と富山藩邸とを一括している。

1,509 基の検出遺構（江戸時代以前の遺構を含む、3 図）の内訳は表の通りである。

種別	遺構数
礎石	75
溝	133
井戸	19
炉跡	19
石垣	1
住居址	12
土坑	633
便所	10
柱穴	462
道路	3
地下室	115
不明	27

地下室

地下室は 115 基検出した。これは本郷構内の他の地点と比較しても特に多い。形態は SU11271 や SU12268 のような巾着状のものもあれば、SU11309 のように床面の壁際にピット痕を有し、柱で上屋を支えていたことが窺えるようなものもある。

地下室は調査区の全域で検出したが、特にその分布にはまとまりがみられる。Gf ライン、Gg ライン、Gh ラインの地下室は南北方向に並び、156-157、159-161 ラインのように東西方向に並ぶ地下室は、概ね Gn ライン以西にまとまっている。礎石の検出が少ない本地点では、地下室の配列が土地利用の状況を考える上で参考になる。これが時期差であるのか、あるいは加賀藩、富山藩という異なる藩邸の、それぞれの長屋の配置状況を反映しているものなのかは、今後の検討課題である。

土坑

土坑は 633 基検出した。特に注目される遺構には次のようなものがある。

SK12082

長軸 1.3 m、短軸 1.0 m、深さ 0.7 m。平面の形状は隅丸方形を呈している。壺屋焼の徳利や京焼の蘭引が出土した。覆土にはサザエやアワビなどを中心とした食物残滓も多く含まれている。出土した陶磁器は前述のもの以外でも比較的上手のものが多く、御殿空間からの廃棄であることが予想される（8 図）。

SK11320・SK11167・SK11278

調査区のほぼ中央部で検出した。複数の遺構が切り合っているが、大きくはこの 3 つからなる。SK11320 は南北 7.5m 東西 5.1 m の長方形を呈している。深さは確認面から 3.4m。遺構の北東側からほぼ 1 周するように地山が階段状に掘り込まれていて、螺旋状に遺構の底へと続く。SK11167 は南北 6.4 m、確認面からの深さは 1.7 m。東側には SK11167 へのアプローチをなすスロープが設けられている。SK11278 は南側が調査区外に続いているため本来の規模は不明。現状で南北 2 m、東西 2.9 m。北から南へと下がるスロープ状の溝 SD11322 がアプローチとなる可能性が高いが、南側の攪乱によって詳細は不明（6 図）。

これらの遺構からは、いずれも多量の陶磁器と貝や骨などの食物残滓が出土している。遺物の年代は 19 世紀代である。工学部 1 号館地点 SK01 のような、藩邸内のゴミの最終処理場に相当するゴミ穴と思われる。調査地点の南側に隣接する立体駐車場地点でも、19 世紀代の多量の遺物を含む巨大土坑を検出している。その位置は本地点の SK11320 などの南側にあたっており、南北方向に並ぶゴミ処理施設が立体駐車場地点にまで続いていたものと思われる（東京大学埋蔵文化財調査室 2012）。

SK12200

長軸 20.5 m 以上、短軸 4.0 m、深さは最大で 2.6 m を測る溝状の大型土坑である（5 図）。北側の底

面は円形状に浅く掘り窪められ、工具痕が顕著に残る。覆土には19世紀代の陶磁器類を中心に、ミネラルウォーター瓶やワインボトルなどが出土するなど、幕末から明治初頭頃の廃絶が推測される。このほかに貝類・動物遺体も多く含むほか、瓦には加賀藩・富山藩の家紋瓦がみられる。

堀

113基の溝状遺構を検出した。そのうち2基の溝状遺構は深さ1m以上と大規模であり、堀の可能性が高いと考えられる。

SD12210

長軸6.5m以上、短軸2.2m、深さは1.3m。Gpラインで南北方向に延びていて、SK12200に壊されている(9図)。断面が箱薬研形を呈する堀と考えられる。北西側はSK12200によって大きく破壊される。覆土からは滞水した様子は見られない。西側には本遺構に沿うように、塀と考えられる柱痕を伴う長方形土坑が南北に並ぶ。

SD11473

東西1.8m、深さ1.8-1.9mの堀。調査区の西端で検出されたが、西側の立ち上がりの一部を確認することができた。南北は調査区外に延びているため、遺構全体の規模は不明。出土遺物は極めて少ないので時期は不詳だが、16世紀末～17世紀初頭の陶磁器が含まれているので、下屋敷段階あるいは加賀藩が屋敷を拝領する以前の遺構の可能性はある。北側のSD11469、SD11653も同一遺構である(4図)。

道路状遺構

SR11146

調査区の東端で断片的に検出した。幅1.5m、掘り方の深さは約0.4mで、砂利を含む土を充填している。北側の状況は不明。南側は調査区の南端で少なくとも西側に曲がっており、SR12275に続いている。

SR12275

他の遺構によって多くの部分が破壊されているが、推定で南北30m以上、東西3m以上となる(現状での東西幅1.5m程度を確実に押さえることができる)。深さは0.9m。覆土にはSR11146と同様に玉石を多く含み、非常に強固に版築されている。SK12200やSD12210より古い遺構である。

(2) 江戸時代以前

古墳時代の竪穴住居12基と、周溝数基が検出された。縄文時代ではTピットと集石遺構を検出した。旧石器時代に関しては、立川ローム、Ⅲ層からⅤ層にかけて、剥片と礫が少量出土している。しかしブロックをなす出土状況はみられない。

4. 調査の課題

本調査地点は加賀藩邸、富山藩邸のどちらも藩邸の外縁部にあたる。藩邸の境界のあり方については今後の課題だが、本地点ではそれぞれの藩邸の外縁部における空間利用の実態を解明することが期待される。整理と分析はこれからだが、検出遺構数、出土遺物数(テンバコ約1,000箱)というあり方は、積極的な土地利用がなされたエリアだったことを予想させる。

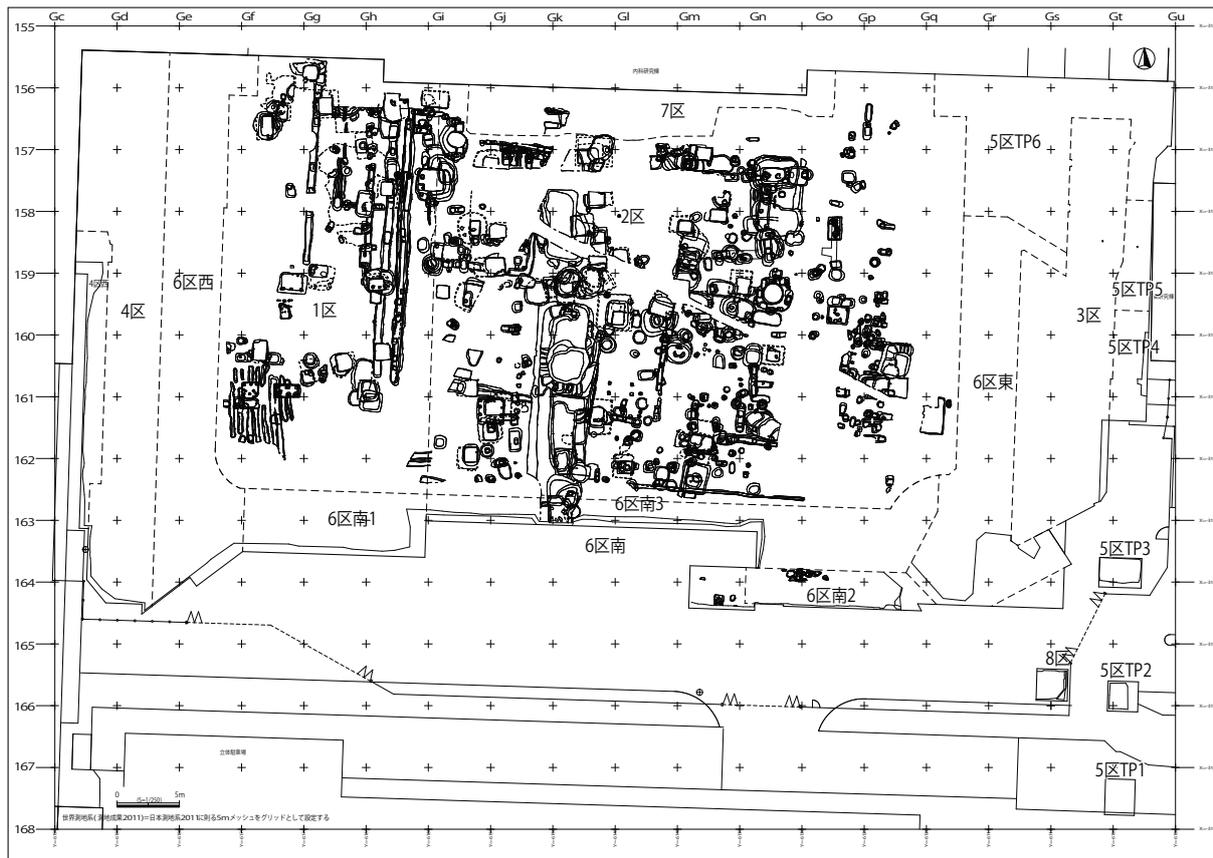
とりわけ大型廃棄土坑である SK11320・11167・11278 は、数基の地下室を壊して構築されたことが切り合い関係から明らかなので、19 世紀代になって詰人空間内の居住エリアに廃棄施設が構築された状況がみてとれる。藩邸境の可能性のあるピット列はこの遺構群の西側で検出されている。もしこれが加賀藩—富山藩の地境となるならば、廃棄土坑は富山藩邸内に設けられた施設ということになる。スロープや階段といった各遺構に構築されたアプローチ施設はいずれも東側から入るものである点も、富山藩が管理する施設だったことと関係するかもしれない。一方、出土遺物には加賀藩の家紋が認められる瓦も含まれている。多量の遺物や食物残滓の分析とともに、本遺構群は藩邸内のゴミの廃棄処理の実態にとどまらず、宗藩・支藩との関係を知る上でも重要な知見が得られる可能性がある。

富山藩邸に帰属する堀 (SD12210) は『江戸御上屋敷図』(富山県立図書館蔵・安政6年) に描かれた、御殿空間と西側の詰人空間とを画す堀に相当する可能性が高い。堀は水色で彩色されていて、水堀だったことがうかがえるが、土層の観察からは滞水していた状況は認められない。とはいえ絵図と照合することが可能な遺構を検出したことの意義は大きく、長屋などの配列や井戸の位置からの検討をしていく必要があるだろう。

また調査区西側では、加賀藩が屋敷を拝領する以前にさかのぼる可能性が高い堀が検出された。類似した遺構は他の地点でも検出されている。加賀藩が屋敷地を拝領する以前の状況を知る手がかりの一つとなった。

参考文献

東京大学埋蔵文化財調査室 2012 「医学部附属立体駐車場地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8



2 図 検出遺構全体図



3 図 2 区全景



4 図 SD11473



5 図 SK12200



6 図 SK11320・11167・11278



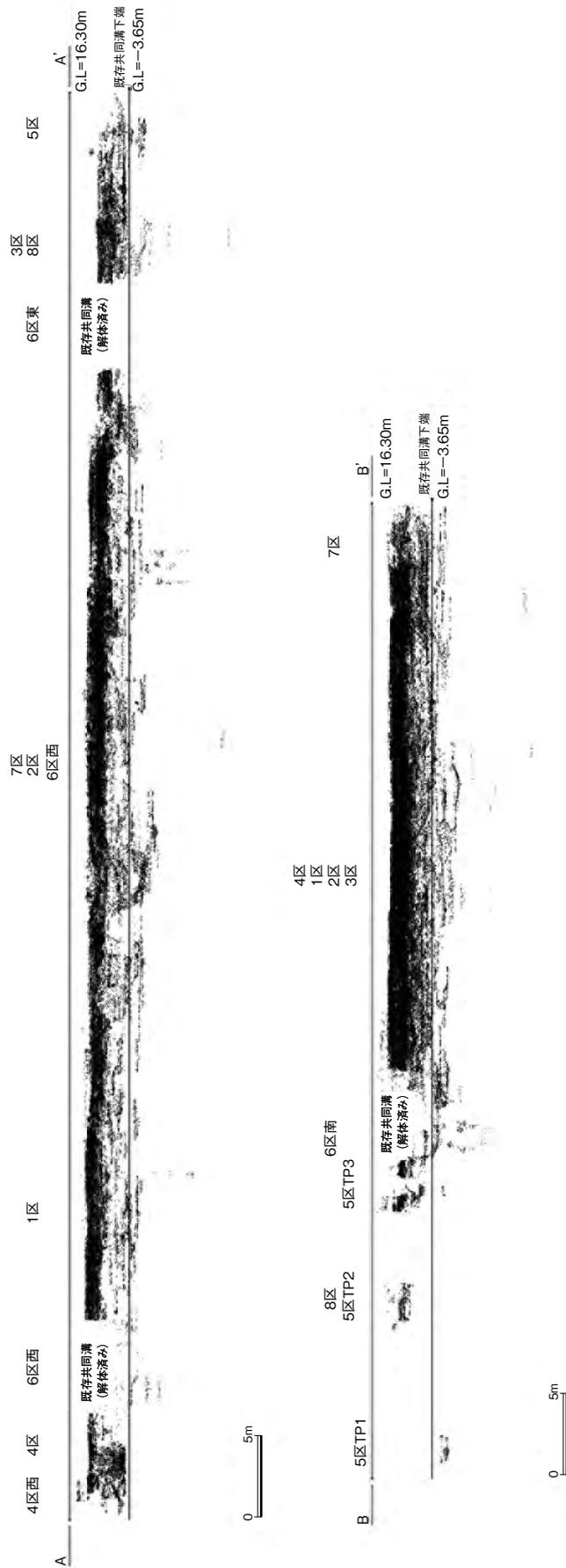
7 図 SU11271



8 図 SK12082



9 図 SD12210



10 図 遺構深度 (平面図測量時の測点を投影した)

3. 本郷 143 講堂改修工事

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 本郷台遺跡群（文京区No.47）

調査期間 2013年9月26日、10月21～25日、11月5、11日、12月12日～13、16日、2014年
11月11、13～15、18、19、27、28日、12月5、9、11、13、15、17日

調査面積 539㎡

調査担当 原 祐一

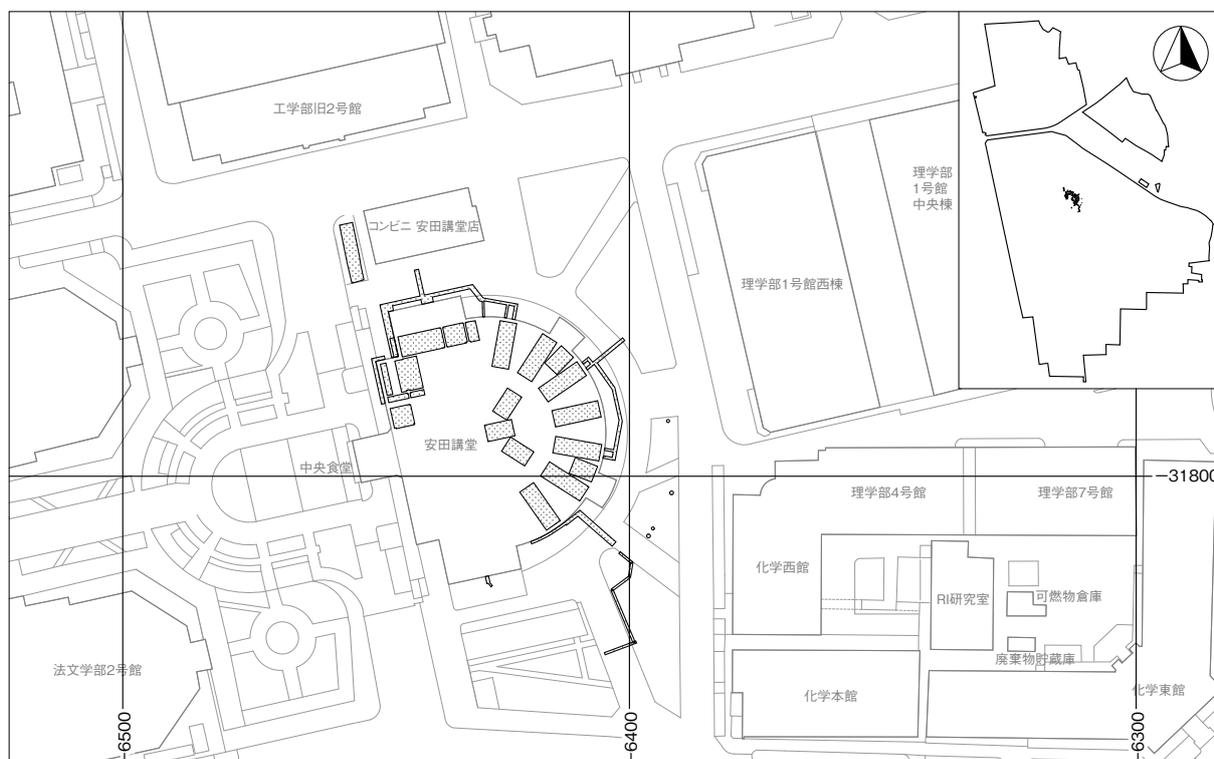
1. 調査の経緯と経過

東京大学は安田講堂の改修工事を予定していた。工事予定地は、本郷台遺跡群（文京区 No.47）内に位置し、周辺の研究棟では加賀藩の遺跡が確認されている。安田講堂は登録有形文化財（建造物）に指定されていることから東京都、文京区と協議した結果事前調査を行うことになった。調査は工事の進捗に合わせて埋蔵文化財の確認を行った。

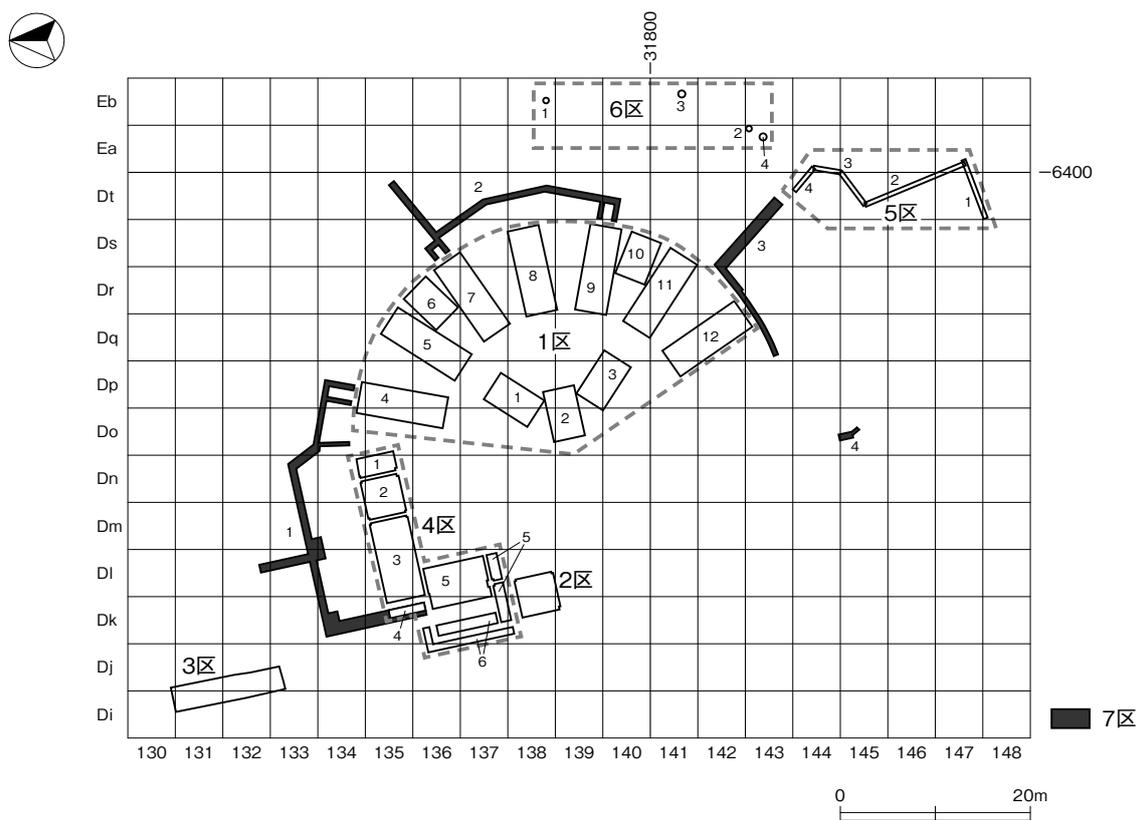
2. 調査結果

1区、2区5区、6区、7区なし。3区江戸時代および安田講堂関連遺構を確認。4区関東ローム層の自然堆積層、安田講堂以前の盛土を確認。

以下、各調査地点について報告する。



1 図 調査地点の位置



2 図 トレンチ配置図

1 区 1階建屋内耐震改修基礎新設 (4～12 図)

調査日：2013年10月21日～24日

調査結果

1区1～12で存否確認を行った。調査の結果、掘削部分は安田講堂建設の際に掘削されて基礎と基礎の間に盛り土が行われていた。掘削深度では関東ローム層は検出しなかった。

2 区 1階建屋内エレベーターピット新設 (13 図)

調査日：2013年11月5日

調査結果

掘削深度は1階床面から3mで遺構の検出の可能性があったが、安田講堂の図面から基礎工事が行われ攪乱されている事が予想された。調査の結果、基礎による攪乱を確認した。

3 区 外構空調室外機置場 (3、14～17 図)

調査日：2013年12月12～13日・16日

調査結果

調査の結果、加賀藩に関する遺構・遺物、安田講堂関連遺構と講堂建設以降に造成された道路と関連遺構を検出した。検出遺構と関東ローム層の堆積状況、江戸時代の絵図と明治時代以降の地図から台地の削平が確認できた。

1 面

現在のアスファルト舗装。下層に破碎礫を敷きその上にアスファルト舗装している。

2 面

3面に直接アスファルトを舗装し、表面にコンクリートを薄く塗り道路面になっている。

3 面

コンクリートを砕いた栗石の上にコンクリート流込み、上層にコンクリート舗装。

SX4、SX5はコンクリート基礎の上に柱状の基礎配置。SX4とSX5を配置してから舗装を行っている。SX4の西側壁面に残る帯はSX4を補強した金具の跡と考えられる。SX4、SX5上部は柱状でSX5近くに電線が埋設されていることから電灯の可能性がある。

4 面

3面では安田講堂の図面にある路面の排水溝「半月土管」と路面の傾斜は確認できないため、3面の道路造成時に4面の旧舗装は「半月土管」と共に撤去されたと考えられる。SX2は「第四号」の番号が付けられた排水柵。「第三号」の排水柵と接続する土管「四寸土管」を確認した。土管は図面通り、南側に傾斜している。SX2は、柵の掘方幅の溝を南北に掘削し、溝に柵と土管を配置している。SX3は「擁壁終結親柱」。3面のSX5基礎に隠れてSX3の基礎部分は確認できなかった。

5 面

関東ローム層検出面。安田講堂建設時の排水柵はこのレベルまで削平されている。3面造成時に削平されたと考えられる。江戸時代の遺構、SU1も同じ面で検出。

SU1は平面形が長方形の地下室。東側は共同溝の工事によって削平されている。北側に崩落した天井部が残る。SU1の深さは0.6mを測る。関東ローム層の観察から使用時、地下室の天井は検出した状況より高かったと考えられる。地下室の深さから、江戸時代の生活面は削平されたと考えられる。削平されたのは3面造成時に行われたほか、安田講堂の図面安田講堂建設時に行われたと考えられる。SU1から収納箱3箱の遺物が出土した。碗・皿・貧乏徳利・燈明具・植木鉢などの日常雑器が出土している。アワビ・ハマグリ・魚骨などの動物遺体も出土、当地点は加賀藩の長屋跡で旧居住者の生活を反映したものと考えられる。

4 区 外構及び1階建屋内設備トレンチ新設（18～20 図）

調査日：2013年10月23日～25日、11月11日

調査結果

4-3区西側でローム層の堆積を確認した。ローム層はやや明るい茶褐色土と粘性が強い暗褐色土が堆積、堆積は東に傾斜している。堆積状況からローム層の上層は削平されている事を確認した。4-3区南壁で地下室を思わせる垂直の立ち上がりを確認、覆土はレンガを含んでいるため明治時代以降の堆積土と判断した。この覆土は4-1区、4-2区、4-3区東側で確認した。4-3区、4-5区、4-6区は講堂建設による攪乱のためローム層と4-3区西側で認められた覆土は確認できなかった。

5 区 仮設事務所排水管埋没（21～23 図）

調査日：2013年9月26日

調査結果

工事掘削深度では埋蔵文化財を検出できなかった。

5-1区：道路基礎、上から石製タイル、コンクリート、砂利の順で堆積。掘削深度で土の堆

積確認できず。

5-2～4区（植え込み内）：堆積状況は同じで、0.2m表土（黒色土）、表土以下は灰褐色土で締りあり、砂利、割れレンガ含む。

6区 仮設電柱設置（24、25区）

調査日：2013年10月21日

調査結果

工事掘削深度では遺構を検出できなかった。明治16年陸軍参謀本部測量原図（国土交通省国土地理院所蔵2011『参謀本部陸軍測量局五千分一東京図測量原図』財団法人日本地図センター）によれば、調査地点近くに三四郎池の排水溝が通る。この排水の両脇に16mの等高線がある。現在の標高は16.96m。6区1、2の掘削深度は1.6mで江戸時代の地表面標高と考えられる標高16mの地表面の検出が予想されたが確認できなかった。標高16mよりも低い部分、排水溝部分に該当するか、この測量原図以降に掘削が行われたため地表面が確認できなかったかのどちらかと考えられる。

6-1区：直径0.6m、掘削深度1.6m。掘削深度は遺跡の検出面まで達せず。暗褐色土、褐色土等が水平に堆積。堆積土には締りがある。

6-2区：直径0.6m、掘削深度1.6m。掘削深度は遺跡の検出面まで達せず。隣接する共同溝に攪乱の可能性も考えられるが電柱1の堆積状況と類似しているため、攪乱の可能性は考えられない。暗褐色土、褐色土等が水平に堆積。堆積土には締りがある。出土遺物は近代以降の遺物で安田講堂の外壁に使用されているスクラッチタイルと磁器碗、断面が円形の鍔が出土。

6-3、4区：直径0.75m、工事掘削深度0.7m。遺跡の検出面まで達せず。

7区 生活排水用管路及び空調排水用管路

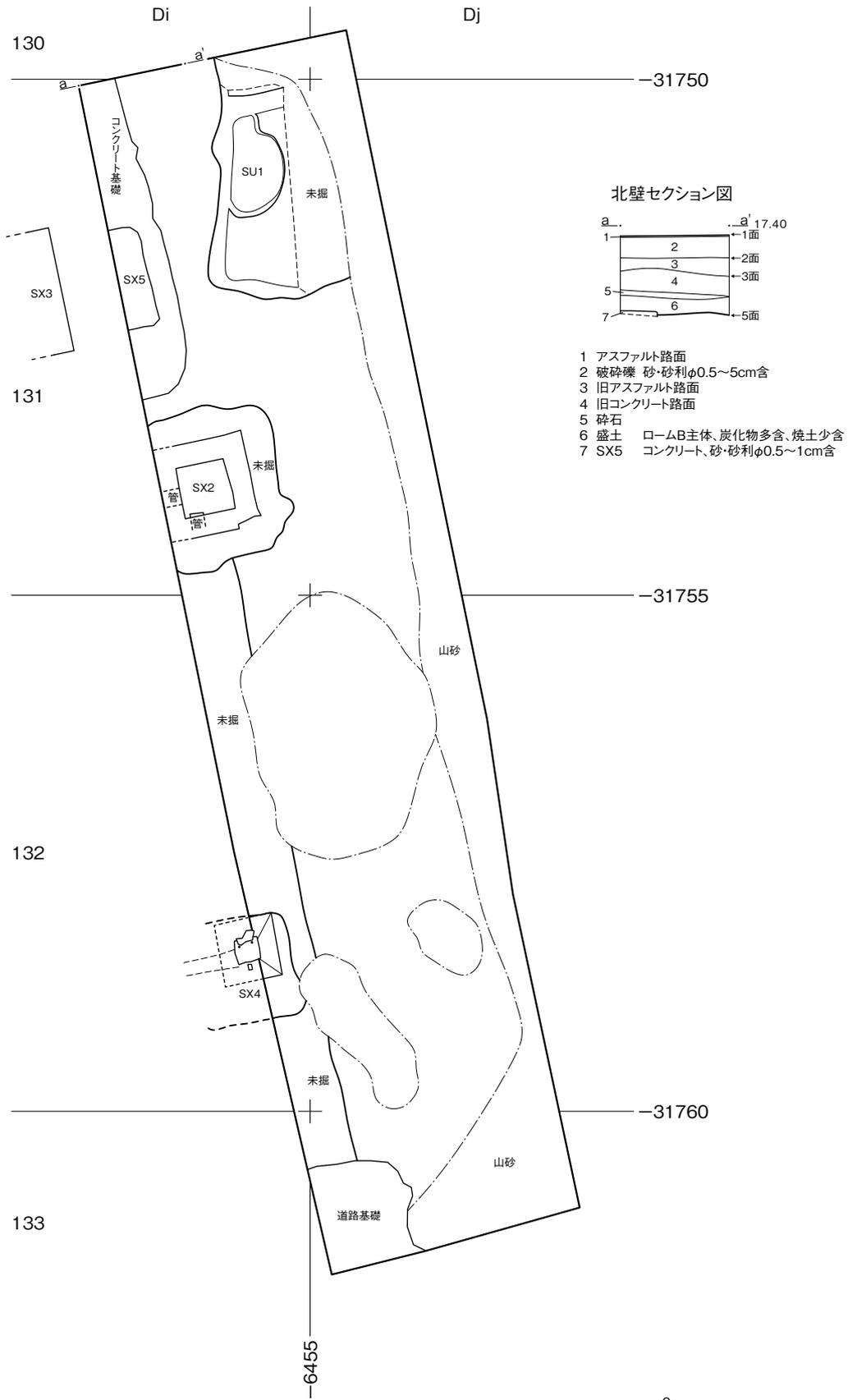
調査日：2014年11月11、13～15、18、19、27、28日、12月5、9、11、13、15、17日

調査結果

工事掘削深度では埋蔵文化財を検出できなかった。

3. まとめ

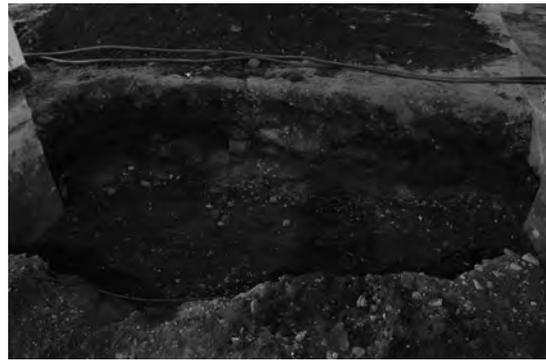
3区では江戸時代、安田講堂関連遺構、現在までの5枚の生活面を確認した。4区では関東ローム層の自然堆積層、明治時代以降安田講堂以前の盛土を検出した。安田講堂が建設されている崖部分は、検出した遺構・関東ローム層の堆積状況、江戸時代の絵図、明治時代の建築予定図面から、江戸時代に削平され安田講堂建設までに現在の状態に造成された事が明らかになった。



3図 3区平断面図



4図 1-1区



5図 1-4区



6図 1-5区



7図 1-6区



8図 1-7区



9図 1-8区



10図 1-9区



11図 1-11区



12 図 1-12 区



13 図 2 区



14 図 3 区 SU1 完掘



15 図 3 区 SU1 断面



16 図 3 区 SB2 完掘



17 図 3 区北側



18 図 4-1 区北壁



19 図 4-3 区西側



20 図 4-3区東側北壁



21 図 5-2区



22 図 5-3区



23 図 5-4区



24 図 6-1区



25 図 6-2区

4. 本郷 146・168 アカデミックcommons (HAC13)

所在地 東京都文京区 7-3-1 東京大学本郷構内 文京区遺跡番号 47 本郷台遺跡群範囲内

調査期間 2013年9月10日～2014年3月31日(1次)、8月13日～10月31日、11月25日、12月10、12日(2次)

調査面積 1,620㎡(1次調査:1,200㎡、2次調査:420㎡(本168図書館北西排水管新設工事部分(以下、「排水管地区」と略す)と合わせると475㎡))

調査担当 堀内 秀樹 清水 香

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、現存する総合図書館の将来的な書庫スペース不足に対応するため、図書館前に地下書庫の建築を計画した(1図)。建設予定地点は、文京区 No.47 本郷台遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、発掘調査の必要があった。当該地は、1984年に東京大学によって行われた(当時、臨時遺跡調査室)法学部4号館地点、文学部3号館地点に挟まれた位置とその南側が含まれており、また、近代に大学用地になって以降の土地の履歴などから、埋蔵文化財が遺存している可能性が強いと判断された。

発掘調査は2回に分けて行われ、1次調査は2013年9月10日から翌2014年3月31日に、2次調査は同年8月13日から10月31日、その付帯施設を11月25日、12月10、12日に行った。

2. 遺跡の概要

発掘調査の結果、近代、近世、縄文、旧石器時代の遺構、遺物が確認された(2図)。遺跡は南北に延びる本郷台地のほぼ頂部、調査区東側に文学部3号館地点を挟んで現在も湧水が湧く三四郎池へと続く非常に緩やかな斜面地に位置している。

近代の遺構・遺物は帝国大学時代に建設・利用された旧図書館建物とそれに伴う下水管や図書館焼亡に伴う関東大震災の焼土層などが確認された。

近世江戸時代は、加賀藩本郷邸に伴う建物跡、下水道、井戸、地下室、便所、硬化面、廃棄土坑、植栽痕など1次調査では約900基、2次調査では270基(排水管地区70基を含む)が確認された。また、これらに伴う遺物は、陶磁器類、瓦、金属製品、木製品、自然遺物などコンテナ箱に約100箱出土した(排水管地区7箱を含む)。

縄文時代は、詳細な年代は不明であるもののピット、土坑が5基とこれらの遺構に伴うものではなかったが、中期の土器片が少量出土した。

旧石器時代は、調査区北側 Ce164、Ce165、Cf164 グリッド、Cg164 グリッド、調査区南西側 Cd169、cd170、cd171 グリッドの武蔵野標準層位Ⅳ～Ⅴ層を中心に約90点が確認され、このうち Ce164、Ce165 グリッドではⅩ層からフレイクが数点出土した。

3. 出土した遺構・遺物

(1) 近代 (図3～7)

調査区南半には、関東大震災で焼亡した旧図書館基礎とそれに伴う施設が良好な状態で確認された。焼土と灰は旧図書館内に基礎を被うように広く確認された(6図)。特に灰は中央より東側に多く確認されており、蔵書の焼失の際に形成されたと推定される。図書館基礎は、関東ロームを掘り込み、そこに流し込んだコンクリートの上にレンガを12段程度積んだ外壁部分とその内部(南側)は西側では等間隔に約1m四方のコンクリートの上にレンガを調査では最大6段程度積んだ建物内床柱が確認された。床柱の状況は、東側と西側では異なる様相を呈していた。

旧図書館は、遺存している文献、建築図面によると明治25(1892)年に建築されたが、その後明治39(1906)年に書庫、明治41(1908)年に教員閲覧室・事務室、明治42(1909)年に本館北翼の増築が行われた。本調査ではこうした図書館の場所の違いとそれに対応した基礎構造の違いが明瞭に確認された。明治25年建築当初の図書館は、Cg-Chグリッド間に確認された大きなレンガ基礎を境に西側が学生閲覧室、右側が書庫であった。また、調査前までに噴水があった防火用水槽を取りまくように北へ突き出した部分は玄関と二階に増築された教員閲覧室は、使用荷重に応じて書庫→学生閲覧室→教員閲覧室の順に耐荷重による構造の違いが確認された。最も堅牢に構築されていた東側書庫部分(4図右側)では、西側で確認されている1メートル四方のコンクリート基礎とその上に積み重ねられたレンガの他に2メートル四方の基礎が確認されている他、外壁や閲覧室につながる内壁の構造も基礎幅が西側より広がっていた。

図書館基礎周辺では、館に付随する暖房用の配管、下水管などが確認された。暖房用の配管は調査区北東隅から西へ延び、図書館外壁手前で南へ折れ、北側張り出し部に接続している。この管は箱形に積み重ねられたレンガ積の格納施設内に中釣りにされた状態で配されており、図書館基礎の一部を壊して構築されていた。使われているレンガも高火度焼成のものが使用され、図書館建設時より新しい段階に追加された施設であると判断された。同時に暖房施設の東側にそれに沿って下水管が配されていた。暖房施設や下水管の接続している部分は明治41年に教員閲覧室が増築されており、その時点で暖房施設が導入されたと推定される。

図書館関係の他に上水道(SD102)とこれに伴う上水井戸(SE111)が確認された。SD102は、溝底から木樋の痕跡と木樋を固定した犬釘が一定間隔で確認された。犬釘は上方から打たれたものと下方から打たれたものとが確認されたことから、4枚の板を組み合わせ、底と蓋とを左右両方から固定した構造を呈していたことが判明した(7図)。SE111は籬の痕跡が明瞭に観察され、円形の縦坑の内側に少なくとも2段の底を抜いた桶を逆位で積みあげた構造をしていた。このうち上の桶にSD102が接続されており、木樋を通して流下した上水がSE111に溜まる構造になっていた。これらの遺構の坑底からはレンガ片が出土していることから近代以降の構築と判断でき、明治13年に再通水された千川上水に伴うものと推定された。

(2) 近世

近世の遺跡は、前述した旧帝国大学図書館とその後建設された防火用水槽とクスノキの大木、各種の管によって攪乱されていた。調査では近世の生活面は、2枚確認された。上面は、調査区北側を

中心に硬化面が拡がり、それに伴う便所、石組み溝、井戸などの遺構群は、中山道（現在の本郷通り）と同じ軸を持つものであった。この主軸方位は加賀藩本郷邸の御殿空間の建物軸であり、本調査区が御殿空間であったことが考古学的に判断された。

下面は、地下室、溝、土取穴、植栽痕などが多く確認されたが、遺構の主軸方位と切り合い関係によって2段階の土地利用の変遷が確認された。

①上面：溶姫御殿期（1827～幕末）（8図～14図）

上面は、調査区北側を中心に拡がる硬化面（A面）とそれに伴う遺構とで構成される。硬化面は2～3枚の薄い層を版築状にし、10～15cmの厚さで構築されていた。これに伴う主な遺構は、Cg165～166、Ch165グリッドにかけて確認された石組み溝（SD1）、便所遺構（SK109、SK123、SK139、SK204、SK646、SK672）、井戸（SE188、SE852）、土坑（SK122）などが確認された。これらの遺構の多くは焼瓦を多く含む焼土層が伴っていた（13、14図）。

これらの遺構は、現存している絵図面（金沢市立玉川図書館蔵「江戸御上屋舗惣御絵図」など）より文政10（1827）年に徳川將軍家から加賀藩に入興した溶姫の御守殿に伴う遺構群であると判断された（9図）。記録からこの御守殿の多くの殿舎は、明治元（1868）年の火災によって焼失している。

御殿空間内であることから、日常生活による廃棄遺物は少なく、この段階の出土遺物はほとんど明治元（1868）年の火災に伴うものであった。

・石組遺構（SD1）

調査区北東から西へ延び、南方へ折れるが、コーナーを面取りをするように斜方向に折れている（10図）。溝内上部には焼瓦を多量に含む焼土層が堆積しており、明治元（1868）年の御守殿全焼によって廃絶したことが判明した。組まれていた石は、自然石やいわゆる間知石の他に規格、石材のバリエーションが多く確認できたことから、他からの再利用が推定できた。間知石が使用されていた部分では、最大4段の石が積まれていた。この石組は1984年の文学部3号館地点の調査でも確認されており、文学部3号館地点内で東から北方へ折れることが判っている。遺構の構造、傾斜などから御殿回りの排水溝であると考えられる。

金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷絵図」には御守殿長局外周を流れる溝状の施設が描かれており、SD1はこれに相当すると考えられた。

・便所遺構（SK109、SK123、SK139、SK204、SK646、SK672）

6基の便所遺構と推定できる遺構が確認されている。いずれも径1m程度の掘り込みに桶状木製品が埋められており、その底部には白化した便と思われる堆積土が確認されている。遺存状態の良好なSK204、SK646、SK672には白化した堆積土の上部に明治元年も火災と思われる焼土層が認められた（11図）。

このうちSK204からは、複数本の筥、鏡、銭、肥前磁器皿（12図）、SK646からは瀬戸・美濃磁器碗、SK672からは筥、銭、肥前磁器皿、瀬戸・美濃産徳利などが出土しており、特に筥、鏡など女性が使用する遺物が多いことから、当該地が奥御殿地域であったことが傍証できる。

これらの遺構は、位置関係から『江戸御上屋舗惣御絵図』に記載されている便所との対応ができた。SK109、SK123は「三之側続長局」、SK204、SK646、SK672は「三之側長局」にある便所であると推定された（9図）。

・井戸（SE188、SE852）

2基とも堀方の径がやや大型のもので、井戸側に使われた桶が確認されている。覆土には焼土が多く充填されており、明治元年に廃絶されたと判断された。

これらの遺構も位置関係から「江戸御上屋舗惣御絵図」に記載されている井戸との対応ができた(9図)。SE188は「三之側続長局」の北端、SE852は「三之側長局」北西端にある井戸と推定された。また、文学部3号館地点からも「三之側続長局」東北隅に描かれている井戸が確認されている(S8-52号井戸)。

②下面：詰人空間期(15図～21図)

ローム面(C面)と調査区北側の一部にローム面の上に確認できた黒色土(B面)から確認された遺構を下面とした。これらの遺構の多くは現在の春日通りと同軸であり、これは18世紀以降は詰人空間軸であることが判っている(「詰人空間新期」)。また、切り合い関係から古いいくつかの遺構は、御殿空間やこの詰人空間の遺構軸とも異なっていた(「詰人空間古期」)。

主な新期の遺構は、地下室(SU33、SU94、SU108、SU125、SU145、SU146、SU187、SU205、SU247、SU248、SU292、SU293、SU400、SU427、SU585、SU600、SU775、SU777、SU844など)、植栽痕(SK2、SK18、SK25、SK284、SK315、SK338、SK463、SK488、SK518、SK545、SK555、SK570、SK580、SK658など)、溝(SD221、SD223、SD225、SD435など)、硬化面・焼瓦層(SX274)、ピット列、土坑、その他、詰人空間古期の主な遺構は、溝(SD6、SD276、SD435)、土坑(SK872)、道路状遺構(SX1261)が確認された。

○詰人空間新期(15図～19図)

本調査区は、文政10(1827)年以前は詰人空間にエリアになる。前述したようにこの段階は春日通りの軸で遺構が構築されているが、長屋建物に沿った遺構配置であったものと考えられる。

この段階に属する遺構が最も多かった。天井のある地下室はこの段階のみ確認され、例えばSU33、SU94、SU292、SU293やSU205、SU247、SU248など狭隘な地域に繰り返し地下室の作り替えが行われた事が窺える。また、植栽痕も多く確認されたが、本調査では大型で深いものが特筆される。

・地下室(SU125、SU146、SU187、SU200、SU600、SU775、SU33、SU94、SU293、SU844)

地下室は、総じて入口、室部の構造、大きさなどの規格性が少なかったが、SU125、SU187、SU600、SU775とSU146、SU200は約10間を隔てて列状に一定間隔で同規格に構築されており、同時期の長屋建物に付属して構築、機能していたと推定できた(16図)。また、これらは覆土に焼土が多く含まれており、出土遺物の年代から元禄16(1703)年の屋敷の火災に伴うものと推定された。これらと類似した6基の遺構群が文学部3号館地点から確認されている(北からU3-1号土坑、U4-2号土坑、U6-5号土坑、T7-10号土坑、T8-10号土坑、T9-1号土坑)。規格、主軸がほぼ同様で列状に確認されており、これらの覆土にはいずれも焼土が多量に含まれていた。現存している絵図面「武州本郷第図」(前田育徳会所蔵)と照射すると当該地付近を南北に描かれている三棟の長屋建物の西側「與力並」と書かれた長屋に伴うものが、SU146、SU200の列で、SU125、SU187、SU600、SU775の列は中央「従者並」と書かれている建物に伴う遺構と考えられる。

また、SU33、SU94、SU293、SU844からは多量のかわらけ、焼塩壺、食物残渣などが出土している。共伴する陶磁器は、SU94は17世紀後葉、他は18世紀前葉に比定でき、これらは当該期に近接する御殿で行われた儀礼後の廃棄と思われる(17図)。西接する法学部4号館地点のB10-1号土坑、C7-2号土坑(地下室)、C7-3号土坑(地下室)ではほぼ同時期に同様の廃棄が確認されており、調査区付近がこうした儀礼の後の廃棄場所であったことが窺える。

・植栽痕(SK2、SK284、SK463、SK518、SK570、SK488、SK658など)

平面形が円形を呈し、坑底や壁の凹凸が顕著で、坑底中央が凹みを有するものや坑底にドーナツ状の溝が確認されるなどの共通性がある。本調査ではこれらの特徴を持つ遺構が多く確認されたが、そ

のほとんどが本期に属している。

確認されたこれらの遺構のうち直径約3m、深さ1mを超えるような大型の土坑が、いくつか確認されたが（SK2、SK284、SK518、SK570、SK658など）、中でも最大級のSK284やSK518では、壁の一方にスロープ状の傾斜が付けられていた（18図）。これらは、詰人空間内に大型の樹木が存在し、多頻度で植え替えなどの行為が行われた事を示している。

・硬化面・焼瓦層（SX274）

1次調査区西端Bt167,168、Ca167,168グリッド付近から確認されている。これは法学部4号館地点から連続しているものであるが（F7-3号遺構、G7-7号遺構など）、今回の調査でローム直上に一時期の生活面として利用された貼床状の硬化面があり、その上層はその後の火災（おそらく安永元（1772）年）に伴う多量の焼瓦廃棄層を含む版築層であることが確認された（19図）。

・道路状遺構（SX1261）

2次調査区東端に確認された。遺構は調査区外に続いており、全体の様子は窺えなかったが、CIライン付近から東側に硬化面が東側に向かって落ち込んでいた。遺構は、ロームを掘り込んで作られており、やや凹凸の有する坑底は薄く茶褐色を呈した土で突き固めて硬化させていた。壁は、落ち込み始める東側および南側のみ確認され、坑底からやや丸みを帯びて立ち上がっている。遺物も少なく年代的な判断は難しいが、位置的に溶姫御殿期であれば建物内になるため、それよりは古いと推定している。

○詰人空間古期（20図～21図）

今回の調査の中で、江戸期の遺構の中で切り合い関係から古い遺構群は、先述した現本郷通り軸、現春日通り軸とも異なる遺構軸を持つものであった。

確認された遺構は少なかったものの、調査区を南北に貫く溝群（SK6、SD276、SD435、SD661）とその周囲に土坑が確認された。

・溝（SK6、SD276、SD435、SD661）

溝状遺構は、調査区を南北に貫くSD435とその西側にSD435に沿って3基の遺構が確認された（SK6、SD276、SD620）。

SD435は、土層の観察から古期、中期、新期の3回の作り替えが想定された。古期から中期段階は、溝底に一定間隔で掘られた土坑から柱痕が確認されていることから（SK1104など）、板塀などの区画施設の可能性があると思われる（21図）。新期は板塀状施設の東側に幅広の溝状遺構の溝底を突き固めた硬化面が伴っていた。その性格は明確ではないが、あるいは塀脇の道状遺構とも考えられる。

この段階の遺構から出土する遺物は多くはないが、17世紀中葉以前の陶磁器が伴っており、本郷邸拝領初期に該当すると思われる。

（3）縄文時代（23図）

縄文時代に比定される遺構・遺物は少ない。遺構では数基の小ピットと倒木痕と考えられる落ち込みが1基であった。遺物は、遺構に伴って出土していないが、縄文時代中期、晩期の土器片が確認された。

（4）旧石器時代（22図～23図）

本調査区の地形は本郷台地中央から東側に緩やかに下る緩斜面地に立地しているが、文学部3号館地点を隔てた東側には湧水（現在の三四郎池）が存在し、同地点内で急激に傾斜している。文学部3

号館地点では中央の地形転換部分付近から、Ⅲ～Ⅳ層を中心として黒曜石、チャートの4箇所の遺物集中区と1箇所の礫群が確認されている。

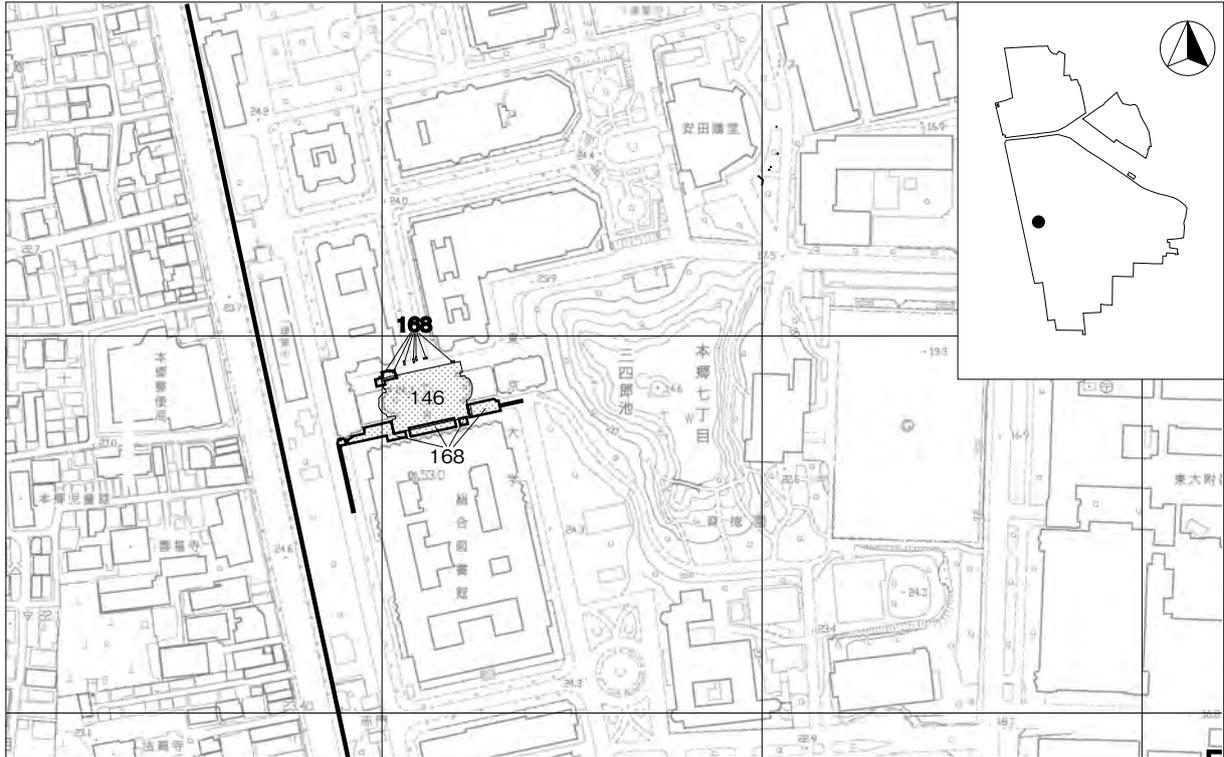
調査では旧石器時代の遺物の有無と地形確認のために、4ヶ所の試掘溝を設定して調査を行った。このうち調査区2、3、4、5において旧石器時代の遺物が確認された。調査区2ではⅢ層～Ⅴ層にかけて黒曜石、チャート、安産岩のフレイクが十数点とⅩ層から安産岩製のフレイク2点(22図)、調査区3ではⅣ層からチャートのフレイク、調査区4ではⅣ～Ⅴ層にかけてナイフ型石器、黒曜石、チャート、安産岩のフレイクが合計45点、調査区5ではⅣ～Ⅴ層にかけて黒曜石、チャート、安山岩にフレイクが27点確認された。

4. 調査の成果と課題

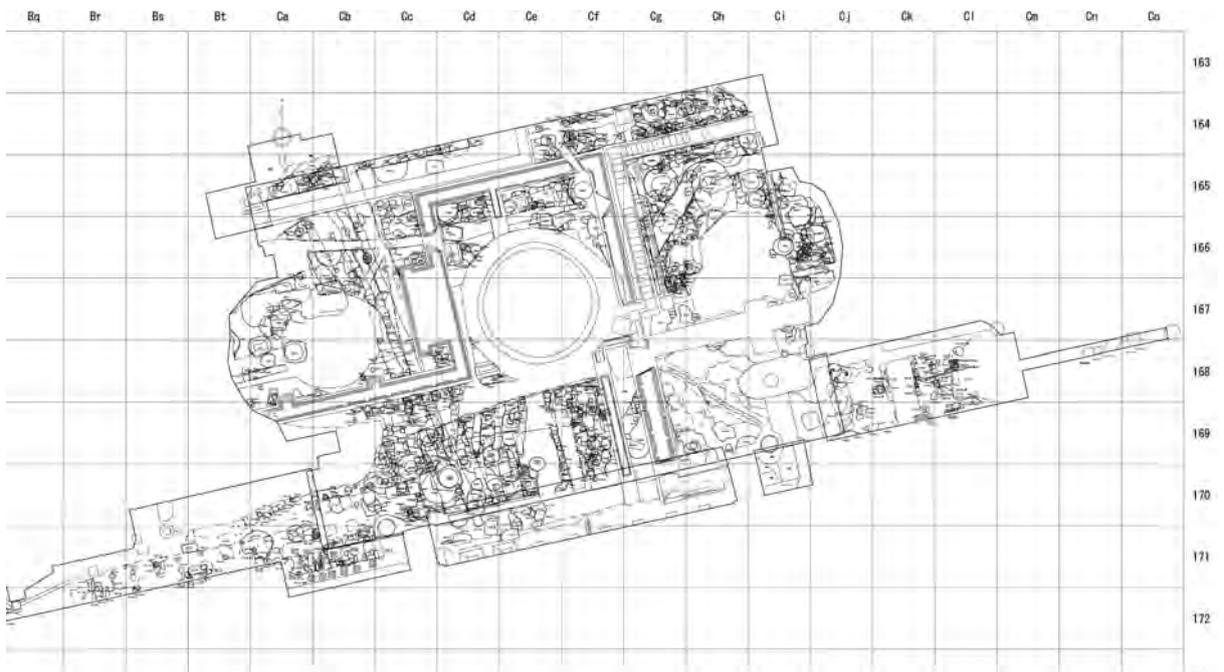
本調査は、1984年に行った文学部3号館・法学部4号館地点の中央に位置する場所であった。この調査は東京大学が江戸遺跡を初めて調査を行った地点の一つであり、当時は時代的にも考古学的な情報や研究の蓄積も限られていた。加賀藩本郷邸においても、近世遺構の構造や土地利用、あるいは遺物の年代観など基本的な情報が欠落していた。今回、両地点の中間の調査が行えたことで、前の調査との整合性や連続性などについて再検証を行えたことは成果であった。また、御殿空間に近い部分の土地利用が結果的に広域に復元できたことの収穫も大きい。今後はこれらの点について細かい検証を踏まえて、当該地を含めた藩邸の復元を課題としたい。

参考文献

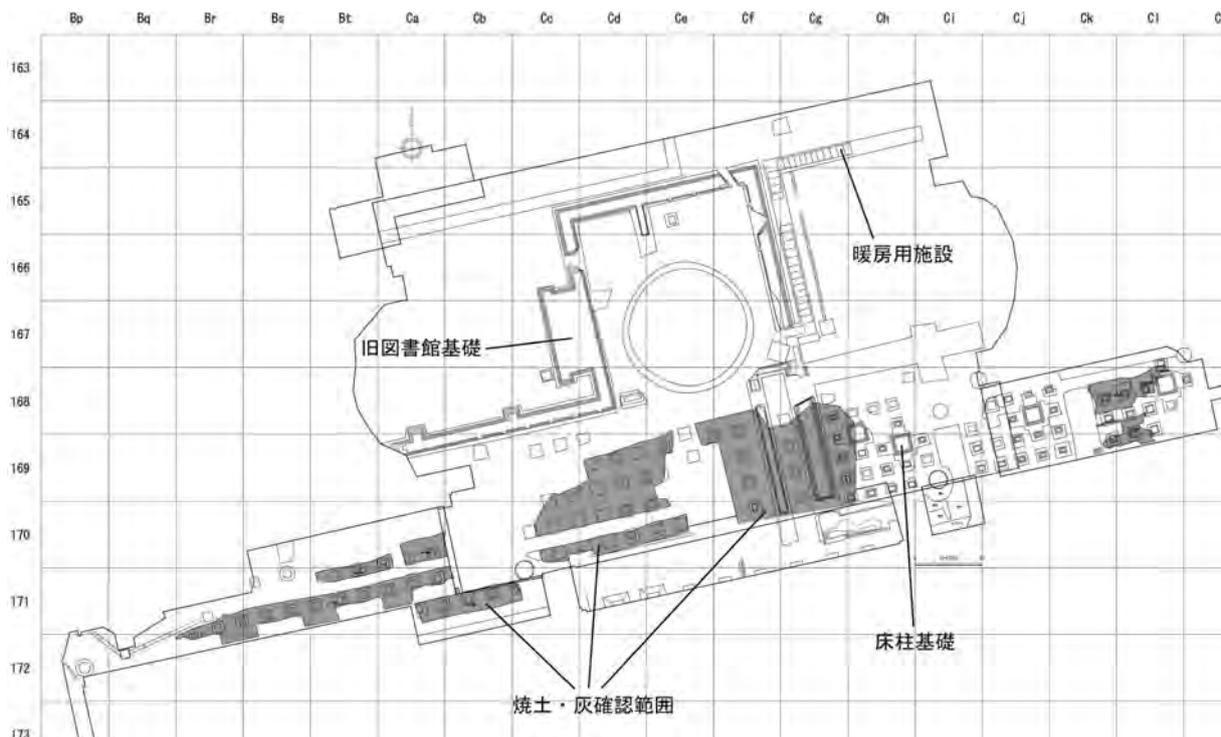
東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』



1 図 アカデミックcommons地点の位置



2 図 アカデミックcommons地点の遺構全体図



3 図 近代遺構配置図



4 図 旧図書館レンガ基礎



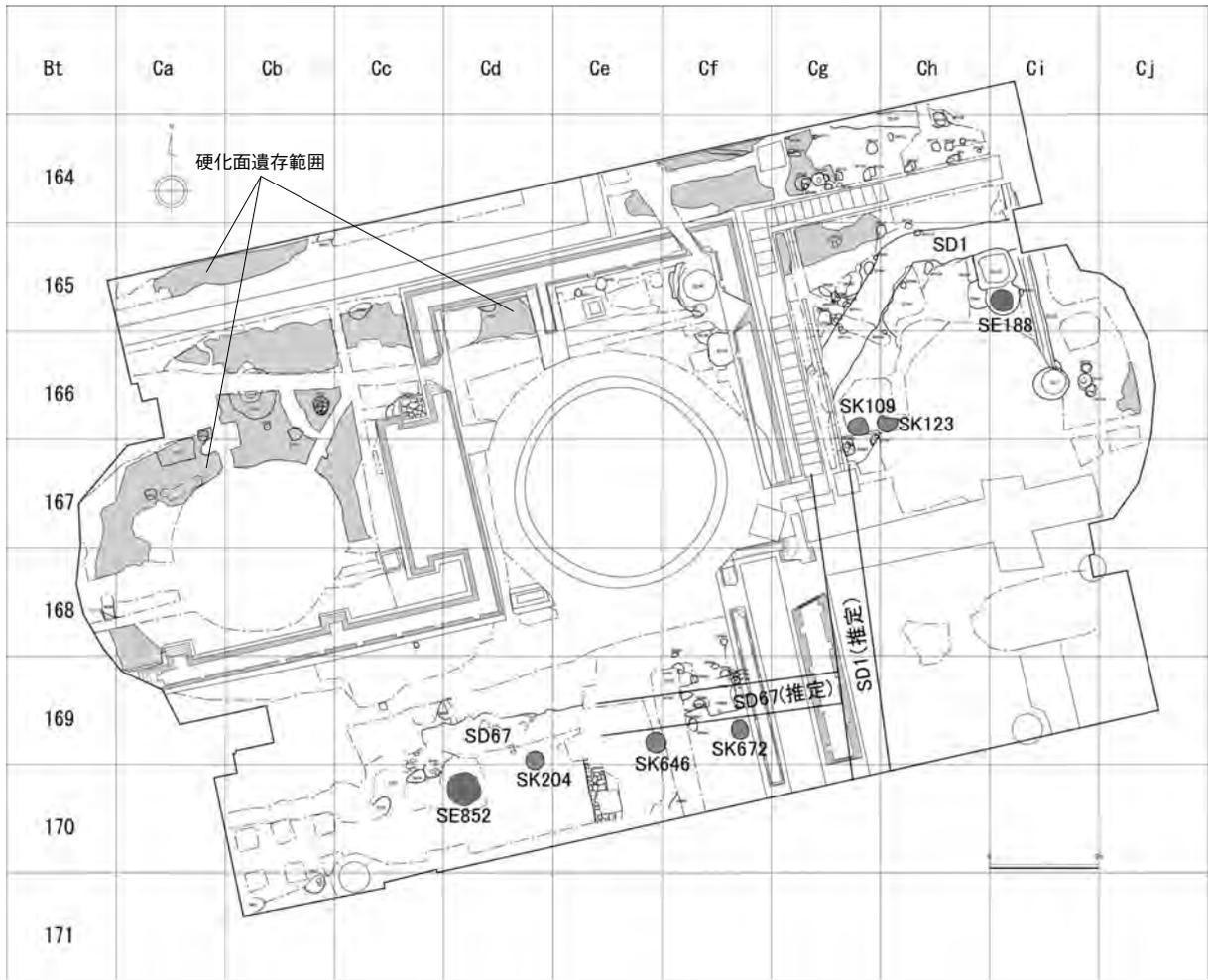
5 図 旧図書館基礎のレンガ積



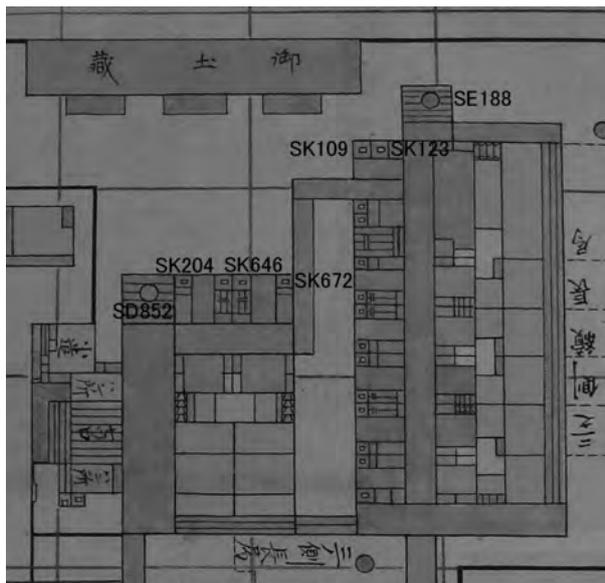
6 図 旧図書館基礎内の焼土と灰



7 図 木樋の痕跡と
並んだ犬釘 (SD102)



8 図 溶姫御殿期遺構配置図



9 図 溶姫御殿と遺構配置図

(金沢市立玉川図書館所蔵「江戸御上屋鋪惣御絵図」に加筆)



10 図 石組み溝 (SD1)



11 図 SK204 (便所遺構) の構造



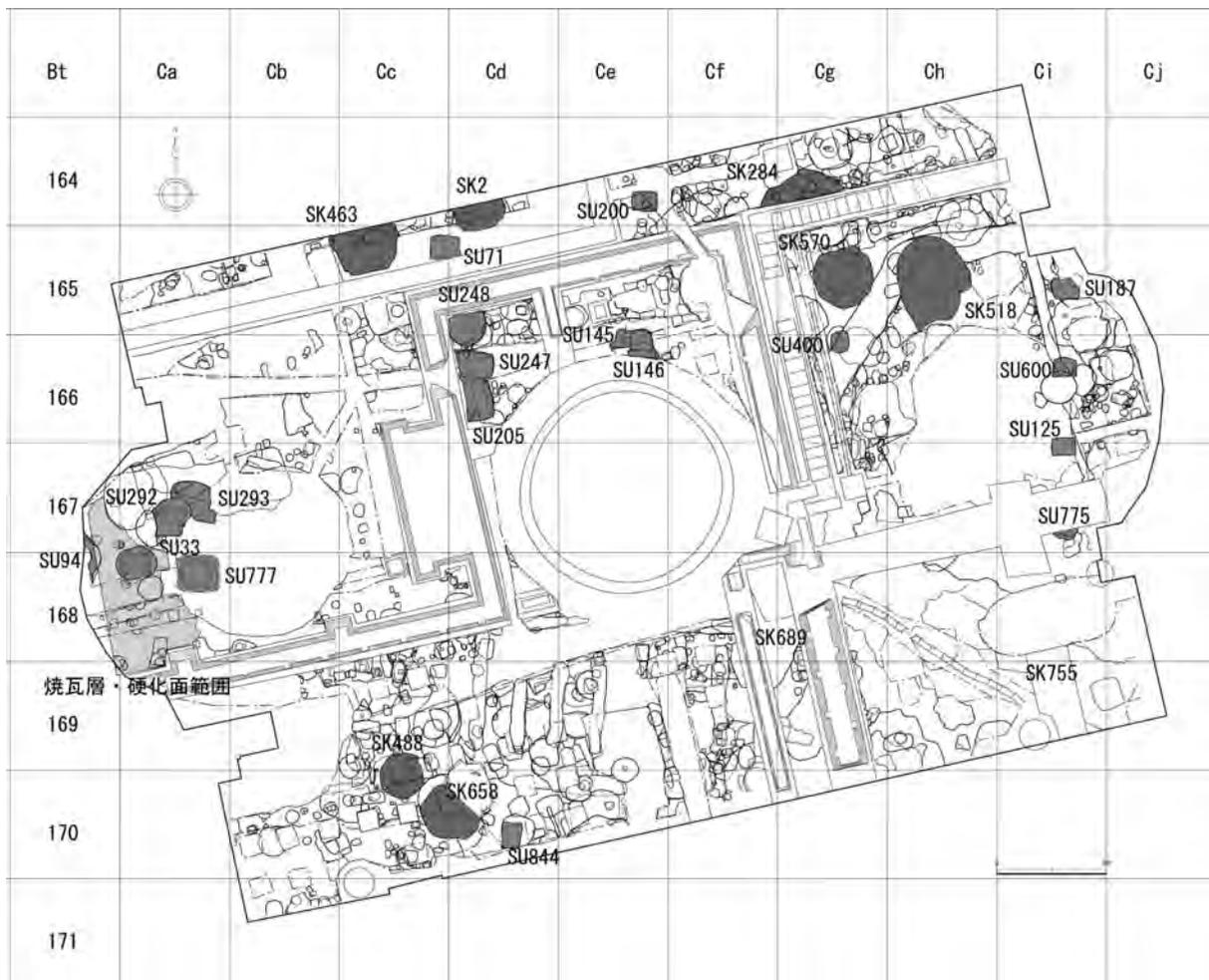
12 図 SK204 出土遺物 (簪と鏡)



13 図 SE188 (井戸) に廃棄された焼土と焼瓦



14 図 SE188 から確認された井戸側



15 図 詰人空間新期遺構配置図



16 図 列状に並ぶ地下室 (SU125)



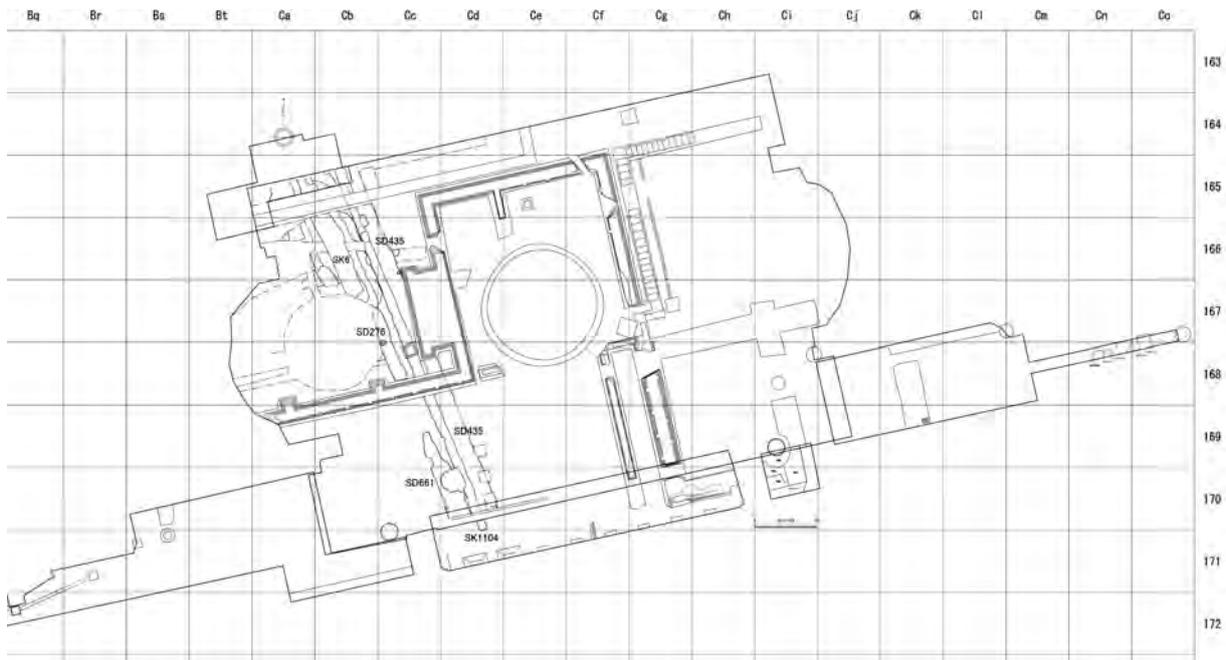
17 図 かわらけが多く廃棄された地下室



18 図 片側にスロープを持つ大型の植栽痕



19 図 硬化面 (手前) と焼瓦層



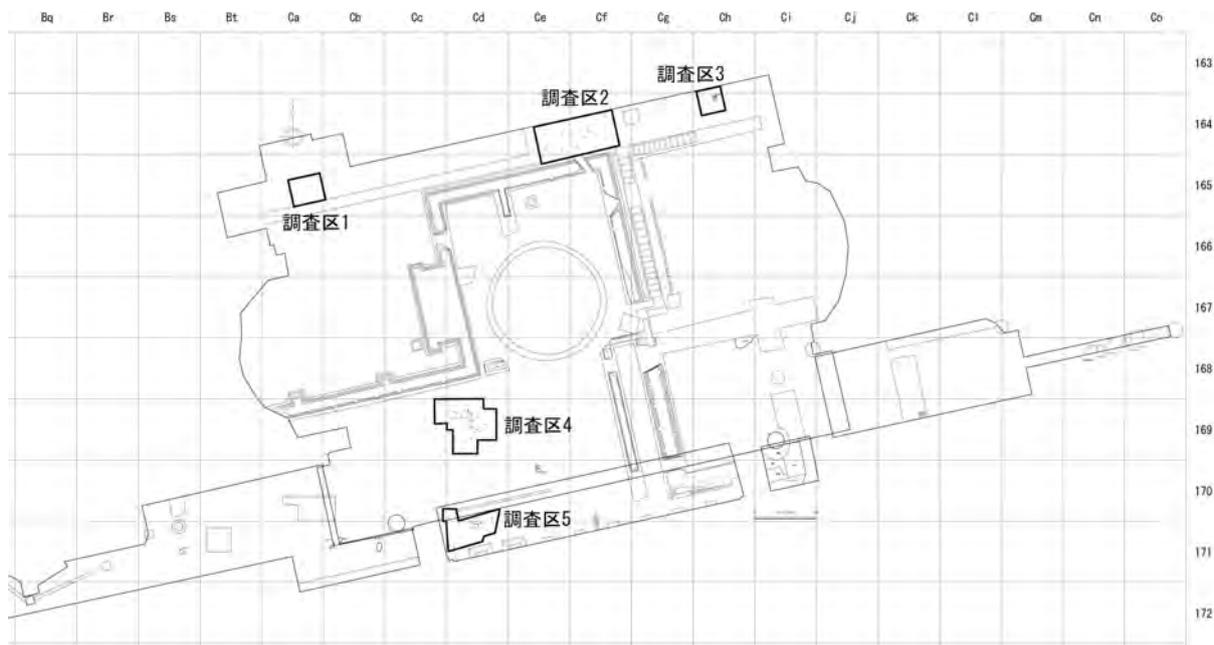
20 図 詰人空間古期遺構配置図



21 図 SD435



22 図 旧石器時代調査区 2 遺物出土状況 (調査区 2)



23 図 縄文時代遺構配置・旧石器時代期調査区配置図

5. 本郷 148 国際科学イノベーション総括棟新営 (HIN14)

所在地 東京都文京区本郷 7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群)

調査期間 2014年1月14日～7月23日、8月18～8月21日

調査面積 1,480㎡

調査担当 大成 可乃 小川 祐司 香取 祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学では、本郷構内病院地区に国際科学イノベーション総括棟（仮称）の新営を計画していた。本郷構内は、全域が文京区 No.47 本郷台遺跡群、および No.28 弥生町遺跡群内に位置しており、これまで 200 件を超える発掘調査が行われ、旧石器時代から近世まで遺構・遺物が良好に残されていることが判明している。

建設予定地点は医学部東研究棟、西側の内科研究棟に囲まれた中庭に位置する。これまでも周辺で多くの調査が行われており（1 図）、江戸時代を中心とした遺構・遺物が多数検出されている。また本 74 医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期、本 101 ドナルド・マクドナルド・ハウス東大から旧石器、本 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期、本 19 医学部附属病院看護師宿舎、本 21 医学部附属病院 MRI-CT 棟、本 48 医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期、74 医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期、101 ドナルド・マクドナルド・ハウス東大、本 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期などから、古墳時代の住居址が多数検出されている。このことから建設予定地点に対しても埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要があったため、2013 年 7 月 23～7 月 26 日に 48.4㎡の面積に対して試掘調査を行った。

試掘調査の結果、当概地点には数枚の生活面が良好に遺存していることが判明したため、2014 年 1 月 14 日～7 月 23 日に本調査を、8 月 18 日～8 月 21 日北東隅、水槽下の追加調査を行った。

2. 調査の方法

東京大学埋蔵文化財調査室では、2013 年度調査より平面直角座標系（世界測地系）第Ⅸ系を使用した 5m メッシュのグリッドを本郷構内全域に設定している。南西隅を基準に Aa1 を基点（ $X = -6800$ 、 $Y = -31100$ ）とし、東西方向は 200m ごとに先頭アルファベットを B、C、D・・・と大文字で送り、末尾を 5m 単位で小文字 a～t を循環した 2 文字で表し、南北方向は南へ 5m 単位で増番を付している。

本調査区は東西方向に Gs から Hi、南北は 151 から 158 に位置する。Gs151 グリッドは $X = -6110$ 、 $Y = -31850$ である。

掘削は始めバックホーを使用し、表土を除去後、人力による遺構の検出、掘削、各種図面の作成、トータルステーションによる電子平板測量を行った。

表土除去の結果、調査区の北側と南側では堆積している土層に大きい違いが認められた。これは後述する大型の遺構（SX270）によるものであったが、調査開始時点では、調査区内で利用状況に大きい差異ないし、地形の改変も予想されたため、155 ラインを境に以南を南区、以北を北区と設定し、南区では上面から 1～3 面、ローム面、北区では A～C 面、ローム面とし遺構確認を行った。

調査終了時点で、北・南を通る基本層序の把握から、上位より 1 面 = A 面、2 面 = B 面、3 面 = C 面、



- | | | | |
|----|-------------------|------|-------------------|
| 19 | 医学部附属病院看護師宿舎 | 91 | 医学部附属病院立体駐車場 |
| 21 | 医学部附属病院MRI-CT棟 | 97-1 | 基幹整備（流域⑧排水）A区 |
| 25 | 医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場 | 97-2 | 基幹整備（流域⑧排水）B区 |
| 48 | 医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期 | 101 | ドナルド・マクドナルド・ハウス東大 |
| 74 | 医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期 | 113 | 医学部附属病院入院棟Ⅱ期 |
| 87 | 東京都下水道工事 | 125 | クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期 |

1 図 周辺の調査地点（1：2000）

ローム面の4枚の層序関係が判明したため、以下上位より1～3、ローム面と呼称し記載する。

3. 遺跡の概要

今回の調査では、合計921基の遺構とコンテナ344箱の遺物が検出されている。古墳時代に属すると思われる住居址を含む遺構6基とコンテナ3箱の遺物以外は、近世江戸時代に属すると思われる。

遺構の種別は地下室、井戸、植栽痕、土坑、柱穴列、溝などであり、江戸時代を通じて当概地点に存在した、富山藩上屋敷に関連した遺構と遺物と考えられる。

以下各面について検出された遺構の概要を述べる。

(1) 1面の遺構

調査区南側の礎石群、土蔵基礎と思われる建物跡（SD62、SD68）、焼土、焼けた瓦を多量に含んだ上水施設と思われる土坑（SK63、SK186）、礎石を伴う建物跡と思われるSK213・SK215などが検出されている（2図）。

礎石群

調査区南東部分に約10m×10mの範囲で検出されているが、東側・南側は調査区外へ広がってい

るとされる。これらは重複して検出されており、数回の立て替えが行われていると考えられる。個別の遺構規模は概ね 60～120cm の円形に近いプランを有し、断面形状は浅い弧状を呈するものが多い。遺構の南北主軸は N-9° -E である。中央部に比較的大規模の川原石を据え、周囲に栗石として角礫などを使用しているもの、または川原石を数個使用しているものなどが存在する。

SD62・SD68

土蔵など堅牢な建物の基礎と考えられ、幅 80～100cm 程度の布掘り溝内に礎石を据えている。SD62 は径 60cm 程度の川原石を多く使用し、5～7 段積み重ねられている。SD62 に類似した SD68 は遺構軸、規模、使用している礎石などが類似するが 1～3 段の積み重ねで構築される。同一遺構の可能性が考えられるが、中央部が攪乱されているため確定はできない。構築時期の違いなどを含め検討する必要がある。

SK63、SK186

木枠を使用し井戸に類似する形態であるが、SK63 は上面から 1.4m、186 は上面より 1.5m で底部が検出されている。このことから上水桶などの施設であった可能性が考えられる。埋土は焼土ブロック・焼け瓦を多量に含んでおり、火災後の廃棄が考えられる。陶磁器類はごく少量であるが、焼けた瓦は棧瓦を含んでおり、19 世紀に廃絶されたと考えられる。

SU214・SU926

SU214 は調査区北東側に検出された地下室である。東側を近代の水槽に攪乱されており、一部のみ検出された。SU926 はその水槽下から検出されており、遺構軸、深度などから同一遺構の可能性が考えられる。SU214 も上述した SK63・SK186 同様に焼けた棧瓦を含み、出土した陶磁器類から 19 世紀前半の廃絶が考えられる。

SK213・SK215

He153・154、Hf153・154 グリッドで検出された一辺約 4.3m の方形の礎石を伴う遺構である。礎石の多くは径 60cm 程度の川原石を等間隔に据えており、基礎と考えられる。入れ籠の状態 SK215 が検出されるが同一遺構と考えられ、中央部を 2.8m、四辺を 1.5m 掘りくぼめた建物跡と思われる。

(2) 2面の遺構

大型の建物跡 (SB200)、土坑 (SK78・SK91・SK573)、植栽痕などが検出されている (3 図)。

SB200

He155・156、Hf155・156 グリッドで検出される建物跡と思われる。最上部にロウソク基礎に類似する縦長の石を据え、下部に川原石、角礫、瓦を敷き詰められている。掘方の深度はロウソク基礎上面から北辺、西辺は 1.5m 程度、東辺は 2.5m、南辺は 3.4m となっており、差異が認められる。これは後述する SX270 により、下部に地山が存在しないことに起因すると推測される。

SK78・SK91・SK573

3 遺構ともに類似する形態を持つ。外形プランは約 135 度で屈曲していることから、八角形の平面が推定され、内側は円形を呈すると考えられる。断面形状は逆台形型である。底部・壁には 5cm の黒色土を貼っている。埋土は大きく 2 層に分かれ、下位の土層は底面から 40 cm 上でフラットな面が形成される。上位の土層は水付きローム、砂礫を主体とした覆土で埋め戻されている。下部の埋め戻しと上部の埋め戻しには時間差があったと考えられるが、整合面で遺構は検出されていない。

植栽痕

調査区中央付近で多数検出されている。平面プランは概ね円形で、直径 1.3m から 2.3m であり、

逆台形の断面形を有している。

(3) 3面の遺構 (4 図)

礎石群、礎石列、植栽痕、土坑 (SK217・SK450)、性格不明の大形遺構 (SX270) が検出されている (4 図)。

礎石群

礎石の検出範囲は He ~ Hg、155 ~ 158 グリッドの範囲で検出されるが A 面礎石群、B 面 SB200 による攪乱を受け、建物規模などは判明していない。

礎石列

He153 ~ 155 グリッドで検出される。平石を 1.8m 間隔に据えている。上部が攪乱されるため、遺構プラン全体が遺存していたものは少ないが、東西方向に長軸を持つ溝状の掘方が検出されていることから、支柱以外に控えの柱を有する塀などの施設の可能性も考えられる。形状は大形の川原石を使用した遺構と、礎石の抜き取りと思われる遺構が混在している。

植栽痕

グリッドライン 153 以南、Hd ライン以東で検出される。156 ライン以北で検出されている植栽痕は、上部攪乱のため確定できないが、上述 2 面の植栽痕と時期を同一にする可能性も考えられる。

SK217・SK450

He153・154、Hf153・154 グリッドで検出された長方形の土坑である。SK217 は長軸 8m、短軸 1.3m で東西を主軸とし、SK450 は長軸 6.5m、短軸 1.3m で南北に主軸を有する。底部レベルはともに T.P.12.9m 前後であり、北西を隅とする鍵状に検出されているが両遺構間には幅 50cm の隙間を持ち、接続はしていない。断面形状も両遺構ともに南北・東西が箱形で壁は 90 度に近く立ち上がる。

SX270

調査区南東で検出された大形の遺構である。検出規模は東西、南北ともに 12m 以上で東側、南側は調査区外に続いていると思われる。

深度は確認面より 8m を超え、底部標高は T.P.5.8m と極めて深い遺構である。北側・西側の壁面は約 75 度の傾斜で立ち上がり、壁面は平滑に整形される。検出範囲の北東隅側から西へ下る 1.5 m 巾の階段を持ち、傾斜角 15 度で西壁に至り、東西 2.1m、南北 1.5m の長方形の踊り場状の平場を持ち、南南西へと明確な段差を持たないスロープで底面に至る。

この遺構は関東ローム層を貫き、砂礫層に至っており、坑底は水による影響か鉄分化し、鬼板状に硬化している。遺構の埋土は大きく 4 層に分かれ、上部よりロームブロックを中量含む暗褐色土層、ロームブロック (水付きロームを含む) 主体層、焼土ブロック・粗粒を含む黒褐色土層、水分を多く含む粘性の高い黒褐色土となっている。出土した遺物は陶磁器類がコンテナ 216 箱、木製品が 35 箱である。陶磁器の多くは上から 3 層目の焼土ブロック・粗粒を含む黒褐色土層が主である。木製品は最下部の水分を多く含んだ黒褐色土から出土している。出土陶磁器の年代から、焼土ブロック・粗粒は元禄 16 (1703) 年の火災に由来することが推定されるが、やや新しい 18 世紀前半の陶磁器類も出土しており、火災の 1 次廃棄ではない可能性も考えられる。木製品の多く出土した最下層は粘土・シルトが互層状を呈しており、幾度かの雨水、湧水などによる溜水があったことが考えられる。

(4) ローム面の遺構

地下室、井戸、溝、柱穴などが検出されている (5 図)。攪乱により上部の包含層が失われ、遺構

確認面がローム面となった遺構を含んでいる。これらは遺構の関連性や出土遺物の精査から、帰属する面が変更する可能性がある。以下特徴的な遺構について説明を行う。

SU51

Hd157・158、He157・158 グリッドで検出された地下室である。遺存範囲は南北 5.5m 東西 3.7m の逆コの字状で、東側が SX270 により攪乱される。遺構深度は確認面より 2.5m で南東側に非常に精緻に整形された東から西へ下る階段を有し、壁面、底部とも平滑である。埋土は SU51 の上部に存在した古墳時代の住居址の埋土および、ロームブロックを多量に含み、周囲の近世期の遺構の中では、最も古い遺構である。

SU301

調査区北端 Hb・Hc・Hd151 グリッドで検出された大型の地下室である。北側は調査区外へ広がっていると考えられる。東西 12m である。南壁面沿いに東から西へ下る階段が設えられる。遺構の深度は確認面より 2.5m となっており、西壁はやや袋状を呈している。埋土は大きく 3 層に分かれ、最上層はロームブロックを多く含む暗褐色土、中位に貝殻・骨などの食物残渣および陶磁器類を多く含む暗灰褐色土、最下層が焼土ブロック・粗粒を少量含む暗褐色土である。出土した陶磁器類はコンテナ 39 箱で、17 世紀後半の遺物が主である。

SU888

調査区の西側 Ha152・153 グリッドで検出された地下室である。西側が既存の建物に攪乱されるが南北 4.1m、東西 3.2m の方形を呈している。確認面から坑底までは約 80cm であるが、上部が攪乱されており、本来の遺構上面はさらに上位であったと考えられる。壁、坑底ともに工具痕が確認されている。出土した陶磁器類はコンテナ 5 箱で 18 世紀前半の遺物と考えられる。

SE1

Hd157 グリッドに検出された井戸である。南側が現代の基礎に攪乱されるが、概ね直径 1 m の円形プランと思われる。北東側壁に上下 35cm 間隔の足かけ穴を有している。出土陶磁器の年代から 17 世紀後半の埋没と考えられる

SE887

Ha153 グリッドで検出された井戸である。西側が既存建物により攪乱を受けているが、概ね円形で直径は約 1.5m である。埋土に大量の焼土ブロックが含まれており、出土した陶磁器類から 17 世紀末の埋没と考えられる。

(5) 古墳時代の遺構

ローム面で確認された。住居址 6 基、溝 1 基が検出されている (5 図)。住居址はいずれも五領～和泉期に属すると考えられる。溝は遺物出土量が少なかったため時期を特定できないが、切り合い関係から住居址より新しいことが判明している。

4. 成果と課題

今回の調査では多くの遺構・遺物が検出されており、そのほとんどは江戸時代に帰属する。前述の様に、調査地点は近世江戸時代を通し、富山藩上屋敷が存在していることから、遺構・遺物の吟味から上屋敷の変遷について多くの知見を得ることができる。以下検出面ごとで遺構の概観を述べる。

最上面である 1 面は調査区南側に礎石を使用した建物が広範囲に広がっていたこと、また堅牢な建

物、おそらくは土蔵のような建物が構築されていたと考えられる。この中で北側で検出された地下室と思われるSU214・SU926は他の遺構と軸を異にしており、時間的差異、または土地利用の差異を表すと考えられる。また焼土ブロックなどを多く含む遺構は、火災の影響が考えられ、出土遺物から文政8(1825)年の火災と考えられる。

2面では植栽痕、性格不明な不整形の遺構(SK78・SK91・SK573)などが検出されている。これらに類似する例は管見では見当たらない。形状や構築過程から庭園などに関連する可能性が考えられ、同面で植栽痕が多数検出されていることとも、庭園の可能性を首肯する。

3面では礎石群、植栽痕、土坑より古い段階で構築されたSX270が特徴的である。その遺構規模、特に深度はこれまでの本郷構内の調査の中でも類例がない。大規模な遺構に特徴的な壁の荒さがなく、丁寧に整形されていることから、土取り穴の性格は考えづらく、これだけの規模の遺構を構築するにあたっては多くの人力、時間を費やしていると思われることから、考古学調査の類例以外に文献などからアプローチを試みる必要もあるだろう。

ローム面で特徴的なのは大規模な礎石や柱穴列といった建物址が検出されず、地下室やそれに準ずる規模の土坑が多数検出されていることである。江戸時代の古い時期の利用状況が、新しい時代の利用状況とは異なっていた可能性が考えられる。

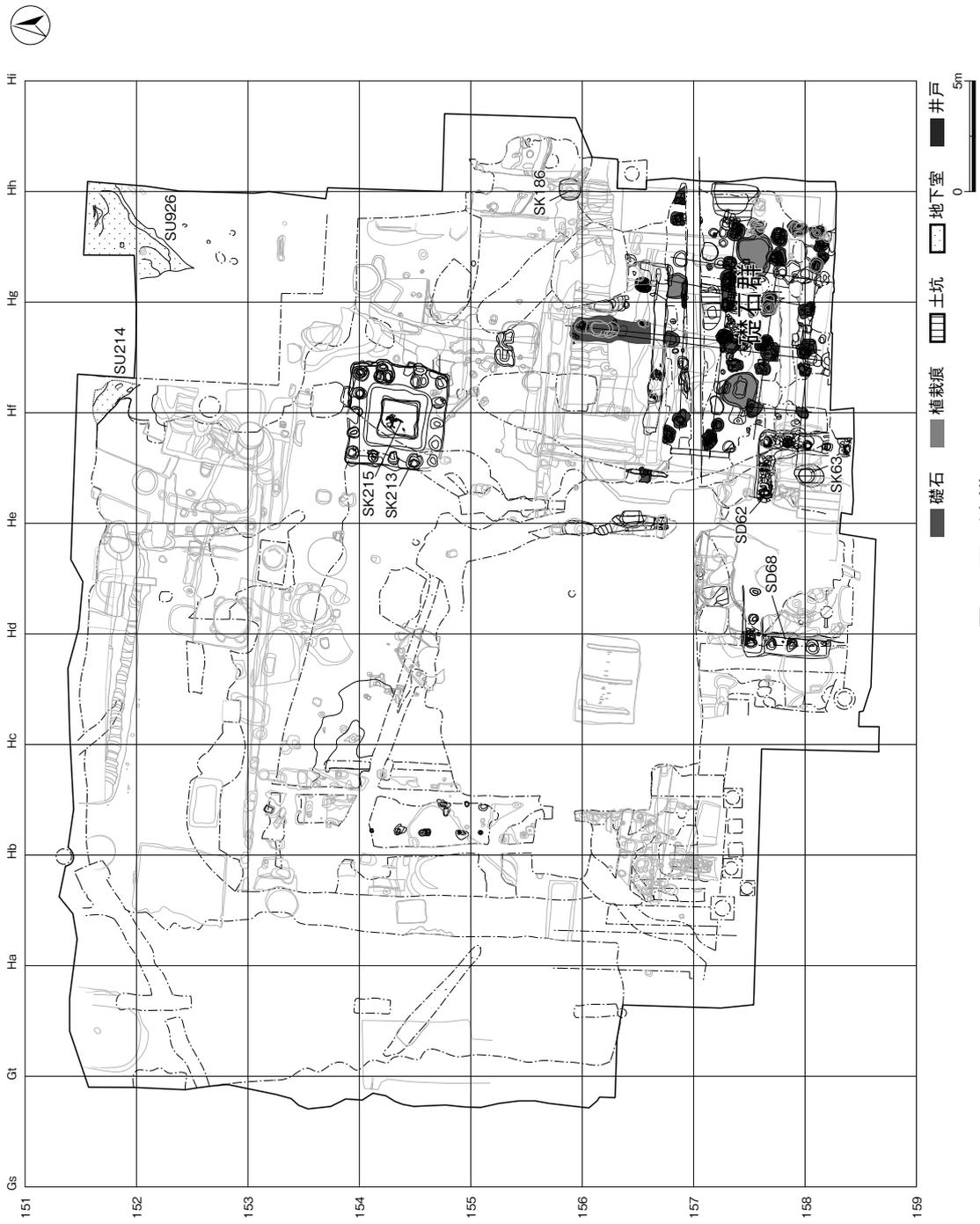
また古墳時代に属する住居址は、江戸時代の攪乱を受け、相当部分が失われていると考えられる。周辺調査地点の成果と検討し、時代別の分布などから集落の変遷を考える必要がある。

富山藩上屋敷の絵図面は、現在判明しているだけでも、7枚(全景図3枚、御殿4枚)が19世紀のみではあるが残されている。宗藩である加賀藩上屋敷の絵図面ほどではないとはいえ、富山藩邸上屋敷の様相を解明するためには格好の史料となっている。

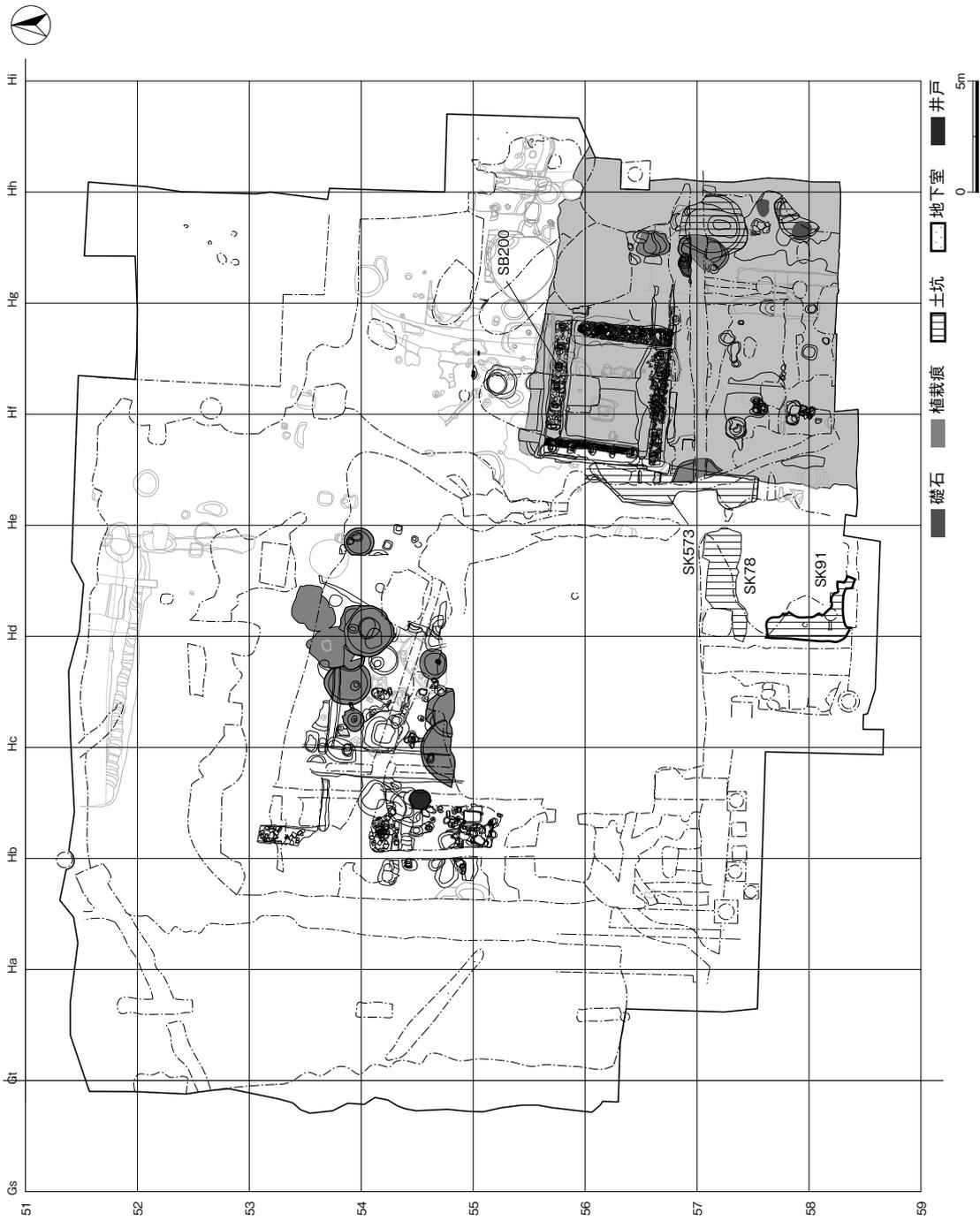
全景図は非常に精緻に作成されており、現在の位置との整合が可能である(6図)。この絵図面から南側に表門を配した表御殿を主とする御殿空間の中で、調査地点は御殿空間内の奥部分に位置していることが読み取れる。また富山藩上屋敷の文献調査も近年急激に進展しており、藩邸の作事、藩主の動向なども明らかになりつつある。今後はこれらの成果を踏まえ、上屋敷全体の変遷を復元していきたい。

【参考文献】

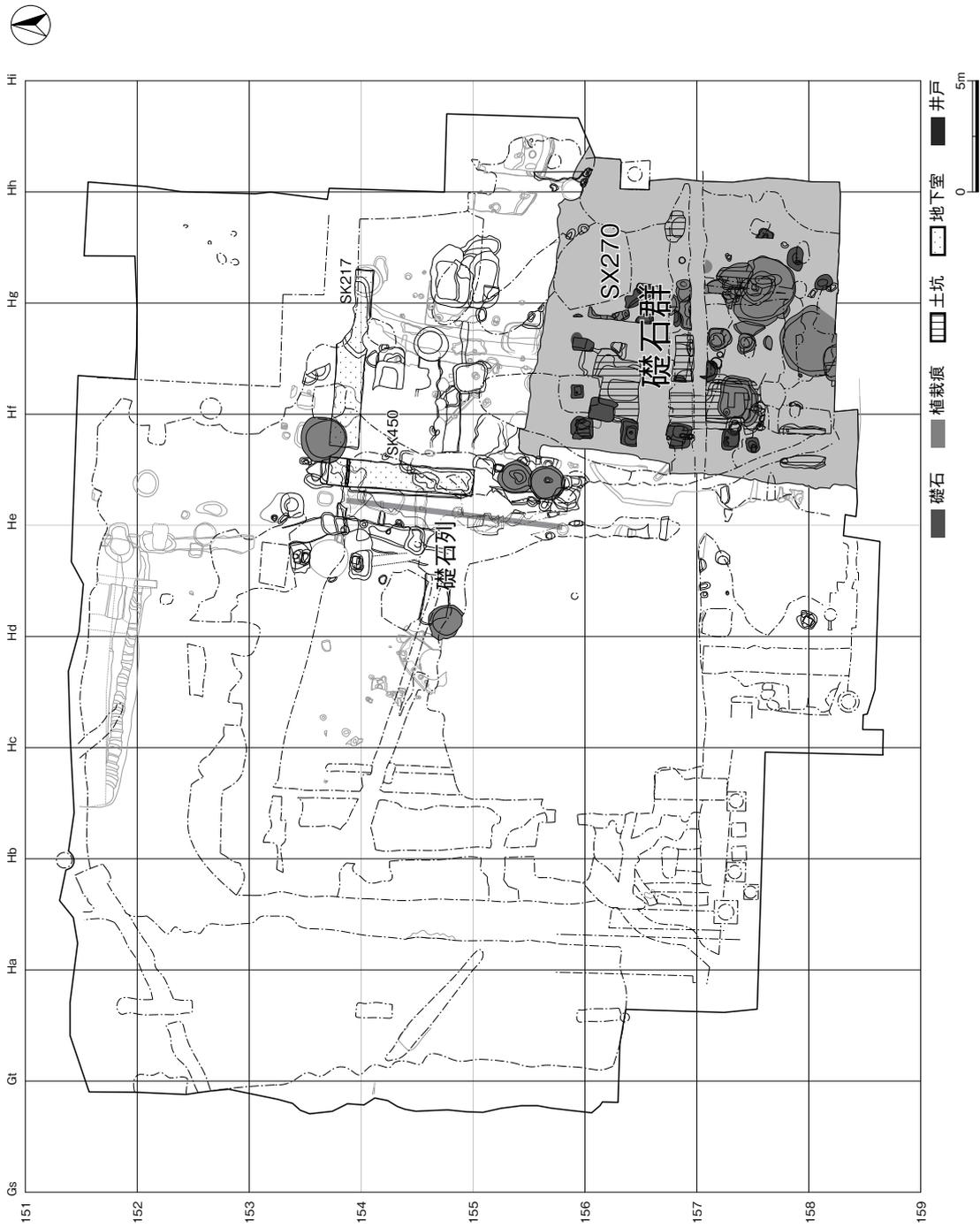
東京大学埋蔵文化財調査室 2015「江戸富山藩邸の調査・研究報告会」シンポジウム資料



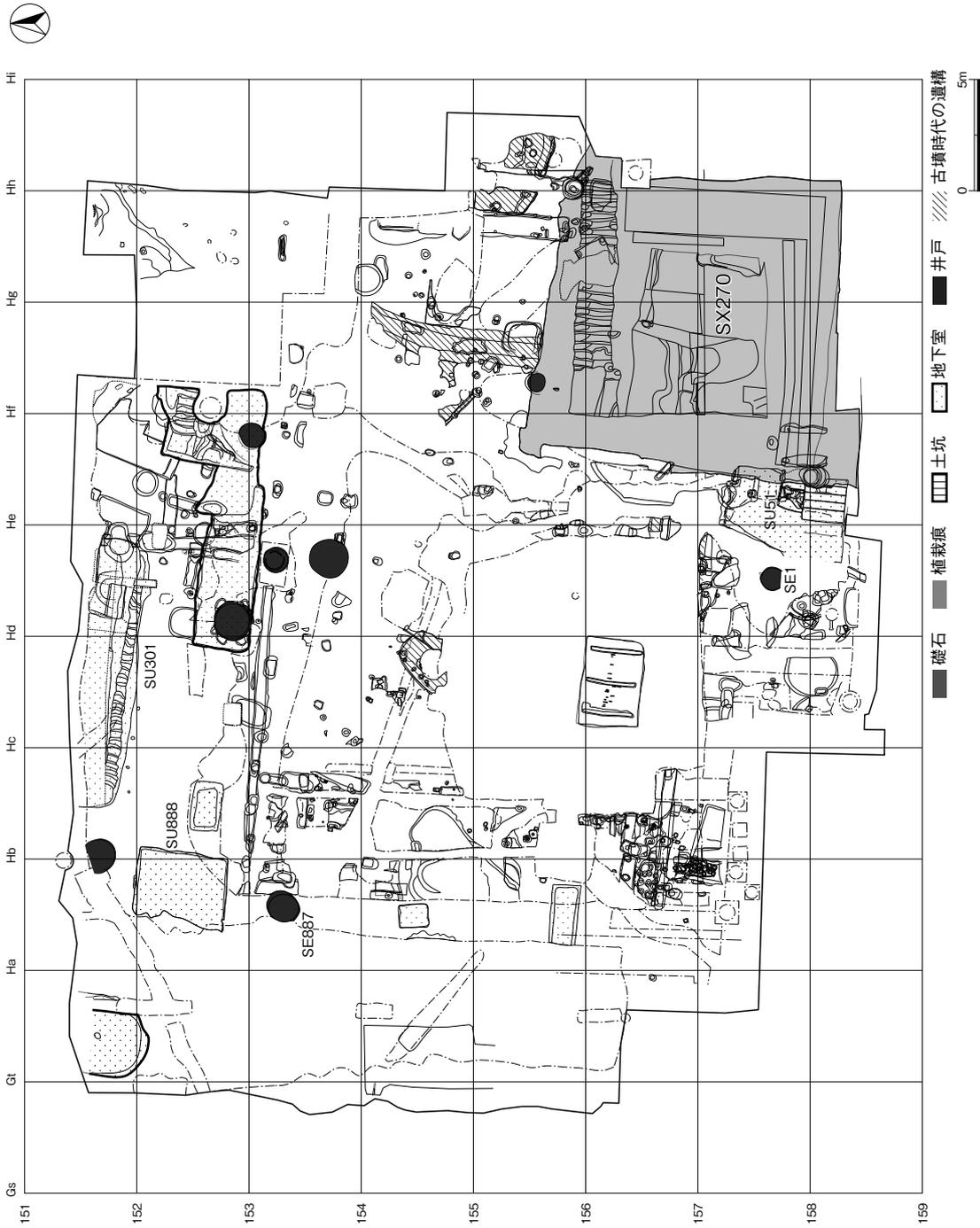
2図 1面の遺構



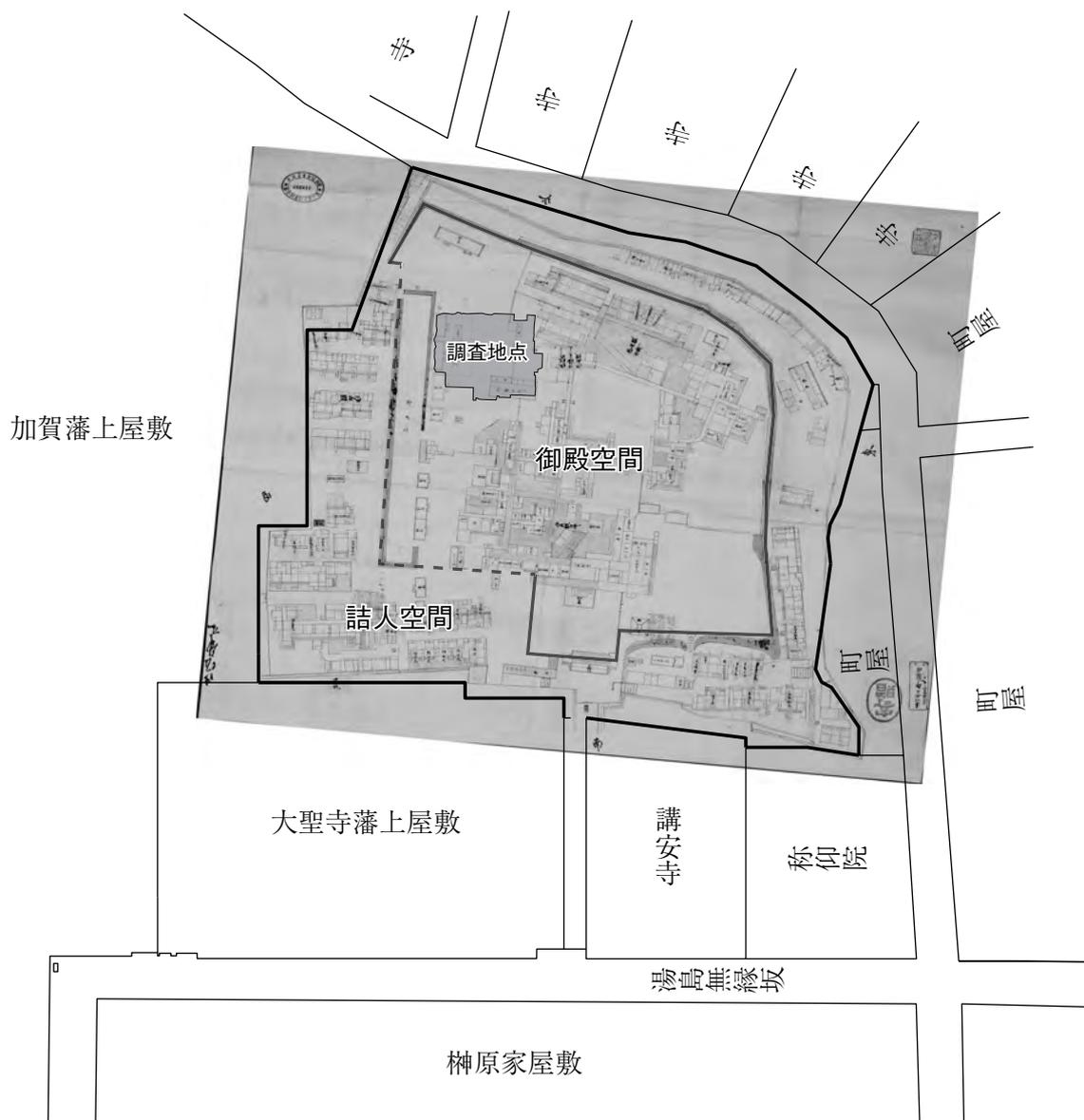
3図 2面の遺構



4図 3面の遺構



5図 ローム面の遺構



6 図 19 世紀前半の地割り復元図と富山藩上屋敷絵図
〔天保富山城本丸御殿絵図〕富山県立図書館所蔵、T092、71-13) (約 1 : 4000)



7 図 1面礎石群完掘状況



8 図 礎石群内 SP42 石検出状況



9 図 礎石群内 SP150 石検出状況



10 図 礎石群内 SP269 石検出状況



11 図 SK63 土層堆積状況



12 図 SK186 土層堆積状況



13 図 SU214 土層堆積状況



14 図 SK213・SK214 石検出状況



15 図 SB200 ロウソク基礎検出状況



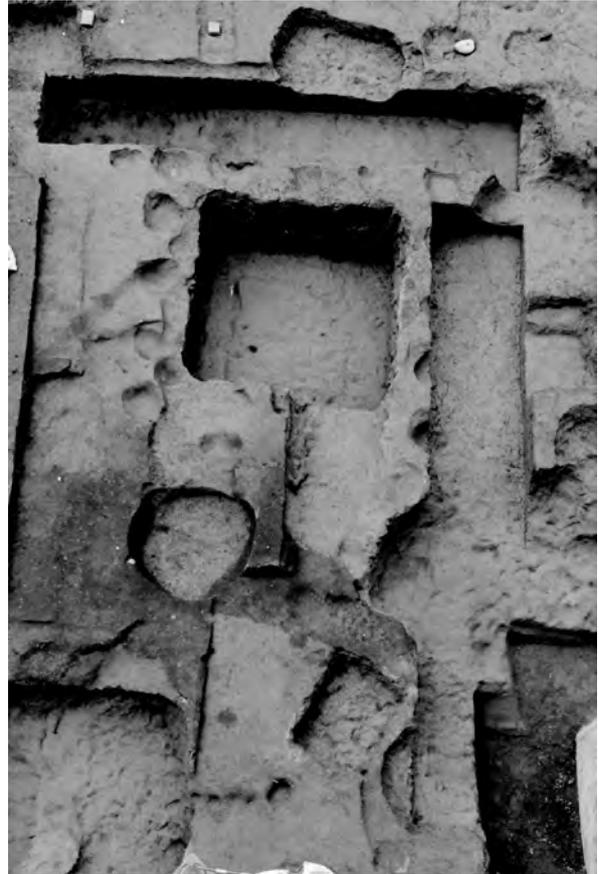
16 図 SB200 礎石検出状況



17 図 SK78 土層堆積状況



18 図 SK78・SK91 貼床検出状況



19 図 SK217・SK450 完掘



20 図 SX270 土層堆積状況



21 図 SX270 完掘



22 図 SU51 完掘



23 図 SU301 完掘



24 図 SU888 完掘



25 図 SE1 完掘



26 図 南区全景



27 図 北区全景

6. 本郷 169 文系総合研究棟

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 (文京区 No.47 本郷台遺跡群内)

調査期間 2014年10月14日～11月5日

調査面積 160㎡

調査担当 堀内 秀樹 香取 祐一



1 図 調査地点

1. 調査の経緯と経過

東京大学では、赤門総合研究棟の南側を一部解体し、文系総合研究棟の新築を予定している。

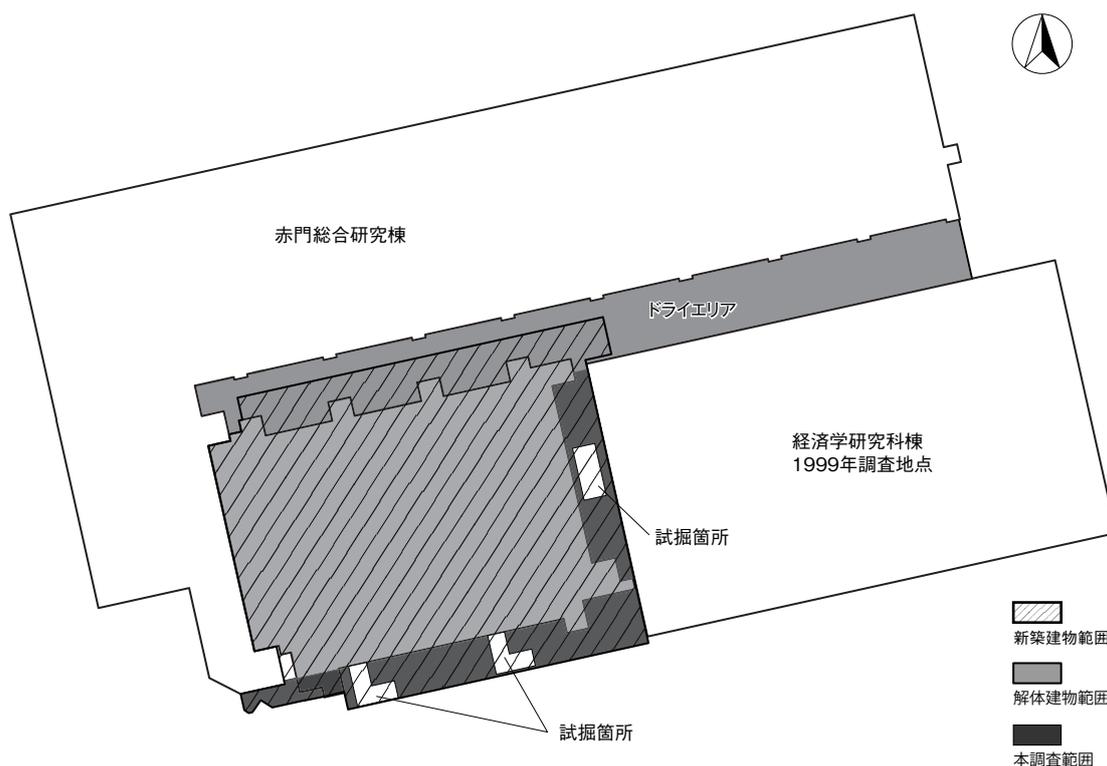
建設予定地は、文京区 No.47 本郷台遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、付近ではこれまでに多くの地点が調査を行っている (1 図)。その結果、同地は江戸時代を通し、加賀藩邸が存在していたことが明らかになっているため、発掘調査の必要があった。

発掘調査の対象となる範囲は、新築建物範囲のうち、ドライエリアおよび地下施設を有する解体建物を除いた部分 (2 図) を調査対象とし、2014年4月9日～11日に試掘調査を行った。

試掘調査の結果、解体予定の建物による攪乱、また共同溝により広範囲に攪乱を受けているが、地山が遺存している部分では遺構・遺物が検出された。

2. 調査の概要

東京大学埋蔵文化財調査室では、2013年度調査より平面直角座標系 (世界測地系) 第Ⅸ系を使



2図 調査区範囲

用した5mメッシュのグリッドを本郷構内全域に設定している。北西隅を基準にAa1を基点（ $X = -31100$ 、 $Y = -6800$ ）とし、東西方向は200mごとに先頭アルファベットをB、C、D・・・と大文字で送り、末尾を5m単位で小文字a～tを循環した2文字で表し、南北方向は南へ5m単位で増番を付している。

本調査地点は東西方向にChからCq、南北は206から212に位置する。Ch206グリッドは $X = -32125$ 、 $Y = -6565$ である。

調査区は南西を屈曲部とする鍵形で、南西から南東の部分を実A区、南東から北西を実B区と設定した。遺構の確認を行ったところ、A区の北側は解体予定建物の堀方による攪乱を受けていた。また南側も調査区に平行した共同溝に攪乱されており、地山の遺存範囲は広いところで2mと帯状に検出された。B区もやはり解体建物の堀方に西側を攪乱され、広いところで1.5m程の帯状に地山が遺存していた。ともに地山はローム層であった。

調査の結果、1基の地下室、17基の土抗、4基の溝、2基の性格不明遺構が検出された（3図）。また漸移層より縄文土器1点が検出されている。以下特徴的な遺構について述べる。

3. 出土した遺構・遺物

(1) 地下室

SU12

A区Ck211グリッドで検出されている。調査区南側の共同溝に攪乱され、上部は北壁がわずかに弧状に遺存している状態であった。地下室上部と下部では形状が大きく異なり、上部は緩やかな挿鉢

状を呈しているのに対し、下部は直立した壁を有する隅丸方形を呈している。上部の壁面は荒々しく工具痕が残っており、比較的丁寧に整形されている下部とは異なっている。

地下室の底部深度は確認面より 3.8m とかなり深いことから、使用時の地下室は縦坑状を呈しており、廃棄する際に周囲の土を掘削し埋め戻したと推測される。覆土はロームブロックを多量に含んでおり、17 世紀後半の陶磁器が微量、瓦が多く出土している。出土した瓦のうち、熨斗瓦の文様はすべて陽刻で、丸瓦は剣なし梅鉢文であることから、本郷構内でも古い段階に属する瓦が多い。

(2) 土坑

SK2

A 区 Ck・Ch211 グリッドで検出される。北側・南側ともに大きく攪乱を受け、東西 2.8m、南北 0.3m ほどが遺存していた。本来の平面形状は判別できない。19 世紀前半と思われる陶磁器類が出土している。

SK14

A 区 Co210 グリッドで検出される。南側を大きく攪乱され、東側は調査区外であるが、遺存範囲から円形のプランを有していたと思われる。断面形状は逆台形を呈しており、底部には工具痕が顕著である。遺物は出土していない。植栽痕と思われる。

SK24

B 区 Cn・Co207、Co208 グリッドで検出される。1999 年に調査を行った本 54 総合研究棟（文・経・教・社研）地点で検出された遺構の続きと思われる。覆土はローム粗粒を少量含む黒褐色土を主体としている。今回の調査では遺物は出土していないが、1999 年の調査では 17 世紀前半の陶磁器・銭貨が出土している。

(3) 溝

SD4・SD6・SD10

A 区 Cl・Cm211 で検出される。遺構の主軸は W - 3° - N で 3 条の溝が切り合っており、新旧関係は SD10 > SD6 > SD4 である。断面形状は概ね逆台形を呈し、底部には工具痕が認められる。遺物は SD4 から陶磁器片が 1 片出土したのみで、遺構の帰属時期は不明である。

4. 調査の成果と課題

これまでの本郷構内の発掘調査・文献史料から、本調査地点は近世期は加賀藩邸内、御殿エリアに属すると推測された。しかし上述のように、調査区は大きく攪乱され、本調査地点の発掘成果からのみでは、本遺跡の性格を位置づけることは難しい。

しかし、加賀藩本郷邸は多くの絵図面残されており、これまでの調査成果から、絵図面上にある程度正確に、調査地点を配置することができる。現存する絵図面の中で、最古期に属する元禄年間に描かれたとされる「上屋敷殿閣図」（前田育徳会所蔵）からは、本調査地点は御成門西側に位置し、富士山の南側に位置すると考えられる（4 図）。

医科学研究棟地点の調査では、「上屋敷殿閣図」以前の様相として、東西を長軸とする溝、植栽痕などが北側に多く検出されている。同地点で検出された溝は、文系総合研究棟地点 A 区で検出された SD4・SD6・SD10 と軸を同一としていることから強い関連性が窺える。また同じように植栽痕が

検出されているにも土地利用の共通点を見いだすことができ、遺物出土量が少なかった文系総合研究棟地点の検出遺構に、帰属時期を与えられる可能性が考えられる。

またB区北側は絵図面では富士山下部に位置していると思われる。この富士山は昭和39年に現在の赤門総合研究棟が新築されるまで存在していた。駒込富士神社の由来となった加賀藩邸内の富士山についてはいくつか文献史料に記載があり、伝承を含めると中世末期、または近世最初期の構築説が有力であった。

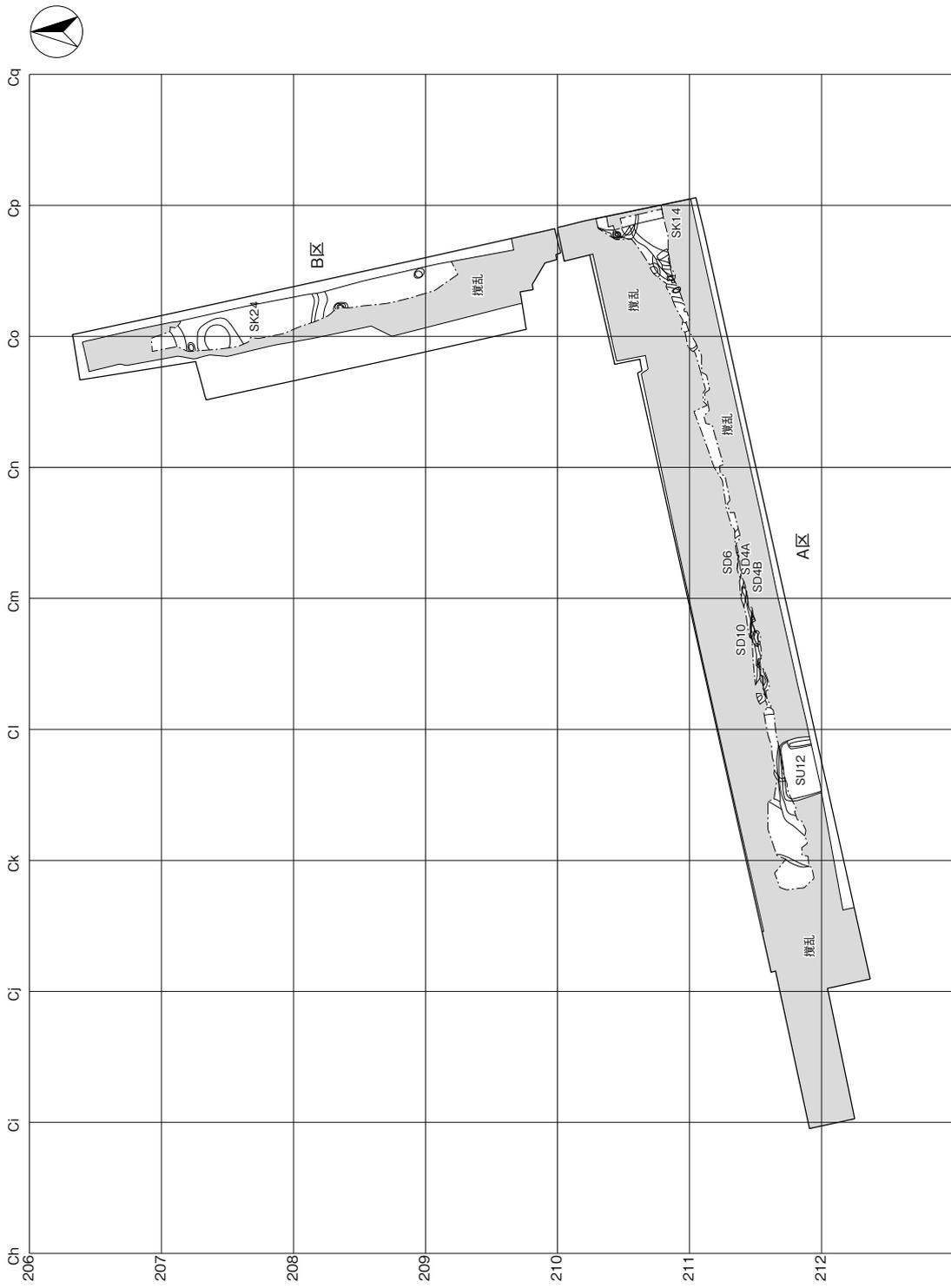
B区SK24は、隣接する総合研究棟地点のSK641・624と同一遺構である。この遺構は黒ボク土を主体とする埋土で、17世紀前半の遺物が出土しており、この遺構の上部は現代に至るまで攪乱を受けていないことから、17世紀の早い段階で遺構廃絶後、上部に人工的な盛土によって富士山が構築されたと考えられている。今回の調査では遺物は検出されていないが、現在整理中である総合研究棟地点の出土遺物の年代を検討し、富士山の構築年代を吟味していきたい。

19世紀中葉に描かれたとされる「江戸御上屋敷惣御絵図」でも、調査地点は御殿空間内、表御殿の一部に位置していると思われる(5図)。A区SK2は当該期の遺物が出検されており、廃棄坑と考えられる。現時点の絵図の配置からはオープンスペースに該当すると思われるが、周辺の調査地点の遺構から正確な位置を読み出し、居住者との関係を検討していきたい。

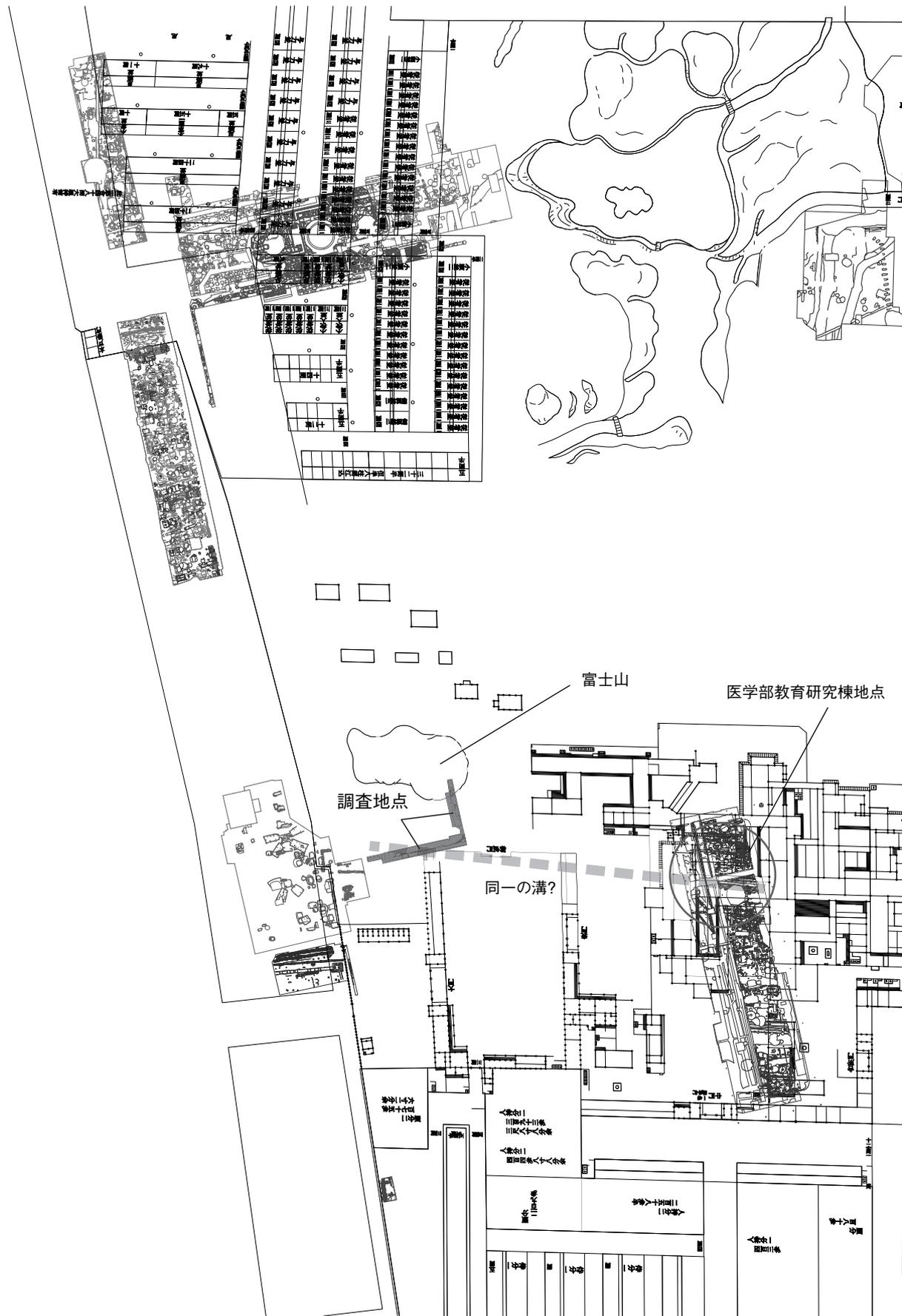
【参考文献】

東京大学遺跡調査室 2002 『東東京大学構内遺跡調査研究年報3』

竹谷靱負 2009 『富士塚考』



3 図 全体図



4図 調査地点 (17世紀末) (公財) 前田育徳会所蔵「上屋敷殿閣図」より作成



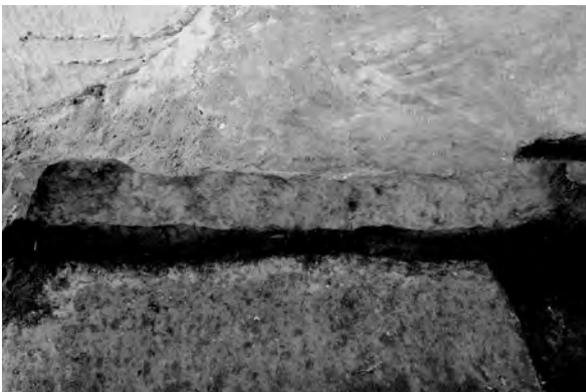
5 図 調査地点（19世紀中葉） 金沢市立玉川図書館所蔵「江戸御上屋敷惣御絵図」より作成



6図 SU12 完掘



7図 SK2 出土遺物



8図 SK2 完掘



9図 SK14 完掘



10図 SD4・SD6・SD10 完掘



11図 SK24 完掘

第2節 本郷構内の試掘調査

1. 本郷 153 理学部 1 号館とりこわし工事・理学部 1 号館（Ⅲ期）新営

所在地 東京都文京区本郷 7-3-1 文京区 No.47 本郷台遺跡群内

調査期間 2014 年 5 月 16・19 日

工事面積 20.92㎡

調査担当 原 祐一 清水 香

調査の経緯と概要

東京大学は旧理学部 1 号館跡地で研究棟の建設を計画。平成 26 年 3 月 10 日付東大施設 217 号を文京区教育委員会へ提出した。文京区教育委員会は届け出について、遺跡の遺存状態・内容等を把握するための試掘調査を行う必要があると回答した（93 条に対する通知（理 1 Ⅲ期 9））。施設部と埋蔵文化財調査室は、当地点の試掘調査について協議し、同年 5 月 16・19 日に試掘調査を行った。なお、鉛による土壤汚染が確認されたことから、汚染が基準値以下の区域で調査を行い、担当者、作業員の安全に留意し調査を行った。

土壤汚染が基準値以下、安全が確認された部分、工事予定地の西側と北側にトレンチを設定した（1 図）。

調査結果



1 図 調査地点の位置

トレンチ1では遺構の確認はなかったが、建物の区域には深く掘削されている井戸が残っている可能性がある。トレンチ2・3では遺構を確認した(3~5図)。トレンチ2は遺構検出面まで約1.3m削平されていたが、関東ローム層の堆積、遺構を確認した。トレンチ3は遺構検出面まで約0.6mで固く突き固められた層、その下から地下室を検出した。トレンチ2とトレンチ3の間で、東西の軸のレンガ積の配管施設を確認した。トレンチ3の北側で配管施設は、旧理学部1号館の擁壁の掘り方で破壊されている。東京帝国大学平面図によれば、1927年に旧理学部1号館の建物を確認できる。これ以前は、1909年に「機械工場」を確認できるが、1927年には無くなっている。調査地点は、加賀藩の御徒町長屋の区域で、隣接する調査地点からは長屋に伴う地下室等を検出している。また、古墳時代と考えられる竪穴式住居を検出している。本調査でトレンチ2・3周辺に遺跡が良好な状態で残っていることを確認した。



2図 トレンチ1



3図 トレンチ2



4図 トレンチ3



5図 トレンチ3地下室追加掘削

2. 本郷160 文系総合研究棟

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 文京区No.47 本郷台遺跡群内

調査期間 2014年4月9日～11日

調査面積 27㎡

調査担当 堀内 秀樹

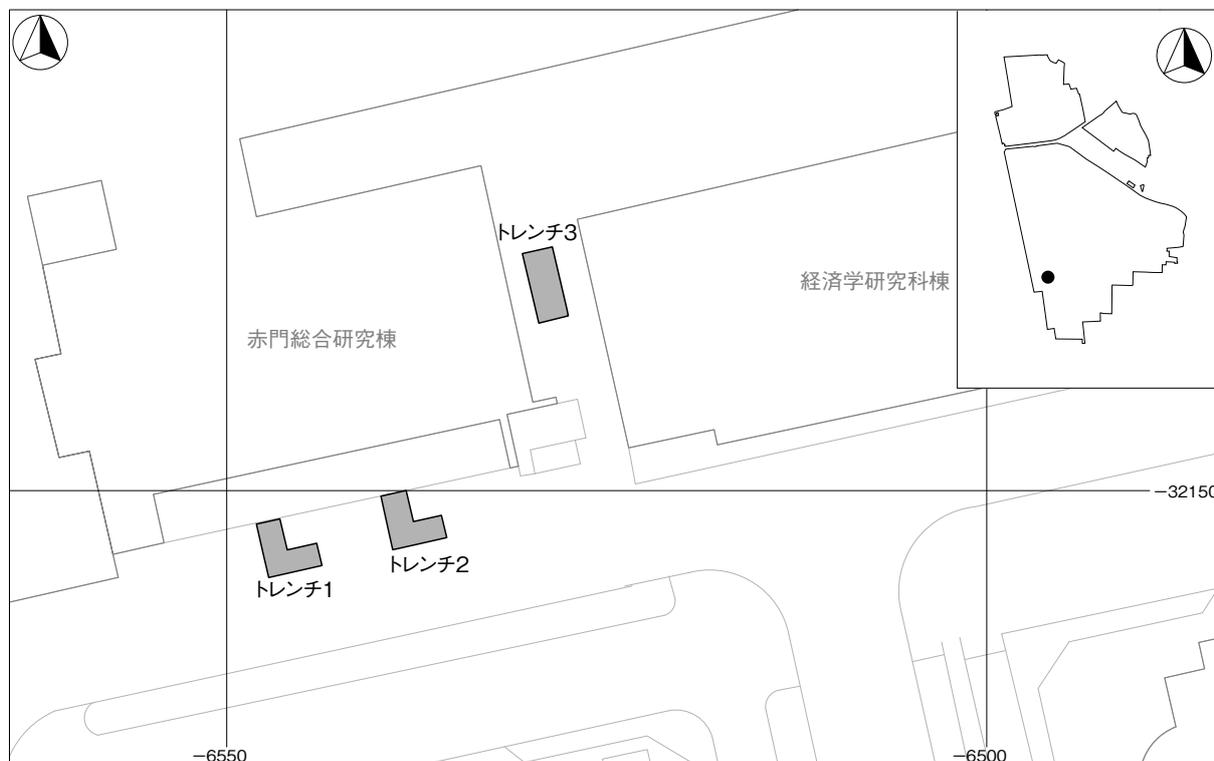
調査の経緯と概要

東京大学は、文京区本郷3丁目に所在する本郷キャンパス内経済学部赤門総合研究棟南側の校舎を取り壊し、新たに文系総合研究棟の新築を計画している。新校舎の位置は、ほぼ現存する校舎の位置に計画されるが、南側に約5m、東側に約4m広がっている。

当該地点は、文京区No.47「本郷台遺跡群」として周知の遺跡として登録されており、工事を行うにあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要がある。試掘調査は、埋蔵文化財調査室により2014年4月9日～11にかけて約27㎡について行い、同室員堀内秀樹が担当した。

試掘調査は、赤門研究棟から拡張することが計画されている南側、東側について行い、3本の試掘トレンチを設定した(1図)。

トレンチ1、トレンチ2は、東西3.5m、南北3.5m、幅1.5mの矩形に設定した。埋蔵文化財の遺存状況は、両トレンチとも類似していた。赤門総合研究棟南端ドライエリア擁壁から約1.8mまでは、建築用の山砂が確認されており、これは昭和42年に建築された際の埋め土であると推定された。また、南側を東西に走る道路中央には共同溝が埋設されており、試掘開始前からこれが確認されることが想定されたため、各トレンチは東側に折り曲げるように矩形に設定した。両トレンチでは赤門総合研究棟ドライエリア擁壁から約3.5mトレンチ南壁付近からコンクリート製の共同溝が確認された。また、



1 図 調査地点の位置

この共同溝を埋設する際の堀方が約0.9 m北側まで確認され、両トレンチは、北側が赤門総合研究棟、南側が共同溝によって大きく攪乱を受けている状況であった。

埋蔵文化財は、ローム上面（GL - 1 m）で両攪乱の間約0.4 mの幅に遺存しているのみであった。最も良好に遺存していた1トレンチ西壁付近においても、近世の盛土が自然堆積層上面より30cm程度確認できたのみで、その上は赤門総合研究棟の建設時に削平を受けていた。遺構は、トレンチ1、トレンチ2で土坑と思われる落ち込みがそれぞれ1基ずつ確認されたが、トレンチ1の落ち込みからは、幕末期の瀬戸美濃産爛徳利の磁器片が出土している。

トレンチ3は、東西2 m、南北4.7 mの長方形に設定した。試掘では残土置き場の確保ができなかったためこの攪乱の底は検出できなかったが、トレンチの北側、西側はコンクリート、レンガ塊を多量に含む土が、少なくともGL - 1.5 mまでは存在していることが確認できた。トレンチの南東側GL - 1.1 mで、ローム土が確認された。しかし、ここからは1999年の本54総合研究棟（文・経・教・社研）発掘調査時に使用した釘や遺構番号を記したプラスチック製の札などが認められ、トレンチ3の東側が既調査範囲であったことが確認された。ただ、東壁より0.9 m付近から検出された黒色土を覆土に持つ遺構が未調査であったことから、前回の調査区はそれより東（現存の赤門総合研究棟の建物から2.3 m付近以東）であったと推定された。

調査結果

今回の試掘調査では、赤門総合研究棟、共同溝、攪乱など近代以降に大きく遺跡が壊されている状況であった。赤門総合研究棟南側では、0.4 mの幅で遺存しているのみであろうと推定された。また、東側では、経済学研究科棟に近い既調査部分を除くと、攪乱が及んでいない部分にのみ遺存の可能性があると判断された。



2図 トレンチ1北側（右：山砂、左：ロームと遺構）



3図 トレンチ1南側（共同溝の埋設溝）



4図 トレンチ2 遺存している遺構



5図 トレンチ3北から

3. 本郷 162 工学部 4 号館改修その他工事

所在地 東京都文京区本郷 7-3-1 文京区 No.47 本郷台遺跡群内

調査期間 2014 年 6 月 23・27 日、7 月 3・4・10 日、8 月 12 日

調査面積 47m²

調査担当 原 祐一

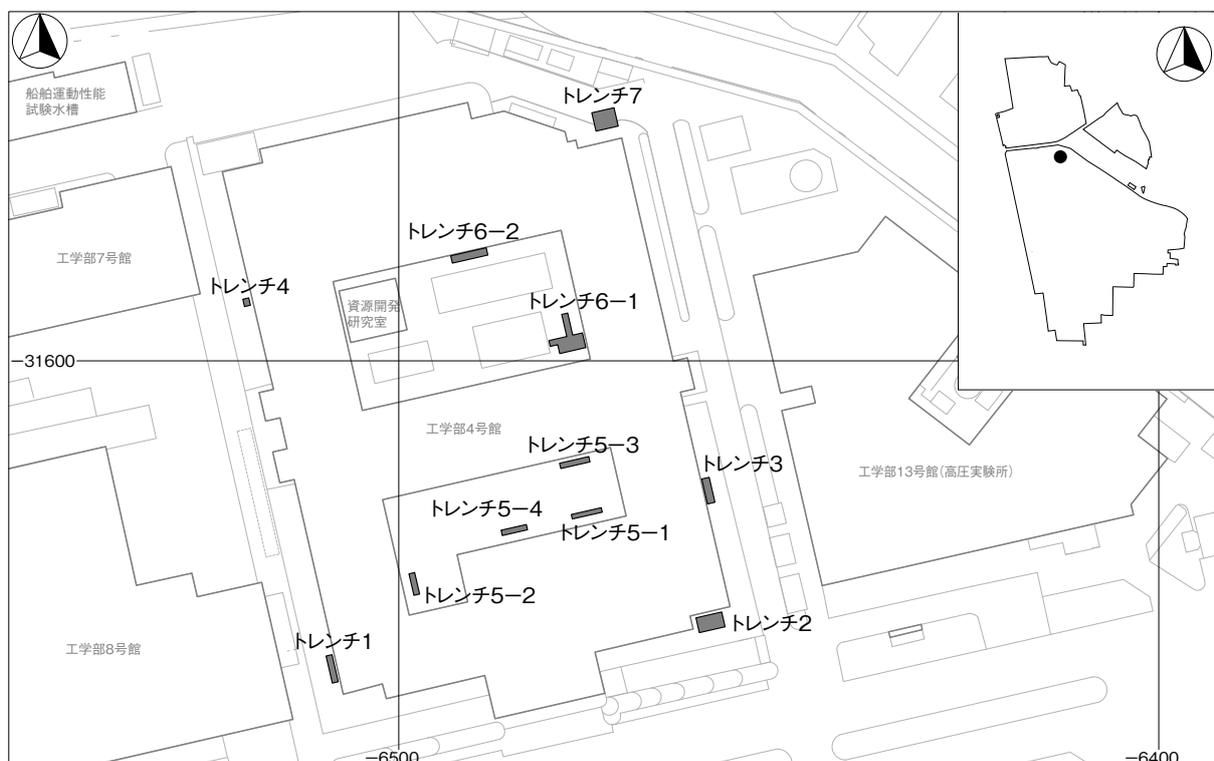
調査の経緯と経過

東京大学は工学部 4 号館改修その他工事を予定していた。改修工事の総面積は 830m²で、工学部 4 号館は水戸藩中屋敷（以下、駒込邸）に位置し、駒込邸に関する遺構の検出が予想されることから、埋蔵文化財調査室と施設部は協議を行い試掘調査が必要と判断、文京区へ試掘調査の届出を行った。調査は 2014 年 6 月 23 日から 8 月 12 日まで調査を行った。

調査は配管を予定されている部分のうち、排水溝などで遺跡が破壊されている部分を除いて 11ヶ所のトレンチを設定した（1 図）。重機掘削と人力掘削によって工事予定深度まで調査を行った。遺構が確認された場合は、工事予定深度以下まで調査を行った。試掘調査を行わない工事箇所については工事と並行して遺跡の有無、関東ローム層の堆積状況を確認した。

調査結果

11ヶ所のトレンチで、工学部 4 号館建設に伴う削平を確認した。工学部 4 号館西側で 4 m 削平が行われていた。削平面にはレンガ、コンクリートガラを含む盛土が施されていた。工学部 4 号館の削平より深い遺構は残っており、2 トレンチで SD1、5-1・2 トレンチで SR1 を検出した。削平より深い



1 図 調査地点の位置

部分は埋め立てが行われていた。

各トレンチで検出した関東ローム層の堆積状況、2トレンチで確認した黒ボク土の自然堆積層から、工学部4号館を北西から南東に縦断する谷があることが確認された。



2図 2トレンチ全景



3図 3トレンチ全景南～



4図 5-1 トレンチ全景及びSR1 完掘西～



5図 5-3 トレンチ全景東～



6図 6-1 トレンチ南側全景東～



7図 6-2 トレンチ全景東～

第3節 東京大学本郷構内の遺跡のグリッド設定と調査区の補正

東京大学本郷構内の遺跡では、同地にほぼ江戸時代を通して前田家などの大名屋敷が存在し、遺構が濃密かつ広範囲に遺存していることが予見されたため、調査が開始された1983年より遺構の記録の際は、国土座標に位置づけた実測を行ってきた（東京大学遺跡調査室編 1990a、東京大学遺跡調査室編 1990b）。

しかしながら当時の機器の精度不足や、与点としていた公共基準点の停止（文京区多角点）・改測（三角点大学）、また平成14年の測量法改定による世界測地系（測地成果2000）の採用、さらに東日本大震災による補正（測地成果2011）などの変更要素が加わり、現在の測地成果との整合が困難な状況が多々生じていた。

そこで平成23（2011）年、株式会社都市地理情報に、現在調査の測量基準点となっている既知点への2級・3級座標の取り付け、さらに新たな3級基準点の設置を委託した（図1）。測量にはGNSS（GPS）・トータルステーションを使用し、その成果区分は測地成果2011である。

また今後の調査に同測量成果を活用するため、本郷構内全域をカバーするグリッドの設定を行い、2012年9月以降の調査に用いている。グリッドはAa1を基点とし、東方向へ200mごとに先頭アルファベットをB、C、D・・・と大文字で送り、末尾を5m単位で小文字a～tを循環した2文字で表し、南北方向は南へ5m単位で増番を付している。グリッドのAa1の座標は、平面直角座標系第IX系、 $X = -31100.000$ 、 $Y = -6800.000$ である（図2）。

さらに上記測量成果を踏まえ、これまでの調査地点をグリッドに適応させる補正を行った。具体的な作業としては、測量時期ごとに与点を調べ、平成23年の測量成果と同一の点で、ヘルマート変換のパラメーターを作成し、各調査地点の基準点の改算を行い、再配置を行った。

（香取祐一・渡邊法彦）

謝辞 加藤建設株式会社 井戸川勝昭氏・伊早坂龍史氏には、調査基準点成果簿の照会、補正手順についてのご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

【参考文献】

- 東京大学遺跡調査室編 1990a『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
 東京大学遺跡調査室編 1990b『東京大学本郷構内の遺跡 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』

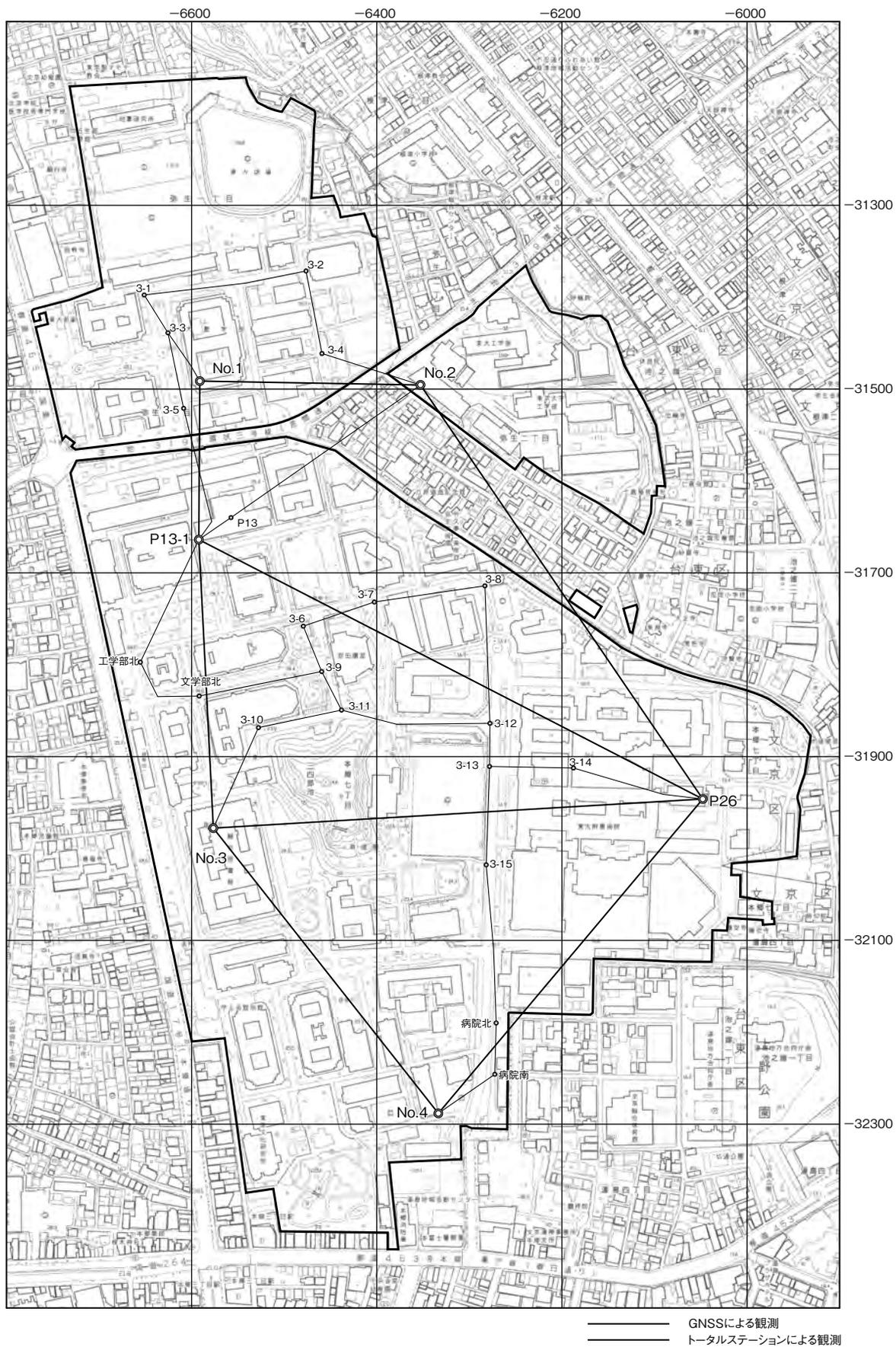


図1 基準点配置図

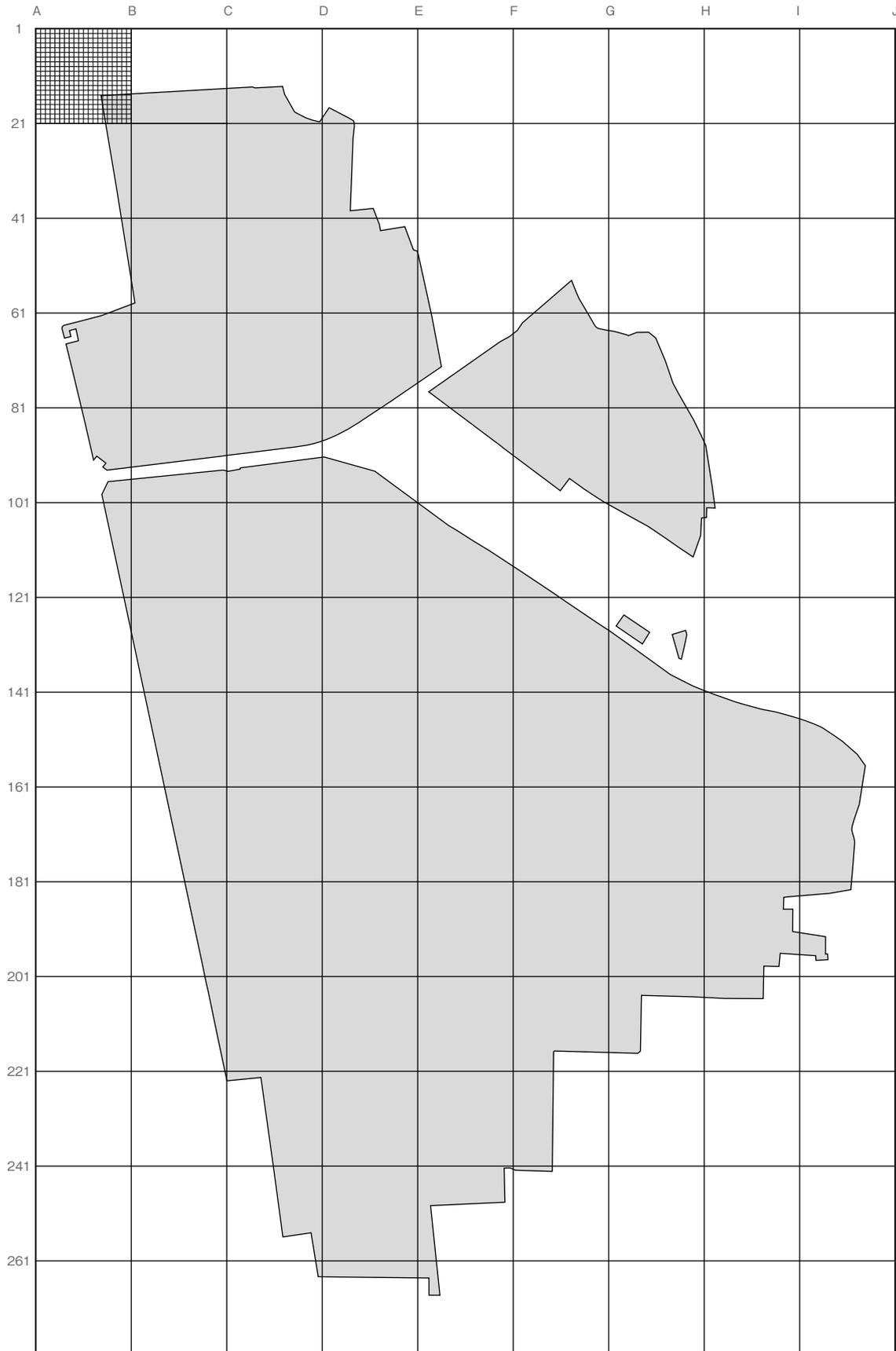


図2 グリッド図

第Ⅱ章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理

1. 整理事業概要

本年度は、発掘調査報告書刊行にむけて以下のような整理作業を行った。

- ・本郷 15 薬学部新館遺構図版作成、出土遺物デジタルトレース、図版作成、事実記載、写真撮影
- ・本郷 19 医学部附属病院看護師宿舎遺構図版作成、出土遺物観察表作成
- ・本郷 21 医学部附属病院 MRI-CT 棟出土遺物観察表作成
- ・本郷 23 医学部附属病院入院棟 A 出土遺物基礎整理、事実記載、写真撮影
- ・本郷 25 医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場出土遺物観察表作成
- ・本郷 28 薬学部資料館遺構図版作成
- ・本郷 54 総合研究棟（文・経・教・社研）出土遺物事実記載
- ・本郷 55 医学部附属病院第2中央診療棟出土遺物デジタルトレース、図版作成、写真撮影
- ・本郷 60 医学部附属病院基幹整備外構施設等出土遺物実測、図版、観察表作成、事実記載
- ・本郷 68 インキュベーション施設出土遺物接合、分類
- ・本郷 76 ベンチャープラザ出土遺物接合、実測
- ・本郷 82 懐徳門出土遺物事実記載
- ・本郷 91 医学部附属病院立体駐車場出土遺物注記、遺構図版作成
- ・本郷 100 工学部3号館出土遺物実測、デジタルトレース
- ・他 15 検見川運動場体育セミナーハウス写真撮影
- ・その他、出土自然遺物（動物骨、魚骨、貝殻）の整理に関しては阿部常樹氏に依頼した。

2. 外部委託

(1) 基礎整理

- ・本郷 78 情報学環・福武ホール地点 SK10 出土遺物の基礎整理（実測・拓本・デジタルトレース・写真合成・データベース用写真撮影）を株式会社 Acube に依頼し、完了した。
- ・本郷 134 工学部3号館施設整備出土遺物注記を加藤建設株式会社へ・・・木製品の基礎整理（実測・デジタルトレース・写真合成・データベース用写真撮影）を加藤建設株式会社に依頼し、完了した。
- ・本郷 91 医学部附属病院立体駐車場地点遺構・出土遺物の基礎整理（洗い・注記・実測・図版）を加藤建設株式会社に依頼し、完了した。

第 2 節 調査・研究成果の公開・活用

1. 広報活動

(1) 遺跡見学会

2014 年 4 月 1 日

本郷地区・浅野地区・弥生地区史跡見学「東大本郷キャンパスの魅力を探る」(日本森林林業振興会 グリーン・サークル:43 名)

2014 年 4 月 4 日

浅野地区・弥生地区史跡見学(水戸桜川千本桜プロジェクト:48 名)

2014 年 5 月 2 日

本 147 国際科学イノベーション総括棟新営:富山市教委より 1 名来跡

2014 年 6 月 10 日

本 147 国際科学イノベーション総括棟新営:文化資源(東大授業)見学(学生 24 名、教員 3 名)来跡

2014 年 7 月 2 日

本 147 国際科学イノベーション総括棟新営:富山市教委より 1 名、富山大学より 1 名、富山市郷土博物館より 3 名来跡

2014 年 7 月 2 日

浅野地区・弥生地区史跡見学(富山市:6 名)

2014 年 7 月 6 日

浅野地区・弥生地区史跡見学(常陸太田市黄門様検定見:21 名)

2014 年 10 月 12 日

本郷地区他史跡見学「修復のお仕事展Ⅴ ワークショップ」(自由参加:32 名)

2014 年 10 月 13 日

本郷地区・浅野地区他史跡見学「修復のお仕事展Ⅴ ワークショップ」(自由参加:11 名)

2014 年 11 月 29 日

本郷地区・浅野地区・弥生地区史跡見学「文京区ガイドクラブ講習会」(文京区ガイドクラブ:11 名)

2015 年 1 月 18 日

本郷地区他史跡見学(大宮郷土史研究会:22 名)

2015 年 3 月 3 日

本郷地区・浅野地区・弥生地区他史跡見学(本郷 ing ふれあいサロン:13 名)

2015 年 3 月 29 日

浅野地区・弥生地区他史跡見学(水戸桜川千本桜プロジェクト:85 名)

(2) ホームページ

発掘調査速報、遺跡見学会案内、調査室所蔵遺物学外展示などの掲載。

2. 教育・普及

2015年1月17日

埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト1『江戸富山藩邸の調査・研究報告会』
プログラム

1. 追川吉生（東京大学埋蔵文化財調査室）
「富山藩邸外郭部の土地利用状況 - 東京大学 CRC 地点の調査概要から -」
2. 大成可乃（東京大学埋蔵文化財調査室）
「掘って、埋めて、また掘って - 東京大学イノベ地点の調査成果から -」
- 出土遺物見学 -
3. 小松愛子（東京大学埋蔵文化財調査室）
「文献史料にみる江戸富山藩邸の暮らし」
4. 古川知明氏（富山市埋蔵文化財センター）
「富山城跡の発掘調査」

3. 資料の提供・貸出

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料（資料 / 出土地点略称 / 遺構） ^{*1}
2014	東京国立博物館	貸出	平成館考古展示室常設展 資料展示	1. 色絵大皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/ 包含層 2. 色絵亀甲文皿片（伊万里・古九谷様式）/HW/C2層 3. 染付吹墨鷲図皿片（伊万里）/HHC/L32-1 4. 色絵花卉文大皿片（伊万里・柿右衛門様式）/HGS/391号 5. 染付八宝文大皿片（景德鎮窯）/HGS/ 包含層 6. 白釉鉄絵人物草花文壺片（磁州窯）/HGS/ 包含層、U/ 包含層 7. 色絵福字鉄片（呉須赤絵）/HGS/ 包含層 8. 織部脚付平向付片（美濃）/HGS/46、532号 9. 織部筒向付片（美濃）/HGS/ 包含層 10. 染付脚付向付片（景德鎮窯）/HGS/ 包含層 11. 染付八角瓢形德利片（景德鎮窯・祥瑞）/HGS/6785 12. 染付水注蓋片（景德鎮窯）/HGS/ 包含層 13. 色絵皿片（景德鎮窯）/HGS/496、185 14. 黄地緑彩鉢片（大明嘉靖年製）/HW/C2層 15. 色絵壺片 /HW/C2層、包含層 HGS/6175 16. 色絵大皿片（呉須赤絵）/HGS/6785 17. 黒釉兔毫斑碗片（建窯）/HN/SK299 18. 染付小坏（五良大甫呉祥瑞造）（景德鎮窯）/HGS / 包含層 19. 魚屋茶碗片 /HN/SK299 20. 青磁袴腰形香炉片（龍泉窯）/HN/SK299 21. 青磁獅子紐香炉蓋片（龍泉窯）/HN/SK299 22. 青磁算木文瓶片（龍泉窯）/HN/SK299 23. イズニク陶器破片 /HW/C2層、SD422 24. 塩釉水注片（ドイツ）/HN/SK299 25. デルフト陶器片 /HGS/ 包含層 U/ 包含層
	国立歴史民俗博物館	貸出	総合展示「都市の時代」資料展示	1. 灰釉碗（呉器手）/HW/D 面焼土 2. 灰釉鉄絵碗（京焼風）/HW/D 面焼土 3. 青緑釉輪剥皿（内野山窯）/HW/D 面焼土 4. 染付皿（草花文）/HW/D 面焼土 5. 染付皿（菊文）/HW/D 面焼土 6. 輪剥皿 /HW/D 面焼土 7. 三島手鉢 /HW/D 面焼土 8. 染付大皿（網干文）/HGS/618号 9. 染付大皿（海浜文）/HGS/678号 10. 染付瓶（草花文）/HGS/537号 11. 染付組皿（草花文）/HGS/537号 12. かわらけ /HHC/ 池 13. 木製品（折敷）/HHC/ 池 14. 木製品（はし）/HHC/ 池 15. 金泥かわらけ /HIKN/SK4516
	東京都江戸東京博物館	貸出	常設展示「武士の暮らし・町の暮らし」資料	1. 裸人形 /HHC/U48-2 2. 童子 /HHC/3号組石 3. 唐人 /HHC/F33-3 4. 西行 /HHC/F34-11 5. 座位の猿 /HHC/Z35-5 6. 犬 /HHC/V46-3 7. 雉 /HHC/E22-1 8. 鯉 /HHC/AL37-1 9. 瓢箪 /HHC/AJ37-2 10. 植木鉢 /HHC/AJ34-1 11. 銚子 /HHC/AE35-3 12. 浅鉢 /HHC/K30-1 13. 搦鉢 /HHC/AD35-1

第2部 2014年度調査室事業概要

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料(資料/出土地点略称/遺構) ^{*1}
2014	東京都江戸東京博物館	貸出	常設展示「武士の暮らし・町の暮らし」資料貸出	14. 茶釜 /HHC/ 遺構外 15. 茶釜の蓋 /HHC/Y34-4 16. 城門 /HHC/2号組石 17. 城壁 /HGS/49 18. 向付 /HHB/E7-3号土坑 19. 片口 /HHC/F33-3 20～23. 急須 /HGS/7号 24～25. 土瓶 /HGS/7号 26～27. 皿(磁器) /HGS/1号 28. 皿(磁器) /HHC/X37-1 29. 皿(陶器) /HHC/H21-2 30. 行平 /HHC/AE36-3 31～32. 行平 /HHC/H21-1 33, 34. 酒杯 /HS7/14号・54号土坑、遺構外 35～37. 猪口 /HHC/H21-2 38, 39. 爛徳利 /HHC/AJ34-1、7号 40～42. 貧乏徳利 /HS7/63号土坑、75号土坑 43. 箸 /HHC/ 池 44～49. 焼塩壺 /HS7/9号地下式土坑、遺構外、83号土坑、4号井戸、13号地下式土坑、1号土坑 50～51. 焼塩壺(蓋) /HS7/1号土坑、3号井戸、120号土坑 52. 風炉 /HS7/11-16号地下土坑 53～54. 火鉢 /HHC/H21-2、E21-1 55～58. 火箸 /HHC/G20-2、X36-5、G36-2、2号組石 59. 五徳 /HGS/7号 60. 火鉢 /U/105号 61. 温石 /HGS/ 62. 煙管 /HGS/532 63. 灰落し /HHC/G26-1 64. 火入れ /HHC/2号組石、AJ35-1 66～67. 硯 /HGS/ 68. 水滴 /HHC/Y37-4 69～72. 小柄 /HGS/ 73～76. 切羽 /HGS/ 77. 刀子 /HGS/384 78～81. 砥石 /HS7/6号地下式土坑、7・8号地下式土坑、63号土坑、HGS/ 82. 碁石 /HGS/ 83～85. さいころ /HGS/、HHC/Y34-4 86. 箒 /HGS/678号 87～89. 植木鉢 /HHC/AJ35-1、AE35-3 90.～91下駄 /HHC/ 池 92. 銭貨 /HS7/19号地下式土坑
	日本経済新聞	掲載	「まるかじり、なんでも調査団」 日本経済新聞朝刊首都圏版 2014年4月15日付	1. 調査風景、遺構写真 /HAC13
	東洋陶磁学会	掲載	大橋康二「近世の平戸焼と現川焼の特質について」 『東洋陶磁』43号 (2014年5月発行)	1. 色絵牡丹唐草桐文盃台 /SBS00 2. 染付三つ葉葵紋器台 /SBS00

年度	貸出先	目的	貸出・掲載内容	貸出・掲載資料(資料 / 出土地点略称 / 遺構) ^{*1}
2014	日本貿易陶磁研究会	掲載	高島裕之「江戸遺跡における明末以前の中国陶磁—大型製品の受容に関する予察—」『貿易陶磁研究No.34』 2014年9月発行	1. 青瓷鉢2種 /HHC/L32-1 2. 青瓷盤 /HHC/L32-1 3. 青瓷脚付盤 /HHC/L32-1 4. 青瓷脚付盤 /U 5. 青瓷罐 /U 6. 青瓷罐2種 /HGS 7. 青瓷石榴尊 /HGS 8. 青瓷八角瓶 /HGS 9. 青瓷瓶 /HGS 10. 青花盤 /HGS 11. 青花釉裏紅梅瓶 /HGS 12. 青花香炉2種 /HGS
	新潟県立歴史博物館	貸出	企画展『日本人類学の黎明—小金井良精資料を中心に—』 会期：2014年9月27日～2014年11月9日	1. 牛乳瓶 /TS/ 表土
	根津美術館	掲載	鈴木裕子「出土資料からみた朝鮮陶磁—十六世紀以降を中心として—」 『根津美術館紀要 此君』第6号 2014年11月発行	1. 高麗茶碗3点 /HW/SK3、D 焼
	セインズベリー 日本藝術研究所	掲載	『Online Resource For Japanese Archaeology And Cultural Heritage』 (英国高校教育向けオンライン教材) 2014年9月23日公開	1. 能舞台写真 /HIKN/SX555 2. 足軽・間番長屋遺構写真 /HW/D1 面 3. 肥前製染付矢羽文皿 /HGS/537 号 4. 肥前製染付山水文大皿 /HGS/678 号 5. 足軽・間番長屋出土陶磁器 /HW/D 焼 6. 御殿空間の生ゴミ写真 /HGS
	富山市教育委員会 埋蔵文化財 センター	掲載	朝日新聞朝刊石川版、朝日新聞デジ タル (2013年11月28日付)	1. 土人形「狛」 /HGS/49号

*1 調査地点名

- HAC13：アカデミックコモンズ
- HEA07：経済学研究科学術交流棟
- HGS：御殿下記念館
- HHB：法学部4号館(法)・文学部3号館(文)
- HHC：医学部附属病院中央診療棟(病中)・設備管理棟(エネセン)・給水設備棟(給水)・共同溝(共同溝)
- HIKN：医学部教育研究棟
- HJF06：情報学環・福武ホール
- HN：医学部附属病院看護師宿舎
- HW：医学部附属病院入院棟A
- HS7：理学部7号館
- K14：工学部14号館
- OKS07：追分国際宿舎
- SBS00：医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟
- TS：工学部武田先端知ビル
- U：山上会館

第3節 室員研究・活動報告

堀内 秀樹

【著書・論文・研究ノート】

・「遺跡から出土する清朝陶磁器」『陶説』第734号、pp.31-36、2014年5月1日、日本陶磁協会

【研究発表・講演・講座】

・2014年5月17日

「近世考古学の「研究」を巡る諸問題－調査・研究・周知化の流れのなかで－」日本考古学協会、第80回総会セッション講演

・2014年12月7日

「アジア－ヨーロッパ間の陶磁器流通研究へのアクセス」東洋陶磁学会第42回大会

・2015年2月1日

「出土陶磁器からみる近世甲府城下町の様相」山梨県郷土研究会記念講演会

成瀬 晃司

【著書・論文・研究ノート】

・「下屋敷時代の本郷邸開発」『金沢城関連城郭等の初期の様相』pp.41-46、2015年3月、石川県金沢城調査研究所

【研究発表・講演・講座】

・2014年5月17日

「江戸遺跡発掘調査の現状と課題」(「セッション1「近世考古学の展望」日本考古学協会第80回総会)

小松 愛子

【著書・論文・研究ノート】

・「逸身家の婚礼」逸身喜一郎・吉田伸之編『両替商 銭屋佐兵衛』、第2分冊、pp.91-124、2014年 東京大学出版会

【研究発表・講演・講座】

・2014年10月16日

書評 『思想』特集号・交差する日本近世史一日仏の対話から、都市史ワークショップ

・2014年11月23日

「逸身家の婚礼」大阪歴史博物館特集展示・シンポジウム「両替商 銭屋佐兵衛」

・2015年1月27日

「文献史料にみる江戸富山藩邸のくらし」東京大学埋蔵文化財調査室公開シンポジウム「江戸富山藩邸の調査・研究報告会」

原 祐一

【研究発表・講演・講座】

・2014年6月7日

「向岡記碑の文京区文化財指定までの経緯と今後の課題」文化財保存修復学会第36回大会（連名 原祐一、町田聡）

・2014年8月2日

「向岡記碑の保存修復」自游書画展、銀座洋協ホール

・2014年9月6日

天文の夕べ 十五夜講演会「不忍池周辺の大名庭園と月景観」杉並区立科学館

・2014年10月23日

「東京大学出土遺物と一分金・二分金のPIXE分析」第30回PIXEシンポジウム（連名 原祐一、中野忠一郎、松崎浩之、西脇康、小泉好延）

・2014年11月9日

「富山藩邸庭園の造園と借景に関する一考察」平成26年度日本造園学会 関東支部大会

大成 可乃

【研究発表・講演・講座】

・2015年1月17日（土）

「掘って、埋めて、また掘って - 東京大学イノベ地点の調査成果から」江戸富山藩邸の調査、研究報告会

附 東京大学埋蔵文化財調査室要項

東京大学埋蔵文化財運営委員会は、全学委員会の見直しに伴い、以下の通り廃止され、埋蔵文化財調査室は、キャンパス計画室下部組織に改組された。

東京大学における全学委員会の見直しに伴う関係規則の整理等に関する規則（平成22年3月25日東大規則第133号）（抜粋）

（略）

（東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の廃止）

第17条 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則（平成元年7月11日制定）

東京大学埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

（設置）

第1条 キャンパス計画室の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

（業務）

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という。）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- （1）遺跡調査に対する総括的指導助言
- （2）文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- （3）遺物等の保管及び管理
- （4）遺跡調査の方法に関する調査研究
- （5）前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

（室長）

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は准教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

（室員）

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

（庶務）

第5条 調査室の庶務は、本部施設企画課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

附 則 この規則は、平成22年4月1日から施行する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表

室長（人文社会系研究科教授）	大貫 静夫
室員（キャンパス計画室准教授）	堀内 秀樹
室員（キャンパス計画室助教）	成瀬 晃司
室員（人文社会系研究科特任助教）	小松 愛子
室員（キャンパス計画室助手）	原 祐一
室員（キャンパス計画室助手）	大成 可乃
室員（キャンパス計画室助手）	追川 吉生
教務補佐員	香取 祐一
教務補佐員	小川 祐司
教務補佐員	清水 香（2014年4月～）
事務補佐員	青山 正昭
事務補佐員	今井 雅子
事務補佐員	大貫 浩子
事務補佐員	加藤 理香
事務補佐員	小林 照子
事務補佐員	杉浦 あかね
事務補佐員	田中 美奈子
事務補佐員	渡邊 法彦

紀 要 編

東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 10

栽培遺構からみた大名屋敷における植物栽培の諸様相

追川 吉生

第1章 はじめに

近世城下町は兵農分離と商農分離の政策のもと形成され、幕藩体制の確立によって完成した都市である(西川幸治 1972)。中世都市からの移行を論じて小野晃嗣が明らかにしたように(小野 1934)、「侍屋敷」と「町屋」に分離された近世都市(城下町)は農耕的要素を含まない。江戸もこうした都市のあり方を踏襲するが、特に近世初期の江戸に関しては、史料的な制約から不明な点が多い。

『慶長江戸絵図』(1608年/慶長13)には整然と区画された大名屋敷が建ち並ぶ状況が描かれている。水江漣子はこれを『別本慶長江戸図』から数年のうちに都市化が進んだ江戸の都市開発の状況を示すものと捉えている(水江 1981)。ただし『慶長江戸絵図』が描いているのは郭内のみであることには留意する必要があるだろう。『正保年間江戸図』(1645年/正保2以前)では市谷などに百姓地が確認できる。例えば小石川火之番町は1697年(元禄10)に六歳なる百姓が拝領したが、ここが年貢町場となったのは1710年(宝永7)のことである¹⁾。少なくとも17世紀には、江戸城周辺域を別とすれば府内には百姓地が存在していたことになる。

近年、小石川牛天神下遺跡(都立文京盲学校遺跡調査班 2000)、石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡(港区教育委員会 2008)、会津藩保科(松平)家屋敷跡遺跡(慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011)などで水田や畑が検出している。これらはいずれも武家屋敷が造成される以前のものであり、家康入府前後の江戸の景観を知る上で重要な調査事例といえる。

江戸を対象とする発掘調査は1980年代半ばから本格的に始まり、染井遺跡のような江戸周縁部の植木屋の調査も行われたが(豊島区教育委員会 1991)、東京大学本郷構内遺跡、郵政省飯倉分館構内遺跡、真砂遺跡など、この時期に行われた大名屋敷跡遺跡の調査では、栽培や耕作に関連する遺構は未検出だった。

大名屋敷跡遺跡の発掘調査は、歴史学における武家地研究の進展も促した。加賀藩本郷邸をモデルとして提示された吉田伸之による大名屋敷の空間構造では、詰人空間は家臣や武家奉公人の居住と、藩邸の生活や詰人を支配・管理するための公的施設がおかれた空間と規定され(吉田 1988)、大名屋敷の内部に生産や流通を担う要素を持たなかったことが、藩邸と江戸の町人社会との関係を形成したとされた(吉田 1995)。吉田による大名屋敷の二元的空間構造論は、加賀藩本郷邸跡である東京大学本郷構内遺跡をはじめ、多くの大名屋敷跡遺跡で活用された。

大名屋敷跡遺跡の調査例が増加するのに伴って、大名屋敷の生活実態の多様性が明らかになっていく。大名屋敷跡遺跡で栽培遺構が最初に報告されたのは、内藤町遺跡1次調査(高遠藩下屋敷²⁾)である(新宿区内藤町遺跡調査会 1992)。谷川章雄は「中屋敷の多様な土地利用のあり方は考古学的知見によって明瞭にとらえられるもの」として、大名屋敷の空間構造の解明における栽培遺構の重要性を指摘した(谷川 1992)。

市谷本村町遺跡（尾張藩上屋敷）の1次調査（新宿区市谷本村町遺跡調査団1993）と4次調査（新宿区市谷本村町遺跡調査団1995）では、両地点にまたがる20条以上の溝状遺構を検出した。大八木謙司・成田涼子は、遺構の検出状況や『市ヶ谷屋敷平面図』との照合から、この遺構が庭園内の「御花壇」に相当する施設であると位置づけた（大八木・成田1993）。

尾張藩上屋敷跡遺跡での栽培遺構の検出は、栽培活動の実態解明のために歴史学や文化財科学との学際的研究を促した。長谷部由紀は『御小納戸日記』の分析を通じて、庭（花壇含む）で栽培されていた植物として23種の植物を採り上げている。これらの植物が鑑賞用であるとともに、食用及び薬用として利用されていたことから、「庭園・薬園・菜園の機能が未分化」な栽培状況と、「御花壇」の植溜としての役割を指摘した（長谷部1993）。遺構の状況から上屋付きの花壇を想定した越村篤は、尾張藩が御殿空間で栽培した可能性のある植物として菊と朝鮮人参をあげた（越村1999）。文化財科学による分析では、土壌分析によって考古学と歴史学から花壇と推測した溝状遺構の覆土が、耕作土だったことが明らかになった。しかし花粉分析による栽培作物の解明には至っていない（パリノサーヴェイ1993）。

渋谷葉子は尾張藩中屋敷の御殿跡地の転用として、跡地が保谷村の百姓や藩士たちへ貸し出されていたことを明らかにした（渋谷1994）。耕地の貸し出しは上屋敷の被災によって中屋敷が居屋敷となると中止になるなど、上屋敷の状況と連動していることを指摘した（渋谷前掲）。

武家地・町人地・寺社地・百姓地が混在する地域が多いという江戸の状況は、18世紀以降も特に江戸近郊で顕著だった（原田佳伸1997）。北原糸子・奥須磨子は戸塚村を例に、江戸郊外に展開した抱屋敷・抱地での農民による野菜類生産の可能性を指摘した（北原・奥1985）。中野達哉は主に江戸東南部を対象に、百姓地に大名の抱屋敷が形成されていく状況を明らかにした（中野1990）。原田佳伸は岡山藩大崎屋敷を例に、藩邸内の畑で栽培した野菜を他の藩邸へ供給していたことを明らかにした（原田1990、1997）。

都心部の大名屋敷跡遺跡に比べて、江戸郊外の下屋敷や抱屋敷の調査例は少ないが、千駄ヶ谷五丁目遺跡（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会1997ほか）や新宿六丁目遺跡（東京都埋蔵文化財センター2005）など、下屋敷や抱屋敷での栽培遺構の検出例も増えている。ただし江戸郊外に展開した下屋敷・抱屋敷の広大さと比較して、現時点で実施している発掘調査はいずれも極めて限定された範囲を調査の対象としているに過ぎず、歴史学が指摘しているような大規模な耕作地の存在をうかがわせる調査例はない。

栽培遺構の分析においては、文化財科学による種々の分析が栽培活動の実態を明らかにする上で重要な役割を担っている（宮路淳子2002）。しかし大名屋敷跡遺跡の栽培遺構では、尾張藩上屋敷跡遺跡での分析のほかは、向柳原町遺跡（鈴木茂2005）や東京大学本郷構内遺跡CRC-A地点SD11006で行われているに過ぎない³⁾。大名屋敷跡遺跡での栽培遺構の検出例が限られている現状では、科学分析を行うことを前提とした調査計画を立案することは難しいと思われる。自然科学分析によって栽培活動のあらゆる点が明らかになるとは限らないが、大名屋敷内の活動の多様性を明らかにする上では不可欠なものであり、分析事例の増加が期待される。

大名屋敷跡遺跡における耕作地に関する遺構の検出例は増えているが、その最初の検出例である内藤町遺跡において谷川が指摘した（谷川前掲）、大名屋敷の栽培活動に従事した者が未解明である点は依然として課題である。

本研究では大名屋敷跡遺跡の検出した畑、畝溝、花壇など（以下、栽培・耕作遺構）の分析から、大名屋敷の生産活動としての植物栽培のあり方を検討する。

第2章 大名屋敷跡遺跡の栽培遺構

第1節 栽培遺構の諸形態

大名屋敷跡遺跡で検出した主な栽培遺構をまとめたのが表1である。遺構の分類名や分類基準は遺跡によって様々だが、大別すると溝・土坑・溝状土坑という3つの形態に分けられる。それぞれの形態と栽培のあり方をみていくことにする。

遺跡	屋敷種類	空間	形態
市谷本村	上	御殿（庭園）	溝
向柳原町	上	御殿（庭園）	土坑
千駄ヶ谷五丁目2次	抱	詰人（空閑地）	溝状土坑
内藤町	中	詰人（空閑地）	溝
新宿六丁目	下	詰人（空閑地）	溝
尾張藩下屋敷跡	下	詰人（居住地）	溝
東大第2中診	上	不明	溝
東大CRC-A	上	詰人（居住地）	溝
東大御殿下	上	御殿（庭園）	土坑
汐留	上	詰人（居住地）	土坑
萩藩毛利家屋敷	下	御殿（居住地）	溝

表1 栽培・耕作遺構の種類と大名屋敷の空間構成

1. 溝

植物栽培に関連する溝には、次のようなものが考えられる。

- ① 花壇
- ② 畝立てに伴って形成される畝間溝。
- ③ 水場から耕作地へ水を引き込む灌漑・給水などの水利施設に伴う溝。
- ④ 耕作地の範囲を示す地境としての溝。

花壇（①）の例は、市谷本村町遺跡1次調査・4次調査で検出した溝状遺構が該当する（1図）。大八木・成田は遺構の形態（直角に近い急斜度な立ち上がり）、出土遺物（多量の釘）、そして絵図上の「御花壇」という表記から、本遺跡で検出した溝状遺構を大名庭園内の花壇であると把握した（大八木・成田前掲）。

百人町三丁目遺跡（大久保百人組大縄地）で検出した溝状遺構も、花壇（花壇状遺構）と把握されている（新宿区遺跡調査会1996、新宿区補助第七二号線遺跡調査会1998）。当遺跡の溝状遺構には釘の出土はないが、遺構の立ち上がりは市谷本村町遺跡と同様に急斜度を呈しているほか、遺構底面の根穴や黒ボク土を覆土とする点が特徴である。

畝間溝（②）は畝と畝との間にある溝状の窪みである。溝として構築された目的なものではなく、

畝を立てるために土をかき上げた結果生じた窪みである。畝は畑の水はけを目的としたものなので、必要以上に高く築かれることはない。そのため畝溝も深い溝になることはない。また畝に伴うことから、溝が一条単独で検出することはない、複数の溝状遺構からなることも特徴である⁴⁾。

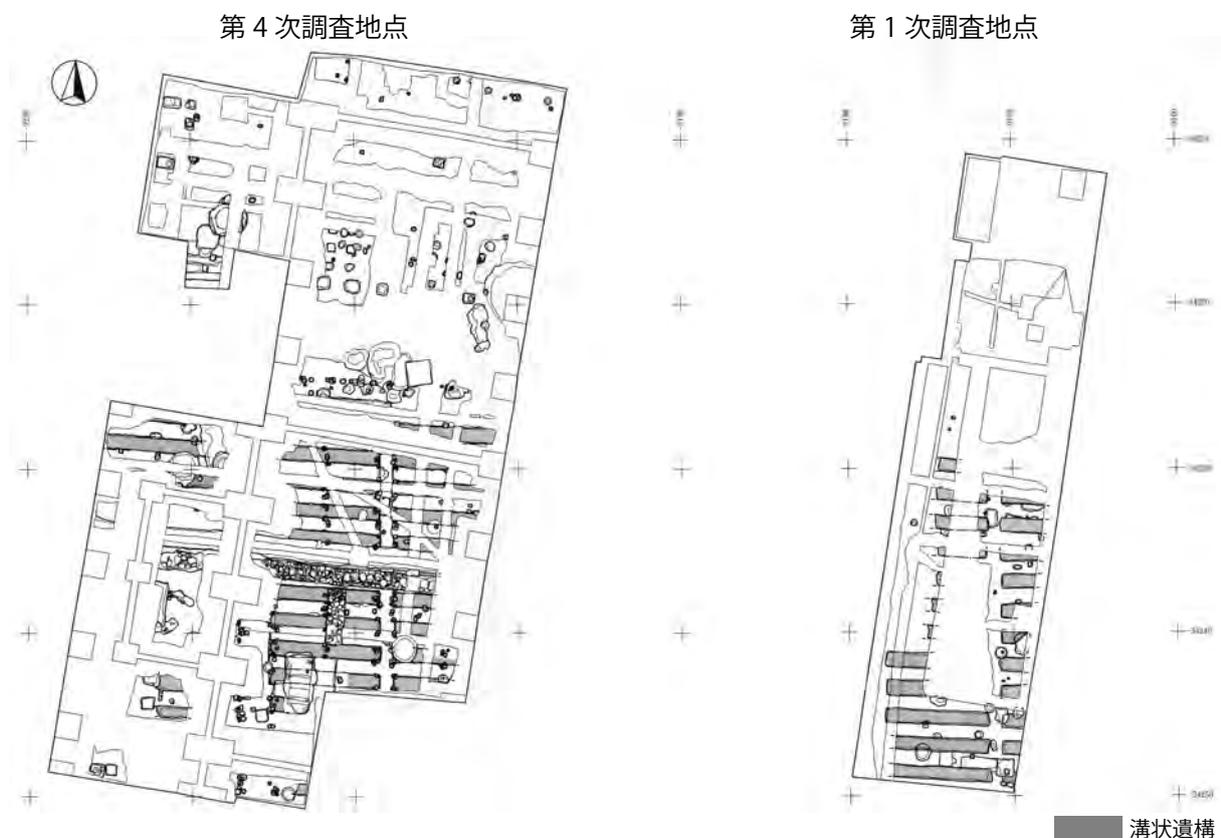
その間隔は取り過ぎれば作付面積あたりの畝数の減少を来し、これは収穫量の減少に直結する。しかし間隔が狭すぎても、隣り合う作物同士で日当たりや風通しを阻害するほか、作業スペースの確保も困難となる。畑の状況によって異なるが、現在の耕作ではおよそ 20-30cm の間隔を取る。

水利施設に伴う溝 (③) は給水施設と耕地とを結ぶ導水路である。花壇や畝に伴う溝とは軸が異なる場合がある。遺構の覆土には水成堆積層⁵⁾ や木樋の痕跡が認められる。

耕作地を区画する地境としての溝 (④) については、宇津木台遺跡で分析例が示されている (梶原勝 1991)。耕作地を屋敷内で区画する溝は千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査で認められるが、本稿では区画溝として分析の対象から除外した。

No.	遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	溝間隔(m)	長軸
1	新宿六560	2-4	0.5	0.1-0.3	0.1-0.3	東西
2	尾張下	0.4-6.5	0.4-0.6	0.1-0.2	0.2-0.3	東西
3	第2中診SD1179	5-6	0.25-0.4	0.05-0.15	0.5-0.8	東西
4	CRC-ASD11006	5-5.6	0.4-0.6	0.1-0.2	0.3-0.5	南北
5	市谷本村5号など	6.34	0.86	0.35	0.7-0.9	東西
参考	百人町三16	25.0	1.3	0.5	1.1	南北

表 2 栽培遺構と考えられる溝状遺構



1 図 市谷本村町遺跡の溝状遺構 (越村 1999 一部改変)

以上、栽培に関連する溝状遺構として考えられる4つのあり方を概観した。そのうち本研究では、栽培活動に直接関係する花壇(①)と畝間溝(②)を分析の対象とする(表2)。

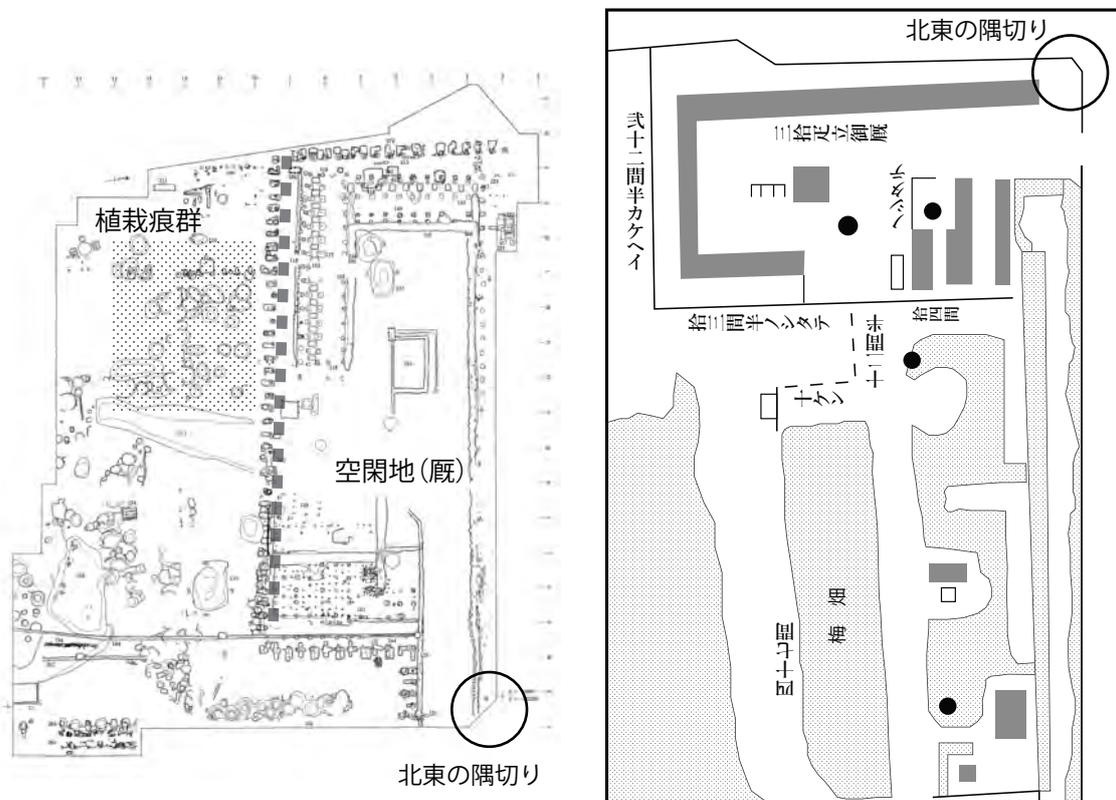
花壇跡と推測される市谷本村町遺跡5号遺構や百人町三丁目遺跡16号遺構は、溝の幅と深さ、及び溝間隔がNo.1-4よりも大きな値を示している。また表には反映していないが、遺構の立ち上がりが急斜度である点も共通している。この2つを除いたNo.1-4の特徴、即ち、狭くて浅い溝が0.5m程度の間隔で設けられるという特徴が、畝立ての結果生じたものであることを反映したものと考えられる。

2. 土坑

向柳原町遺跡21-U-01は平面形が瓢形を呈しており、長軸3.6m、短軸1.4m、深さ0.2mである。遺構の深度は浅いが、21-U-01は1806年(文化3)に焼失した1号建物跡の上に構築されていることから、近代以降の削平を受けていることが考えられる(東京都埋蔵文化財センター2005)。遺構の立ち上がりが急斜度であること、覆土が灰黄褐色土で、底面に炭化物が敷かれたように分布する状況から、本稿では花壇と捉えたい。瓢形をした平面形は、溝状遺構や溝状土坑の花壇と大きく異なるが、これは庭園の一角にあたることと関係しているかもしれない。

汐留遺跡5K-157は、直径0.3-0.6mの不整円形を呈した土坑(深さ不明)が50cm間隔で3ないし4列並ぶ土坑群(範囲は長さ17.5m、幅4m)で、土坑は28基以上にのぼる。個々の土坑の平面形と断面形は報告書に未掲載だが、黒褐色土を覆土とする(東京都埋蔵文化財センター2000)。汐留遺跡は低地を埋め立てて大名屋敷を造成したので、黒褐色土による覆土は報告書が指摘したように遺跡(屋敷)外から搬入したものだらう。

土坑の断面形や深度は不明だが植栽痕の可能性が高い。しかし3ないし4列にわたって樹木が並ぶ



2図 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点の植栽痕群(東京大学埋蔵文化財調査室1990を基に作成)

状況は、屋敷内の空間を画することを目的として設けられた植栽列を想定することは難しい。報告書では本遺構を「御殿の南西に位置する。おそらく菜園の跡であろう」と位置づけているが（東京都埋蔵文化財センター前掲）、菜園といっても畝立てによる耕作ではなく、花樹や果樹の栽培だったことが推測される。

東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点の植栽痕は、報告書の附図（全体図）に記載があるのみで、遺構個別の記述や図面はなく詳細は不明である（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。全体図を見る限り、直径 1-3m 程度の不整形の土坑が切り合っている（2 図）。

該期の調査地周辺を絵図でみると、『加藩江戸本郷屋敷総絵図』（石川県立歴史博物館大鋸コレクション）に庭園（育徳園）の露地を挟んだ緑地帯があり、「梅畑」、「四十七間」と記載されている。御殿下記念館地点で検出した植栽痕は、「三拾正立御厩」に相当する建物跡遺構との位置関係から「梅畑」の北側の一部にあたる。

3. 溝状土坑

溝状土坑は千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査において提示された遺構分類で、「長軸 12 m 以下、断面形は長方形の細長い土坑」である（斉藤信弘・小高敬寛 1998）。本遺跡で検出した溝状土坑の幅は 0.6-0.9m で、長軸と短軸の比は 1:3-1:6 である。遺構の深度が浅く、立ち上がりの様子が不明なものが多いが、これは後代の削平の影響を考える必要があるだろう。検出状況の良い遺構では、遺構の立ち上がりは直角に近い。

また 1. 溝でみた畝間溝に該当する溝状遺構のように、数条から数十条の溝が集中するような状況はみられない。千駄ヶ谷五丁目遺跡 2 次調査の報告書に掲載された写真図版では、遺構底部にピットを伴うものが多く認められる。報告書では特にこれについて言及はないが、百人町三丁目遺跡の溝状遺構（花壇）の底部に認められる根穴に類似している。こうした状況からみて溝状土坑は斉藤・小高が指摘しているように花壇の可能性が高い。

本地点は宇都宮藩の抱屋敷である。『外畑之図』（栃木県立文書館蔵）には屋敷の中央部に畑が描かれており、『植溜之図』（栃木県立文書館蔵）には、描かれている屋敷がどの抱屋敷かは定かではないが（高野良徳 1997）、花壇や「植木室」といった栽培施設の存在がうかがえる。

大名屋敷跡遺跡で検出する栽培遺構の溝・土坑・溝状土坑の各形態は、以上のように「花壇」、「畑」、「花・果樹栽培」の 3 つの植物栽培に対応する。これを大名屋敷の空間構成との関わりでまとめたのが表 16 である。

空間	花壇	畑	花・果樹
御殿空間（庭園）	○		○
詰人空間	○	○	○

表 3 空間毎の栽培のあり方

花壇と花・果樹栽培が御殿空間と詰人空間のどちらにも認められる。これは庭園・薬園・菜園の機能が未分化な大名屋敷での栽培状況（長谷部前掲）が遺構の形態に反映したもので、必ずしも両空間での栽培活動が同一のものであったことを意味するものではない。栽培していた植物の具体的な品種や、栽培目的の解明には、歴史学や文化財科学との学際的な研究が不可欠である。

栽培の実態は異なるものの、花壇や花・果樹栽培が両空間に認められるのに対して、畑は詰人空間

のみにみられる植物栽培である。その意味で畑での植物栽培、即ち耕作が、御殿空間と詰人空間での栽培活動の違いを最も顕著に表しているものといえるだろう。

また大名屋敷跡遺跡での畑の検出側は、現状では江戸郊外の下屋敷や抱屋敷にはない。これは下屋敷・抱屋敷の調査の実態を反映したものであるが、これまで屋敷内部に生産の要素を持たなかったと考えられてきた（吉田 1995）、加賀藩邸などの上屋敷跡にも畑が存在し、そこで耕作が行われていたことは、大名屋敷での生産活動を考える上で極めて重要な知見である。

そこで次に、詰人空間で検出した栽培遺構との畑のあり方を個別の遺跡でみていくことにしよう。

第2節 詰人空間の栽培遺構と畑

1. 東京大学本郷構内遺跡クリニカルリサーチセンター地点（CRC-A 地点）

CRC-A 地点は加賀藩邸と富山藩邸とにまたがっている。南北方向にのびる底部に柱穴を伴う溝状遺構（SD12081 など）が加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境であり、畝間溝（SD11006）は加賀藩邸側で検出した。

SD11006 は 10 条の溝からなり、各溝の規模は長さ 5.0-5.6m、幅 0.3m、深さ 0.1m 程度である（3 図）。溝と溝の間隔は 30-50cm。覆土はロームブロックを含む褐色土層で、遺物は出土していない。検出したのは本地点で 1 面と呼んでいる生活面で、幕末の遺物を含んでいる。

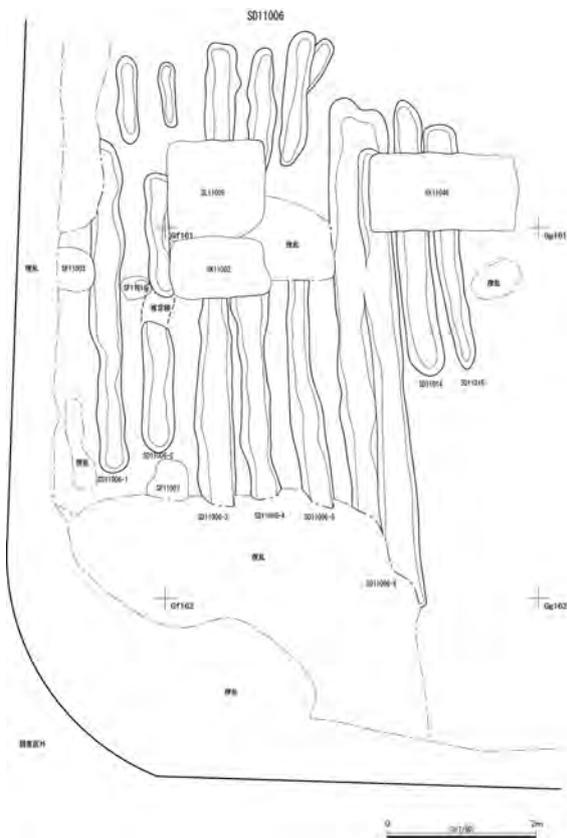
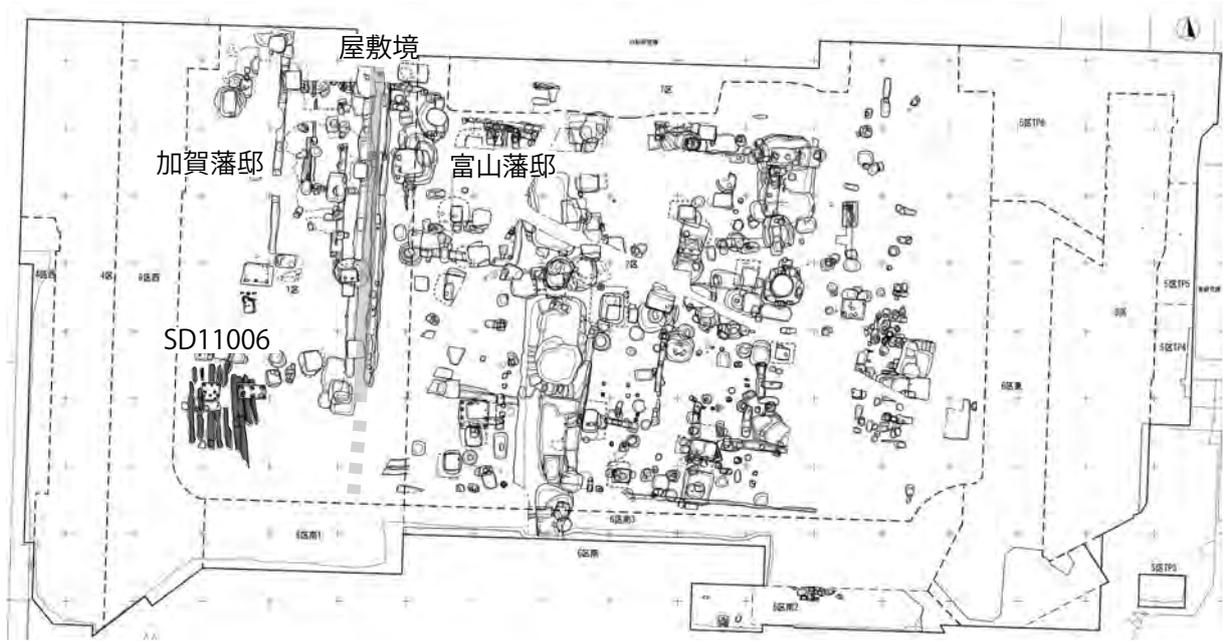
加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境 SD12081 は、調査区南端まで延びていない。この SD12081 が途切れた部分には深い攪乱が入っており、屋敷境が南側へどのように展開するかは本地点の調査では明らかにしえなかった。本地点の南隣りに位置する立体駐車場地点でも、SD12081 に続く溝状遺構は未検出である（追川 2012）。

幕末期の本郷邸を描いた絵図の一つ、『上中下屋敷絵図（御上屋敷惣絵図）』（前田育徳会尊経閣文庫蔵）では、調査地点周辺には東西に棟を持つ 4 宇の長屋（北から「御居宅脇壺番御貸小屋」～「御居宅脇四番御貸小屋」）が描かれている。加賀藩邸と富山藩邸との屋敷境は、「御居宅脇四番御貸小屋」の南縁から西側へと鉤の手状に屈曲している。SD12081 が調査区を南側に貫かない状況が、絵図に描かれた屋敷境の屈曲を反映したものは現段階では不明だが（西側へ延びる溝状遺構は未検出）、畑はこの四宇の長屋のいずれか、恐らく「御居宅脇壺番御貸小屋」か「御居宅脇参番御貸小屋」に隣接したものである可能性が高い。ただし絵図には畑は描かれていない。

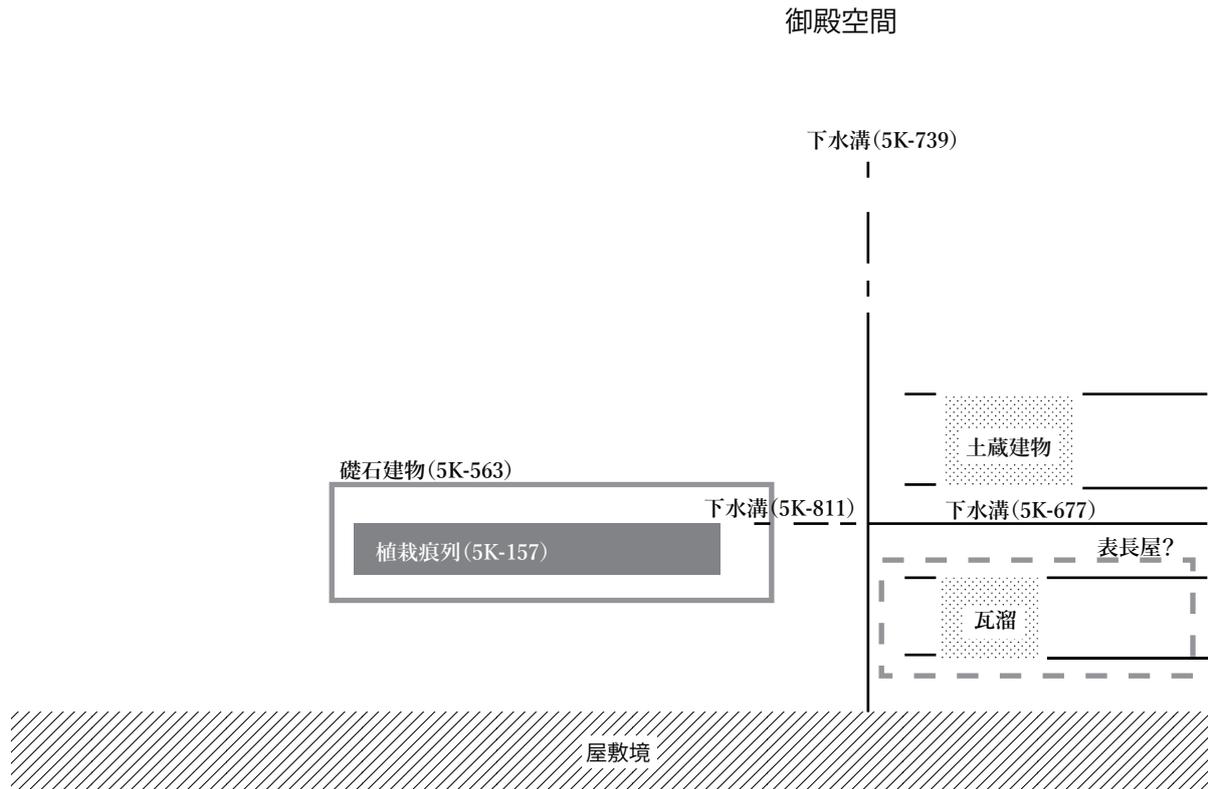
ところで四宇の長屋のうち、「御居宅脇壺番御貸小屋」、「御居宅脇参番御貸小屋」、「御居宅脇四番御貸小屋」は、長屋の東側の一画が塀などで他の部屋とは区画されている。これらは絵図に記された内容から、定府の住まいだったことがわかる。本地点で検出した畑が「御居宅脇参番御貸小屋」に隣接したものであるならば、定府の藩士が耕作に携わっていたことが考えられる。

2. 汐留遺跡

汐留遺跡は遺跡内に龍野藩上屋敷、仙台藩上屋敷、会津藩中屋敷を含んでいる。植栽痕列（5 K -157）は龍野藩邸の南側で検出した。前述のように報告書ではこの遺構の性格を、「御殿の南西に位置する。おそらく菜園の跡であろう」と指摘しているが（東京都埋蔵文化財センター前掲）、御殿空間と詰人空間のいずれに帰属したものであるかについての明確な言及はない。そこで植栽痕列周辺の遺構分布状況から、当該遺構の空間的位置づけを検討しよう。



3 図 東京大学本郷構内遺跡 CRC-A 地点 SD11006



4 図 汐留遺跡（龍野藩上屋敷南側）の遺構分布（模式図）

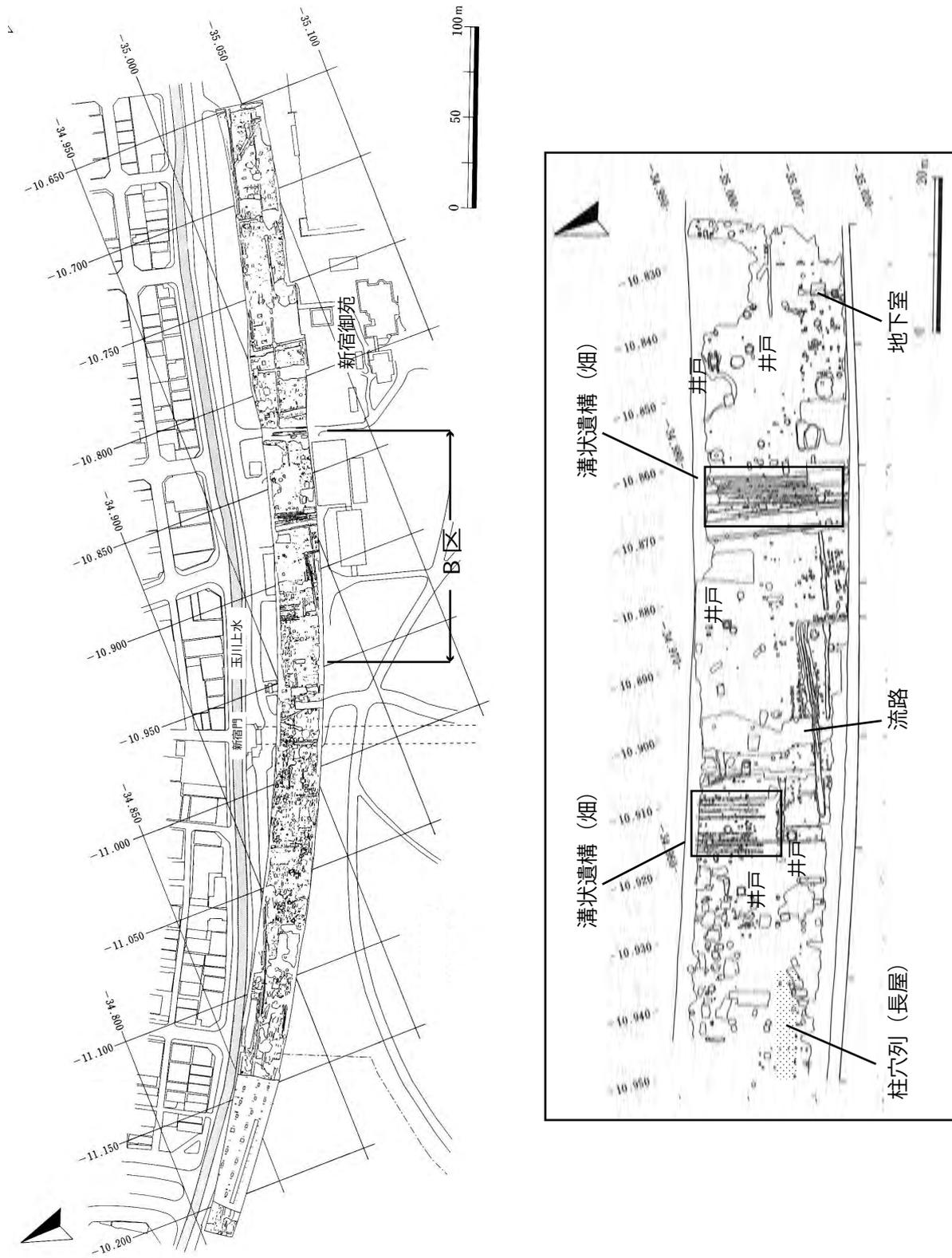
4 図は龍野藩邸南側外郭部の遺構分布を模式化したものである。下水溝（5K-677）の北側は布掘りの基礎遺構（土蔵）が並んでいる。これに対して南側は瓦溜が多く分布する。この様に下水溝(5K-677)を挟んで南北で遺構の検出状況が異なっているのは、下水溝を境に北側に土蔵が並び、南側には屋敷境の堀（6J-500）に沿って瓦葺きの建物、—礎石は未検出だが表長屋と思われる—が並んでいた藩邸の景観を反映したものであろう。

この表長屋は、御殿空間から屋敷境の堀にのびる下水溝（5K-739）によって西側を画されている。これより西側は礎石、瓦溜ともに未検出な空地となる。植栽痕集中部（5K-157）を検出したのは、この空地にあたる（礎石建物 5K-563 と重なるが、これは時期差と捉えられる）。つまり果樹などの樹木園が想定される植栽痕集中部（5K-157）は詰人空間内の、表長屋に隣接した場所に設けられた栽培地であると位置づけられる。

3. 内藤町遺跡 1 次調査

内藤町遺跡 1 次調査は高遠藩四谷屋敷の北側外郭部にあたる。畝間溝（畑）は B 区内の小支谷を挟む東西の台地縁辺部で検出した（5 図）。

谷の東側（B3 ブロック）では、畑周辺に井戸、地下室（B-1 号遺構）、土坑（B-6 号遺構）がある。谷の西側（B6 ブロック）の畑周辺には、井戸のほか、建物跡（B-121～B-134 号遺構）、土坑（B-117、B-119、B-120）などがある。建物跡は直径 20-40cm、深さ 10-30cm の柱穴からなる掘立柱建物の表長屋である。谷を挟んだ東西に表長屋が存在し、台地縁辺部にそれぞれ畑が設けられていた景観が推測できる。



5 図 内藤町遺跡 1 次調査 B 区の遺構分布 (新宿区内藤町遺跡調査会 1992 に加筆)

4. 新宿六丁目遺跡

新宿六丁目遺跡は広瀬藩下屋敷⁶⁾である。調査区は大名屋敷のほかに、鉄砲玉薬同心の給地手作場や東大久保村・西大久保村を含んでいるため、畑や水田跡を複数基検出しているが、560号遺構と1867号遺構が広瀬藩邸内で検出した栽培遺構（溝状遺構）である（1867号遺構については個別図がないため詳細不明）。

560号遺構は10条以上の溝状遺構からなる畑である。溝は南北16m、東西14mの範囲に分布しており、19世紀半ばの遺物が出土している。

560号遺構（畑）は藩邸西側の屋敷境遺構（202号溝）から約12m東側に位置している。広瀬藩邸では絵図から屋敷内の空間構成を知ることはできないが、『御府内沿革図書』や『江戸切絵図』にみられる拝領者名の表記方向から、屋敷の表は屋敷北側の道（調査区外）に面していたと考えられる。栽培遺構を検出した場所は藩邸東側の外郭部であり、詰人空間だったと考えられる。

広瀬藩邸内からは39基の地下室を検出している。列をなした地下室の検出状況は、詰人空間内に長屋が建ち並んでいた景観をうかがわせる。しかし地下室の年代は18世紀第2四半期から中葉であり、耕作遺構と同時期の地下室は存在しない。土坑の検出状況にも同様の傾向が認められる。広瀬藩邸の畑は詰人空間とはいえ、長屋などのない空閑地に設けられていたことが推測される。

第3章 大名屋敷での植物栽培の諸様相

第1節 御殿空間での植物栽培

大名屋敷での植物栽培は御殿空間と詰人空間のどちらでも行われていた。しかし詰人空間の畑のあり方を分析した結果、勤番長屋に隣接した場所に設けた畑での耕作と、空閑地に設けた畑での耕作とがあることが明らかになった。

以上のことを踏まえると、大名屋敷の植物栽培のあり方は次の3つの類型にわけることができる（表4）。

類型	栽培活動のあり方	上	下
A	御殿空間（大名庭園内）での栽培	●	○（尾張下）
B	詰人空間の居住地での栽培	●	●
C	詰人空間の空閑地での栽培	-	●

表4 栽培活動の諸様相（●は栽培遺構として検出例のあるあり方、○は遺構としては未検出ながら絵図で確認できるあり方

植物栽培類型Aは御殿空間での栽培である。検出事例は3遺跡と少数だが、いずれの遺構も大名庭園内で検出している。これらはいずれも上屋敷だが、尾張藩下屋敷（戸山邸）では御殿空間内に花壇が設けられていたことが絵図からうかがえる⁷⁾（ただしこれらは尾張徳川家下屋敷跡遺跡では未調査部分にあたる）。

このことから屋敷内に御殿空間を擁する大名屋敷では、上屋敷や下屋敷といった屋敷の種類に関わらず、植物栽培が行われていた可能製が高い。むしろ庭園との関わりの強い類型Aの検出状況を踏まえれば、大名庭園内に栽培地を設けることが可能な庭園の広さに規定されるといえるだろう。敷地

面積が限られていた江戸城周辺などの上屋敷では、庭園内に植物が植えられていたとしても、花壇のような栽培施設までは設けられていなかった可能性が高い。

なお尾張藩下屋敷の『戸山御屋敷絵図』（徳川林政史研究所蔵⁸⁾）には、庭園内の大原と呼ばれる藩邸北西側の台地上に畑、池に隣接して田（「御泉水田」）がみられる。戸山邸の庭園には宿場町を模した施設も設けられていたことから、この畑や水田も果たして耕作そのものを目的としたものであるか、庭園内に農村の景観を表出させるための装置であったのか、その位置づけは保留としたい。

大名屋敷跡遺跡の栽培遺構の年代的位置付けは、御殿空間・詰人空間にかかわらず概ね 18 世紀後半である。しかし『江戸図屏風』（国立歴史民俗博物館蔵）には、江戸城内の「御花畠」でツバキが栽培されている様子が描かれている。中尾佐助は将軍（家康・秀忠・家光）の「花癖」と呼ばれる植物愛好が、大名屋敷での花卉栽培に大きな影響を与えたことを指摘している（中尾 1986）。寛永年間に刊行された百椿集、あるいは百椿図と呼ばれるツバキの図譜には、制作や刊行に大名が関わっているものがある（箱田直紀 2006）。このことから少なくとも 17 世紀前半（寛永年間）には、御殿空間において花卉栽培が行われていた可能性が高い。

ただしそれが尾張藩上屋敷跡遺跡で検出したような花壇での栽培であったのかについては不明である。長谷部は『御小納戸日記』の記述を通して、「花壇」と「花畑」という言葉が、「同じ物の言い替え表現である可能性は高い」ことを指摘している（長谷部前掲）。御殿空間での花壇の出現時期に関しては、検出事例の増加を待つて改めて検討したい。

植物栽培類型 A は御殿空間内の大名庭園で検出することから、各屋敷の庭園を職掌する部署が栽培・耕作活動も担ったものと思われる。たとえば市谷本村町遺跡で検出した尾張藩上屋敷の花壇では、庭園の管理を行う御庭中間の中に設けられた花壇懸り中間が担当した（山本前掲）。

また御殿空間内の植物栽培には、出入りの植木屋も関わっていた（秋山伸一 1997）。史料 1 は津藩下屋敷（1658 年・元治元年拝領）の庭園の由来である⁹⁾。

史料 1

「(略) 其初めハ藤堂大学頭高久の露除の男成しに、大学頭草花の類当座に移し持たせ、花過れハ悉くぬき捨させけるをハ、此伊兵衛植ためけるより、次第次第にきり鳥つゝし、百椿牡丹、(略)」

史料にある伊兵衛は駒込村染井の植木職人伊藤伊兵衛のことである。津藩邸ではキリシマツツジなど種々の植物を植えた植木職人が、その管理育成（露除）も手がけていた。尾張藩市谷邸でも 18 世紀半ば以降になると染井や高田の植木屋が出入りするようになる（山本前掲）。

野間晴雄が江戸城¹⁰⁾ や大名屋敷へ出入する植木職人を、「特権的な幕府・大名相手の商売づきあい」と位置づけている（野間晴雄 2010）ように、御殿空間内の栽培・耕作活動には藩邸出入の植木職人の存在が大きかったものと推測される。

第 2 節 詰人空間と植物栽培

1. 居住地の畑と耕作

植物栽培類型 B は詰人空間内の居住地に隣接した畑での耕作活動である。

(1) 加賀藩上屋敷

加賀藩上屋敷（本郷邸）の詰人空間に居住する藩士らが居住域で耕作を行っていたことは、1838年（天保9）閏4月8日に藩士らに出された次の通達¹¹⁾で知ることができる（史料2）。

史料2

「御家中家来末々之者心得違之者も有之体に付、左之通一統相触可申哉之旨、御横目申聞候に付其通と申渡候事。．．．．．(略)．．．．．且又御貸小屋前往来筋江、畑物抔作り置候處も有之体に相聞候。．．．．．(略)．．．．．」

「御貸小屋前往来筋」での耕作とは、勤番長屋の立ち並ぶ一角に（場合によっては長屋と長屋との間の路地にはみ出すように）作った畑のことと思われる。これを禁じていることが、実際に藩士たちの間で耕作が行われていたことを示している。

とはいえ『江戸御上屋敷絵図』（金沢市立玉川図書館蔵・1840年代半ば）には詰人空間に長屋だけでも86宇存在しており、そのうちどの程度の割合で耕作が行われていたかまでは詳らかではない。CRC-A地点で検出した栽培遺構は、現段階では勤番藩士、定府藩士いずれの住まいに隣接しているかについては不明だが、居住地に隣接した畑であることから、史料2が禁じた詰人空間内の耕作を示すものだろう。

(2) 高遠藩下屋敷

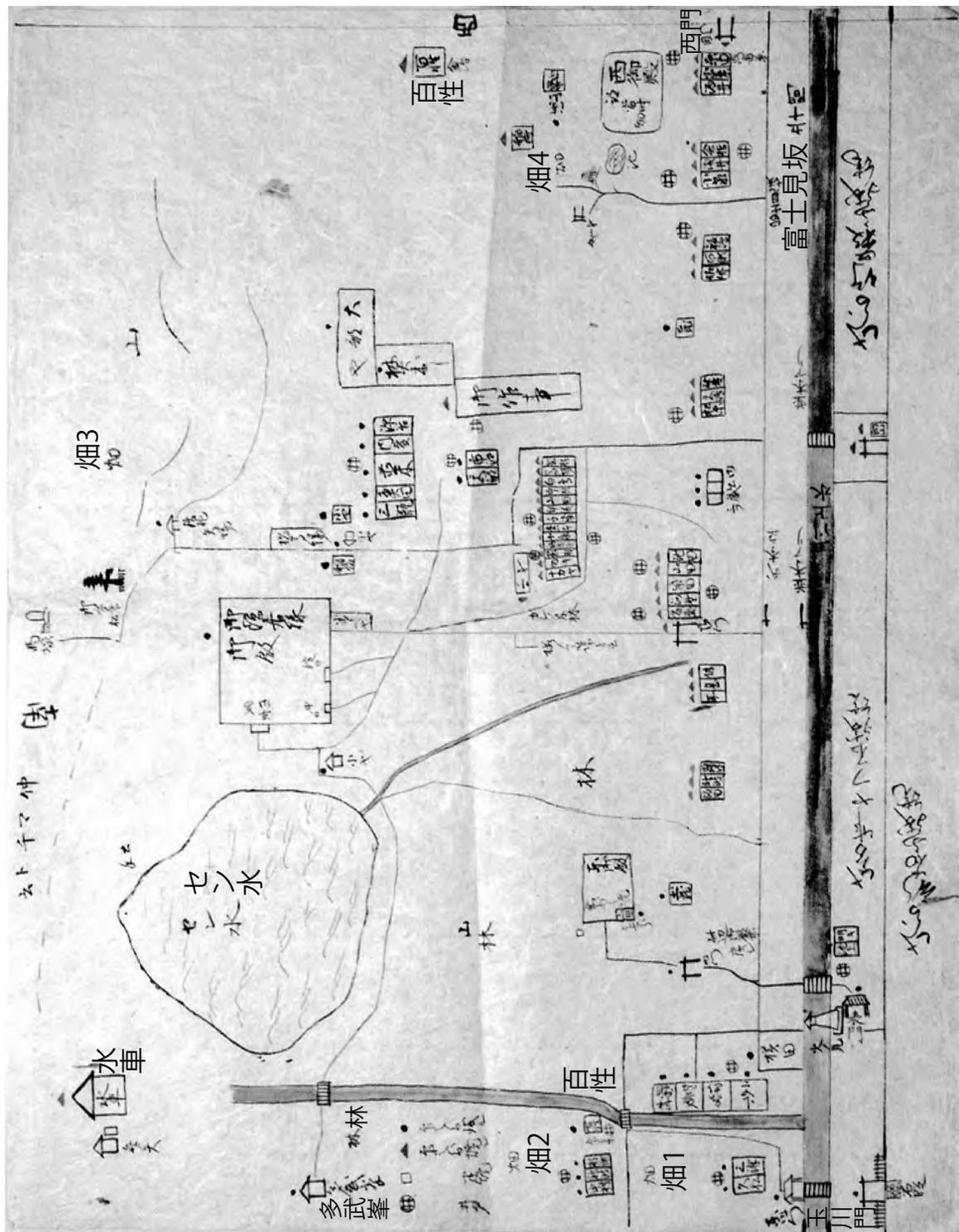
高遠藩下屋敷（四谷屋敷）の絵図には、1851年（嘉永4）の大火後の藩邸を描いたと考えられる『江戸藩邸図 藩邸内諸長屋配置図』（6図・伊那市立高遠町図書館蔵）がある（長谷川正次2010）。以後、これを長谷川の呼称に従い本論文でも『嘉永図』と呼称する。

『嘉永図』は屋敷内の諸施設の配置がデフォルメされているが、屋敷内の状況は大まかに把握することはできる。本研究に関連して重要なのは、『嘉永図』の制作年代（1851年・嘉永4以後）が、1次調査B区で検出した畝間溝の年代（Ⅳ期：1809年-幕末）に近い点である。

『嘉永図』をみると、四谷屋敷北側の中央部の門から西門までは、屋敷境の堀に沿って長屋が並んでいる。デフォルメされた図ということもあり、B区の場所を図上で特定することはできないが、藩邸北側の並木道に「富士見坂」と描かれた部分がある。「富士見坂」と書かれた文字列の中程から曲線が描かれている。曲線は屋敷内の池と繋がっていることから、小河川を表していると考えられる。これが一次調査B区で検出した谷（流路）であると考えていだろうか（5図）。「富士見坂」と描かれた部分には、「小泉」、「浅井」、「酒井」などと記された長屋がある。小河川を挟んで東西に家臣の長屋が存在する描写は、B区の遺構検出状況と一致したものである。

B区の栽培遺構と地下室や柱穴列の分布状況から、谷を挟んだ東西のテラス状の部分に長屋が設けられ、谷への傾斜が始まるテラス縁辺に畑が作られた景観が想起される（5図）。『嘉永図』に描かれた「富士見坂」周辺の状況は、遺構のあり方から復元した景観と矛盾しない。

谷の西側の3戸に分割された長屋の居住者の一人である「小泉」は、長谷川によって「下屋敷御前方諸向勧請勘定引請」を務めた下級武士に比定されている（長谷川前掲）。おそらくこの長屋に暮らす他の居住者も、「小泉」と同様に下級武士だったことが推測される。下級藩士が長屋の敷地の一角に畑を設け、栽培・耕作活動を行っていた状況がうかがえよう。



6 図「江戸藩邸図 藩邸内諸長屋配置図」(伊那市立高遠町図書館蔵に加筆)

2. 空閑地の畑と耕作

植物栽培類型C類は、詰人空間内の居住地から離れた空閑地に設けられた畑での耕作活動である。

加賀藩では1828年（文政11）の徳川家斉の御成の際に、下屋敷の畑で生産した蔬菜類が手土産として供せられたほか¹²⁾、1850年（嘉永3）には下屋敷を訪れた会津藩主松平容敬らに、やはり下屋敷の蔬菜類が供せられている（吉田政博2010）。絵図にも畑が描かれているが、発掘調査は行われていない。

内藤町遺跡の畑との照合に用いた高遠藩下屋敷の『嘉永図』には、「畑」と記載された箇所が少なくとも5ヶ所にある。これを畑1-畑5と呼ぶことにしよう（6図）。

畑1は藩邸北東隅に設けられた区画内にある。この区画には「玉川門」の南側に2戸の長屋と、玉川上水の余水を挟んで4戸の長屋の2字の長屋がある。畑1は2戸の長屋の南側に位置するが、どちらの長屋の住民が耕作したのかは不明である。なお長屋に付された●と▲は、1851年（嘉永4）の火災での焼失状況を示している。

畑2は畑1を含む北東隅の区画の南側に位置している。3戸の長屋と、「百姓」（百姓）と記された住居（百姓家）に隣接している。絵図の凡例を挟んで南側に林があるが、畑の範囲は詳らかでない。

畑3は藩邸の南側である。屋敷地は北から南へと傾斜する立地だが、絵図でも崖のような表記と「山」とある。畑3は台地下にあたるだろう。周囲は松の木と「馬塚」が描かれているに過ぎない空閑地である。

畑4は前段で内藤町遺跡1次調査B区の小支谷と比定した富士見坂へ延びる流路の南端にある。藩邸の西端で、畑4の周囲には稲荷や鳥居が描かれているほか、藩邸西の屋敷境に隣接した部分には百姓家がある。

畑5は西御殿跡地に設けられた畑で、西御殿の囲いの内側にある。

このうち畑1と畑2は藩士の長屋に隣接している。特に畑1は区画内に2字の長屋と伴っていることから、植物栽培類型Bとした栽培遺構のあり方の可能性が高い。前段でみたように、内藤町遺跡1次調査B区の居住域に該当する長屋には「畑」に関する記述はないので、屋敷内にはこの他にも畑が作られていた可能性は高い。畑3-畑5は周囲に藩士の居住地はなく、これが藩邸内の空間地の畑、即ち植物栽培類型Cとした栽培遺構に該当する。

藩邸内には、百姓家が2軒描かれている。これによって四谷屋敷内の畑の耕作に、百姓が関わっていたことが推測される。長谷川によれば藩邸内の居住者には家臣やその家来などのほか、「郷歩」と呼ばれる下級武士と共に藩の仕事にあたる領民もいた（長谷川前掲）。

百姓や郷歩の人数や仕事内容については不明だが、「大部や」（大部屋）とは別に、独立した住まいとして描かれた百姓家は、世帯での居住を想起させる。原田佳伸はこの屋敷に隣接する角筈村の抱屋敷のあり方を分析し、大名・旗本の抱屋敷で家守や地守を務めるのは、その屋敷の先地主百姓であることを明らかにした（原田前掲）。高遠藩四谷屋敷は拝領屋敷であるが、『嘉永図』の畑と百姓屋は、藩邸内の耕作に藩士以外の労働力が動員されたことを示している。

第4章 小結

本研究では植物栽培遺構と大名屋敷の空間構成との関わりから、大名屋敷で行われた植物栽培のあ

り方を3つに類型化した。

植物栽培は大名屋敷の御殿空間（植物栽培類型 A）と詰人空間（植物栽培類型 B・C）のいずれにおいても行われていたが、特に詰人空間の植物栽培では畑での耕作が特徴としてあげられる¹³⁾。

植物栽培類型 B は藩士たちが自家消費するための蔬菜の生産活動と位置づけられる。加賀藩本郷邸の詰人空間で畑を耕作したのは史料 2 によれば「御家中家来末々之者」であり、その階層が家中組織、あるいは藩邸内の居住者層の末端からどの程度の広がりがあったかは不明である。東京大学本郷構内遺跡では加賀藩邸の長屋の調査報告例は少ないが、上級藩士が居住していた八筋長屋にあたる理学部 7 号館地点では、長屋の空闲地を調査したにもかかわらず栽培遺構は未検出だった（東京大学遺跡調査室 1989）。高遠藩四谷屋敷の『嘉永図』では、内藤町遺跡 1 次調査 B 区の畑に隣接した居住地に該当する長屋で暮らす藩士は下級藩士だった（長谷川前掲）。山本が指摘するように屋敷地の畑作利用が扶持を補う「生活防衛の手段」であるならば（山本前掲）、居住地での耕作は下級藩士を中心とした生産活動だった可能性が高い。

植物栽培類型 C は、主に郊外の大名家敷で認められる栽培活動である。考古学的には検出例が未だ少数に留まっているが、歴史学的には周辺の農村から雇った百姓や国許から召し抱えた領民などを労働力としていることが明らかになっている。原田は『大崎御屋敷諸事留帳』から岡山藩大崎屋敷では、余剰生産品を屋敷外の者へ売却して収益を上げていたことを指摘している（原田 1997）。ここでの生産活動が、生業（なりわい）と位置づけられるような規模を有していたかは不明だが、植物栽培類型 A や B とは質的に異なるものである。

19 世紀になると各藩とも藩政改革の一環として殖産興業政策をとる（吉永昭 1977・1978）。それに伴って江戸の大名家敷では、特に下屋敷において農業試験場的な役割を担うような変化がみられる。たとえば水戸藩では 1835 年（天保 6）に国許の緑岡で茶園を創設するが、その前年に駒込の下屋敷（東京大学本郷構内遺跡内）において宇治出身の浪人・小川佐助に茶の試験栽培を行わせている¹⁴⁾。会津藩では国許での養蜂の事業化を目ざし、三田の下屋敷で試験的に養蜂を行っている¹⁵⁾。三田下屋敷での試験的な養蜂は割場と材木蔵の両方で実施され、その後、飼育場所を増設しているので養蜂が成功したことがうかがえる。

農業振興に伴う大名屋敷内の植物栽培を、詰人空間で行われた耕作（植物栽培類型 C）として捉えるのか、大名屋敷の植物栽培の新たな様相として捉えていくかは、下屋敷跡遺跡の 19 世紀代の栽培遺構の検出を待って改めて検討したい。

本稿執筆にあたり伊那市立高遠町歴史博物館には資料掲載の便宜を図っていただいた。感謝申し上げます。

【註】

- 1) 『御府内備考 卷之四十四』。以下、『御府内備考』は蘆田伊人編（1970 年・雄山閣）による。
- 2) 『内藤町遺跡』では 17 代当主内藤頼博の「下屋敷ともいわれるが、中屋敷の方が正しいらしい」という話しから、本屋敷を中屋敷としている（北原 1992）。
- 3) 新宿六丁目遺跡でも畑跡の覆土を対象として土壌分析が行われているが、実施されたのは大名屋敷に隣接した給地手作場である。
- 4) 畝の向きは東西方向に畝を立てる方が作物全体に日が当たる。しかし畑と周囲の地形との関係や、作付けの季節などを勘案するので特に決まりはなく、同じ畑であっても作付けの季節や作付け植物によって 90 度変

化することがある。その場合、遺跡に残る溝状遺構は井桁状に交差した状態で検出される。したがって溝状遺構の方向は、その遺構が通常の溝であるのか、畝間溝であるかを決定する絶対条件とはならない。

- 5) 百人町三丁目遺跡3次調査25号遺構・26号遺構では、水成堆積層中から流水不定性の珪藻化石を検出しており、遺構内に水が流れていたことが明らかになった（新宿区遺跡調査会前掲）。
- 6) 1675年（延享3）に拝領した。1859年（安政6）以降は山上藩邸となる。調査区内は大名屋敷のほか、鉄砲玉薬同心の給地手作場、東大久保村・西大久保村を含んでいる。
- 7) 『山御屋敷御花壇取広ノ図』（徳川林政史研究所）は庭園内に設けられた花壇である。絵図の注記から花壇には「牡丹」の他、「しゃくなげ」（シャクナゲ）、「はまなす」、「いはら」（イバラ）が植えられていた（渋谷2006）。『山御屋敷御指図二通（表御殿御絵図）』（徳川林政史研究所）には、表御殿の北側に花壇が描かれている。
- 8) 本稿では『東京市史稿 遊園篇第二』（東京市役所1929）を参照した。
- 9) 『虎丘堂集書』。引用は野間晴雄2010による。
- 10) 四代目伊兵衛は吉宗によって江戸城吹上の御用植木師として出入勝手とされている（三浦三郎1967）。
- 11) 『加賀藩史料』（前田家編纂部1929）による。
- 12) 『加賀藩史料』1828年（文政11）3月13日の条による。
- 13) 久留米藩士の勤番長屋での生活を描いた『江戸勤番之図』（大川市立清力美術館蔵）には、戸田熊次郎の部屋の庭の様子をみることができる。庭の中央には花壇が設けられており、そこにはナデシコなどの花とナスのような野菜が混在していることが指摘されている（小林2008）。また、庭の濡れ縁近くには鉢植えの花が育てられていたことがわかる。19世紀になると植木鉢が出土するようになり、植物栽培において鉢植え栽培の存在が大きくなっていったことがうかがえるが、本研究では遺構として検出する植物栽培についてのみ扱うことにし、大名屋敷での鉢植え栽培については稿を改めたい。
- 14) 『水戸藩史料 別記下』（編著者不明1915）。
- 15) 『家世実紀卷之二百五十三』（家世実紀刊本編纂委員会1988）1797年（寛政9）。

【参考文献】

- 秋山伸一 1997 「江戸の庭園管理と園芸書 一植木屋の諸活動を通して一」 竹内誠編 『近世都市 江戸の構造』 三省堂 pp. 107-127
- 蘆田伊人編 1958 『御府内備考』 大日本地誌大系 雄山閣
- 石神裕之 2011 「総括会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡の成果と課題」『会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡慶應義塾中等部新体育館・プール建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 pp. 404-423
- 石山秀和 2010 「勤番武士の余暇と行楽 秋田藩士貝塚清直の江戸日記を事例に」『東京都江戸東京博物館調査報告書 23 酒井伴四郎日記：影印と翻刻』 pp. 73-80
- 市川寛明 1997 「大名藩邸と江戸の都市経済 一津山藩江戸藩邸の事例を通して一」 竹内誠編 『近世都市江戸の構造』 三省堂 pp. 75-103
- 伊藤好一 1959 「江戸近郊の蔬菜栽培」 地方史研究協議会編 『日本産業史大系 4 関東地方篇』 東京大学出版会 pp. 54-81
- 伊藤好一 1966 『江戸地廻り経済の展開』 柏書房
- 岩淵令治 1995 「榊原家江戸屋敷と出入の者たち」『龍岡町遺跡』 文京区遺跡調査会 pp. 76-90

- 岩淵令治 2007a 「八戸藩江戸勤番武士の日常生活と行動」『国立歴史民俗博物館研究報告』138 pp. 67-124
- 岩淵令治 2007b 「江戸の武家屋敷 江戸勤番武士の行動と交際」 都市史研究会編 『年報都市史研究 15 分節構造と社会的結合』 山川出版社 pp. 19-32
- 上田三平 1972 「改訂増補日本薬園史の研究」 三浦三郎編 『改訂増補 日本薬園史の研究』 渡辺書店 pp. 1-169
- 海野 修 1996 「加賀藩下屋敷と足軽 —「先祖由緒并一類附帳」の検討を中心に」『いたばし区史研究』5 板橋区史編さん調査会 pp. 35-56
- 海野 修 2010 「加賀藩下屋敷平尾邸での暮らしと屋敷の機能」『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』 板橋区立郷土資料館 pp. 147-148
- 江戸東京博物館 2013 『花開く江戸の園芸』 東京都江戸東京博物館
- 追川吉生 2004 「医学部附属病院第2中央診療棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 21-32
- 追川吉生 2012 「医学部附属病院立体駐車場地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 pp. 13-15
- 大八木謙司・成田涼子 1993 「市谷本村町遺跡の溝状遺構について」『東京都新宿区尾張藩徳川家上屋敷跡：大蔵省印刷局市谷倉庫増築に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 82-88
- 梶原 勝 2001 「江戸周辺地域における食器様相—碗・皿・土瓶を中心として—」『食器にみる江戸の食生活』 江戸遺跡研究会 pp. 266-279
- 上敷領 久 1988 「大久保百人町遺跡について」『東京考古』6 東京考古談話会 pp. 132-146
- 家世実紀刊本編纂委員会編 1988 『会津藩家世実紀』 吉川弘文館
- 北原糸子 1992 「内藤家と四谷屋敷」『内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 2-9
- 北原糸子・奥 須磨子 1985 「武家抱屋敷 -江戸から東京へ」『地図で見る新宿区の移り変わり 戸塚・落合編』 新宿区教育委員会 pp. 481-497
- 共和開発株式会社 2013 『尾張徳川家下屋敷Ⅵ 一敷地内病棟建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室 2011 『会津藩保科（松平）家屋敷跡遺跡 慶應義塾中等部新体育館・プール建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 小島正裕 2000 「脇坂家屋敷の庭園について」『汐留遺跡Ⅱ：旧汐留貨物駅跡地内の調査』 東京都埋蔵文化財センター pp. 189-191
- 越村 篤 1999 「市谷本村町遺跡の花壇跡について」『市谷本村町遺跡Ⅳ』 新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 90-107
- 後藤宏樹 1994 「尾張藩徳川家麴町邸跡の変遷」『尾張藩麴町邸跡』 紀尾井町 6-18 遺跡調査会 pp. 257-276
- 小林法子 2008 「大川市立清力美術館の江戸勤番之図」『福岡大学人文論叢』39-4 pp. 1259-1299
- 斉藤 信・小高敬寛 1998 「溝状土坑（花壇状遺構）」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 405-406
- 品川歴史館 2004 『江戸大名下屋敷を考える』 雄山閣
- 箱田直紀 2006 「ツバキ・サザンカの園芸史」『園芸学会雑誌 別冊 園芸学会大会研究発表』75-2 園芸学会 pp. 64-65
- 渋谷葉子 1994 「尾張藩江戸藩邸のなかの麴町邸」『尾張藩麴町邸跡—（仮）新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書一』 紀尾井町 6-18 遺跡調査会 pp. 219-232
- 渋谷葉子 2000 「尾張藩市谷邸絵図史料の編年と考察」『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ 絵図集成編』 東京都埋蔵文化財センター pp. 3-23

- 渋谷葉子 2006 「尾張徳川家江戸屋敷—市谷・麴町・戸山—絵図集成」『徳川御三家 江戸屋敷発掘物語 尾張家への誘い』 新宿歴史博物館 pp. 78-105
- 渋谷葉子 2008 「尾張徳川家戸山屋敷における空間構成の推移—長屋地を中心に—」『新宿区尾張徳川家下屋敷 V 国立医療センター新棟整備第1期工事に伴う調査—』 東京都埋蔵文化財センター pp. 340-359
- 司法省原編・法制史学会編・石井良助校訂 1959 『徳川禁令考 前集三』 創文社
- 新宿区遺跡調査会 1996 『百人町三丁目遺跡Ⅲ —東京都清掃局新宿中継所建設工事他—』
- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1993 『東京都新宿区尾張藩徳川家上屋敷跡：大蔵省印刷局市谷倉庫増築に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1995 『市谷本村町遺跡 尾張藩徳川家上屋敷跡』
- 新宿区教育委員会 2001 『内藤町遺跡Ⅳ』
- 新宿区生涯学習財団 2001 『尾張徳川家下屋敷跡遺跡：F 新宿戸山店新築工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区補助第七二号線遺跡調査会 1998 『東京都新宿区百人町三丁目遺跡Ⅴ』
- 新宿区役所 1955 『新宿区史区史』
- 新宿歴史博物館 1993 『大名屋敷』 新宿区教育委員会
- 鈴木 茂 2005 「自然科学分析」『台東区向柳原町遺跡』 東京都埋蔵文化財センター pp. 191-195
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口 RC ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998 『千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題 江戸遺跡の考古学的調査から』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書 新宿駅貨物跡地再開発に伴う事前調査』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 高野良徳 1997 「宇都宮藩戸田越前守下屋敷・把屋敷」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口 RC ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 125-139
- 高山 優 2007 「近世都市「江戸」の考古学」 鈴木公雄ゼミナール編 『近世・近現代考古学入門：「新しい時代の考古学」の方法と実践』 慶應義塾大学出版会 pp. 165-178
- 高山優・毎田佳奈子 2008 「まとめ」『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』 港区教育委員会 p. 159
- 谷川章雄 1992 「総括」『内藤町遺跡 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 112-115
- 谷川章雄 1993 「考古学からみた近世都市江戸 - 考古学と歴史学の関係をめぐって -」『史潮』 32 歴史学会 pp. 25-45
- 谷川章雄 1994 「尾張藩麴町邸跡の調査の成果と課題」『尾張藩麴町邸跡』 紀尾井町6-18 遺跡調査会 pp. 275-276
- 田畑貞寿 1984 「緑被地からみた江戸と東京の都市構造に関する研究」『造園雑誌』 47-5 日本造園学会 pp. 298-303
- 千代田区飯田町遺跡調査会 2001 『東京都千代田区飯田町遺跡 千代田区飯田橋二丁目・三丁目再開発事業に伴う発掘調査報告書』
- 寺谷美咲子・高野良徳 1997 「松江藩松平出羽守下屋敷地」『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口 RC ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 pp. 110-124
- 東京市役所 1929 『東京市史稿 遊園編第二』

- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡 II：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『萩藩毛利家屋敷跡遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『新宿六丁目遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2005 『台東区向柳原町遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2007 『新宿区内藤町遺跡：環状第5の1号線（新宿御苑）整備事業に伴う調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2008 『尾張徳川家下屋敷跡Ⅴ：新宿区：国立国際医療センター新棟整備第1期工事に伴う調査』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井 I』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井 II』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井 III』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井 IV』
- 都立文京盲学校遺跡調査班 2000 『小石川牛天神下：都立文京盲学校地点における発掘調査報告書』
- 中尾佐助 1986 『花と木の文化史』 岩波書店
- 中野達哉 1990 「江戸近郊における大名屋敷の設立状況について」『江東区文化財研究紀要』 pp. 36-58
- 成瀬晃司 2005 「外来診療棟地点における藩邸周縁部土地利用 —遺構属性による空間復元の試み—」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 495-520
- 西川幸治 1972 『日本都市史研究』 日本放送出版協会
- 野間晴雄 2010 「17～19世紀江戸・東京近郊の花き園芸の発達と空間的拡散-グローバル/ローカルな視点からの菊の歴史地理」『東アジア文化交渉研究』3 関西大学 pp. 395-431
- 箱田直紀 2006 「ツバキ・サザンカの園芸史」『園芸学会雑誌別冊 園芸学会大会研究発表』75-2 園芸学会 pp. 64-65
- 橋口定志 1991 「江戸の郊外 植木の里」江戸遺跡研究会編 『甦る江戸』 新人物往来社
- 長谷川正次 2010 「高遠藩の下屋敷」『内藤町遺跡 新宿御苑大温室の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査』 東京都埋蔵文化財センター pp. 138-156
- 長谷部由紀 1993 「大名屋敷の花壇」『大名屋敷』 新宿区教育委員会 pp.76-81
- 原田佳伸 1990 「江戸近郊の武家抱屋敷」『東京学芸大学近世史研究』4 東京学芸大学近世史研究会 pp. 157-172 頁
- 原田佳伸 1997 「大名下屋敷と地元百姓のかかわり —岡山藩大崎屋敷出入の先地主百姓の動向—」竹内誠編 『近世都市江戸の構造』 三省堂 pp. 235-263
- バリノサーヴェイ 1993 「自然科学分析調査」『市谷本村町遺跡』
- 樋田 薫 1961 「岩村藩に於ける知行制と武士耕作地」『日本歴史』158 日本歴史学会 pp. 20-29
- 堀内秀樹 2006 「江戸大名藩邸における京焼の消費 —京焼と伊万里の出土様相の相違から—」『京焼の成立と展開 —押小路、粟田口、御室—』 関西陶磁史研究会 pp. 85-115
- 毎田佳奈子 2004 「染井の植木屋 —遺構・遺物にみる植木屋らしさ—」『続 江戸からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会 pp. 7-27
- 三木 弘 1992 「遺構よりみた各区の特徴」『内調町遺跡 —放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区内藤町遺跡調査会 pp. 79-90
- 水江漣子 1981 「江戸市中の形成」 豊田 武ほか編 『講座日本の封建都市；第3巻 地域的展開』 文一総合

- 出版 pp. 8-29
- 水野瑞夫 1972 「尾張藩の薬園」 三浦三郎編 『改訂増補 日本薬園史の研究』 渡辺書店 pp. 264-274
- 港区教育委員会 2008 『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』
- 宮崎勝美 1992 「江戸の土地—大名・幕臣の土地問題」 吉田伸之編 『日本の近世；9 都市の時代』 中央公論社 pp. 129-172
- 宮崎勝美 1994 「尾張藩麴町邸絵図について」『尾張藩麴町邸跡—（仮）新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書—』 紀尾井町 6-18 遺跡調査会 pp. 233-255
- 宮崎勝美 1995 「武家屋敷」 朝尾直弘編 『岩波講座日本通史』 岩波書店 pp. 321-337
- 宮路淳子 2002 「Archaeological Analysis of Dry Cultivated Field Soils with Regard to Soil Micromorphology（畑土壌の考古学的研究—土壌微細形態分析から）」『考古学と自然科学』 44 日本文化財科学会 pp. 17-32
- 森本伊知郎 2002 「威信財としての近世陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』 94 pp. 15-33
- 山形万里子 1989 「近世・近代の遺跡周辺 文献調査の成果より」『白金館址遺跡Ⅲ 研究編』 白金館址遺跡調査会 pp. 1-15
- 山田四郎右衛門・日置 謙校訂 1931 『三壺開書』 石川県図書館協会
- 山本英二 1993 「文献・絵図史料からみた市谷本村遺跡」『尾張徳川家上屋敷跡 大蔵省印刷局市谷倉庫造築に伴う緊急発掘調査報告書』 新宿区市谷本村町遺跡調査団 pp. 52-60
- 吉田伸之 1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科・日本の歴史・別冊・歴史の読みかた』 2 朝日新聞社 pp. 21-30
- 吉田伸之 1995 「巨大城下町—江戸」 朝尾直弘ほか編 『岩波講座日本通史 15（近世 5）』 岩波書店 pp. 151-188
- 吉田伸之 2001 「城下町の構造と展開」 佐藤信・吉田伸之編 『都市社会史（新体系日本史 6）』 山川出版 87-117 頁
- 吉田政博 1990 「加賀藩下屋敷関係の史料について—絵図の検討を中心に—」『いたばし区史研究』 2 板橋区史編さん調査会 pp. 82-91
- 吉永 昭 1977 「東北諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告 人文科学・社会科学』 26 pp. 232-218
- 吉永 昭 1978 「関東諸藩における藩政改革の展開」『愛知教育大学研究報告 人文科学・社会科学』 27 pp. 342-329

【その他】

- 編著者不明 1915 『水戸藩史料 別記下』 徳川家蔵版（複製 吉川弘文館 1970）

大名屋敷の屋敷境 – 屋敷境としての堀を中心に –

追川 吉生

第1章 はじめに

大名屋敷跡遺跡の屋敷境遺構には、遺跡によって「大型溝」、「溝状遺構」、あるいは「堀」と呼ばれる遺構がある。今井林太郎は屋敷の周囲が堀と土塁で囲まれる「居館」（武家屋敷）を、中世の史料にある「堀内」、「土居」と捉え（今井 1938）、在地領主の開発拠点と位置づけた。このいわゆる「堀ノ内体制論」以降、中世前期の武士の住まいが防禦性の高い「居館」であると考えられるようになった。

小山靖彦が上野国新田荘上今井郷などの堀の内の様相を検討し、在地領主の屋敷に巡らされていた堀が農業用水という勸農機能を有していたことと、在地領主は用水の把握を通して領地支配を行っていたことを明らかにして以降（小山 1966）、堀と土塁に囲まれた「居館」は防禦性とは別のものと捉えられるようになったが、長く東日本の中世の武家屋敷（方形居館）のあり方として認識された。橋口定志は中世考古学の調査成果に基づいて、こうした武家屋敷のあり方が中世後期（14-16世紀）のものであることを明らかにした（橋口 1987、橋口 1990）。

溝と堀とが本来区別されたものであることを明らかにしたのは、高島緑雄による『正統庵領鶴見寺尾郷図』の分析だった。高島は本図で、集落の範囲が堀（「本境堀」など）として、溜池（別所池）につながる用水が「ミソ」（溝）として区別されていることを明らかにした（高島 1987）。

橋口は当時の社会で異なる役割を担うものとして認識されていた堀と溝を、「未検討のまま“溝状遺構”という名称で一括して扱った場合には、この遺構が検出された調査地区の関連遺構群の捉え方を根本的に誤ってしまう」恐れがあることを指摘している（橋口前掲）。

北垣聰一郎は城郭の堀を、「味方守兵をよく守り、城内への敵による攻撃を困難にするため、表土を人工的に深く掘り割り、主郭周囲にめぐらせた塹」であるとする。堀幅については、個々の城郭のおかれる諸条件に拠るもので、それを規定する明確な基準はないが、大堀とされる諏訪原城や滝山城でも堀幅は20m未満であることをあげ、広すぎる堀は却って不都合だったことを指摘した（北垣 1981）。

西川幸治は大名屋敷の周囲に家臣を収容するための長屋が巡る構造が、戦国時代の野陣小屋に似ている点を指摘しつつも、実態は形骸化して防禦性は乏しかったと否定的にみる（西川 1972）。西川が江戸の大名屋敷と比較したのは戦国時代の陣屋だが、宮崎勝美は大名屋敷の防禦性に関連して、「都市の大名屋敷は、そうした城郭や戦陣とはまったく条件が違うのであるから、たとえ形態的に類似点があるにしても、それだけをもって大名屋敷の「防衛的性格」を強調するのは適当ではない」と指摘する（宮崎 1989）。

江戸の大名屋敷は「御成」を迎えるという点で、京都や伏見の大名屋敷を引き継いだものであるとしたのは大熊喜邦（大熊 1916）や内藤昌（内藤 1972）だった。内藤昌・大野耕嗣は慶長末年以降の『洛中洛外図』にみられる大名屋敷の楼閣を式正の御成の際に建立されたものと捉え、それが寛永期の『江

戸図屏風』でも多くみられることを指摘した（内藤・大野 1971）。内藤らは京都や伏見の大名屋敷に防禦性は認めていない。江戸の大名屋敷についての明確な言及はないが、その文脈から判断して防禦性は認めていなかったことがうかがえる。

『江戸図屏風』（国立歴史民俗博物館蔵）の大名屋敷に描かれた櫓門が外様大名の屋敷にみられる点を、内藤が「一国一城の主たる意味の表現」と位置づけた（内藤 1972）のに対して、それが「防御を固める城郭的性格を維持した」ものと捉えたのが波多野純だった（波多野 1990）。大名屋敷の櫓門は 1657 年（明暦 3）に禁止される¹⁾。波多野はこの家作制限を、城郭的な備えを江戸城に集中させ、大名屋敷に戦闘的な性格を認めない幕府の意志表示であるとする（波多野前掲）。

考古学では後藤宏樹が初期の大名屋敷跡遺跡のあり方を検討する中で、櫓を配置した延岡藩内藤家上屋敷（文部科学省構内遺跡）や白山御殿（東大小石川構内遺跡ほか）から、防禦施設としての大名屋敷を論じている（後藤 2011）。ただし両遺跡とも櫓は遺構としては未調査である。

橋口は豊島区の名古屋敷跡遺跡の調査事例から、中山道・日光街道沿いに位置する大名屋敷（下屋敷）が、「江戸城下を防衛する前線基地としての役割」から堀に囲まれた可能性を指摘する（橋口 2006、小川祐司 2011）。併せて「屋敷地の全体を堀で区画して中世城館のような状況」を示す事例はない点もあげている（橋口前掲）。

成瀬晃司は東京大学白山構内遺跡（白山御殿）で検出した堀について、遺構の規模や史料にみられる白山御殿の景観から、「城郭建築としての威容」がそなわっていたと指摘した（成瀬 2008）。その背景として、将軍となった綱吉がしばしば行った桂昌院のもとへの御成との関係をあげている。

本研究では屋敷境遺構としての堀の分析を通して、大名屋敷に構築された堀の役割について考察する。

第 2 章 屋敷境としての堀のあり方

第 1 節 屋敷境遺構としての堀

大名屋敷跡遺跡で検出する屋敷境の形態は、溝状を呈するもの、柱穴や土坑が列をなすもの、及び土留の 3 つにわけられ、屋敷境遺構にはそれぞれに対応する 7 つの形態がある（1 図・2 図、表 1、追川 2017）。そのうち溝状を呈する屋敷境に該当する遺構の形態は、素掘りの溝（1 類）と築石によって護岸された溝（2 類）である。大名屋敷跡遺跡で検出した溝状遺構のうち、幅と深さが計測可能な遺構を集成したのが 3 図である。

3 図におけるドットの広範囲の広がり、溝状遺構の規模が幅、深さともに多様であることを示しているが、特に幅・深さが 1.5m 内の範囲（図中の枠内）に集中する傾向をみてとることができる。以下では、遺構の規模がこの範囲内の溝状遺構を、護岸の構造によって素掘りの溝（1 類）と石組溝（2 類）にわけることとする。そして、幅・深さが 1.5m よりも大型の溝状遺構を、堀（6 類）とする。

屋敷境遺構の形態は、江戸での大名屋敷出現期である 16 世紀末に素掘りの溝（1 類）から始まり、17 世紀代になると 7 つの形態全てが認められるようになる。その歴史的背景の一つとして、17 世紀中葉から後葉に江戸の下水道が整備されることによって、屋敷境に下水溝を兼ねる石組溝（2 類）が現れ、18 世紀以降になると石組溝（2 類）が大名屋敷の屋敷境として主体を占めるようになる（表 2）ことがあげられる（追川前掲）。

表2から本章が分析対象とする堀（6類）の時期毎の多寡をみてみよう。堀は17世紀代に出現し、この時期に最も多くの検出例が認められる。18世紀代には減少して3基となり、19世紀代の検出例はない。ただしこの表は遺構の構築年代を基に集計した結果なので、19世紀代の欄が空白であることが、大名屋敷の屋敷境として0であることを意味するものではない。

例えば尾張藩徳川家下屋敷跡遺跡5次調査で検出した1号堀²⁾は、尾張藩が下屋敷を拝領した1671年（寛文11）頃に構築され、18世紀中頃に廃絶となった堀である。仙台坂遺跡で検出した堀跡からは17世紀代から19世紀代の遺物が出土しており、1658年（万治元）の拝領直後から19世紀に至るまで屋敷境として堀が機能していたことがわかる。こうしたケースは17世紀代の堀として扱っている。遺存状況が比較的良好な検出例を集成した表3も同様である。また『寛保沽券江図』（1743年）では安藤対馬守屋敷の屋敷境が「堀」と記載されているなど、絵図資料からも18世紀以降にも屋敷境として堀が存在したことがうかがえる。

類型	特徴
1	素掘りの溝。土留に杭や板からなる。
2	石組の溝。
3	溝の底部にピットが設けられている。
4	ピット列。
5	土坑列。
6	幅、深さが1.5m程度以上ある。
7	土留。

表1 屋敷境遺構の諸形態

類型	16世紀代	17世紀代	18世紀代	19世紀代	不明
1類	4	10			1
2類		16	6	5	3
3類		6			
4類		16	4		1
5類		3			
6類	1	25	3		
7類		2	2		

表2 屋敷境遺構の時期毎の諸形態

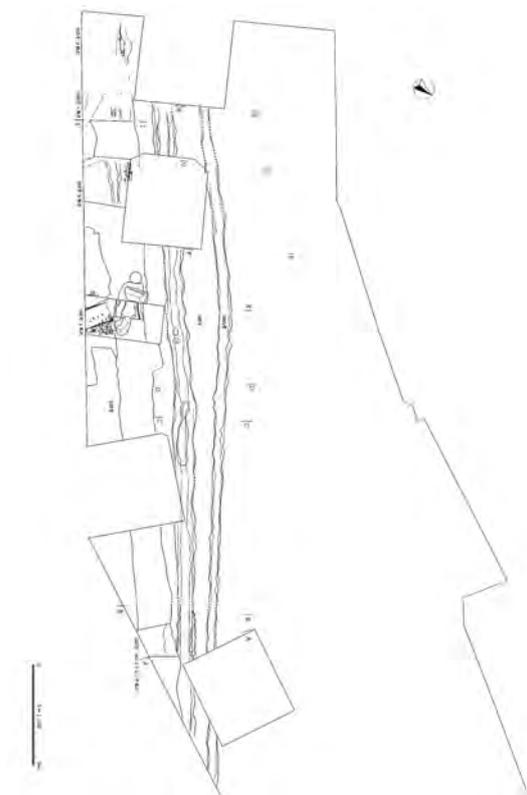
家康の江戸入府（1590年／天正18）後の家臣団への賜邸から始まった江戸の大名屋敷は、1600年（慶長5）頃には家康への恭順の見返りとして与えられる屋敷が加わり、1620年代半ばから30年代半ばにかけて整備された参勤交代制と大名妻子の江戸居住制（丸山雍成2007）によって、制度的に完成した。

家康の家臣や、大名が恭順の見返りとして拝領した当初の大名屋敷は、基本的に一つだった。一部の有力大名は複数の屋敷（上屋敷に対して下屋敷）を拝領していたが³⁾、下屋敷は1657年（明暦3）の大火を契機に、郊外に避災屋敷を持つようになることで広くみられるようになった（宮崎1992）。

以上のように17世紀代の大名屋敷の変遷には、1630年代半ばの制度的な完成と、1650年代以降の下屋敷の普及が画期となるが、ここでは17世紀代を前後二つの時期に分けて堀（6類）のあり方をみていくことにしよう。

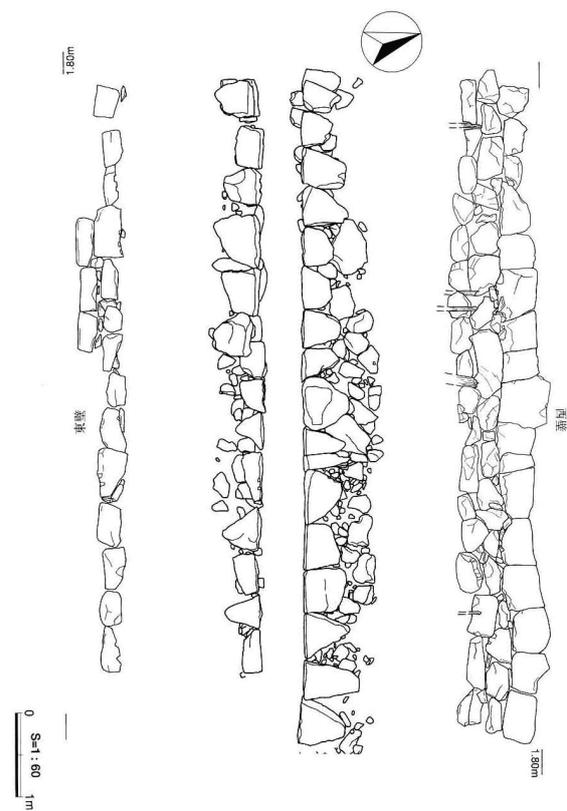
堀には水が張っている水堀と、水のない空堀とがあり、それぞれに「濠」と「堀」の字が宛てられている。本研究では水の有無に拘わらず「堀」と呼称するが、遺構としての堀は覆土の水成堆積層の

1 類 素掘りの溝



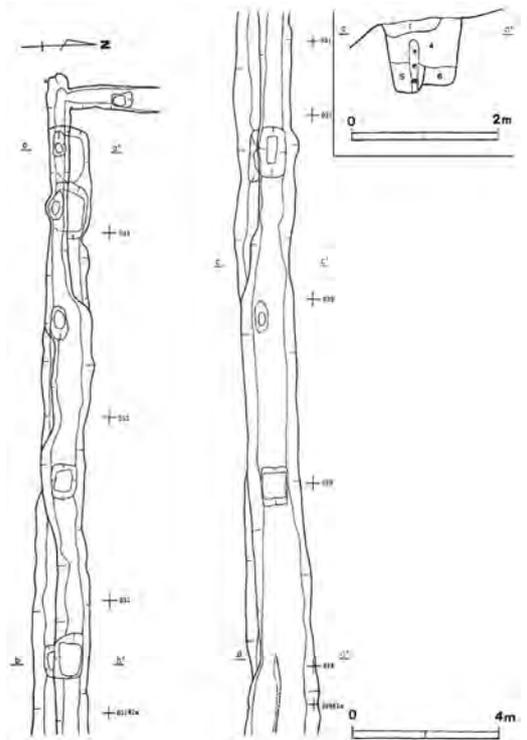
文部科学省構内遺跡 006b(文部科学省構内遺跡調査会 2004)

2 類 石組の溝



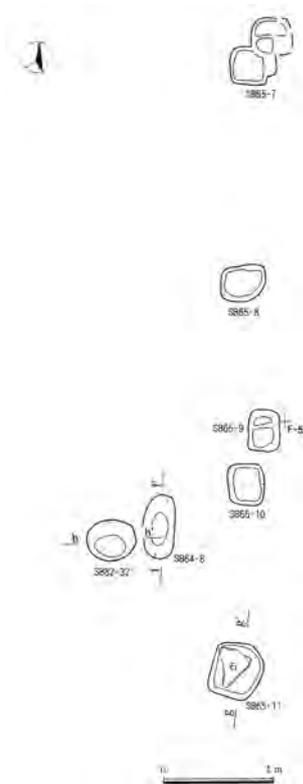
八重洲北口遺跡 0106-b(東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003)

3 類 素掘りの溝に柱穴



東大構内遺跡中診地点 1 号溝 (東京大学遺跡調査室 1990)

4 類 柱穴列



東大構内工 14 地点 64 号・65 号 (東京大学埋文調査室 2006)

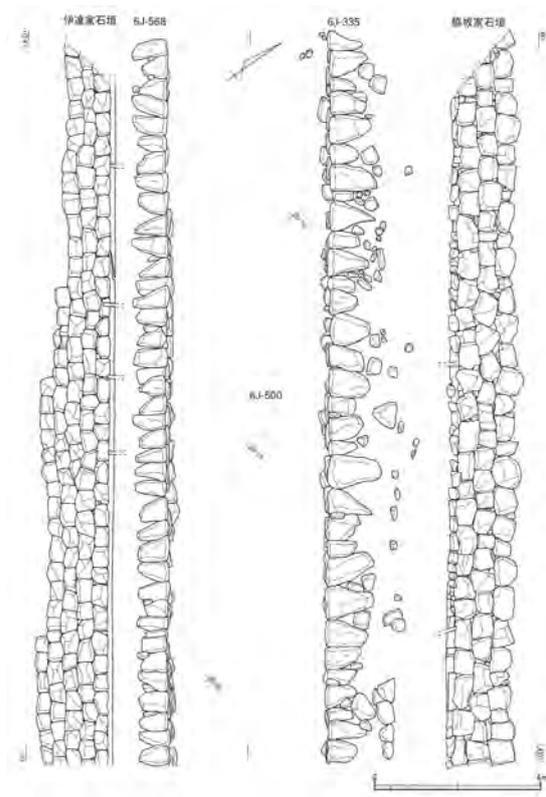
1 図 屋敷境遺構の諸形態 (1) 1 類 - 4 類

5類 土坑列



東京大学構内遺跡外来棟地点 SA155(東大埋文調査室 2005)

6類 堀(水堀)



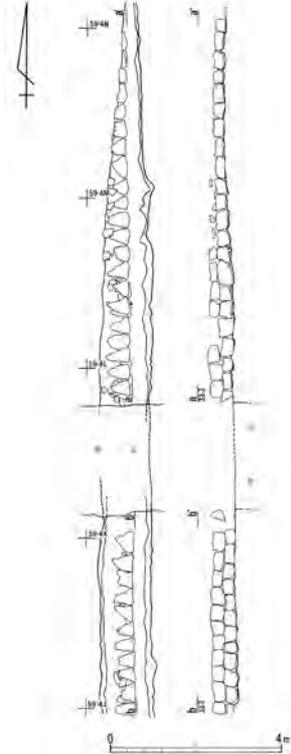
汐留遺跡 6J-500(東京都埋蔵文化財センター 1997)

6類 堀(空堀)



巢鴨遺跡中野地区1号遺構(豊島区教育委員会 1994)

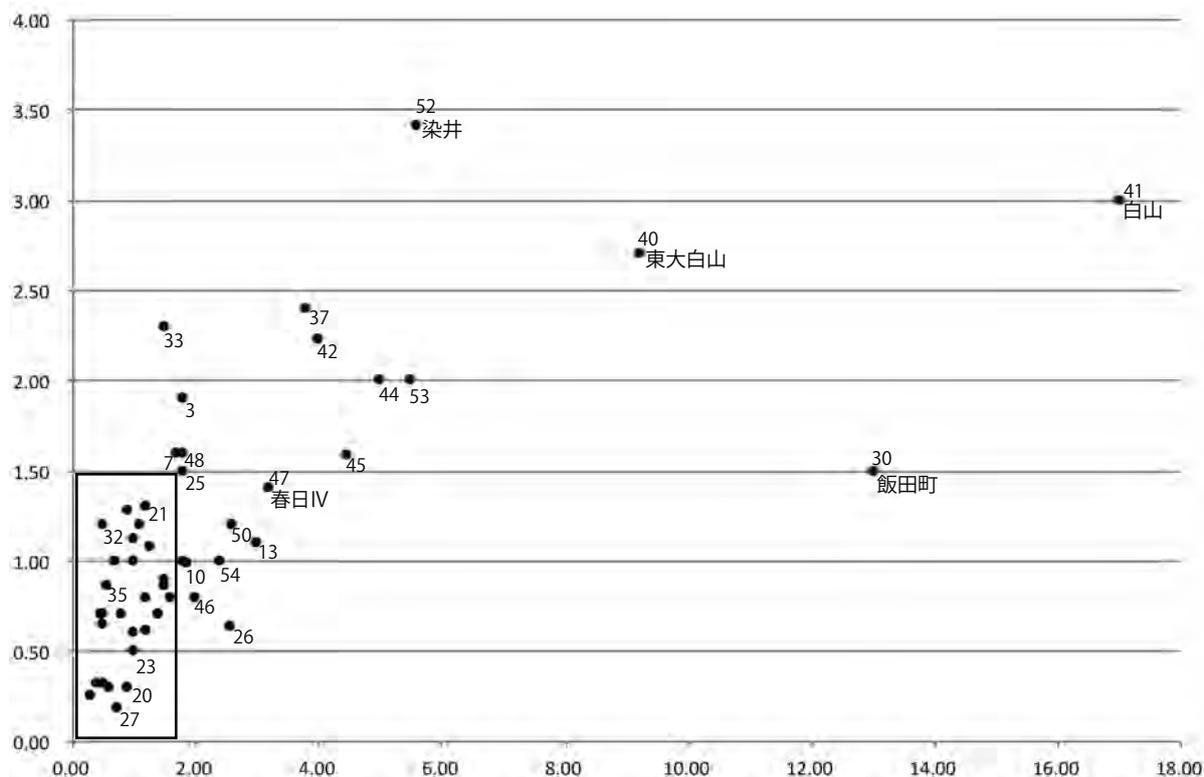
7類 土留・土塁



尾張藩上屋敷跡遺跡 3-2号石垣(東京都埋文センター 1997)

2図 屋敷境遺構の諸形態(2) 5類-7類

No.	遺跡	遺構	幅	深さ	No.	遺跡	遺構	幅	深さ
1	東大情報学環	S D8	0.50	0.65	28	有楽二	S123	1.27	1.08
2	東大外来	SD45	3.20	1.40	29	有楽二	S110	1.86	0.99
3	東大CRC-A	SD 11473	1.80	1.90	30	飯田町	堀跡	13.00	1.50
4	東大理7	1号溝	1.48	0.86	31	飯田町	6279	1.00	1.00
5	東大中診	5号溝	1.20	0.80	32	飯田町	6232	0.50	1.20
6	東大中診	2号組石	0.70	1.00	33	赤穂藩森家	1	1.50	2.30
7	東大中診	6号組石(組石部分)	1.70	1.60	34	汐留	4K-007	0.90	1.28
8	東大中診	6号組石(南北部分)	1.10	1.20	35	汐留	1号溝	0.55	0.86
9	東大中診	10号組石	1.00	0.50	36	汐留	6L-006	1.00	1.12
10	東大中診	12号組石(新)	1.80	1.00	37	汐留	6J-500	3.80	2.40
11	東大中診	2号溝	1.50	0.90	38	汐留	6K-0545/7 J-044	0.48	0.32
12	東大CRC-A	SD 12091など	0.50	0.70	39	汐留	6I-407	0.40	0.32
13	東大設備管理	1号溝	3.00	1.10	40	東大白山博	SD01	9.20	2.70
14	東大設備管理	AB33・34区組石	1.00	0.60	41	白山御殿	1	17.00	3.00
15	八重洲北	1221	1.40	0.70	42	駕籠町4	40	3.98	2.23
16	八重洲北	0417	0.80	0.70	43	錦糸町北	54	1.20	0.62
17	八重洲北	1080	0.30	0.25	44	仙台坂	堀跡	5.00	2.00
18	八重洲北	0106	0.45	0.70	45	千駄ヶ谷五	0725	4.44	1.59
19	八重洲北	0106-b	0.45	0.70	46	尾張上	3-1溝・4-1溝	2.00	0.80
20	八重洲北	0189	0.90	0.30	47	春日町IV	1	4.00	1.40
21	文科省	006b	1.20	1.30	48	内藤4	2	1.80	1.60
22	文科省	006a	0.60	0.30	49	新宿六	202	2.60	1.20
23	文科省	007	1.00	0.50	50	新宿六	301	2.60	1.20
24	丸三	26(新)	1.80	1.50	51	新宿六	2420	2.60	1.20
25	丸三	1	1.80	1.50	52	染井	ブラウド地区313など	5.60	3.41
26	有楽二	S113系	2.54	0.64	53	奥鴨1	1	5.50	2.00
27	有楽二	S205	0.74	0.18	54	津和野藩亀井	31	2.4	1.00



3 図 溝状遺構の幅と深さ (ドット横の番号は表の遺構番号に対応)

時期	遺跡・遺構	屋敷	上幅	下幅	深さ	流・滞水
17前	有楽町二丁目S113	上	2.5		0.6	×
17前	文科省005号	上	1.78		1.56	○
17前	紀尾井町SD34	上	13.0		4.0	×
17前	尾張上3-1号・4-1号	上	2.0	0.8	1.0	×
17前	飯田町堀跡	上	10-13		1.0-1.5	◎
17後	丸の内三丁目26号	上	0.7-1.8	0.8	1.4	◎
17後	春日町IV1号	上	4.0		1.4	◎
17後	汐留6J-500	上	3.8	3.6	3	◎
17後	東大小石川1号	下	17.0	-	-	不明
17後	駕籠町4.40号	下	3.7-4.0	1.1	2.23	×
17後	尾張藩下屋敷1号堀	下	3.1	1.2	1.8	×
17後	新宿六丁目202号	下	0.8-2.6		0.3-1.2	×
17後	千駄ヶ谷五丁目0725号	下	3.8-4.4	1.3	1.4-1.6	×
17後	染井313号ほか	下	5.3-5.6	1.6	2.7-3.4	×
17後	仙台坂堀跡	下	5.0	2.5	2.0	×
17後	巢鴨I1号	下	5.5	1.5-2.0	2.2	×
17末	丸の内三丁目1号	上	1.8		1.5	◎
不明	東大設管1号溝	下	2.5-3.0	0.5	1.0-1.1	×

表3 堀の時期と規模（屋敷種類の下屋敷には、上屋敷以外の屋敷を含む）

有無から判断できる。表3にある【流・滞水】の欄は、報告書の堆積状況に基づく空堀（×）・水堀（○・◎）の別である⁴⁾。

17世紀代前期の大名屋敷では水堀と空堀はほぼ同数の検出例がある。下屋敷が多くみられるようになる後期になると、上屋敷は水堀、下屋敷⁵⁾は空堀というように、大名屋敷の種類と堀のあり方との間に相関関係がみられるようになる。

中世集落では「堀」と「溝」とが、境界を分ける境堀と水路という役割によって使い分けられていた（橋口前掲）。大名屋敷の屋敷境でも、上屋敷と下屋敷とで屋敷境として異なる堀が構築されていたということは、各屋敷に期待される屋敷境としての堀の機能が異なっていた可能性がある。

第2節 17世紀前半の堀

(1) 水堀

大名屋敷跡遺跡で屋敷境として堀（6類）が出現するのは17世紀からである。水堀のあり方からみてみよう。

この段階の飯田町遺跡は榊原家の上屋敷である。『正保年間江戸絵図』（1644-1648年）には、堀跡に該当する流路が、榊原邸と旗本屋敷との屋敷境となっていた様子を見ることができ、「堀跡」⁶⁾は幅10-13m、深さ1.0-1.5mである（千代田区飯田町遺跡調査会2001）。屋敷境の堀の中でも幅の広い遺構の一つだが、底面の造りが平坦なことと、深度の浅さが特徴である。

北垣によれば、城郭の堀には水に弱く崩落の恐れがある水堀は好んで用いられるものではなかったとされる（北垣前掲）。堀の広狭は、想定される矢や鉄砲の射程距離によって異なるが、いずれにしても飯田町遺跡の「堀跡」ですら、堀幅としては広すぎることではない。浅く平坦な飯田町遺跡の水堀は、この点において防禦性を有していたものではないといえる。飯田町遺跡において「堀跡」を検出した砂利面では、堀の土留や護岸施設の他に遺構は未検出なため、屋敷内の下水との関わりや、屋敷境として塀や柵を伴っていたかなどは不明である。

榊原家は不忍池を臨む高台に1590年（天正18）に屋敷（池之端屋敷）を拝領しているが、1590年代終わりまでに、この地にも屋敷を拝領した。池之端屋敷は阿波（安房）や奥州などを押さえる「平

山ノ砦」となるべく意図のもと、家康の江戸入府直後に賜邸された屋敷である（史料3）。岩淵令治は、江戸最初期の大名屋敷が期待されていた「常に詰める「城」としの機能」が程なくして消失したことが、榊原家が小石川門外に改めて上屋敷を拝領した背景にあることを指摘している（岩淵 1995）。拝領時の遺跡周辺は、江戸城直下から日比谷入江へ注ぐ平川の流路にあっていた。初期の江戸にとって物資流通の要衝だった点を、報告書では榊原康政がこの地に屋敷を与えられた背景として注目している（千代田区飯田町遺跡調査会 2001）。

堀跡の構築年代は詳らかでない。また前述のように検出面に堀跡以外の遺構が未検出なので、これが榊原家拝領直後から屋敷境だったかは不明である。しかし『正保年間江戸絵図』で描かれた流路がこれに該当するという前提に立てば、平川が埋め立てによって宅地化されて以降に構築されたものと位置付けることができる。1620年代に行われた駿河台の堀割工事によって、神田川が大川へ接続したことを契機に、郭内を流れる平川は一部が外堀に利用された他は埋め立てられて宅地となった。飯田町遺跡の堀跡は、この段階で構築された榊原邸の屋敷境である可能性が高い。

後藤は江戸の市街地が拡大していく中で、臨海部や河川部が水はけのための堀や排水路を設けた上で埋め立てられていったことを指摘している（後藤 2004）。本遺跡の北側にある春日町遺跡第Ⅳ地点や後楽二丁目南遺跡でも、本研究でいう堀（6類）にあたるような大型の溝状遺構を検出している。そのうち春日町遺跡第Ⅳ地点1号溝は、安志藩と小嶋藩の屋敷境をなした幅4mを越える水堀（1号遺構）である（文京区遺跡調査会 2000）。

両遺跡の立地は飯田町遺跡と同様で、東側を本郷台地に、西側を麴町台地に挟まれた谷にあたる。『御府内備考』には小石川大谷と呼ばれる湿地がひろがっていたことが記されている。飯田町遺跡周辺で大型の堀（6類）を多く検出しているのは、これらが谷の宅地化に伴う排水施設としての役割があったからと推測される。

山の手台地と呼ばれる武蔵野台地東側は、台地内の谷頭から発する小河川による樹枝状の浸食谷が多い（貝塚爽平 1979）。山の手台地に立地する江戸西側の宅地化は、これらの谷にまで及んでおり、飯田町遺跡や春日町遺跡以外でも谷地の湿潤な地盤の排水を意図した屋敷境として大型の水堀（6類）を構築した大名屋敷が存在するものと考えられる。

文部科学省構内遺跡 005号は、外堀に面した内藤邸の屋敷境である。内藤家長がこの地を拝領したのは1591年（天正19）のことで、拝領当初の屋敷境は素掘りの溝（1類）である。005号は自然堆積層上に盛土造成された生活面に伴う屋敷境で、素掘りの溝（1類）である007号を切って構築されている。構築年代は不明だが、出土遺物から1630年代に廃絶したことがうかがえる（文部科学省構内遺跡調査会 2004）。

005号には木組みの溝や暗渠が接続していることから、屋敷内の下水を集約し、外堀へと排出した役割を担っていたことが推測される（遺物に基づく廃絶年代から、この外堀は1639年／寛永16に整備される以前のものである）。

遺跡は溜池東岸の台地上に立地しており、発掘調査では宅地造成のために行われた切り土の痕跡が認められているので、水堀の屋敷境には飯田町遺跡のような地盤の排水機能は有していない。

(2) 空堀

有楽町二丁目遺跡は江戸前島の尾根先端に位置する遺跡である（武蔵文化財研究所 2006）。『別本慶長江戸図』（1602年頃／慶長7）では町人地にあっており、1606年（慶長11）に堀秀家らが屋敷地を拝領するのが大名屋敷の始まりである。検出した屋敷境（S113系溝）は堀（6類）で、出土遺物

から1630-40年代に廃絶したことがうかがえる。

尾張藩上屋敷跡遺跡3-1号・4-1号は板倉周防守下屋敷の西側の屋敷境である（東京都埋蔵文化財センター1997）。構築年代は不明だが、1656年（明暦2）に尾張藩がこの地を拝領するので17世紀前半に位置付けた。

尾張藩邸になると、この堀を壊して石垣（3-1号石垣）が構築される。3-1号石垣は上部が攪乱によって削平されているが、3-1号溝の上に堆積した硬化面（1層）が3-1号石垣に伴う尾張藩上屋敷の生活面と考えられる。また石垣のすぐ裏側にも硬化した地層（9層）が認められることから、3-1号石垣は土留（7類）となる。したがって両者はほぼ同じ場所に構築された屋敷境でありながら、尾張藩邸になった際に屋敷境としての堀は引き継がれなかったことになる。

なお紀尾井町遺跡で検出したSD34は、幅13m、深さ4mで遺構の形態と規模からは堀（6類）に分類できる（千代田区紀尾井町遺跡調査会1988）。しかし遺構内部に木樋や廃棄土坑が構築されており、SD34自体が単独で屋敷境の施設にはなっていないことから分析の対象からは外す。

第3節 17世紀後半の堀

(1) 水堀

a. 丸の内三丁目遺跡

丸の内三丁目遺跡は調査区西側を日比谷入江の埋め立てによって造成された大名屋敷である。26号溝には、5面段階に帰属する26号溝（旧）と3面段階に帰属する26号溝（新）とがある（4図）。26号溝（旧）は日比谷入江の埋め立て時期や5面の出土遺物の年代から、17世紀前半に帰属する屋敷境だが、26号溝（新）に大部分が壊されているため詳細は不明である。3面の上限年代は不明だが、26号溝（新）は両岸が築石で護岸された水堀で、北側の土佐藩邸（MS1）では長屋塀となる表長屋（以下、長屋塀型表長屋と呼称する）を伴うことから1650年代以降であると考えられる⁷⁾。

26号溝（新）に伴う長屋塀型表長屋の北側にある89号溝が、長屋の北側を区画する施設である。素掘りの溝だが、西側の延長上に板樋の13号溝が存在することから、89号溝も本来は板樋だったことが推測される。13号溝と89号溝は14号溝に接続しており、これが26号溝（新）に接続している（4図）。このことから26号溝（新）が屋敷内の下水の排出先だったことがわかる。

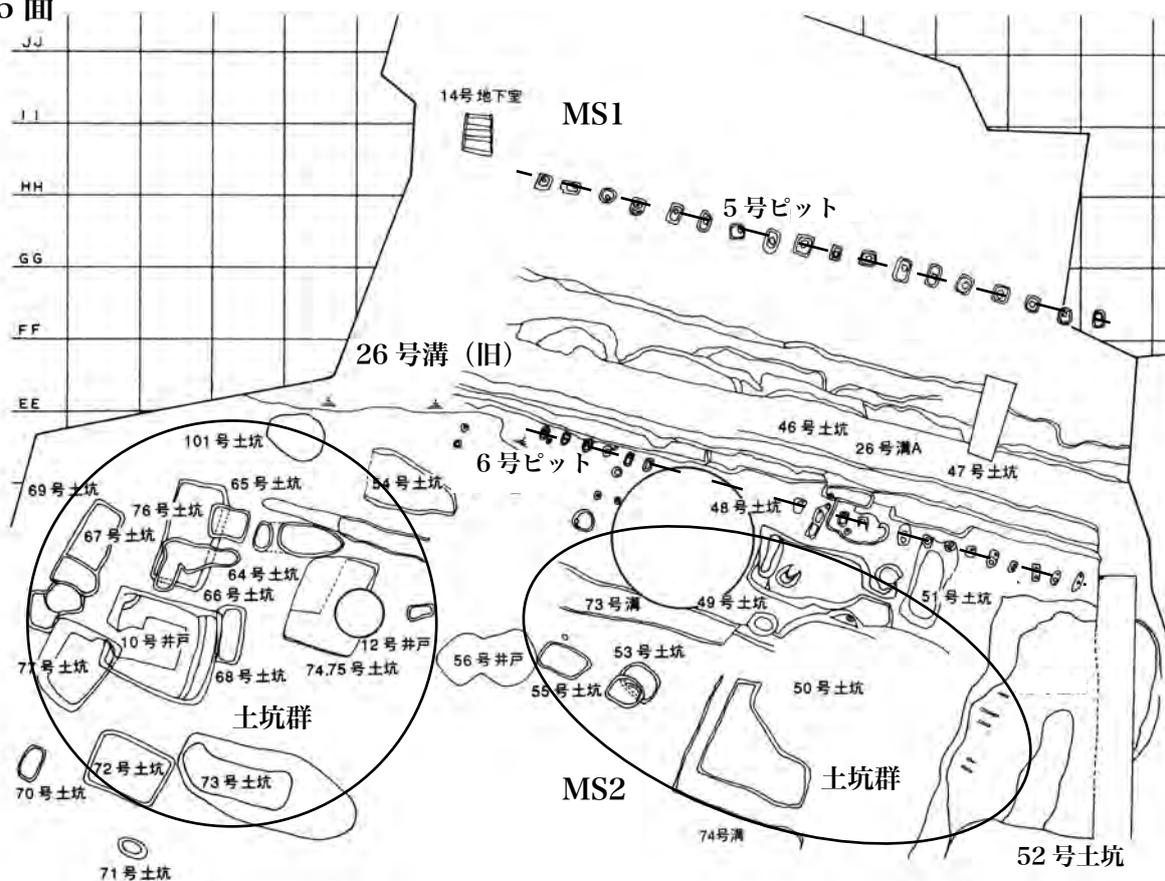
長屋塀型表長屋は、石組溝による屋敷境（2類）の石垣護岸を土留として利用した居住施設である（追川前掲）。石組溝による屋敷境（2類）は下水溝を兼ねているが、長屋塀型表長屋を伴う26号溝（新）も下水溝を兼ねていた。屋敷境の形態が堀（6類）なのは、日比谷入江の埋立地に立地しているために、地盤に含まれる地下水の排水処理を兼ねたものだったことによるものだろう。

b. 汐留遺跡

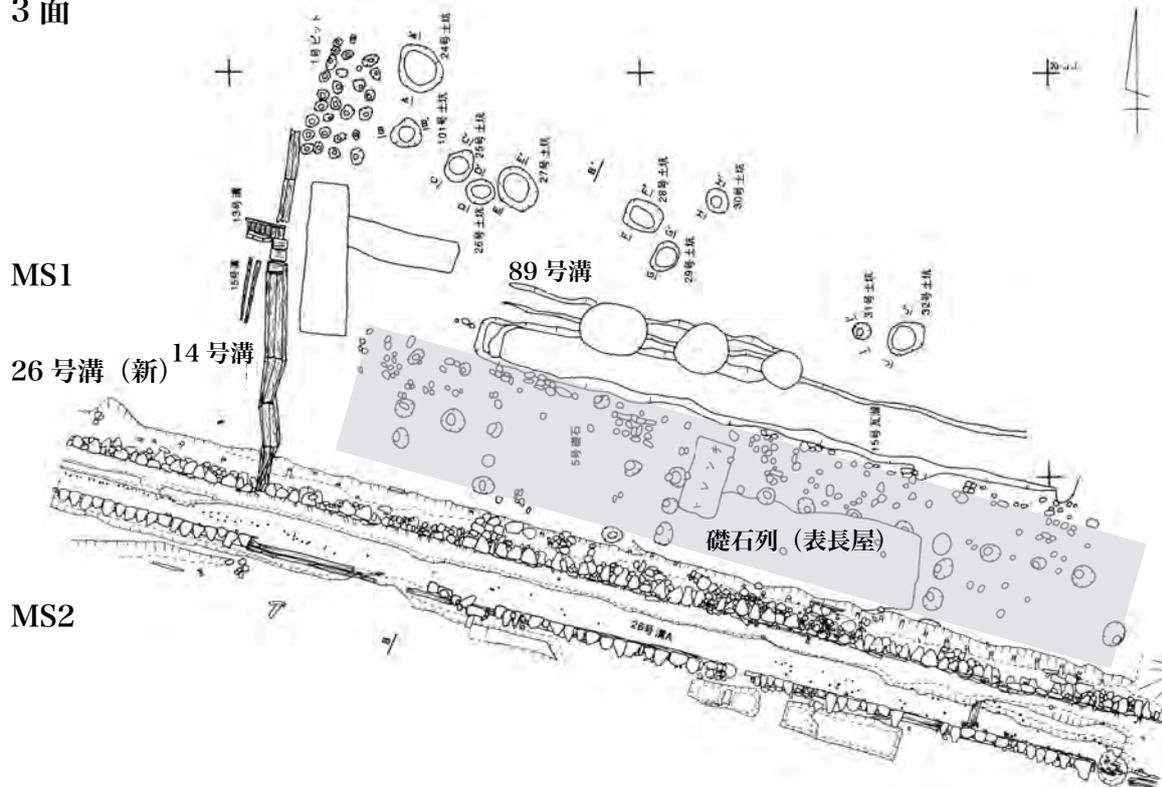
汐留遺跡には北から龍野藩上屋敷、仙台藩上屋敷、会津藩中屋敷の3つの大名屋敷を含んでおり、それらに伴って8箇所（5図のA-F3）の屋敷境がある。発掘調査の対象となったのは屋敷境A2・B・C・F1・F2で、そのうち屋敷境が形態的に堀（6類）であるのは屋敷境C（龍野藩邸と仙台藩邸の屋敷境、6図）と、屋敷境D（仙台藩邸と会津藩）である。発掘調査は屋敷境C（6J-500）で実施されており（東京都埋蔵文化財センター1997、7図）、屋敷境Dは会仙川のため調査の対象外だった。

仙台藩邸内で検出した下水溝遺構の分布が6図下である。仙台藩邸は図面左（西側）に表門を構え

5 面



3 面



4 図 丸の内三丁目遺跡の屋敷境周辺の遺構分布 (東京都埋蔵文化財センター 1994 を基に作成)

ており、図面右（東側）は汐留川になる。屋敷内の下水網は、屋敷の表から奥へと向かう東西の列線となる下水溝と、それに直交して南北の列線となる下水溝から構成されている。

屋敷境 6J-500 周辺の屋敷外郭部の遺構分布状況を見ると、6J-500 と東西方向の下水溝（5K-109 など）との間に表長屋（5K-141）がある（この表長屋と 6J-500 の間に土坑列があるので、長屋型表長屋だった可能性が高い）。長屋に伴う下水溝（5K-109）は調査区外を汐留川側へと続いている一方で、5K-633 や 5K-142 によって屋敷境 6J-500 に繋がっている。そのほかにも屋敷内の下水溝のほとんどが、東西方向、南北方向にかかわらず 4K-001 や 5K-009 を介して 6J-500 に接続している。屋敷内の下水溝で屋敷境 A2 へ接続するのは、調査が実施された範囲内では 27 号溝（汐留地区遺跡調査会 1996）のみである。屋敷境 A2（4K-007・2 類）も北側で 6J-500 と接続しているため、仙台藩邸内の下水網は屋敷境 C（6J-500）を幹線として構築されていたことがわかる⁸⁾。

汐留遺跡は江戸前島先端部の葦の茂る沿岸部⁹⁾を、寛永年間に埋め立て造成した大名屋敷である（仙台藩の屋敷拝領は 1641 年 / 寛永 18）。石崎俊哉による仙台藩邸の造成過程に関する研究によれば、造成の各段階で船入場空間が変化し、1676 年（延宝 4）に下屋敷から上屋敷へと唱替になる際に、船入場空間が表向に設けられた庭園の池となって消滅した（石崎 2011）。

石崎は拝領直後の造成の目的の一つとして、海手側に大規模な船入空間を設置することをあげている。下屋敷段階の藩邸の状況は考古学的には不詳なため、仙台坂遺跡のような大規模な生産活動が行われていたかは不明だが、屋敷地の造成や屋敷の普請に必要な多量の物資を搬入する上で、船入空間の整備は不可欠なものだった。船入堀を伴う船入場空間は、造成地の排水処理という点でも一定の役割を果たしていたことが推測される。上屋敷になって船入空間は消失したが、下水道を兼ねた屋敷境 C（6J-500）が水堀として地盤の水はけの機能も担っていたのである。

屋敷境 D（会仙川）は調査対象外のため、下水との関わりは考古学的には不明である。しかしその実態は『御府内備考』の次の記述から窺い知ることができる（史料 1¹⁰⁾）。

史料 1

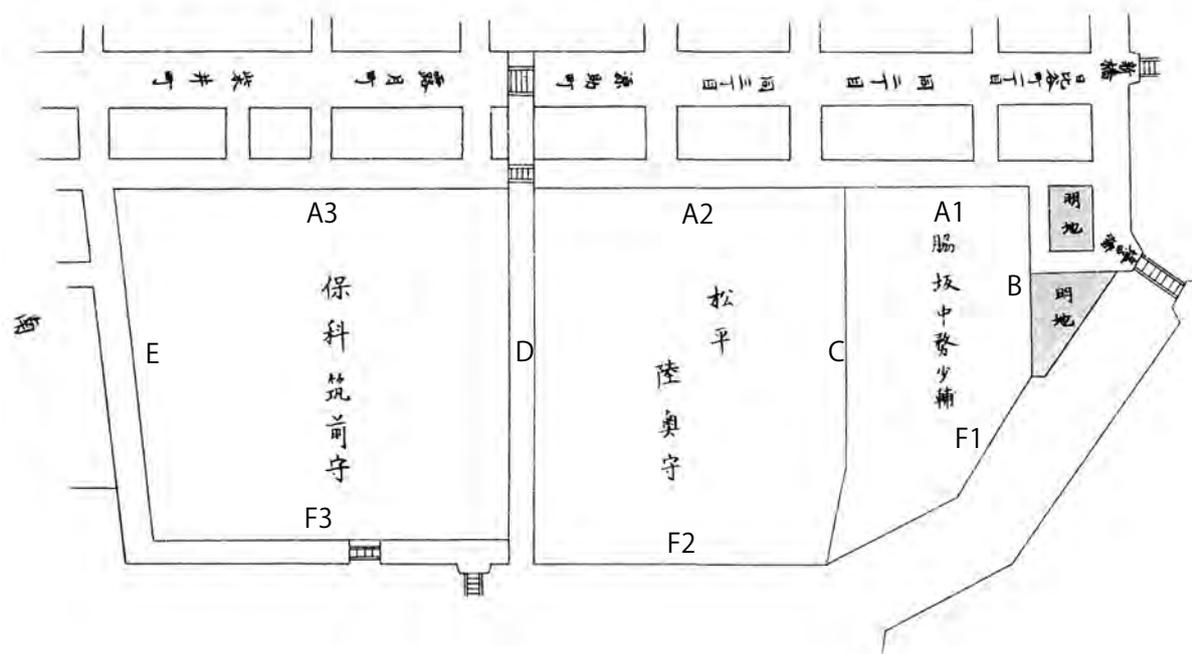
「大下水 巾式間 右者町内往還横切下水二而町内新道之分より浜御殿脇え流落候」

史料 1 の大下水が会仙川のことで、幅が 2 間（約 3.6m）の下水として機能していたことがうかがえる。この下水、即ち会仙川には「町内新道之分」の下水も合わせて浜御殿の西側を流れる汐留川に合流した。「町内新道之分」とは東海道の西側にある日影通り沿いの下水のことで、5 図にある芝口二丁目、芝口三丁目、源助町、露月町、柴井町の西（裏側）にあたる。この下水は同じく『御府内備考』には幅 6 尺（約 1.8m）¹¹⁾で、武家屋敷との屋敷境になっていたことが記されている。このように東海道沿いの町屋や日影町通りに面した武家屋敷から排出された下水は、仙台藩邸と会津藩邸の屋敷境の堀（会仙川）に合流して、汐留川へと流れていた。仙台藩邸内の下水についても、一部は会仙川にも排出されていたことが考えられる。

(2) 空堀

空堀は江戸郊外の下屋敷と強い関係が認められる（表 3）。通水の痕跡が認められないことから下水道としての機能を有していなかったことは明らかだが、具体的な機能・用途は不明である。橋口は「江戸城下を防衛する前線基地」としての役割を調査例から想定しているが、空堀による屋敷境は中山道・日光街道沿い以外の下屋敷跡遺跡でも検出しており、その検出例は主要街道筋とは限定できない。加

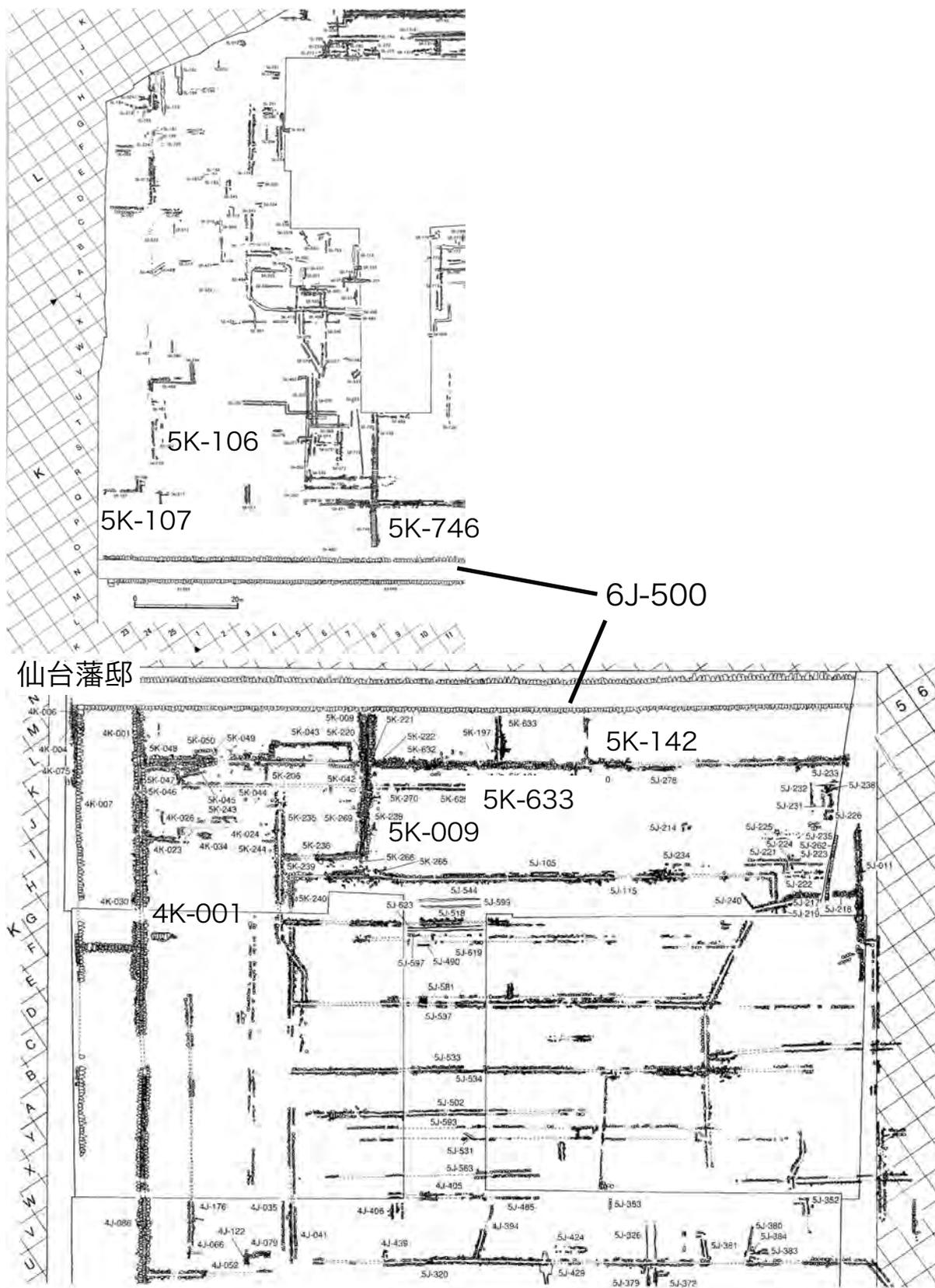
『御府内沿革図書』延宝年中之形（1673-1681）



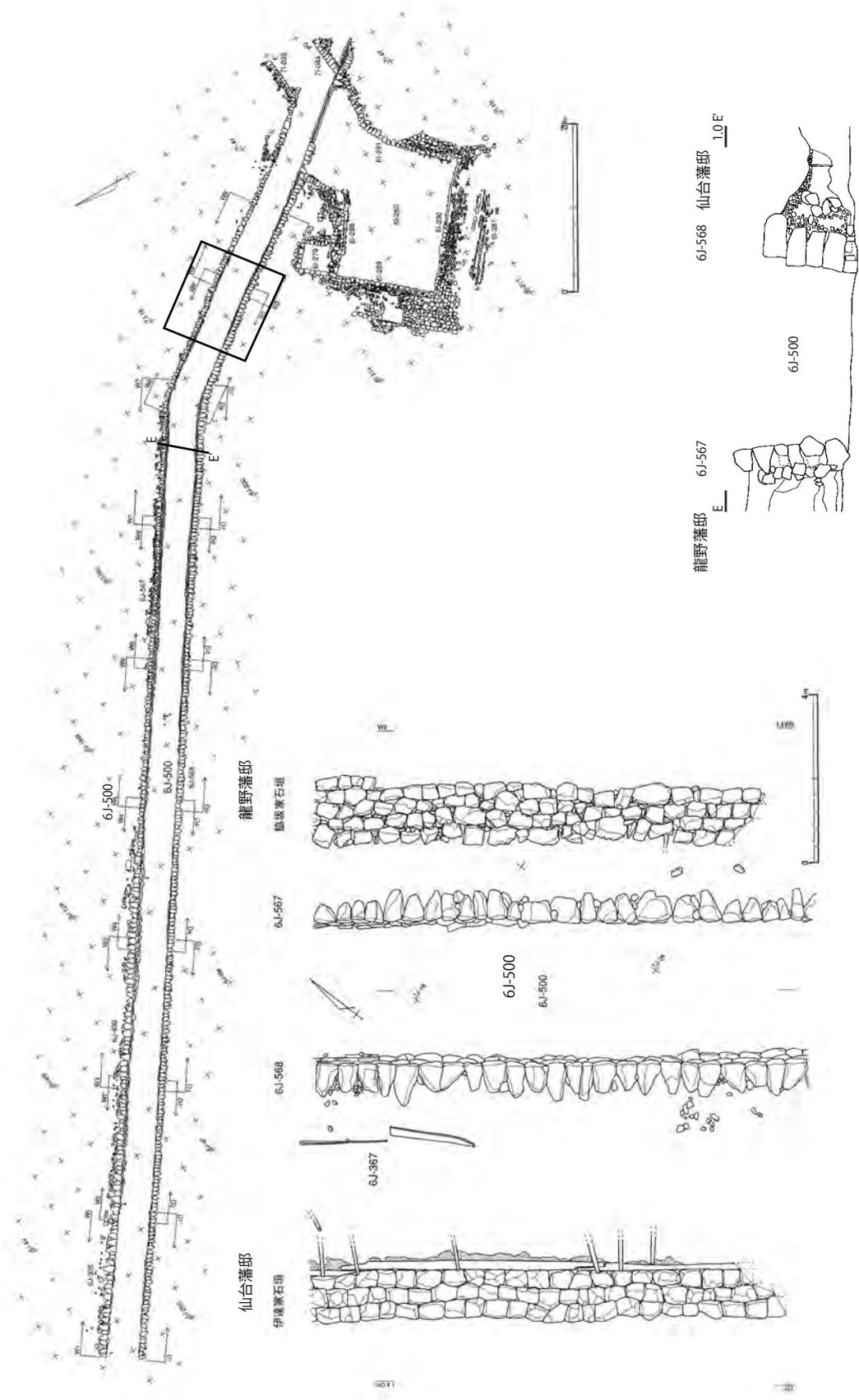
境	遺構	形態	構造差	上幅	下幅	深さ
A1	—					
A2-1	4K-007	2	不明	0.91	—	1.28
A2-2	1号溝（調査会）	2	○	0.48-0.55	—	0.86
A3	—					
B-1	6L-006	2	○	1.00	—	1.12
B-2	6K-0796	8		—	—	2.10
C-1	6J-335	7	○	3.80	3.80	2.40
C-2	6J-500	7	○	〃	〃	3.00
D	—(会仙川)					
E	—					
F1-1	6K-0412	8	—	—	—	—
F1-2	6K-0545/7J-044	2	不明	0.48	—	0.28
F2	6I-407		不明	0.40	—	0.32
F3	—					

5 図 『御府内沿革図書』（朝倉 1985）にみる汐留遺跡の屋敷境

龍野藩邸



6 図 6J-500 と龍野藩邸、仙台藩邸の下水網（東京都埋蔵文化財センター 2000 を基に作成）



7 図 汐留遺跡 6J-500 (屋敷境 C) (東京都埋蔵文化財センター 1997)

えて、構築年代が17世紀後半以降¹²⁾であることから、この仮説はなお検討を要するものと思われる。

下屋敷の屋敷境としての空堀（6類）の検出例には、橋口が例にあげた豊島区内の諸遺跡のほか、仙台坂遺跡や新宿六丁目遺跡などがある。

仙台坂遺跡は仙台藩の下屋敷（下大崎の拝領屋敷）である。『諸向地面取調書』（1856年・安政3）によれば敷地は16,680坪を擁していた。調査地は屋敷北側の外郭部一带にあたる。

検出した屋敷境遺構は「堀跡」と呼ばれる上幅5.0m、下幅2.5m、深さ2.0mの断面が逆台形を呈した遺構である（8図）。軸は北西から南東方向で、藩邸北側にある道（仙台坂）に沿っている。

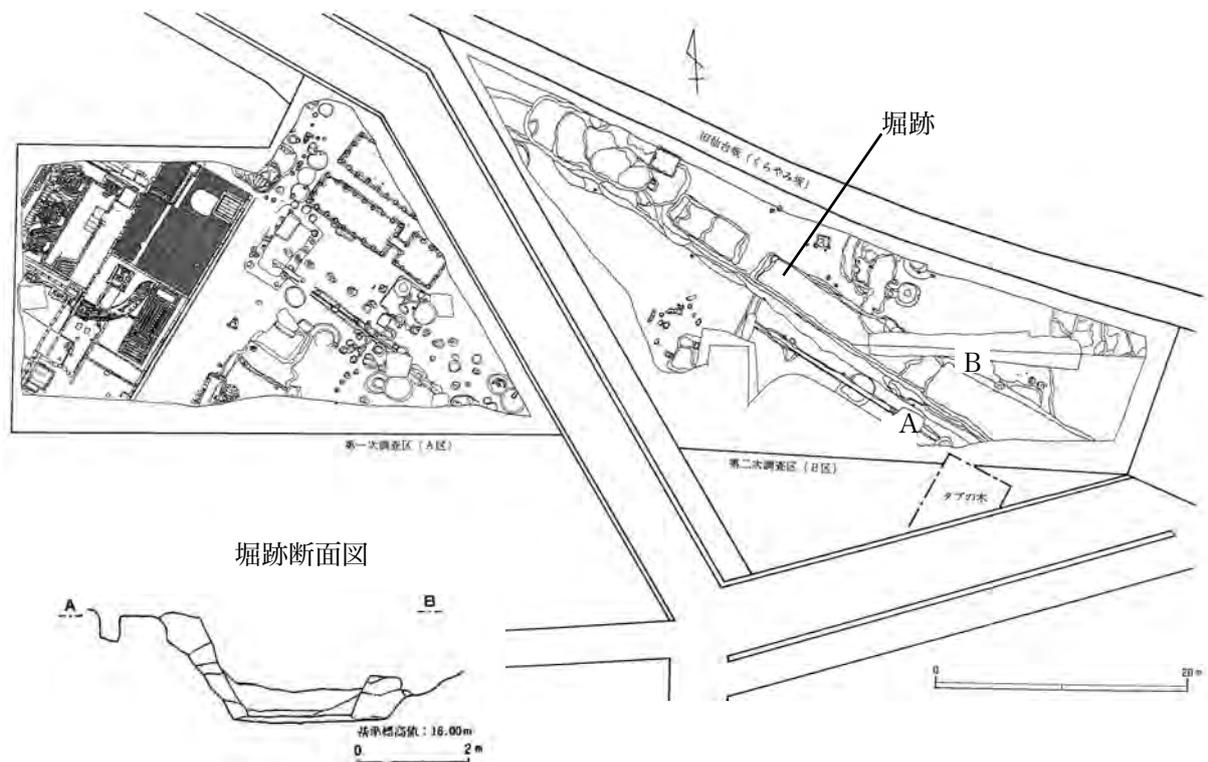
堀は地山を掘削して構築されているが、断面には土留め施設の痕跡は存在しない。覆土の堆積層には水付きの痕跡は認められない。堀の屋敷側には、立ち上がりの肩の部分（平坦部）に3号堀跡がある（8図の断面図）。これは堀の内側に巡っていた塀と推測される（品川区遺跡調査会1990）。

いずれも広大な藩邸の中で、調査を実施したのは屋敷境を含むごく一部の範囲に過ぎないので、屋敷の空間構成への位置づけが十分に行われていないのが現状である。ここで注目されるのが大村藩下屋敷（東京大学白金構内遺跡）の拝領に関する記録である（史料2¹³⁾）。

史料2

「一 御下屋敷被成御拝領候由、然共御地奉行衆の御渡し不被成候由、御受取被成候者、屋敷惣かわ堀を堀、土居を上ケ、竹植候様にと被仰付候由、其上屋敷内ニ番衆家一御作り被成候由、是二も大分御物入かと奉存候」

大村藩が白金に屋敷を拝領したのは1662年（寛文2）のことである。史料2は拝領の進捗状況を江戸から国許へ報告したものである。これによって下屋敷の周囲には、堀と土居による屋敷境が構築されていたことがうかがえる。さらにこの堀と土居が、「御地奉行」からの指示で構築されていたこ



8図 仙台坂遺跡堀跡（品川区遺跡調査会1990）

とがわかる。

大村藩下屋敷を描いた絵図は伝世していない。跡地にあたる東京大学白金構内遺跡でも、これまでの発掘調査はいずれも屋敷内側で行われているため、屋敷境の状況は不明である。今後の白金構内遺跡の調査によって、屋敷境遺構の実態が明らかになることが期待される。

第4節 屋敷境としての堀の機能

以上のように大名屋敷の屋敷境としての堀は、水堀と空堀とで異なる機能を有していた。水堀は埋立地に立地する大名屋敷に伴い、湿潤な地盤の水はけを目的とした排水処理の役割も兼ねていた。日比谷入江や沿岸部のような東京低地に留まらず、山の手台地でも小河川の開析谷を宅地化している場所では屋敷境として水堀が構築されている。その意味で水堀は江戸の拡大に伴う都市開発に不可欠な都市基盤であったといえるだろう。

17世紀後半になると大名屋敷の屋敷境は石組溝（2類）が出現し、急速に普及する。これは下水道を兼ねており、江戸の下水網整備に伴って大名屋敷の屋敷境に構築された施設が、塀・柵（3類、4類、5類）から下水溝へと替わられた（追川前掲¹⁴）。地盤の排水処理を担った水堀もまた、この時期から下水道としての役割を担っている。なお17世紀前半に帰属する文部科学省構内遺跡005号は、屋敷内の下水を外堀へ排出している状況がうかがえるので下水処理施設にあたる。しかし史料1にあるように、17世紀後半の屋敷境が担った下水溝（水堀も含む）は、個々の大名屋敷の下水のみを排出するのではなく、周囲の武家屋敷や町屋の下水も流した都市インフラとしての下水道だった。文部科学省構内遺跡005号は、あくまでも屋敷内の下水を屋敷外（この場合は外堀）へと排出する施設であるという点で、ここで言う下水道とは異なるものと位置付けておきたい。

春日町第Ⅳ地点1号遺構では水堀の護岸に雁木が設けられていた（文京区遺跡調査会前掲）。検出例は少ないが、屋敷境が水堀だった大名屋敷では舟運としての利用もなされていたことがうかがえる。

一方、空堀（6類）は屋敷境という機能は水堀と共通するとはいえ、下水道を兼ねるという附帯的な役割は伴っていない。17世紀前半の屋敷境の主体的な形態は、柱穴列（4類）や柱穴を伴う溝状遺構（3類）であり、これに最初期の大名屋敷の屋敷境に伴う素掘りの溝（1類）も少例ながら認められる（追川前掲）。こうした状況は、屋敷のぐるりを塀・柵が取り囲む景観を推測させるものである。

該期の空堀の検出例は、現在までのところ有楽町二丁目遺跡、尾張藩上屋敷跡遺跡に限られている。いずれも遺構深度は1.0m以下と浅く、断面は立ち上がりが緩やかな台形状をなしているものの、素掘りの溝（1類）のような塀・柵・生垣の掘り方とは異なり、堀、即ち溝状の掘り込み自体が屋敷境として機能していた点で、塀や柵をなす諸形態とは異なる屋敷境のあり方である。このことから17世紀前半の大名屋敷の景観には、屋敷のぐるりを塀や柵などが囲むものを主体としながら、空堀が取り囲む（その内側に塀や柵を併設した可能性がある）例も存在したことがうかがえる。

17世紀後半以降になると上述のとおり石組溝の屋敷境（2類）が普及することに伴い、堀（6類）の中でも下水道を兼ねない空堀は、他の形態と同様に石組溝（2類）へと替わっていく。これについては第4章でとりあげるが、そうした変化があってもなお屋敷境として堀（6類）が敷設され続けたのが、江戸郊外の下屋敷である。

17世紀前半にみられた空堀が、立ち上がりが緩やかな台形状の断面を呈するのに対して、該期の空堀は立ち上がりが急斜度の、いわゆる薬研堀と呼ばれる堀に類似した形状を呈している点で異なっている。江戸郊外の名屋敷という空間的なひろがり、該期の空堀の形状から、江戸の防禦を担う大

名屋敷の役割が推測される（橋口前掲、小川前掲）。しかし史料2にみたように、郊外にある下屋敷の屋敷境としての空堀構築には幕府の指示があったことは明らかであるが、その意図は不明である。加えて17世紀後半以降という構築時期的にも、ただちに防禦性と結び付けることは避けるべきだろう。

第3章 大名屋敷の屋敷境としての堀と防禦性

1590年代の大名屋敷の実態は、資・史料が限られているため考古学的にも歴史学的にも不明なことが多い。史料3は、『榊原氏系譜』での榊原邸（池之端邸）と井伊邸拝領に関する記述である¹⁵⁾（傍線は筆者による）。

史料3

「天正十八年庚寅年九月十日、家康公関東御入国、江戸御城御巡見有之、井伊直政ニ居屋敷地賜之。西丸ニ続平山之砦ニ可成地也ト。深キ思召ニテ被下候由。

同日康正マ池ノ端向ヶ岡ノ臺を被下。此地後ニ茂ミ有之、平山ノ砦ニ可成地也。其上阿波・上総及奥州羽州之海道ヲ遙ニ見下し、前ニ大成池ヲ構エたり。其時関東筋未穩、依テ御入国之砌、領家エ 要地賜之旨申伝。」

「関東筋未穩」という時世にあって、江戸城の出城（平山の砦）となることが期待された賜邸だった。しかし東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点の発掘調査では、最も古い屋敷境遺構として素掘りの溝（1類）を検出した（後述するように年代的位置づけには検討すべき点がある）。溝の内側には、塀や柵、あるいは土塁などが構築されていたことも考えられるが、発掘調査の成果からはそうした痕跡は認められない。

榊原康政は池之端邸を拝領してから程なく、小石川門外にも屋敷を拝領した（岩淵令治1995）。拝領直後の屋敷境については詳らかでないが、平川が埋め立てられて市街地化した段階の屋敷境である飯田町遺跡堀跡は水堀（6類）ながら、浅く平坦な構造は埋め立て地盤の水はけを促す排水施設と捉えられた。このように16世紀末から17世紀前半の大名屋敷においては、「堀」を構えた江戸城の出城的な防禦性を持つ大名屋敷という景観は、考古学的には浮かびあがってこない。

東京大学小石川構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点（以下、東京大学小石川構内遺跡博物館地点）SD1（図11-A）と白山御殿跡遺跡第4地点1号遺構（11図-C）は、掘削深度が3m以上となる大型の堀（6類）であるという点で、屋敷境の堀（6類）としては特異なものである。そこで両地点の屋敷境遺構から、大名屋敷の堀と防禦性との関わりを検証しよう。

(1) 東京大学小石川構内遺跡博物館地点 SD1

東京大学小石川構内遺跡博物館地点SD01は幅9.2m以上、確認面からの深さは2.7m以上ある。遺構の確認面から2.6mほど掘り下げたあたりで遺構の壁面が粘土層から砂礫層へと変わり、湧水を確認した。これより下位の掘削は断念した。遺構両側の立ち上がりは確認できていないが、壁面の仰角は約37°で、途中に犬走り状の施設を持つ（成瀬晃司2004・9図）。

調査面積が45㎡と狭小のため、遺構の完掘には至らなかったが、調査地点が小石川御殿の南西隅にあたることから、堀による屋敷境遺構6類と捉えられる。

遺物は少なく、破片も含めて十数点に過ぎなかった。肥前製の碗や鉢、カワラケが含まれている。遺物の年代からは17世紀後半から18世紀初頭に位置づけられる。

(2) 白山御殿跡遺跡第4地点1号遺構

白山御殿跡遺跡第4地点は白山御殿北東側に位置する。1号遺構は幅17m以上、深さ3mの溝である(文京区遺跡調査会2003)。全体の形状は調査区からは窺い知ることができないが、平面形状がL字状を呈している(10図)。堀による屋敷境遺構6類である。

遺構の最下層に堆積している土は黄褐色土である。Dトレンチでは灰色粘土層の下に褐色土層が堆積していて、観察所見によればロームの褐色土を貼り床状に構築したとある(文京区遺跡調査会前掲)。こうした覆土の堆積状況は前段のSD01にみられた水成堆積とは対照的である。

遺物は肥前製の陶器碗1点、瀬戸・美濃製の陶器碗1点と、播鉢2点が報告されている。肥前製陶器碗は「小松吉」の刻印を有した京焼風陶器である。ただし点数が少ないため遺物組成から年代を位置づけることは難しい。18世紀代の遺構に切られていることから、1号遺構は17世紀代に位置づけられる。

成瀬晃司はこの二つの遺構と、11図-Bの整地遺構¹⁶⁾には、規模の大きさに加え、次のような共通点が存在することから、図11-Aから図11-Cを、大名屋敷を囲む一連の屋敷境(6類・堀)と想定した¹⁷⁾(成瀬2008)。

- ①底面が平坦に成形される。
- ②遺構立ち上がりの勾配が30-40度。
- ③溝底または壁面直上に貼土が認められる。
- ④覆土の堆積状況から遺構の埋め戻しが一方向からなされたと判断できる。

遺構の構築年代は詳らかではないが、SD1では18世紀前葉の遺物が出土しており、1号遺構は18世紀代の遺構に切られていることから、廃絶年代の下限は18世紀前葉に位置づけられる。この時期の遺跡は幕府の白山御殿にあたる¹⁸⁾(表4)。

屋敷内の様子は『御府内備考』に、「周囲に渠を鑿ち、土手あり、石垣を築きて白壁の塀、……東に面して楼門と櫓とあり」とある¹⁹⁾。12図は『宝永江戸図鑑』における白山御殿である²⁰⁾。藩邸内部の構造は詳らかでないが、屋敷の周囲は堀と石垣が巡っていて、所々に櫓門が設けられている。

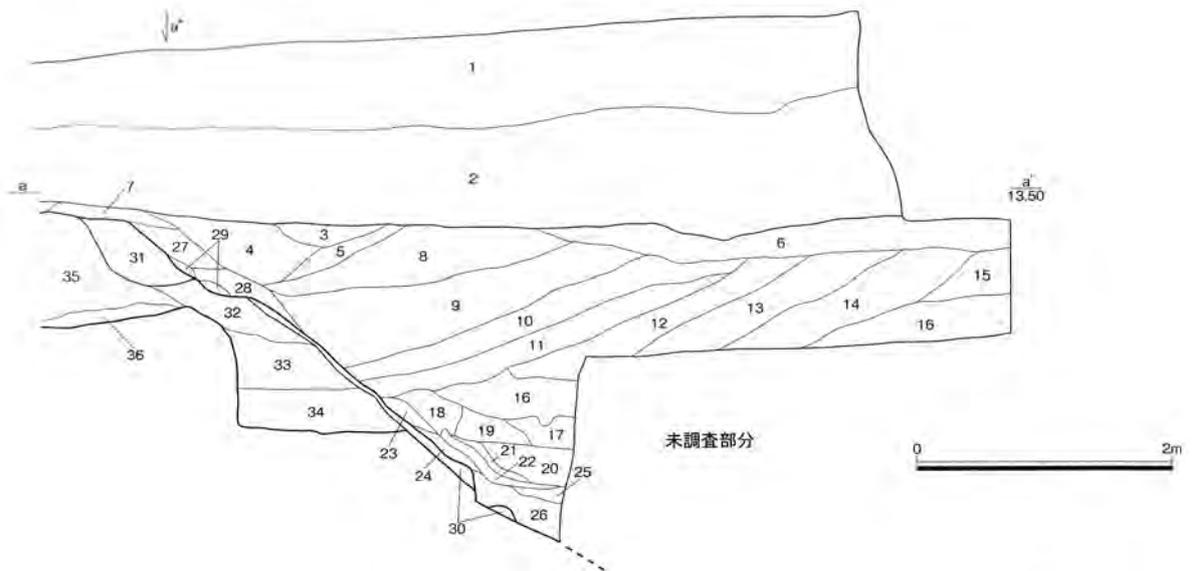
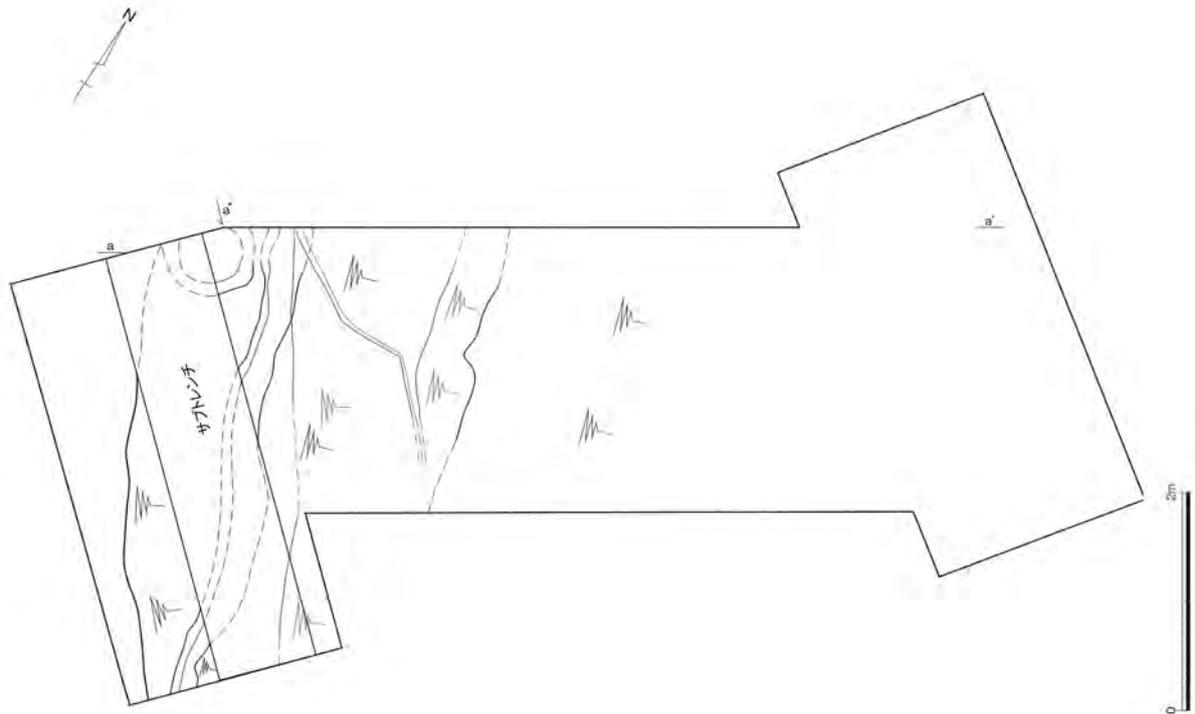
現在までのところ、発掘調査で櫓門や石垣の状況は未確認だが、屋敷をめぐる堀や石垣などのあり方が『御府内備考』の記述通りであるならば、小石川御殿は極めて防禦性の高い屋敷ということになる。

大名屋敷の櫓門は1657年(明暦3)の家作制限によって禁止されたことは前述した(高柳・石井1934)。1680年(元禄11)に成立した白山御殿は、大名屋敷ならば時期的に櫓門の建築は不可能だった。この屋敷にみられる防禦性の高さは、幕府の御殿(将軍の別邸)だったことによる可能性が高い。

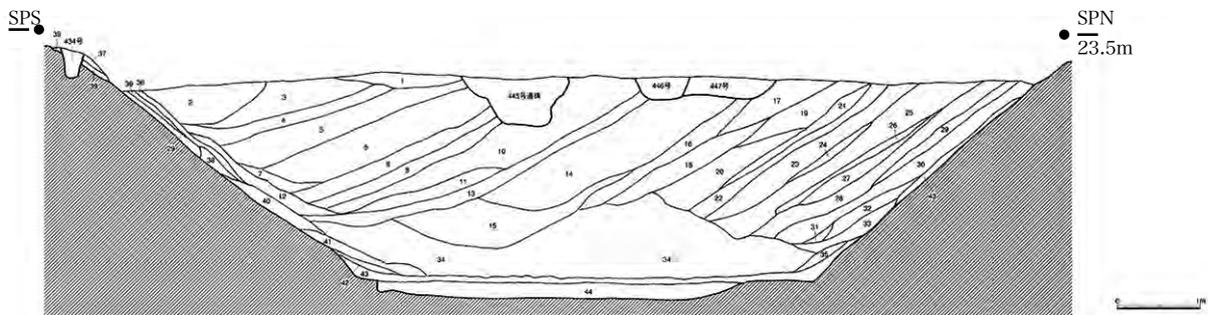
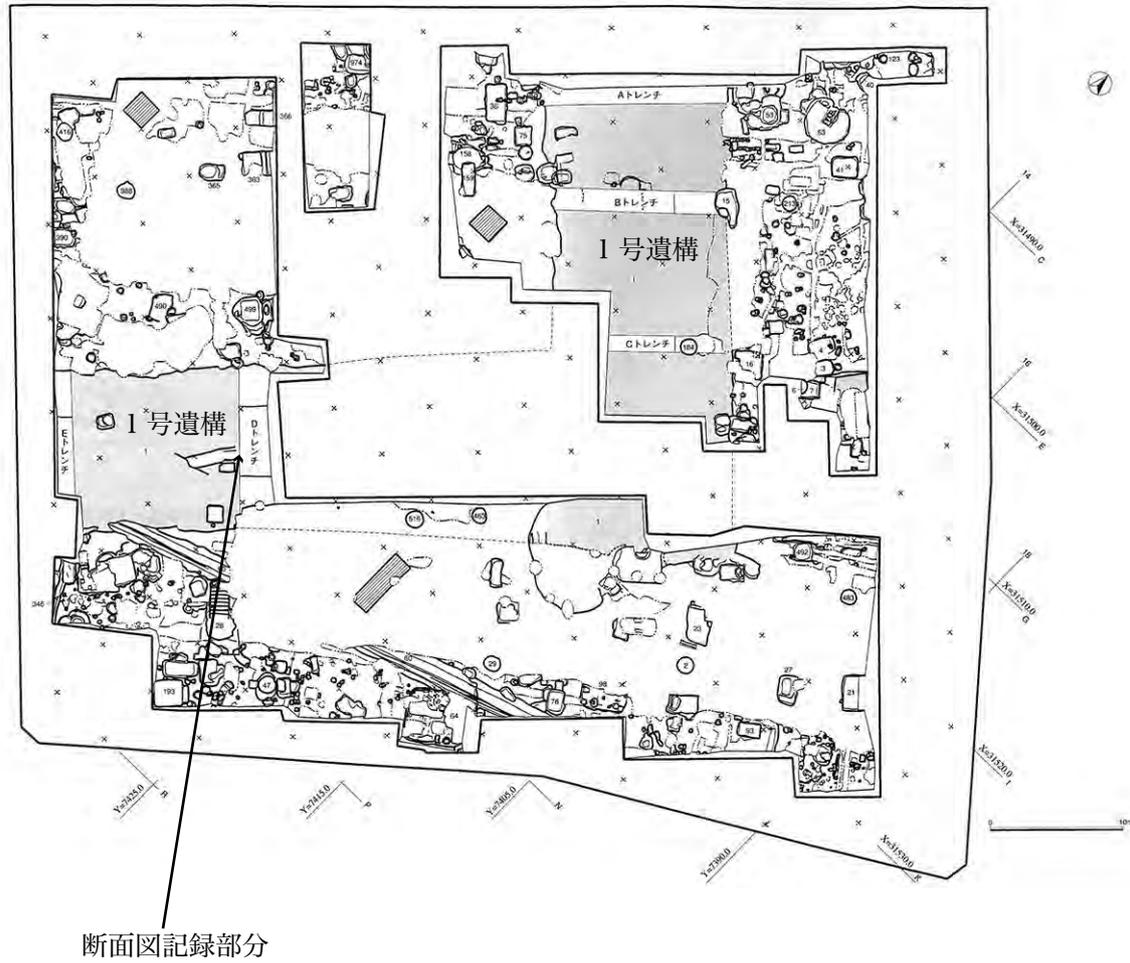
発掘調査によって櫓門の存在を確認しているわけではないので、『宝永江戸図鑑』に描かれた堀と石垣が屋敷の周囲を取り囲む小石川御殿の景観が、どれほど実態を反映したものであったかは不明である。しかし屋敷境の堀(6類)の中でも特に大型の堀が、小石川御殿の時期に構築された遺構であることは、将軍の別邸という屋敷の性格を反映したものと捉えるのが適切だと思われる。

検出した小石川御殿の堀(6類)にはどれほどの防禦性が具わっていたのだろうか。江戸城の堀と比較してみよう。

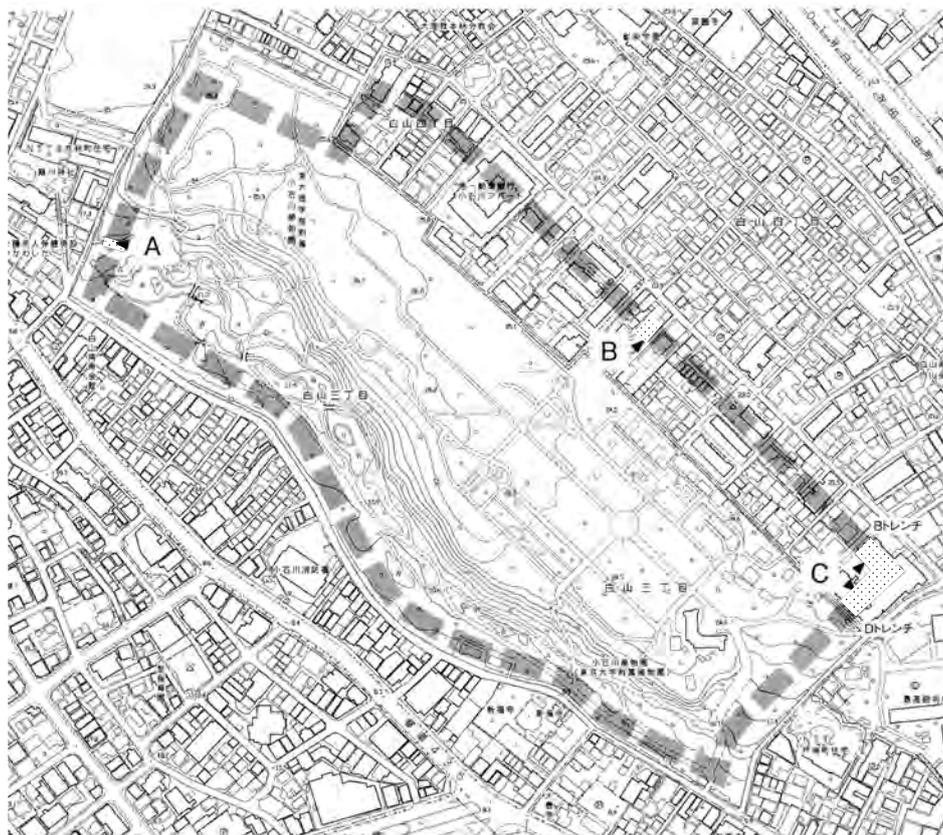
『五千分一東京図測量原図』²¹⁾によれば、江戸城外堀の幅は大手門付近で50m、市谷門付近で75mである。深度は文部科学省付近で約3mである²²⁾。丸の内一丁目遺跡では外堀普請以前に構築さ



9 図 東大白山構内遺跡総合研究博物館小石川分館地点 SD01 (東京大学埋蔵文化財調査室 2008)



10 図 白山御殿跡第 4 地点 1 号遺構 (文京区遺跡調査会 2003)



11 図 白山御殿堀範囲推定図（成瀬 2008 より）



12 図 『宝永江戸図鑑』における小石川御殿（飯田・俵 1988 より）

年代	館林藩邸/白山御殿	綱吉の動向
1652 (承応元)	松平徳松、下屋敷として拝領	松平徳松、下屋敷として拝領
1661 (寛文元)		館林藩主就任
1680 (延宝8)	小石川御殿 (天和初年頃)	将軍就任
1698 (元禄11)	北・西側に拡張	
1705 (宝永2)		桂昌院逝去
1709 (宝永6)		逝去
1713 (正徳3)	廃止	

表 4 館林藩下屋敷・小石川御殿関連年表

れた江戸城の堀の一部を検出した (03号遺構)。堀幅は不明だが、深さは4.4m以上あり、障子堀の可能性が指摘されている (千代田区丸の内一丁目遺跡調査会 2005)。

近世城郭と比較すれば、大名屋敷の堀としては最大規模の小石川御殿の堀であっても、波多野の言うような「戦闘のための城郭的な構え」(波多野前掲)を見出すことは難しい。

ここで想起されるのが、江戸の武家屋敷で枳形門を構える浜御殿である。この屋敷は承応年間(1652年-1654年)に徳川綱重が甲府藩下屋敷として拝領し、家宣の将軍就任(1704年/宝永元)とともに将軍の別邸となった来歴がある。大名屋敷の門は大家の家格によって型式が細かく規定されている。しかし武家故実をまとめた『青標紙』(大野広城・江戸叢書刊行会 1980)をみても、枳形門をとる大名屋敷は存在しない。

以上のことから、小石川御殿で検出した堀や、絵図に描かれた櫓などは、実戦に即した大名屋敷の防禦的機能と捉えるよりは、むしろ堀と櫓を備えた屋敷の景観が、将軍の権威を具象化したものであった可能性が高い。権威性を考古学から検証することは難しいが、小石川御殿や浜御殿はいずれも大名屋敷から将軍の別邸になっているので、屋敷境遺構や門遺構の構造の変遷を考古学的に検証できれば、屋敷の来歴を照らし合わせることで、この点を明らかにできると思われる。

第4章 屋敷境の変化と堀の消滅

第1節 高田藩池之端邸の屋敷境

東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点の調査区は無縁坂から続く道を含み、その北側が大聖寺藩邸、南側が高田藩邸である。調査では道を挟んで大聖寺藩邸と高田藩邸(榊原邸²³⁾)の屋敷境を検出した(東京大学遺跡調査室 1990)。

榊原邸の屋敷境遺構は、3号溝、1号溝、組石遺構(AB33・34区組石遺構)の3基が認められる(図13)。

(1) 3号溝

3号溝は上部幅1m前後、下部幅30cm前後の逆台形状をなす溝で、護岸のための板材や石材の痕跡は認められない。素掘りの溝による屋敷境遺構1類である。深さは0.3-0.7mで、南側の一部を除き大部分が1号溝によって壊されている。

そのため3号溝を屋敷境とする段階の道については不明である。しかし遺構掘り込み面が1号溝とほぼ同じであることと、1号溝に伴う道(18層)が自然堆積層直上に構築されていることから、3号

溝も18層を道としていた可能性が高い。

(2) 1号溝

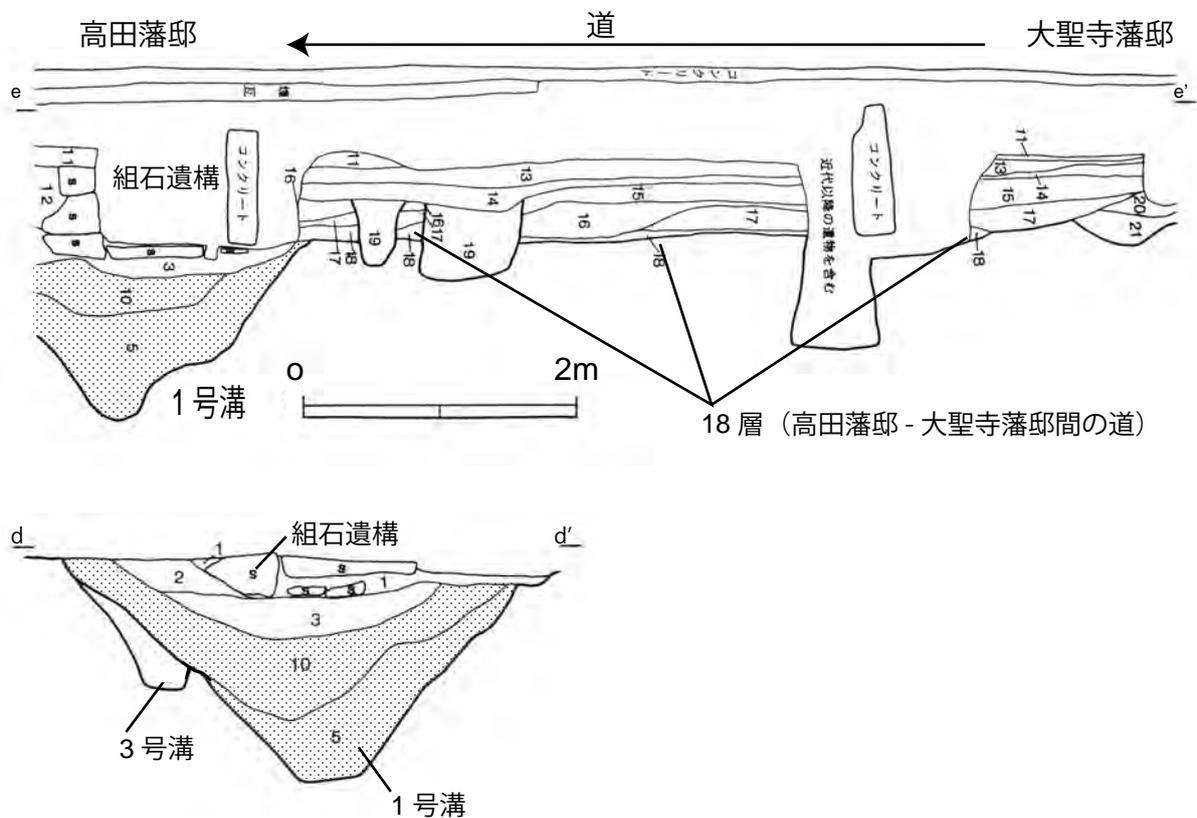
1号溝は上の幅が2.5-3.0m前後、下の幅が0.5mの逆台形状を呈し、深さは1.0-1.1mである。3号溝と同様護岸の痕跡はない。堀による屋敷境遺構6類である。遺物は18世紀後半の陶磁器類が出土している。

1号溝を屋敷境とする道(18層)の北側に、東西方向にのびる柱穴列(2号柱穴列)を検出する。これが大聖寺藩邸の屋敷境(柱穴列・4類)である。したがってこの間の4.5mが、榊原邸と大聖寺藩邸との間の道幅である。

(3) 組石遺構 (AB33・34区組石遺構)

AB33・34区組石遺構は幅1m、深さ0.6mで、南側の護岸の一部に築石を1段残す石組溝(2類)である。榊原邸(1号溝)と大聖寺藩邸(2号柱穴列)との間の道が0.5m嵩上げされた(13層)ことに伴って造り直された榊原邸の屋敷境である。

大聖寺藩邸の屋敷境は未検出だったが、道(13層)は北側(大聖寺藩邸側)に6.8m以上続いている。したがってこの嵩上げによって、道幅が4.5mから6.8m以上に拡幅されたことになる²⁴⁾。榊原邸の屋敷境は形態こそ変化しているものの、位置はほぼそのままであるのに対して、大聖寺藩邸の屋敷境は2号柱穴列の周辺に新たな屋敷境遺構を検出していないので、道の拡幅に伴う屋敷地のセットバックが北側の屋敷(この部分では大聖寺藩邸)を対象に行われたことがうかがえる。



13 図 東京大学本郷構内遺跡設備管理棟地点の大聖寺・高田藩邸の屋敷境遺構

遺構	上幅	下幅	深さ	時期	屋敷境
3号溝	1.0	0.3	1.0未満	1590年頃	溝(1類)
1号溝	3.0	0.5	1.1	～18世紀後半	堀(6類)
石組遺構	1.0	-	0.6	19世紀	溝(2類)

表 5 大聖寺 - 高田藩邸の屋敷境遺構の変遷 (単位は m)

第 2 節 屋敷境の変遷と堀の消滅

(1) 素掘りの溝から堀への造り替え

以上のように榊原邸の屋敷境は、素掘りの溝 (1 類) から堀 (6 類) へと造り替えられ、最終的に石組溝 (2 類) へと変遷する (表 5)。この変遷のうち時期が明らかなのは、石組溝 (2 類) への変化が 18 世紀末までに行われたということのみである。他の屋敷境遺構については構築年代、廃絶年代ともに詳らかではない。

ところで本地点に隣接する同遺跡第 2 病棟地点や茅町二丁目遺跡では、中世の板碑が複数基出土している。特に茅町二丁目遺跡では 27 基出土していて、いずれも近世の遺構覆土と包含層から出土したものの、「應永十三年」(1406 年) や「康正二年」(1456 年) の紀年銘を有する板碑も含まれる (台東区文化財調査会 2005)。このことは池之端邸周辺が中世段階から生活が営まれた地域であることをうかがわせるもので、最初の屋敷境である 3 号溝も榊原邸拝領以前の屋敷に伴う屋敷境だった可能性も考えられる。

池之端邸内にあたる龍岡町遺跡第 6 地点では、中世に帰属する常滑製の甕または壺の破片が出土している。しかしこれは近世遺構の覆土に混入したものと捉えられており (文京区教育委員会 2015)、現在までのところ東京大学本郷構内遺跡や龍岡町遺跡において、榊原邸以前の屋敷の存在を積極的に窺わせる遺構や遺物は認められない²⁵⁾。このことから本研究では 3 号溝を、榊原邸に最初に構築された屋敷境遺構と捉えることにする。『榊原氏系譜』では池之端邸は東北方面、房総方面などに対する江戸防衛のための出城として位置付けられている (史料 3)。しかし拝領直後の池之端邸の景観は、素掘りの溝 (1 類)、即ち、簡易な塀や生け垣などで圍繞されたものである。

塀・生垣 (3 号溝) と堀 (1 号溝) の切り合い関係をみると、屋敷が接する道 (18 層) はそのままに、屋敷境の施設のみが造り替えられたことがうかがえる (13 図)。その理由は不明だが、初期の大名屋敷が景観的にも機能的にも、防禦性を伴う屋敷ではなかったことを示すものである。

(2) 堀から石組溝への造り替え

榊原邸の屋敷境は、18 世紀末までに堀 (1 類) から石組溝 (2 類) へと造り替えられる。石組溝 (AB33・34 区組石遺構) は覆土の堆積状況が不明であるが、他の大名屋敷跡遺跡で検出している石組溝 (2 類) と同様 (4 図、6 図)、これも下水道を兼ねていたものと推測される²⁶⁾。

『御府内備考』の茅町二丁目の下水に関する記述には、榊原邸の下水について次のように記している (史料 4⁽²⁷⁾)。

史料 4

「右当町南横町屋際に幅式尺五寸余の天下水有之候。右は無縁坂上榊原遠江守様御屋敷の土手際通り不忍池え落候下水に御座候。尤堀割候年代等相分り不申候。

但右下水往還埋下下水にて橋等無御座候」

史料にある無縁坂上の榊原遠江守様御屋敷が、設備管理棟地点を含む榊原邸で、北側の屋敷境に下水道が敷設されていたことがわかる。ただしこの記述にみられるような下水網が整備された時期は不明である。考古学的には、1号溝は覆土の堆積状況をみる限り空堀なので、18世紀後半に AB33・34区組石遺構が構築されてはじめて、榊原邸の北側に下水道が構築されたことになる。

東京大学本郷構内遺跡で近く調査が予定されているクリニカル・リサーチセンター B 地点は、設備管理棟地点に続く榊原邸の屋敷境を調査区内に含んでいる。石組溝出現以前の下水処理のあり方の解明が、この発掘調査に期待される。

17世紀代には多様な形態が認められた大名屋敷の屋敷境遺構は、18世紀以降になると石組溝による屋敷境（2類）に収斂していく（追川前掲）。これは堀に関しても同様で、17世紀後半以降に屋敷境としての堀は、府内では谷や低地を造成した大名屋敷に残る水はけのための排水施設としての水堀と、郊外の下屋敷に構築された空堀（第2節）のみが残ることになる。表2はそれ以外の堀（6類）も、他の諸形態と同様に石組溝による屋敷境（2類）へとって替わったことを推測させる。

榊原邸にみられる堀（6類）から石組溝（2類）への変遷は、こうした屋敷境としての堀の動向を具体的に示す事例と位置付けられる。

第5章 小結

本研究では大名屋敷の屋敷境としての堀のあり方をみた。堀に囲われる大名屋敷は、一見すると防禦的な性格が想起される。しかし江戸城の要衝に配置されたと言われる最初期の大名屋敷には、考古学的には堀で圍繞された例はない。初期の大名屋敷の景観は、屋敷の周囲を簡易な塀や生け垣が巡るものである。

大名屋敷の屋敷境として堀が構築されるようになるのは17世紀前半になってからのことである。水堀は低地や台地上の開析谷にある大名屋敷跡遺跡で検出することから、湿潤な造成地の排水施設としての機能を担っていたことが推測される。空堀は掘削深度が1.0m以下と比較的浅く、両側の立ち上がりも緩やかであるという形状と、底部に畝や掘り込み、あるいは杭穴など、戦国時代の空堀にみられるような防禦性を高める施設が構築されていないことから、防禦性を伴わない大型の溝と捉えられる。

大名屋敷の屋敷境にとって画期となるのが、石組の屋敷境の出現である。江戸府内の下水網整備によって、17世紀中葉以降になると大名屋敷を囲っていた塀や柵は、下水道を兼ねる石組溝と長屋塀型表長屋へ替わっていく。

これを画期として堀のあり方は、水堀、空堀それぞれで大きく変わっていく。低地や谷の排水施設だった水堀は、下水道の機能を兼ねて18世紀以降も引き続き屋敷境として機能する。一方、空堀については、塀や柵のような他の屋敷境の施設と同様に、石組の下水道へと替わる。大名屋敷の屋敷境として幕末まで機能し続ける堀は、低地部の宅地化と密接に結び付いた水堀で、ここに大名屋敷の周囲に構築される堀の本質を見ることができる。

以上にみた堀のあり方は、江戸府内の大名屋敷にみられるものである。将軍別邸である小石川御殿では、屋敷境として幅、深さともに最大の堀を検出しており、本研究では将軍の権威を象徴する圍繞

施設であると捉えた。明暦の大火（1657年／明暦3）を契機に、避災施設として郊外に与えられるようになった大名屋敷（下屋敷）では、屋敷境に空堀が構築されている。郊外の下屋敷を対象とした調査例はまだ少ないため、下屋敷の屋敷境として空堀が普遍的な施設だったかを判断することは現段階では難しい。いずれの堀のあり方についても、今後の調査事例の増加を待って改めて検討したい。

【註】

1) 「明暦三酉年正月

覚

- 一 今度焼失之侍屋敷并町中わりかはり候所々可有之間、当座之小屋掛候共、成ほとかるくいたすへき事、
- 一 同作事之儀、たとひ国持大名たりといふ共、三間梁よりひろき屋作可為無用、勿論かるく可被相立可有
用意事、

付、二階門可為停止、并こまよせハ先無用事、

（略）

引用は『御觸書寛保集成』（高柳・石井 1934）による。

- 2) 5次調査（東京都埋蔵文化財センター 2008）では1号堀に続いて、90度屈曲する1051号堀が出土している。また4次調査（新宿区生涯学習財団 2001）での号遺構、6次調査（共和開発株式会社 2013）の36号遺構が屋敷境の堀として同一のものである。
- 3) 榊原康政は1590年（天正18）に池之端邸（東京大学本郷構内遺跡・龍岡町遺跡）を拝領し、1590年代後半に小石川邸（飯田町遺跡）を拝領している。また前田家は1605（慶長10）に辰口邸を拝領しているが、1616年または17年（元和2、3）に本郷邸（東京大学本郷構内遺跡）として下屋敷を拝領している。
- 4) 文部科学省構内遺跡は覆土には明確な水成堆積層は確認できないが、遺構が江戸城外堀に接続していることから通水があったものと判断した。表3ではこれを○とし、他の検出側（◎）と区別している。
- 5) 【屋敷】の欄では、中屋敷・下屋敷・抱屋敷を一括して下屋敷（下）としている。
- 6) 報告書では遺構番号は付されておらず、「堀跡」として掲載されている。本稿でも遺構の名称として「堀跡」と呼称する。
- 7) 東京駅八重洲北口遺跡では17世紀代(2期)の屋敷境遺構が柱穴列(4類など)から石組溝(2類)へと変遷する。石組溝の屋敷境遺構に長屋塀型表長屋が伴っており、その時期は17世紀半ばである（千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003）。
- 8) 『仙台藩江戸上屋敷略絵図』（松林家資料、渡辺洋一 1987, 1817年／文化4）では、屋敷境Cに該当する部分に「御堺堀」という書き込みがあり、『御上屋敷絵図』（奥州市立水沢図書館、19世紀初め）には「下水堀」とある。当時の仙台藩邸でも、屋敷境Cが下水を流す「堀」と認識されていたことがうかがえる。なお上記の絵図では屋敷境A（4K-007）についても「此堀」、「御堀」と記されている。本研究では4K-007を石組溝（2類）に分類しているが、当時の認識ではどちらも「堀」であったことは留意すべきだろう。
- 9) 『武州豊島郡江戸庄図』の描写による。
- 10) 『御府内備考 芝之二 源助町』。以下、『御府内備考』は蘆田伊人編（1958年・雄山閣）によった。
- 11) 会仙川の半分程度に過ぎないが、やはり「大下水」と表記されている。
- 12) 構築時期が、1657年（明暦3）に大名屋敷の家作制限として櫓門が禁止され、「大名屋敷に戦闘的な性格を認めない」（波多野前掲）という時期にあたる。
- 13) 『大村見聞集』。引用は藤野・清水 1994による。
- 14) 江戸の下水道整備は史料の欠落によって、1648年（正保5）の触書き（史料2-2）以前の状況が不明である。

考古学的には石組溝による屋敷境（2類）が下水道を兼ねているので、これが出現する17世紀半ば以降に下水道が普及したと捉えられる。それ以前の下水処理は史料としては不明だが、会所地などの明地への排出（伊藤好一 1982）や、屋敷内や近隣を流れた河川へ排出したことが考えられる。

- 15) 史料は『東京市史稿 市街編第二』（東京市役所 1914）による。
- 16) 原町遺跡では自然地形による落ち込みを平坦に造成した痕跡としたことから、遺構の形態などが不明となった（文京区遺跡調査会 1995）。そのため本論文では分析対象から除外した。
- 17) 東京大学小石川構内遺跡では湧水が認められるが、白山御殿跡遺跡では水付きの痕跡が認められないので、表7の【流・滞水】欄は不明とした。
- 18) 東大小石川構内遺跡博物館地点は1698年（元禄11）に屋敷が拡張された際に藩邸へ組み込まれた場所なので、SD1の構築年代はそれ以降である。
- 19) 『御府内備考』は蘆田伊人編（1958年／雄山閣）によった。
- 20) 飯田・俵 1988によった。
- 21) 参謀本部陸軍部測量局。日本地図センターによる復刻版（参謀本部陸軍部測量局・日本地図センター 1984）によった。
- 22) 明治時代の測量図では堀の上面の標高は6.7mである。文部科学省構内遺跡で検出した堀底の標高は3.7m（文部科学省構内遺跡調査会 2005）なので、堀の深度を約3mと算出した。
- 23) 高田藩榊原家は1680年（天正18）から幕末までこの地に屋敷を構え続ける。その間、幾度かの転封を経ていたので、以後榊原邸と呼称する。
- 24) 藤本強は現在の無縁坂に続く道幅が7mである点から、この拡幅によって街区が定まったと位置付けた（藤本 1990）。
- 25) 龍岡町遺跡第7地点では宇井義典が中世段階の湯島の状況と、池之端屋敷との関係について考察を行っている（宇井 2015）。
- 26) 『高田藩池之端屋敷絵図』（東京大学大学院工学系研究科建築学科蔵・18世紀末）では、藩邸北側の屋敷境が青色で彩色されているので、下水溝として利用されていた可能性が高い。
- 27) 『御府内備考 卷之三十四茅町二丁目』。

【参考文献】

- 朝倉治彦校訂 1985 『江戸城下変遷絵図集：御府内沿革圖書』 原書房
- 蘆田伊人 1958 『大日本地誌大系 御府内備考』 雄山閣
- 飯田龍一・俵元 昭 1988 『江戸図の歴史』 築地書館
- 伊藤好一 1982 『江戸の夢の島』 吉川弘文館
- 今井林太郎 1938 「中世に於ける武士の屋敷地」『社会経済史学』8-4 社会経済史学会 pp.102-114
- 岩淵令治 1995 「榊原家江戸屋敷と出入の者たち」『龍岡町遺跡』 文京区遺跡調査会 pp.76-90
- 宇井義典 2015 「龍岡町第7地点の発掘調査の成果」『龍岡町遺跡 第7地点』 大成エンジニアリング pp.298-320
- 追川吉生 2017 「大名屋敷の表長屋の出現について－屋敷境遺構と屋敷外郭部の土地利用状況を中心に－」『駿台史学』160 pp.81-107
- 大熊喜邦 1916 「江戸時代に於ける住宅建築概論」『住宅建築 建築世界十周年記念』 建築世界社 pp.54-110
- 大野広城・シェア叢書刊行会編 1980 『江戸叢書第二巻 青標紙』 日本図書センター
- 小川祐司 2011 「江戸周縁の大名屋敷 —藤堂家染井屋敷—」 江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』 吉川

- 弘文館 pp. 159-180
- 貝塚爽平 1979 『東京の自然史（増補第二版）』 紀伊國屋書店
- 北垣聰一郎 1981 「堀」 平井聖・児玉幸多・坪井清足編 『日本城郭大系別巻1 城郭研究入門』 新人物往来社 pp. 258-261
- 栗田 彰 1995 「江戸時代・明治維新期の下水史料を獵歩する」 東京下水道史探訪会編 『江戸・東京下水道のはなし』 技報堂出版 pp. 9-64
- 後藤宏樹 2009 「徳川御三家の屋敷と都市水道管理」『季刊 collegio』 38 之潮 pp. 9-15
- 後藤宏樹 2011 「江戸の大名屋敷跡—江戸城外郭での屋敷整備—」 江戸遺跡研究会編 『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館 pp. 1-25
- 小山靖憲 1966 「東国における領主制と村落 平安末～鎌倉期の上野国新田庄を中心に」『史潮』 94 大塚史学会 pp. 1-18, 68
- 参謀本部陸軍部測量局・日本地図センター編 1984 『五千分—東京図測量原図』 日本地図センター
- 品川区遺跡調査会 1990 『仙台坂遺跡—東京都都市計画道路補助第 26 号線（仙台坂）工事に伴う発掘調査報告書』
- 渋谷葉子 2006a 「小石川植物園」の土地利用に関する歴史の変遷『東京大学構内遺跡調査研究年報』 5 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 172-208
- 司法省原編・法制史学会編・石井良助校訂 1959 『徳川禁令考 前集三』 創文社
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 新宿新南口 RC ビル（高島屋タイムズスクエアほか）の建設事業に伴う緊急発掘調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998 『千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題 江戸遺跡の考古学的調査から』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書 新宿駅貨物跡地再開発に伴う事前調査』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会
- 台東区文化財調査会 2005 『茅町二丁目遺跡 池之端一丁目 5 番地点（本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡湯島四丁目 12 番地点）』
- 高柳真三・石井良助編 1934 『御觸書寛保集成』 岩波書店
- 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988 『紀尾井町遺跡調査報告書』
- 東京市役所 1914 『東京市史稿 市街編第二』
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点：医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「東京大学本郷構内の遺跡 山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』 4
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『尾張藩上屋敷跡遺跡 II』
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡 I：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡 II：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『汐留遺跡 III：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 2006 『汐留遺跡 IV：旧汐留貨物駅跡地内の調査』
- 内藤 昌 1972 『江戸の都市と建築』（『江戸図屏風』別巻） 毎日新聞社
- 内藤 昌・大野耕嗣・中村利則 1971 「聚楽第：武家地の建築：近世都市図屏風の建築的研究：洛中洛外図・その 2」『日本建築学会論文報告集』 180 pp. 61-71, 76

- 成瀬晃司 2004 「総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 pp. 67-72
- 成瀬晃司 2008 「白山御殿の惣囲いについて」『総合研究棟小石川分館地点発掘調査報告』 東京大学埋蔵文化財調査室 pp. 171-184
- 西川幸治 1972 『日本都市史研究』 日本放送出版協会
- 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5 東京考古談話会 pp. 133-160
- 橋口定志 1990 「中世東国の居館とその周辺 一南関東におけるいくつかの発掘調査事例から」『日本史研究』330 日本史研究会 pp. 70-97
- 橋口定志 2006 「武家の屋敷の境界施設のあり方をめぐって」『近世の屋敷境とその周辺』 四国城下町研究会 pp. 121-129
- 波多野 純 1996 『城郭・侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ（侍屋敷）』 至文堂
- 藤野 保・清水紘一 1994 『大村見聞集』 高科書店
- 藤本 強 1990 『埋もれた江戸』 平凡社
- 文京区遺跡調査会 1995 『原町遺跡－徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査』
- 文京区遺跡調査会 2000 『春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ 地点』
- 文京区遺跡調査会 2003 『白山御殿跡ほか』
- 文京区教育委員会 2015 『龍岡町遺跡第6 地点』
- 堀内秀樹 2011 「懷徳門地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7 pp. 60-67
- 丸山雍成 2007 『参勤交代』 吉川弘文館
- 宮崎勝美 1989 「江戸の武家屋敷地」『日本都市史入門 1 空間』 高橋康夫・吉田伸之編 東京大学出版会 pp. 85-106
- 宮崎勝美 1992 「江戸の土地－大名・幕臣の土地問題」吉田伸之編『日本の近世 9 都市の時代』 中央公論社 pp. 129-172
- 宮崎勝美 1994 「大名屋敷の境界装置－表長屋の成立とその機能－」宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷 空間と社会』 山川出版社 pp. 3-28
- 渡辺洋一 1987 「仙台藩江戸上屋敷略絵図」について『仙台郷土研究』復刊12 仙台郷土研究会 pp. 48-55

医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点出土

葦辺磯舟漁師蒔絵印籠の科学分析

四柳 嘉章・成瀬 晃司

はじめに

本資料は、医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点で検出されたSK423より出土した。かなり含水した状態で出土し、肉眼でも蒔絵及び塗膜に亀裂や剥離が認められることから、適切な保存処置を行う必要性があった。そこで後述する様に富山藩邸に帰属する遺物であることから、長年にわたり北陸の漆製品を研究されている四柳嘉章氏に蒔絵、塗膜の科学分析を保存処置前に依頼することとなった。本稿はその分析結果報告である。

1. 調査地点と出土遺構

(1) 調査地点の位置と現況

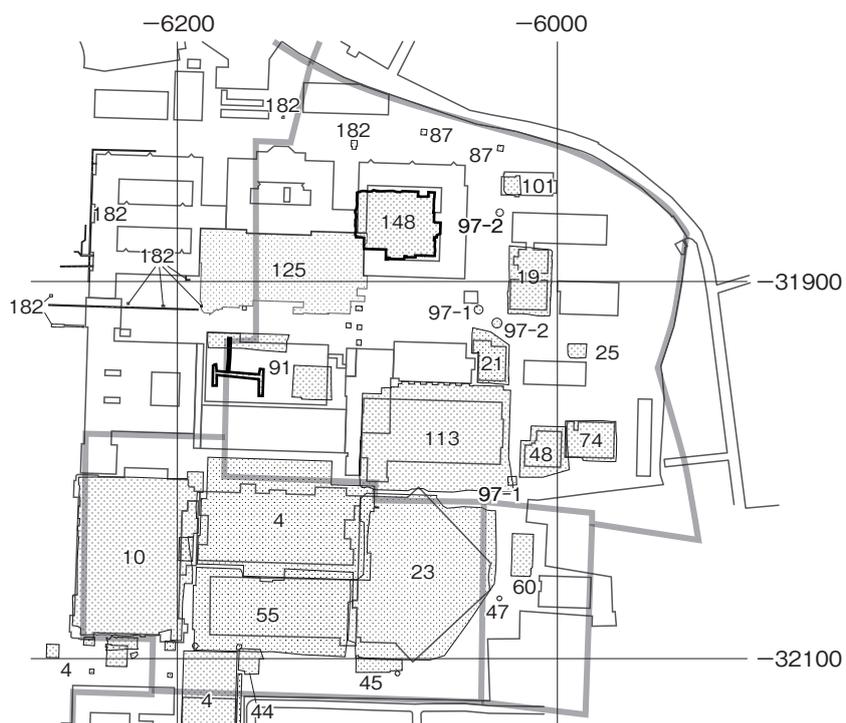
医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点は、同入院棟A地点の北側に隣接し(1図113)、現存建物解体および新営建物建設工程に従い、平成24年3月1日～11月30日に1次調査、平成25年8月19日～10月3日に2次調査、平成26年2月5日～翌27年2月19日に3次調査を実施した。本資料が出土したSK423は2次調査で検出された遺構である。

本地点は、文献史料の検討および絵図との対比から、寛永16(1639)年に加賀藩から分封した富山藩前田家の上屋敷内に比定される(1図)。富山藩江戸上屋敷に関する現存する絵図はいずれも19世紀代の様相を描いた資料で、それ以前の屋敷内構成の詳細は不明点が多い。但し藩邸絵図、江戸図などから表門が藩邸東南部に位置していたことが確認でき、本地点は御殿空間もしくはそれに近接した区域にあたるのが想定される。

SK423周辺は、中央棟解体を経て調査を実施したため、既存建物基礎による攪乱が深く入り、極めて遺存状況が悪い区域であった。そのため遺構密度は希薄で地下室、井戸などの大深度遺構が検出されずに過ぎない(2図)。特にSK423の検出面は中央棟フーチング基礎によって周囲より1m以上低い状況であった。本遺構東側に近在するSU426の検出面標高12.5mに対し本遺構は10.25mと2m以上の差がある。SU426は遺構形状と覆土最上部にロームブロックが認められたことから、天井が崩落した地下室と考えられ、遺存状況から本来の生活面は標高13m以上であったと推測される。

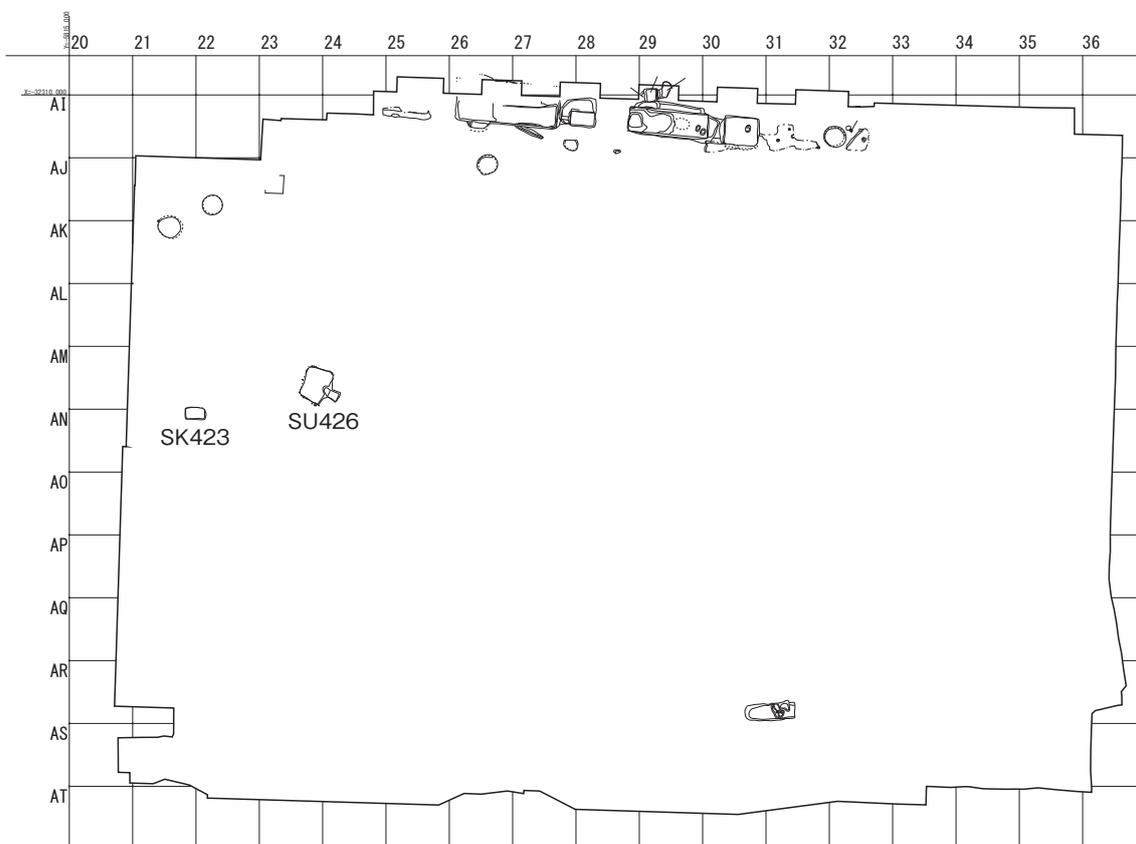
(2) SK423の状況

本遺構は東西170cm、南北100cmを測る不整長方形を呈する土坑で、確認面からの深さは185cmを測り、坑底標高は8.4mに達していた(3図)。そのため遺構壁面は水性化した灰白色を呈する粘質土であった。埋土の大半は瓦礫を含む焼土層が堆積し、火災による廃絶もしくは瓦礫処理に利用された遺構と位置づけられる。焼土層下からは楕円形と推定される桶杵状の木杵が炭化した状態で検出さ

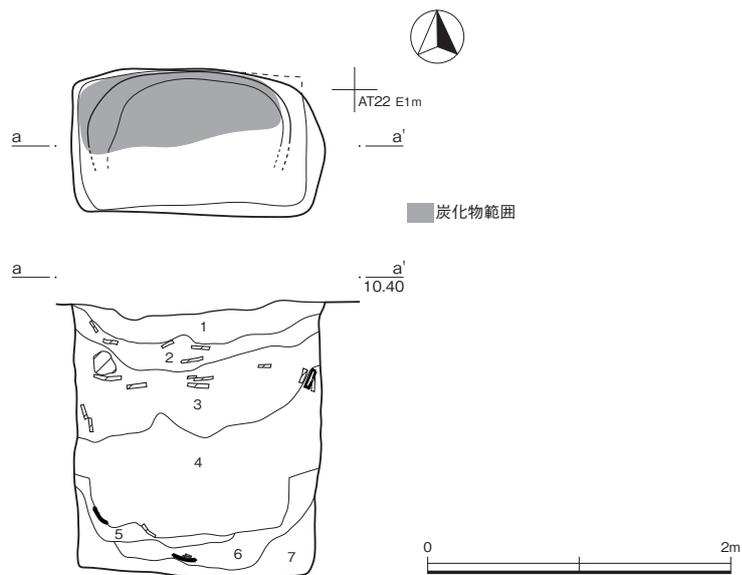


1図 調査地点の位置

113が調査地点、灰色線は藩邸境比定線



2図 入院棟Ⅱ期地点2次調査検出遺構位置図(1/600)



SK423

- 1 赤褐色土 (φ3~10mm 焼土ブロック極多量・炭化物少量・小円礫少量含、粘性弱、しまり強)
- 2 褐色土 (焼土ブロック・黄灰色粘土少量・炭化物少量含、粘性弱、しまり強)
- 3 赤褐色土 (φ3~5mm 焼土ブロック極多量含、粘性弱、しまり強)
- 4 褐色土 (φ3~5mm 焼土ブロック極多量・黄褐色砂粘土含、粘性・しまり弱)
- 5 暗茶褐色土 (焼土粒含、粘性強、しまり弱)
- 6 褐色土 (砂粒多量含、粘性強、しまりやや強)
- 7 淡褐色土 (黄白色砂粒含、粘性強、しまりやや強)



東西断面焼土堆積状況



木柁検出状況



木柁内遺物出土状況



完掘(南から)

3図 SK423



4 図 SK423 印籠

れた。木枠外側の埋土は砂粒を多量に含有する褐色土で、周辺地質の影響を受けた多水質の砂質粘土であった。木枠には底板はなく坑底にも木枠外側と同様の埋土が堆積していた。

先述した様に本遺構の坑底標高はSU426より約2m低く、当時の生活面からは3m以上の深度を有していたと考えられる。坑底付近に木枠が設置されていたことから水溜の可能性もある。富山藩邸内の調査では看護師宿舎地点などで(1図19)、確認面から2～3mの深さを測る掘方の坑底に木枠もしくは常滑産大甕を設置した水溜の検出例があるが、いずれも平面形は円形を呈しており、本遺構のような不整長方形を呈するケースは類似例がなく、遺構の性格には今後更なる検討を行う必要がある。

さて、5、6層の直上および層中から火災以前に廃棄された遺物が出土した。多水質の埋土環境から木製品も比較的良好的な状態で遺存しており、本資料もその一つである(4図)。木製品以外では寛永通宝、かわらけ、肥前産白磁うがい茶碗、京都・信楽産平碗、肥前産染付変形鉢筒形鉢が出土している。この変形鉢筒形と同一製品が、大聖寺藩邸に位置する中央診療棟地点(1図4)L32-1から出土している。L32-1は天和2(1682)年の火災廃棄資料と評価され、さらにこの変形鉢筒形は近年の研究成果から、1650年代に有田岩谷川内で生産された藩窯製品と評価されている。

このように坑底付近から出土した遺物の年代観が17世紀後半を示していることから、その直上に堆積した焼土層は、天和2(1682)年もしくはそれに次ぐ元禄16(1703)年の藩邸火災時の瓦礫整理に比定することができる。また女性の使用が推測されるうがい茶碗、上質な京都・信楽産平碗が共伴することや焼土層に多量の瓦が含まれていることから、御殿空間内からの廃棄資料と推測される。従って本資料も17世紀後半の富山藩邸御殿空間内に居住した人物の所持品と推定される。(成瀬)

2. 印籠の表面観察と構造

形状 (5 図)

5段重ね(含蓋蔓)と考えられる側面長方形、真上断面杏仁形で、側面左右に紐通しが付く曲物造りの印籠。木胎(樹種未同定)で内面の立上りは、薄く剥いだ針葉樹(檜?)。最上段(蓋鬘、天)と最下段(底、地)は頂部と底部が丸い甲盛り。各段は天部を蓋蔓、それ以下を1段、3段と数え、4段の下が底(地部)。サイズは4段目の横幅(現存)3.8cm、高さは立上りを入れて2.7cm(立上り0.9cm、胴1.6cm)。2・3段は胴部分で横幅4.3cm、高さ1.5cmほどである。各段の外側(胴)を傍(がわ)、内面は規と呼ばれている¹⁾。

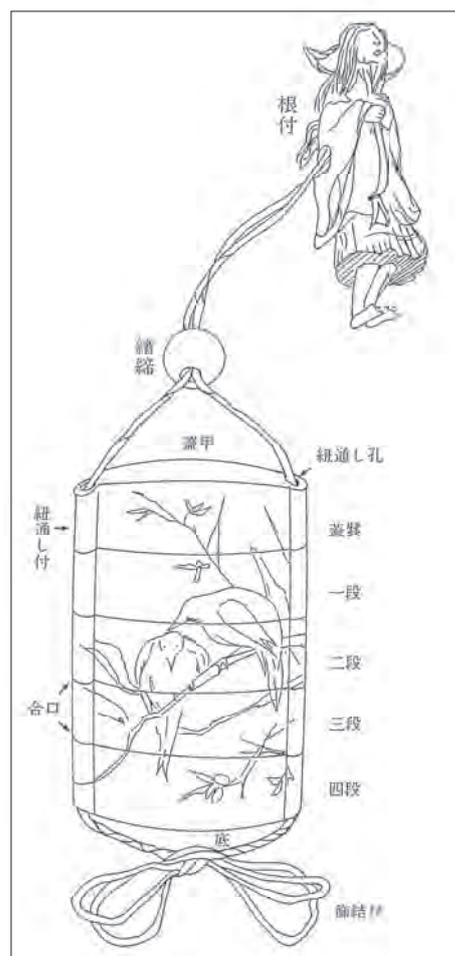
蒔絵 (図版1・2)

本例を特徴づけるのは平蒔絵(平粉)による4段目の加飾で、意匠は「葦辺磯舟漁師蒔絵」とした。4段部分は菅笠を被った漁師の右手には網籠、腰に魚籠を付けている。土坡には1mm弱の丸い象嵌剥離痕(図版2-3)がある。珊瑚などが嵌め込まれていたものであろう。2段、3段部分の片面には葦の蒔絵がある。

平粉の下に見られる赤色(図版2・3・4-1・2)は、蒔絵を描く際の絵漆(下付け漆)の顔料がベンガラであることによる。なお、平粉と判断したのは、粉の周囲が平目粉のように丸くなく、ギザギザを呈していること、すなわち平粉の特徴である鑊粉の微細な粒子であることによる(図版4-2、径5~15 μm)。

立上り部 (図版3-1~3、4-1)

ベンガラのいわば下付け漆塗りの上に粗い鉾物粒子が蒔かれ、さらに金箔押しされている(図版3-2・3、4-1)。それは鉾物粒子の凸部だけに金箔が付着していることから説明できる(平粉や消し粉であれば凹部にもはまり込んでいる)。口唇部は平粉による、「いっかけ」となっている(図版3-2上部)。



5 図 印籠の各部名称 荒川浩和(編)

『印籠と根付』(日本の美術第195号) 至文堂 1982

髹漆（図版1・2、4-3～5）

内外面総黒色漆塗り。一見すると黒色地の外面全体に梨地粉が蒔かれたようだが、実は無数の塗膜亀裂痕（最大3mm）で、下地の鉍物粒子があたかも浮き上がったように見える（図版2-1）。土中の鉍物粒子が食い込んでいる部分もある。この凹部に油煙を埋めて修理しているが、研ぎによって表面の漆が削られている部分もある（図版4-4）。修理しても全体に凹凸があり、入念な研ぎが施されていない（塗膜分析参照）。

なお、内面の塗り（黒色）は印籠が土圧で潰れているため詳細な観察はできないが、下地がなく数層の漆塗りだけではないだろうか。

3. 分析方法と結果

塗膜の下に隠された塗装工程、材料などの解明には、光学顕微鏡による塗膜構造分析（塗膜分析と略）、塗料（膠着液）の同定は赤外分光分析を実施した。本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うこととし、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

①赤色漆

赤色の主な顔料である朱（HgS）やベンガラ（Fe₂O₃）が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定済みの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

②黒色漆と黒色系漆

黒色の顔料である炭素粒子や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、まぎらわしいが黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるからである。近年の筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、技術や材料科学の上からも両者の区別が必要である。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者を含んだもの）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

③下地の分類—漆下地と渋下地

一般の粗い鉍物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。参考までに炭粉粒子は下記のように3分類するが、本例の油煙は、細粒よりもより細かい（0.1 μm 以下）均一な微細粒子である。

細粒…破碎工程が中粒炭粉より細かく炭粉粒子は均一で、針葉樹などの木口の放射組織の形状をとどめないもの。

中粒…炭粉粒子は1～2 μm × 5～10 μm 程度の針状粒子と長径5 μm 前後の多角形粒子などからなり、木口の放射組織の形状が一部にしか認められないもの。

粗粒…破碎工程が粗く木口の放射組織の形状を各所にとどめるもの。炭粉粒子は不均一で各種形状のものを含み、長径30 μm 前後の針状ないし棒状粒子を含むことが多い。

A. 塗膜分析

漆や下地材料の同定を行う塗膜分析は、漆器の内外面数箇所から数mmの塗膜片を採取し実体顕微鏡で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（# 100～3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法。以下、下地から順に番号（①～）を付して説明する。

(1) 蒔絵の加飾がある4段目の黒色漆塗膜（外側塗膜）A（図版4-1）

①地の粉（鉍物）漆下地層。層厚70～150 μm。石英・長石・有色鉍物などからなる。大きなものは長径64 μm、平均24 μm。②黒色漆層。層厚50 μm 前後。黒色顔料の油煙が沈殿（5～7 μm）。③漆層。層厚70 μm 前後。④層厚25 μm 前後。表層2～3 μm が変質。⑤漆層。層厚17 μm 前後。表層2～3 μm が変質。

(2) 黒色漆塗膜（外側塗膜）B（図版4-4）

①白色鉍物層。層厚不明。顕微鏡下では白色で漆分は確認できない。赤外線吸収スペクトルではカオリンの吸収のみで、膠や柿渋は認められなかった。触れるとさらさらと取れることから、下地ではなく地山ないし包含層の付着物と判断した。②黒色漆層。層厚30～27 μm。下部に油煙が沈殿（7 μm）。③上塗り漆の亀裂を埋めるために、油煙粒子でレンズ状に埋めた後補の層。最大層厚100 μm。別のサンプルではレンズ状油煙層が互層になっているケースもあった。④漆層。最大層厚50 μm 前後。レンズ状の油煙を埋めるための漆層であるが、油煙層上面は研ぎによって漆が削り取られている。

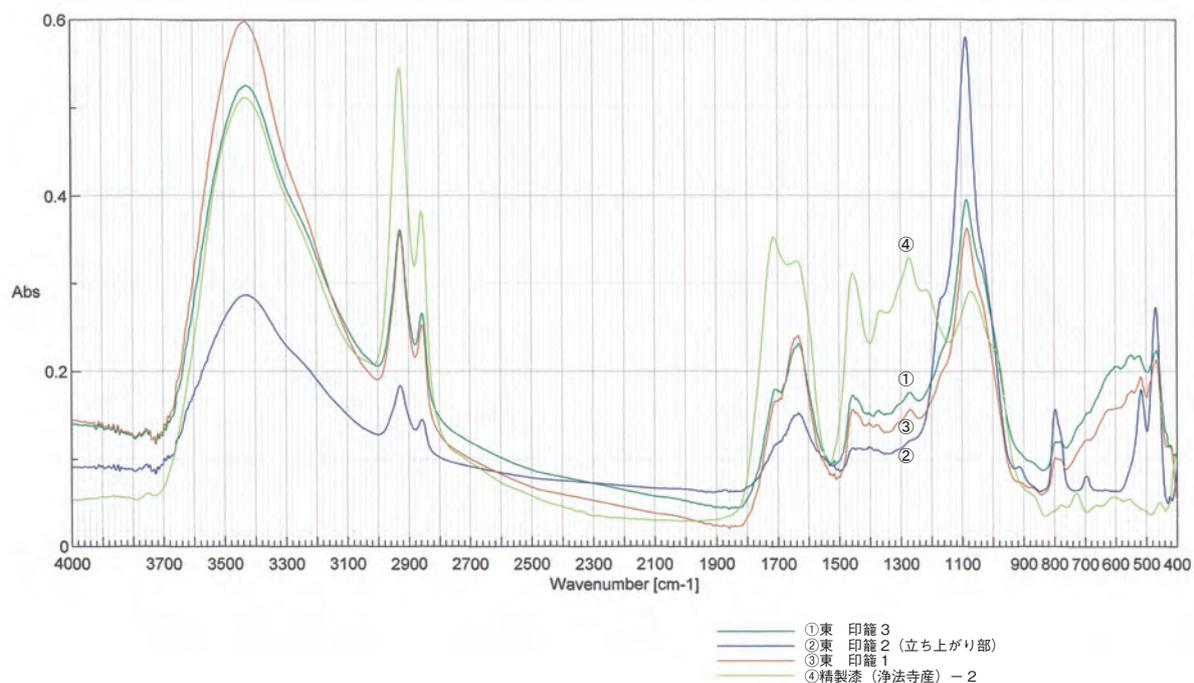
(3) 底部（外側塗膜）（図版4-5）

①白色鉍物下地層。層厚不明。（2）に同じ。②黒色漆層。層厚29 μm 前後。下部に油煙が沈殿（7 μm）。③上塗り漆の亀裂を埋めるために、油煙粒子でレンズ状に埋めた後補の層。最大層厚80 μm 前後、最大幅490 μm。④漆層。層厚49～90 μm。レンズ状の油煙を埋めるための漆層。（2）と違って漆層がレンズ状油煙を覆っている。逆に底部は研ぎが施されていなかったということになる。

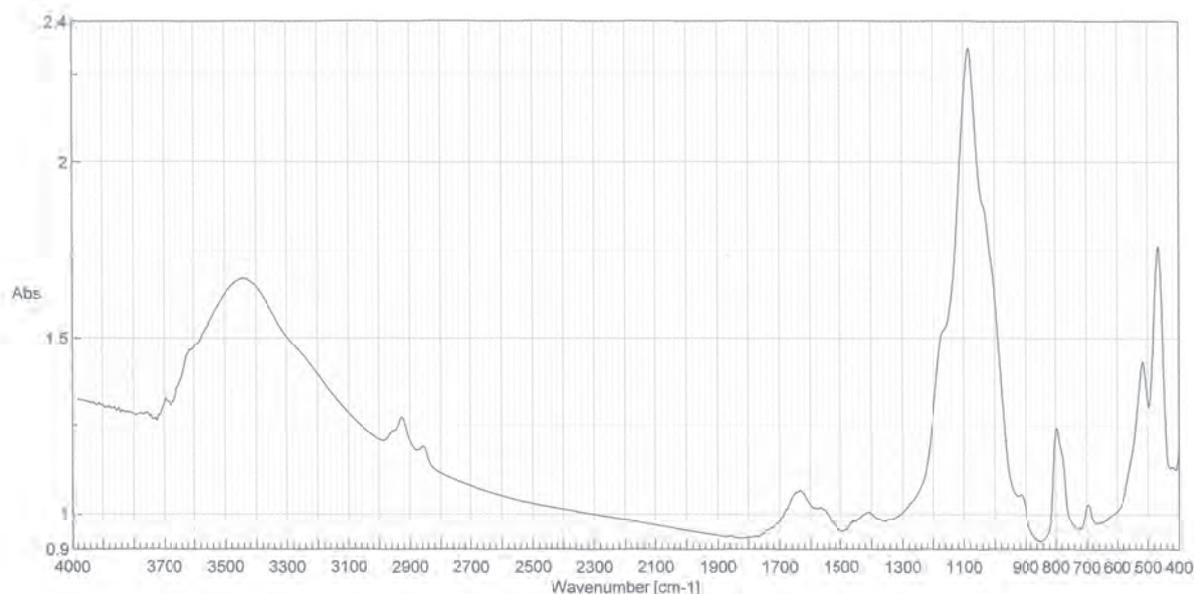
B. 赤外分光分析

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）を用いる。分光学は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」であり、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法という。

赤外光は近赤外（波数14000～4000cm⁻¹、波長700nm～2.5 μm）、普通赤外（波数4000～400cm⁻¹、波長2.5～25 μm）、遠赤外（波数400～10cm⁻¹、波長25 μm～1 mm）に分けられるが、ここでは通常赤外光を用いる。波数は1 cm 当たりの波の数で、振動数を光速度で割ったものであり、波長の逆数である（測定機器は日本分光製FT-IR4200）。試料は2 mgを採取しKBr（臭化カリウム）100mgをメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものをを用いた（錠剤法）。条件は分解能4 cm⁻¹、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。5・6図はその赤外線吸収スペクトルで、



6 図 印籠各部漆塗膜の赤外線吸収スペクトル



7 図 印籠付着の白色鉱物の赤外線吸収スペクトル

縦軸は吸光度 (Abs)、横軸は波数 (カイザー) である。

6 図は上塗漆塗膜 (ノーマライズ) の赤外線吸収スペクトルで、漆の基準データは岩手県浄法寺産精製漆 (④)。①③は $1400\text{cm}^{-1} \sim 1364\text{cm}^{-1}$ がブロードとなっているが、全体として 2925cm^{-1} (炭化水素の非対称伸縮振動)、 2850cm^{-1} (炭化水素の対称伸縮振動)、 $1720 \sim 1710\text{cm}^{-1}$ (カルボニル基)、 $1630 \sim 1620\text{cm}^{-1}$ (糖タンパク)、 1465cm^{-1} (活性メチレン基)、 1280cm^{-1} (フェノール)、 $1070 \sim 1030\text{cm}^{-1}$ (ゴム質) の吸収からみて、漆塗膜と判断される。②は $1465\text{cm}^{-1} \sim 1364\text{cm}^{-1}$ がブロードとなり、 $1070 \sim 1030\text{cm}^{-1}$ (ゴム質) の吸収が著しい劣化漆の特徴を有する。①③においてもゴム質の吸収が増大しており劣化の進行が確認できる。

劣化の進行要因については、屋外で頻繁に使用されたものであれば、 2925cm^{-1} (炭化水素の非対

称伸縮振動)、 2850cm^{-1} (炭化水素の対称伸縮振動) の吸収が減少し、逆に $1720 \sim 1710\text{cm}^{-1}$ (カルボニル基) の吸収は増大する傾向 (紫外線劣化) があるが、本例はそこまで極端ではない。

7 図は図版 4 に見られる塗膜最下層の下地にあたる白色鉍物の赤外線吸収スペクトル。触れるとさらさらと取れることから、下地ではなく地山ないし包含層の付着物と思われたが、念のために膠着物の有無を確認した。結果、カオリンの吸収のみで、膠や柿渋などの膠着物は一切認められなかった。

終わりに

以上、東京大学本郷構内遺跡である医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点 2 次調査出土の「葦辺磯舟漁師蒔絵印籠」の科学分析結果を報告してきた。調査地点は富山藩関連の遺構が検出されており、印籠は土坑 SK423 出土品で、時期的には 17 世紀第 3 四半期と考えられている²⁾。時期的定点がわかる印籠としては重要である。

本例は油煙による修復法を明らかにしたこと、立上り部は保存を考慮して表面を金属及び実態顕微鏡観察から考察したが、ベンガラ漆 + 鉍物粒子 + 金箔押しの技法であること、意匠は平蒔絵による葦辺磯舟漁師蒔絵であること等を報告してきた。当該期を含めて印籠そのものの科学分析例は極めて少ないので、今後の研究に資する部分が大いと思われる。分析の機会を与えていただいた東京大学埋蔵文化財調査室の清水 香氏に厚く御礼申し上げます。 (四柳)

【註】

- 1) 荒川浩和編 1982『印籠と根付』(日本の美術第 195 号) 至文堂
- 2) 成瀬浩司・香取祐一 2017「本郷 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期 2 次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10 東京大学埋蔵文化財調査室

【参考文献】

- 大阪市立美術館監修 1976『カザールコレクション—印籠』芸艸堂
レイモンド・ブッシュェル・御子柴 操訳 1979『印籠』淡交社
トルーデル＝クレフィシュ 1984『シャンプー・コレクション 印籠』京都書院
柳 禮子 1992『印籠・根付』印籠美術館
清水久美子・阿部万里江 2012「江戸時代における印籠のデザインについて - 前・中期を中心に -」『同志社女子大学 学術研究年報』第 63 卷

図版 1



4段
葦辺磯舟漁師蒔絵
正面
左側土坡に
象嵌剥離痕

1



同上裏面

右側土坡に
象嵌剥離痕

0 3cm 2



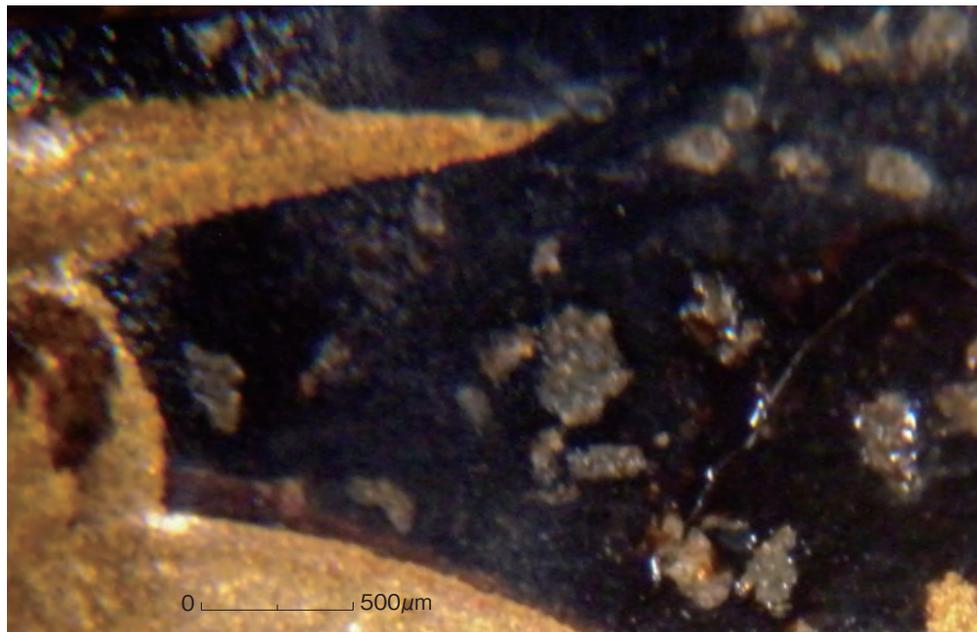
2・3段
左側に葦蒔絵
—— 合口部分

全体に梨地のような
塗膜亀裂痕がみ
られる。

3

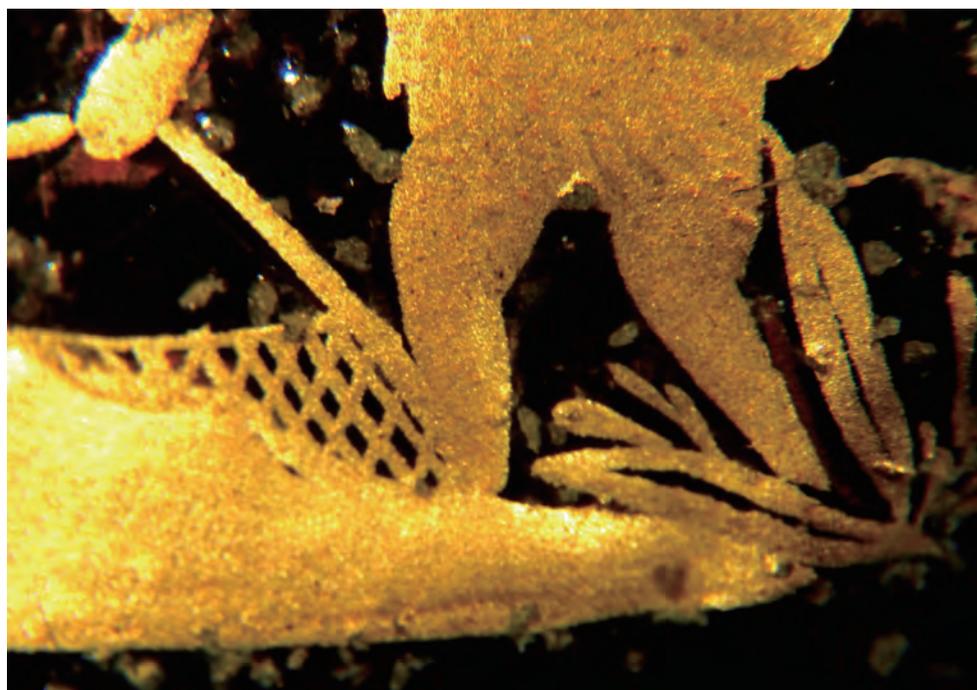
実体顕微鏡写真

図版 2



全体に塗膜亀裂痕がみられる。

1 ×40



平粉の下の赤色粒子は、蒔絵を描く絵漆の顔料がベンガラであることによる。

2 ×10



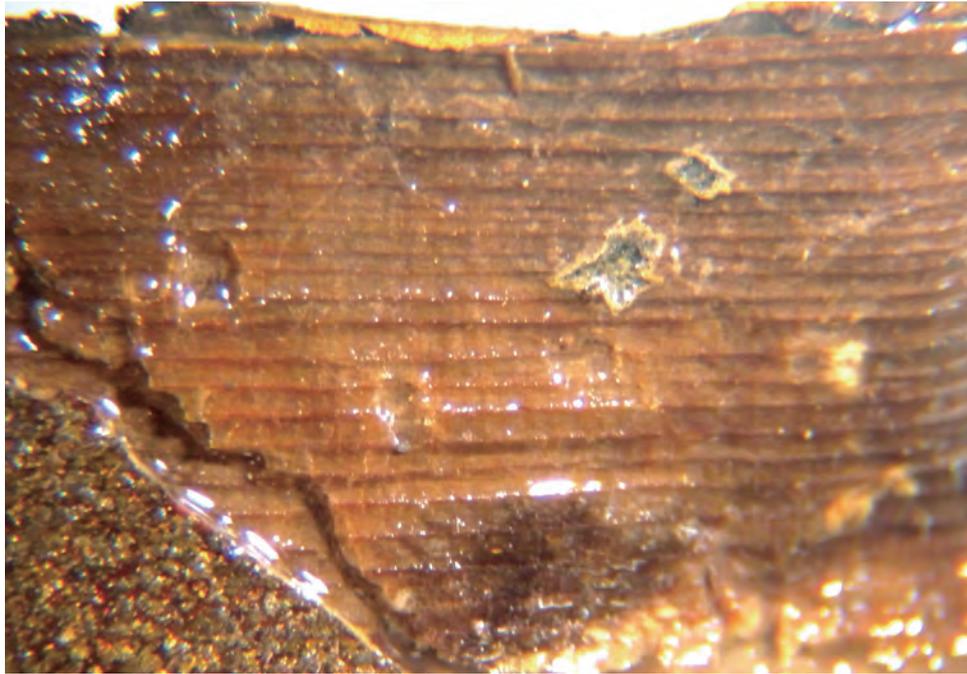
○の部分は象嵌物（珊瑚？）の剥離痕。

3 ×10

0 2mm

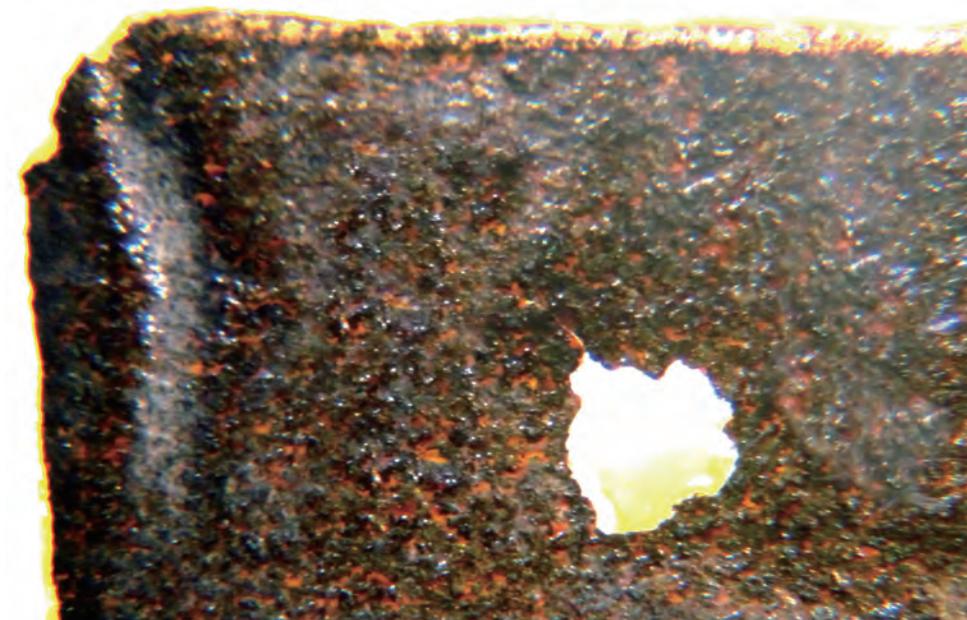
実体顕微鏡写真

図版 3



立ちあがり部
(曲物)
全体に塗膜が剥離。
左下に塗膜が残る。

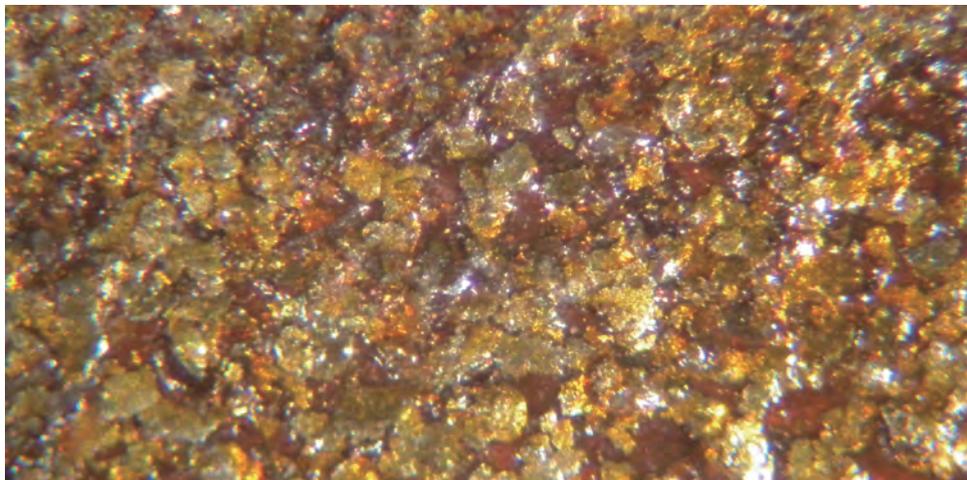
1 ×10



同上
立ちあがり部の
塗膜。
上部の口唇部に
消し粉が施されて
いる (いっかけ)。
赤色地はベンガラ
漆。

2 ×10

0 ───────── 2mm



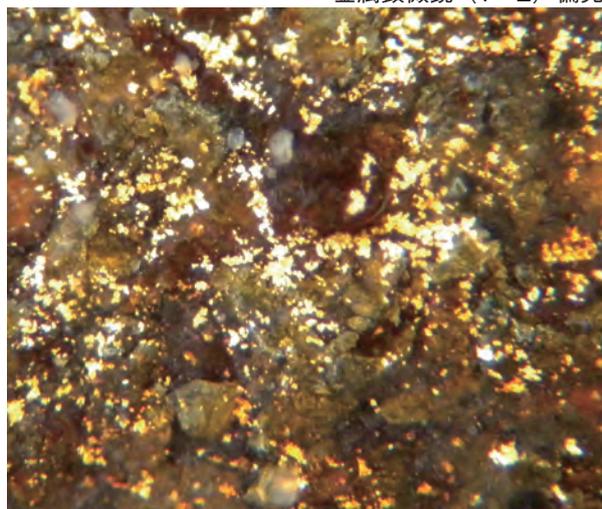
同上
塗膜部分の拡大。
鋳物が蒔かれ、
更に金箔押し。

3 ×40

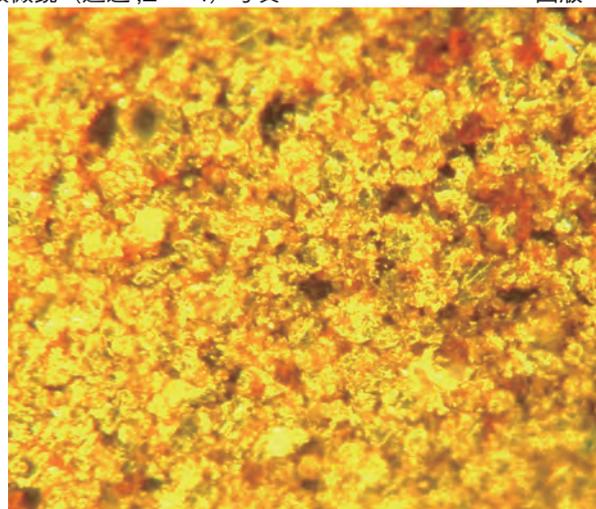
0 ───────── 500μm

金属顕微鏡 (1・2) 偏光顕微鏡 (透過, 2~4) 写真

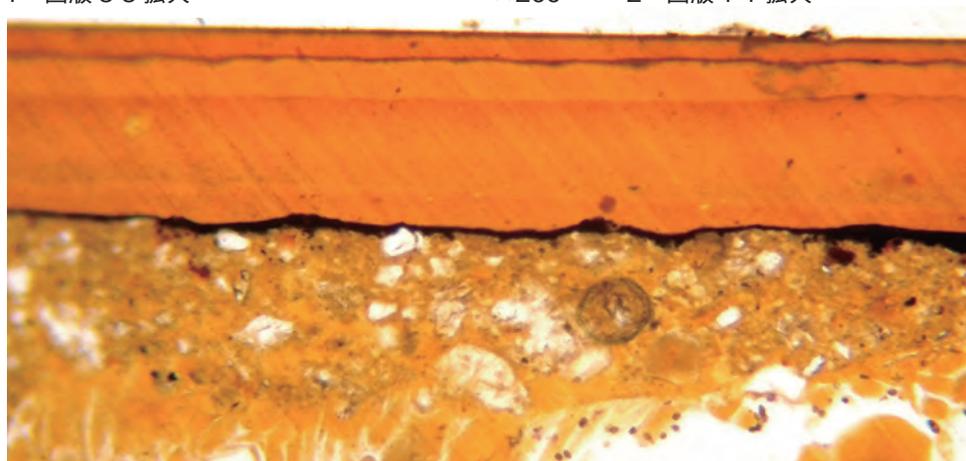
図版 4



1 図版 3-3 拡大 ×200



2 図版 1-1 拡大 ×200



3 4段目の塗膜断面 A ×200



4 4段目の塗膜断面 B ×200



5 底部の塗膜断面 ×200

医学部附属病院入院棟 A 地点

SK3 遺構出土漆製品の実証的研究

武田 昭子・渡部マリカ

1. 研究目的

江戸時代は、経済の発展に伴い漆器産業が多様化し、藩単位で漆器産業を保護、奨励するなど、現代の地方の漆器産地はこの時期に始まっている。漆器製造技術が頂点に達したとされる一方で、製造コストや時間を削減し、大量に生産するための様々な工夫がなされた。近年、泥炭地の発掘や都市の再開発に伴う発掘調査により、近世の遺跡から漆製品がこれまでになく出土したことで、多数の日常に使用する漆製品の存在が確認され、研究が行われるようになった。しかし、近世の遺跡から出土した漆製品のうち飲食器である椀類や杯に対しては、器形分類を中心とした考古学的な研究と若干の科学研究はなされていたが、詳細な科学的調査を踏まえた研究は、出土資料の増加に比べ、あまり進んでいないのが現状である。

本研究で調査を行った医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 は、加賀藩、大聖寺藩上屋敷に関連した大形遺構で、覆土に泥炭が含まれており、大量の木製品・漆製品が良好な状態で出土した（東京大学埋蔵文化財調査室 2016：223 頁、清水 2016：303-350 頁）。遺構の年代は、C 層整地面から掘削されていることから、上限は 1683（天和 3）年以降である。本遺構廃絶後、ローム土を主体とする盛土をして庭園が造営されている。庭園廃絶後はさらに盛り土造成されているが、その造成土中に元禄 16 年の火災に比定される焼土層があることから、下限は 1703（元禄 16）年以前と考えられる。なお、陶磁器の年代観により、1680 年代後半から 1690 年代前半頃までには埋め戻されたと推測される（成瀬 2003：17-34 頁）。

本研究では、SK3 遺構から出土した漆製品を対象に、目視観察および光学顕微鏡による断面観察を中心とした保存科学的手法を用いて、下地製作技法に焦点を絞り研究を進める。このため、作製した資料の断面薄片プレパラートと、現在入手可能な材料を使用した手板作製再現実験結果と比較しながら製作技術を検討すると共に、蛍光 X 線分析、EPMA 分析などの科学分析で材料の特定等を補完しながら行う。これより、本遺構から出土した漆製品の製作技法を明らかにし、江戸時代の漆器製作技法研究の一助にすることを目的とする。

2. 調査資料

東京大学医学部附属病院病棟建設地点 SK3 遺構から出土した漆製品で、椀、杯等の飲食具のうち、115 点について調査を行った。対象とした資料の器種および樹種を表 1 に示す。なお、樹種は東京大学埋蔵文化財調査室によって実施された樹種鑑定結果に拠る。

試料のサンプリングは、資料の残存状態が良く、東京大学埋蔵文化財調査室によって実測、写真撮影が行われていて資料性が明確なものから選択した。器種は偏ることがないように、できるだけ多くの器種からサンプリングを行った。試料は遺物の内面、外面より資料を損なわないよう注意しながら、

器種	樹種						計
	トチ	ブナ	ケヤキ	カツラ属	モクレン属	不明	
飯椀	10	10	2	1	1	0	24
汁椀	17	6	2	1	0	4	30
平椀	3	0	2	0	0	1	6
腰高	2	1	1	0	0	0	4
壺椀	3	0	4	0	0	1	8
杯	0	0	8	1	0	1	10
皿・鉢	0	0	1	0	0	0	1
飯汁椀蓋	14	9	2	0	0	1	26
壺平椀蓋	3	0	3	0	0	0	6
計	52	26	25	3	1	8	115

表 1 器種および樹種別調査資料数

検鏡に必要な量をメスやピンセットを使用し摘出した。器種の分類、表面色調、文様、法量は東京大学埋蔵文化財調査室による観察結果をそのまま使用した。本論での資料表記は、塗膜の分析No.で示す。

3. 調査方法

3.1 目視および光学顕微鏡による表面と断面の観察

塗膜の表裏面の調査は、目視と実体顕微鏡で行った。その後、塗膜の断面を調査するために、断面観察試料を作製し、光学顕微鏡で観察を行った。

断面観察試料は以下の方法で作製し、検鏡に供した。試料を樹脂型の底に垂直になるように固定し、低粘度エポキシ樹脂に包埋した。樹脂の硬化後、研磨機に耐水サンドペーパーをセットして500番から2000番まで適宜用いながら試料面を研磨した。その後、ダイヤモンドペースト3 μ m、1 μ mで研磨を行い、試料面を平滑に仕上げた。試料の断面を落射光で観察し、写真に記録した。

落射光観察後、スライドガラスに低粘度エポキシ樹脂で試料を接着し、エポキシ樹脂の完全硬化後、研磨機に耐水サンドペーパーをセットし、220番から2000番まで適宜用いながら、試料が透過光で観察可能になるまで研磨し、最後にダイヤモンドペースト1 μ mで研磨して仕上げた。研磨の終了した試料の上に低粘度エポキシ樹脂を滴下し、カバーガラスで覆った。断面薄片プレパラート作製後、透過光で生物顕微鏡、及び偏光顕微鏡で観察し、写真に記録した。

使用機種：ニコン製実体顕微鏡 SMZ-2T、ニコン製生物顕微鏡 OPTIPHOTO-2

ストルアス株式会社製自動研磨機 RotoPol-31, RdM-force-20

3.2 フーリエ変換赤外分光分析法による漆塗膜の同定

資料から抽出した塗膜が漆であるか同定するために、フーリエ変換赤外分光分析法（以下、FT-IR とする）による塗膜の分析を行った。測定は、島津製作所製フーリエ変換赤外分光光度計 FTIR-8000 に反射型ビームコンデンサ RBC-8000 を装着。直径 3mm のアルミニウム製ホルダーを使用した KBr 法で行った。測定範囲は、4600 ~ 400 cm^{-1} 、積算回数 400 回。試料が微量であったため、不純物を除去しないまま錠剤を調整、測定を実施した。標準試料として市販の日本産生漆を測定し、その赤外線吸収スペクトルと比較して同定を行った。分析試料は以下の 16 点（No.1 内外面、No.7 内外面、No.33 内面、No.70 内面、No.71 内面、No.101 外面、No.137 外面、No.149 内外面、No.182 外面、No.194 内外面、No.786 内外面）である。

3.3 蛍光 X 線分析法および X 線回折分析法による色材の同定

塗膜に含まれる色材の混和物を同定するため、蛍光 X 線分析法による元素分析および X 線回折分析法による形態分析を行った。蛍光 X 線分析法はフィリップス製全自動蛍光 X 線分析 MagixPRO を使用。X 線回折分析は、日本電子製 X 線回折装置 JDX-8P 型を使用し、ターゲットは Co ロングファインフォーカス (L.F.F. PW2286/20)、X 線強度は 40KVp、20mA、モノクロメーターで単色化。試料の同定は既知物質のデータ集である JCPDS カードとの比較による。分析試料は、断面観察結果より特徴が見られた試料 9 点（No.13 内面、No.39 外面、No.125 外面、No.135 外面、No.171 外面、No.242 外面、No.380 外面、No.606 外面、No.786 外面）とした。

3.4 エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザーによる色材の同定

エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（以下 EPMA）によって試料断面の元素分析が可能なることから、断面観察で上塗りが複数層確認された試料を中心に抽出し、上塗り層に含まれる色材の同定を行った。測定は、日本電子株式会社製 JXA 8800-R を使用し、加速電圧 20KV。分析試料は 7 点（No.33 内面、No.41 内面、No.60 内面、No.71 外面、No.72 外面、No.131 外面、No.155 内面）とした。

4. 調査結果

4.1 目視および光学顕微鏡による表面と断面観察結果

光学顕微鏡により調査した全試料の表面・断面の観察結果を表 2 にまとめた。本表の塗膜断面の記載内容については、「考察 6.2 下地および上塗り技法」に基づき記載した。また、本表は東京大学埋蔵文化財調査室によって実施された樹種鑑定結果によって得られた樹種毎に表記し、図版から樹種までの項目は同調査室が作成した表から転載した（清水 2016：319-324 頁）。全分析試料 115 点を、下地の使用材料、塗装順序、特徴的な上塗り、および樹種でみていくと、11 点の特徴的な試料がみられた。この結果と資料概要も含めて以下に記す。断面構造を説明するにあたっては、下地層「gl」、上塗り層「ul」、文様個所は「加飾層」とした。また、塗装の繰り返しは、塗装順にアラビア数字で記した。また、層の塗り重ねは「→」、材料の混和は「+」で表示した。

(1) 特徴的な層構成

- ① 繊維混和 → 砥粉 → 漆 → 赤色漆 → 赤色漆 (No.131 外面 a : 1-1 図)、切粉 → 砥粉 → 漆 → 砥粉 → 漆 → 赤色漆 → 赤色漆 (No.131 外面 b : 1-2 図)、切粉 → 砥粉 → 漆 → 赤色漆 → 赤色漆 (No.131 内面 : 1-3 図)

切粉→砥粉→黒色物質→漆→黒色物質→漆 (No. 131 高台：1-4 図) ケヤキ

- ・資料概要：D3 層より出土。胴部にかつらを持つ壺椀。内外面は赤色、高台内は黒色の地塗り。黒色に塗られた口縁には欠損があり、器全体が土圧により変形する。木胎はケヤキ。
- ・資料表面：内外面表面に変色が見られる。高台内の表面には付着物が見られる。
- ・内面断面：下地層 gl1. ～ gl2. 層、上塗り層 ul1. ～ ul3. 層からなる。gl1. 層は黄褐色を呈し、透明と黄褐色の粗い粒子と細かい鉍物粒子が混和されている。gl2. 層は細かい鉍物粒子が混和された薄い層。ul1. 層は漆の薄層で、ul2.、ul3. 層は同様な赤色を呈し、黄褐色の漆層の中に赤色の粗い粒子と細かい粒子が混和されている。上端は平滑で、ごく薄い黒色が見られる。
- ・外面断面 (a,b)：a. 下地層 gl1. ～ gl2. 層、上塗り層 ul1. ～ ul3. 層からなる。gl1. 層は黄褐色を呈し、層中に楕円形の植物繊維の断面や黒色の粒子が見られる。gl2. 層は淡褐色を呈し、透明と淡褐色の細かい鉍物粒子が混和されている。ul1. 層は漆の薄層で、ul2. 層、ul3. 層は同様な赤色を呈し、黄褐色の漆層の中に赤色の粗い粒子と細かい粒子が混和されている。上端は平滑で変色が見られる。
- b. 下地層 gl1. ～ gl4. 層、上塗り層 ul1. ～ ul3. 層からなる。gl1. 層は褐色を呈し、透明と黄褐色の粗い粒子と細かい鉍物粒子が混和されている。gl2. 層は淡褐色を呈し、透明と淡褐色の細かい鉍物粒子が混和された層。gl3. 層は褐色の漆層。gl4. 層は淡褐色を呈し、透明と淡褐色の細かい鉍物粒子が混和された層。ul1. 層は漆の薄層で、ul2. 層、ul3. 層は同様な赤色を呈し、黄褐色の漆層の中に赤色の粗い粒子と細かい粒子が混和されている。上端は平滑で変色が見られる。
- ・高台内断面：下地層 gl1. 層、上塗り層 ul1. ～ ul5. 層からなる。gl1. 層は黄褐色を呈し、透明と黄褐色の粗い粒子と細かい鉍物粒子が混和され、所々に空隙がある。ul1. 層は、黒色物質を密に含む薄層。ul2. 層は黄褐色を呈する漆の薄層。ul3. は黄褐色を呈する漆層。ul4. 層は黒色物質を密に含む薄層で、ul1. 層より薄い。ul5. 層は黄褐色を呈する漆層。

②切粉→砥粉→黒色物質→漆 (No. 194 内外面：2-1、2-2 図) ケヤキ

- ・資料概要：D4 層より出土。丸型の椀。内面黒色、外面黒色の地塗り。高台、口縁は欠失している。胴部の一部は割損し 2 個片で保存。木胎はケヤキ。
- ・資料表面：表面は内外面ともに平滑であるが、付着物が認められる。
- ・内外面断面：内面、外面の断面は共に同様な塗膜構造であるが、下地の厚さが外面は内面の約 2 倍となっている。層構成は下地層 gl1. ～ gl2.、上塗り層 ul1. ～ ul2. からなる。gl1. 層は黄褐色を呈し、鉍物粒子が混和され、100 μm 前後の比較的粗い粒子も見られる。gl2. 層は黄褐色を呈し鉍物粒子が混和されているが gl1. 層よりも粒子は細かく、粗くても約 25 μm である。gl1. 層と gl2. 層の境は不明瞭。ul1. 層は黒色を呈し、黒色物質を密に混和する薄層で、不均一である。ul2. は黄褐色を呈し、層中に混和物は認められない。上端は平滑だが、表層に変色が見られる。

③切粉→砥粉→赤色漆 (No. 197 内外面：3-1、3-2 図) ケヤキ

- ・資料概要：D4 層より出土。胴部に隆起線の加飾のある平椀。内外面赤色の地塗り、口縁は黒色に塗られている。木胎はケヤキ。
- ・資料表面：内面表面には、変色が見られる部分がある。外面表面は、付着物に覆われている。裏面には内外面ともに黄銅色の粒子が見られる。
- ・内外面断面：内面、外面の断面は共に同様な塗膜構造で、下地の厚さもほぼ同じである。層構成は下地層 gl1. ～ gl2.、上塗り層 ul1. からなる。gl1. 層は淡褐色を呈し鉍物粒子が混和され、微細なものから粗い 100 μm 以上の粒子も混在。gl2. 層は黄褐色を呈し、鉍物粒子が混和されているが、gl1. 層のような大きな粒子はみられず、微細な粒子のみからなる。ul1. 層は赤色を呈する漆層で赤

分析 No.	内面		外面		備考	図版 No.	遺物 No.	層位	器種	塗り(色調)			文様(色調)、文様単位	分析No. (樹種)	樹種
	下地層	上塗層	下地層	上塗層						内面	外面	高台・描み内			
001	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-162	219	一括	飯椀	赤色	黒色		TKU-663	トチノキ	
004	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-164	266	一括	汁椀	赤色	黒色		TKU-936	トチノキ	
006	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆、黒色加飾層		IV-161	207	一括	飯椀	赤色	赤色		TKU-655	トチノキ	
007	g11. 切粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆、u13. 赤色漆	g11. 布着せ、g12. 炭粉下地、g13. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆、赤色加飾層		IV-164	263	一括	汁椀	赤色	黒色		TKU-656	トチノキ	
012	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-164	269	一括	汁椀	黒色	黒色		TKU-659	トチノキ	
013	g11. 炭粉下地	u11. 細粒の赤色物質を含む漆層	g11. 炭粉下地	u11. 細粒の赤色物質を含む漆層	内面u11.にFe ₂ O ₃ を抽出	IV-164	262	一括	汁椀	茶色	茶色		TKU-938	トチノキ	
020	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地、u11. 漆	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆		IV-168	371	一括	飯椀・汁椀蓋	黒色	黒色		TKU-661	トチノキ	
035	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-165	296	一括	平椀	黒色	黒色		TKU-665	トチノキ	
039	g11. 炭粉下地	u11. 細粒の赤色物質を含む漆層	g11. 炭粉下地	u11. 細粒の赤色物質を含む漆層	外面u11.にFe ₂ O ₃ を抽出	IV-169	384	一括	蓋椀・平椀蓋	茶色	茶色		TKU-667	トチノキ	
044	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-166	321	一括	飯椀・汁椀蓋	赤色	黒色		TKU-951	トチノキ	
045	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-169	375	一括	飯椀・汁椀蓋	茶色	茶色		TKU-952	トチノキ	
062	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆		IV-164	268	D2	汁椀	赤色	赤色		TKU-963	トチノキ	
065	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆		IV-164	272	D2	汁椀	赤色	赤色		TKU-672	トチノキ	
070	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-165	299	D2	腰高	赤色	黒色		TKU-673	トチノキ	
090	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆、u12. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-163	230	D3	汁椀	赤色	黒色		TKU-977	トチノキ	
102	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-164	258	D3	汁椀	赤色	黒色		TKU-988	トチノキ	
110	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆		IV-164	271	D3	汁椀	赤色	赤色		TKU-990	トチノキ	
114	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆、黒色加飾層		IV-161	204	D3	飯椀	赤色	赤色		TKU-680	トチノキ	
121	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-161	197	D3	飯椀	赤色	黒色		TKU-681	トチノキ	
123	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-162	213	D3	飯椀	黒色	黒色	口唇部赤色	TKU-999	トチノキ	
125	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆	外面u11.にFeを抽出	IV-165	297	D3	腰高	赤色	黒色		TKU-683	トチノキ	
129	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-165	294	D3	平椀	赤色	黒色		TKU-687	トチノキ	
130	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-165	289	D3	蓋椀	赤色	黒色		TKU-688	トチノキ	
132	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-165	288	D3	蓋椀	赤色	黒色		TKU-690	トチノキ	
133	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、u12. 漆		IV-165	286	D3	蓋椀	赤色	黒色		TKU-691	トチノキ	
140	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-168	358	D3	飯椀・汁椀蓋	赤色	黒色		TKU-1000	トチノキ	

表 2 塗膜断面観察結果(1)

分析 No.	内面		外面		備考	図版 No.	遺物 No.	層位	器種	塗り (色調)			分析No. (機種)	樹種
	下地層	上塗層	下地層	上塗層						内面	外面	高台・掘み内		
143	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-168	356	D3	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	TKU-697	トチノキ	
146	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆、赤色加飾層		IV-169	376	D3	飯碗・汁碗蓋	黒色	黒色	TKU-698	トチノキ	
149	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-166	315	D3	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	TKU-699	トチノキ	
154	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-167	336	D3	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	TKU-701	トチノキ	
169	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-161	206	D4	飯碗	赤色	黒色	TKU-705	トチノキ	
170	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-161	200	D4	飯碗	赤色	黒色	TKU-706	トチノキ	
171	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆	外面u11.にFeを抽出	IV-162	217	D4	飯碗	赤色	黒色	TKU-707	トチノキ	
179	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-164	267	D4	汁碗	赤色	茶色	TKU-1016	トチノキ	
186	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-163	241	D4	汁碗	赤色	黒色	TKU-1019	トチノキ	
187	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-163	232	D4	汁碗	黒色	黒色	TKU-1020	トチノキ	
188	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-163	239	D4	汁碗	赤色	黒色	TKU-713	トチノキ	
190	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-165	280	D4	汁碗	黒色	黒色	TKU-1021	トチノキ	
198	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆		IV-165	290	D4	平碗	赤色	黒色	TKU-716	トチノキ	
204	g11. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆	g11. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆		IV-169	386	D4	壺碗・平碗蓋	黒色	黒色	TKU-1028	トチノキ	
205	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-168	369	D4	飯碗・汁碗蓋	黒色	黒色	TKU-1029	トチノキ	
206	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-166	317	D4	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	TKU-1030	トチノキ	
208	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-167	340	D4	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	TKU-1032	トチノキ	
210	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	g11. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆		IV-169	385	D4	壺碗・平碗蓋	赤色	黒色	TKU-1034	トチノキ	
225	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-164	265	一括	汁碗	赤色	黒色	TKU-1041	トチノキ	
242	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層	外面u11.にFeを抽出	IV-162	215	一括	飯碗	赤色	黒色	TKU-720	トチノキ	
278	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-168	361	D2	飯碗・汁碗蓋	黒色	黒色	TKU-1045	トチノキ	
308	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-164	261	D3	汁碗	赤色	黒色	TKU-722	トチノキ	
332	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-164	252	D3	汁碗	赤色	黒色	TKU-723	トチノキ	
508	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-167	350	D2	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	TKU-727	トチノキ	
731	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-169	378	D4	飯碗・汁碗蓋	茶色	茶色	TKU-1066	トチノキ	
755	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆		IV-163	226	D4	飯碗	黒色	黒色	TKU-1067	トチノキ	
003	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-170	390	一括	飯碗	赤色	黒色	TKU-1069	ブナ属	

表 2 塗膜断面観察結果 (2)

分析 No.	内面			外面			備考	図版 No.	運物 No.	層位	器種	塗り(色調)			分析No. (樹種)	樹種
	下地層	上塗層	下地層	下地層	上塗層	内面						外面	高台・ 掘み内	その他		
009	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-163	229	一括	飯碗		赤色	黒色	TKU-657	ブナ属	
014	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆			IV-166	323	一括	飯碗・汁椀蓋		赤色	赤色	TKU-660	ブナ属	
032	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-165	298	一括	籠高		赤色	黒色	TKU-662	ブナ属	
051	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.緑色漆		高台内g11.炭粉下地/u11.黒色漆	IV-168	365	D1	飯碗・汁椀蓋		赤色	緑色	TKU-956	ブナ属	
055	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆、加飾層			IV-162	220	D2	飯碗		赤色	黒色	TKU-958	ブナ属	
056	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-160	177	D2	飯碗		赤色	黒色	TKU-670	ブナ属	
079	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-161	198	D3	飯碗		赤色	黒色	TKU-676	ブナ属	
096	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆、加飾層			IV-164	253	D3	汁椀		赤色	黒色	TKU-983	ブナ属	
101	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-163	233	D3	汁椀		赤色	黒色	TKU-677	ブナ属	
108	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆			IV-164	274	D3	汁椀		赤色	赤色	TKU-678	ブナ属	
112	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆、加飾層			IV-164	257	D3	汁椀		赤色	黒色	TKU-992	ブナ属	
113	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆			IV-166	330	D3	飯碗・汁椀蓋		赤色	赤色	TKU-679	ブナ属	
122	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-160	176	D3	飯碗		赤色	黒色	TKU-682	ブナ属	
141	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-166	312	D3	飯碗・汁椀蓋		赤色	黒色	TKU-696	ブナ属	
151	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆			IV-166	329	D3	飯碗・汁椀蓋		赤色	赤色	TKU-700	ブナ属	
166	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.緑色漆、黄色加飾層			IV-168	360	D2	飯碗・汁椀蓋		赤色	緑色	TKU-703	ブナ属	
173	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-160	175	D4	飯碗		赤色	黒色	TKU-704	ブナ属	
185	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆		高台内g11.炭粉下地/u11.漆	IV-160	189	D4	飯碗		赤色	赤色	TKU-711	ブナ属	
222	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.緑色漆		高台内g11.炭粉下地/u11.漆	IV-168	367	一括	飯碗・汁椀蓋		赤色	緑色	TKU-1038	ブナ属	
223	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.緑色漆		高台内g11.炭粉下地/u11.漆	IV-168	372	一括	飯碗・汁椀蓋		赤色	緑色	TKU-1039	ブナ属	
248	g11.炭粉下地	u11.漆	g11.炭粉下地	u11.漆			IV-161	203	一括	飯碗		黒色	黒色	TKU-721	ブナ属	
354	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆			IV-168	363	D4	飯碗・汁椀蓋		赤色	赤色	TKU-1052	ブナ属	
364	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.赤色漆			IV-160	178	D4	飯碗		赤色	黒色	TKU-724	ブナ属	
380	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.緑色漆		高台内g11.炭粉下地/u11.漆、外面u11.にSSを極出	IV-164	276	D4	汁椀		赤色	緑色	TKU-725	ブナ属	

表 2 塗膜断面観察結果(3)

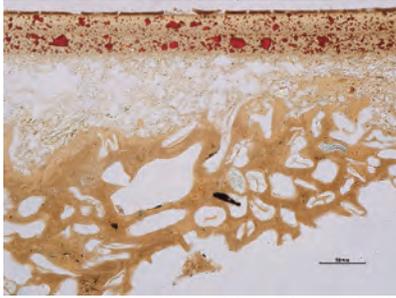
分析 No.	内面		外面		備考	図版 No.	遺物 No.	層位	器種	塗り (色調)			分析No. (樹種)	樹種
	下地層	上塗層	下地層	上塗層						内面	外面	高台・高み内		
606	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.緑色漆	高台内g11.炭粉下地/u11.漆	IV-171	413	D3	椀	赤色	緑色	黒色	TKU-729	ブナ瓜
034	g11.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-166	306	一括	杯	赤色	赤色	赤色	TKU-664	ケヤキ
040	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地、	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地、	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆		IV-169	379	一括	壺碗・平碗蓋	黒色	黒色	黒色	TKU-668	ケヤキ
041	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆	内面u11.にHgを検出	IV-166	319	一括	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	黒色	TKU-669	ケヤキ
060	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆、u12.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆、u12.赤色漆	内外面u11.、u12.にHgを検出	IV-166	301	D2	皿・鉢	赤色	赤色	赤色	TKU-671	ケヤキ
071	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.緑色漆	外面u12.にAs-sを検出	IV-165	282	D2	壺碗	赤色	緑色	緑色	TKU-674	ケヤキ
072	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.砥粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	外面u11.にFeを検出	IV-166	304	D2	杯	赤色	赤色	赤色	TKU-675	ケヤキ
089	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-163	238	D3	汁碗	赤色	赤色	赤色	TKU-976	ケヤキ
120	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地、g13.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-160	186	D3	飯碗	赤色	赤色	赤色	TKU-998	ケヤキ
126	g11.炭粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地	u11.漆		IV-165	300	D3	腰高	赤色	黒色	黒色	TKU-684	ケヤキ
127	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地、	u11.赤色漆	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地、	u11.赤色漆		IV-165	291	D3	平碗	赤色	赤色	赤色	TKU-685	ケヤキ
128	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆、u13.漆、u14.漆		IV-165	292	D3	平碗	黒色	黒色	黒色	TKU-686	ケヤキ
131	g11.植物繊維を含む層、g12.砥粉下地	u11.漆、u12.赤色漆、u13.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.漆、u12.赤色漆、u13.赤色漆	内面u12.にHgを検出	IV-165	283	D3	壺碗	赤色	赤色	黒色	TKU-689	ケヤキ
134	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆		IV-165	285	D3	壺碗	茶色	茶色	茶色	TKU-692	ケヤキ
135	g11.砥粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆、加飾層	g11.砥粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	外面u11.にFe ₂ O ₃ 、HgSを検出	IV-166	309	D3	杯	赤色	赤色	赤色	TKU-693	ケヤキ
136	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-166	307	D3	杯	赤色	赤色	赤色	TKU-694	ケヤキ
137	g11.砥粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆、加飾層	g11.砥粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-166	308	D3	杯	赤色	赤色	赤色	TKU-695	ケヤキ
155	g11.砥粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆、赤色加飾層	内面u11.にHgを検出	IV-167	351	D3	飯碗・汁碗蓋	赤色	黒色	黒色	TKU-702	ケヤキ
194	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆		IV-162	211	D4	飯碗	黒色	黒色	黒色	TKU-714	ケヤキ
197	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-165	293	D4	平碗	赤色	赤色	赤色	TKU-715	ケヤキ
199	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.切粉下地、g12.砥粉下地、g13.砥粉下地	u11.黒色物質を含む薄層、u12.漆		IV-165	284	D4	壺碗	赤色	黒色	黒色	TKU-717	ケヤキ
214	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-169	380	D4	壺碗・平碗蓋	赤色	赤色	赤色	TKU-1037	ケヤキ
221	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆	g11.炭粉下地、g12.砥粉下地	u11.赤色漆		IV-166	305	一括	杯	赤色	赤色	赤色	TKU-718	ケヤキ

表 2 塗膜断面観察結果 (4)

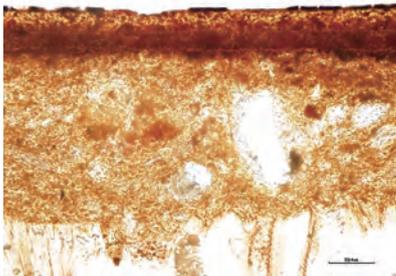
分析 No.	内面		外面		備考	図版 No.	遺物 No.	層位	器種	塗り (色調)			分析No (樹種)	樹種
	下地層	上塗層	下地層	上塗層						内面	外面	高台・描み内		
690	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆 加飾層	g11. 砥粉下地	u11. 赤色漆 加飾層		IV-166	311	D4	杯	赤色	赤色	口唇部金色	TKU-731	ケヤキ
713	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆		IV-163	243	D4	汁椀	黒色	黒色	口唇部赤色	TKU-1064	ケヤキ
786	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地、g13. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 赤色漆	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆、加飾層	外面u12. にFe ₂ O ₃ を抽出	IV-169	382	D2	壺	赤色	赤色	口唇部黒色	TKU-1068	ケヤキ
022	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-163	244	一括	汁椀	赤色	黒色		TKU-945	カツラ属
036	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地、g2. 砥粉下地	u11. 赤色漆		IV-166	303	一括	杯	赤色	赤色		TKU-666	カツラ属
174	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-160	182	D4	飯椀	赤色	黒色		TKU-1013	カツラ属
172	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆		IV-161	191	D4	飯椀	赤色	黒色		TKU-708	モクレン属
033	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	内外面u11. にHg検出	IV-166	310	一括	杯	赤色	赤色		TKU-663	×
178	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 緑色漆		IV-165	295	D4	平椀	赤色	緑色	高台内線刻「井」		
181	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、赤色加飾層		IV-164	264	D4	汁椀	赤色	黒色			
182	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆、u13. 黒色漆	g11. 切粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 黒色物質を含む薄層、u12. 漆、u13. 黒色漆		IV-165	277	D4	汁椀	黒色	黒色			
184	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地	u11. 赤色漆		IV-163	249	D4	汁椀	赤色	赤色	口唇部黒色、高台内銘「五十」(赤色)		
189	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆、加飾層		IV-165	279	D4	汁椀	茶色	茶色			
207	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆	g11. 炭粉下地、g12. 砥粉下地	u11. 赤色漆		IV-168	370	D4	飯椀・汁椀蓋	赤色	赤色		TKU-1031	×
645	g11. 炭粉下地	u11. 漆	g11. 炭粉下地	u11. 漆		IV-165	287	D3	壺	黒色	黒色	外面：雪輪 (灰色)		

表 2 塗膜断面観察結果 (5)

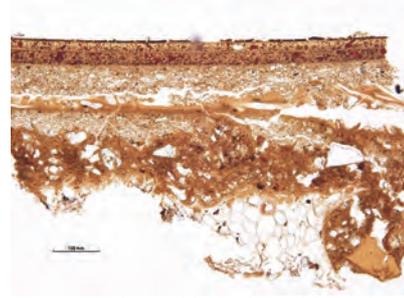
①No.131 ケヤキ



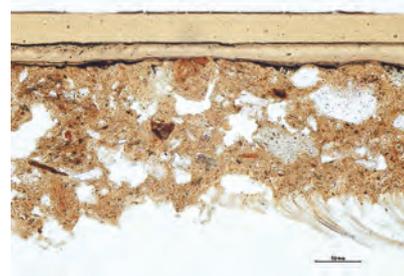
1-1 図 繊維混和→砥粉→漆→赤色漆
→赤色漆 (外面 a)



1-3 図 切粉→砥粉→漆→赤色漆→
赤色漆 (内面)



1-2 図 切粉→砥粉→漆→砥粉→漆→
赤色漆→赤色漆 (外面 b)

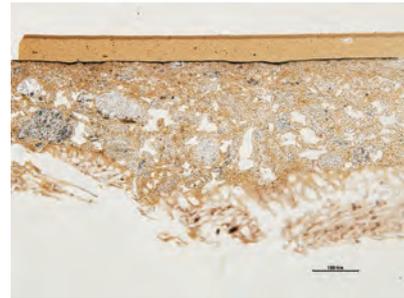


1-4 図 切粉→砥粉→黒色物質→漆→
黒色物質→漆 (高台)

②No.194 ケヤキ



2-1 図 切粉→砥粉→黒色物質→漆
(外面)

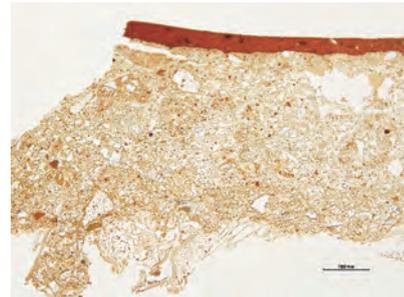


2-2 図 切粉→砥粉→黒色物質→漆
(内面)

③ケヤキ No.197



3-1 図 切粉→砥粉→赤色漆 (外面)

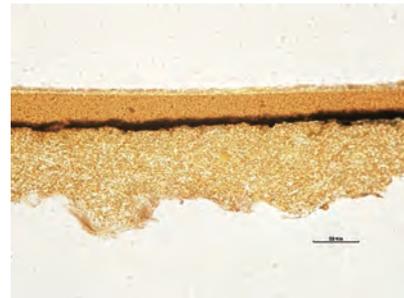


3-2 図 切粉→砥粉→赤色漆 (内面)

④トチノキ No.204

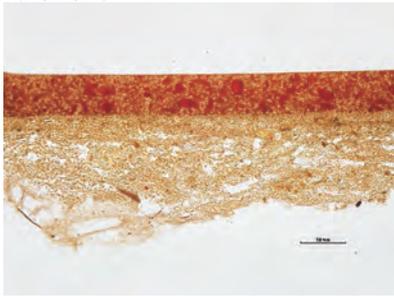


4-1 図 砥粉→黒色物質→漆 (外面)

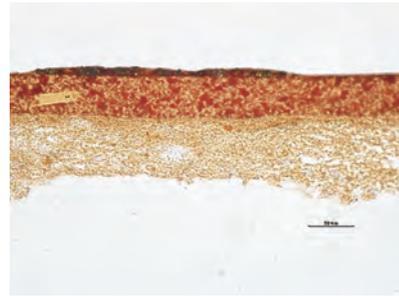


4-2 図 砥粉→黒色物質→漆 (内面)

⑤No.137 ケヤキ



5-1 図 砥粉→砥粉→赤色漆 (外面)



5-2 図 砥粉→砥粉→赤色漆、金色加飾層 (内面)

⑥No.7 トチノキ

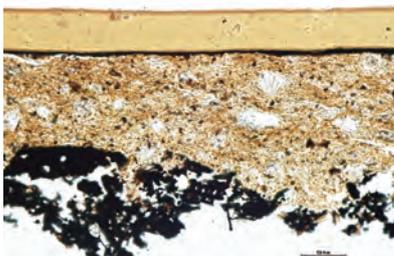


6-1 図 布着せ→炭粉→砥粉→黒色物質→漆 (外面)



6-2 図 切粉→黒色物質→漆→赤色漆 (内面)

⑦No.134 ケヤキ

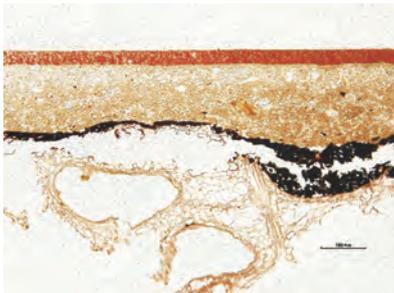


7-1 図 炭粉→砥粉→黒色物質→漆 (外面)

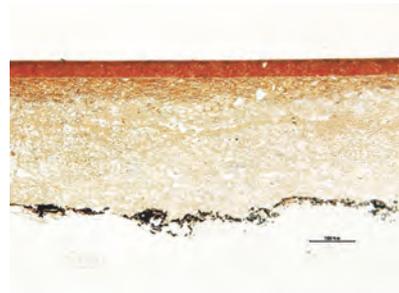


7-2 図 炭粉→砥粉→黒色物質→漆 (内面)

⑧No.221 ケヤキ

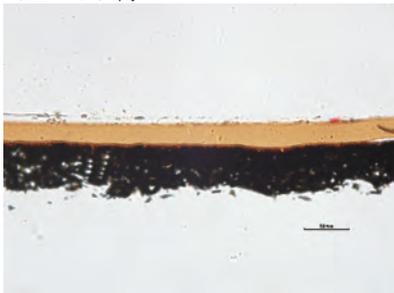


8-1 図 炭粉→砥粉→赤色漆 (外面)

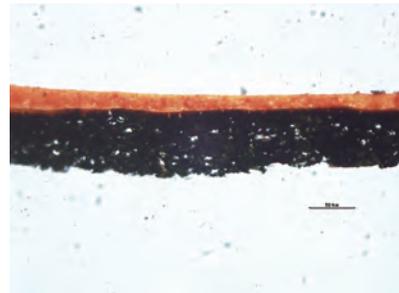


8-2 図 炭粉→砥粉→赤色漆 (内面)

⑨No.22 カツラ属

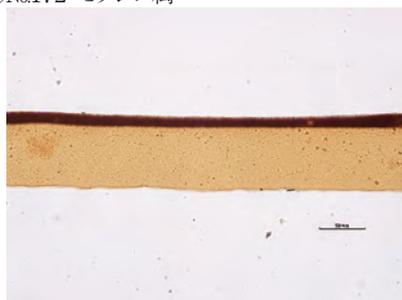


9-1 図 炭粉→漆 (外面)

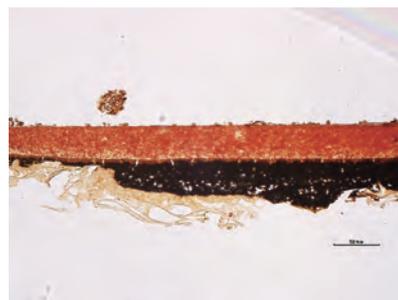


9-2 図 炭粉→赤色漆 (内面)

⑩No.172 モクレン属



10-1 図 炭粉 (欠失)→漆、赤色漆加飾層 (外面)



10-2 図 炭粉→赤色漆 (内面)

⑪No.166 ブナ属



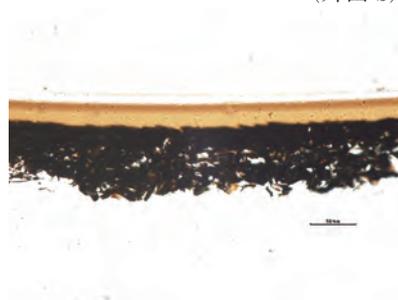
11-1 図 炭粉→緑色漆 (外面 a)



11-2 図 炭粉→緑色漆、黄色加飾層 (外面 b)



11-3 図 炭粉→赤色漆 (内面)



11-4 図 炭粉→漆 (高台内)

色鉍物が満遍なく混和し、10 μm 程の粒子も散見される。

④砥粉→黒色物質→漆 (No. 204 内外面：4-1、4-2 図) トチノキ

- ・資料概要：D4 層より出土。平椀蓋。内面黒色、外面黒色の地塗り。木胎はトチノキ。
- ・資料表面：外面表面には、付着物が見られる。内外面共に塗膜の裏面には、黄褐色の粒子が見られる。
- ・内外面断面：内面、外面の断面は共に同様な塗膜構造であるが、下地の厚さが外面は内面の約 2 倍となっている。層構成は下地層 gl1、上塗り層 ul1. ~ ul2. からなる。gl1. 層は黄褐色を呈し、細かい鉍物粒子が混和。ul1. 層は黒色を呈し、黒色物質を密に含む薄層。ul2. 層は黄褐色を呈し、混和物は認められない。上端は比較的平らである。

⑤砥粉→砥粉→赤色漆 (No. 137 内外面：5-1、5-2 図) ケヤキ

- ・資料概要：D3 層より出土。杯。内外面赤色の地塗り。内面に金色で船、海の紋様の加飾が施されている。木胎はケヤキ。
- ・資料表面：内外面ともに表面は平滑。裏面には黄褐色の粒子が見られる。
- ・内外面断面：内外面の断面は共に同様な塗膜構造であるが、下地の厚さが外面は内面の約 2 倍弱となっている。層構成は下地層 gl1、gl2、上塗り層 ul1. からなる。gl1. 層は黄褐色を呈し、細かい透明、黄褐色の鉍物粒子が混和されている。上端は比較的平滑。ul1. 層は赤色を呈する漆層。層中に

混和された赤色鉍物には粗いものも含まれる。上端は平滑。内面最上層は、金色を呈する加飾層。金色の粒子の間に黄褐色の膠着剤が見られる。

⑥布着せ→炭粉→砥粉→黒色物質→漆 (No.7 外面:6-1 図)、切粉→黒色物質→漆→赤色漆 (No.7 内面:6-2 図) トチノキ

・資料概要：一括出土。椀蓋。内面赤色、外面黒色の地塗り。外面胴部に赤色で松、植物、鶴、亀の加飾が施されている。木胎はトチノキ。

・資料表面：内外面とも表面は平滑でつやがあるが、内面には細かい亀裂も見られる。

・内面断面：塗膜は下地層 gl1、上塗り層 ul1～ul3 からなる。gl1 層は黄褐色を呈し、細かい黄褐色の微粒子と、15 μm～100 μm の鉍物粒子が混和。ul1 層は黒色を呈する薄層で微細な黒色物質が混和。ul2 層は微細粒子を含む漆の薄層。ul3 層は赤色を呈し赤色鉍物が満遍なく混和。

・外面断面：塗膜は下地層 gl1、上塗り層 ul1～ul2 からなる。gl1 層は布着せ層で黄褐色を呈し、繊維の間に鉍物粒子が見られる。gl2 層は黒色を呈し、細かい炭粉粒子が混和。層厚は不均一。gl3 層は黄褐色を呈し、細かい鉍物粒子が混和。ul1 層は黒色物質が密に混和された薄層。ul2 層は黄褐色を呈し、上端は平滑、層中に混和物は認められない。

⑦炭粉→砥粉→黒色物質→漆 (No.134 内外面:7-1、7-2 図) トチノキ

・資料概要：D3 層より出土。胴部に隆起線の加飾を持つ壺椀。内外面黒色の地塗り。高台内に赤色で印がある。木胎はトチノキ。

・資料表面：表面は内外面ともに平滑。裏面は黒色の粒子と残存した胎部が見られる。

・内外面断面：内面、外面の断面は共に同様な塗膜構造で、厚さもほぼ同じである。層構成は下地層 gl1～gl2、上塗り層 ul1～ul2 からなる。gl1 層は黒色を呈し、層中に黒色物質が混和。gl2 層は黄褐色を呈し、細かい鉍物粒子が混和。ul1 層は微細な黒色物質を密に含む薄層。ul2 層は黄褐色を呈し、上端は平滑で変色が見られる。

⑧炭粉→砥粉→赤色漆 (No.221 内外面:8-1、8-2 図) ケヤキ

・資料概要：一括出土。杯。内外面赤色の地塗り。

・資料表面：内面裏面は、表層だけ黒色に変色しており、さらに筋状に濃く変色している部分も見られる。内面裏面は、裏面は黄銅色の粒子が見られる。外面表面は、筋状に変色している。外面裏面は木胎部の残存が見られる。

・内外面断面：塗膜は下地層 gl1～gl2、上塗り層 ul1 層からなる。内面下地層の厚さは外面の約2倍となっている。gl1 層は黒色を呈し、数 μm の細かい炭粉粒子が混和。粒子間に茶褐色の膠着剤が見られる。gl2 層は黄褐色を呈し、数 μm～20 μm 程度の細かな鉍物粒子が混和。ul1 層は赤色を呈し、赤色鉍物が満遍なく混和。層の上端は平滑である。

⑨炭粉→漆 (No.22 外面:9-1 図) 炭粉→赤色漆 (No.22 内面:9-2 図) カツラ属

・資料概要：一括出土。椀。内面赤色、外面黒色の地塗り。口縁と胴部の一部が欠損している。

・資料表面：表面は内外面ともに平滑。

・内面断面：塗膜は下地層 gl1、上塗り層 ul1 層からなる。gl1 層は黒色を呈し、数 10 μm の比較的大きな炭粉粒子も混和される。ul1 層は赤色を呈し、赤色鉍物が満遍なく混和。層の上端は平滑である。

・外面断面：塗膜は下地層 gl1、上塗り層 ul1 からなる。gl1 層は黒色を呈する下地層。多角形の炭粉が混和している。ul1 層は黄褐色を呈する漆層。層中に混和物は見られない。上端は平滑。

⑩炭粉→漆 (No.172 外面:10-1 図)、炭粉→赤色漆 (No.172 内面:10-2 図) モクレン属

- ・資料概要：D4層より出土。飯椀。内面赤色、外面黒色の地塗り。外面の胴部3ヵ所に、赤色で丸に紋の加飾が施されている。内面の塗膜は細かくひび割れており、外面の塗膜は、所々で大きく剥離している。
- ・資料表面：表面は内外面ともに平滑。外面表面は一部に変色が見られる。裏面は内外面ともに黒色物質が見られる。
- ・内面断面：塗膜は下地層 gl1.、上塗り層 ul1. からなる。gl1. 層は黒色を呈する炭粉が混和された下地層。層の厚さは不均一。層の上方には茶褐色の膠着物が見られる。ul1. 層は赤色を呈する上塗り層。層中に赤色鉱物が満遍なく混和されている。
- ・外面断面：塗膜は下地層 gl1.、上塗り層 ul1.、加飾層からなる。gl1. 層は黒色を呈する炭粉が混和された下地層だが、下地は欠失してほとんどみられない。ul1. 層は黄色を呈する漆層で、混和物は見られない。加飾層は赤色を呈し、赤色鉱物が満遍なく混和している。

①炭粉→緑色漆 (No.166 外面 a : 11-1 図)、炭粉→緑色漆 (No.166 外面 b : 11-2 図)

炭粉→赤色漆 (No.166 内面 : 11-3 図)、炭粉→漆 (No.166 高台内 : 11-4 図) プナ属

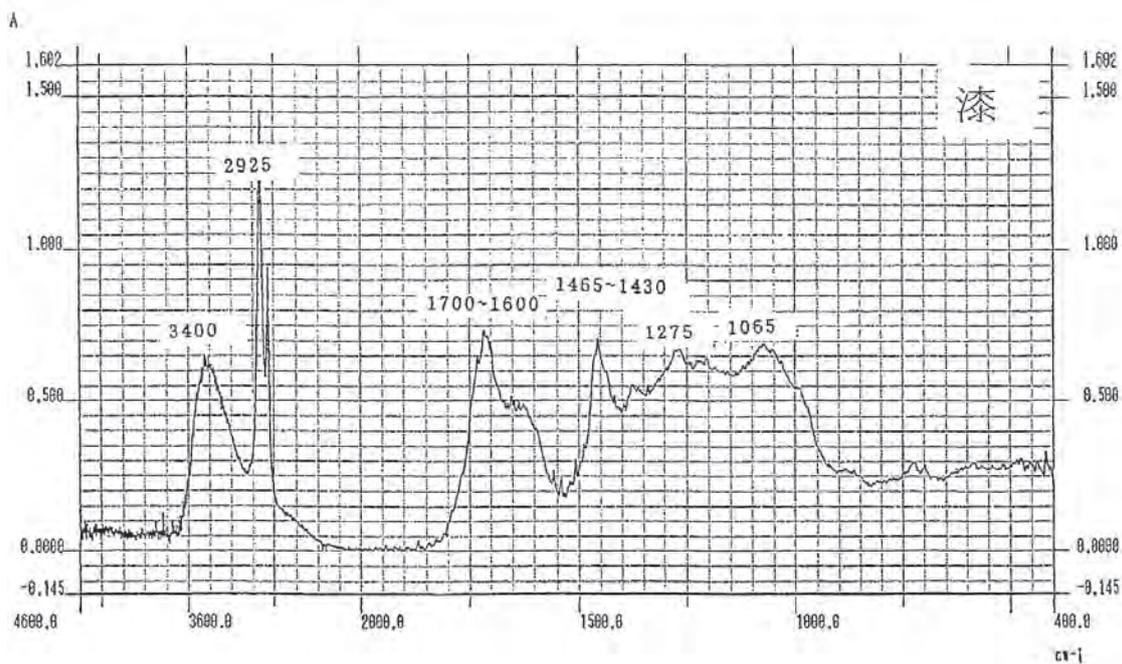
- ・資料概要：D2層より出土。椀蓋。内面赤色、外面緑色の地塗り。胴部2ヶ所と居尻内に茶色で松葉紋様の加飾が施されている。高台内は黒色。外面の緑色は目視では黒色に見える。
- ・資料表面：内面表面は波状に隆起している。外面表面は、顕微鏡下で黒色に見える。亀裂が多く認められる。外面は、内外面ともに、胎部、黒色粒子が認められる。塗膜は皺がよっている部分や、亀裂部分より剥離が見られる。
- ・内面断面：塗膜は下地層 gl1.、上塗り層は ul1.1. からなる。gl1. 層は黒色を呈する炭粉が混和された下地層である。欠損箇所が多く、詳細は不明である。ul1. 層は赤色を呈する漆層。層中には赤色鉱物が満遍なく混和している。
- ・外面断面：塗膜は下地層 gl1.、上塗り層 ul1. (外面 b はその上に黄色漆の加飾層) からなる。gl1. 層は黒色を呈する下地層で、10 μm 程度の炭粉粒子が混和され、粒子の間には淡褐色の膠着剤が認められる。ul1. 層は緑色を呈する漆層。層中に緑色の粒子が満遍なく混和している。層厚は薄く不均一で、ほとんど確認できない部分もある。加飾の黄色漆層の方が緑色漆層より厚く、層中に黄色物質が満遍なく混和している。層の上端は平滑である。
- ・高台内：塗膜は、下地層 gl1.、上塗り層は ul1.1. からなる。gl1. 層は黒色を呈し、炭粉が混和。ul1. 層は黄褐色を呈する漆層。層中に混和物は見られない。表層に変色が見られる。

4.2 フーリエ変換赤外分光分析法による漆塗膜の同定結果

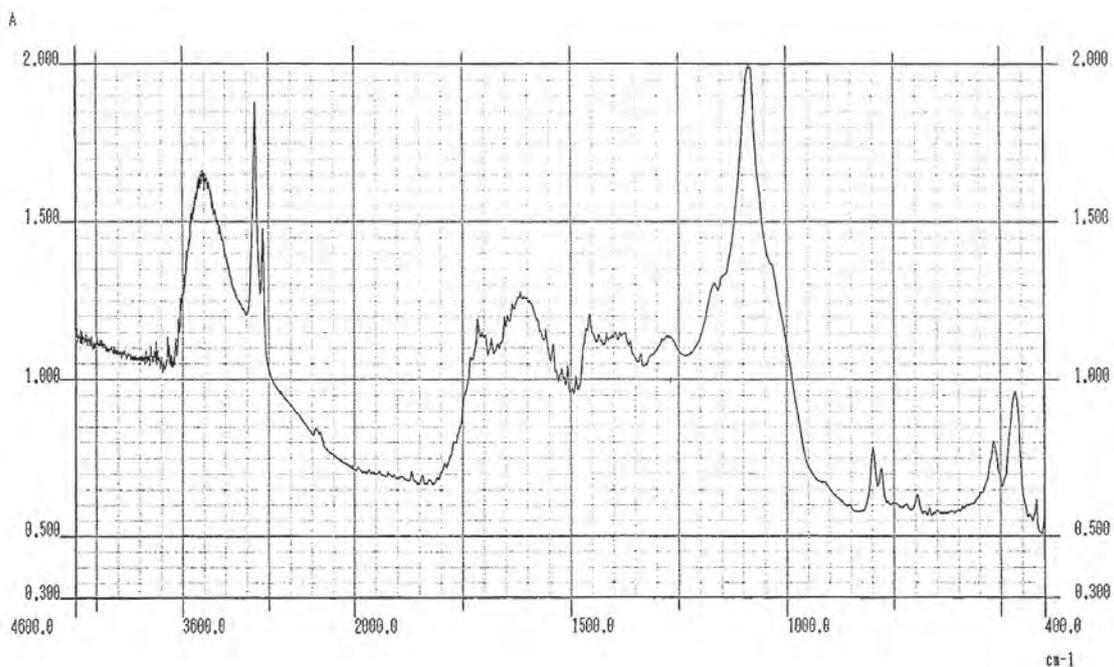
基準とする市販の日本産漆による測定結果のチャート (12-1 図)、および分析した試料の中から No.149 外面の測定結果のチャート (12-2 図) を示す。No.149 外面を含め、測定した塗膜 16 点の結果より、漆に特徴的な赤外線吸収のピークとスペクトルの波形が認められたことから、塗膜の主材は漆であると推定された。

4.3 蛍光 X 線分析法および X 線回折分析法による色材の同定結果

蛍光 X 線分析法による元素分析結果を表 3 に、X 線回折分析法による形態分析結果を表 4 に示した。X 線回折分析の結果、色材として No.13 内面、No.39 外面、No.786 外面からは Fe_2O_3 のみが、No.135 からは HgS と Fe_2O_3 の両方が検出された。これら 4 点の試料からは、蛍光 X 線分析でも Fe が非常に多く検出され、また No.135 からは Hg が検出された。しかし、同様に蛍光 X 線分析で Fe が非常に



12-1 図 フーリエ変換分光分析法による日本産漆の外面塗膜測定結果



12-2 図 フーリエ変換分光分析法によるNo.149の外面塗膜測定結果

相 対 量	1 No 1 3 内面碗 茶色	2 No 3 9 外面平碗碗 茶色	3 No 1 2 5 外面腰高 黒色茶褐色	4 No 1 3 5 外面杯 赤色	5 No 1 7 1 外面飯碗 黒色黄褐色
卍非常に多い	Fe	Fe	Fe	Fe	Fe
卍多い	Na			Hg	
卍中位		Ca	Ca		Cr Ca
+ 少ない	S			Cr	
(+)非常に少ない	Zr, K, P, Si, Al	K, P, S, Na	K, P, S, Na	K, P, S	K, P, S, Si, Mg

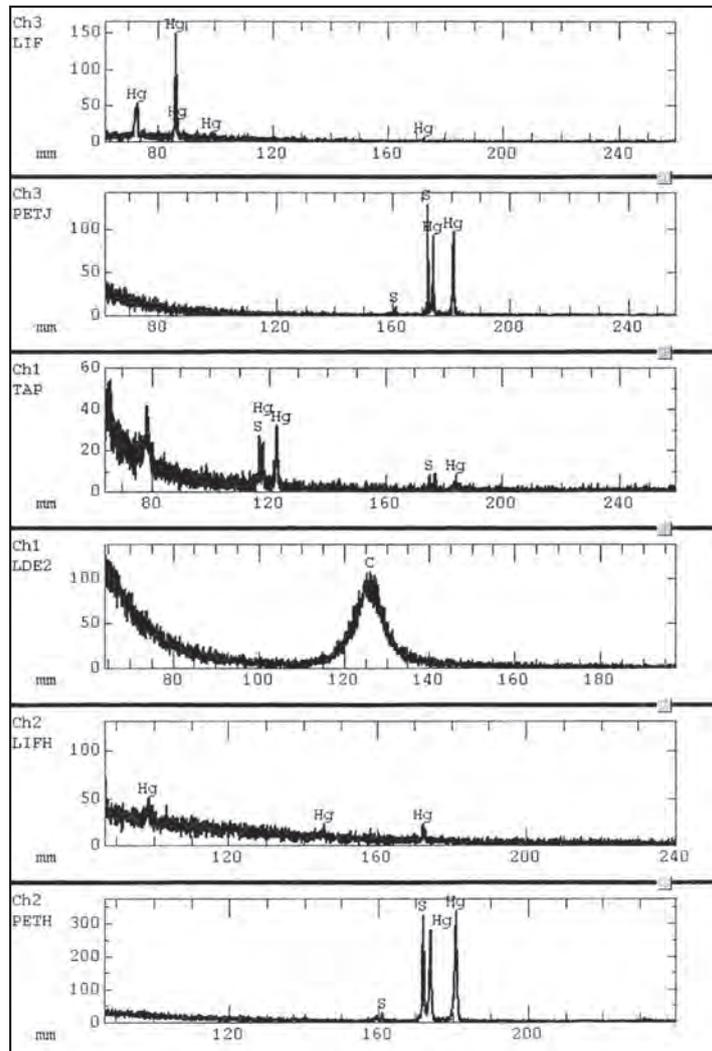
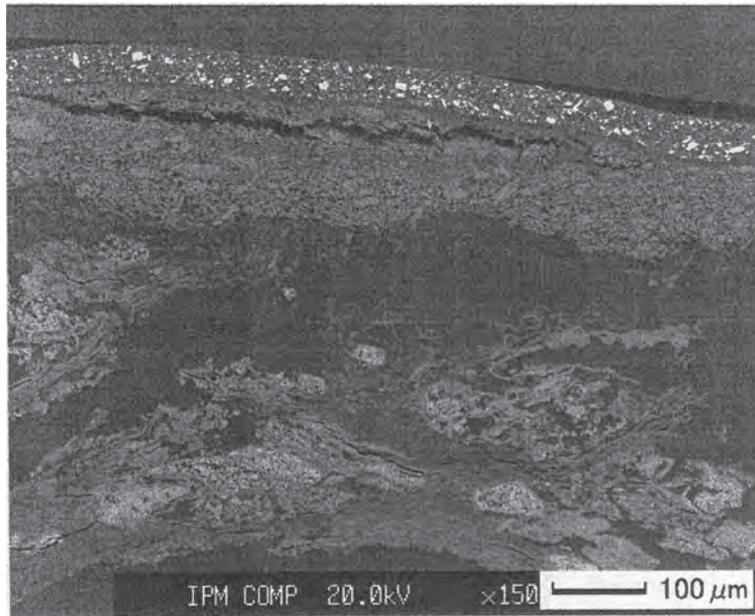
相 対 量	6 No 2 4 2 外面飯碗 黒色黄褐色	7 No 3 8 0 外面飯蓋 緑色	8 No 6 0 6 外面碗 緑色	9 No 7 8 6 外面平碗蓋 黒色赤色
卍非常に多い	Fe, Ca			Fe
卍多い			Ca	
卍中位		S		K, Si, Mg
+ 少ない	S, Mg			Al
(+)非常に少ない	K, P, Si	P, Mg	Mn, P	P, S

(測定範囲 $^{11}\text{Na} \sim ^{23}\text{U}$, Cは含まず)

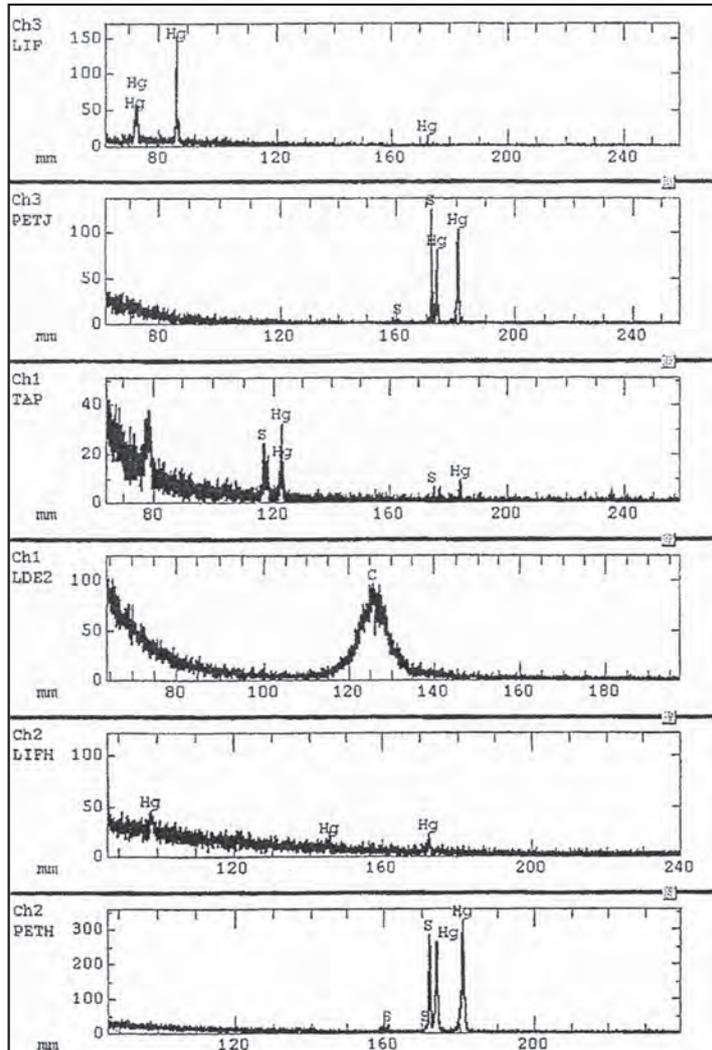
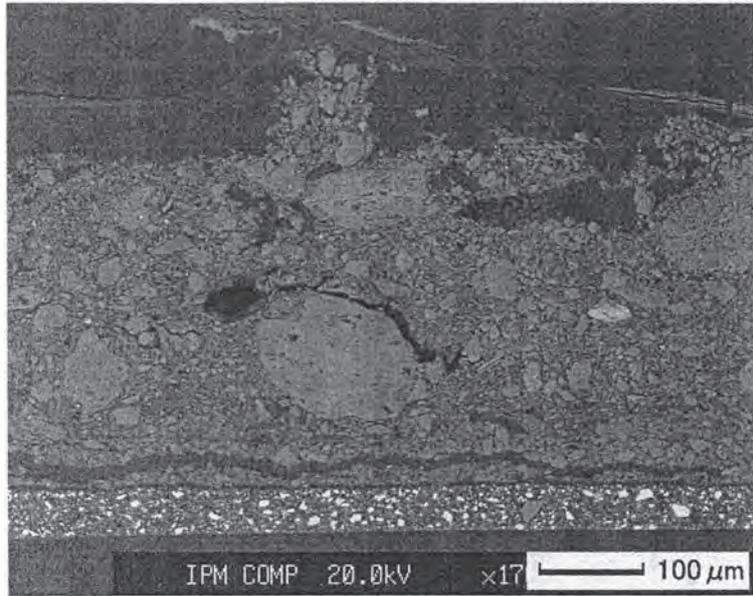
表 3 蛍光 X 線分析結果

同定した物質 JCPDS カド [†] No.	1 No 1 3 内面碗 茶色	2 No 3 9 外面平碗碗 茶色	3 No 1 2 5 外面腰高黒 色茶褐色	4 No 1 3 5 外面杯 赤色	5 No 1 7 1 外面飯碗 黒色黄褐色	6 No 2 4 2 外面飯碗 黒色黄褐色	7 No 3 8 0 外面飯蓋 緑色	8 No 6 0 6 外面碗 緑色	9 No 7 8 6 外面平碗蓋 黒色赤色
Fe ₂ O ₃ (Hematite) 赤鉄鉱* 33-664	(+)	(+)		(+)					(+)
Pb ₃ O ₄ (Minium) 鉛丹* 41-1493									
HgS (Cinnabar) 060256				+					
Mg(OH) ₂ (Brecite) 7-239						(+)	(+)		
C (Graphite) 41-1487								(+)	
SiO ₂ (α-Quartz) 46-1045									卍
NaAlSi ₃ O ₈ (Albite) 9-466	(+)								
Fe ₃ O ₄ (Magnetite) 19-629		(+)							
CaSO ₄ ·2H ₂ O (Gypsum) 33-311						(+)			
KAl ₂ (Si ₃ Al)O ₁₀ (OH, F) ₂ (Muscovite) 41-1493									(+)

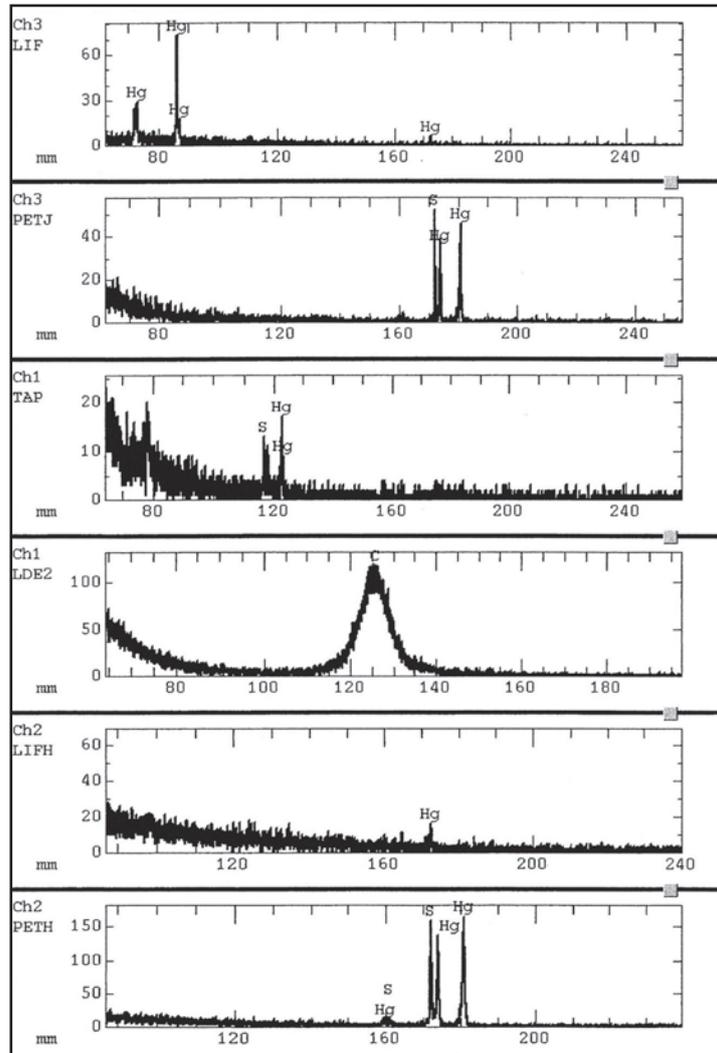
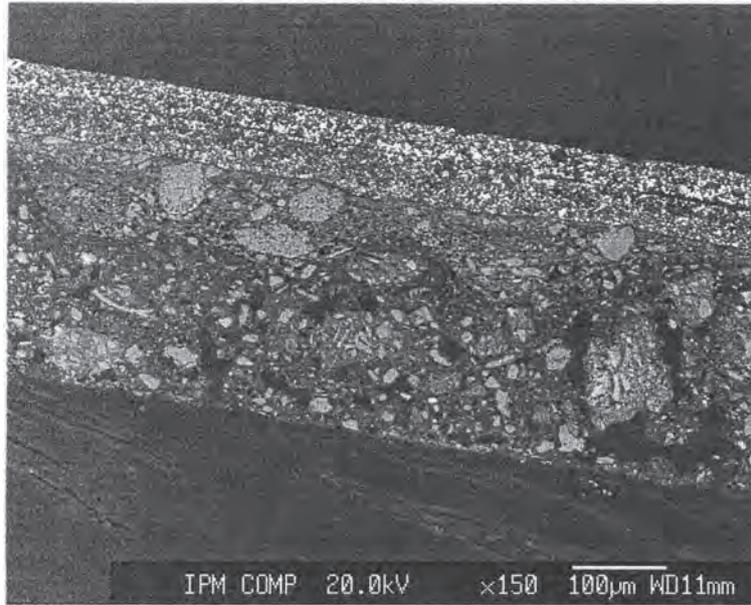
表 4 X 線回折分析結果



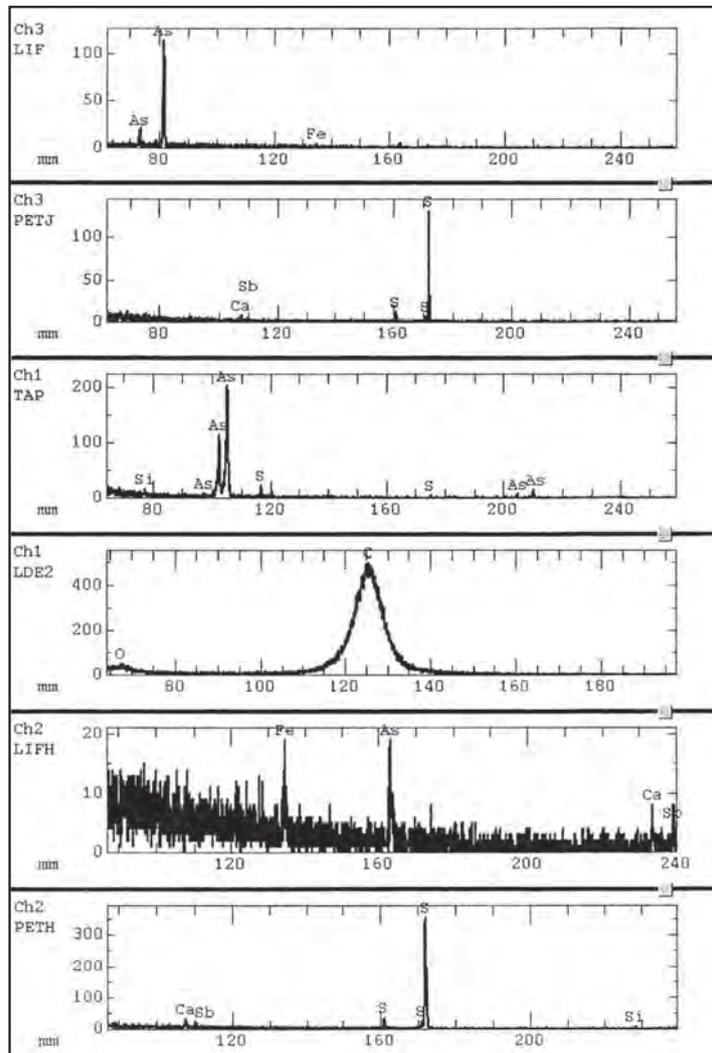
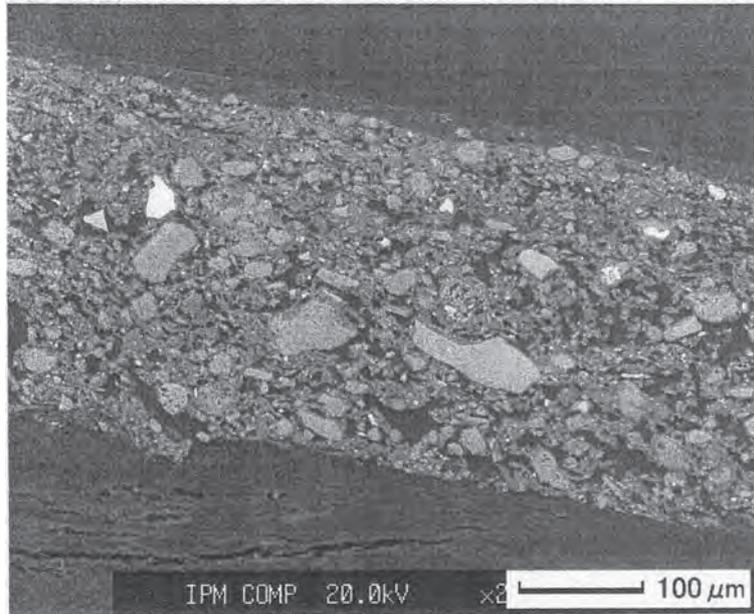
13-1 図 No.33 外面 EPMA 分析結果



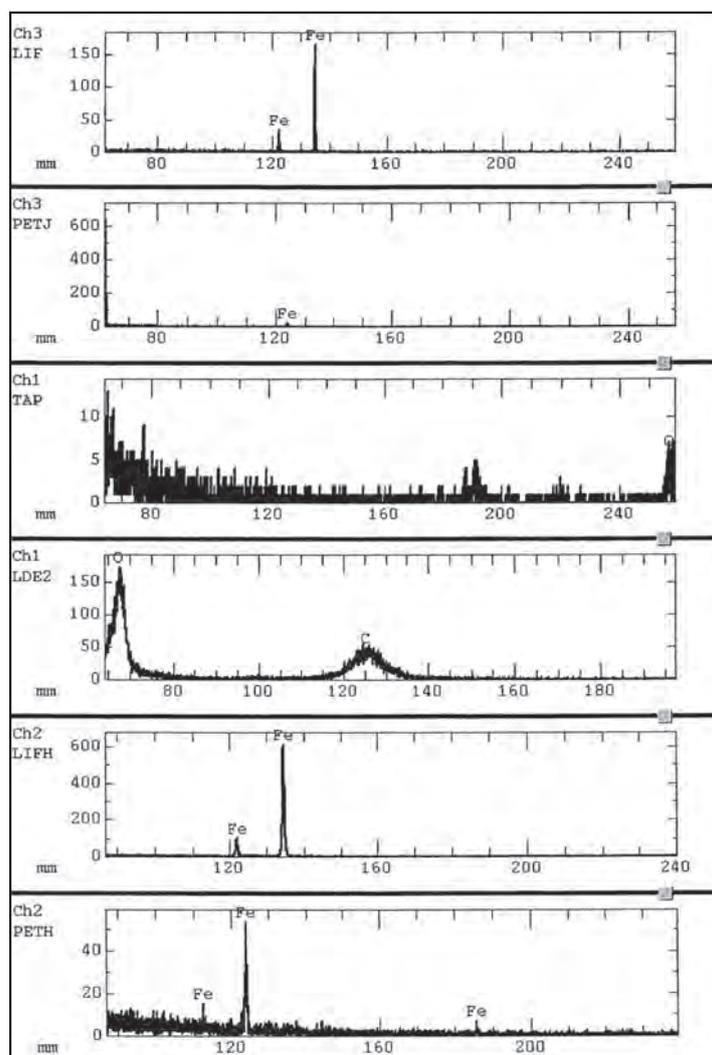
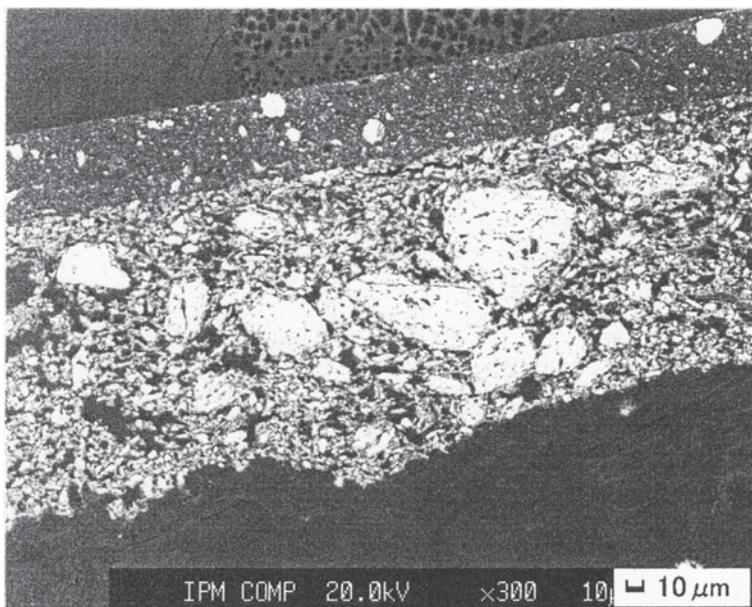
13-2 図 No41 内面 EPMA 分析結果



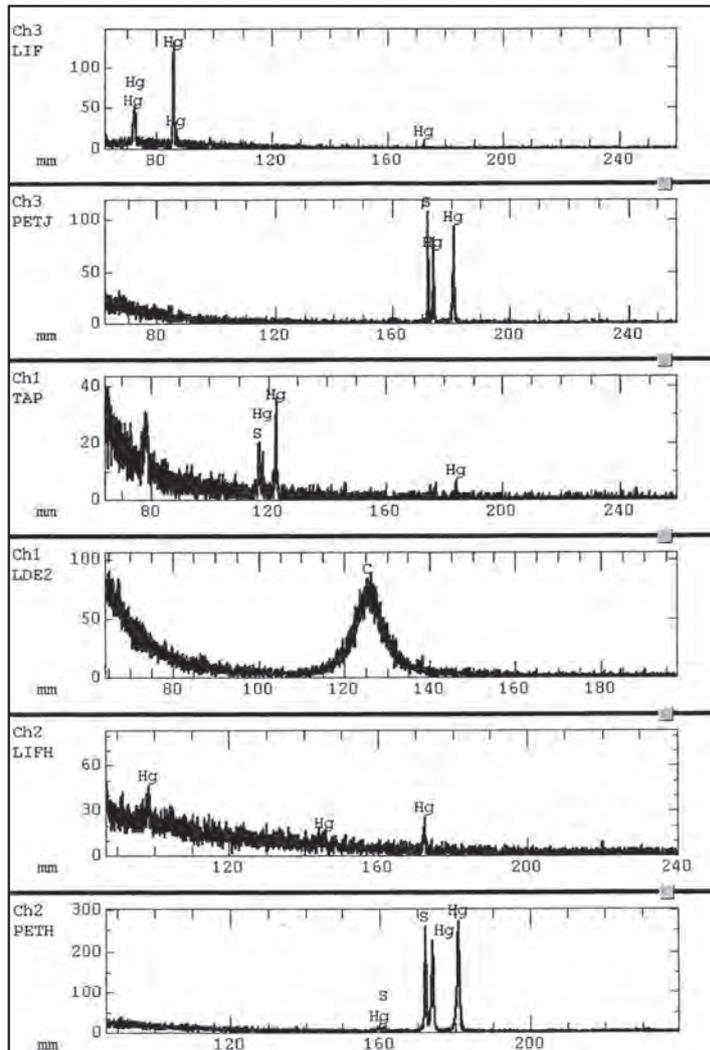
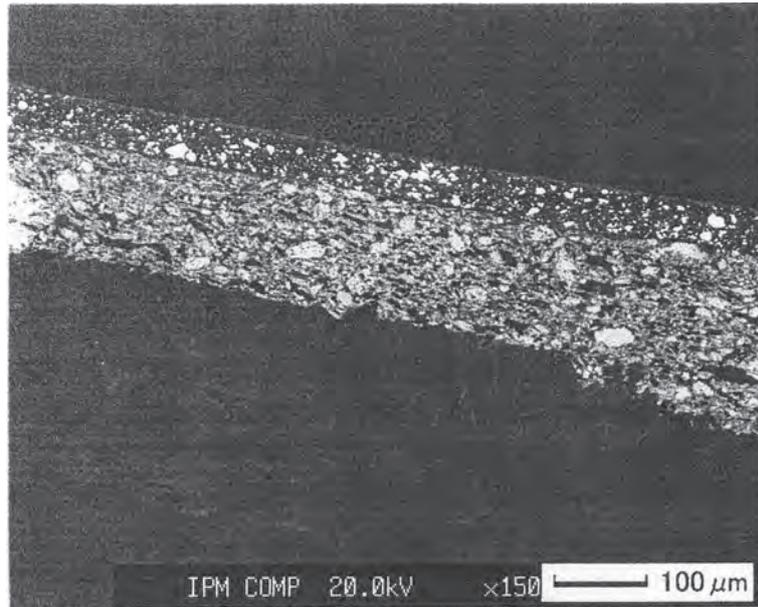
13-3 図 No.60 外面 EPMA 分析結果



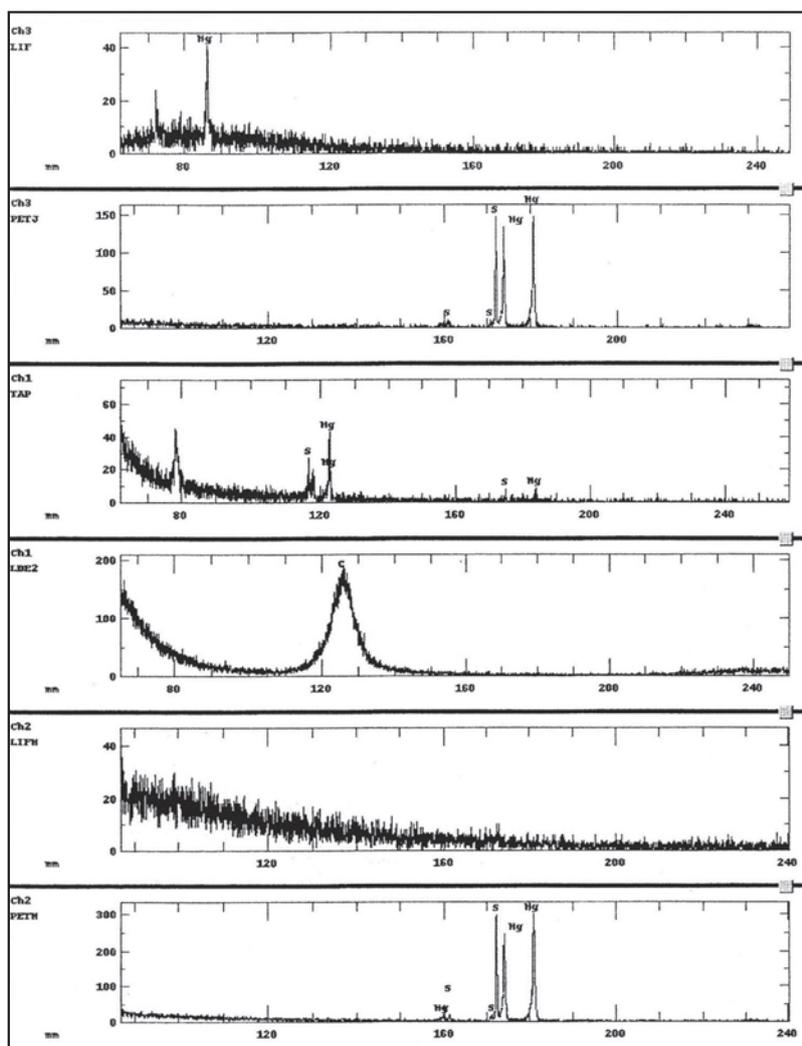
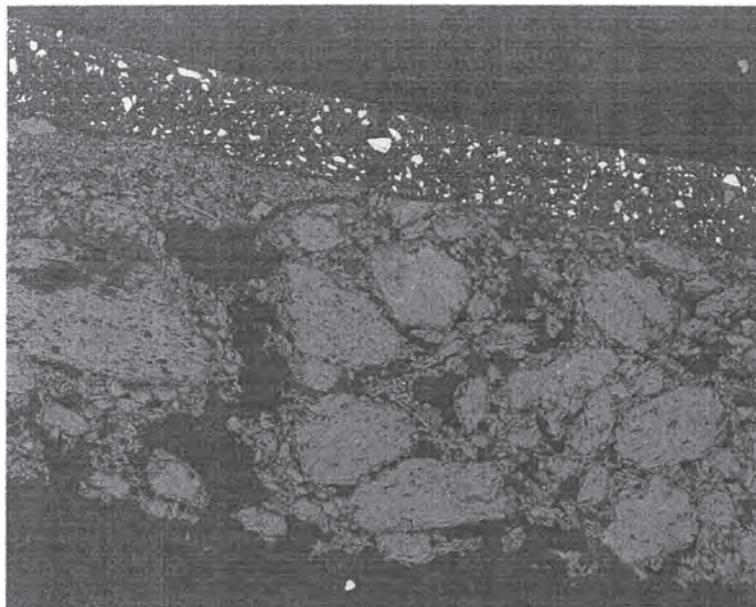
13-4 図 No.71 外面 EPMA 分析結果



13-5 図 No.72 外面 EPMA 分析結果



13-6 図 No.131 内面 EPMA 分析結果



13-7 図 No.155 内面 EPMA 分析結果

多く検出されたNo.125 外面、No.171 外面、No.242 外面からは、 Fe_2O_3 の X 線回折パターンは得られなかった。この3点の試料は無定形物質の状態と推定される。

4.4 エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザーによる色材の同定

EPMA による分析結果を 13-1 ~ 13-7 図に示した。上段は塗膜断面の組成像、下段は色材となる元素のスペクトルを示した図である。

分析の結果、No.33 外面、No.41 内面、No.60 外面、No.131 内面、No.155 内面からは Hg が、No.72 外面からは Fe が、No.71 外面からは As が検出された。

5. 手板による再現実験

5.1 実験の目的

前述した断面観察の結果、鉍物粒子、炭粉が混和された下地、および黒色物質がそれぞれ確認された。鉍物が混和された下地の材料については、地粉、砥粉、地粉と砥粉を適宜混和した切子下地の3種が考えられるが、この3種を区別する明確な定義はなされていない。本稿では、現在市販されている砥粉及び地粉を用いた手板を比較試料として作製し、調査結果と比較検討を行い、下地材料を推定することとした。

一方、器物の炭粉下地には、膠着材として漆、柿渋が日本では一般的に用いられてきた。本試料の下地の膠着剤を機器分析することは、試料が微量であることと、各層が数 μm の薄層で、層ごとの同定が困難であること等から、不可能であった。このため、膠着剤の検討は市販の膠着剤で手板を作製し、調査結果と比較することで行った。

また、断面観察で上塗り層の最下部に、黒色物質の薄層が確認された (No.20 など)。この薄層については、沢口氏は最上の方法として伝えられている技法である髹漆工程順序の20番目に「下塗前錆研ぎ面に墨汁を綿にて塗る」と記している (沢口1966:236頁)。加えて、「下塗り前の施工は他日錆下地の透視を避け、また錆地に下塗漆の吸収を防止するため」とも述べている (前掲243頁)。このような錆研ぎ面に墨汁を塗布する工程は、『万金産業袋』にも見られる (吉田1973:65頁)。また、沢口氏は墨汁の他に渋下地の一例として、松煙渋による木固め、渋引き、疵見、錆付けの上に塗り前として、黒塗りには生渋と油煙を、朱塗りには生渋とベンガラを混合して塗る方法を述べている (沢口1966:257頁)。『実用塗工術』にも同様に塗前の工程 (今泉1925:192頁) として、油煙と柿渋を混合した渋炭を塗布し乾燥させる方法が記載されている。以上より、今回の手板は、墨汁を塗布した試料と柿渋に油煙を混和した試料の2種類を作製し、比較検討を行うこととした。

5.2 実験

5.2.1 実験方法

現在市販されている下地材料を用い、目的に応じた手板を作製した。作製には、江戸時代の詳細な技法が記された文献を得ることができなかったため、沢口氏の「漆下地の施工法」「渋下地」の項を参考とし (沢口1966:235-243、255-257頁)、材料の配合、下地の混和を行った。また、実験に使用した地粉、砥粉は、X線回折分析法で形態分析を行った。作製した手板塗膜は、前述した調査試料と同様の方法 (3.1) で前処理をして断面観察に供した。

5.2.2 手板の作製

(1) 使用材料

① 地粉

江戸時代から現在まで使用されている地粉に、輪島地粉と山科地粉（沢口 1966：169 頁）がある。輪島地粉は海成珪藻土で独特な形のケイ殻（14 図）を有し、輪島市内の小峰山などに露頭が見られ露天掘りで採掘される。ケイ殻の化学的安定性と物理的多孔性（液体の吸収が極めて大）が地粉として最適な要因とされる。煨焼して有機物を除去し、粉碎機にかけて粒度の大きいものから一辺地、二辺地、三辺地と分類される（奥野 1973：742-747 頁）。山科地粉は山科砥粉の粗粉で、京都市山科区西野山一帯で採石される頁岩や粘板岩の風化した岩石を粉碎し、水簸する際に 120 メッシュを通過しなかったものを圧縮脱水、乾燥させたものである（京都府中小企業総合研究指導所 1978：2 頁）。ここで、調査試料の断面観察の結果、輪島地粉の特徴である珪藻土がすべての試料に認められなかった。これより、手板の作製には、京都・山科地方で製造されている地粉を使用した。地粉は原材料の採取地や製造方法の違いで、複数市販されている。2005 年 3 月に、山科砥粉の産地で行った聞き取り調査では、用途により製造方法や、材料を変えているという話であった。また、製造規模により、製造方法に若干の違いも見られた。製造元である株式会社進藤謙砥粉製造（以下進藤謙製造と略す）、および株式会社堤浅吉漆店（以下堤浅吉漆店と略す）で市販されている全ての地粉を実験に供した。また、論を進めるにあたり、進藤謙製造からの購入品には A を、堤浅吉漆店には B をそれぞれ地粉、砥粉の後ろに付して便宜上表記する。

② 砥粉

江戸時代から使用され現在も市販されている砥粉に、山科砥粉と鳴滝砥粉がある（沢口 1966：169 頁、山内・阿佐美 1983：32 頁）。このため、この 2 種類の砥粉（京都府中小企業総合研究指導所 1978：4 頁、山内・阿佐美 1983：32 頁）を実験に使用した。地粉同様に、原材料の採取地や色味で違いが見られるか検証するため、進藤謙製造の山科赤砥粉 A、山科白砥粉 A、山科黄砥粉 A の 3 種類、堤浅吉漆店の山科赤砥粉 B、鳴滝砥粉 B、上山科赤砥粉 B の 3 種類の合計 6 種類の砥粉を使用した。

③ 切粉

切粉は進藤謙製造および堤浅吉漆店より購入した山科地粉 2 種類に、同 2 店より購入した 3 種類の砥粉を、それぞれの購入先の地粉と混和し、合計 6 種類の切粉試料とした。

④ 炭粉

調査試料の断面観察結果（4.1）では、140 メッシュ（106 μm ）を超える大きさの粒子が見られなかった。このため、炭粉は市販の朴炭を砕き、140 メッシュ（106 μm ）の篩いにかけてたものを使用した。

⑤ 黒色の薄層に使用した材料

黒色の薄層は、市販の墨汁および柿渋に油煙を混和したもの（以下油煙渋とする）の 2 種類とした。切粉下地、砥粉下地の順に塗装した上に、この 2 種類の黒色薄層をそれぞれ塗布した。地粉と砥粉は、進藤謙製造の山科地粉 A と山科赤砥粉 A を使用した。

⑥ 漆

地粉下地、砥粉下地、切粉下地の膠着剤として使用した生漆は、安代町漆器センターの富士原文隆氏から提供を受けた 2004 年度採取浄法寺産生漆を使用した。

⑦ 柿渋

柿渋は、市販の柿渋を使用した。

(2) 手板の作製方法

比較試料	使用鉱物等	配合比（重量比）
1	山科地粉 A	漆：地粉=1：2
2	山科地粉 B	漆：地粉=1：2
3	山科赤砥粉 A	漆：砥粉=1：2
4	山科赤砥粉 B	漆：砥粉=1：2
5	山科白砥粉 A	漆：砥粉=1：2
6	山科黄砥粉 A	漆：砥粉=1：2
7	上山科赤砥粉 B	漆：砥粉=1：2
8	鳴滝砥粉 B	漆：砥粉=1：2
9	切粉（山科地粉 A+山科赤砥粉 A）	漆：地粉：砥粉=1：1：1
10	切粉（山科地粉 A+山科赤砥粉 B）	漆：地粉：砥粉=1：1：1
11	切粉（山科砥粉 A+鳴滝砥粉 B）	漆：地粉：砥粉=1：1：1
12	切粉（山科砥粉 B+赤砥粉 A）	漆：地粉：砥粉=1：1：1
13	切粉（山科砥粉 B+山科赤砥粉 B）	漆：地粉：砥粉=1：1：1
14	切粉（山科砥粉 B+鳴滝砥粉 B）	漆：地粉：砥粉=1：1：1
15	炭粉	漆：炭粉=2：1
16	炭粉	漆：炭粉=4：1
17	炭粉	漆：炭粉=6：1
18	炭粉渋下地	柿渋：炭粉=6：1
19	比較試料No.9→比較試料No.3→墨汁	墨汁市販品
20	比較試料No.9→比較試料No.3→油煙	柿渋：油煙=9：1

表 5 比較試料下地の使用材料と配合比

各試料の使用材料と配合比（重量比）は、表5にまとめた。各下地は、混和した後スライドグラスに塗布し、温度 25℃、湿度 80% に設定した恒温恒湿槽の中で乾燥させた。恒温恒湿槽は、株式会社長野科学機器製作所製 LH30-13 M 計装を使用した。

①比較試料 1～14

地粉、砥粉の比較試料 1～8 は、地粉及び砥粉それぞれに漆とほぼ同量の水を加えてヘラでよく練り、その後、漆を加え手早く練り混ぜてスライドグラスに塗布した。

切粉の比較試料 9～14 は、最初に等量の地粉と砥粉を混和して切粉を作り、そこに、漆とほぼ同量の水を加えてヘラでよく練った。その後、漆を加え手早く練り混ぜてスライドグラスに塗布した。

②比較試料 15～17

漆に炭粉を混和して塗布する技法は、文献で確認することは出来なかったが、平安時代前期の出土漆製品では確認されている（岡田 1995:90 頁）。漆と炭粉の配合比（重量比）を変えて、3種類（2:1、4:1、6:1）の手板を作製した。漆と炭粉をそれぞれの配合比で混和したものを、スライドグラスに

塗布した。

③比較試料 18

柿渋に炭粉を混和したものを、スライドガラスに塗布した。

④比較試料 19、20

比較試料 9 (山科地粉 A + 山科赤砥粉 A) と同様の切粉下地を作り、乾燥後 600 番のサンドペーパーで研磨した。その上に、比較試料 3 (山科赤砥粉 A) と同様の砥粉下地を塗布し、乾燥後 800 番のサンドペーパーで研磨した。その後、比較試料 19 は墨汁を、比較試料 20 は柿渋に油煙 (重量比 9:1) を混和したものを、それぞれの砥粉下地の上に塗布した。

5.2.3 光学顕微鏡による断面観察結果

作製した手板塗膜は、前述 3-1 の断面観察と同様の方法で薄片プレパラートを作製し、観察を行った。

①比較試料 1 山科地粉 A (14-1 図)

濃い黄褐色の層で、最大で約 125 μm の鉱物および黒色粒子が混和。

②比較試料 2 山科地粉 B (14-2 図)

濃い黄褐色の層で、最大で約 175 μm の鉱物および黒色粒子が混和。

③比較試料 3 山科赤砥粉 A (14-3 図)

黄褐色を呈する層で、10 ~ 25 μm の鉱物を中心に最大で約 80 μm の鉱物も混和。黒色、茶褐色、および黄褐色の微粒子も見られる。

④比較試料 4 山科赤砥粉 B (14-4 図)

黄褐色を呈する層で、10 ~ 25 μm の鉱物を中心に最大で約 40 μm の鉱物も混和。黒色、茶褐色、および黄褐色の微粒子も見られる。

⑤比較試料 5 山科白砥粉 A (14-5 図)

黄褐色を呈する層で、10 ~ 25 μm の鉱物を中心に最大で約 100 μm の鉱物も混和。黒色、茶褐色、および黄褐色の微粒子も見られる。④の赤砥粉よりも粗い鉱物が多くみられる。

⑥比較試料 6 山科黄砥粉 A (14-6 図)

黄褐色を呈する層で、10 ~ 25 μm の鉱物を中心に最大で約 100 μm の鉱物も混和。黒色、茶褐色、および黄褐色の微粒子も見られる。④の赤砥粉よりも粗い鉱物が多くみられ、⑤とほぼ同様な様相を呈している。

⑦比較試料 7 上山科赤砥粉 (14-7 図)

黄褐色を呈する層で、10 ~ 25 μm の鉱物を中心に最大で約 80 μm の鉱物も混和。黒色、茶褐色、および黄褐色の微粒子も見られる。

⑧比較試料 8 鳴滝砥粉 (14-8 図)

灰緑色を呈する層で、10 ~ 15 μm の針状のものが多く、最大で約 35 μm の鉱物も混和。黒色、茶褐色、および黄褐色の微粒子も見られる。

⑨比較試料 9 切子：山科地粉 A + 山科赤砥粉 A (14-9 図)

黄褐色を呈する層で、数 μm から 100 μm を超える鉱物も散見される。黒色と茶褐色の微粒子も見られる。

⑩比較試料 10 切子：山科地粉 A + 山科赤砥粉 B (14-10 図)

黄褐色を呈する層で、数 μm から 100 μm を超える鉱物も散見される。黒色と茶褐色の微粒子も見られる。⑨とほぼ同様な様相を呈している。

⑪比較試料 11 切子：山科地粉 A + 鳴滝砥粉 B (14-11 図)

層は黄色味がかかった緑灰色。層中には多角形、楕円形、針状の透明な鉱物と黒色の粒子、茶褐色の微粒子が見られる。100 μm を超える鉱物も見られるが、地粉のみのものと比べて少なく、層中に分散している。

⑫比較試料 12 切子：山科地粉 B + 山科赤砥粉 A (14-12 図)

層は黄褐色を呈する。層中には多角形、楕円形、針状の透明な鉱物と黒色の粒子、茶褐色の微粒子が見られる。150 μm を超える鉱物も見られるが、地粉のみのものと比べて少なく、層中に分散している。

⑬比較試料 13 切子：山科地粉 B + 山科赤砥粉 B (14-13 図)

層中には多角形、楕円形、針状の透明な鉱物と黒色の粒子、茶褐色の微粒子が見られる。150 μm を超える鉱物も見られるが、地粉のみのものと比べて少なく、層中に分散している。

⑭比較試料 14 切子：山科地粉 B + 鳴滝砥粉 B (14-14 図)

層は緑色と黄色がまだらになっている。層中には多角形、楕円形、針状の透明な鉱物と黒色の粒子、茶褐色の微粒子が見られる。150 μm を超える鉱物も見られるが、地粉のみのものと比べて少なく、層中に分散している。

⑮比較試料 15 炭粉漆：漆：炭粉 = 2 : 1 (14-15 図)

多角形、針状の木炭粉が黄色の層中に見られる。やや下方に沈殿している。

⑯比較試料 16 炭粉漆：漆：炭粉 = 4 : 1 (14-16 図)

多角形、針状の炭粉が黄色の層中に見られる。やや下方に沈殿している。

⑰比較試料 17 炭粉漆：漆：炭粉 = 6 : 1 (14-17 図)

多角形、針状の木炭粉が黄色の層中に見られる。やや下方に沈殿している。比較試料 15、16 に比べると層中の木炭粉がまばらである。

⑱比較試料 18 炭粉渋 (14-18 図)

針状、多角形の木炭粉が見られるが、木炭分と木炭粉の間に膠着物が見られない。

⑲比較試料 19 切粉→山科砥粉 A →墨汁 (14-19 図)

黒色の微粒子が密に混和した薄層が見られた

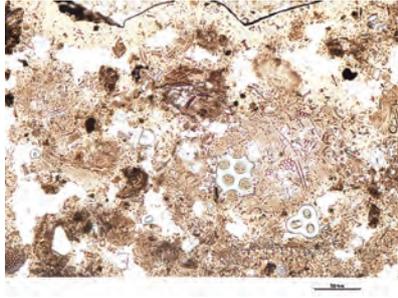
⑳比較試料 20 切粉→山科砥粉 A →油煙 + 柿渋 (14-20 図)

比較試料 19 と同様な黒色の微粒子が密に混和した薄層が見られた。

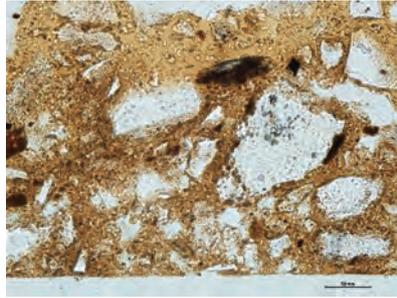
5.2.4. X線回折分析法による結果

実験に使用した地粉と砥粉 8 点について、その成分組成を調べるため、X 線回折分析を行った。ここで、実験には使用しなかったが、弁柄入山科砥粉 (No. 4) も併せて分析した。

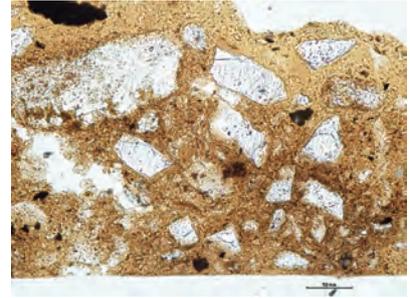
分析結果を表 6 に示す。地粉および砥粉の主成分は石英で、その中に白雲母が混和しており、その他の鉱物は微量であった。ここで、No. 8 は、白雲母が他の試料より微量で石英が主体を占め、若干異なる性状を示していた。No. 1 ~ 9 まで、その成分に大きな違いがみられる試料は認められなかった。



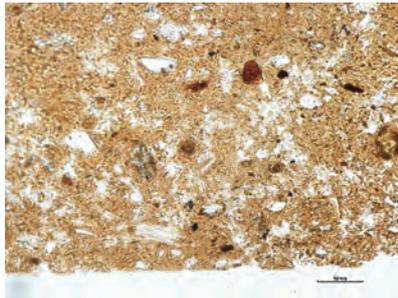
14 図 二辺地粉下地の断面



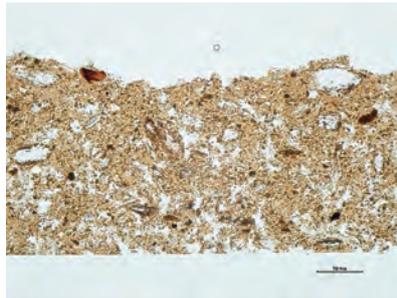
14-1 図 比較試料 1. 山科地粉 A



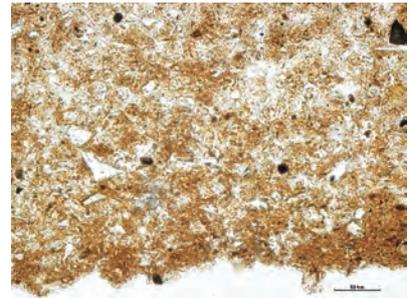
14-2 図 比較試料 2. 山科地粉 B



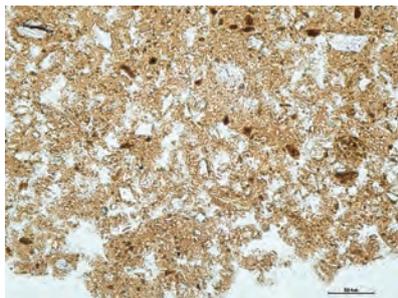
14-3 図 比較試料 3. 山科赤砥粉 A



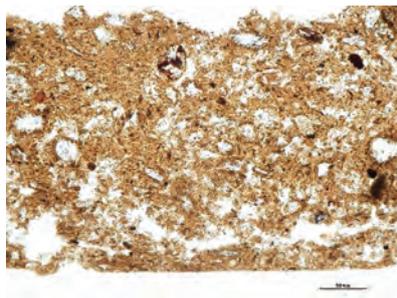
14-4 図 比較試料 4. 山科赤砥粉 B



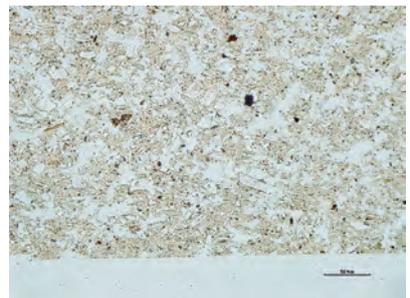
14-5 図 比較試料 5. 山科白砥粉



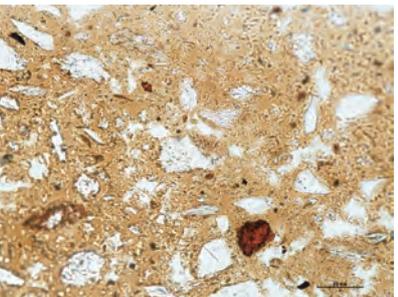
14-6 図 比較試料 6. 山科黄砥粉



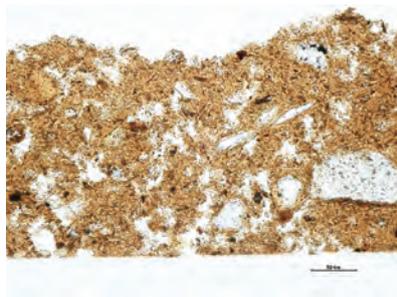
14-7 図 比較試料 7. 上山科赤砥粉



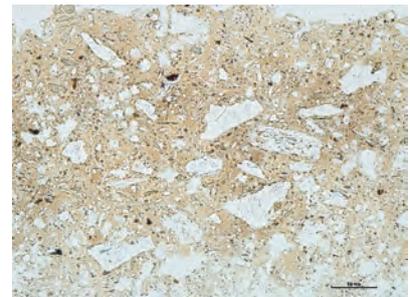
14-8 図 比較試料 8. 鳴滝砥粉



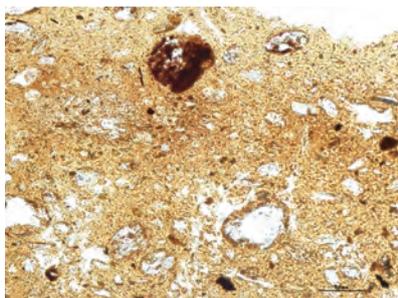
14-9 図 比較試料 9. 山科地粉 A + 山科赤砥粉 A



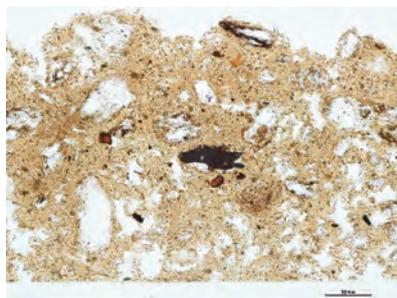
14-10 図 比較試料 10. 山科地粉 A + 山科赤砥粉 B



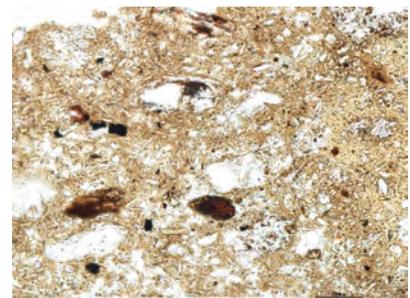
14-11 図 比較試料 11. 山科地粉 A + 鳴滝砥粉



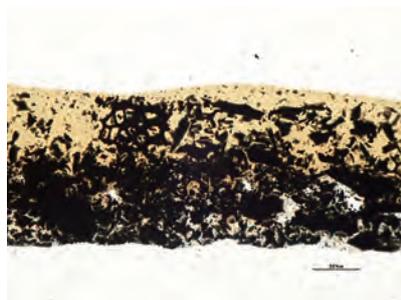
14-12 図 比較試料 12. 山科地粉 B + 山科赤砥粉 A



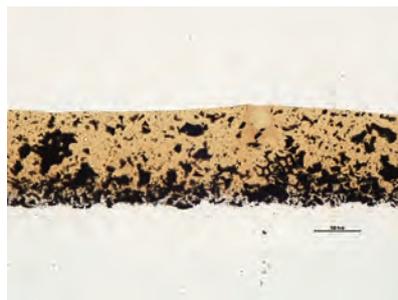
14-13 図 比較試料 13. 山科地粉 B + 山科赤砥粉 B



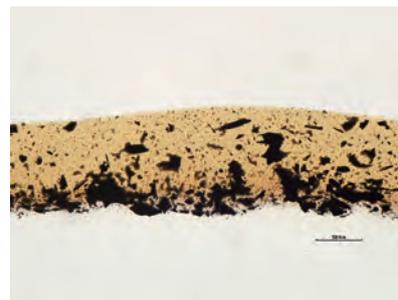
14-14 図 比較試料 14. 山科地粉 B + 鳴滝砥粉



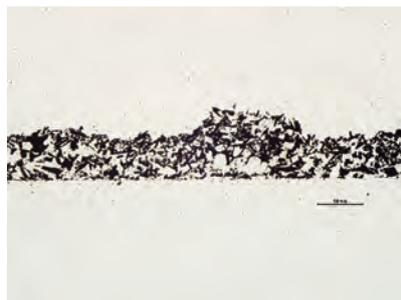
14-15 図 比較試料 15. 炭粉漆
(炭粉：漆=1：2)



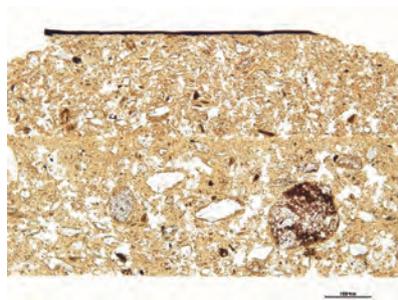
14-16 図 比較試料 16. 炭粉漆
(炭粉：漆=1：4)



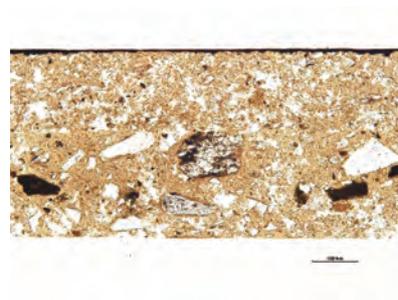
14-17 図 比較試料 17. 炭粉漆
(炭粉：漆=1：6)



14-18 図 比較試料 18. 炭粉液



14-19 図 比較試料 19. 切粉→
山科砥粉→墨汁



14-20 図 比較試料 20. 切粉→
山科砥粉→油煙+柿液

チャート記号	同定した物質	JCPDSカードNo	No.1 山科砥粉 (赤)	No.2 山科砥粉 (白)	No.3 山科砥粉 (黄)	No.4 山科砥粉(赤 ペンガラ)	No.5 堤山科赤砥粉
A	SiO ₂ (α-Quartz) 石英	46-1045	冊	冊	冊	冊	冊
B	KAl(Si ₃ Al)O ₁₀ (OH,F) ₂ (Muscovite) 白雲母	6-263	+	+	+	+	+
C	(Mg, Fe, Al) ₃ (Si, Al) ₄ O ₁₀ (OH) ₂ (Clinoclone) 微斜長石	16-362	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
D	KAlSi ₃ O ₈ (Microcline) 微斜長石	19-932		(+)	(+)	(+)	(+)
E	Al ₂ Si ₂ O ₅ (OH) ₄ (Kaolinite) 荊芥土	14-164			(+)	(+)	(+)
F	Mg ₃ Si ₆ O ₁₅ (OH) ₂ · 6H ₂ O (Sepolite) せせり土	13-0595					
G	CuAl ₂ Si ₂ O ₈ (Anorthite) 灰長石	41-1486		(+)			
H	Fe ₂ O ₃ (Hematite) 赤鉄鉱	33-664				(+)	

チャート記号	同定した物質	JCPDSカードNo	No.6 鳴滝砥粉	No.7 堤上山科 赤砥粉	No.8 山科地粉	No.9 堤山科地粉
A	SiO ₂ (α-Quartz) 石英	46-1045	冊	冊	冊	冊
B	KAl(Si ₃ Al)O ₁₀ (OH,F) ₂ (Muscovite) 白雲母	6-263	冊	+	(+)	+
C	(Mg, Fe, Al) ₃ (Si, Al) ₄ O ₁₀ (OH) ₂ (Clinoclone) 微斜長石	16-0362			(+)	(+)
D	KAlSi ₃ O ₈ (Microcline) 微斜長石	19-932		(+)	(+)	
E	Al ₂ Si ₂ O ₅ (OH) ₄ (Kaolinite) 荊芥土	14-164	(+)	(+)	(+)	(+)
F	Mg ₃ Si ₆ O ₁₅ (OH) ₂ · 6H ₂ O (Sepolite) せせり土	13-0595	(+)			

相対強度 冊非常に強い 冊強い 冊中位 十弱い (+)非常に弱い

表6 地粉、砥粉のX線回折分析結果

6. 考察

6.1 比較試料からの検討

調査資料の断面観察結果 (4.1) 及び比較試料の断面観察結果 (5.2.3) との比較より、以下に考察していく。

(1) 鉍物を混和した下地

地粉下地の比較試料 1、2 (14-1、14-2 図) には、層中に 100 μm を超える粗い鉍物粒子が高密度で混和されていた。一方、調査資料 (No. 194 2-1 図他) では、粗い鉍物粒子は散見されるのみであった。これより、調査資料の中には地粉のみで作製された下地は認められないと推定した。

砥粉下地の比較試料 3～8 (14-3～14-8 図) では、層中に 50 μm を超える鉍物粒子は見られなかった。これより、調査資料で 50 μm 以上の鉍物粒子が見られない資料は、砥粉下地と推定した。

切粉下地の比較試料 9～14 (14-9～14-14 図) は、細かな鉍物粒子の間に、100 μm 前後の粗い鉍物粒子も散見された。調査資料 (No. 194 2-1 図、197 3-1 図等) と比較すると、これと同様な鉍物の混和状態が確認された。これより、調査資料で細かい鉍物粒子の中に 100 μm 前後の粗い鉍物粒子が散在する資料は、切粉下地と推定した。前述したように、研究対象にした資料には、珪藻土が含まれている切粉は確認できなかった。分析対象資料には、輪島で製造された漆器は含まれていない可能性が高い。

(2) 炭粉下地

炭粉と柿渋を混和した比較試料 18 (14-18 図) では、炭粉粒子の間に空隙が認められ、調査資料にも、このような空隙を持つものを確認することが出来た (No. 62 内面他)。また、調査資料の中には、下地層の上方に茶褐色や淡褐色の膠着剤が見られ、下地層の上端から層に垂直に入る亀裂が認められる資料があった (No. 113 内外面他)。この亀裂については、柿渋が乾燥する際の体積収縮によって現れる¹⁾ との見解がある。このような亀裂は比較試料 18 には見られなかったが、柿渋の濃度や渋下地の技法による相違ともいえる。調査資料の断面観察において、炭粉粒子間の空隙、層の上方に亀裂が確認されることなどから、本遺構から出土した炭粉下地には柿渋が用いられた可能性が高いと推察される。ここで、近世漆器では最も簡便な技法とされる膠下地も行なわれていた。この技法についても、その始原なども含め今後検討していく必要がある。

また、炭粉の膠着剤として漆が用いられた可能性もあるため、漆と炭粉を混和した手板を作製した。比較試料 15～17 (14-15～14-17 図) は、黄褐色の層の中に炭粉が混和しているのに対し、調査資料ではこのような黄褐色の層は認められなかった。また、炭粉の混和状態は、漆と炭粉を 2 対 1 で混和した比較試料 15 と調査資料を比べると、調査資料の方が、炭粉粒子の混和状態は密である。しかし、漆と炭粉が 1 対 1 での混和は不可能だったため、これ以上の比で炭粉が多く混和されることは考えにくい。また、100 μm 以上の炭粉を漆と混和して塗布することは困難である²⁾ という見解もある。ここで、漆を塗布し炭粉を蒔く技法もあるが、本稿ではこの手板の作製はしなかった。調査資料の中で、炭粉漆の可能性は低いと推察するが、炭粉下地技法で蒔地など他の方法で施工した可能性もあり、炭粉下地技法の詳細な検討は今後の課題である。

調査資料の炭粉下地に用いられた炭粉には、No. 35、No. 55 等に見られるような木材の組織を残すような粒子と、No. 12、No. 32 等に見られるような 5～15 μm の木材組織の見られない細かい粒子が認め

られた。実験で使用した 106 μm の篩いを通過した炭粉は、20 μm 以上の粒子や、木材の組織を残す粒子が含まれている。106 μm の篩いを用い、炭粉を通過させることは、篩いの目が詰まりやすく、困難であった。このことから、調査資料で見られた 5～10 μm のきわめて細かい炭粉の作製方法も今後の検討課題である。

(3) 黒色物質が認められる上塗薄層

比較試料 19 (14-19 図) は、切粉下地の上に砥粉下地、そして墨汁を塗布した。比較試料 20 (14-20 図) は、同様な下地の上に柿渋と油煙を混和したものを塗布した。しかし、この両者の断面を光学顕微鏡で比較しても明確な違いは見られず、墨汁か油煙かの特定は断面観察のみでは不可能だった。対象資料の調査結果で黒色物質が密に混和した薄層はこの両者と酷似していたが、特定は難しく、今後の検討課題とした。

黒色物質が密に混和した薄層について、沢口氏は、下地の透過を避ける目的で行われたと述べている。このような薄層が鉍物下地の上に認められた調査資料は、内面 14 点、外面 18 点確認された。黒色物質の薄層は、砥粉下地、切粉層の上に砥粉層をもつ下地、炭粉層の上に砥粉層をもつ下地に見られ、下地の種類に偏りは見られなかった。この薄層を有する上塗は、内面 No. 7、No. 71、No. 129、No. 786 の赤色を呈する上塗層 4 点、外面 No. 71 の緑色を呈する上塗層 1 点を除き、27 点が表面観察で黒色を呈する上塗りであった。本層の役割については、上塗りの黒色層に混和物が見られないことを考えると、沢口氏が述べている通り、下地の透過を防ぎ、表面をより黒色にするために行われたと推定された。このような黒色物質の薄層は、金沢市内の木ノ新保遺跡 (四柳 2002 : 537-578 頁) や、加賀市八間道遺跡 (四柳 1996 : 251-260 頁) から出土した漆製品に見られるが、調査結果では上塗りの黒色顔料が沈殿した層と報告されている。しかし、今回、赤色の上塗りの塗膜からも、黒色物質の薄層が確認されており、上塗りの黒色顔料が沈殿したのではなく、黒色色材を混和したものを塗布したとするのが妥当であると考えられる。

6.2 下地および上塗り技法

(1) 下地技法

調査対象資料の下地技法を分類するにあたり、前述 4.1 (1) ①No. 131 外面の繊維混和下地、および ⑥No. 7 外面の布着せ下地について考察する。①の繊維混和下地は、No. 131 の他の内外面下地試料には認められなかった。塗装工程で、素地の損傷箇所を木屎漆で補修する技法がある。本試料も、このような補修箇所と推定された。⑥の布着せは、内面試料には認められなかった。布着せは、口縁部、見込み、高台など損傷を受けやすい箇所のみ部分的に施すものと、器体全体に施す総布着せの技法がある。本資料の場合は、部分的に施したものと推定した。布着せ試料は 1 点のみであったが、サンプリングの部位によっては、増える可能性がある。

上記の点をふまえ、表 7 に調査資料の下地と器種および樹種の関係を示した。各器種、樹種別の下地の塗装技法を大まかに 6 種類に分類した。この表では、内外面で塗装回数が異なる下地層の場合は、多い方 (No. 7 や No. 199 など) を採り、また、切粉、砥粉など同じ材料で複数回塗装している場合でも単数で表記した。

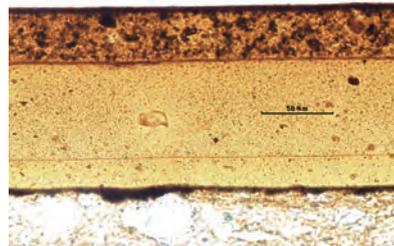
この 6 種類の下地の中で、炭粉層のみは 78 点で 7 割弱を占め、炭粉層に砥粉層を重ねた 14 点の 1 割強を加えると、調査資料の 8 割が炭粉下地といえる。炭粉層の上の砥粉層は比較的薄く (No. 110 等)、砥粉下地は表面を平滑に整える目的で用いられたと考えられる。また、砥粉層が重ねられた塗膜の状態は、炭粉下地のみには比べ劣化が少なく堅固だった。これらのことから、炭粉層に砥粉層を重ねた下

下地構成	トチ							ブナ				ケヤキ							カヅラ属			モクレン属	不明					下地別総数				
	飯椀	汁椀	平椀	腰高	壺椀	飯汁椀蓋	壺平椀蓋	飯椀	汁椀	腰高	飯汁椀蓋	飯椀	汁椀	平椀	腰高	壺椀	杯	皿鉢	飯汁椀蓋	壺平椀蓋	飯椀	汁椀	杯	飯椀	汁椀	平椀	壺椀		杯	飯汁椀蓋		
炭粉下地	9	15	1	2	3	12	1	10	6	1	9	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	3	1	1	0	0	78
炭粉下地→砥粉下地	1	0	2	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	14	
布→炭粉下地→砥粉下地	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
切粉→炭粉→砥粉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
切粉→砥粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	0	2	3	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	15		
砥粉	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5		
器種別合計	10	17	3	2	3	14	3	10	6	1	9	2	2	2	1	4	8	1	2	3	1	1	1	1	4	1	1	1	1	115		

表7 下地と器種および樹種の関係



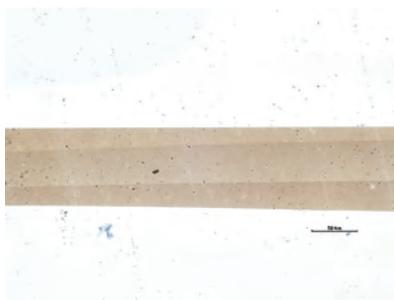
15-1 図 No.182 外面黒色上塗り



15-2 図 No.182 上塗り黒色層の拡大



16 図 日本産呂色漆・無油



17 図 中国産塗り立て漆・有油



18 図 油煙+漆

地は、炭粉層だけの製品より、やや吟味して作られたと考えられる。

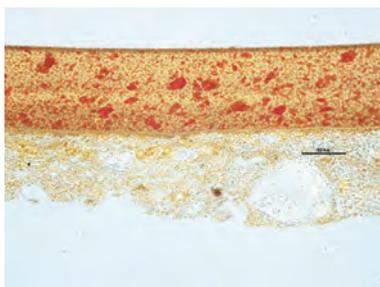
ここで、切粉下地の上に炭粉下地を重ねる当該時期の技法は、管見では他の遺跡出土漆製品に類例は認められず、その目的や効果も不明である。漆器はある一定期間使用すると上塗りが劣化するため、塗り直しをして再度使用する。塗り直しの技法は様々あるが、劣化した上塗りと下地を研磨し、下地層から塗り直す技法がある。本資料 (No.7 およびNo.199) も塗り直し時に、劣化が進んでいない切粉下地を残し、短期間で仕上がるより簡便な炭粉と砥粉で下地を調整したと推察される。

本調査で確認された下地のうち、切粉と砥粉で調整された下地が一番吟味された下地であった。この下地で調整された試料は、15点認められた。現在、漆塗りの最上の方法として一般的に知られる本堅地の下地層塗装工程は、地付け (地粉下地) 2回、切粉付け (切粉下地) 2回、錆付け (砥粉下地) 1回程 (沢口 1966 : 235-236 頁) である。今回調査した試料の下地工程は、地付けを省き、切粉下地からとなっている。材料と製作時間を削減するための工夫と考えられ、本遺構から出土した最も吟味された漆器でも、本堅地を簡略化した技法を用い製作したものである。

(2) 上塗り技法

目視による表面観察で上塗の色調は、黒色、赤色、緑色、茶色が認められた。

表面が黒色を呈する上塗層のうち、断面観察で黒色顔料粒子の混和が明確に確認できたのは、No.182 外面 1 点のみだった (No.182 15-1、15-2 図)。その他の黒色試料には、層中に明瞭に確認できる



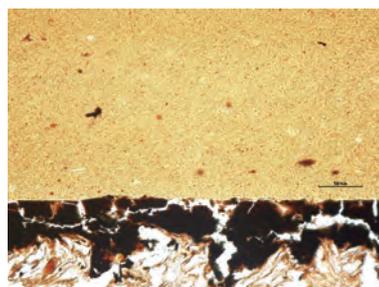
19 図 No.131 内面、Hg を混和した赤色層



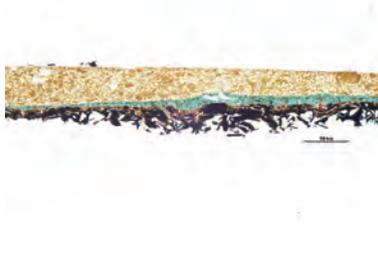
20 図 No.72 外面、Fe を混和した赤色層



21 図 No.135 外面、Fe と Hg を混和した赤色層



22 図 No.39 内面、Fe を混和した茶色層

23 図 No.71 外面、As-s を混和した
緑色層24 図 No.166 外面、緑色層と As-s を
混和した黄色の加飾層25 図 No.178 外面、As-s と 藍を混和
した緑色層

黒色顔料粒子は認められなかった。ここで、現在市販されている2種類の黒色漆(16図 日本産呂色漆、17図 中国産塗立て漆)、および油煙を混和した漆(18図 油煙を混和)の薄片断面を示す。市販の黒漆は鉄剤を色材として用いたもので、数 μm まで観察可能な本調査機器では黒色粒子として観察は不可能である。これに対して、油煙は黒色粒子として確認可能であった。黒色の油煙のような上塗層に顔料を混和することは、本遺構から出土した漆製品では、あまり行われなかったと考えられる。

表面観察で赤色を呈する上塗層には、EPMA分析の結果Hgが検出された塗膜(No. 33 外面、No. 41 内面、No. 60 内面、No. 131 内面:19図、No. 155 内面)と、Feが検出された塗膜(No. 72 内面:20図)があった。この両者の断面を比較すると、Hgが検出された赤色混和物は粒子が粗く半透明状であるのに対し、Feが検出された赤色混和物は $1\mu\text{m}$ 以下の微粒子が層中に満遍なく混和していて、 $10\mu\text{m}$ 程度の粗い粒子が散見された。このことから、EPMAでHgが検出された塗膜断面と、赤色混和物の性状が類似していたNo. 89、No. 120、No. 137、No. 221、No. 690については、赤色の色材は朱である可能性が高いと思われる。一方、No. 72の内面とX線回折によってHgSと Fe_2O_3 の両方が検出されたNo. 135外面(21図)は、断面観察で赤色混和物の状態等に違いは見られなかった。このことから、弁柄のみが使用された試料と、弁柄と朱を混和した試料を断面観察で判断することは困難であると判断した。

表面観察で茶色を呈する上塗層には、No. 13、No. 39(22図)の2点で赤色微粒子の混和が認められた。この2点はX線回折の結果、 Fe_2O_3 が検出された。赤色微粒子の混和状態を断面観察からみると、

No.13、No.39 は密度が低く、粒子も細かい。このことから、茶色を発色させるために、漆に弁柄の量を色味に合わせて調整して加えるという技法が用いられていたと推定された。

表面が緑色を呈するNo.71の外面(23図)上塗層から、EPMAによる分析の結果As-S(石黄)が検出された。No.71の薄片断面で観察された石黄の粒子が、No.166、178の外面(24、25図)にも緑色層として確認された。緑色を発色するためには石黄に藍を加える方法があるが、No.178外面では、石黄の粒子と藍の色材と推測されるものが混和している様子が認められた。No.606外面のX線回折の結果からは、As-Sは検出されなかったことから、今後これらの資料についても詳細な分析を行い、検討していく必要がある。なお、No.166には、緑色層の上に黄色(石黄)の加飾が確認された(24図)。

上述の考察をもとに、表2に各資料の上塗塗膜構成の調査結果を整理した。断面観察で得られた結果は内外面上塗り層欄に、目視観察で得られた上塗りの色調は「塗り(色調)」の欄に記した。赤色を呈する上塗りには分析の結果Hg、またはFeのみ、およびHgとFeが混和の3種類が確認された。前述したように、Feのみ、FeおよびHgが混和された赤色漆の断面観察からの同定は難しい。このため、赤色材が混和された上塗りはすべて「赤色漆」とした。同定した結果は、備考欄にHg、Fe(EPMA分析の場合)、Fe₂O₃(X線回折分析の場合)検出とそれぞれ記入した。顕著な混和物が認められない層は「漆」と表記した。前述したように、目視観察で茶色の色調に見えても断面観察からはとらえにくく、漆層とほぼ同様な性状を呈していた。このため、色調に茶色となっている試料でも、断面観察では「漆」と表記した。黒色材、緑色材および黄色材が混和されたものは、「黒色漆」「緑色漆」「黄色漆」とした。

6.3 器種別の下地塗膜の特徴

器種および樹種別に下地技法に現れた特徴をまとめた表7より、飯椀では24点のうち、炭粉下地は砥粉下地を併用した1点を含む22点確認され、鉾物下地は2点のみである。トチ、ブナ材を用いた飯椀はすべて炭粉下地で、鉾物下地はケヤキ材のみに使用されていた。鉾物が確認されたケヤキ材のNo.120、No.194は、切粉下地に砥粉下地を重ねた下地で、簡略化された本堅地と考えられる。

汁椀30点のうち、炭粉下地は25点、炭粉と砥粉併用の下地2点を含めると9割となり、樹種はトチ、ブナ、カツラ材を使用している。鉾物下地は2点で、ケヤキ材と樹種不明資料となり、飯椀と同様な傾向を示している。

杯を除くその他の器種では、ケヤキ材とトチの壺椀・平椀蓋1点(砥粉を使用)を除き、炭粉下地ないしは炭粉と砥粉を併用した下地で調整されていた。ケヤキ材は鉾物下地が14点で、炭粉を用いた下地7点の2倍であった。

杯は9点中7点が鉾物を混和した下地で、2点は炭粉と砥粉を併用している。そのうち5割弱にあたる4点は、切粉下地となっている。ハレの日に使用する漆塗りの杯は、吟味して作られたと考えられる。しかし、上塗りがすべて1層となり、良品でも簡便な作りといえる。試料No.33の杯は、EPMAによって上塗りが朱漆と確認された。No.137、221、690も似通った性状を示す赤色漆で、朱と弁柄の混和が確認されたNo.135を含めると、9点中5点に朱が使われ、より高い割合で朱漆を用いた可能性が見うけられる。

平椀と壺椀の素地には胴部に隆起線の加飾が施されている資料があるため、その下地を比較してみた。平椀では7点中4点(No.127、128、197、198)が有し、その中の3点は鉾物下地でケヤキを、1点は炭粉下地でトチノキを素地に用いていた。壺椀では8点中4点(No.71、131、134、199)が有し、すべて鉾物下地でケヤキの素地を用いていた。平椀、壺椀の隆起線がない資料は、すべて炭粉下地で、

不明2点を除いた他はトチノキの素地を用いていた。

なお、調査資料では蒔絵の加飾の有無によって、下地や上塗りに大きな違いは認められなかった。

6.4 樹種別による下地調整技法

下地構成と木の樹種の間を関係を表8に示す。

判明した樹種の中で、ケヤキ材のみが切粉、砥粉を混和して調整した鉾物下地を有し、一番吟味した作りになっている。これに較べ、ブナ、モクレン属は炭粉のみで一番簡便な作りである。対象資料の四分の一量を占めるブナはより安価な器物として用いられ、これに較べケヤキは器種も豊富で、様々な吟味した漆器に使用された素地素材といえる。

ケヤキ材で製作し吟味した器物でも、布着せした資料は分析対象資料に認められなかった。対象資料で部分的に布着せを行った可能性もあるため、サンプリング部位では数値が変化する可能性がある。しかし、総布着せは行っていなかったと推定された。

下地構成	トチ		ブナ		ケヤキ		カツラ		モクレン		不明	
	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外	内	外
	面	面	面	面	面	面	面	面	面	面	面	面
炭粉	44	44	26	26	1	1	2	2	1	1	5	5
炭粉→砥粉	6	6	0	0	7	6	1	1	0	0	1	1
布→炭粉→砥粉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
切粉→炭粉→砥粉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
切粉→砥粉	0	0	0	0	12	13	0	0	0	0	2	2
砥粉	0	2	0	0	5	5	0	0	0	0	0	0
合計	52		26		25		3		1		8	

表8 分析資料の下地構成と素地の樹種

7. まとめ

前述したように、以下の事項が本研究において確認された。

- ①これまで区別が曖昧であった、地粉下地、切粉下地、砥粉下地について、手板の作製を行ったことで、この3種の混和状態がより明確になった。本遺構からは大きく分け、炭粉下地、砥粉下地、炭粉→砥粉下地、切粉→炭粉→砥粉下地、切粉→砥粉下地の5種類を確認することができた。
- ②黒色微粒子の薄層は手板の作製から、墨汁等を下地の上に塗布した可能性が高いことがわかった。また、この薄層を施すことが上塗りの色調に影響を与えることから、上塗りに関連した技法であることがわかった。
- ③分析の結果、緑色漆に石黄（As）が含まれることを確認した。
- ④平椀、壺椀については、出土した資料のうち約半数を調査したが、隆起線の加飾を持つ資料は鉾物下地が多くケヤキの素地を、加飾を持たない資料には炭粉下地が多くトチノキの素地を使用する傾向が認められた。この特徴については、今後調査点数を増やし、検討を行うことが必要である。

⑤大名屋敷の遺構から出土した漆製品においても、炭粉下地が約7割を占め、上塗は一部を除き1層であった。調査結果では本堅地の技法を持つような吟味して作られた資料は無く、鉋物を用いた下地でも、簡略化された技法であった。本遺構から出土した漆製品は、簡便な塗装技法で作られた、量産された漆製品が主体を占めていると考えられる。

調査方法のうち、特に再現実験については、下地材料や塗装工程についてより詳細に文献を検討し、手板を作製する必要があると感じた。また、他の遺跡との比較も今後の検討課題である。本研究により、江戸時代の下地技法の一端が明らかになったが、今後、他の遺跡からの塗膜の断面観察等の詳細な調査結果の報告が増えることで、伝世品からだけでは推し量ることのできない、出土漆製品のより詳細な性格が明らかになると思われる。

謝辞

本稿は平成17年度昭和女子大学大学院生活機構研究科の修士論文「東京大学医学部附属病院棟建設地点SK03遺構出土漆製品の実証的研究」として渡部マリカが執筆したものを基に、樹種等の新たな知見等を加えるなど、再編しまとめたものです。まとめるにあたっては、東京大学埋蔵文化財調査室清水香氏の要望を受けた渡部マリカからの依頼により、武田が執筆し共著としました。清水香氏に断面分析結果の作表や遺跡概要等で、多くの示唆を頂きました。また、同調査室原祐一氏には、修士論文作成時に漆資料の提供と遺跡に関するご助言等を頂きました。機器分析では、FT-IR分析は東京都埋蔵文化財センターの門倉武夫氏（故）、EPMA分析は岩手県立博物館の赤沼英男氏、蛍光X線分析・X線回折は(株)アグネ技術センターの権上かおる氏にそれぞれお世話になりました。ここに記して、感謝いたします。

【註】

- 1) 永嶋氏は顕微鏡所見として「柿渋を用いた場合、膠着物に漆ほど充填性が見られず、炭粉に絡みつような付着物が観察でき、また、淡褐色層が炭粉層上部を覆い、この淡褐色の層には体積収縮による亀裂が層方向に垂直に見られる」ということを述べている（永嶋1987：680頁）。
- 2) 岡田氏は漆工芸家の北村昭斎氏の話として、「木炭粉の大きさが100μmを超えると漆と混和して塗布することは困難で、漆の上に蒔きつけるほうが容易」と記している（岡田1995：90頁）。

【引用文献】

- 今泉辰次郎 1925「漆塗法」『実用塗工術』鈴木書店
- 岡田文男 1995「第2章漆塗膜の材質及び製作技法の研究」『古代出土漆器の研究 顕微鏡で探る材質と技法』京都書院
- 奥野春雄 1973「1 ケイ藻・ケイ藻土・地の粉」『輪島市史資料編』第6巻輪島漆器資料 北国出版社
- 京都府中小企業総合研究指導所 1978「1.産地のあらまし」『山科砥の粉製造産地の現況と課題』
- 沢口悟一 1966「1 漆下地」「1 材料」『日本漆工の研究』美術出版社
- 清水 香 2016「大聖寺藩上屋敷跡 廃棄土坑SK3から出土した17世紀の木製品」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟A地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室（編）2016『医学部附属病院入院棟A地点報告編』第1分冊 東京大学埋蔵文化財調査室
- 永嶋正春 1987「中世出土漆器の塗膜層構成について」『西川島一能登における中世村落の研究』穴水町調査委員会

- 成瀬晃司 2003「大名藩邸における廃棄の一例－災害と造成からみた－」『江戸遺跡研究会第16回大会 遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会
- 山内 明・阿佐見徹 1983「京漆器の材料・工具・技術」『京漆器 近代の美と伝統 資料編』光琳出版
- 吉田光邦 1973「万金産業袋巻之三」『万金産業袋巻（三宅也来）』生活の古典叢書5
- 四柳嘉章 1996「八間道遺跡出土漆器の塗膜分析」『八間道遺跡－公立加賀中央病院改築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査』石川県加賀市教育委員会
- 四柳嘉章 2002「金沢市木ノ新保遺跡出土漆器の科学分析」『木ノ新保遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター

東京大学本郷構内の遺跡より出土した緑色系漆碗の科学分析

本多 貴之・増田隆之介・宮腰 哲雄

はじめに

緑漆を利用する漆器の例としては、沖縄県久米島に伝来する『緑漆鳳凰雲沈金丸内櫃』（県指定文化財）が挙げられる。この作品は1500年頃の作とされており、現存している緑色漆を利用した漆器としては大変古い物でありその作品的な価値も大変高い。緑色の漆は漆に岩緑青もしくはアタカマイトを使用した例も知られているが、多くは顔料としてヒ素（硫化ヒ素、石黄）を、染料として藍を利用している場合が多い（室瀬 2002）。

一方、民間に広く利用されている漆碗において、その碗全体を緑色の漆で塗った緑色碗の出現時期については北野の調査に詳しく述べられている。そこで、享保年間（1716～1736）に会津で人造石黄の製造が開発されたこと、それ以降「会津絵」などに代表される多彩な色漆による近世会津塗の加飾漆器の生産が可能になったことが記録された文献史料を根拠として（北野 2005）、これまで碗全体を緑色に塗った碗については享保年間以降の作であると考えられてきた。

しかし、元禄 16（1703）年が下限とされる遺構である東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 から多量の緑色系漆碗が発見されたため、これらの碗に利用された漆の顔料やその塗装方法について調査する必要性が生じた。

東京大学医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 は、元禄 16 年（1703）以前に一括廃棄されたと考えられる大形遺構である。この遺構の大きさは南北に約 50 m、東西に約 20 m、深さ最大 5 m である。この遺構はブロック状の泥炭が上層から下層にかけて存在しており、覆土からは日常生活に用いられた陶磁器や工具といった木製品が多く出土している。これら木製品の一部として漆碗が各層位から発見され、その中には多くの緑色碗も認められた。緑色碗は漆碗の出土総数に占める割合が少ないため調査事例自体が少なく、これまでに緑碗の産地同定や製作技法についての詳細は明らかになっていない。

本研究では緑色碗の科学分析を行い、材料や製作過程を推定し緑色系漆の基礎データの構築を目的として、今回は材料や製作過程について追究した。

1. 分析試料について

東京大学本郷構内の遺跡から出土した緑色系漆碗（No.1-No.14）について分析用に採取した微小片 20 点を分析対象とした。試料リストを表 1 に示す。

2. 分析手法

2.1. クロスセクション分析

試料薄片の作成手順としては試料をプラスチックサンプルクリップ (Buehler) で挟んで垂直に立て、透明な 53 型埋込用エポキシ樹脂 (Pelnox) で包埋した。次に 27 × 46 mm スライドガラス (松浪工業株式会社) に接着し、粒度の異なる耐水性サンドペーパー (Buehler, #400, 600, 800) とアルミナパウダー MasterPrep Polishing Suspension 0.05 μm (Buehler) を用いて自動研磨機 AutoMet 250 (Buehler) で層構造が観察できるまで研磨した。

透過光、反射光、偏光下での断面の光学像を得るために偏光顕微鏡 Eclipse LV 100 POL (Nikon) に接続されたデジタルカメラ α NEX-7 (SONY) を用いた。倍率は試料の大きさによって 50 - 500 倍まで適宜変更した。偏光下での観察では波長 530 nm の偏光板 (Nikon) を顕微鏡に挿入した。

2.2. ED-XRF (エネルギー分散型蛍光 X 線分光分析)

試料に用いられている材料や顔料を特定するために元素分析を行った。測定は X 線分析顕微鏡 XGT-5200 (Horiba) を用いて行った。これは Rh ターゲットを備えた X 線導管 (最大 50 kV 1mA) とシリコンドリフト検出器を備えており、検出可能な元素は周期表番号 11-92 (Na - U) までである。測定は定性分析において X 線導管径は 100 μm とし、測定時間は 100 秒から適宜延長した。マッピング分析において X 線導管径は 10 μm、測定時間は 1200 秒とし、積算回数は適宜変更した。

2.3. Py-GC/MS (熱分解ガスクロマトグラフ質量分析)

試料に含まれる材料および漆の詳細な成分分析を行うために Py-GC/MS 分析を行った。この測定に供した試料は 0.1—0.3 mg 程度である。測定に使用したのは熱分解装置 PY-3030D (株式会社フロンティアラボ) を接続したガスクロマトグラフ質量分析計 6890N/5875 GC/MS system (Agilent Technologies) である。使用カラムは 30 m × 0.25 mm × 0.25 mm の Ultra ALLOY-1 (MS/HT) (株

サンプル ID	遺跡地点名	遺構名	層位	器種	サンプリン グ位置	色 (肉眼観察)	個別番号	図版No.	遺物No.
1-1					高台畳付	緑	77		
1-2	工学部3号館	SD459	一括	椀	外面	緑	77		
1-4					外面	緑	77		
2-2				椀蓋	外面	緑	75		
3-2	入院棟A地点	SK3	D2	椀	外面	緑	69		
3-3					外面	緑	69		
4-2			D3	椀	外面	緑	669		
5-1	工学部3号館	SK364	一括	椀蓋	外面	緑 (黄色)	85		
5-3					摘み内面	緑 (黄色)	85		
6-2				平椀	外面	緑	178	165図	295
7-2			D4	椀	外面 (高台)	緑	380	164図	276
7-3	入院棟A地点	SK3			外面	緑	380	164図	276
8-1			D2	壺椀	外面	緑	71	165図	282
8-5					不明	不明	71	165図	282
9-2	国際科学 イノベーション	SK270 (Hf157)	下層	椀	外面	緑	246-42		
10-1			下層	飯椀	外面	緑	246-20		
11-1			D2		外面	緑	360	173図	447
12-2	入院棟A地点	SK3	一括	椀蓋	外面	緑	222	168図	367
13-1			D1		外面	緑	51	168図	365
14-1			D2		不明	不明	166	168図	360

表 1 緑色系漆椀 試料リスト

式会社フロンティアラボ) である。測定はスプリットモードで行い、スプリット比は 20 : 1 とした。インジェクション温度とインタフェース温度は共に 280° C で維持し、オープン温度は 40° C で 2 分間保持した後、12° C/min で昇温、320° C に達した後 10 分間保持した。キャリアガスとしてヘリウムを用いて、一定流量として 1.0 mL/min を保った。測定範囲は m/z 29-800 で、イオン化法は EI である。得られたデータは解析ソフト MSD ChemStation で解析した。

3. 結果と考察

まず、今回分析に用いた試料から得られたクロスセクションの結果に基づいた製作工程の一覧を 1 図に示す。全体に共通している事として、

1. 下地に炭下地を主体的に用いている
2. 入院棟 A 地点 SK3 から出土した 13 点のうち 9 点が炭下地の上に緑漆を 1 層のみ塗っているの 2 点が挙げられる。唯一、炭下地を用いていない No.8 (8-1、8-5) は下地にあたる部分に濃い黒色層が確認でき、下地に「黒くする」という役割を持たせている点においては同一である。緑色の塗りについては、SK3 は単純な 1 層塗りであるが工学部 3 号館から出土した碗は緑の塗りの下に赤の塗りが施されている点で異なっていた。SK3 の 3-2 と 3-3 は下の緑の層の上に含量を含まない層と黄色の層、緑の層の重ね塗りが行われているが、これは元々緑碗であったものを塗り直したために生じた層ではないかと思われる。また、最表面が黄色の下塗りには顔料を含まない漆が利用されていた。一方で、最表面か否かにかかわらず黄色の塗りの層には藍が含まれている場合と含まれていない場合が存在していたことから、黄色漆はその場で色味を確認しながら調整されていたと考えられる。このような複数層の塗りにおいて、最終的な仕上げとして見せたい色以外を塗る理由としては以下の可能性が挙げられる。

- ① 内外面を一度赤色に塗ってしまい、その後に緑色を塗布した。
- ② 緑の下に赤を入れることでより深い緑に見せたい為に行った。
- ③ 顔料入りの漆を厚く塗ることで、下地の代わりとした。

いずれの目的であったとしても、朱漆は赤の中では高価な顔料である水銀朱を利用していることから、このような違いが生まれた理由を考えると、

- ① 製作年代が異なるため、技法が変化した。
- ② 工学部 3 号館の出土資料については、朱漆を下地に使った色味が好まれて購入された。

なお、個別のクロスセクション画像については末尾に掲載した。

今回、塗装の順序を確認するためにサンプル ID12-2 から内面 (赤色) - 口縁部 (褐色) - 外面 (緑色) にかけて広く試料を採取し、その断面を広く分析した (写真 1)。写真 1 左図において白枠で囲んだ部分には胎である木の繊維が確認できた。塗膜層の木胎側には炭下地が塗膜全体に存在していることが確認できる。また、赤枠部分を拡大して確認すると、炭下地とそこに食い込む形で残っている木胎の上にうっすらとではあるが緑の塗りが認められる。その上に赤色の塗りが行われた後に褐色の塗りが認められた。比較として、サンプル ID11-1 についても同様な分析を行った。12-1 との相違点として、緑漆の層が厚く残存していたことから緑漆を塗った後の研ぎが省かれているものと思われる。これらの結果を統合すると、

1. 木胎に炭下地を施す。

2. 外面に緑色を施した後に一度研ぎを行い、内面に赤色の塗りを施す。
3. 口縁部を一度研いだ後に、褐色（顔料を含まない漆）の漆を口縁部に施す。

の手順で漆椀を作成していたことが明らかになった。

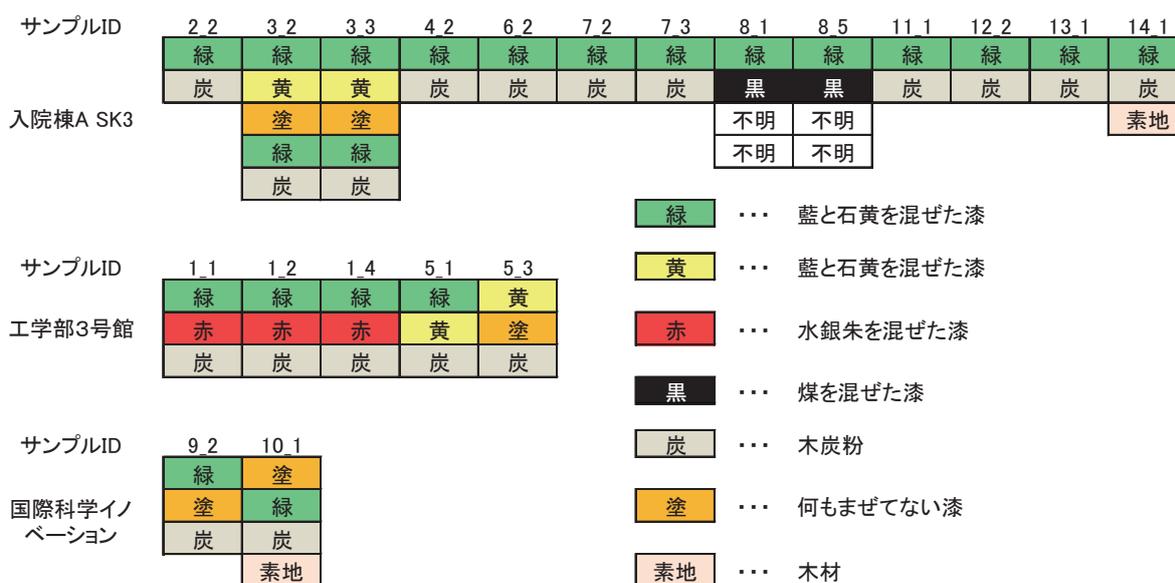
同試料（サンプル ID12-2）について、ED-XRF を用いたマッピング分析を行った（2 図）。緑色部分については硫黄とヒ素が、赤色部分については鉄が検出されたことから、緑色は硫化ヒ素、赤色は弁柄を利用していることが示された。国際科学イノベーションから出土した赤色漆が水銀朱を利用していたことから、工学部 3 号館の出土遺物との間で差異があることも明らかになった。

次に、Py-GC/MS を用いた漆種や顔料の分析を行った。今回の漆椀に用いられていた漆液はいずれも日本・中国に生育している” *Toxicodendron vernicifluum* ” であることが分かった（3 図）。東アジア・東南アジアでは漆として 3 つの樹種が利用されている。日本・韓国・中国に生育する” *Toxicodendron vernicifluum* ”、台湾・ベトナムに生育する” *Toxicodendron succedaneum* ”、タイ・ミヤ

ヒ素の個数 (As)	硫黄の個数 (S)				
	0	1	2	3	4
0	0	32	64	96	128
1	75	107	139	171	203
2	150	182	214	<u>246</u>	278
3	225	257	289	<u>321</u>	353
4	300	332	364	<u>396</u>	<u>428</u>

* 分子量は小数点 1 桁を四捨五入して算出している

表 2 硫化ヒ素における硫黄とヒ素の組み合わせによる分子量一覧



1 図 今回の分析に用いた試料の断面層序一覧

ンマーに生育する” *Gluta usitata*” である。江戸期にはすでに海外の漆が輸入されていたことも知られているが（北野 2010）、今回の漆器群はそれら輸入漆を利用した物では無いことが明らかとなった。

また顔料としては工学部3号館からの出土品には水銀朱が、緑の部分には硫化ヒ素を利用していることが明らかになった。硫化ヒ素は As_xS_y で示され、 x と y は整数でありその値によって様々な名称で呼ばれる。たとえば雄黄は As_2S_3 、鶏冠石は As_4S_4 で示される。緑漆の原料である硫化ヒ素についてその硫黄とヒ素の比率について検討すると、工学部3号館の出土品と他の遺構の出土品では明らかな差異がある事が分かった（4図）。具体的には、工学部3号館の試料には分子量 321 (As_3S_3) および 428 (As_4S_4) のピークが存在しているのに対して、他の遺構の試料には 321 と 428 は存在しないもしくは極微弱にしか存在せず 396 (As_4S_3) のピークが強くなっている点である。

黄色の顔料として知られている硫化ヒ素は、硫黄（原子量：23）とヒ素（原子量：75）の組み合わせから成り立っており、その個数によって複数種類の分子量が存在する。その組み合わせを表にすると表2のようになる。

実際に鉱物見本として市販されている「雄黄（石黄、オーピメント）」と「鶏冠石」を入手し、Py-GC/MS による測定を行い、比較を行った（4図）。その結果、鶏冠石には微弱ではあるものの分子量 428 (As_4S_4) を含むピークが確認された。雄黄は外観が黄色、鶏冠石は外観が赤色の鉱物であるが、いずれも粉状に粉碎すると黄色に近い色を呈する。さらに、この2種類の鉱物は同一の地脈から採掘されるため、混ざった状態で産出される可能性も高い。しかしながら、今回の試料群については分子量 428 を含むか否かというはっきりとした相違点を確認できたため、異なる硫化ヒ素を顔料として使っている可能性が高いことが示唆された。

なお雄黄は As_2S_3 （分子量：246）、鶏冠石は As_4S_4 （分子量：428）によって成り立っているといわれているが、Py-GC/MS の結果において雄黄は As_4S_3 を示した。これは熱分解時に何らかの反応が引き起こされたためではないかと考えられる。

ここで、『石黄が人造であるか否か』という課題について考えてみると、4図においてサンプル ID1-1 は市販の鶏冠石と似たようなクロマトグラムになっている。一方で、サンプル ID3-2 は A の部分が他とは異なる強度比になっている。このことについて今回分析した緑色碗全体を比較してみると、SK3 と国際科学イノベーションの試料はサンプル ID6-2 と 11-1 以外は A の成分比率が高く、工学部3号館の試料は全て A の成分比率が低いことが分かった。現状、人造石黄は薬品管理の観点から合成で作成することは困難であるが、この差は天然と人造の差に由来する可能性は否定できないであろう。

まとめ

今回分析に供した緑色の漆塗り碗試料について分析を行った結果材料の面では、工学部3号館の試料と他の地点において緑色顔料として用いられた硫化ヒ素の種類に差異があることが明らかになった。さらに、緑色と赤色が共存する部分の分析から、工学部3号館と国際科学イノベーションの2地点の出土遺物について弁柄と水銀朱という異なった赤色顔料を用いていることも明らかとなった。また、黄色顔料である硫化ヒ素についても2種類のパターンがある可能性が示された。

作成工程については、クロスセクションによって塗りの工程を明らかにした。特に、広域なクロスセクションを用いて塗りの順について緑漆→赤漆であることを解明できた。これらの事例により、一般的なクロスセクションは極小片を利用する事例が多かったが、試料の破壊分析が許される状況であ

れば、椀の塗りの技法解明に口縁部の広域分析が非常に有効である事がわかった。
今回は特に” 緑” に着目して分析を行ったが、赤色、黒色等に分析対象を拡大することで、当時の技術の使い分けが明らかにすることが期待出来る。

【参考文献】

- 北野信彦 2005 『近世漆器の産業技術と構造』 株式会社雄山閣
- 沢口悟一 1973 『日本漆工の研究』 美術出版社 p.43-50p.67-68p.163-172
- 江戸遺跡研究会 第16回大会要旨集 2003 『遺跡からみた江戸のゴミ』 江戸遺跡研究会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 『東京大学構内遺跡調査研究年報 2』 1997 年度
- 北野信彦 2005 『近世漆器の産業技術と構造』 株式会社雄山閣 p.64-67
- 金 正華 法政大学 人文科学研究科 史学専攻 国際日本学インスティテュート博士後期課程 2年 修士論文
2013 『漆工芸の産業としての発展の可能性』 法政大学大学院紀要 71 p.69-94
- 伊郷宗一郎 明治大学大学院 理工学研究科 応用化学専攻 2年 修士論文 (2014 年度) 『漆器に用いられた漆種の同定及び琉球漆器の科学分析に関する研究』
- 吉田邦夫 2012 『アルケオメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』 東京大学総合研究博物館 p.224-240
- 服部哲則 2006 『近世出土漆製品の材質・製作技法に関する研究』 東京学芸大学紀要出版委員会 p.224-226
- 杉本史子 2011 『山口県文書館所蔵絵図に使用された色料についての科学的調査』 東京大学史料研究所 p.19-26
- 岡田文男 1995 『古代出土漆器の研究 - 顕微鏡で探る材質と技法 -』 昭和堂印刷所
- Giuseppe Chiavari 『Pyrolysis/Gas Chromatography/Mass Spectrometry of Arsenic Inorganic Compounds』
RAPID COMMUNICATIONS IN MASS SPECTROMETRY, VOL. 9 1995 p.559-562
- 室瀬和美 2002 『漆の文化 - 受け継がれる日本の美』 角川書店 p.35-36
- 北野 信彦 他 2010 『桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査 (II)』 保存科学 p.133

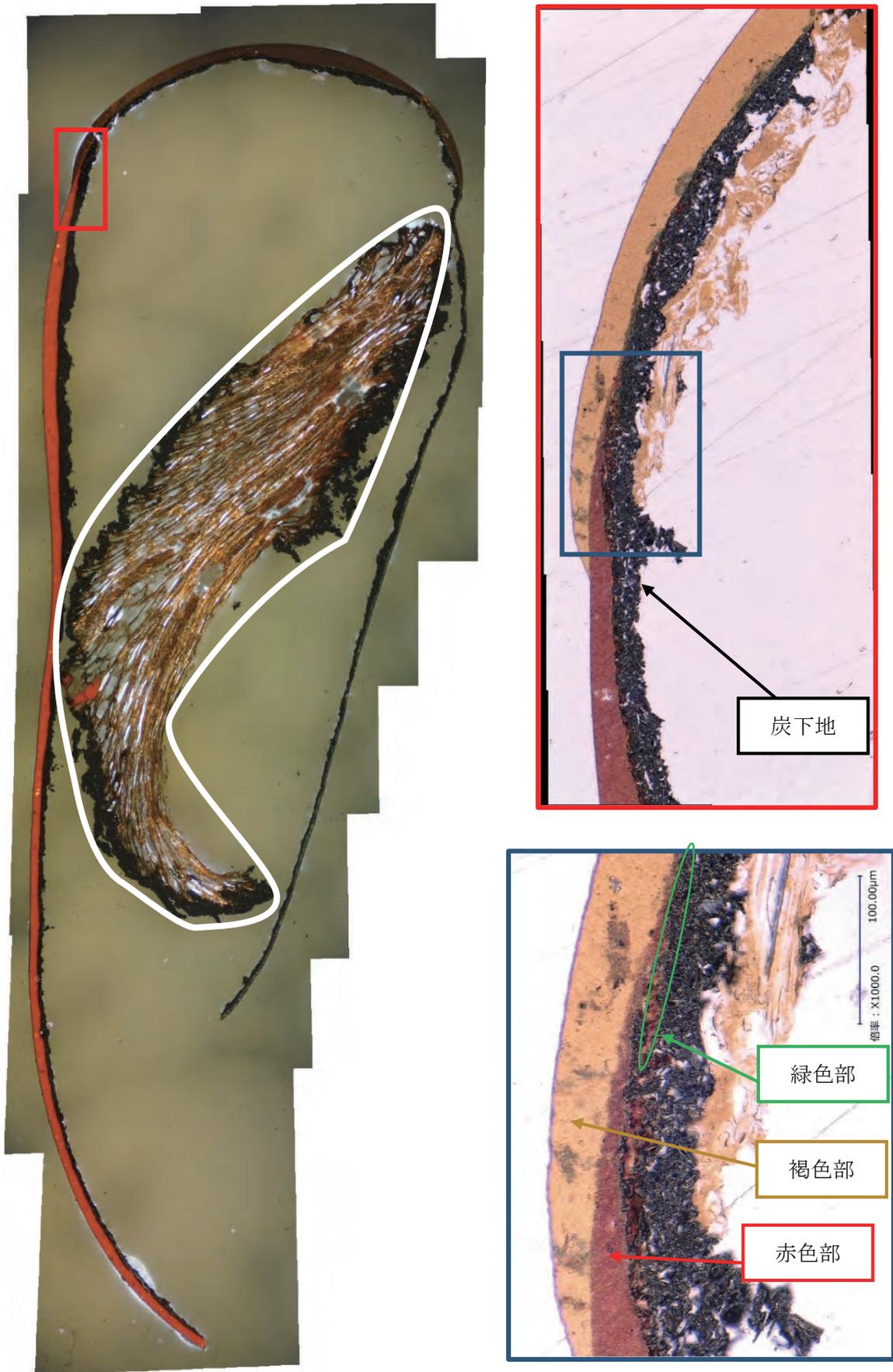


写真1 サンプルID 12-2の広範囲断面写真

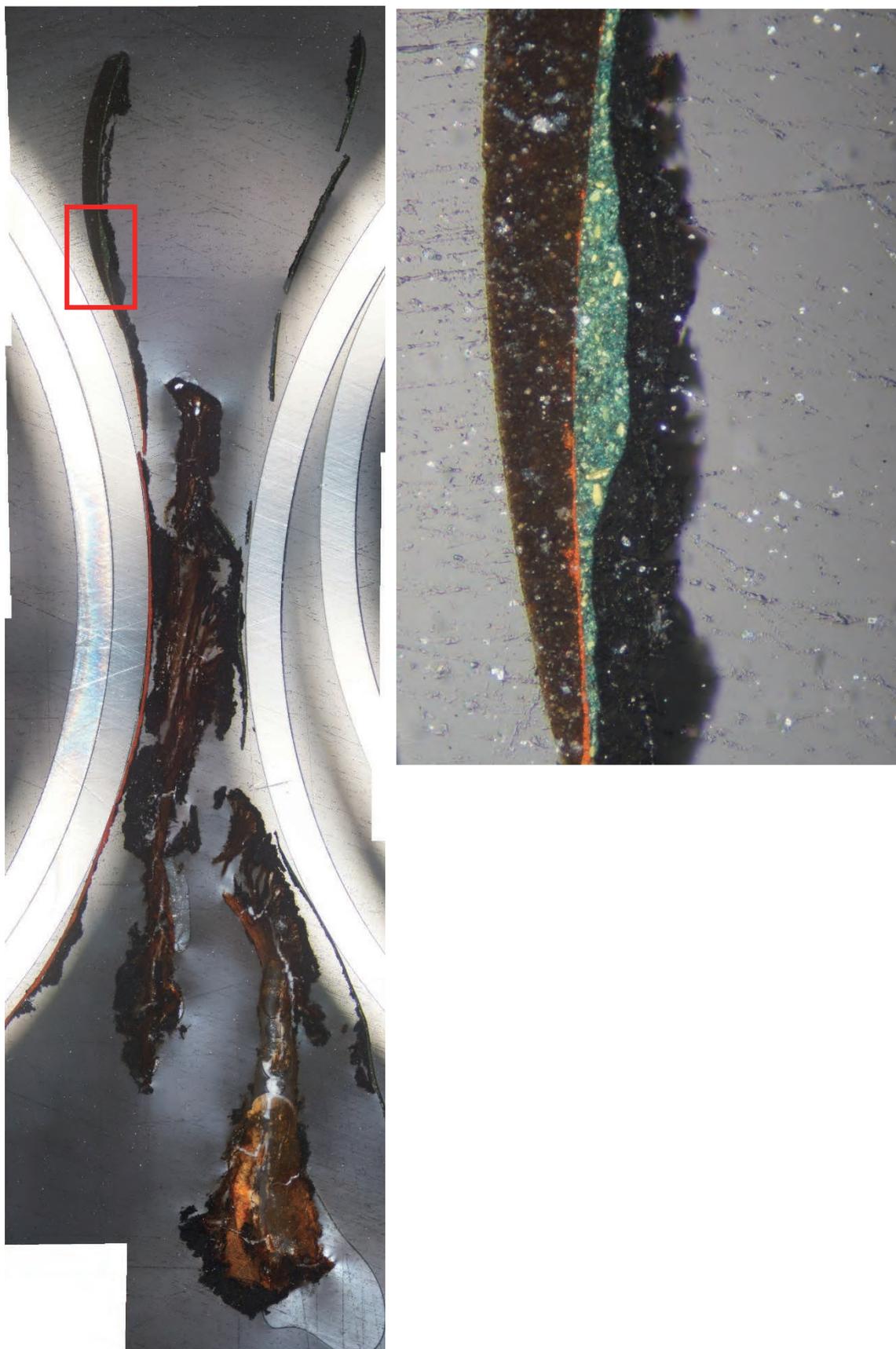
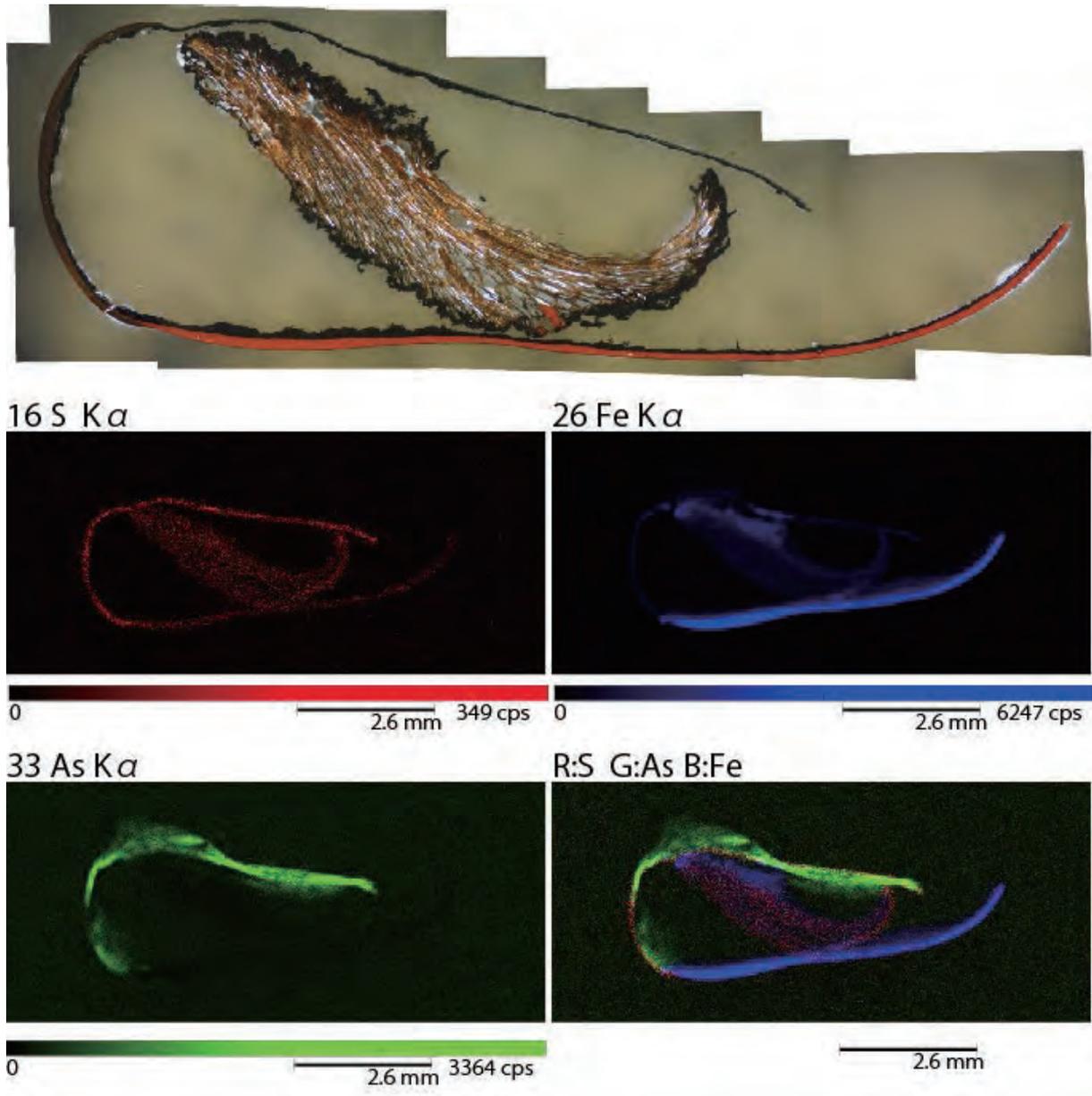


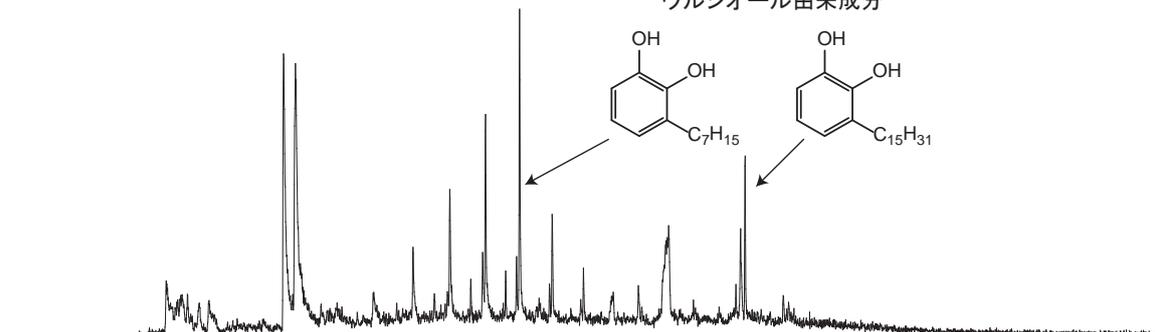
写真2 サンプルID 11-1 の広範囲断面写真



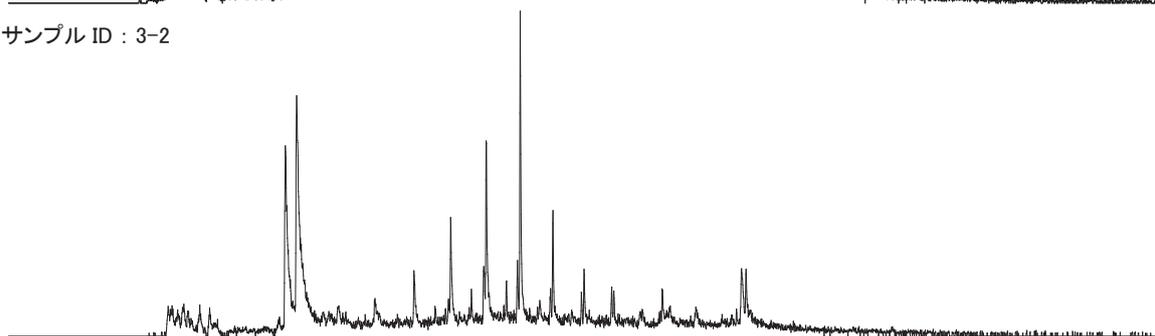
2 図 サンプル ID 12-2

サンプル ID : 1-1

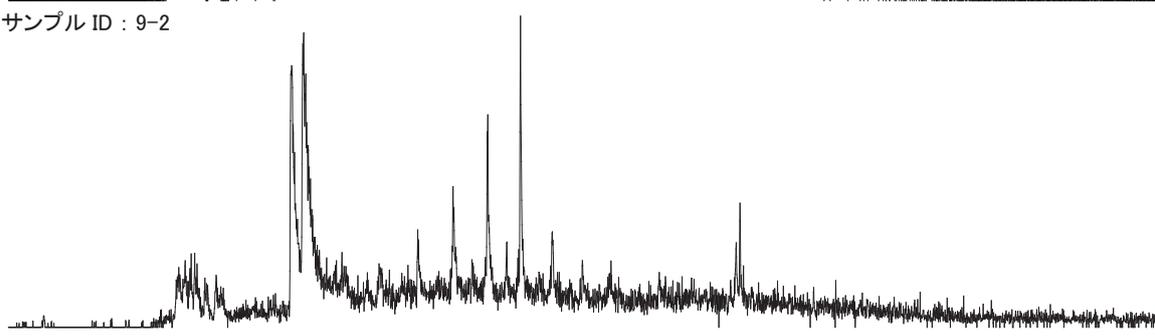
ウルシオール由来成分



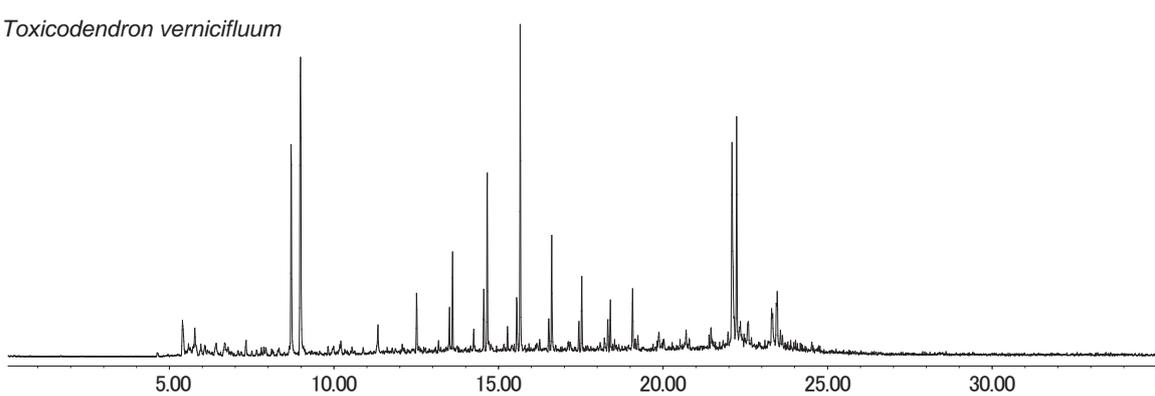
サンプル ID : 3-2



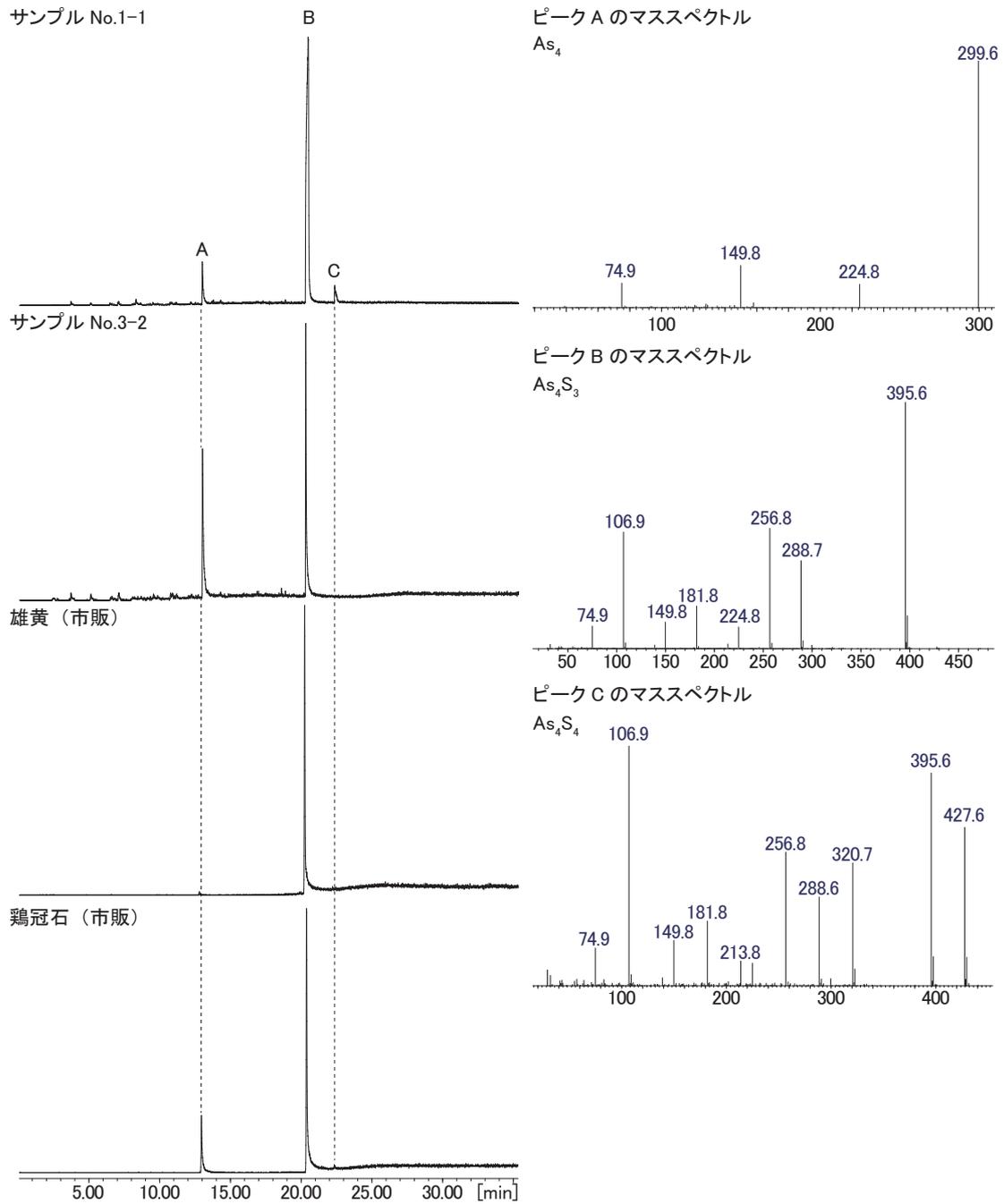
サンプル ID : 9-2



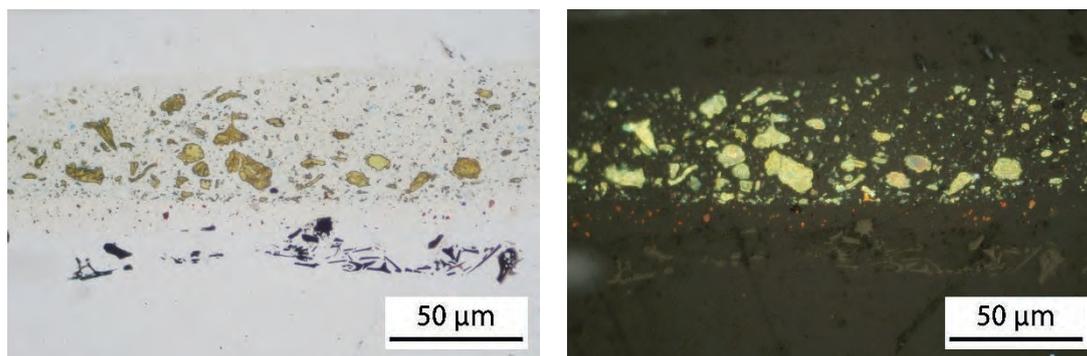
Toxicodendron vernicifluum



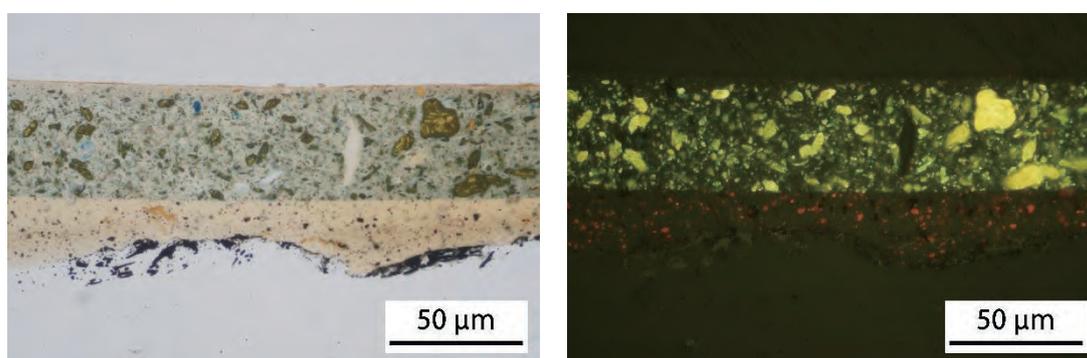
3 図 漆に関わる Py-GC/MS の分析結果 (m/z 108 イオンクロマトグラフ)



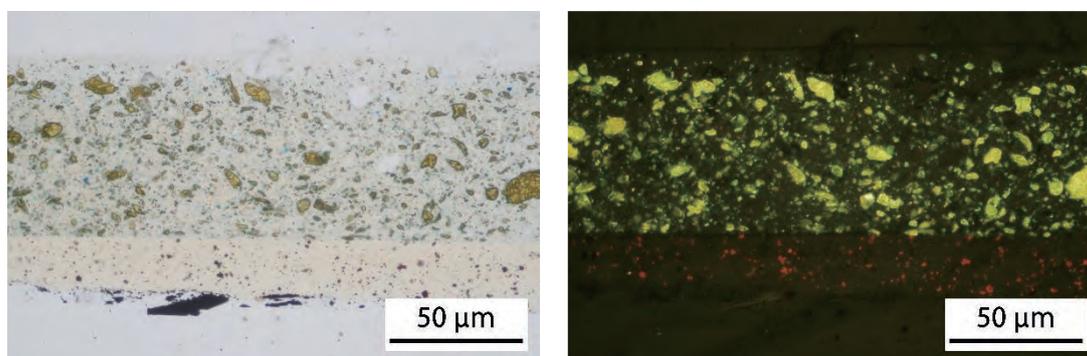
4 図 硫化ヒ素に関わる Py-GC/MS の分析結果 (m/z 75 イオンクロマトグラフ)



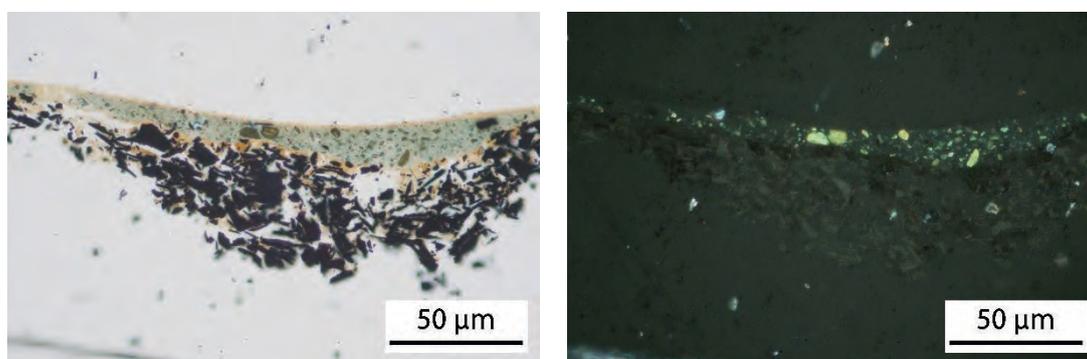
サンプル ID1-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



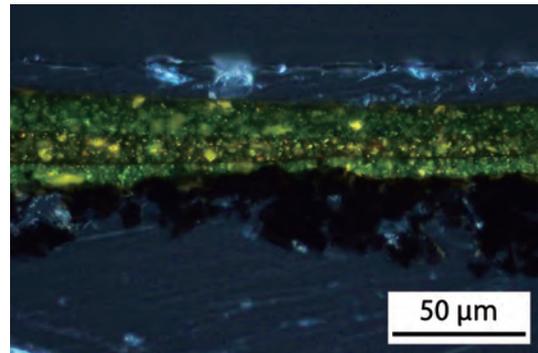
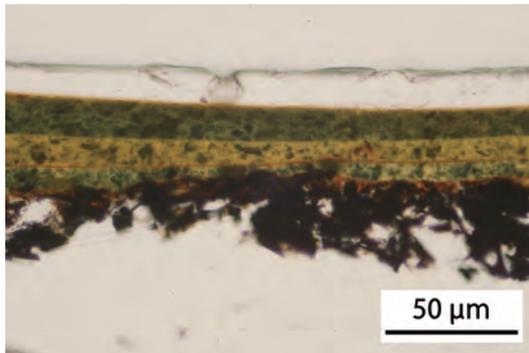
サンプル ID1-2 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



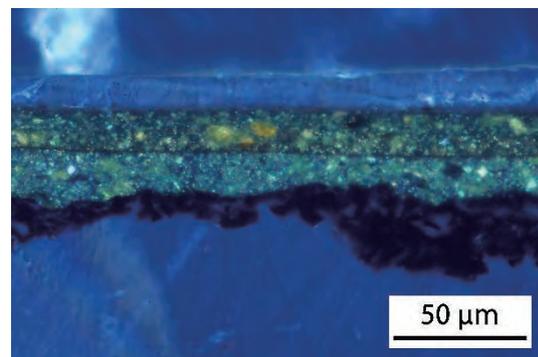
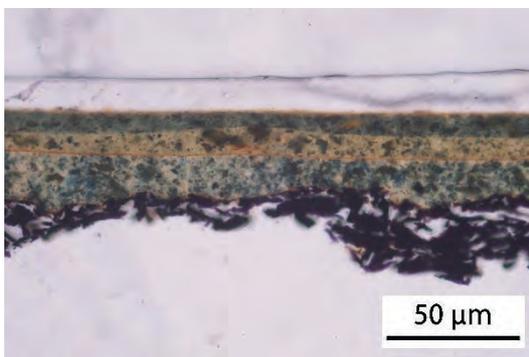
サンプル ID1-4 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



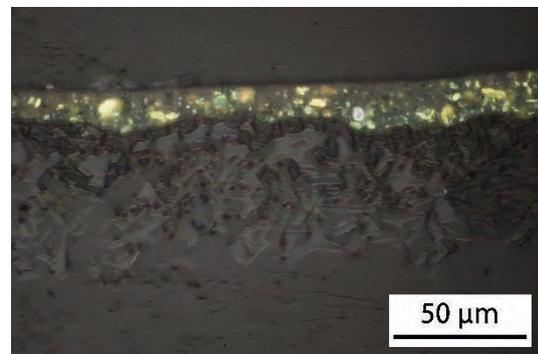
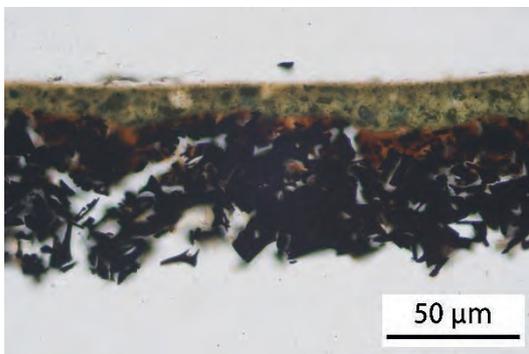
サンプル ID2-2 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



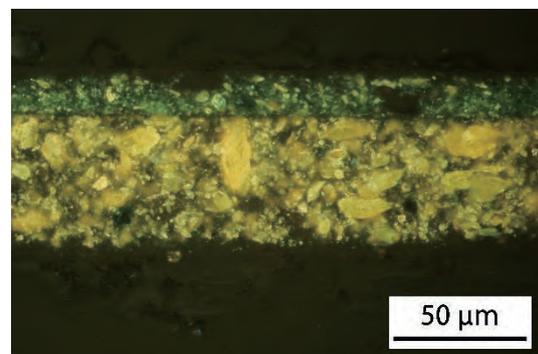
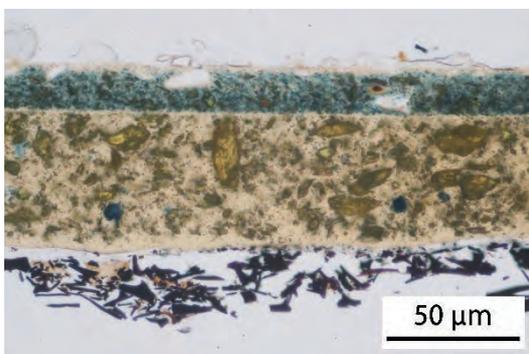
サンプル ID3-2 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



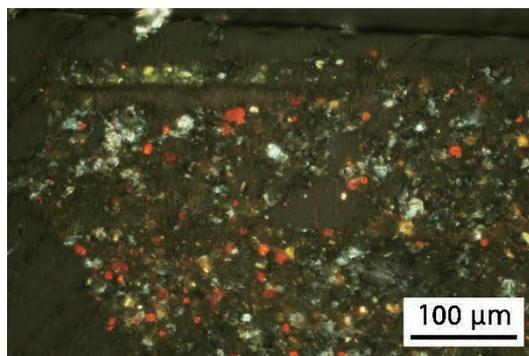
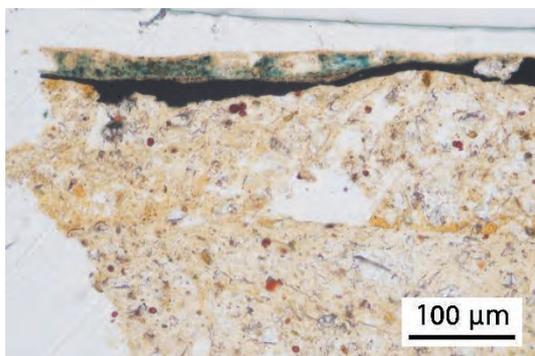
サンプル ID3-3 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



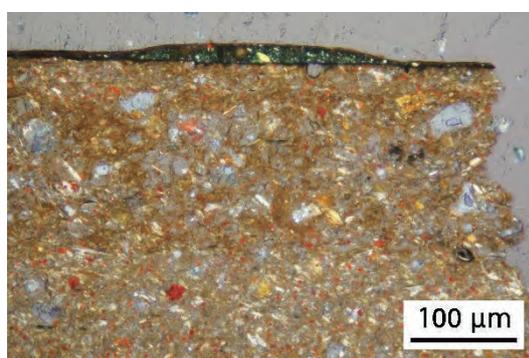
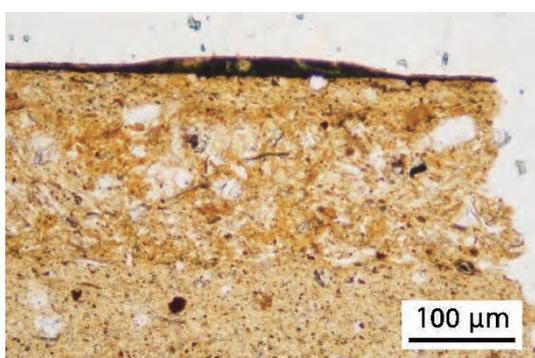
サンプル ID4-2 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



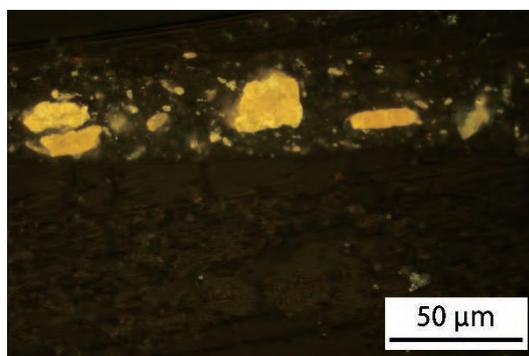
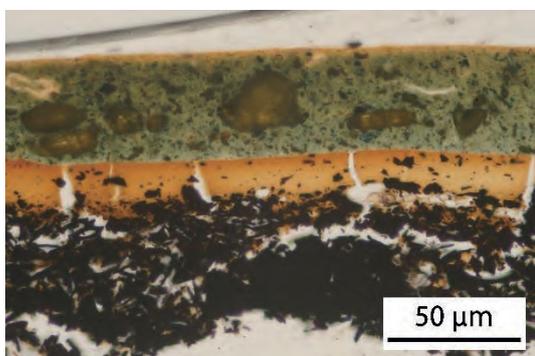
サンプル ID5-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



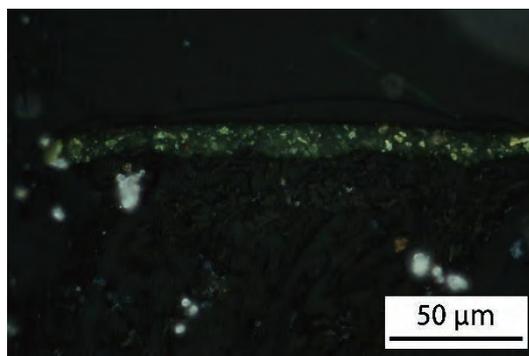
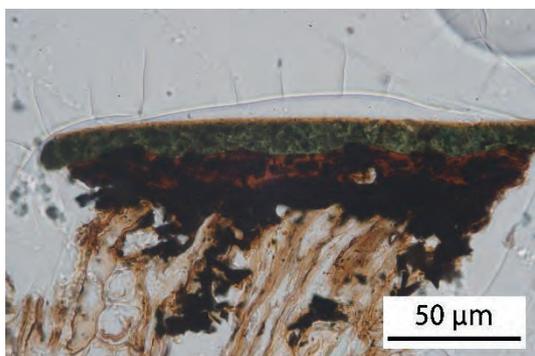
サンプル ID8-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



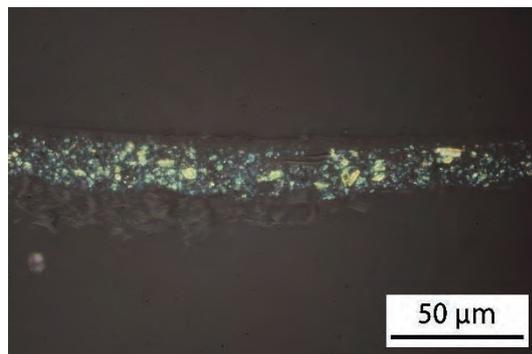
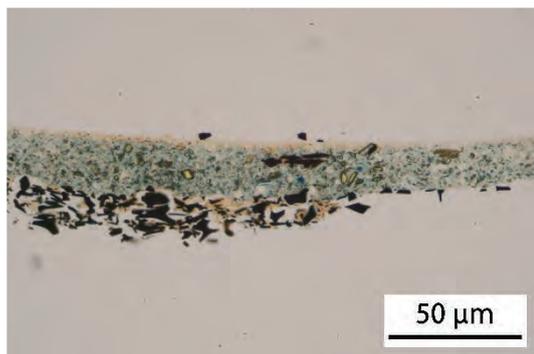
サンプル ID8-5 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



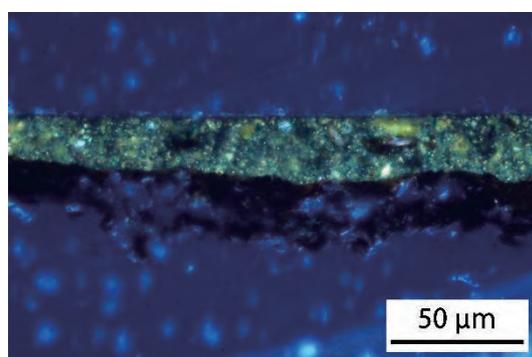
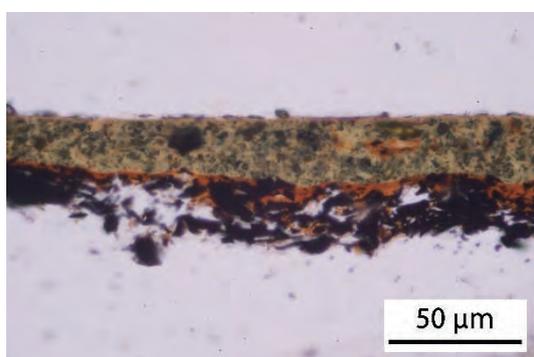
サンプル ID9-2 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



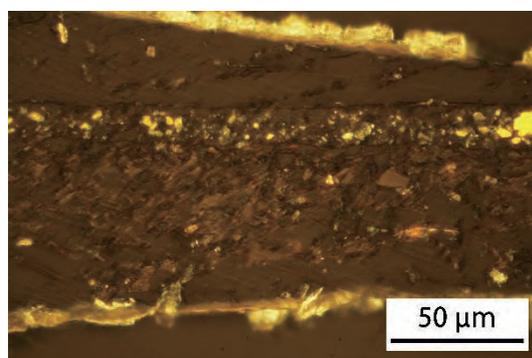
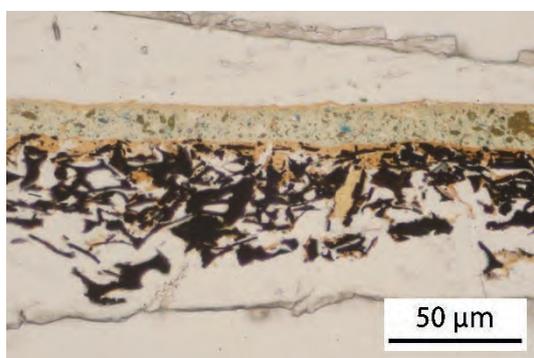
サンプル ID10-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



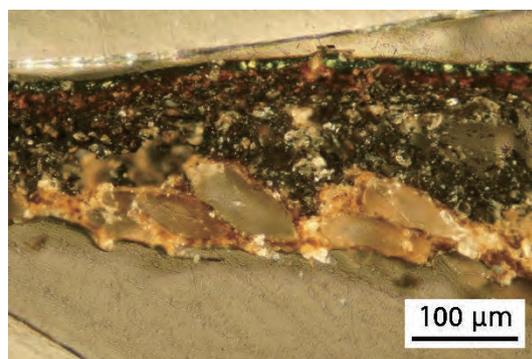
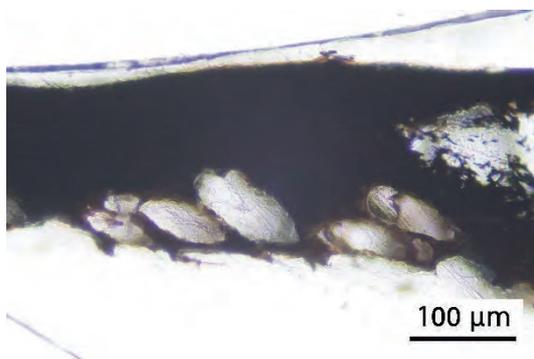
サンプル ID11-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



サンプル ID12-2 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



サンプル ID13-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)



サンプル ID14-1 の断面像 (左：透過像, 右：反射偏光像)

江戸遺跡から出土した緑色系漆碗の基礎研究

清水 香

はじめに

出土木製品・漆製品は、全国の遺跡で膨大な数量が確認されている現状において、製作地が判明していないものが大部分を占めている。このうち、食膳具としては膳（折敷）、碗・皿類、箸などがあり、なかでも漆塗容器については、古代律令国家における生産体制が『正倉院文書』や『延喜式』といった文書に記録されている（四柳 2009：62～76 頁）。さらに中・近世になると、製作や使用の様子が描かれた絵画資料や交易・物流に関する文献史料に加えて、消費地遺跡から出土した資料群が対象となる。文献史料は、当時の漆器生産を取り巻く状況、職人の移動による技法の伝播や木地・製品の生産・流通といった事柄の一面を知る手がかりとして重要であることは言うまでもないが、生産遺跡として破損品や用具が残存するといった検出状況を確認できていない現状では、消費地遺跡における出土資料の考古学・文化財科学、伝世品など、物質文化を含めた総合的な研究による解明が、現在の課題となっている。

漆碗から得られる情報は、樹種や形状、下地、塗りや文様、塗膜構造（クロスセクション分析）、塗膜や加飾の材料分析（エネルギー分散型蛍光 X 線分光分析、熱分解ガスクロマトグラフ質量分析、赤外分光分析）、このほか、木地による年輪年代測定、塗膜による放射性炭素年代測定など多岐にわたる。

漆碗の製作地を推定する試みについて、これまで伝世品や文献史料、産地調査に加え、考古学では出土資料の形状や文様の比較（仲田 1999、中井 1989、1992 など）、樹種の分布状況（山田 1993、伊東・山田 2012）、塗膜・下地の科学分析および文献史料による検討（永嶋 1987、岡田 1995、北野 2005a・b、武田・赤沼・土谷 2010、四柳 2006、2013 など）、銘の分布状況、樹種分類による器形・文様特徴（清水 2016）などの観点から、それぞれの資料における特徴が示されてきた。しかし、複数の特徴を指標として製作地を推測している資料であっても、産地に残されたものと比較することができないことから、いずれも製作地を特定するには至っていない。

東京大学構内の遺跡である医学部附属病院入院棟 A 地点（大聖寺藩上屋敷跡）SK3 は、天和 3（1683）年以降の屋敷割り変更に伴う盛土造成の完成時期を上限、元禄 16（1703）年の火災を下限とし、陶磁器の年代観から 1680 年代に埋め戻しが完了すると推測される大形土坑である。SK3 の覆土には大量の木製品・漆製品が含まれており、なかでも高台（摘み）が半分以上残存する漆碗類が 500 点以上確認された（清水 2016）。このうち内面赤色、外面暗緑色、高台内黒色（茶色）の碗類が約 40 点認められ、管見の限り 17 世紀代の資料として、1 つの遺構から緑色系の塗りを持つ碗類がこれほど多く出土した事例はこれまでになく、江戸時代における漆碗の製作技法や流通、製作地を解明するうえで重要であると判断した。

本論では、出現期の資料群として位置付けられる 17 世紀代の「緑色系」の塗りを持つ碗を対象として、出土資料の変遷や製作技法および製作地の検討を行う。

1. 緑色系漆について

漆膜の着色について、漆碗の「塗り」として主体的に使用されてきたのは黒色ならびに赤色である。黒色は鉄粉や水酸化鉄の鉄イオン反応によるもの、顔料として油煙や松煙を用いるものがあり、赤色は水銀朱やベンガラが用いられる（神谷 2012、岩本 2012）。ただし、江戸遺跡では、炭粉などの黒い下地に顔料を加えないすぐろめ漆（透漆）を塗布することで黒色に見えるものが一般的であり、多数を占めることが塗膜分析によって判明している。大陸では、後漢時代の楽浪墳墓群において、黄色や緑色で文様が描かれた漆器が副葬品として出土しており（荒川 1991、樋田 2012）、明代には赤と緑などを交互に塗り重ねて花や鳥、葉や枝を表現した彫漆である紅花緑葉（小池 2012）、また琉球漆器や（荒川・徳川 1977、石澤 1889）、輸出用の南蛮漆器にも、色漆や密陀絵（油絵）によって文様が施されている資料がある（日高 2008、高橋 2012）。

なお、「緑色系」の漆は、黄色の鉱物である「石黄」と青色の染料「藍（インジゴ）」を、漆液に混ぜて製作されることが、科学分析や文献史料から明らかとなっている（北野 2005b：62～79頁）。

(1) 石黄

石黄の名称と性質について、石黄は砒素と硫黄を主成分とした黄色の化合物であり、江戸時代の文献史料では、同様の成分である「鶏冠石」や、天然染料の「籐黄」を含めて「雌黄（しおう）」「雄黄（ゆうおう）」「籐黄（とうおう）」と混同されることが多い（北野・肥塚 2000：71頁）。本論では三硫化二砒素（ As_2S_3 ）を石黄とする。

石黄は天然の鉱石であり、顔料や医薬品として使用されていたことが判明している（北野・肥塚 2000：72頁）。産地として、一部国産品の流通を示す記録もあるが、多くは江戸時代前期頃を中心とした、中国や東南アジア諸国からの輸入品であることが推測されている（北野・肥塚 2000：73頁）。

北野氏による文献史料の調査では、文政十二（1829）年『塗物秘傳方』（高山市郷土館所蔵）、宝暦六（1756）年『漆拵秘伝』（会津若松史 渡辺家文書）などに記される石黄と「藍（インジゴ）」を使用した「緑色系」漆の製法に加えて、享保年間（1716～1735）に会津で人造の石黄が製造されたことから、色漆を特徴とする会津塗りの生産が可能になったという記録が紹介されている¹⁾。なお、これらを根拠として「すなわちこの文献史料からは、緑色系漆の出現は、享保年間（1716～1735）の人造石黄の製造が開発された江戸時代後期以降であるとしている」（北野・肥塚 2000：75頁）と結論づけられる。



1 図 汐留遺跡出土 東北系箔碗 碗・碗蓋
（『汐留遺跡Ⅱ』第4分冊 191-1・2：271頁より転載）

出土資料の調査では、江戸時代前期頃には、石黄が主に漆絵や蒔絵として使用されており、約半～1世紀の途絶期を挟んで、江戸時代中～後期頃には塗りとして緑色系漆を用いる資料群があるという見解が示されている（北野 2001：126頁）。このように、緑色系漆の材料として会津での製造が知られる石黄は、色漆（黄色・緑）あるいは蒔絵粉（金）の代

用としての使用が認められる

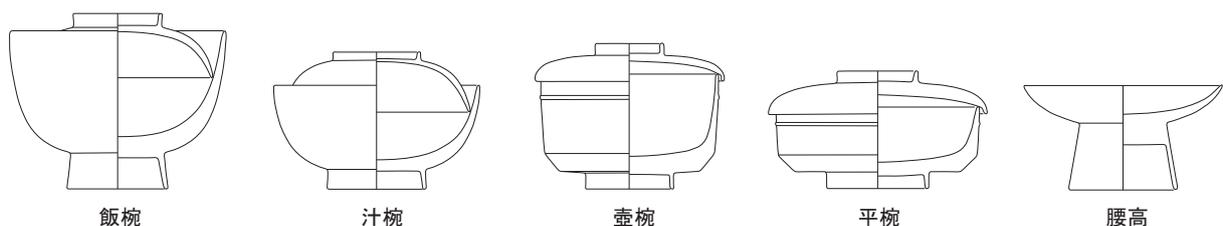
(2) 石黄を使用した事例

なお、漆器の文様に緑・黄色が使用される例として、17世紀前半代から出土している東北系箔碗が挙げられる(1図)。伝世品にみる東北系箔碗には、藤原秀衡の名称を持つが、現存している資料は桃山時代から江戸時代頃の作であり、生産地や時代が特定されていない「秀衡碗」(齋藤 2010:83 頁、山崎 2012:343 頁)、江戸時代に南部盛岡藩領で生産、他領への移出が藩によって統制されたことが家老席日記『雑書』に記されている「南部箔碗」(目時 1997:495・496 頁)、南部碗を参考として製作されたという記録が残る「会津絵(松竹梅文)」の「薄碗(箔碗)」(黒川 1878:361・362 頁)がある。いずれも内面赤色、外面黒色で、胴部上半に赤色で雲形を描き、その上に四割菱、菱形、短冊形の箔を配置、雲間に黄(緑)色や赤色で枝菊や笹・竹などの漆絵が施される碗である。出土資料では、17世紀前～中期頃に出土が集中している、加飾に赤色や黄色が主に使用される資料群を「南部箔碗」、それらに類する資料で文様特徴が異なるもの、また松竹梅文などに緑色系漆を使用するものが「会津絵²⁾(箔碗)」と判断されることが多い(北野 2000:954 頁、松本市教育委員会 1993、武蔵文化財研究所 2006 など)。なお、会津で製作された漆碗として現存する「会津絵」は、ほとんどが色漆で松竹梅が描かれており、17世紀の「金箔貼漆絵碗」の段階における「南部碗」「秀衡碗」の影響と、会津絵の独自性として、松竹梅文様と消粉蒔絵の導入が指摘されている(小林 2004)。

一方、緑色系の漆碗について、港区汐留遺跡の塗膜分析を例とすれば、17世紀前半では3,680点中3点(『汐留遺跡Ⅰ』:脇坂家)、17～19世紀では1,879点中22点(『汐留遺跡Ⅱ』:脇坂家)、1,513点中18点(『汐留遺跡Ⅲ』:保科家)、213点中16点(伊達家)、141点中0点(『汐留遺跡Ⅳ』:保科家)、1,793点中22点(伊達家)であり、ほとんどが1%前後となることから、18・19世紀になっても数量的には僅かであることがわかる。医学部附属病院入院棟A地点SK3資料群にみる塗りのパターンのなかでも、緑色系は相対的には少なく(1割以下:約7%)、全体に占める割合としては、内外赤色塗りの資料よりも少数となる。また、国際科学イノベーション総括棟新営地点SX270(未報告)(富山藩上屋敷跡:18世紀初頭下限)では碗類の約2割を占めており、管見の限り18世紀の出土事例としても前例のない比率である。

前述のとおり、緑色系の漆碗は、文献史料によって人造石黄を製造するようになったという享保年間(1716～1735)より後、江戸時代中・後期を主体として認められる。そこで会津における人造石黄の使用時期の遡及、天然石黄の使用、あるいは会津以外の産地での製作という可能性を追究する目的で、基礎的な分析を行う。

まず、江戸遺跡から出土した資料の形状特徴について示す。次に下地や塗膜の科学分析によって、材質や構造の変遷を明らかにしたい。なお、科学分析は、東京大学本郷構内の遺跡「医学部附属病院入院棟A地点」「国際科学イノベーション総括棟新営地点(以下国際科学イノベーション地点)」「工



2図 『漆碗百選』より 松竹梅蝶紋蒔絵碗(18・19頁)実測図をトレース改変

学部3号館地点」から出土した資料によるものである（本多・増田・宮腰 2017 参照）。

漆碗の分類に関して、文献上では形状や用途、大きさ、産地や人物に関連する様々な名称が認められる。本論では碗類の器種は『漆碗百選』（荒川 1975）を参考として（2 図）、腰部が丸いものを「腰丸形」、底が水平に近く腰部に1本の稜を持って直線的に立ち上がる形状の碗を「一文字形」、この他天目形、玉縁、鐔縁、端反形などを使用、正式な膳の形式として「揃い碗」（「四碗形式」「五碗形式」「大揃」）には、飯碗・汁碗・壺碗・平碗に腰高や杯が示されていることから、壺碗・平碗などが含まれるセットを「揃い碗系」と呼称する。なお、守貞漫稿にみる被せ蓋の壺碗・平碗（壺皿・平皿）は（3 図）、底がほぼ水平で、腰部には面取りされたように稜が2本入り、器壁が垂直に立ち上がる形状であり、胴部外面の隆起帯は「かつら」と記されていることから、器種と呼称はこれに準ずる。



3 図 『守貞漫稿』（後集卷之一 膳 国立国会図書館蔵）

2. 出土資料の概要

遺跡から出土した緑色系の漆に関連する資料を図・表によって示す（4～6 図・表 1・2）。

江戸時代前半（17 世紀後半～18 世紀前半）

- ・ 東京大学本郷構内：医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3（大聖寺藩上屋敷跡：17 世紀後半）
- ・ 東京大学本郷構内：国際科学イノベーション総括棟新営地点 SX270（富山藩上屋敷跡：18 世紀初頭下限）
- ・ 港区増上寺子院群（Ⅳ期：18 世紀前半・Ⅴ期：18 世紀後半）

江戸遺跡から出土した緑色系漆碗の基礎研究

遺跡名	遺構番号	図番号	層位	サンプルID	図版No.	遺物No.	器種	塗り(色調)				文様(色調) 文様単位	高台・掴み内		分析No. (樹種)	樹種
								内面	外面	高台・掴み内	その他		線刻他			
入院棟 A地点 (17世紀後半)	SK3	5図1	D4	7	IV-164	276	汁碗	赤色	緑色	黒色			中央部線刻「×」	TKU-725	ブナ属	
		5図2	D2	8	IV-165	282	壺碗	赤色	緑色	緑色				TKU-674	ケヤキ	
		5図3	D4	6	IV-165	295	平碗	赤色	緑色	黒色			線刻「井」			
		5図4	D2	14	IV-168	360	飯碗・汁碗蓋	赤色	緑色	黒色	口唇部黒	外面：松葉 2単位 掴み内：松葉 (褐色)		TKU-703	ブナ属	
		5図5	D4		IV-168	364	飯碗・汁碗蓋	赤色	緑色	茶色	口唇部黒			TKU-1033	ブナ属	
		5図6	D1	13	IV-168	365	飯碗・汁碗蓋	赤色	緑色	黒色	口唇部黒			TKU-956	ブナ属	
		5図7	D4		IV-168	366	飯碗・汁碗蓋	赤色	緑色	茶色	口唇部黒			TKU-1051	ブナ属	
		5図8	一括	12	IV-168	367	飯碗・汁碗蓋	赤色	緑色	黒色	口唇部黒			TKU-1038	ブナ属	
		5図9	一括		IV-168	372	飯碗・汁碗蓋	赤色	緑色	黒色	口唇部黒			TKU-1039	ブナ属	
		5図10	D4		IV-171	407	碗	赤色	緑色	黒色				TKU-1090	ブナ属	
			D4		IV-171	408	碗	赤色	緑色	黒色						
			D3		IV-171	413	碗	赤色	緑色	黒色				TKU-729	ブナ属	
			D4		IV-172	427	碗	赤色	緑色	黒色						
			一括		IV-172	443	碗蓋	赤色	緑色	黒色						
			一括		IV-173	446	碗蓋	赤色	緑色	黒色				TKU-1077	ブナ属	
			D4	11	IV-173	447	碗蓋	赤色	緑色	黒色			方形の圧痕「×」	TKU-1089	ブナ属	
			D3		IV-173	457	碗	赤色	緑色	黒色						
			D2		資料番号67		碗蓋	赤色	緑色	黒色						
			D2		資料番号68		碗蓋	赤色	緑色	黒色						
			5図11	D2	3	資料番号69		碗	赤色	緑色	黒色					
			5図12	D2	2	資料番号75		碗蓋	赤色	緑色	黒色					
	5図13	D3		資料番号103		碗	赤色	緑色	黒色							
	5図14	D4		資料番号219		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
		一括		資料番号246		碗	赤色	緑色	黒色							
	5図15	一括		資料番号251		碗	赤色	緑色	黒色							
	5図16	D3		資料番号296		碗	赤色	緑色	黒色							
		D4		資料番号373		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
		D4		資料番号395		碗	赤色	緑色	黒色			線刻(縁取り) 「×」	TKU-726	ブナ属		
		一括		資料番号472		碗	赤色	緑色	黒色							
		D2		資料番号557		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
	5図17	D3		資料番号586		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
		D3		資料番号587		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
	5図18	D3		資料番号658		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
		D3		資料番号667		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
	5図19	D3	4	資料番号669		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
		D4		資料番号734		碗蓋	赤色	緑色	黒色							
	5図20	D4		資料番号753		碗蓋	赤色	緑色	黒色			中央部線刻「×」				
	5図21	D4		資料番号754		飯碗	赤色	緑色	黒色							
国際科学 インベ ンション 地点 (18世紀初 頭下限)	SK270		下層		資料番号246-11		碗蓋	赤色	緑色	黒色			内面漆付着 (漆パレット)			
			下層		資料番号246-14		碗	赤色	緑色	黒色						
			下層		資料番号246-15		挽物片(碗類)	赤色	緑色	—						
		5図26	下層		資料番号246-19		碗・碗蓋	赤色	緑色	黒色						
		5図22	下層	10	資料番号246-20		飯碗	赤色	緑色	黒色			銘「一重角に口」 (赤色)			
			下層		資料番号246-24		碗	赤色	緑色	茶色						
			下層		資料番号246-26		碗	赤色	緑色	黒色						
			下層		資料番号246-29		碗類	赤色	緑色	—						
			下層		資料番号246-35		碗	赤色	緑色	—		文様(金色・赤色)				
		5図23	下層	9	資料番号246-42		碗	赤色	緑色	黒色						
		5図24	下層		資料番号246-43		碗	赤色	緑色	茶色			穿孔3箇所			
		5図25	下層		資料番号246-47		碗	赤色	緑色	黒色						
			下層		資料番号246-49		挽物片(碗類)	赤色	緑色	—						
			下層		資料番号246-51		碗類	赤色	緑色	—						
			下層		資料番号246-53		碗	赤色	緑色	—						
	下層		資料番号246-57		碗	赤色	緑色	黒色			線刻「V」					
	下層		資料番号246-66		碗・碗蓋	赤色	緑色	黒色								
工学部 3号館地点 (18後～19 世紀)	SK364	6図27	一括	5	資料番号85		碗蓋	黒色	緑色	緑色						
	SD459	6図28	一括	1	資料番号77		碗	赤色	緑色	緑色						

表1 東京大学構内の遺跡出土 緑色系挽物一覧

紀 要 編

遺跡名	遺構番号	層位 など	サン プル ID	図版 No.	遺物 No.	木 取	器種	塗り構造		塗り (色調)				文様、色調、 文様単位ほか	樹種	
								内	外	内面		外面				高台・ 摘み内
汐留遺跡Ⅰ (信州飯田藩)	7J落ち込み1 (1707年以前)		3821			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			3822			A	椀	V	V	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	茶		ヒノキ
汐留遺跡Ⅱ	塵芥溜め6J-078 (18世紀前半)		3840			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2153			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2156			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2163			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2172			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2175			B	挽物	I	II	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑		外-絵-金 (Au)	ブナ属
			2176			B	挽物	III	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2195			B	挽物	III	I	ベンガラ	赤	As+S	黄			ブナ属
			2207			B	挽物	III	I	ベンガラ	赤	As+S	黄			ブナ属
			2208			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2221			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2230			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2268			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2279			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2300			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2313			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			2314			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
	2338			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属		
	2345			B	挽物	I	II	ベンガラ	黒	As+S+藍	緑		外-絵-金 (Au)	ブナ属		
	2400			A	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属		
塵芥溜め7J-047 (17世紀後半)			5625			B	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
			塵芥溜め4J-268 (1715年下限)	7223			A	挽物	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑		
汐留遺跡Ⅲ (会津藩保科家)	4F-140 (17世紀中頃～末葉)	1層	7230			B	挽物	I	II	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑		外-絵-金 (Au)	ブナ属
			135				椀				赤		緑			ブナ属
汐留遺跡Ⅳ (伊達屋敷庭園地区)	池5H-711 (18世紀前葉)		140				椀				赤		緑			ブナ属
			2433			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2435			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2436			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2437			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2450			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2452			A	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2453			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2457			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2458			A	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2460			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2461			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
			2462			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属
	2463			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属		
	池5H-726 (17世紀中葉～後葉)	2626			A	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		カツラ	
	落ち込み5G-505 (17世紀後半)	3025			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属	
	上水桶6H-230 (18世紀代中心)	3167			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属	
	塵芥溜め6H-260 (17世紀後半)	3256			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属	
	空間6H-292 (17世紀後半)	3404			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属	
		3406			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属	
空間6H-293 (下限は18世紀前葉)	3586			A	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑	緑		ブナ属		
旧芝離宮庭園	E1・2 (IV層以下、屋敷内17世紀後半～18世紀前半、掘割内18世紀後半代)	VI		52			椀				朱	暗緑	茶褐	丸に右三ツ巴紋3単位 (朱色)		
旧芝離宮庭園	B4, C14・19 (17世紀後半～近代)	I～V		79			椀				朱	濃緑				
旧芝離宮庭園	C? (17世紀後半～18世紀代)	V		89			椀					暗緑	茶褐			
旧芝離宮庭園	D3 (17世紀後半～18世紀代)	VI下		128			椀				朱	暗緑	茶褐	丸に松 (?) 紋3単位、草文様 (朱色)		
旧芝離宮庭園	B22 (17世紀後半～18世紀代)	IV		197			盆				暗赤褐	深緑		内面に文様 (黄褐色)		
溜池遺跡 (2011)	093号			1	5		椀				赤	緑	黒			
溜池遺跡 (2011)	215号 (18世紀中葉)			8	14		椀				赤	緑	黒			
溜池遺跡 (2011)	I区-G～J			58	16		椀				赤	緑	黒			
増上寺子院群	A地区WP2	IV期	5	202	60	B	椀A2	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	ブナ属	
増上寺子院群	A地区WP2	IV期					椀A2				赤		緑	茶		
増上寺子院群	A地区WP4	II期	19			B	椀	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	-	ブナ属	
増上寺子院群	A地区WP24	V期	27	203	70	B	椀C2a	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	茶	ブナ属	
増上寺子院群	A地区WP31	V期	32	203	71	B	椀B1a	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	ブナ属	
増上寺子院群	A地区WP31	V期	35	203	74	B	椀Ea	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	ブナ属	
増上寺子院群	A地区WP37	V期	203	81			蓋Aa				赤		緑	茶		

表2 江戸遺跡出土 緑色系漆塗挽物 (1)

江戸遺跡から出土した緑色系漆碗の基礎研究

遺跡名	遺構番号	層位 など	サン プル ID	図版 No.	遺物 No.	木 取	器種	塗り構造		塗り (色調)				文様、色調、 文様単位ほか	樹種	
								内	外	内面		外面				高台・ 摘み内
増上寺子院群	A地区WP38	IV期	48			B	碗C2a	I	II	ベンガラ	赤	As+S	緑	茶	絵-赤、金 (朱+ ベンガラ、Au)	ブナ属
増上寺子院群	A地区WP38	IV期	49			B	-	I	II	ベンガラ +朱	赤	As+S	緑	黒	絵-赤、金 (朱+ ベンガラ、Au)	ブナ属
増上寺子院群	A地区M124	IV期	54	204	88	A	碗A2	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区M124	IV期	55	204	90	B	碗Ea	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区M124	IV期	56	204	89	B	蓋Ba	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区2Grid		71			B	碗B2a	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	茶		ブナ属
増上寺子院群	A地区2Grid		81	205	125	B	碗Ea	I	II	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	外面：楓 (金 朱・橙) (ベン ガラ、Au)	ブナ属
増上寺子院群	A地区2Grid						蓋Aa				赤		緑	黒		
増上寺子院群	A地区8Grid		118			A	碗	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	外面：楓 (朱 金・銀) (ベン ガラ、Au)	ブナ属
増上寺子院群	A地区A-1		121			B	碗C2	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	茶		ブナ属
増上寺子院群	A地区A-3		138			B	碗Da	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区A-3		140			B	蓋Aa	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区C-3		153			B	碗A2	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区E-2		162			B	碗C2a	I	II	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒		ブナ属
増上寺子院群	A地区攪乱		164	204	97	B	碗A2	I	II	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	外面：楓 (朱 金・銀) (ベン ガラ、Au)	ブナ属
増上寺子院群	A地区攪乱			204	98		碗A2				赤		緑	茶		
増上寺子院群	A地区攪乱		91	205	118	B	碗C2a	I	I	ベンガラ	赤	As+S	緑	茶		ブナ属
増上寺子院群	B地区WP13	IV期					碗C2a				赤		緑	茶		
増上寺子院群	B地区C-7Grid		119-1	205	119	B	碗C2a	I	II	ベンガラ	赤	As+S	緑	茶		ブナ属
増上寺子院群	B地区E-1Grid						碗C2a				赤		緑	黒		
増上寺子院群	B地区E-3Grid		135	207	11	-	碗C2a	I	II	ベンガラ	赤	As+S	緑	黒	外面：松・月 (金)、高台 内：宝珠 (金) (Au)	-
芝神明町屋跡		II	20			B	蓋	I	II	ベンガラ	赤	As+S	暗緑		絵-金 (Au)	ブナ属
芝神明町屋跡		II	39			A	蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S	暗緑			ブナ属
芝神明町屋跡			40			B	蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S	暗緑			ブナ属
芝神明町屋跡			95			B	碗・蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S	暗緑			ブナ属
芝神明町屋跡		IV	133			A	碗	I	I	ベンガラ	赤	As+S	暗緑			ブナ属
飯田町遺跡	III区5008号遺構 (18世紀代)	2期	484	187	2	B	平碗蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			
飯田町遺跡			602			B	碗蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			
飯田町遺跡			612			B	碗蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			
飯田町遺跡			621			B	碗蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			
坂町遺跡			3	4	357	B	碗蓋	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
坂町遺跡			16			B	碗?	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
坂町遺跡			87			A	碗	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
坂町遺跡	4号 (18世紀後葉)		88			B	碗					As+S+藍	緑			ブナ属
坂町遺跡			89			B	碗?	I	I	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑			ブナ属
坂町遺跡			102			-	碗蓋	I	II	ベンガラ	赤	As+S+藍	緑		外-絵-金 (Au)	-

港区汐留遺跡 I~IV、旧芝離宮庭園、溜池遺跡 (2011)、増上寺子院群 (1988)、芝神明町屋跡 (北野 1993)、千代田区飯田町遺跡、新宿区坂町遺跡、岩本町二丁目遺跡、丸の内一丁目遺跡 (1998)、丸の内一丁目遺跡 II (2005)、丸の内三丁目遺跡、紀尾井町遺跡 (1988)、紀尾井町遺跡 II (2013) 有楽町二丁目遺跡 (2006)、文京区春日町遺跡 VI 地点より、17 世紀以降の緑色系の塗りを付した碗物を一覧表に示した (岩本町以降なし)。

塗り構造：I 木胎・炭粉下地・漆
II 木胎・炭粉下地・漆・文様漆
III 木胎・炭粉下地・漆・漆
IV 木胎・炭粉下地・漆・文様漆
V 木胎・サビ下地・漆
木取り：A 横木地板目取り、B 横木地目取り (北野 2005a より)

表 2 江戸遺跡出土 緑色系漆塗碗物 (2)

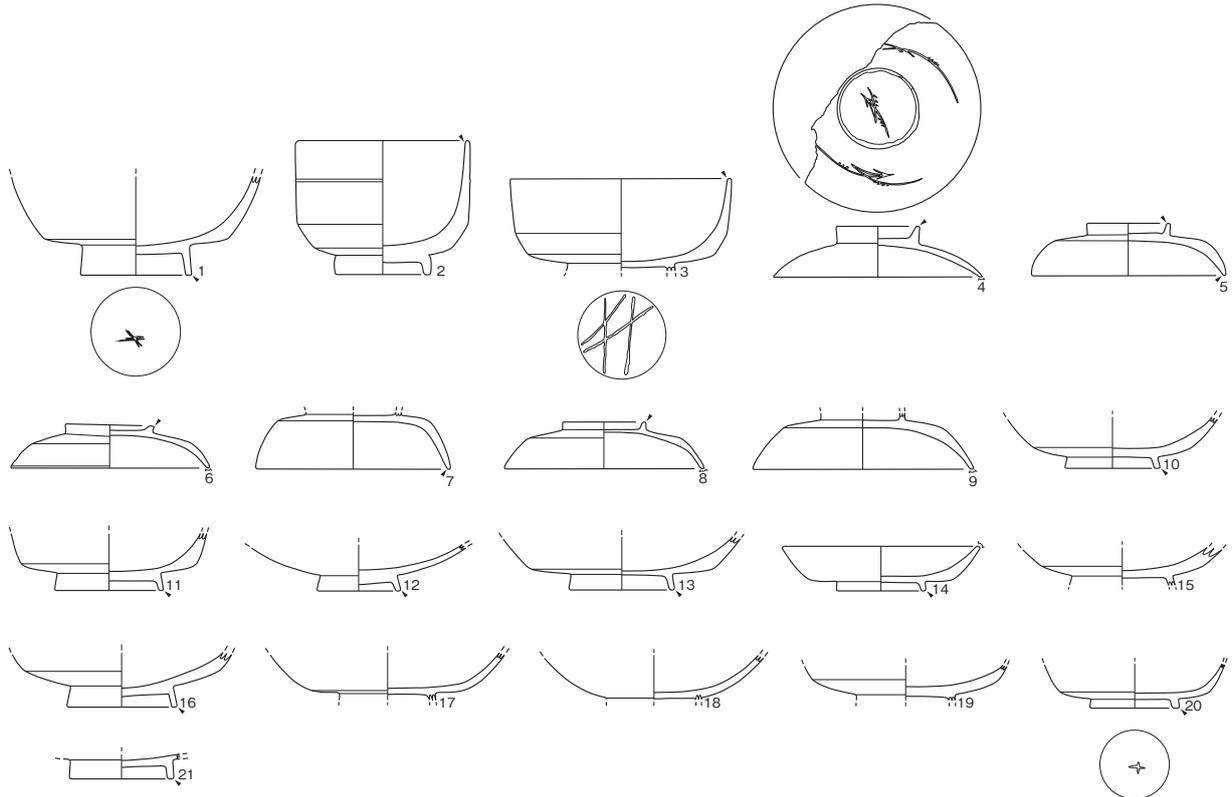


入院棟 A 地点 SK3 3 図 -2

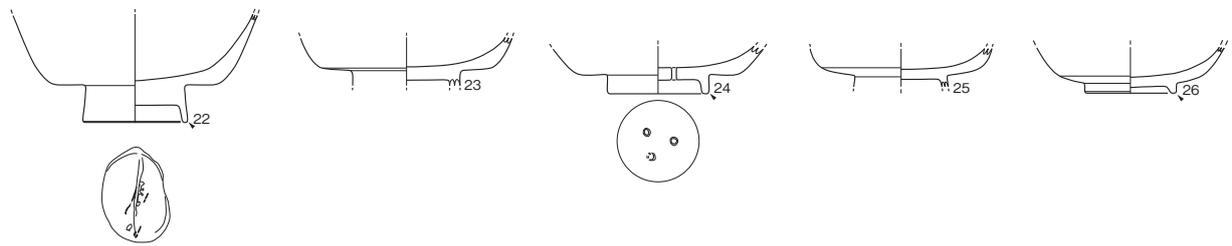
国際科学イノベーション 3 図 -26

工学部 3 号館 4 図 -27

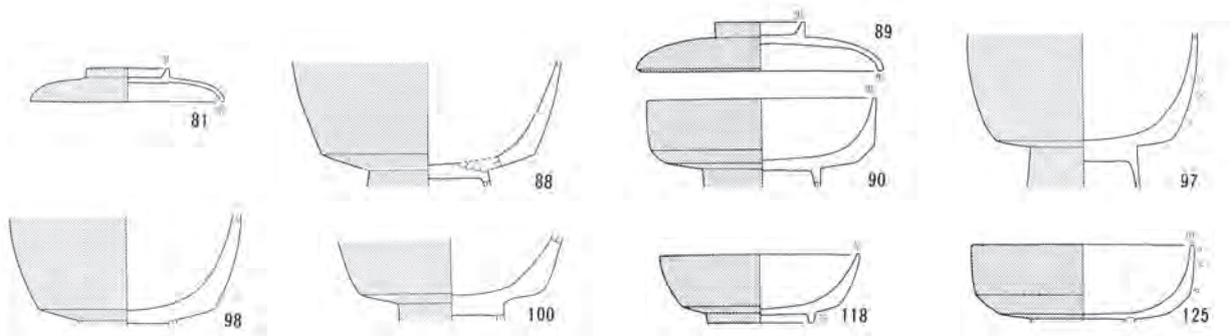
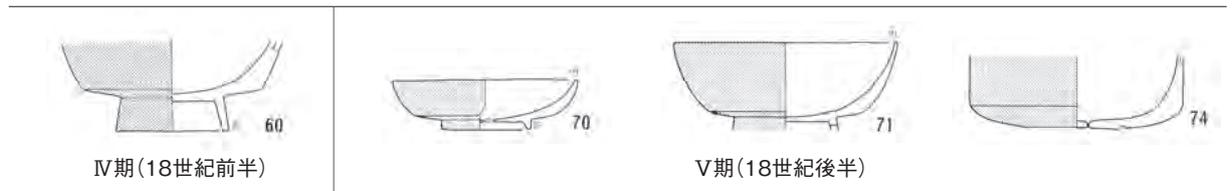
4 図 緑色系漆椀



医学部附属病院入院棟A地点 SK3(17世紀後半) ※1のみ報告書刊行後、再実測、再トレース



国際科学イノベーション総括棟新営地点 SK270下層(18世紀初頭下限)

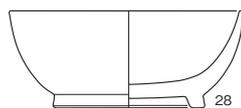


港区増上寺子院群(江戸時代)

5図 緑色系 漆塗挽物 S=1/4

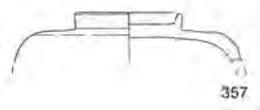


SK364(18世紀後半)

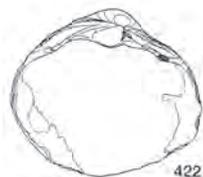


SD459(19世紀)

工学部3号館地点



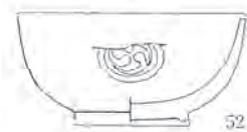
357



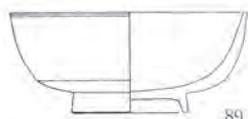
422

貝殻製漆パレット

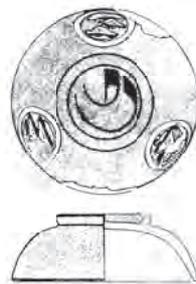
新宿区坂町遺跡4号遺構(18世紀後半)



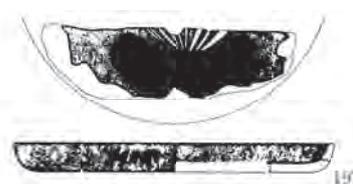
52



89



128



157

港区旧芝離宮庭園(17世紀前半～18世紀後半)

6図 緑色系漆塗挽物・生産関連遺物 S=1/4

江戸時代後半(18世紀中頃以降)

- ・港区旧芝離宮庭園(17世紀前半～18世紀後半)
- ・新宿区坂町遺跡4号遺構(18世紀後半)
- ・東京大学本郷構内：工学部3号館地点(加賀藩上屋敷跡) SK364(18世紀後半)、SD459(19世紀)

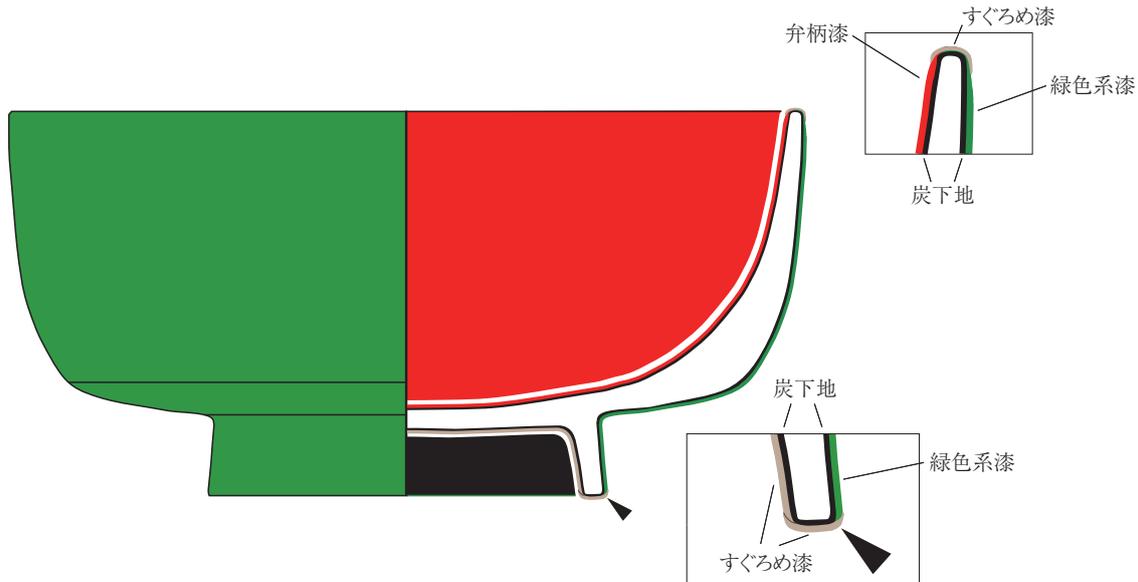
碗類の形状は、17世紀後半は一文字形の飯碗・汁碗が主体で、壺碗(かつらあり)・平碗(かつらなし)、18世紀後半を下限とすると腰丸形の碗(飯・汁)や盆などがみられる。なお、18世紀後半には緑色系漆が付着した貝殻製漆パレットが出土している(6図)。碗類の樹種はブナ属が多数を占めており、トチノキ・ケヤキ・カツラ・ヒノキが少数、下地は炭粉下地、塗りは17世紀代には内面赤色(ベンガラ)、外面緑色(石黄+藍)、高台内黒色(茶色)でそれぞれ1層塗りが大半を占めるが、鉾物系下地、多層塗りが確認されている。ほとんどが無文であるが、加飾を持つ資料も少数含まれる。

3. 出土資料の塗膜分析

(1) 各遺跡の概要

- ・医学部附属病院入院棟A地点SK3(大聖寺藩上屋敷跡：大形土坑17世紀後半)
- ・国際科学イノベーション総括棟新営地点SX270(富山藩上屋敷跡：大形土坑18世紀初頭下限)
- ・工学部3号館地点(加賀藩上屋敷跡) SK364(碗蓋：18世紀後半)、SD459(碗：19世紀)

塗膜分析によれば(本多・増田・宮腰2017)、医学部附属病院入院棟A地点SK3は、ブナ属で炭



7図 入院棟 A 地点 SK3 漆碗構造模式図

粉下地、外面は緑色の塗り、高台内はすぐろめ漆がそれぞれ1層の資料が主体となる。サンプル ID3 では外面が多層塗り（4層）、サンプル ID8（ケヤキ）は、おそらく鋳物系の下地で、ブナ属の資料が外面緑色、高台（摘み）内が黒色（炭粉下地+すぐろめ漆）であったのに対して、高台内も緑色系の漆を塗布しているという違いがある。

国際科学イノベーション地点は、炭粉下地に外面は緑色、すぐろめ漆の2層塗り（碗：サンプル ID9・10、下地→緑色漆→すぐろめ漆、下地→すぐろめ漆→緑色漆）、工学部3号館地点のSK364（碗蓋：サンプル ID5）は、外面すぐろめ漆に黄色（石黄+藍）、緑色漆、摘み内はすぐろめ漆に黄色（石黄+藍）のそれぞれ2層、SD459（碗：サンプル ID1）は、炭粉下地に外面は赤色（水銀朱）と緑色の2層塗りであった。

東京大学本郷構内の遺跡から出土した資料では、17世紀代では樹種はブナ属、炭粉下地で内面赤色、外面緑色、高台内黒色（すぐろめ漆）、1層塗りの資料が主体となる。18世紀初頭から2層塗りとなっており、1層から2層塗りへの変化については、製品の品質や製作地に関連している可能性がある。

また、工学部3号館地点では下塗りとして赤色漆（水銀朱）が使用されている。色調について、保存処理前の肉眼観察によれば、入院棟 A 地点 SK3 ではいずれも黒色と区別することが難しい暗緑色であるが、国際科学イノベーション地点では緑色、工学部3号館地点ではより明るい色調となっている。これは上塗りとなる「緑色」の発色をより明瞭にする目的が考えられる。

製作工程としては、SK3（サンプル ID11・12）から、内面1層、外面1層を塗った後、口縁と壘付にすぐろめ漆を施すという手順を復元できる（7図）。

(2) 科学分析について

X線回折の分析結果では、黄色系漆および天然石黄（アメリカネバダ産）は三硫化二砒素が明瞭に検出されるのに対して、緑色系漆および人造石黄（明治34年製造：会津地方）については、前者が三硫化二砒素（ As_2S_3 ）、後者が亜砒酸（ As_2O_3 ）、硫黄（S）の弱いピークが確認されていることが、緑色系漆に人造石黄が使用されている根拠として示されている（北野 2001：122～124頁）。

前述した会津における人造石黄の開発と使用によって、緑色系の塗りが普及していくという推測を

検証するにあたり、人造石黄が製造されたという享保年間（1716～1735）を軸として新旧の資料の科学分析を行った（本多・増田・宮腰 2017）。

17世紀代の資料から追究すべき課題として先に述べた、人造石黄の製作年代の遡及、天然石黄の使用、もしくは会津以外での製作（天然・人造）では、17世紀代の資料については天然石黄の使用が推測される結果が得られた（本多・増田・宮腰 2017：261頁）。

4. 製作地の推定－形状・樹種－

(1) 形状について

千代田区飯田町遺跡（8・9図）Ⅲ区盛土層（1650年代以前）、有楽町二丁目遺跡（10図）S20・S22・S27・S49・S61・S248遺構（17世紀前半）、紀尾井町遺跡のSR35、SE37（17世紀前半～中葉）、丸の内一丁目遺跡Ⅱの3号遺構（寛永13〔1636〕年以前の堀：陶磁器では1620年～1630年代）、港区増上寺子院群（11図）Ⅰ期（六道銭：1598年～1636年・陶磁器17世紀前葉）では、腰丸形の椀が主体であり、緑色系の塗りや、一文字形の椀はほとんどみられない。

丸の内一丁目遺跡10号、12号、240号、243号遺構（Ⅰ期：1620年代後半～1636年）では、一文字形の椀や、壺椀・平椀、腰高があり、丸の内三丁目遺跡26号、52号遺構、有楽町二丁目遺跡S61・S22遺構（17世紀前半）でも、壺椀・平椀が出土している。

また、天目形の壺椀、鏝縁の平椀についても腰高を伴って確認されており（港区増上寺子院群Ⅰ期、千代田区飯田町遺跡Ⅲ区盛土層、紀尾井町遺跡Ⅱ106号遺構、有楽町二丁目遺跡S20・S27遺構など）、かなり低い割合ではあるが、これらは17世紀前半の揃い椀の器種である可能性が高い。

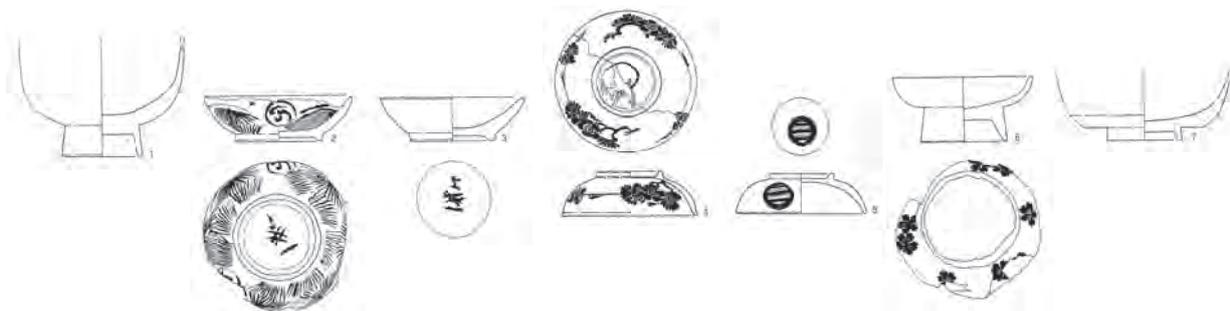
なお、飯田町遺跡5020号遺跡、堀跡（17世紀中葉下限）では天目形、鏝縁の椀はなく、被せ蓋の壺椀・平椀が出土している。

港区増上寺子院群でもⅢ期（六道銭：1668～1697・陶磁器17世紀後葉）に、一文字形の椀がみられるようになり、Ⅳ期（六道銭：1697年～・陶磁器：18世紀前半）では大量に出土している。また、高台（摘み）内が中心部から弧状に挽かれる（高台内縁辺に角を持たない）形状の椀・椀蓋がⅤ期（18世紀後半）に急増しており、器種には杯台が加わる。

遺構の年代が明確である江戸遺跡の資料においては、17世紀前半の特徴として16世紀から続く腰丸形の椀に加えて、蓋付きの飯椀・汁椀に壺椀・平椀、腰高がセットとなる揃い椀、東北系箔椀、松鶴亀椀、加飾では赤色や黒色の他に、黄色や緑色系の色漆および切箔を使用した文様を持つ資料が少数出土するといった様相が認められる。特にこの時期は、定形的な壺椀・平椀が普及する前段階であり、17世紀後半には一文字形の椀、壺椀・平椀、腰高の割合が急増している。しかし、飯椀・汁椀の数量に対して、壺椀・平椀、腰高はやはり少数であり、17世紀後半では椀蓋と判断される器種が多く出土していることから、蓋付きの飯椀・汁椀のみで購入されたものが含まれると理解されよう。また、緑色系の塗りを持つ一文字形の椀（蓋付き）、壺椀・平椀が出土、松鶴亀椀が増加する一方で、東北系箔椀の出土がほとんどなくなるといった状況が確認できる。港区増上寺子院群では、緑色塗りの椀はⅣ期（六道銭：1697年～・陶磁器：18世紀前半）以降に出現する器形（一文字形の椀、被せ蓋の壺椀・平椀）にのみ認められることが指摘されており（安藤 1988：349頁）、17世紀後半の資料群である医学部附属病院入院棟A地点SK3でも、緑色系の塗りを持つ椀は一文字形が主体であることから、17世紀後半における緑色系漆椀の形状特徴として指摘できる。一文字形は底が水平に近く、



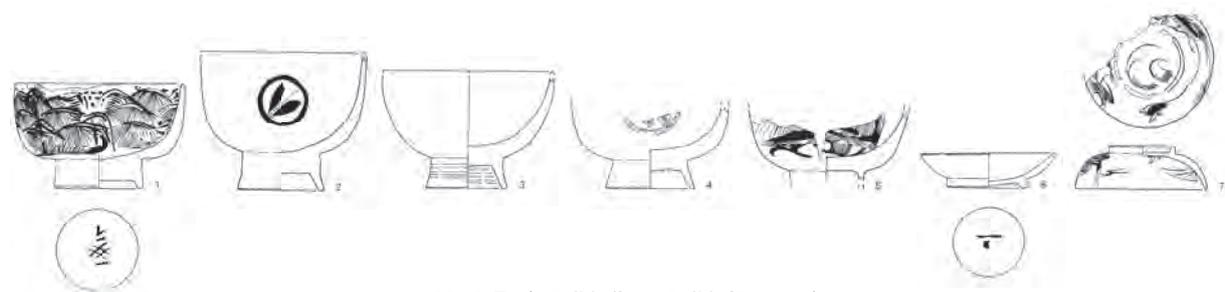
Ⅲ区盛土層（17世紀前葉：1650年代以前）



5020号遺構（17世紀中葉下限）

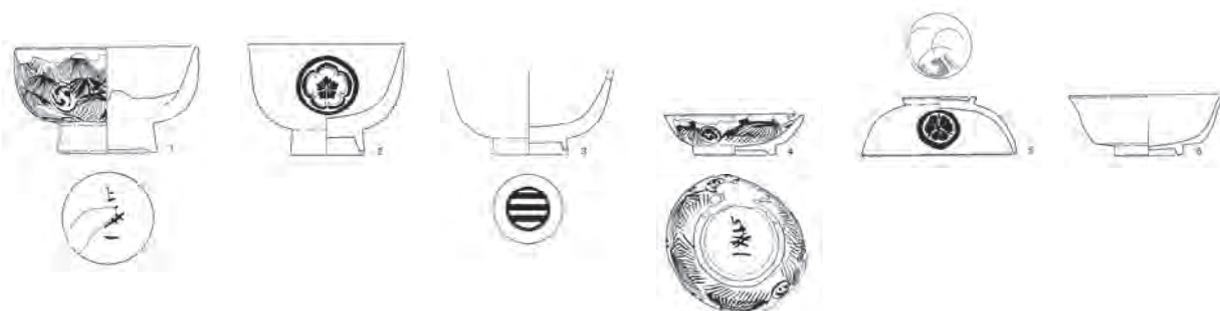


I区堀跡（17世紀中葉下限）

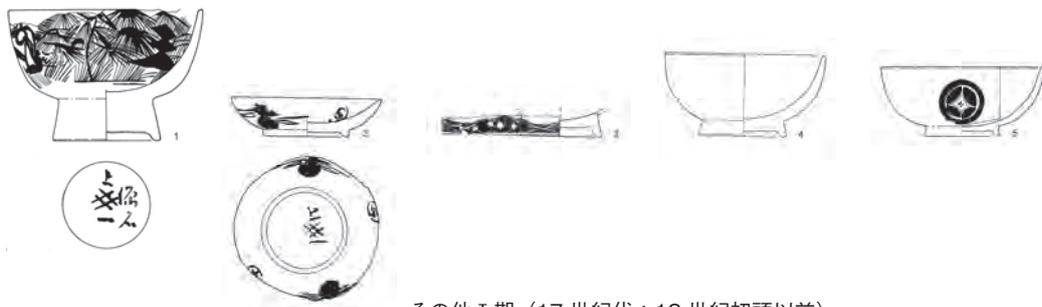


6279号（17世紀代：18世紀初頭下限）

8 図 飯田町遺跡 漆碗形状変遷 (1) S=1/6

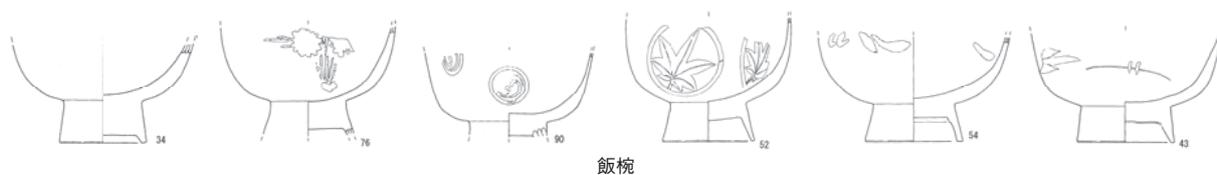


6279号遺構周辺（17世紀代：18世紀初頭以前）



その他I期（17世紀代：18世紀初頭以前）

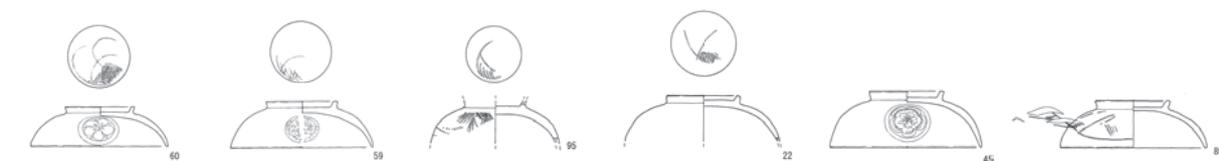
9 図 飯田町遺跡 漆碗形状変遷（2）S=1/6



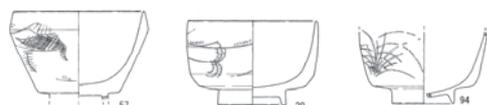
飯碗



汁碗



碗・碗蓋



碗（天目形）

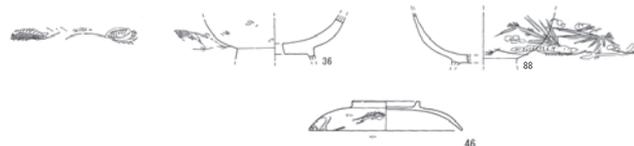
壺碗（かつらなし）



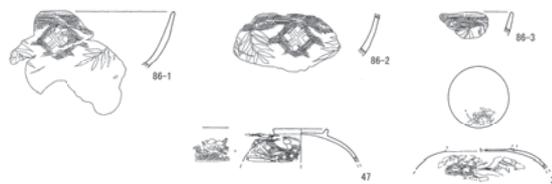
碗（平・端反形）



腰高

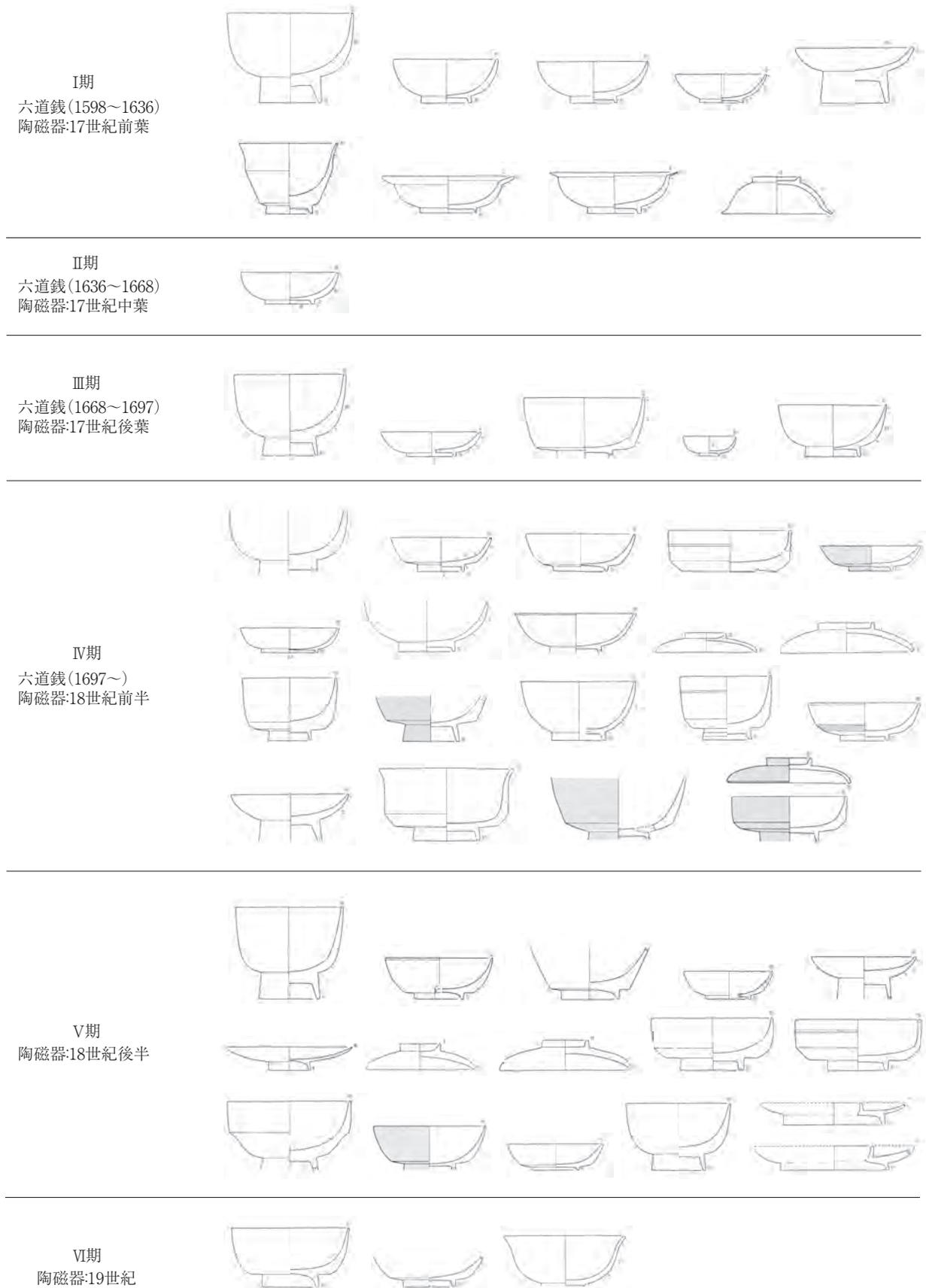


蓬莱文系（松・鶴・亀文）



東北系箔碗

10 図 有楽町二丁目遺跡（17世紀前半）S=1/6



11 図 増上寺子院群 漆碗 S=1/6

腰部に稜を持ち、やや外側に向かって直線的に立ち上がる形状である。このうち「腰部に稜がある」「器壁が直線的に挽かれる」という部分が、腰部に面取りをされたような稜が2本入り、口縁にかけて器壁が垂直に立ち上がる形状を持つ壺椀・平椀との類似点として挙げられる。

17世紀後半に出土した緑色系漆椀の主体となる一文字形の椀は、壺椀・平椀を含む「揃い椀」として製作、普及に伴って増加したという可能性がある一方で、数量的には飯椀・汁椀（蓋付き）が多数を占めていることから、主に単独あるいは重椀として移入したと捉えられよう。

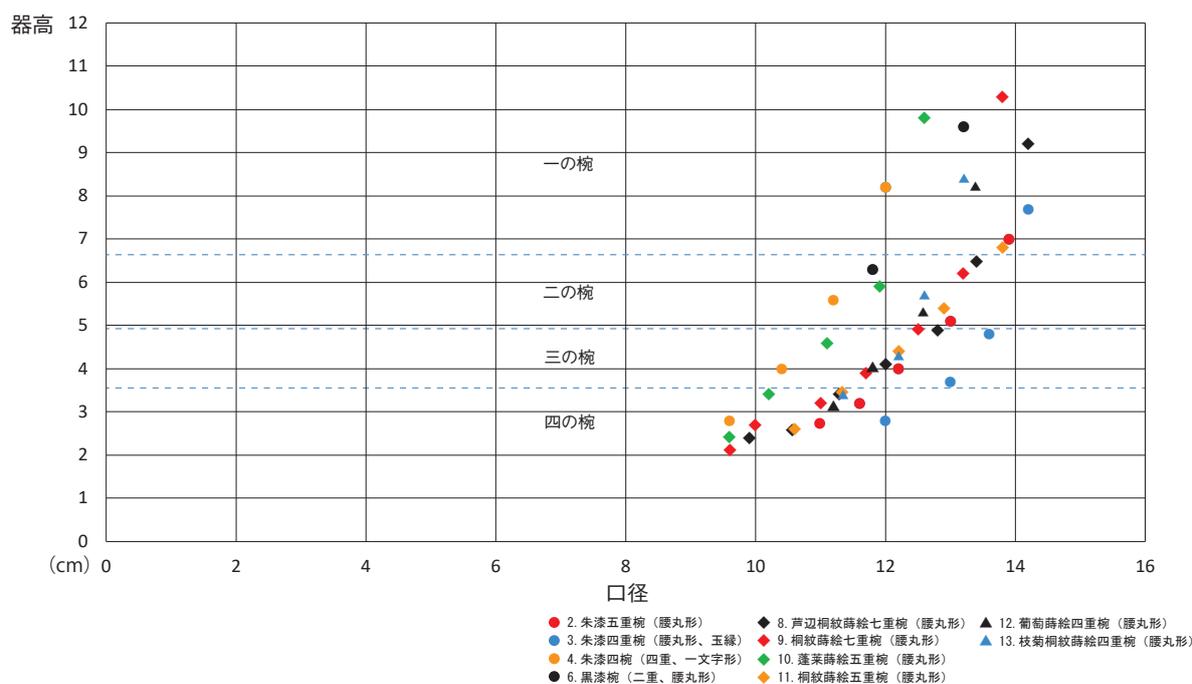
伝世品との比較による研究では16世紀の出土資料には「引入」³⁾と呼称される入子状の三重椀（一の椀から三の椀）が含まれる可能性が高いことが示されている（中井1989）。伝世品の「重椀」には、多いもので七重の「重椀」が認められる（表3）。17世紀代の出土資料には、揃い椀としてのセット以外に、蓋付きの飯椀・汁椀が多く存在していることから、これらが入子状の「重椀」であったのか、蓋付きの四椀として個別に製作・流通したのかを検討する。

伝世品の重椀について、口径と器高を基準としてグラフで示した（12図）。一の椀は口径が12～14.2cm、器高が6.8～10.3cm、二の椀は口径が11.2～13.6cm、器高が4.8～6.5cm、三・四の椀は口径10.4cm以下、器高が4.9cm以下となっている。これら以外の単独で示されている椀についても、口径

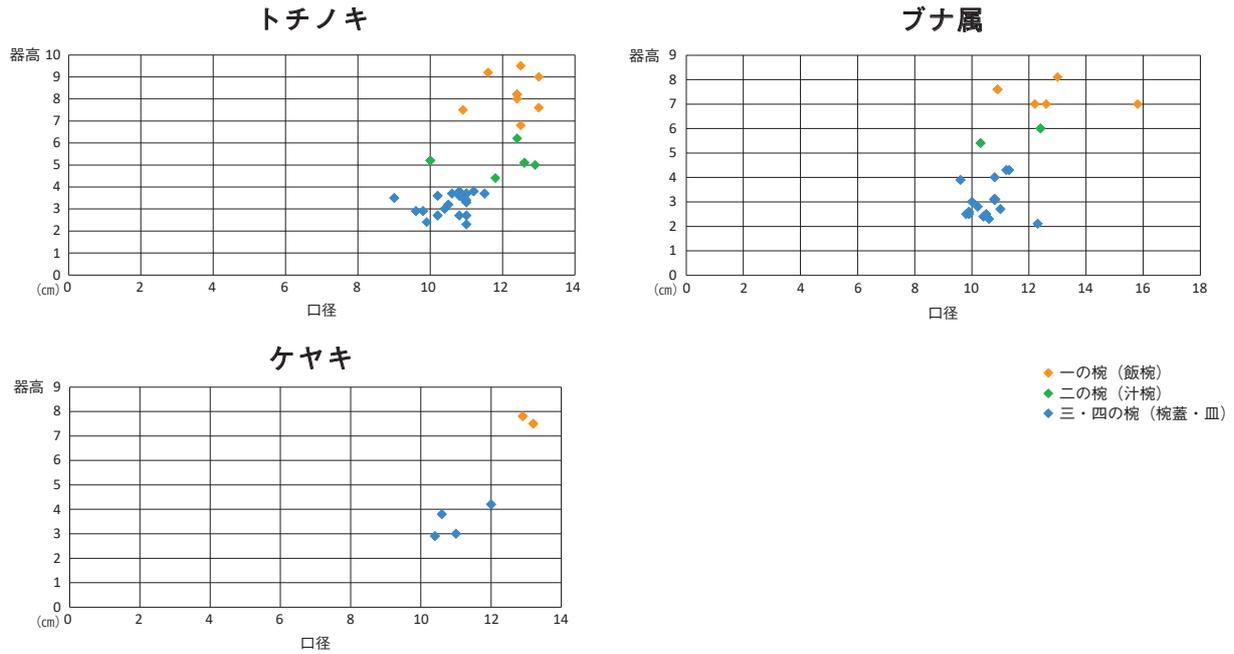
番号・名称（漆椀百選）	備考	一の椀		二の椀		三の椀		四の椀		五の椀		六の椀		七の椀	
		口径	器高	口径	器高	口径	器高	口径	器高	口径	器高	口径	器高	口径	器高
2 朱漆五重椀	腰丸形	13.9	7	13	5.1	12.2	4	11.6	3.2	11	2.7				
3 朱漆四重椀	腰丸形、玉縁	14.2	7.7	13.6	4.8	13	3.7	12	2.8						
4 朱漆四椀	四重、一文字形	12	8.2	11.2	5.6	10.4	4	9.6	2.8						
6 黒漆椀	二重、腰丸形	13.2	9.6	11.8	6.3										
8 芦辺桐紋蒔絵七重椀	腰丸形	14.2	9.2	13.4	6.5	12.8	4.9	12	4.1	11.3	3.4	10.6	2.6	9.9	2.4
9 桐紋蒔絵七重椀	腰丸形	13.8	10.3	13.2	6.2	12.5	4.9	11.7	3.9	11	3.2	10	2.7	9.6	2.1
10 蓬萊蒔絵五重椀	腰丸形	12.6	9.8	11.9	5.9	11.1	4.6	10.2	3.4	9.6	2.4				
11 桐紋蒔絵五重椀	腰丸形	13.8	6.8	12.9	5.4	12.2	4.3	11.4	3.4	10.6	2.6				
12 葡萄蒔絵四重椀	腰丸形	13.4	8.2	12.6	5.3	11.8	4	11.2	3.1						
13 枝菊桐紋蒔絵四重椀	腰丸形	13.2	8.4	12.6	5.7	12.2	4.4	11.4	3.3						

〔漆椀百選〕実測図 [5-15頁] より筆者計測) 単位: cm

表3 『漆椀百選』より伝世品組椀（重椀）計測値一覧



12図 伝世品組椀（二重から七重）計測値による分類



13 図 医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 計測値による分類

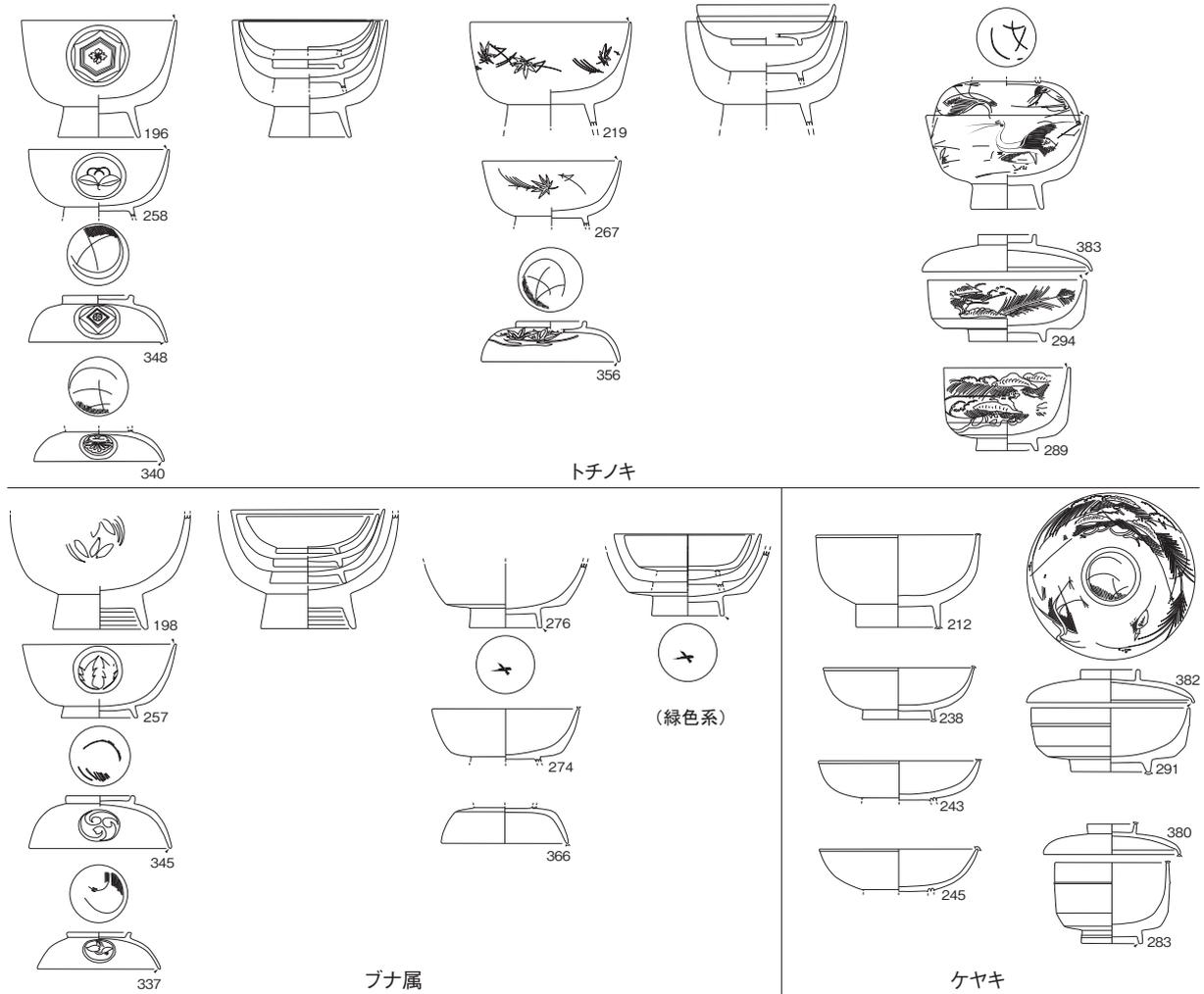
と器高に大きな差はないことから、一の碗を飯碗、二の碗を汁碗として参照する。

入院棟 A 地点 SK3 (17 世紀後半) の飯碗・汁碗で口径・器高が遺存、あるいは復元できる個体を計測値を基に口径と器高によってグラフで示した (13 図)。また、碗類のセット関係について、形状と文様が類似するものが「重碗」となるのかを実測図から検討したものが 14 図である。

伝世品と入院棟 A 地点 SK3 のグラフの分布では、器種と器高の関連性が高いことがわかる (12 図・13 図)。また、双方のグラフの分布は類似しており、腰丸形、一文字形の碗についても「入子状」となること (14 図)、さらに器高が約 4cm 以下で、三・四の碗 (碗蓋・皿) と考えられる碗類の数量が飯碗・汁碗に匹敵することを考慮すると、17 世紀後半のトチノキ、ブナ属の碗については、それぞれに蓋が付いた四重碗が主体として流通した可能性があると言える。ケヤキは数が少なく推定が困難であるが、重碗と考えられるセットは認められない。なお、18 世紀末から 19 世紀前半に廃絶した工学部 1 号館 SK01 (加賀藩上屋敷) の出土資料では大振りが高台の高い飯碗はみられず、飯碗と汁碗の大きさの差が少なくなることから (東京大学埋蔵文化財調査室 2005:107 ~ 116 頁)、この時期には「重ね」ではなく蓋付きの四重碗となることも推測される。

漆碗のセット関係について、17 世紀では元禄 13 (1700) 年に亡くなった福島県会津藩家老田中正玄夫人墓 (妙国寺) の副葬品として、腰丸形の三重碗、四重碗、平碗 (蓋付き)、腰高、膳、鉢が確認されており (会津若松市教育委員会 1980)、17 世紀末から 18 世紀後半の大日北遺跡、17・18 世紀の石川県金沢市久昌寺遺跡の墓群においても、前者では一文字形の三重碗、後者では同一の文様が施される三重・四重碗、あるいはそれらに腰高などが共伴するといった出土状況が認められる (多賀城市埋蔵文化財調査センター 1998、金沢市埋蔵文化財センター 2004)。副葬された漆碗は、一般的には日常で使用される食膳具であると考えられることから、東北・北陸地方では 16 世紀以降にも主に重碗を使用していることが推測される。

今回、17 世紀後半のブナ属・トチノキの一文字形および腰丸形の碗について、前者は三重碗、後者は四重碗が存在する可能性を示した。しかし、重碗や揃い碗としてのセットの他に、単独で流通し



14 図 医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 組椀・揃い椀におけるセット関係の推定

たものについても指摘されており（中井 1989：393 頁）、伝世品においても、単独で提示されている飯椀・汁椀を入子状にすることも可能であること、図化された出土資料については、腐朽による「痩せ」や土圧による変形を復元したのものも多数含まれることを想定した分析が求められる。

(2) 樹種について

各報告書による江戸遺跡から出土した漆椀の樹種組成をみると、17 世紀前半にはトチノキの比率が圧倒的に高い遺跡が認められる。17 世紀後半になるとブナ属が増加するが、トチノキには及ばないことが多い。その様相は 18 世紀以降まで継続している。

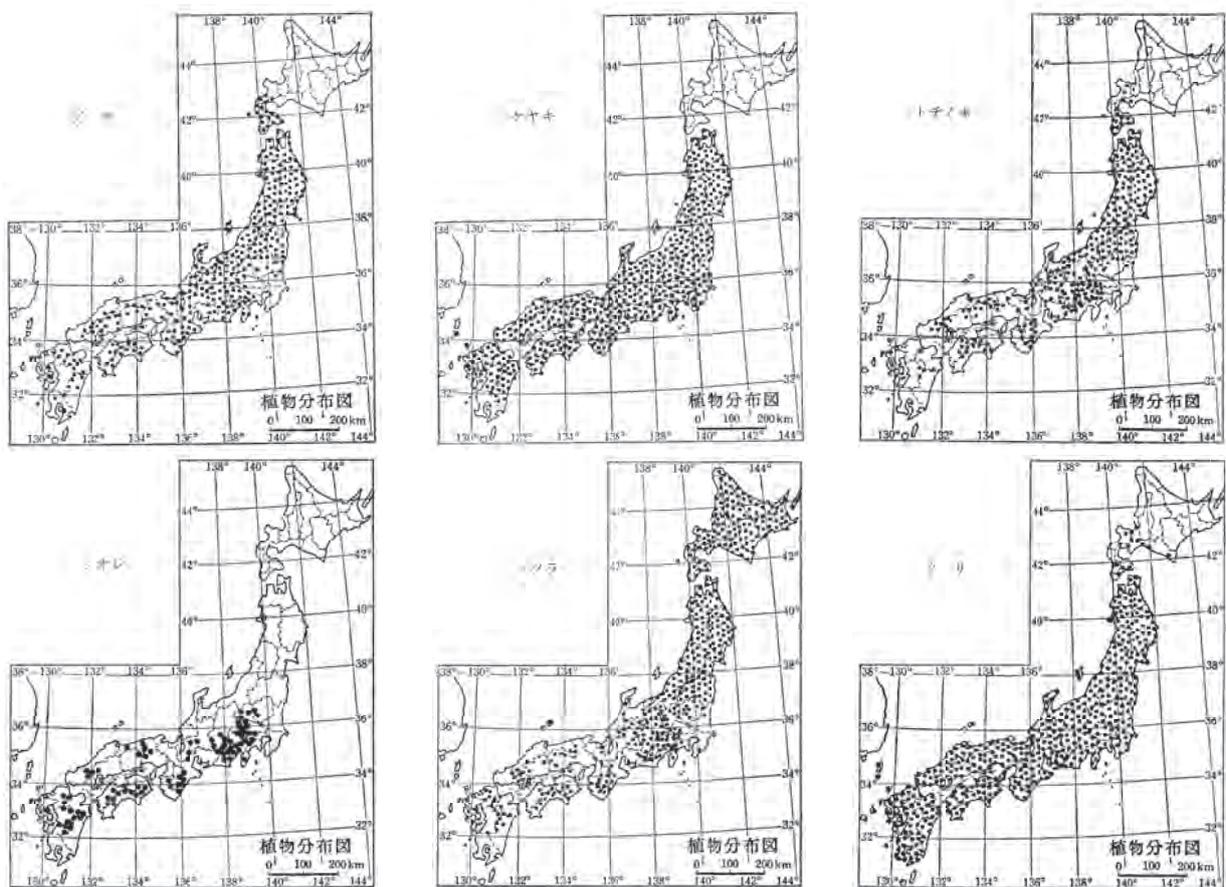
樹木の天然分布について（15 図）、ケヤキは本州四国九州、トチノキは北海道南部、本州・四国・九州、ブナ属は渡島半島以西、北海道南部から日本列島全域にみられる（林 1969：196・233・234・353・354 頁）。

全国の消費地遺跡について（16 図）、東北地方では鎌倉時代まではケヤキが主に使用される事例が多く、室町時代以降にはブナ属が主体となっている。なお、東北地方では挽物生産の増加に伴い、資源として豊富に存在しているブナ属を使用した渋下地の廉価な製品が大量に生産されることが指摘されている（仲田 1999 など）。一方、天然分布にあるトチノキの出土比率が僅少であることについて、東北地方においては、食料としての堅果類の利用価値が高く、保護の対象となったことが知られている（須藤 1975：283 頁・1997：696 頁）。

鎌倉時代以降、北陸地方ではブナ属やケヤキ、四国、近畿地方ではトチノキ、東海地方ではトチノキやトネリコ属、クリ、ケヤキなど、多様な樹種が主体となる遺跡がある。静岡県や神奈川県では、室町時代から近世初期において、トネリコ属やクリ、ケヤキ、カツラ属といった樹種が多数を占めるという様相があり、鎌倉時代から室町前半期の葛西城でもケヤキ、クリが占める割合が高い。先行研究によれば、近世ではケヤキ・トチノキは鉱物系（漆）下地で複数の塗りが施される製品、ブナ属は炭粉（渋）下地で単層塗りの製品が多数を占める。これらは品質の違いとして捉えられているものの、ブナ属のなかには下地や塗りが一般的であっても、文様に金箔が使用される東北系箔碗などがあり、塗りの品質（単層・多層）と価値が一致しない製品の存在についても考慮に入れる必要がある。

なお、江戸遺跡から出土した「上※一」銘を持つ碗は、葛西城址、千代田区飯田町遺跡、丸の内三丁目遺跡、紀尾井町遺跡、小田原城欄干橋Ⅳ地点など、複数の遺跡から出土していることから（富士山2001：169・170頁）、製作段階で付けられたものであると考えられる。これがセットを示す記号、あるいは工房や製作者の印といった意味を持つのかは不明であるが、樹種がケヤキ・カツラ・ブナ属・シオジ（トネリコ属）であり、このうちシオジ（トネリコ属）は栃木県西部以南の太平洋側に主な分布域がある。小田原城（神奈川県小田原市）、葛西城（東京都葛飾区）、蕪山城（静岡県伊豆）で出土している形状や文様が類似した16世紀代の漆碗について（17図）、南関東を中心とした小田原北条氏領国内における流通が指摘されており（佐々木2013：146頁）、江戸とその近郊における出土状況、静岡県周辺にシオジ（トネリコ属）の天然林が分布していることを併せて考えると、これら中世末から江戸初期にかけて認められる製品が、小田原・駿河といった産地で製作された可能性が高い。

北野氏は茶会席漆器としての「松鶴亀碗（蓬菜文系）」について、当時の大規模な生産地であり、



15 図 樹木の天然分布図（林 1969 より転載）

碗類の用材としてトチノキを多用していた、紀州黒江塗を中心とした畿内（大和国、山城国、摂津国、河内国、和泉国）による製作を指摘している（北野 2005b：188・189 頁）。これらは主にトチノキで炭下地、ベンガラを使用した製品である（18 図）。

消費地遺跡の樹種組成および文献史料における産地によれば、江戸遺跡では東北地方からブナ属、東海地方からトネリコ属シオジ、近畿地方からトチノキの漆碗が移入したことが推測される。

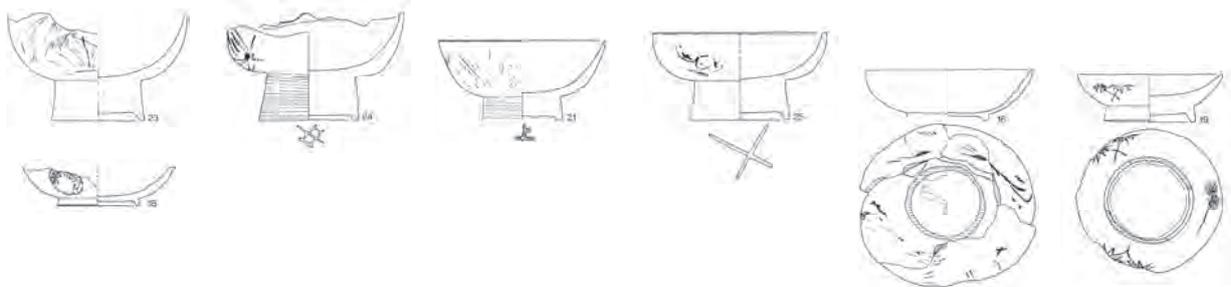
(3) 樹種分類による検討

・飯田町遺跡 I 期：17 世紀代（18 世紀初頭以前）（19・20 図）

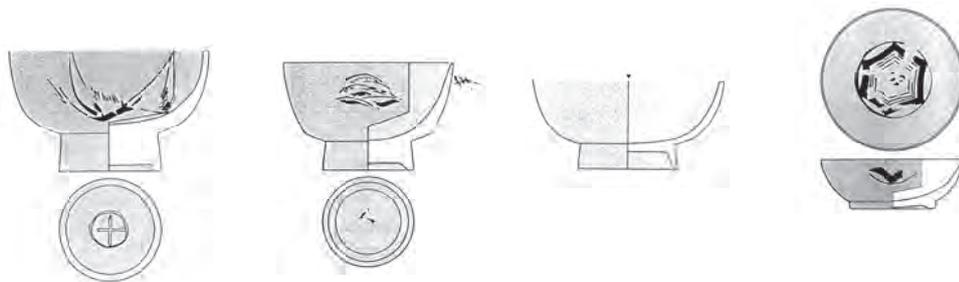
トチノキでは飯碗・汁碗（蓋付き）、一文字形の碗蓋、平碗、腰高があり、丸文や筆書きの漆絵（蓬莱文・草花など）で、他の樹種と比較して丸文の比率が高い。25 点中 2 点のみ無文という加飾率の高さも特徴的である。

ブナ属では飯碗・汁碗（蓋付き）、一文字形、天目形の碗、腰高で、丸文や花、蓬莱文と思われる資料、吉野絵碗、東北系箔碗が認められる。17 点中 10 点が無文である。

ケヤキでは、飯碗・汁碗（蓋付き）、壺碗・平碗、端反形、杯があり、丸文や植物が描かれる資料がある。15 点中 10 点が無文である。



小田原城 IIb：天正期（1573～1592 年：小田原市教育委員会 1992）



葛西城（16 世紀代：葛飾区遺跡調査会 1989）

17 図 小田原城・葛西城出土漆碗（S=1/6）



18 図 松鶴亀碗（蓬莱文系漆碗）・緑色系漆碗の組成（北野 2005b：192 頁 図 31 より引用）

また、前述したようにブナ属・ケヤキ・シオジ・カツラに共通するのが、高台（摘み）内に銘「上※一」を持つ椀である。これらは複数の遺跡における出土事例があり（21 図）、製作段階で付けられることが推測される。なお、外面の文様から、大振りで高い高台を持ち、高台内の挽きが浅い飯椀と、高台がやや低い汁椀、器高が低く、口径と比較して高台径が大きい皿形の資料がセットと考えられる。これらは器形の特徴や文様が一致、あるいは類似しているものが認められることから、同一産地である可能性が高い。

・紀尾井町遺跡 SR35：17 世紀前半～中葉（1660 年代頃）（22 図）

トチノキは飯椀、汁椀（蓋付き）、腰高があり、丸文と漆絵（蓬莱文・草花など）が施される。その他の樹種に関しても、腰丸形の椀が主体となる。トチノキは 11 点中、2 点が無文であり、加飾率が高い。

・丸の内一丁目遺跡 10 号・12 号・240 号・243 号：17 世紀前半（1620 年後半～1636 年）（23 図）

トチノキは飯椀、汁椀（蓋付き）、壺椀・平椀があり、腰丸形の椀が主体となる。丸文と漆絵（羽・草花など）があり、20 点中 5 点が無文で加飾率が高い。ブナ属は丸椀と腰高があり、腰高のうち 1 点は東北系箔椀である。4 点中 3 点が無文である。ケヤキは丸椀と端反形、平椀など、6 点全てが無文である。

・医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3（17 世紀後半）（24～27 図）

トチノキは、飯椀、汁椀（蓋付き）、壺椀・平椀、腰高があり、104 点中無文が 29 点、高台（摘み）内に銘のある資料は 2 点である。ブナ属は、飯椀、汁椀（蓋付き）、腰高があり、87 点中無文が 63 点、高台（摘み）内に銘のある資料は 22 点である。ケヤキは飯椀、汁椀（蓋付き）、壺椀・平椀、腰高、杯、文様のある資料は椀蓋と腰高のみであり、27 点中 22 点が無文である。

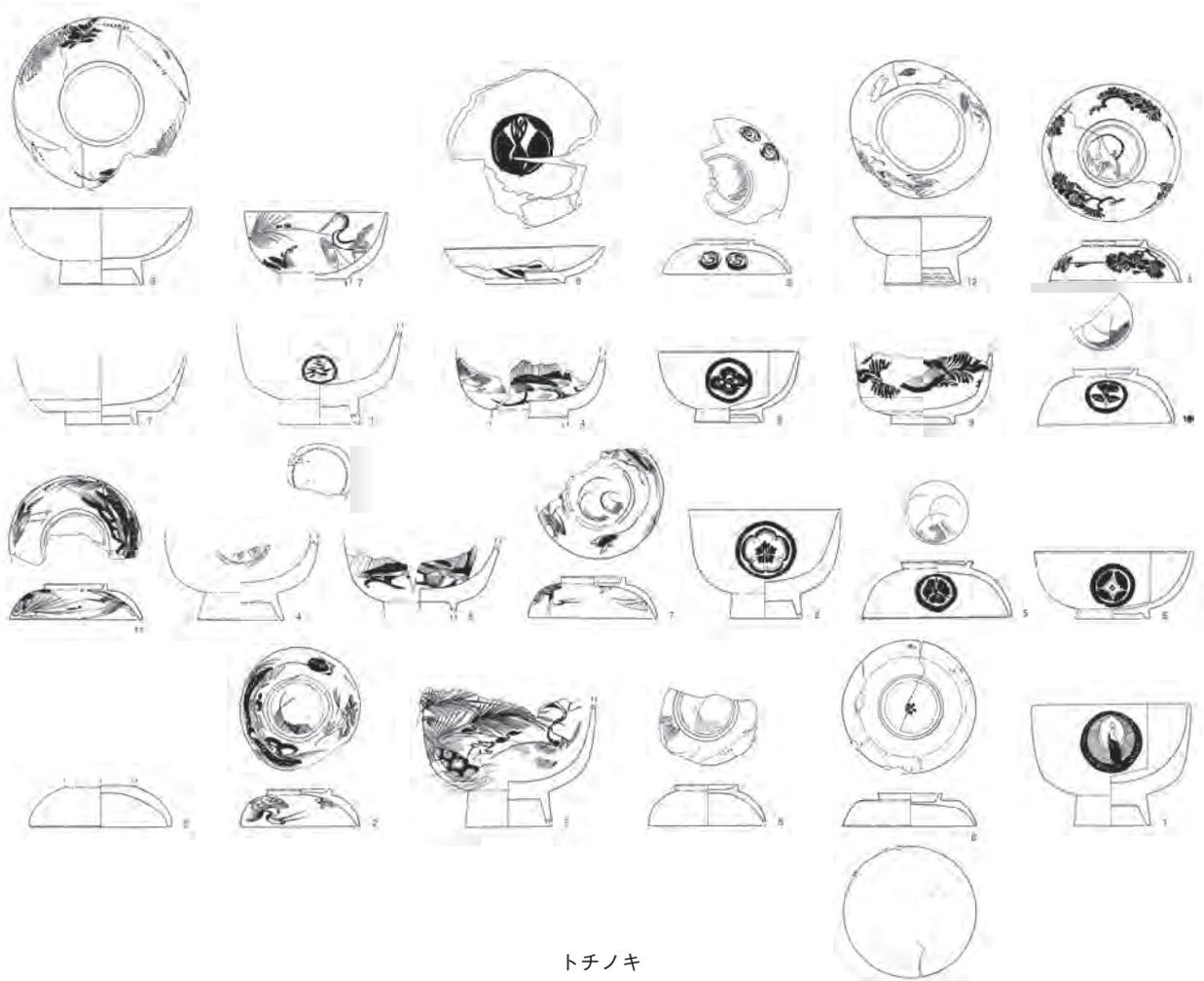
トチノキ・ケヤキでは揃い椀系の器種が含まれるが、ブナ属では壺椀・平椀が認められない。また、トチノキは他の樹種と比較して加飾率が高く、丸文の資料が多いことがわかる。ブナ属・ケヤキは無文の資料が多数を占めており、そのうちブナ属では高台（摘み）内に銘があるものが 87 点中 22 点、トチノキは 104 点中 2 点、ケヤキは 27 点全てにみられないことから、ブナ属では銘の比率が高いことが指摘できる。

（4）小結

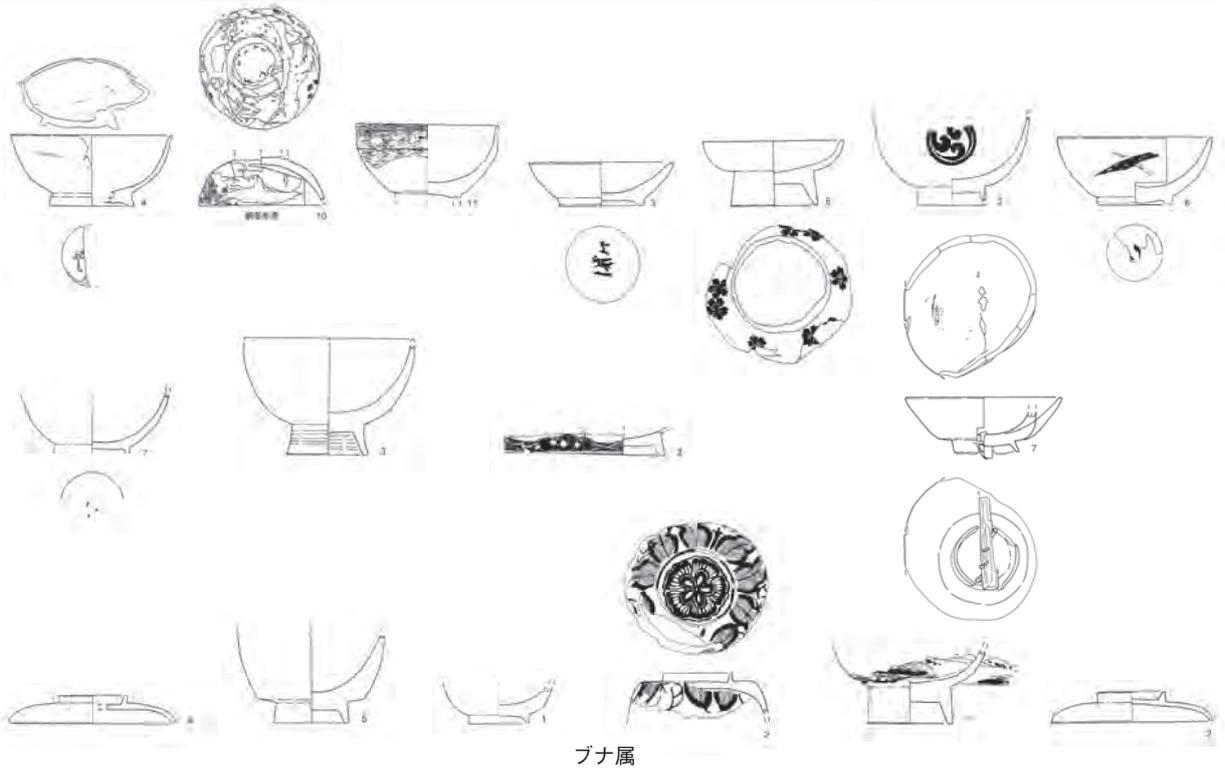
樹種ごとの特徴としては、トチノキは加飾率が高く、17 世紀前半頃には他の樹種よりも丸文が多い傾向があり、揃い椀系の器種が含まれる。ブナ属は壺椀・平椀に類する資料、腰高が少数認められるが、共伴するトチノキやケヤキにある定形的な壺椀・平椀はみられない一方で、東北系箔椀や吉野絵椀といった特徴的な加飾を持つ資料がある。17 世紀後半では、無文で高台・摘み内に銘がある椀の比率が比較的多く、蓋付きの飯椀・汁椀が主体となる。飯田町遺跡のケヤキの椀をみると「上※一」銘を持つ資料のみ外面に文様がある。「上※一」銘を持つ椀は 9 点中 8 点に文様が施されており（21 図）、それ以外では、高台内に丸文の資料 1 点のほか、全てが無文の資料であることから、主体となるのは無文の揃い椀であることがわかる。

17 世紀後半である医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 の資料群では、17 世紀前半で確認されたトチノキ、ブナ属、ケヤキの形状・文様特徴がより明確に表れている（清水 2016：331 頁）。また、緑色系の塗りを持つ資料の出現、17 世紀後半に特徴的となる定形的な壺椀・平椀、一文字形の飯椀・汁椀の増加が認められる。なお 17 世紀前半を中心として出土する天目形・鏝縁の椀、東北系箔椀は確認できない。

17世紀後半における緑色系の塗りを持つ碗は、ほとんどが一文字形の蓋付き碗で、これらはブナ属で炭粉下地が施されている。また、平碗の詳細は不明であるが、壺碗はケヤキで鉾物系の下地である。これらが揃い碗のセットとして製作されたのか、ブナ属、炭粉下地の飯碗・汁碗が蓋付きの飯碗・汁碗として流通し、一方ではケヤキで鉾物系の下地を持つ揃い碗、あるいは壺碗・平碗のみが流通したのかという点については、使用者の社会階層や用途（目的）などと併せて今後の課題となる。

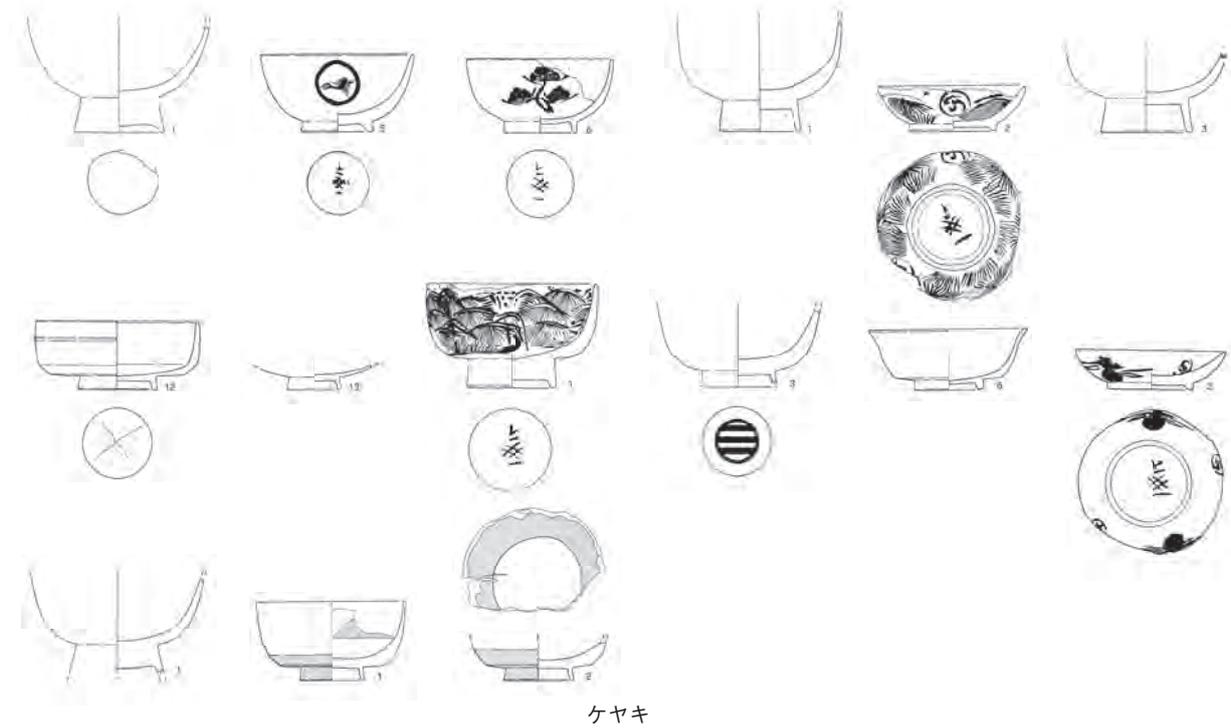


トチノキ

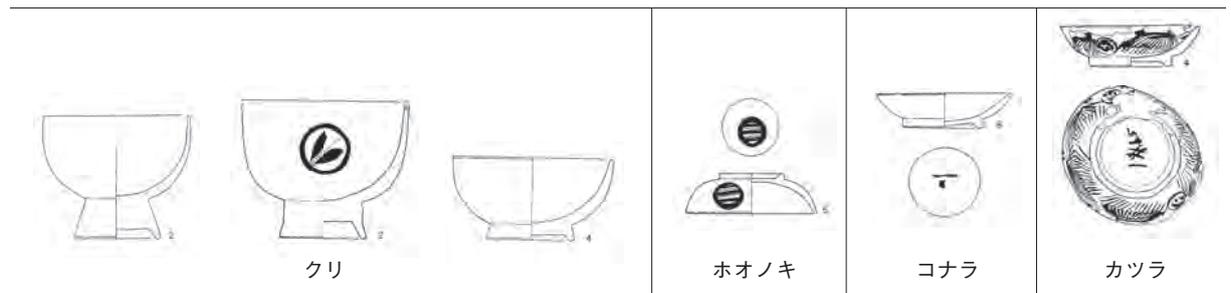


ブナ属

19 図 飯田町遺跡 I 期 (1) (17 世紀代 : 18 世紀初頭以前) S=1/6



ケヤキ

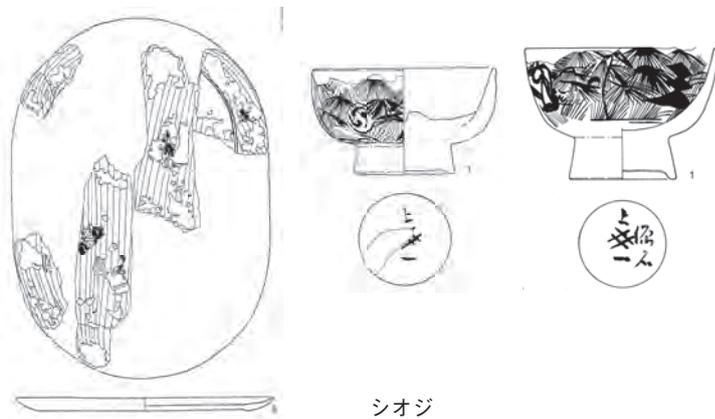


クリ

ホオノキ

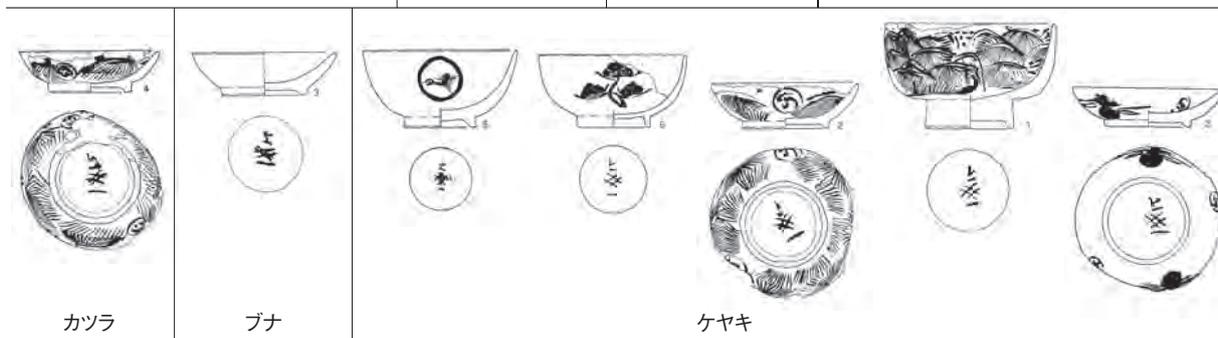
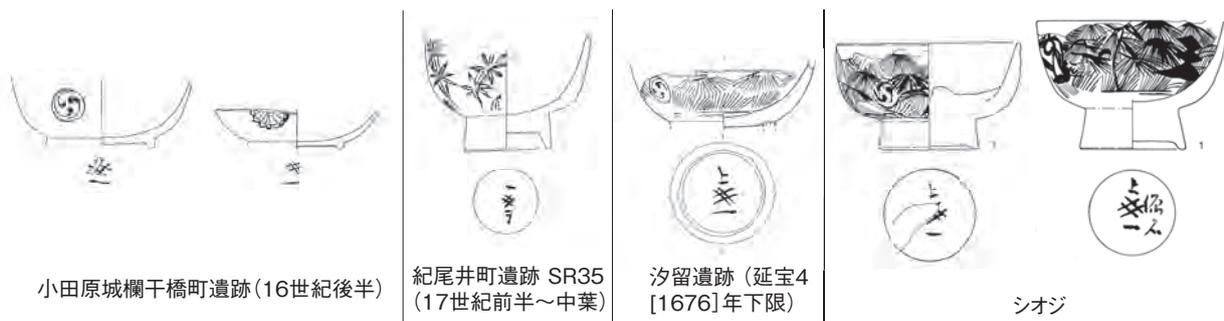
コナラ

カツラ

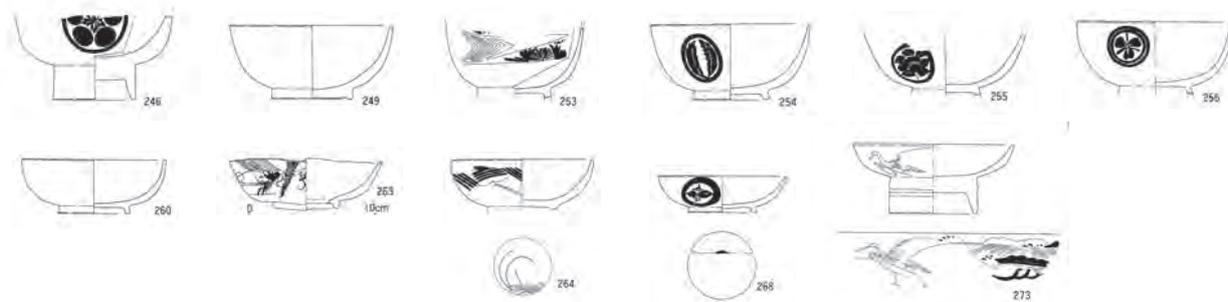


シオジ

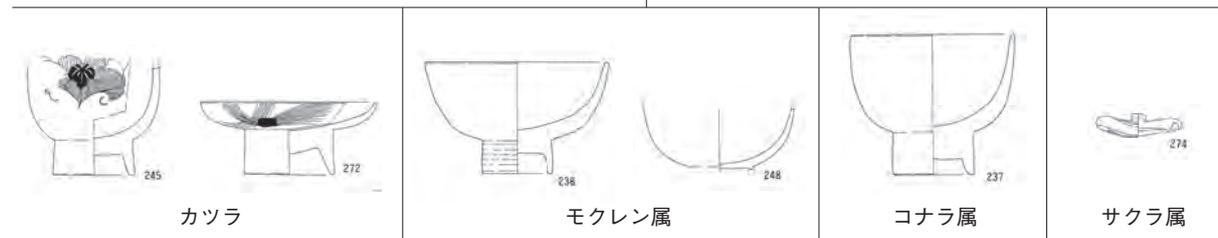
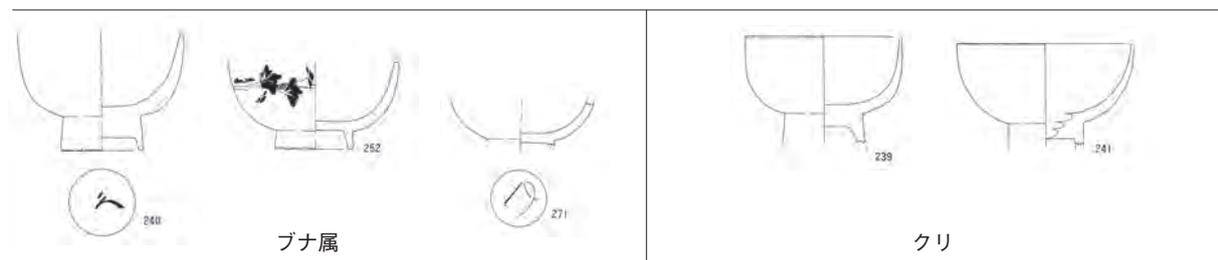
20 図 飯田町遺跡 I 期 (2) (17 世紀代 : 18 世紀初頭以前) S=1/6



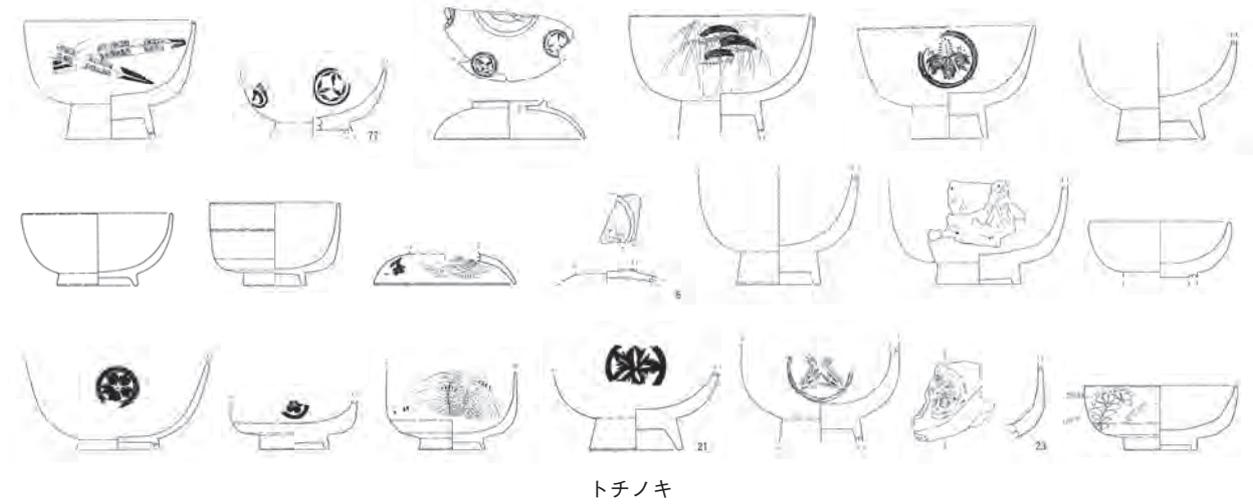
飯田町遺跡 (I期: 17世紀代)
21 図 高台内銘「※一」 S=1/6



トチノキ



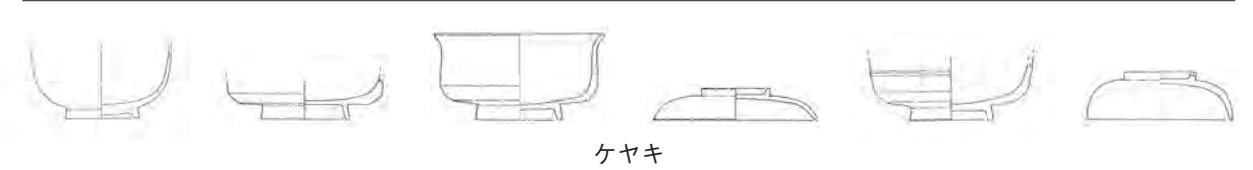
22 図 紀尾井町遺跡 SR35 (17世紀前半～中葉: 1660年代頃) S=1/6



トチノキ

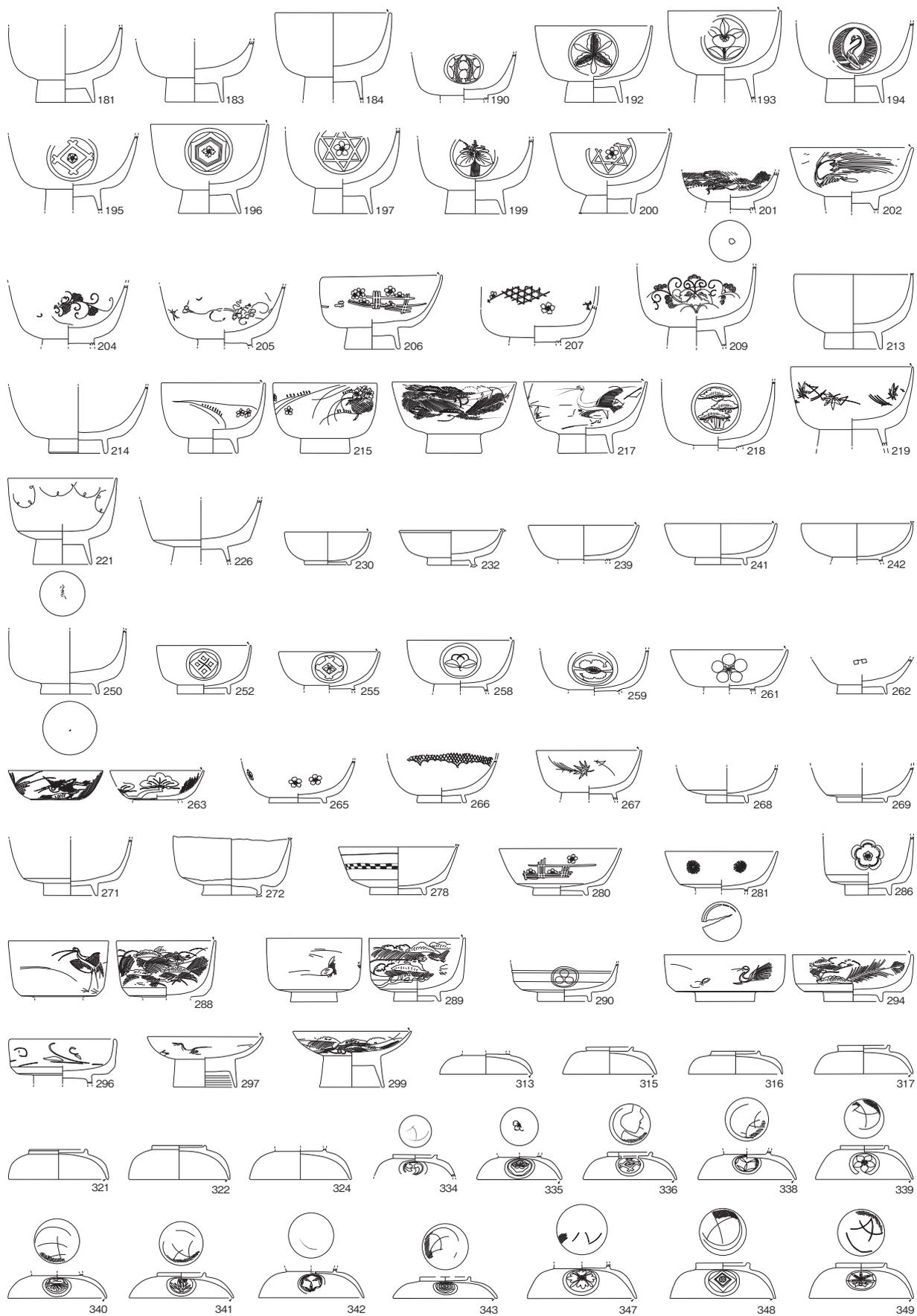


ブナ属

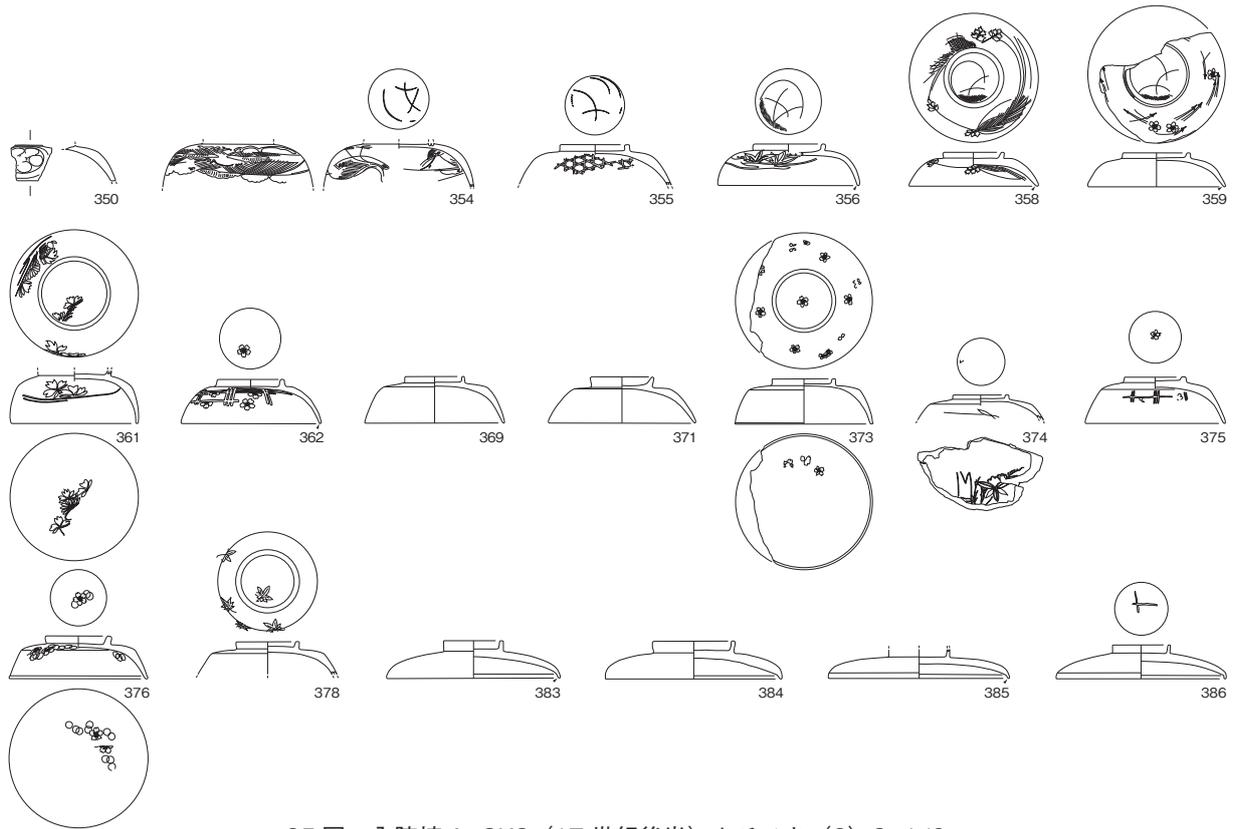


ケヤキ

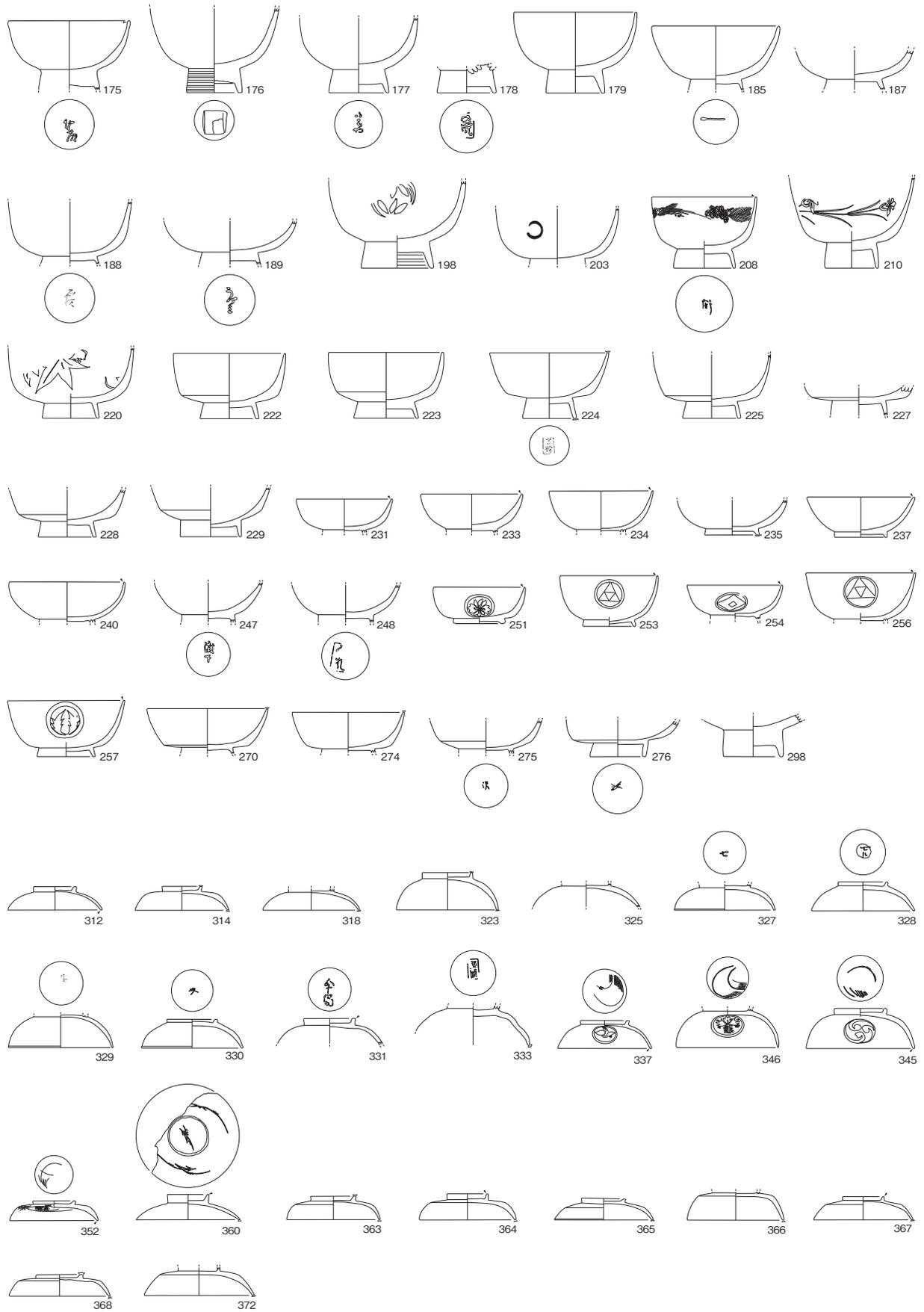
23 図 丸の内一丁目遺跡 10号・12号・240号・243号(1620年後半～1636年) S=1/6



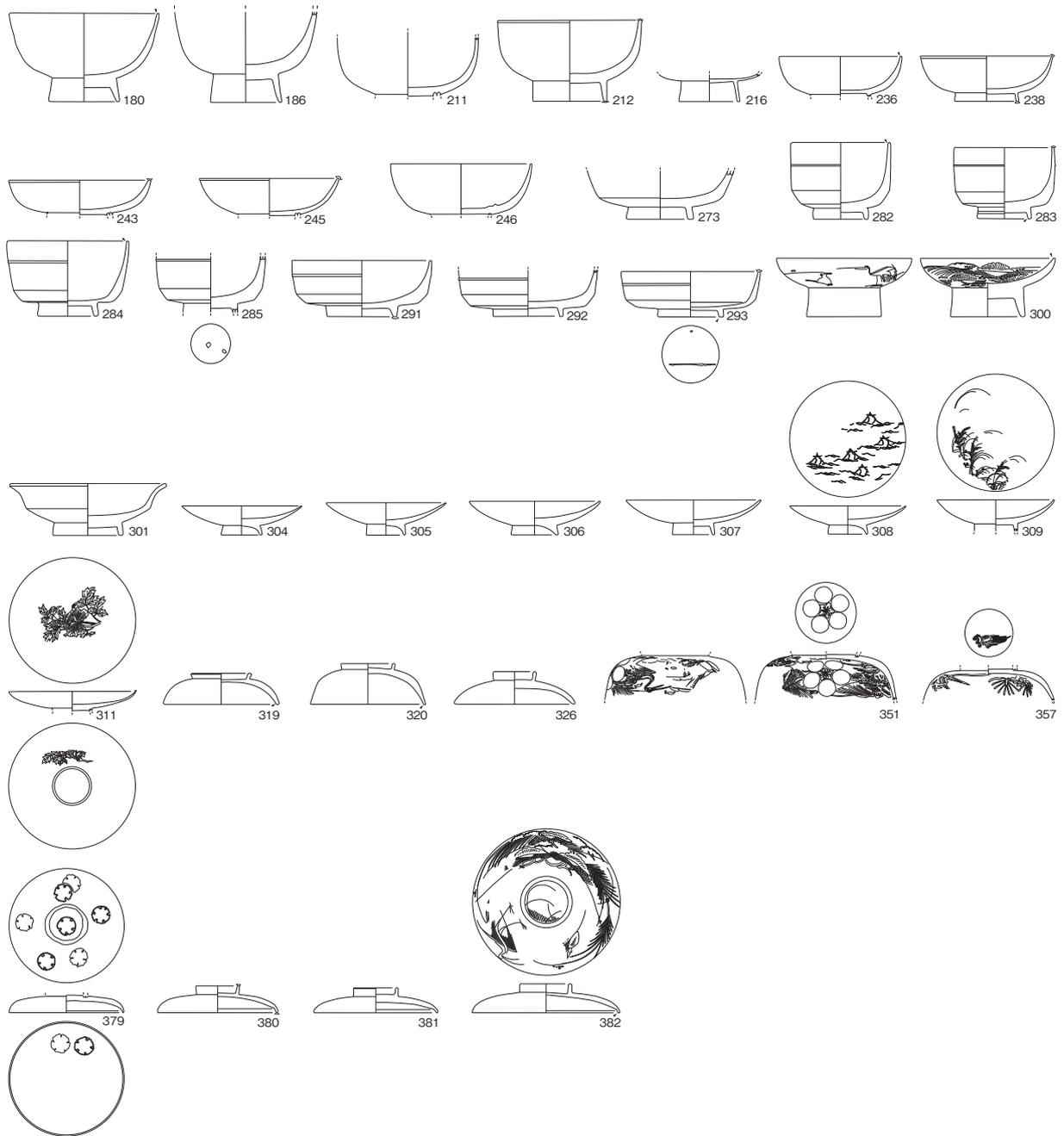
24 図 入院棟 A SK3 (17 世紀後半) トチノキ (1) S=1/6



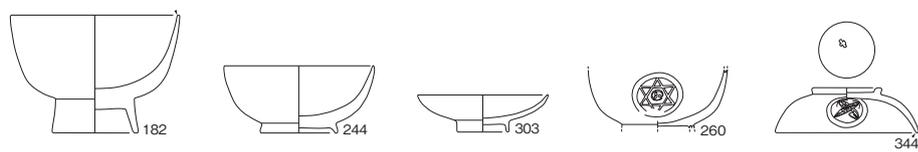
25 図 入院棟 A SK3 (17 世紀後半) トチノキ (2) S=1/6



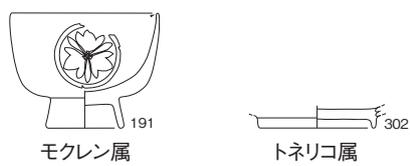
26 図 入院棟 A SK3 (17 世紀後半) ブナ属 S=1/6



ケヤキ



カツラ



モクレン属

トネリコ属

27 図 入院棟 A SK3 (17 世紀後半) ケヤキ、カツラ、その他 S=1/6

5. まとめ

「青漆（緑色漆）」について、文献史料によれば、会津では18世紀前半には人造石黄を製造、色漆による漆器が製作される（高瀬・関谷1967：144・145頁）。また、会津の伝世品である初期の箔絵椀「黒塗菊漆絵椀蓋」「菊漆絵絲目椀」では黄色・赤色、江戸中期の「弁柄塗菊漆絵壺椀」では黄色・赤色・黒色で菊が表現されており、そこに青漆（緑色）が加わったことで、松と竹を描くことが可能となったという推測がある（小林2004：23頁）。

会津では18世紀後半に行われた藩政改革の一環として、漆器の技術向上のために京都から職人が召し抱えられ、蒔絵や塗りの技術の習得が試みられたという。なお、江戸の塗物問屋黒江屋の仕入記録では、会津からの仕入高は寛政年間（1789～1801年）を挟んで天明年間（1781～1789年）8年間の平均が約568両、享和元年（1801年）から8年間の平均が約1,277両と倍増していることがわかる（高瀬2003：20頁、半田1970）。さらに、明和9年（1772）年に写された史料「藤重流漆拵之秘法」の「色漆之事」という項目に「花ぬり漆」「蠟色」「黄漆」とともに「青漆」の製法が書かれている。

「青漆いろの事 黄漆の中へあいろうを入べし 但シからのあいろう少しいるはよし 是秘伝（「藤重流漆拵之秘法」）（小林2004：23頁）。

文献資料においてはこのような状況のなか、18世紀後半（寛政年間）には、会津では色漆を多用した漆器が製作されていくことを読み取ることができる。

17世紀における石黄と藍を使用した緑色系の漆について、管見では17世紀前半代から漆椀の文様として認められ、17世紀前半から中頃に出土する東北系箔椀（南部箔椀）の文様の一部にも確認することができる（有楽町二丁目遺跡など）。

北海道や東北地方、江戸遺跡から出土した東北系箔椀（南部箔椀）は、内面赤色、外面黒色の塗りに外面の文様として口縁部には雲文様（赤色）、その上に菱・四割菱や短冊形の切箔があり、雲文様の間に2あるいは3単位で枝菊や竹文様などが描かれる。北海道で出土している資料は、文様が赤色単色で用いられているものが多い。一方、東北地方（会津）や江戸遺跡から出土した資料のほとんどが、雲に黄色（石黄）の平行斜線が入り、雲間には枝菊や植物のモチーフを使用、枝菊の花芯は赤色に黄色の点、花びらや枝葉は黄色（褐色）などで表現するという、黄色（褐色）を主体とした文様構成になっており、緑色系が確認されているのは有楽町二丁目遺跡など一部の資料に限られている。緑色系漆に使用されている藍は、紫外線や保存処理などの外的要因による退色が考えられることから、文様に認められる黄色（褐色）の一部が、当初は緑色であった可能性があり、文様に緑色が使用される資料がごく少数である要因として指摘できる。17世紀前半代に文様の一部として用いられた緑色系漆と、17世紀後半に「塗り」として使用される緑色系漆との関連、北海道と東北・江戸遺跡にみられる東北系箔椀の文様に使用される色の違いが、産地あるいは販売戦略などによるものであるか、さらに検討すべき課題として挙げられる。

なお、16世紀代には山形県荒川2遺跡で文様に黄色漆が使用される漆椀が出土しており、東北地方において17世紀前半の東北系箔椀にみられる石黄を用いた加飾として継続したものと捉えられる。

慶長5（1600）年に上杉景勝が築いた城とされる福島県会津若松市神指城の堀跡では、青漆（緑色系漆）の椀蓋（内面黒色、外面緑色）が1点確認されている（四柳1992：52頁・2006：260頁）。ここでは飯椀、汁椀、蓋、杯などが出土しており、いずれもブナ属で炭粉渋下地である。江戸遺跡から

出土している17世紀代の東北系箔碗および緑色系の塗りを持つ碗についても、ブナ属で炭粉渋下地が主体であり、東北地方の出土漆碗の樹種組成や、分献史料における緑色系漆の製作記録などから、製作地は東北地方であることが推測される。

ところが、ごく少数ながら西日本においても17世紀代の緑色系挽物が出土しており(28図)、前述した東北系の挽物の特徴と考えられる一文字形でブナ属、炭粉(渋)下地で単層塗り、内面にベンガラを使用したものとは異なる特徴を持つ資料が主体となる。兵庫県明石城武家屋敷跡では、エゴノキ属で鉾物系下地、内面が朱(HgS)の杯、ブナ属で炭粉下地、内面が黒色で多層塗りの碗・皿が認められる。また、17世紀後半から18世紀代の石川県久昌寺遺跡ではケヤキで内面に朱(HgS)を使用した小鉢や竹製の箸といった資料がある。17世紀後半の医学部付属病院入院棟A地点SK3からはケヤキで鉾物系下地の緑色塗りの壺碗が1点出土、ブナ属の資料群とは異なる特徴を持っている。なお、SK3のブナ属には壺碗がみられず、先述した17世紀代の会津藩家老田中正玄夫人墓の副葬品にも平碗、腰高はあるが、壺碗が出土していない。一方、ケヤキやトチノキでは17世紀代には壺碗・平碗が複数認められることから、東北地方で製作されるブナ属の漆碗は、17世紀代には揃い碗のうち、壺碗がほとんど製作されていないことが推測される。そこで、江戸遺跡から出土した緑色系の塗りの主体を占める一文字形、ブナ属・炭粉下地の挽物については東北地方、江戸以西で出土している多様な形状・樹種・塗りの色(ブナ属・ケヤキ・エゴノキ属)、炭粉・鉾物系下地の挽物については、製作地が異なる可能性を指摘できる。

会津の文献史料や伝世品の検討からは、18世紀後半頃に「青漆」が使用されるようになったと推測されており、入院棟A地点(大聖寺藩上屋敷跡)SK3、国際科学イノベーション地点(富山藩上屋敷跡)SX270における出土状況に加えて、17世紀代には天然石黄は交易品として中国や東南アジアなどから輸入、また一部で国産品の存在が指摘されることから(北野・肥塚2000a:72・73頁・北野2005a:41頁)、ブナ属の木地を使用する、東北地方以外の漆器産地における製作を視野に入れて、今後の調査を進めていく必要がある。



遺跡名	遺構番号	サンプルID	図版No.	遺物No.	木取	器種	塗り構造		塗り(色調)			文様(色調)文様単位	樹種	
							内	外	内面	外面				
兵庫県明石城武家屋敷跡	西中ノ町 SK	150	86	W8		杯	V	V	HgS	赤	As+S	緑		エゴノキ属
兵庫県明石城武家屋敷跡	中ノ町B SK3208 (I期:17世紀代)	160-1	86	W17	A	碗	III	IV		黒	As+S	緑	外-絵-赤(HgS)	ブナ属
兵庫県明石城武家屋敷跡	中ノ町A SK2129	172	86	W21	B	碗	多	多		黒	As+S	緑	内-絵-赤(ベンガラ)	ブナ属

28図 明石城武家屋敷跡 緑色系塗り挽物 S=1/4

(表凡例:表2参照)

17世紀代には一文字形の飯碗・汁碗で樹種がブナ属、炭粉(渋)下地、内面赤色(ベンガラ)、外面緑色(石黄+藍)、高台内がすぐろめ漆(単層)、三重碗を主体として江戸遺跡へ移入、なかには

樹種や塗膜構造が異なる壺椀・平椀がごく少数含まれる。これらは塗膜分析から天然石黄の使用が推測されたものである（本多・増田・宮腰 2017）。さらに 18 世紀以降を下限とすれば、腰丸椀や盆などがみられ、椀の形状や器種が多様となっていくことを推測できる。

一方、西日本では緑色系の塗りを持つ資料がほとんど認められない。しかし、少数であるが 17 世紀代から確認される資料があり、18 世紀以降となるものも含めて器種や塗り、樹種、下地・塗膜構造といった特徴が、江戸遺跡から出土したものと異なっている。これが東北地方以外で製作されたと考えられるブナ属の挽物の特徴として捉えられるのか、さらに詳細な地域性の分析が必要となろう。なお、緑色系の漆椀は、挽物の全体における割合として 1 割以下であることが多く、18 世紀以降としても江戸遺跡における流通量はわずかであるといえる。

17 世紀を中心とした漆椀の流通について、16 世紀から 17 世紀前半にかけて、南関東からトネリコ属（シオジ）で高台内に「上※一」の銘、高台内の挽き込みが浅い飯椀、高台径が大きい皿状の資料を含む重椀、17 世紀代には近畿地方からトチノキの松鶴亀椀（蓬萊文系）を含む揃い椀、東北地方からブナ属を主体とする東北系箔椀（蓋付き）、緑色系の塗りを持つ一文字形の椀（三重椀）などが、それぞれ江戸に移入したと考えられる（29 図）。

なお、ケヤキは出土数の多さから、トチノキと同じ近畿地方に製作地があると推定しており、東北地方とは様相が異なるブナ属の挽物についても、近畿地方に点在する緑色系の挽物、松本城、福井城跡などに認められる東北系箔椀の「類似」資料によれば、近畿地方周辺の北陸から東海地方周辺にも



29 図 樹種分類および特徴的な漆椀における流通想定図（17 世紀代）

う一つのブナ属製作地が存在していた可能性が高い。また、東北系箔碗に類似した資料が北海道に多数存在していることも、複数の製作地という点と関連して興味深い事例である。今後は17世紀の陸上・海上における物流システムを視野に入れた商品流通が課題となる。

緑色系の塗りを持つ漆碗の製作時期として、最初期と推測される17世紀後半は壺碗・平碗、腰高などを含む「揃い碗」が増加する画期であり、このような食膳具の変化に伴って、日常とは異なる場で使用する膳のセットとして、一文字形で塗りに緑色を使用した碗類が製作されたのではないだろうか。

さらに18世紀後半以降には、多様な器種や色調を持つ資料が確認されるようになることから、製作地の増加、品質の差異・使用目的に応じた製品の出現があり、それらが反映されているものと捉えられる。会津においては、これまで黒色と赤色が主体であった漆碗に黄（石黄）や緑（石黄+藍）の漆を使用することで売り上げを伸ばしたという（高瀬1984：31頁）。このように、17世紀後半は漆碗の形状と色漆の使用が大きく変化する時期である。この原因の一つとして、おそらく東北地方で製作されたブナ属の木地を使用する、炭粉（渋）下地の1層塗りの漆碗が、廉価な日用品として大量に移入するようになったことが推測される。

なお、18世紀以降には、蝦夷地では本州との交易港である余市⁴⁾、北陸地方、近畿地方においても緑色系の塗りを持つ碗が出土している。

塗膜分析では、17世紀後半の入院棟A地点SK3の出土資料（サンプルID12）では、炭粉下地（おそらく渋下地）後、外面に緑色系漆（石黄+藍）を塗って研ぎを行い、内面に赤色系漆（ベンガラ）を塗布、口縁部を研いだ後、口唇部に漆を施している（本多・増田・宮腰・2017）。なお、高台内も、外面の加工前もしくは内面の加工後に漆を塗り、口唇部と同様に研ぎの後、畳付部分に漆が施されると推測できる。塗膜分析によって、漆碗の製作工程を復元した今回の試みは、今後の課題である製作技法の変遷や、製作地の推定に必要な情報として今後、木胎の樹種や下地、顔料や文様、それらに伴う材料とあわせて考えていく必要がある。

遺跡から出土した漆碗については、製作地や流通の手掛かりとなる情報が残されておらず、江戸時代には職人の移動も想定されることから、年代や産地を特定することは極めて困難であると言える。さらに近年、16世紀末～17世紀前期頃における漆液の海外からの輸入など（北野ほか2008・2014など）、中・近世における「漆」を取り巻く状況として、より広い視野が求められることがわかる。

今後、樹種や下地、塗りや加飾について、考古学および科学分析による情報を蓄積することで、広域を対象とした消費地遺跡の比較が可能となれば、地域ごとの特徴によって製作地を推定できる可能性が高まることが期待される。

【註】

- 1) 人造石黄の口承記録として提示される記述について「明治3年（1870）の会津漆器産地の『第三回 内国博覧会説明書控』は、享保年間（1716～1736）に会津で人造石黄の製造が開発されたこと、それ以降「会津絵」などに代表される多彩な色漆による近世会津塗の加飾漆器の生産が可能となったこと、などを口承資料の一つとして記述している」（北野2005b：68・69頁）、同様の内容を持つ資料を以下に示す。

明治10（1877）年『第一回 内国勸業博覧会 美術の部 書画 出品解説』107頁より

「蒔繪屏風、大平、盆、皿 福島縣岩代國會津郡若松七日町 高瀬喜左衛門 本地ノ漆工ハ其起源ノ年度詳ナラスト雖モ大抵三百年以前ニ在ル可シ永祿年間迄ハ専ラ赤髹黒髹ノ食器類ヲ製セシカ慶安年間ヨリ蒔繪ヲ創メ享保年間ヨリ石黄、青漆等ヲ創メ寶暦年間ニ京都ノ蒔繪師木村藤蔵ナル者ヲ招キ漆工ノ諸法ヲ改良ス此時ヨリ始メテ研出蒔繪アリ」。

- 2) 会津で製作された漆椀として現存する「会津絵」は、ほとんどが色漆で松竹梅が描かれており、17世紀の「金箔貼漆絵椀」の段階における「南部椀」「秀衡椀」の影響と、会津絵の独自性として、松竹梅文様と消粉蒔絵の導入が指摘されている（小林 2004）。
- 3) 「引入 大小の椀が順次重なり、一の椀に納まるやうになった入子式のもので、二ツ重・三ツ重・四ツ重・五ツ重・六ツ重・七ツ重等がある。二ツ重のものとしては、合鹿椀、光明寺の大椀等があり、秀衡椀系は三ツ重で、四ツ重・五ツ重は朱漆椀等が典型的なものである。四ツ重のものは飯椀・汁椀とそれぞれの蓋として用いられるものが多い。」（荒川 1975、57 頁）
- 4) 筆者は北海道のアイヌ文化へ移入された漆椀について、緑色系の塗りを持つ椀が認められないと記述していたが（清水 2015）、余市町大川遺跡、入舟遺跡（アイヌ文化期）で実施された塗膜分析で内面赤、外面緑色の椀および塗膜の報告について（北野 2002）、確認できていなかった。近世の蝦夷地には緑色系の椀が移入していると訂正したい。

謝辞

東北系箔椀および緑色系漆について、北野信彦先生、武田昭子先生、高橋勇介さま、宮腰哲雄先生、四柳嘉章先生、二戸市浄法寺歴史民俗資料館 中村弥生さま、京都市埋蔵文化財研究所 吉崎 伸さま、和歌山市文化スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 亀井 聡さま、関係資料について、白木屋漆器店の高瀬かづ子さまにご教示いただきました。また、本多貴之先生には塗膜構造・科学分析を実施していただきました。記して感謝いたします。

【引用・参考文献】

- 荒川浩和 1975『漆椀百選 総説編』光琳社
- 荒川浩和・徳川義宣 1977『琉球漆工芸』日本経済新聞社
- 荒川浩和 1991「漆工芸の普及」『普及版 日本の漆芸 5 漆絵・根来』中央公論社、87-102 頁
- 会津若松史出版委員会（編）1967『会津若松史 第11巻 文化編』会津若松市
- 会津若松市教育委員会 1980『文化財調査報告第6号 妙国寺蔵-田中正玄夫人副葬品膳椀調査報告』
- 会津若松市教育委員文化課（編）1994『若松城下 城東町遺跡発掘調査報告書』
- 安藤広道 1988「第2章第1節3. (4) 植物製品 A 漆器類」港区芝公園1丁目遺跡調査団 1988『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』港区教育委員会、320-361 頁
- 石澤兵吾 1889『琉球漆器考』東陽堂
- 伊東隆夫・山田昌久（編）2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 岩本 元 2012「朱漆」『漆工辞典』漆工史学会編、角川学芸出版、208-209 頁
- 岡田文男 1995『古代出土漆器の研究-顕微鏡で探る材質と技法』見聞社
- 小田原市教育委員会 1990『小田原城とその城下』
- 小田原市教育委員会 1992『小田原城三の丸 箱根口跡』
- 小田原市教育委員会 1998『小田原城下 欄干橋町遺跡第IV地点』
- 葛飾区遺跡調査会 1989『葛西城Ⅱ』
- 金沢市埋蔵文化財センター 2004『金沢市久昌寺遺跡』金沢市都市政策部国際文化局文化財保護課
- 神谷嘉美 2012「黒漆」『漆工辞典』漆工史学会編、角川学芸出版、137 頁
- 亀井 聡 1997「中近世における漆器の地域性について」『研究調査報告第1集』大阪府文化財調査研究センター
- 北野信彦・高山 優 1993「近世寺院跡遺跡出土漆器資料の性格」『研究紀要2』港区立港郷土資料館
- 北野信彦 1997「汐留遺跡出土漆器資料の製作技法」『汐留遺跡Ⅰ』第5分冊、東京都埋蔵文化財センター、87-

137 頁

- 北野信彦 2000 「都立文京盲学校地点出土漆器資料の材質・技法」『小石川牛天神下』第3分冊、951-969 頁
- 北野信彦 2003a 「汐留遺跡出土漆器資料の材質・技法」『汐留遺跡Ⅱ』第1分冊、東京都埋蔵文化財センター、299-308 頁
- 北野信彦 2003b 「汐留遺跡出土漆器碗類の材質と製作技法」『汐留遺跡Ⅲ』第1分冊、東京都埋蔵文化財センター、263-297 頁
- 北野信彦 2005a 『近世出土漆器の研究』吉川弘文館
- 北野信彦 2005b 『近世漆器の産業技術と構造』株式会社雄山閣
- 北野信彦 2006 「汐留遺跡 伊達家および保科家屋敷出土漆器碗類の分析結果報告」『汐留遺跡Ⅳ』第7分冊、東京都埋蔵文化財センター、1-54 頁
- 北野信彦・肥塚隆保 1997 「〔資料〕近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・Ⅲ－文献史料からみた赤色系漆に使用する朱の製法について－」『文化財保存修復学会誌』第41号、文化財保存修復学会、88-100 頁
- 北野信彦・肥塚隆保 1998 「〔短報〕江戸時代における鉄丹ベンガラの製法に関する復元的実験」『文化財保存修復学会誌』第42号、文化財保存修復学会、26-34 頁
- 北野信彦・肥塚隆保 2000 「近世出土漆器に使用される石黄に関する基礎的調査（Ⅰ）」『文化財保存修復学会誌』第44号、文化財保存修復学会、70-79 頁
- 北野信彦・肥塚隆保 2001 「近世出土漆器に使用される石黄に関する基礎的調査（Ⅱ）」『文化財保存修復学会誌』第45号、文化財保存修復学会、118-127 頁
- 北野信彦 2002 「近世アイヌ漆器碗の使用と流通に関する文化財科学的研究」『第12回食文化研究助成成果報告書』味の素食の文化センター
- 北野信彦・小檜山一良・竜子正彦・高妻洋成・宮腰哲雄 2008 「桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査」『保存科学』国立文化財機構東京文化財研究所、37-52 頁
- 北野信彦・小檜山一良・竜子正彦・本多貴之・宮腰哲雄 2014 「桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査（Ⅲ）－日本国内の出土漆器における輸入漆塗料の使用事例－」『保存科学』国立文化財機構東京文化財研究所、67-79 頁
- 喜田川守貞 慶応3（1867）年「守貞漫稿」（朝倉治彦（編）1988『合本 守貞漫稿』東京堂出版 所収）
- 旧芝離宮庭園調査団 1988 『旧芝離宮庭園』
- 黒川真頼 1878 『増訂 工芸志料』東洋文庫 254、平凡社
- 小池富雄 2012 「紅花緑葉」『漆工辞典』漆工史学会編、角川学芸出版、149・150 頁
- 小林めぐみ 2004 「総論 会津絵の誕生と展開」『福島県立博物館 調査報告書第40集 会津絵 会津の漆絵漆器』福島県立博物館、13-28 頁
- 国立歴史民俗博物館 2013 『企画展示 時代を作った技－中世の生産革命－』
- 国立歴史民俗博物館 2017 『企画展示 URUSHI ふしぎ物語－人と漆の12000年史－』
- 財団法人新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館埋蔵文化財課 2002 『東京都新宿区 坂町遺跡』
- （財）東京都スポーツ文化事業団 2011 『千代田区 溜池遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 齋藤里香 2010 「第三章 花開く漆の美」『いわての漆』岩手県立博物館、66-93 頁
- 佐々木健策 2013 「Ⅳ最先端の技術 1. 権力と技術」『企画展示 時代を作った技－中世の生産革命－』国立歴史民俗博物館、136-147 頁
- 佐田玄治・高瀬 嬉左衛門・関谷彦蔵 1967 「漆器」『会津若松史 第11巻 文化編』会津若松市、81-159 頁
- 沢口悟一 1965 『日本漆工の研究』美術出版社

- 清水 香 2015「アイヌ文化期における漆塗椀の基礎的研究」『物質文化』(95)、物質文化研究会 103-134 頁
- 清水 香 2016「大聖寺藩上屋敷跡 廃棄土坑 SK3 から出土した木製品」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室、303-350 頁
- 清水 香 2017「17 世紀における漆椀 - 漆椀の樹種分類からみる特徴・緑色系の塗りを持つ資料・東北系箔椀の文様 -」『日本考古学協会第 83 回総会研究発表』日本考古学協会、180・181 頁
- 須藤 護 1975「奥会津の木地師 南会津の山」『民具と生活』日本生活学会編、278-285 頁
- 須藤 護 1997「木地屋研究 木地椀の製作工程を中心にして」『国立歴史民俗博物館研究報告第 71 集 中世食文化の基礎的研究』693-712 頁
- 関根達人 1998「東北地方における近世食膳具の構成」『東北文化研究室紀要 通巻 40 集』東北大学大学院文学研究科東北文化研究室編、81-104 頁
- 高瀬かづ子 2003「産業としての会津漆器」『会津の漆器 挽く・塗る・描く・蒔く』会津若松市史研究会、18-23 頁
- 高瀬 嬉左衛門 1984「会津漆器の歴史と名工」『日本漆工 (会津漆器特集号)』社団法人日本漆工協会、25-36 頁
- 高橋隆博 2012「密陀絵」『漆工辞典』漆工史学会編、角川学芸出版、390-392 頁
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1998『大日北遺跡』多賀城市教育委員会
- 武田昭子・赤沼英男・土谷信高 2010「特集 中尊寺金色堂と柳の御所遺跡出土盤からみた奥州藤原氏文化の漆工技術」『岩手県博物館開館 30 周年特別企画展 いわたの漆』岩手県立博物館・財団法人岩手県文化事業団
- 武田昭子・渡部マリカ 2017「医学部附属病院入院棟 A 地点 SK3 遺構出土漆製品の実証的研究」『東京大学構内遺跡調査研究年報 10 2013・2014 年度』東京大学埋蔵文化財調査室、219-256 頁
- 玉川文化財研究所 2008『小田原城三の丸 杉浦平太夫邸跡Ⅳ地点 大久保弥六郎邸跡Ⅲ地点』第Ⅰ分冊、小田原市
- 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書 (本文編)』
- 千代田区丸の内一丁目遺跡調査会 2005『東京都千代田区 丸の内一丁目遺跡Ⅱ』東日本旅客鉄道株式会社、千代田区丸の内一丁目遺跡調査会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学本郷構内の遺跡 工学部 1 号館地点』
- 東京都教育文化財団 1994『東京都千代田区 丸の内三丁目遺跡』
- 都道整備事業関連豊島区遺跡調査団 2010『雑司ヶ谷Ⅴ』豊島区遺跡調査会
- 中井さやか 1989「16 世紀の漆椀 - 特に三重椀との関連について -」『考古学の世界』新人物往来社、380-395 頁
- 中井さやか 1992「近世の漆椀について - その器種と組み合わせを考える -」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会、180-204 頁
- 中井さやか 2001「Ⅶ江戸の遺物 5 漆器」『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会、370-384 頁
- 仲田茂司 1999「東国中世の漆器」『考古学研究』第 46 巻第 1 号、72-90 頁
- 永嶋正春 1987「Ⅸ 中世漆器の塗膜層構成について」『西川島』石川県穴水町教育委員会、670-681 頁
- 林 弥栄 1969『有用樹木図説 (林木編)』誠文堂新光社
- 半田市太郎 1970『近世漆器工業の研究』吉川弘文館
- 樋田豊郎 2012『楽浪漆器 - 東アジアの文化をつなぐ漢の漆工品 -』美学出版
- 日高 薫 2008「Ⅲ 〈蒔絵〉と〈螺鈿〉 - 輸出漆器の技法と表現」『異国の表象 - 近世輸出漆器の創造力』株式会社ブリュッケ、247-348 頁
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1992『明石城武家屋敷跡』兵庫県教育委員会

- 富士山百恵 2001 「第5章第2節 漆器」『飯田町遺跡』千代田区飯田町遺跡調査会、168-186頁
- 本多貴之・増田隆之介・宮腰哲雄 2017 「東京大学本郷構内の遺跡より出土した緑色系漆碗の科学分析」『東京大学構内遺跡調査研究年報10 2013・2014年度』東京大学埋蔵文化財調査室、257-272頁
- 松本市教育委員会 1993 『松本城三の丸跡～土居尻武家屋敷跡の発掘調査概報～』
- 丸の内1-40遺跡調査会 1998 『東京都千代田区 丸の内一丁目遺跡』日本国有鉄道清算事業団
- 武蔵文化財研究所 2006 『千代田区 有楽町二丁目遺跡』有楽町駅前第1地区市街地再開発組合
- 目時東次郎 1997 「第四編 浄法寺の漆 第一章 浄法寺漆の歴史」『浄法寺町史』上巻、浄法寺町史編纂委員会、465-517頁
- 山崎 剛 2012 「秀衡碗」『漆工辞典』漆工史学会（編）、343頁
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史－」『植生史研究』特別第1号、植生史学会、1-23頁
- 四柳嘉章 1992 「付章2 外堀跡（2号堀跡）出土漆器の科学分析」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅻ 神指城跡』財団法人福島県文化センター、51-55頁
- 四柳嘉章 2006 『ものと人間の文化史131－Ⅱ 漆Ⅱ』法政大学出版局
- 四柳嘉章 2009 『漆の文化史』岩波新書
- 四柳嘉章 2013 「I生活を变えた技術 2さまざまな生産活動 漆器生産」『企画展示 時代を作った技－中世の生産革命－』国立歴史民俗博物館、36-45頁
- 渡邊 明 2003 「会津漆器の製造工程」『会津の漆器 挽く・塗る・描く・蒔く』会津若松市史研究会、41-44頁

東京大学構内遺跡調査研究年報 10
2013・2014 年度

2017 年 8 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>
印刷 能登印刷株式会社

東京大学構内遺跡調査研究年報10 付属CD-ROM 収録内容

本CD-ROMには、本書電子版が収録されている。

- 「本書電子版」は、Adobe(R) Acrobat形式(PDFファイル)で収録されています。PDFファイルを開くためには、Adobe Acrobat ReaderなどのPDFファイル閲覧ソフトが必要です。
閲覧ソフトは本CD-ROMには収録されていませんが、インターネット上で配布していますので、以下のアドビシステムズ社ホームページアドレスより必要に応じてダウンロードして下さい。
<https://get.adobe.com/jp/reader/enterprise/>
- 本書は学術資料としての観点から、電子版に掲載された図版・写真類の複写・転載に関しては、基本的に許可申請を必要としませんが、有償による販売を目的とした刊行物などで使用される場合は、当調査室までお問い合わせ下さい。
ただし、掲載された絵画資料などは出典元の著作権が発生する場合がありますので、学術研究目的においても各所蔵機関までお問い合わせ下さい。また著作及び所有権上の関係から、電子版には一部未掲載の資料があります。
- 本CD-ROMの使用により生じたいかなる損害に対しても東京大学埋蔵文化財調査室では責任を負いかねます。あらかじめご了承下さい。
- Adobe Acrobat ReaderはAdobe Systems Incorporatedの登録商標です。

